EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03027 6406





大正十二年三月五日印刷
大正十二年三月八日發行

不許複製

編輯者　塚本哲三
發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　新井由藏
印刷所　東京市京橋區[illegible]四丁目十二番地　[illegible]
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

大正十三年三月五日印刷
大正十三年三月八日發行

漢文叢書
古詩源

編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行者　三浦理

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷者　新井由藏

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　合資會社電新堂

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

（新井製本）

地垂。楊花漫漫攪天飛。柳條折盡花飛盡。借問行人歸不歸。

東方欲明星爛爛。汝南晨雞登壇飛。曲終漏盡嚴具陳。月沒星稀天下旦。千門萬戶遞魚鑰。宮中城上飛烏鵲。

花飛び盡す、借問す行人歸るや歸らざるや。

竟に盛唐人の手筆に似たり。東虛記に云ふ、此詩は大業の末年に作る。煬帝の周遊度なく、民窮し財盡き、其の國に返るを望みしことを指す。五子歌を作るの意也。

(一)一面にはびこる貌　(二)空をかき亂すこと

雞鳴の歌

東方明けんと欲して星爛爛(一)たり、汝南(二)の晨雞(三)壇に登りて喚ぶ。曲終り漏(四)盡き嚴具(五)陳り、月沒し星稀に天下旦なり。千門萬戶魚鑰(六)を遞り(七)、宮中城上烏鵲(八)飛ぶ。

(一)きら〳〵と光る貌　(二)郡の名　(三)雞人卽ち宮中の夜警、自身を警へし也　(四)水時計の水の流れ盡すをいふ　(五)いかめしき儀式の器具なり　(六)魚形の錠前をいふ　(七)送り傳へて之を開かしむるをいふ　(八)鳥の名、かさゝぎと訓す

古詩源　終

世道若二浮萍一。
榮華實難レ守。
池臺終自平。
富貴今何在。
空事レ寫二丹青一。
杯酒恆無レ樂。
弦歌何有レ聲。
余本皇家子。
飄流入二虜庭一。
一朝覩二成敗一。
懷抱忽縱橫。
古來共如レ此。
非二我獨申一レ名。
唯有二明妃曲一。
偏傷二遠嫁情一。
楊柳青青著レ

なり。富貴今何くにか在る、空しく丹青(五)を寫すを事とす。杯酒恆に樂無く、弦歌何ぞ聲(六)あらんや。余は本皇家の子、飄流(七)して虜廷(八)に入る。一朝成敗(九)を覩て、懷抱(一〇)忽ち縱橫(一一)。古來共に此の如し、我獨り名を申ぬる(一二)に非ず。唯だ明妃(一三)の曲ありて、偏(一四)に遠嫁(一五)の情を傷ましむ。

英氣勃勃たり、事成らずと雖も、精衞の志、泯滅すべからず。

(一) 朝暮の推移と同じく甚だ速なるをいふ　(二) 世間の常態なり　(三) うき草なり　(四) 池沼樓臺も何時か平地となるをいふ　(五) 彩色を施して圖畫を作るが如きをいふ　(六) 聞きても耳に留らずとの意　(七) おちぶれ流さるゝをいふ　(八) 隋廷を指す　(九) 周の敗亡なり　(一〇) 心中の感情なり　(一一) 盛に起りて制し難きをいふ　(一二) 千金公主大義公主と名を重ぬること　(一三) 王昭君の怨詩を指す　(一四) ひたすらにといふ意　(一五) 突厥に嫁するをいふ

無名氏

送別の詩

楊柳青青として地に著きて垂れ、楊花(一)漫漫として天(二)を攪して飛ぶ。柳條折り盡し

笳喧細柳營。
劍花寒不レ落。
弓月曉逾明。
會取二淮南地一。
持作二朔方城一。

盛衰等二朝暮一。

城と作す。

劍花一聯、唐人極めて此種の句法を摹す。

(一) 平原爵の人也 (二) 三方をいふ (三) 烽火の頻りに擧りて騷しきをいふ (四) 孫子に常山の蛇を以て陣を論ずる一節あり、卽ち三段備への陣法をいふ (五) 漢の周亞夫の營をいは (六) 劍の光なり (七) 弓張月をいふ

大義公主

屏風に書する詩

公主は後周の宇文氏にして、嫁して突厥の沙鉢略の妻と爲る。初め千金公主と名づく。隋周を滅ぼす。自づから宗祀の絶滅せんことを傷み、毎に復隋の志を懷き、日夜、沙鉢略に言ふ、衆を悉して寇を爲せと。後に沙鉢略內附す。姓楊氏を賜ふ。改めて大義公主に封ず。隋、陳を平げて後、陳の叔寶の屏風を以て主に賜ふ。主心恒に平ならず。因て屏風に書して詩を爲る。

盛衰、朝暮に等しく、(一)世道(二)浮萍(三)の若し。榮華實に守り難く、池臺(四)終に自づから平

俘囚經二萬里一。
憔悴度二三春一。
髮改二河陽鬢一。
衣餘京洛塵一。
鍾儀悲去レ楚。
隨會泣留レ秦。
既謝二平吳利一。
終成二失路人一。

京に入るに和す

(一)俘囚萬里を經、(二)憔悴して三春を度る。(三)髮は河陽の鬢を改め、(四)衣は京洛の塵を餘す。(五)鍾儀悲みて楚を去り、隨會泣いて秦に留まる。既に(六)平吳の利を謝し、終に(七)失路の人と成る。

(一)捕虜の身なり　(二)やつれおとろふる樣なり　(三)河陽の令潘岳は三十二歳にして始めて二毛を見る　(四)陸機の詩に京洛風塵多く、素衣化して緇と爲るとあり　(五)楚の人也、晉に囚へられしことあり　(六)羊祜の上書に平吳の利を極言せり之を借りて敵を討るの策用ふる能はざるを言ふ　(七)失脚してよるべなき身となるをいふ

三邊烽亂驚。
十萬且橫行。
風卷常山陣

(一)明餘慶

從軍行

(二)三邊(三)烽亂れ驚き、十萬且つ橫行す。風は卷く(四)常山の陣、笳は喧し(五)細柳の營。(六)劍花寒くして落ちず、(七)弓月曉逾明なり。會、淮南の地を取り、持して朔方の

只言更尙淺。
未二是渡一レ河時一。

巖間無二結構一。
谷處極二幽尋一。
葉落秋巢逈。
雲生石路深。
早梅香二野徑一。
淸澗響二邱琴一。
獨有二棲遲客一。
留連芳杜心。

だ是れ河を渡るの時ならず。
寫し來りて合并(五)迹無し。

(一)陰曆の七月七日の夕也、此日牽牛と織女と銀河に會すといへり　(二)小路なり　(三)車窓のとばりなりやがて車の稱とす　(四)まだ夜の深けざる也　(五)銀河の事

王申禮

巖穴に結構なきを賦し得たり

巖間、結構(一)無く、谷處、幽尋(二)を極む。葉落ちて秋巢(三)逈に、雲生じて石路(四)深し。早梅野徑香しく、淸澗(五)邱琴響く、獨り棲遲(六)の客あり、留連(七)す芳杜(八)の心。

(一)樓閣などの構造物なきをいふ　(二)何處までも部に深く尋ね入るをいふ　(三)鳥の巢の遠方に在るものまで目にとまるをいふ　(四)石ころの路なり　(五)淸き谷川なり　(六)遊息の意、のどやかにくらすをいふ　(七)滯留の意、芳杜に心殘りて去りがてなるをいふ　(八)杜若なりやぶみやうがをいふ或はかきつばたと說く

呂讓

重傷千里分。
促離絃易轉。
幽咽水難聞。
欲識相思處。
山川間白雲。

落葉聚還散。
征禽去不歸。
以我窮途泣。
沾君出塞衣。

隔巷遙停幰。
非復爲來遲。

㊀ 難攻不落の堅城をいふ ㊁ 火、崑岡に炎ゆれば玉石俱に焚くの意 ㊂ 其上に其上にと重るをいふ ㊃ 地に下る鳥をいふ ㊄ 孟秋仲秋季秋をいふ ㊅ 離別を哀むこと ㊆ 軸々轉じて絃をしむること ㊇ かすかにむせぶこと、卽ち靜なる音を云ふ ㊈ 徐秀才の居處なり

陳子良(一)

別を送る

落葉聚りて還た散り、征禽(二)去りて歸らず。我が窮途(三)の泣を以て、君が出塞の衣を沾す。

堪へず。亦何遜集に見ゆ、略々異同あり。

㊀ 吳人なり ㊁ 歸り行く鳥なり ㊂ おちぶれてもはや行く處なき路をいふ

七夕に新婦(一)の巷を隔てて車を停むるを看る(二)

巷を隔てて遙に幰(三)を停む。復た來ること遲きが爲に非ず。只言ふ更何ほ淺く、未

勞歌欲敘意。終是白頭吟。

早秋驚落葉。飄零似客心。翻飛未肯下。猶言惜故林。

金湯既失險。玉石乃同焚。墜葉還相覆。落羽更爲羣。豈謂三秋節。

（一）孔紹安

落葉

早秋落葉に驚き、（二）飄零客心に似たり。翻飛未だ下るを肯んぜず、猶ほ言ふ（三）故林を惜むと。

頗る能く寄托す。

（一）會稽の人也　（二）ひるがへり落つるをいふ轉じておちぶるゝ意と爲す　（三）もとの林が戀しとの意

徐永元秀才に別る

（一）金湯既に險を失ひ、（二）玉石乃ち同じく焚く。墜葉還た相覆ひ、（三）落羽更に羣を爲す。（四）豈に謂はんや（五）三秋の節、重ねて千里の分を傷まんとは。離を促して（六）絃は轉じ易く、（七）（八）幽咽して水、聞え難し。（九）相思の處を知らんと欲すれば、山川、白雲を間つ。

金陵已去國。銅梁忽背飛。失路遠相送。他鄉何日歸。

綿綿夕漏深。客恨轉傷心。撫絃無人聽。對酒時獨斟。故鄉萬里絕。窮愁百慮侵。秋草思邊馬。遶枝驚夜禽。風度谷餘響。月斜山半陰。

蔡君知の蜀に入るを送る(一)

金陵已に國を去り、銅梁忽ち背き飛ぶ。失路遠く相送り、他鄉何の日か歸らん。

(一) 會稽の人也

夜、荒村に宿る

綿綿(一)として夕漏(二)深く、客恨轉た心を傷ましむ。絃を撫して人の聽く無く、酒に對して時に獨り斟む。故鄉萬里絕え、窮愁(三)百慮侵す。秋草邊馬を思ひ、枝を遶り夜禽驚く。風度りて谷、響(四)を餘し、月斜にして山半ば陰し。勞歌(五)意を叙せん(六)と欲すれば、終に是れ白頭の吟(七)。

(一) 絕えざる貌 (二) 時刻の經つをいふ (三) 樣樣の物思なり (四) 木だまのいつまでも殘るをいふ (五) 强ひて歌を作ること (六) 我が意中を述べたしと思ふをいふ (七) 到底白頭の吟たるに過ぎずと也

五里徘徊鶴。三聲斷絶猿。何言俱失路。相對泣離樽。別路悽無已。當歌寂不喧。貧交欲有贈。掩涕竟無言。

五里徘徊の鶴(一)、三聲斷絶の猿(二)。何ぞ言はん俱に路を失ふ(三)と、相對して離樽に泣く。別路悽として已むこと無く、當に歌ふべくして寂として喧(四)ならず。貧交、贈(五)有らんと欲し、涕を掩うて竟に言無し。

㊀影のちらくするをいふ　㊁聲のとぎるゝをいふ　㊂逆境に立つこと　㊃ひつそりと靜なる意　㊄餞

別品

尹式(一)

宋常侍に別る

遊人杜陵北。送客漢川東。無論去與住。俱是一飄蓬。秋鬢含霜白。衰顏倚酒紅。別有相思處。啼鳥雜夜風。

遊人杜陵の北、送客漢川の東。去と住とに論無く、俱に是れ一飄蓬(二)。秋鬢霜を含んで白く、衰顏酒に倚りて紅なり。別に相思ふを有る處、啼鳥夜風に雜はる(三)。

㊀河間の人也　㊁風にひるがへる蓬(よもぎ)の如し　㊂夜風の音に鳥の聲の雜りて聞ゆる也

孔德昭(一)

鄉關不再見。
悵望窮此晨。
山煙蔽鍾阜。
水霧隱江津。
洲渚斂寒色。
杜若變芳春。
無復歸飛羽。
空悲沙塞塵。

鄉關再び見ず、悵望、此晨を窮む。(一)山煙鍾阜を蔽ひ、水霧江津を隱す。洲渚寒色を斂め、(二)杜若芳春に變ず。(三)復た歸飛の羽なく、(四)空しく沙塞の塵を悲む。

(一)鍾山をいふ (二)やぶみやうがなり (三)春と姿を異にするをいふ (四)鳥ならぬ身の歸るに羽なきをなげくも也

東歸して路に在り、(一)率爾詠を成す

學宦兩無成。
歸心自不平。
故鄉尙千里。
山秋猨夜鳴。
人愁慘雲色。
客意慣風聲。
羈恨雖多緒。
倶是一傷情。

(二)學宦兩つながら成ること無く、歸心自づから平ならず。故鄉尙ほ千里、山秋にして猨、夜鳴く。人愁、(三)雲色を慘み、客意、風聲に慣る。(四)羈恨、緒多しと雖も、(五)倶に是れ一の傷情。

(一)にはかにといふ意 (二)學業と仕官と也 (三)雲の色に對して心のやる瀨なきをいふ (四)客中の怨情なり (五)同一痛心事たるに過ぎずと也

王冑

周記室に別る

舊國亦淪胥。
紫陌風塵起。
青壇冠蓋疎。
臺留二子建賦一。
宮落二仲將書一。
譙周自題レ柱。
商容誰表レ閭。
聞君懷二古曲一。
同病亦漣洳。
方知周處歎。
前後信非レ虛。

か閭に表せん。聞く君が古曲を懷ふと、同病亦漣洳たり。（一八）方に知る周處の歎、（一九）前後信に虛に非ざるを。（二〇）

三四語、翻し得て高し。韋誕字は仲將、魏の爲に凌雲臺を書する者なり。周將に戰死せんとす。歎じて曰く、軍、後繼なく、必ず敗れん、徒に身亡ぶのみにあらず。國の爲に恥を取らんと。

（一）字は仙基、一の字は遐年、武邑武隧の人也　（二）鄴をいふ　（三）東周の大夫を指す　（四）西周の都鎬を過ぎ詩を作りて之を愍みしをいふ　（五）微子を指す　（六）殷の都の址をいふ　（七）心のいたみと心のたのしみとには關係せずとの意　（八）漳江附近といふこと　（九）北齊を指す、沈み衰ふるをいふ　（一〇）郊祀の祭壇をいふ　（一一）祀を修むる官人の稀なるをいふ　（一二）銅雀臺なり　（一三）曹植の事　（一四）洛陽、鄴、許、三都の宮殿をいふ　（一五）韋誕字は仲將、諸書皆善くす三都の宮觀成るとき仲將皆之を書せり　（一六）字は允南、蜀の人也、周板に書して文帝の崩ぜんとするを知れり　（一七）商容は殷の賢人、周の武王、其閭に表せしことあり　（一八）淚の流るゝ形容　（一九）字は子隱、晉の陽羨の人也、嘗て王渾に對へて、亡國の感豈惟だ一人のみならんやといへり　（二〇）古も今もといふほどの意

早く楊州を發し、還りて鄉邑を望む

蕭蕭征馬煩。雪暗天山道。冰塞交河源。霧烽黯無色。霜旗凍不翻。耿介倚長劍。日落風塵昏。

隴雲低不散。黄河咽復流。關山多道里。相接幾重愁。

大夫愍周廟。王子泣殷墟。自然心斷絶。何關繫慘舒。僕本漳濱士。

ふ　(七)手綱を抑ふること　(八)湖北の地を指す　(九)關の名　(一〇)行李を少くするをいふ　(一一)宿舍に就くこと　(一二)策を以て馬を驚すこと　(一三)兵車なり　(一四)寒き貌　(一五)物淋しき聲　(一六)進みがたきをいふ　(一七)きり深き中に揚がるのろし　(一八)霜かゝれる旗　(一九)世に求めずして固く操を守ること

關に入る

隴雲低れて散ぜず、黄河咽びて復た流る。關山道里多く、(一)相接す幾重の愁。(二)

(一)道程(みちのり)の長きをいふ　(二)それからそれへと續きて絶えざる意

孫萬壽(一)

周記室の舊京に遊ぶに和す(二)

大夫周廟を愍み、(三)(四)王子殷墟に泣く。(五)(六)自然に心斷絶す、(七)何ぞ慘舒に關繫せんや。僕は本と漳濱の士なるに、(八)(九)舊國、亦淪胥す。紫陌風塵起り、(一〇)青壇冠蓋疎し。(一一)(一二)臺は子建の賦を留め、(一三)宮は仲將の書を落す、(一四)(一五)譙周自づから柱に題すとも、(一六)商容誰(一七)

離レ家已二年。
人歸落雁後。
思發在ニ花前一。

上將三略遠。
元戎九命尊。
緬懷ニ古人節一。
思レ酬ニ明主恩一。
出西多ニ勇氣一。
塞北有ニ遊魂一。
揚レ桴度ニ隴坂一。
勒レ騎上ニ平原一。
誓將レ絕ニ沙漠一。
悠然去ニ玉門一。
輕齎不レ遑レ舍。
驚策騖ニ戎軒一。
懍懍邊風急。

前に在り。

（一）一月七日をいふ

虞世基

出塞

上將三略遠く、元戎九命尊し。緬に古人の節を懐ひ、明主の恩に酬いんと思ふ。山西勇氣多く、塞北遊魂あり。桴を揚げて隴坂を度り、騎を勒して平原に上る。誓つて將に沙漠を絶らんとし、悠然として玉門を去る。輕齎、舍するに遑あらず、驚策、戎軒を騖す。懍懍として邊風急に、蕭蕭として征馬煩ふ。雪は暗し天山の道、氷は塞がる交河の源。霧烽黯くして色無く、霜旗凍りて翻らず。耿介長劍に倚れば、日落ちて風塵昏し。

（一）字は茂世、會稽餘姚の人也　（二）樂府の曲名なり　（三）兵法の書なり其旨に深きをいふ　（四）元帥といふに同じ　（五）周の官秩は一命より九命に至る凡そ九等あり、即ち人臣の榮位に達するをいふ　（六）祭られざる魂魄をい

相望山河近。
相思朝夕勞。
龍門竹箭急。
華岳蓮花高。
岳高障重疊。
鳥道風煙接。
遙原樹若レ薺。
遠水舟如レ葉。
葉舟旦旦浮。
驚波夜夜流。
露寒洲渚白。
月冷函關秋。
秋夜清風發。
彈レ瑟卽二鑑月一。
雖レ非二莊舄歌一。
吟咏常思レ越。
入レ春纔七日。

敬んで楊僕射が山齋夜坐に酬ゆ

相望めば山河近し、相思うて朝夕勞す。龍門竹箭(一)急に、華岳(二)蓮花高し。岳高くして、障つて重疊し、鳥道(三)風煙接す。遙原(四)樹、薺(五)の如く、遠水舟、葉の如し。葉舟旦旦に浮び、驚波夜夜に流る。露寒くして洲渚白く、月冷にして函關秋なり。秋夜清風發し、瑟を彈じて鑑月(六)に卽く。莊舄(七)の歌に非ずと雖も、吟咏常に越を思ふ。

(一) 箭の如く流の急なるをいふ　(二) 華山なり、山頂の池に千葉の蓮を生じたりといふ　(三) 鳥の通ふ道なり　(四) 遙かにつゞく原野をいふ　(五) 甘菜なり　(六) 鏡の如き月をいふ　(七) 莊舄は越人にして楚に仕へたり

楊素は越國公に封ぜらる。○遙原の二語、孟襄陽此の句法を祖とす。

人日歸を思ふ（一）

春に入りて纔かに七日、家を離れて已に二年。人は歸る落雁の後、思は發して花

垂柳覆₂金堤₁。蘼蕪葉復齊。
水溢₂芙蓉沼₁。花飛₂桃李蹊₁。
採ㇾ桑秦氏女。織ㇾ錦竇家妻。
關山別₂蕩子₁。風月守₂空閨₁。
恒斂₂千金笑₁。長垂₂雙玉啼₁。
盤龍隨ㇾ鏡隱。彩鳳逐ㇾ帷低。
飛魂同₂夜鵲₁。倦寢憶₂晨雞₁。
暗牖懸₂蛛網₁。空梁落₂燕泥₁。
前年過₂代北₁。今歲往₂遼西₁。
一去無₂消息₁。那能惜₂馬蹄₁。

垂柳金堤を覆ひ、蘼蕪(三)葉復た齊し。水は芙蓉の沼に溢れ、花は桃李の蹊に飛ぶ。桑を採る秦氏(四)の女。錦を織る竇家(五)の妻。關山、蕩子(六)に別れ、風月、空閨(七)を守る。恒に千金の笑を斂め、長く雙玉(八)の啼を垂る。盤龍鏡に隨つて隱れ、彩鳳帷を逐うて低る。飛魂(九)、夜鵲に同じく、倦寢(一〇)、晨雞を憶ふ。暗牖(一一)、蛛網懸り、空梁(一二)燕泥落つ。前年代北を過ぎ、今歲遼西に往く。一たび去りて消息(一三)無く、那ぞ能く馬蹄(一四)を惜まむ。

暗牖蛛網懸かるの二句は、張景陽が青苔空墻に依り、蜘蛛四屋を網すより化出す。而して其發原は、則ち伊威室に在り、蠨蛸戶に在りに在り。但し後人愈巧なる耳。

㈠字は玄卿、河東汾陰の人也　㈡雜曲の歌辭なり　㈢川芎の苗、香草なり　㈣名は羅敷、邯鄲の人也、漢詩の陌上桑に詳なり　㈤蘇氏名は蕙、字は若蘭、錦を織りて廻文の詩を爲り夫の竇滔に贈りしことあり　㈥遊冶郎なり　㈦淋しき閨(ねや)をいふ　㈧涙を玉筋と爲す雙玉は卽ち雙涙なり　㈨神魂の彼地に飛びゆくこと　(一〇)睡りあぐむこと　(一一)をぐらきまどをいふ　(一二)何もなきうつばりをいふ　(一三)おとづれなり　(一四)馬のひづめなり

清塵暖有レ餘。
賓遊多ニ任俠一。
臺苑盛ニ簪裾一。
歎息徐公劍。
悲涼鄒子書。
亭臯落照盡。
原野沍寒初。
鳥散空城夕。
煙銷古樹疎。
東越嚴子陵。
西蜀馬相如。
修名竊所レ慕。
長謠獨課虛。

書。亭臯落照盡き、(一四)原野沍寒の初。(一五)鳥散じて空城夕なり、煙銷えて古樹疏なり。東越には嚴子陵、(一六)西蜀には馬相如。(一七)修名は竊かに慕ふ所、(一八)長謠獨り課して虛し。(一九)(二〇)(二一)

〔一〕字は子行、范陽涿の人也　〔二〕くつは也　〔三〕従者なり　〔四〕梁城のあとをいふ　〔五〕漢の藩屏として重要なるをいふ　〔六〕文雅風流を貴ぶ地なり　〔七〕賓客交遊する者　〔八〕男達にて氣を使ふ人　〔九〕樓臺花園なり　〔一〇〕衣冠といはんが如し尊位高官の人を指す　〔一一〕呉の季札が徐公に許せし劍　〔一二〕物さびしく悲しく感ずること　〔一三〕鄒陽の事、漢の臨淄の人也、呉王に上書して聴かれず遂に去る　〔一四〕宿場に沿ひたる水澤なり　〔一五〕陰氣閉ぢこもりて寒きをいふ　〔一六〕名は光漢の光武の故友にして節を守りて仕へざりし人也　〔一七〕漢の司馬相如なり文學を以て名を知らる　〔一八〕永久に亙る名譽をいふ　〔一九〕長篇の歌謠なり　〔二〇〕自箇に題を與ふること　〔二一〕何物をも成し得ずと也

薛道衡（一）

昔昔鹽（一）

昔昔は猶ほ夜夜のごとき也。鹽は引の轉じて而して謂れる也。

風起洞庭險。
煙生雲夢深。
獨飛時慕侶。
寡和乍孤音。
木落悲時暮。
時暮感離心。
離心多苦調。
詎假雍門琴。

(九)時暮を悲み、時暮れて離心を感ず。離心、苦調多し、(一〇)詎んぞ雍門の琴を假らん。(一一)

天下の亂より、說きて定鼎に到る。次に求材を說き、次に立朝を說き、次に薛の出守を說きて、其政の成れるを頌す。次に己の歸閑、未だ相思を致さざるの意を說く。一題幾章、須らく此の章法を具すべし。未だ嘗て排ならずんばあらず、而も排偶の迹を覺えず、骨高ければ也。

(一)冬景色なり　(二)深き貌　(三)湖の名　(四)風威の強く急なるをいふ　(五)澤の名　(六)伴侶なり　(七)合唱する者なり　(八)獨語すること　(九)四季の暮れ行くをいふ　(一〇)苦しき調子なり　(一一)雍門周なり琴を以て孟嘗君に求めたることあり

盧思道(一)

梁城に遊ぶ

揚鑣歷汴浦。
迴扈入梁墟。
漢藩文雅地。

鑣を揚げて(二)汴浦を歷、扈(三)を迴して梁墟(四)に入る。漢藩(五)文雅(六)の地。淸塵曖として餘あり。賓遊(七)、任俠(八)多く、臺苑(九)、簪裾(一〇)盛なり。歎息す徐公(一一)の劍、悲涼(一二)なり鄒子(一三)の

棲遲茂陵下。
優游滄海曲。
故人情可見。
今人遵路矚。
荒居接野窮。
心物倶非俗。
桂樹芳叢生。
山幽竟何欲。
秋水魚游日。
春樹鳥鳴時。
濠梁暮共往。
幽谷有相思。
千里悲無駕。
一見杳難期。
山河散瓊蘂。
庭樹下丹滋。
物華不相待。
遲暮有餘悲。
銜悲向南浦。
寒色黯沈沈。

の下、(一)優游す(二)滄海の曲。故人情見る可く、今人路に遵ひて矚る。(三)荒居野に接して窮まり、(四)心物倶に俗に非ず。桂樹(五)芳叢に生ず、山幽にして竟に何をか欲せん。

(一)遊息の意　(二)地の名　(三)ゆつたりとくらすこと　(四)心中と外物と世俗に異なるをいふ　(五)くさむらなり

秋水魚游ぶの日、春樹鳥鳴くの時。(一)濠梁暮に共に往けば、幽谷に(二)相思あり。千(三)里駕無きを悲み、一日杳として(四)期し難し。山河、(五)瓊蘂散じ、庭樹(六)丹滋下る。(七)物華相待たず、(八)遲暮餘悲あり。

(一)城堀に架けたる橋なり、莊子が魚を觀たる故事あり　(二)意中の人を指す　(三)ゆくに往かれざるをいふ　(四)一目見たくとも望まれざるをいふ　(五)うつくしき花なり　(六)丹液なり　(七)景色をいふ　(八)晩年なり

悲を銜みて南浦に向へば、(一)寒色黯くして(二)沈沈たり。風、(三)洞庭に起りて(四)險に、煙(五)雲夢に生じて深し。獨り飛びて時に(六)侶を慕ひ、(七)和寡くして乍ち(八)孤音。本落ちて

若人應二斯美一。
高臥未レ褰レ帷。
飛聲已千里。
還望二白雲天一。
日暮秋風起。
峴山君儻遊。
涙落應レ無レ已。
漢陰政已成。
嶺表人猶蠹。
彈レ冠比方新。
還レ珠總如レ故。
楚人結二去思一。
越俗歌二來暮一。
陽鳥尚歸飛。
別鶴還迴顧。
君見二南枝巢一。
應レ思二北風路一。
養レ病願レ歸レ閑。
居レ榮在レ知レ足。

れて秋風起る。(一〇)峴山君儻し遊ばば、涙落ちて應に已むこと無かるべし。

(一) ひろくはびこる貌　(二) 江水と漢水と　(三) 綱紀なり、目標といはんが如し　(四) 地方長官をいふ　(五) 此の如き人といふ意、薛道衡を指す　(六) 南國の目標たる江漢の美に相應するをいふ　(七) 漢の汲黯が臥しながら淮陽を治めたることを用ふ　(八) 後漢の賈琮が冀州を治むるとき車の帷を褰げずして巡囘したることを用ふ　(九) 名聲の遠く馳するをいふ　(一〇) 晉の羊祜の遊びし山なり

漢陰(一)政已に成り、嶺表(二)人猶ほ(三)蠹す。冠を(四)彈じて比(五)方めて新に、珠を(六)還して總て故の如し。楚人は(七)去思(八)を結び、越俗(九)來暮(一〇)を歌ふ。陽鳥(一一)尚ほ歸飛し、別鶴(一二)還た廻顧す。君、南枝の巢を見て、應に北風の路を思ふべし。

(一) 漢水の北卽襄陽を指す　(二) 南嶺以外卽播州を指す　(三) むしばむこと、政治の妨害を爲すをいふ　(四) 仕官すること　(五) 比は與例の義　(六) 後漢の孟嘗が合浦太守として善政を施せし結果一旦他處に移りし眞珠貝のもとの合浦に還りしをいへる也　(七) 襄陽の人なり　(八) 去りて薛に從はんと思ふ也　(九) 播州の民俗をいふ　(一〇) 薛の赴任の日の晩きをいふ　(一一) 雁なり　(一二) 南方に歸るをいふ　(一三) 嶺外の地を去る鶴なり

病を養ひて閑に歸らんことを願ひ、榮に居るは足るを知るに在り。(一)棲遲す(二)茂陵

入レ夢訪ニ幽人一。
植レ林雖ニ各樹一。
開レ榮豈異春。
相逢一時泰。
共幸ニ百年身一。

荏苒積ニ歲時一。
契濶同ニ遊處一。
閶闔既趨レ朝。
承明還宴語。
上林陪ニ羽獵一。
甘泉待ニ清蹕一。
迎風含ニ暑氣一。
飛雨淒ニ寒序一。
相顧惜ニ光陰一。
留レ情共延佇。
滔滔彼江漢。
實爲ニ南國紀一。
作レ牧求ニ明德一。

共に百年の身を幸はん。

植林の一聯、己と薛と、各、事功を奮ふことを言ふ。詞を遣ること甚だ雅なり。

㊀舟を剡るは渡らんが爲也　㊁網を結ぶは漁らんが爲也、治を致すには必ず賢を求むべき意を寓する也　㊂文王、太公に遇へる事を用ふ　㊃高宗傅說を得たる事を用ふ　㊄木毎木毎にすること　㊅花なり　㊆別個の春といふほどの意

(一)荏苒として歲時を積み、(二)契濶(三)遊處を同じうす。(四)閶闔既に朝に趨り、(五)承明還た(六)宴語す。(七)上林、(八)羽獵に陪し、(九)甘泉、清蹕を待つ。(一〇)迎風、暑氣を含み、飛雨(一一)寒序淒し。相顧みて光陰を惜み、情を留めて共に(一二)延佇す。

㊀日月の進み去る貌　㊁疎遠の意　㊂出處といはんが如し　㊃天門なり通じて宮門に用ふ　㊄參朝者の控所なり　㊅樂しく語を交ふるをいふ　㊆漢の武帝の開きし苑の名　㊇矢にて獵すること　㊈殿の名　㊉前面より吹き來る風　⑪冬節なり　⑫去り難くして留まるをいふ

(一)滔滔たる彼の(二)江漢、實に南國の(三)紀たり。(四)牧と作りて明德を求む、(五)若(六)人斯の美に應ず。(七)高臥して未だ(八)帷を褰げざるに、(九)飛聲已に千里。還りて白雲の天を望めば、日暮

干戈異ニ革命一。
揖讓非ニ至公一。

兩河定ニ寶鼎一。
八水域ニ神州一。
函關絶無レ路。
京洛化爲レ邱。
漳滏爾連レ沼。
涇渭余別レ流。
生レ郊滿ニ戎馬一。
涉レ路起ニ風牛一。
班レ荊疑莫レ遇。
贈レ縞竟無レ由。

道昏雖ニ已朗一。
政故猶未レ新。
刳レ舟亘水際。
結レ網大川濱。
出遊迎ニ釣叟一。

ふ　(四)覇道の消えたるをいふ　(五)哀思怨恨の意　(六)結んで風詠と爲るをいふ　(七)西山に麟を獲たること左傳に在り　(八)龍野に戰ひしこと易に在り　(九)海内を騷がすこと　(一〇)壯士の快擧を圖ること　(一一)王者姓を易ふるをいふ　(一二)堯舜の讓位などをいふ

(一)兩河、寶鼎を定め、(二)八水、(三)神州を域る。函關絶えて路無く、京洛化して邱と爲る。(四)漳滏爾沼を連ね、(五)涇渭余流を別つ。(六)郊に生じて戎馬滿ち、路を涉りて(七)風牛を起す。(八)荊を班つ疑ふらくば遇ふこと莫からん、(九)縞を贈るに竟に由なし。

(一)河南河北の地　(二)關中の八水即灞、滻、涇、渭、豐、鎬、牢、潏をいふ　(三)中國を指す　(四)二水の名、漳水は寒く滏水は熱し　(五)二水の名、涇水は淸く、渭水は濁る　(六)老子に出づ、戎馬の郊に生ずるは世の亂れたるが爲也　(七)牝牡の相誘ふを風といふ、風馬牛とて相及ばざる意に用ふ　(八)伍擧と聲子と荊を班ちて食ひしこと左傳に見ゆ荊はにんじんぼくの木也　(九)季札、子產を見て舊相識の如く之に縞帶を贈りしこと亦左傳に見ゆ　縞は白き絹也

道の昏きは已に朗なりと雖も、政の故きは猶ほ未だ新ならず。(一)舟を刳る亘(二)水の際、網を結ぶ大川の濱。(三)出遊して釣叟を迎へ、(四)夢に入りて幽人を訪ふ。林を植うること各(五)樹と雖も、(六)榮を開くこと豈に異(七)春ならんや。一時の泰に相逢ひ、

綠水激二清音一
澗戸散二餘彩一
山窗凝二宿陰一
花草共榮映。
樹石相陵臨。
獨坐對二陳榻一
無レ客有二鳴琴一
寂寂幽山裏。
誰知レ無二悶心一

在昔天地閉。
品物屬二屯蒙一
和平替二王道一
哀怨結二人風一
麟傷世已季。
龍戰道將レ窮。
亂レ海飛二羣水一
貫レ日引二長虹一

て陳榻(六)に對すれば、客無くして鳴琴あり。寂寂たり幽山の裏、誰か悶心(七)なきを知らん。

(一)岩ばかりの谷をいふ　(二)瀬の音のはげしきをいふ　(三)谷に臨める戸なり　(四)夕日の光をいふ　(五)こもれる陰氣をいふ　(六)陳蕃榻を下すの故事を借る　(七)煩悶の情也

薛播州に贈る

北史に、素、詩を以て薛道衡に遺る。薛曰く、人の將に死せんとする、其言ふことや善し、是の若き乎と。未だ幾ならずして卒す。

在昔(一)、天地閉ぢ、品物(二)、屯蒙(三)に屬す。和平、王道に替はり(四)、哀怨(五)、人風(六)に結ぶ。麟(七)傷きて世已に季たり、龍戰(八)ひて道將に窮らんとす。海(九)を亂して羣水を飛し、日(一〇)を貫きて長虹を引く。干戈革命(一一)に異にして、揖讓(一二)至公に非ず。

落句は是奸雄の語、曹孟德時に或は此れ有り。

(一)天地の道塞がるをいふ　(二)萬品萬物を指す　(三)屯蹇(なやみ)蒙昧(くらし)の意、世の亂れて困難なるをい

からず。

山齋に獨坐して薛內史に贈る、二首(一)

居山四望阻。風雲竟朝夕。深溪橫古樹。空巖臥幽石。日出遠岫明。鳥散空林寂。蘭庭動幽氣。竹室生虛白。落花入戸飛。細草當階積。桂酒徒盈樽。故人不在席。日落山之幽。臨風望羽客。

山に居りて四望阻たり、(二)風雲朝夕を競ふ。深溪古樹横はり、空巖幽石臥す。日出でて遠岫明に、(三)鳥散じて空林寂し。蘭庭(四)幽氣動き、竹室(五)虛白(六)生ず。落花戸に入りて飛び、細草階に當りて積む。桂酒(七)徒に樽に盈ち、故人(八)席に在らず。日は落つ山の幽、(九)風に臨みて羽客(一〇)を望む。

㊀字は處道、弘農華陰の人也　㊁薛道衡が事なり　㊂四方塞りて眺望を妨げらるゝをいふ　㊃蘭の咲も匂へる庭なり　㊄竹に隣れる部屋なり　㊅部屋の明りをいふ　㊆肉桂を和したる酒　㊇薛內史を斥す　㊈奥深き處　㊉仙人なり

巖壑澄清景。景清巖壑深。白雲飛暮色。

巖壑(一)清景澄み、景清くして巖壑深し。白雲暮色を飛ばし、綠水清音を激す。(二)澗(三)戸餘彩(四)散じ、山窗宿陰凝る。(五)花草共に榮えて映じ、樹石相陵ぎて臨む。獨坐し

英名欺衞霍。
智策蔑平良。
島夷時失禮。
卉服犯邊疆。
徵兵集薊北。
輕騎出漁陽。
進軍隨日暈。
挑戰逐星芒。
陣移龍勢動。
營開虎翼張。
衝冠入死地。
攘臂越金湯。
塵飛戰鼓急。
風交征旆揚。
轉鬬平華地。
追犇埽鬼方。
本持身許國。
況復武功彰。
會令千載後。
流譽滿旂常。

持して國に許す。(一七)況んや復た武功の彰はるゝをや。會千載の後をして、譽を流して旂常に滿たしむ。(一八)

二章自づから闊大にして、骨力未だ振起すること能はず。故に知る風格初めて成りて、菁華未だ備はらざるを。

㈠黃金と貝殼となり　㈡意氣揚揚として行くをいふ　㈢宮中に宿直すること　㈣近衞兵なり　㈤あやある犀の革なり　㈥甲札(よろひのさね)の數　㈦北斗七星なり　㈧弓書なり　㈨宛縣と兩河の間をいふ　㈩隴州と蜀郡とをいふ　⑪塞の名　⑫同上　⑬高樓なり　⑭宮の名　⑮漢の衞青と霍去病とをいふ　⑯漢の陳平と張良とをいふ　⑰北夷の國　⑱草にて製したる衣服をいふ　⑲日の暈あらはるるは戰勝の兆なり　⑳星の尾をいふ劍光のひらめくに喩ふ　㉑龍といひ虎といふ皆八陣の法也　㉒金城湯池とて攻め難き城塞をいふ　㉓各地にうつりて戰ふこと　㉔中國なり　㉕逃ぐるを追ひかくること　㉖夷地なり　㉗國家に殉ずるをいふ　㉘幅に文龍を畫きたる旗を旂といひ天子の旗を太常といふ

(二)楊素

武人にして亦復た雄を好み、而して詩格淸遠なり。轉た出世の高人に似たり。眞に解す可

緣レ巖驛馬上。乘レ空烽火發。借問長城侯。單于入朝謁。濁氣靜二天山一。晨光照二高闕一。釋レ兵仍振旅。要荒事方擧。飮至告二言旋一。功歸淸廟前。

白馬金貝裝。
橫行遼水傍。
問是誰家子。
宿衞羽林郎。
文犀六屬鎧。
寶劍七星光。
山虛弓響徹。
地迥角聲長。
宛河推二勇氣一。
隴蜀擁二威强一。
輪臺受二降虜一。
高闕剪二名王一。
射レ熊入二飛觀一。
校レ獵下二長楊一。

白馬の篇

白馬金貝(一)の裝、橫行(二)す遼水の傍。問ふ是れ誰が家の子ぞ、宿衞(三)の羽林郎(四)。文(五)犀七屬(六)の鎧、寶劍(七)七星の光。山虛しうして(八)弓響徹し、地迥にして角聲長し。宛河(九)勇氣を推し、隴蜀(一〇)威强を擁す。輪臺(一一)、降虜を受け、高闕(一二)、名王を射る。熊を射て飛觀(一三)に入り、獵を校べて長楊(一四)に下る。英名衞霍(一五)を欺き、智策平良(一六)を蔑す。烏夷(一七)時に禮を失ひ、卉服(一八)邊疆を犯す。兵を徵して薊北に集め、輕騎漁陽に出づ。軍を進めて日暈(一九)に隨ひ、戰を挑みて星芒(二〇)を逐ふ。陣移りて龍勢動き、營開きて虎翼(二一)張る。冠を衝きて死地に入り、臂を攘げて金湯(二二)を越ゆ。塵飛んで戰鼓急に、風交りて征旆揚る。轉鬭(二三)、華地(二四)を平け、追犇(二五)、鬼方(二六)を埽ふ。本と身を

蕭蕭秋風起。
悠悠行二萬里一。
萬里何所レ行。
横レ漠築二長城一。
豈台小子智。
先聖之所レ營。
樹二茲萬世策一。
安二此億兆生一。
詎敢憚二焦思一。
高二枕於上京一。
北河秉二武節一。
千里捲二戎旌一。
山川互出沒。
原野窮二超忽一。
摐レ金止二行陣一。
鳴レ鼓興二士卒一。
千乘萬騎動。
飮二馬長城窟一。
秋昏塞外雲。
霧暗關山月。

蕭蕭として秋風起り、悠悠として萬里を行く。萬里何の行く所ぞ、漠(一)を横りて長城を築く。豈に台小子(二)の智ならんや、先聖の營む所なり。茲の萬世の策を樹て、此の億兆(三)の生(四)を安んず。詎ぞ敢へて焦思(五)を憚りて、枕(六)を上京(七)に高うせん。北河武節を秉り、千里戎旌を捲く。山川互に出沒(八)し、原野超忽(九)を窮む。金を摐(一〇)して行陣を止め、鼓を鳴して士卒を興す。千乘萬騎(一一)動き、馬を長城の窟に飮ふ。秋は昏し塞外の雲、霧は暗し關山の月。巖に緣りて驛馬上り、空に乘じて烽火(一二)發す。借問す長城の候(一三)に、單于(一四)入りて朝に謁すと。濁氣天山靜かに、晨光高闕を照す。兵を釋いて仍て振旅(一五)し、要荒(一六)事方に擧る。飮至(一七)して言(一八)に旋るを告げ、功は歸す淸廟(一九)の前。

(一) 沙漠の地なり (二) 煬帝自から謙遜して言ふ (三) 臣民を指す (四) 生業なり (五) 苦心焦慮の意 (六) 安心する樣をいふ (七) 長安を指す (八) 見え隱るゝをいふ (九) にはかに通過すること (一〇) 打つこと (一一) 兵車の多きをいふ (一二) 警報を傳ふるのろしなり (一三) 斥候兵をいふ (一四) 匈奴の王なり (一五) 兵を治めて凱旋するをいふ (一六) 要服と荒服となり卽ち邊地をいふ (一七) 凱旋して廟に告げ宴會すること (一八) 詩經の文字を用ひて凱旋の義とす (一九) 宗廟なり

秋風吹二木葉一。
還似二洞庭波一。
常山臨二代郡一。
亭障繞二黄河一。
心悲異方樂。
腸斷隴頭歌。
薄暮臨二征馬一。
失レ道北山阿。

秋風木葉を吹き、還つて洞庭の波に似たり。常山代郡に臨み、亭障黄河を繞る。心は悲し異方の樂、腸は斷つ隴頭の歌。薄暮征馬に臨み、道を失ふ北山の阿。

起調甚だ高し。

㊀恒山をいふ北方代表の山所謂五山の一也　㊁他郷なり

隋詩

煬帝

煬帝の詩、能く雅正の語を作す。北陳の后主之に勝る。

㊀六朝の後を承けて天下を一統したるも國號也　㊁名は廣郎ち世祖明帝也

馬に長城窟に飲ふの行。從征の羣臣に示す

不レ見二一人歸一。
唯有二河邊雁一、
秋來南向飛。

子山の時勢地位よりして之を想へば、愈悲む可きを見る。

(一) 古關の名玉門關の南に在るを以て故に陽關と曰ふ

王褒(一)

關山の篇

從レ軍出二隴坂一。
驅レ馬度二關山一。
關山恆掩靄。
高峰白雲外。
遙望二秦川水一。
千里長如レ帶。
好レ勇自秦中。
意氣多二豪雄一。
少年便習レ戰。
十四已從レ戎。
遂水深難レ渡。
楡關斷未レ通。

軍に從つて隴坂を出で、馬を驅りて關山を度る。關山恆に掩靄す(二)、高峰白雲の外。遙に秦川の水を望めば、千里長くして帶の如し。勇を好むこと自づから秦(三)中、意氣(四)豪雄多し。少年便ち戰を習ひ、十四已に(五)戎に從ふ。遂水深くして渡り難く、楡關斷えて未だ通ぜず。

(一) 字は子淵、瑯琊臨沂の人なり草隷を善くす (二) 靄もやのかゝるをいふ (三) 秦中の俗は自から勇を好むとなり (四) いさましく強きをいふ (五) 戰爭に從事するをいふ

河北を渡る

故人倘思レ我。
及二此平生時一。
莫下待二山陽路一。
空聞二吹笛一悲上。

客遊經二歳月一。
羈旅故情多。
近學二衡陽雁一。
秋分俱渡レ河。

陽關萬里道。

㊀その年といふ意　㊁十二月の事　㊂眞盛り也　㊃さがりし氷柱なり　㊄寒きが故に手を出して折らざるをいふ　㊅梅花を尋ねて得ざるをいふ　㊆重ね着せざるをいふ

徐陵に寄す

故人倘し我を思はば、(一)此の平生の時に及べ。(二)山陽の路を待ち、空しく吹笛を聞きて悲むこと莫かれ。

㊀死せざる時にといふほどの意　㊁向秀が思舊の賦の故事を借用す

侃法師に和す

客遊歳月を經、(一)羈旅故情多し。近く(二)衡陽の雁を學び、(三)秋分俱に(四)河を渡らん。

㊀懷舊の情をいふ　㊁雁の名所なり　㊂二十四節の一なり　㊃黄河を指す

重ねて周尚書に別る

(一)陽關萬里の道、一人の歸るを見ず。唯だ河邊の雁あり。秋來南に向つて飛ぶ。

喚作二陽臺一神。
三尾上二鳳翼一。
九坂度二龍鱗一。
路高二山裏樹一。
雲低二馬上人一。
懸崖泉溜響。
深谷鳥聲佳。
住レ馬來相問。
應レ知有二姓秦一。

當年臘月半。
已覺梅花闌。
不レ信二今春晚一。
倶來二雪裏一看。
樹動懸氷落。
枝高出レ手寒。
早知二覓不レ見。
眞悔二著レ衣單一。

ふ ㊃ 杯の緣（ふち）なり ㊄ 楚の襄王の夢に入りし巫山の神女なり

三尾（一）、鳳翼上り、九坂（二）龍鱗度る。路は山裏の樹より高く、雲は馬上の人より低し。懸崖泉溜（三）響き、深谷鳥聲佳なり。馬を住めて來りて相問ふ、應に知るべし姓（四）秦有ることを。

㊀ 屛中の畫鳳なり、三羽は其數を示す ㊁ 屛中の畫龍也九坂は九折の坂路をいふ ㊂ 瀑布の落下するをいふ
㊃ 桃花源の人の秦以後の姓あるを知らざりし事を翻用す

梅　花

當年臘月半（一）なりしとき、已に覺ゆ梅花の闌（二）なるを。今春の晩きを信ぜず、倶に雪裏（三）に來りて看る。樹動いて懸氷（四）落ち、枝高くして（五）手を出すこと寒し。早く覓（六）めて見えざるを知らば、眞に衣を著くるの單（七）なるを悔いん。

古人梅を詠じ、高く俗に越ゆるあり、後人愈く刻劃して、愈粉滯を覺ゆ。古人は神を取り、後人は形を取れば也。

立レ德齊ニ今古一。
資レ仁一ニ毀譽一。
無レ機抱レ甕汲。
有レ道帶レ經鋤。
處レ下唯名レ惠。
能賢本姓レ蘧。
未レ論驚ニ寵辱一。
安知繫ニ慘舒一。

昨夜鳥聲春。
驚鳴動ニ四隣一。
今朝梅樹下。
定有ニ詠レ花人一。
流星浮ニ酒泛一。
粟瑱繞ニ杯脣一。
何勞一片雨。

永豐殿下にて志を言ふに奉和す

德を立てて今古(一)を齊しくし、仁に資りて毀譽(二)を一にす。機(三)無く甕を抱いて汲み、道(四)有り經を帶びて鋤く。下に處るは唯だ惠(五)を名とし、能く賢なるは本と蘧(六)を姓とす。未だ論ぜず寵辱(七)に驚くを。安ぞ知らん慘舒(八)に繫るを。

(一)古今の別なきをいふ　(二)そしりとほまれとを同視するをいふ　(三)機心即物質執着の念なきをいふ　(四)眞道即人間的眞味を守るをいふ　(五)柳下惠を指す　(六)蘧伯玉を指す　(七)名譽を恥辱となり老子に寵辱驚くが若しとあり　(八)慘は痛惕心のいたみをいふ、舒は豫に同じ心のたのしみをいふ

畫屛風を詠ずる詩

昨夜鳥聲の春、驚き鳴きて四鄰を動かす。今朝梅樹の下、定めて花を詠ずる人あらん。流星(一)酒泛(二)に浮び、粟瑱(三)杯脣(四)を繞る。何ぞ勞せん一片の雨、喚んで陽臺の神(五)と作す。

(一)眸子(ひとみ)の動くこと、目のちら〳〵をいふ　(二)温るゝ酒をいふ　(三)耳飾の玉の粟の如くなるものをい

冥漠爾遊レ岱。
悽涼余向レ秦。
雖レ言レ異二生死一。
同是不歸人。
昔余仕冠蓋。
値三子避二風塵一。
望レ氣求二眞隱一。
伺レ關待二逸民一。
忽聞泉石友。
芝桂不レ防レ身。
悵然張仲蔚。
悲哉鄭子眞。
三山猶有レ鶴。
五柳更應レ春。
遂令下從二渭水一。
投弔往中江濱上。

王少保の遙に周處士を傷むるに和す

王少保褒の集には、此の題詩を闕く。

(一)冥漠として(二)爾、(三)岱に遊び、(四)悽涼として余、秦に向ふ。生死を異にすと言ふと雖も、同じく是れ不歸の人。昔余仕へて、(五)冠蓋せしとき、子が風塵を避くるに値ふ。(六)氣を望みて(七)眞隱を求め、關を伺ひて(八)逸民を待つ。忽ち聞く(九)泉石の友、(一〇)芝桂身(一一)を防がずと。悵然たり(一二)張仲蔚、悲しい哉(一三)鄭子眞。(一四)三山猶ほ鶴あり、(一五)五柳更に應に春なるべし。遂に渭水より、投弔して(一六)江濱に往かしめん。

(一)前途の遠く見るべからざるをいふ　(二)周處士をいふ　(三)泰山なり　(四)物淋しき形容　(五)衣冠車蓋をきぬがさをいふ　(六)天上の氣なり　(七)眞々修むる隱士をいふ　(八)世を遁れし人　(九)世外の友をいふ泉石を生命とすれば也　(一〇)靈芝と肉桂となり　(一一)疾の身を侵すを防ぎ得ざりしをいふ　(一二)扶風平陵の人隱士なり　(一三)鄭樸の事、漢褒中の人、亦隱士なり　(一四)各處にあり未だ孰れか是なるを知らず　(一五)陶淵明が宅邊に五柳あり　(一六)此詩を書して渭水に投じ以て之を弔し江濱に往かしめんと也

河堤崩二故柳一。
秋水高二新堰一。
心齋懸二昏墊一。
樂徹憐二背怨一。
禪河秉二高論一。
法輪開二勝辯一。
王城水鬭息。
洛浦河圖獻。
伏泉還習坎。
歸風已回巽。
桐枝長二舊圍一。
蒲節抽二新寸一。
山藪欣レ藏疾。
幽棲得レ無悶。
有レ慶兆民同。
論レ年天子萬。

藪疾を藏すを欣び、幽棲悶(三二)なきを得。(三三)慶あれば兆民同じくし、年を論ずれば天(三四)子萬なり。

高陵の句は、漢文の本紀の六傳に乘じて高陵に至れる事を用ふ。周の明帝の立つ、亦相似たる也。○穀洛の水鬭は、國語に見ゆ。

(一) 韻を分つをいふ (二) 天下の御言葉なり (三) 記錄するに相當すと也 (四) 易に先王以建諸侯親万國とあり用ひて諸侯を建つる資格ありとの意を示す (五) 賓夏と共に舜に關係ある地名なり (六) 漢の武帝の築きし所なりここに羣臣を集めて七言詩各一句づゝ作らしめしことあり (七) そへうまの事 (八) 註を看よ (九) 長幼の席を立つること (一〇) 衆賓なり (一一) 接見の意 (一二) 公平の法度なり (一三) 新らしきゐぜきをいふ (一四) 心にものいみすること (一五) 水害に陷つて人民其處置に困惑するをいふ (一六) 音樂を行はざるをいふ (一七) 諸民の怨なり (一八) 禪道を河に喩ふ (一九) 高尚なる論議なり (二〇) 佛法を車輪に喩ふ (二一) 最勝の辯說なり (二二) 水喧嘩の事 (二三) 河より圖を出すは聖人の瑞なり (二四) 地下の泉なり (二五) 易の坎の卦を引く、坎は穴なり、坎を習ぬるは險難のいやが上に加はるをいふ (二六) 戻し風なり (二七) 易の巽の卦を引く、巽は順なり、巽に回るは漸次に順調に趨くをいふ (二八) 昔日の周圍をいふ (二九) 蒲がまのふし也 (三〇) 新らしく寸の伸ぶことをいふ (三一) 山林といはんが如し (三二) 人世の苦患をいふ (三三) 易の一人慶あれば兆民之に賴るに本づく、一人は天子をいひ兆は諸民をいふ (三四) 天子は萬年なりとの意

悲歌度二燕水一。
弭レ節出二陽關一。
李陵從レ此去。
荊卿不二復還一。
故人形影滅。
音書兩俱絕。
遙看二塞北雲一。
懸想二關山雪一。
遊子河梁上。
應下將二蘇武一別上。

悲歌燕水を度り、節を弭めて陽關を出づ。李陵此より去り、荊卿復た還らず。故人形影滅び、音書兩つながら俱に絕ゆ。遙に塞北の雲を看、懸に關山の雪を想ふ。遊子河梁の上、應に蘇武と別るゝなるべし。

羽聲を聞くが如し。○末路但だ李陵を收む、故人の章法なり。

(一) 易水なり　(二) 節を駐むること、節は使者の持つべきしるしの杖なり　(三) 彼と我となり　(四) 河に架けたる橋の上をいふ古來以て送別の處と爲す

御辯誠膺レ籙。
維皇稱二有建一。
雷澤昔經レ漁。
負夏時從レ販。
柏梁驂二駟馬一。
高陵馳二六傳一。
有序屬二賓連一。
無レ私表二平憲一。

晴を喜ぶ。詔に應ず。敕して自づから韻を疏せしむ

御辯誠に籙に膺り、維れ皇、有建に稱ふ。雷澤昔漁を經、負夏時に販に從ふ。柏梁駟馬を驂にし、高陵六傳を馳す。序ありて賓連に屬し、私無くして平憲を表す。河堤、故柳に崩れ、秋水新堰より高し。心齋、昏墊を愍み、樂徹、胥怨を憐む。禪河高論を乘り、法輪勝辯を開く。王城水覇息み、洛浦河圖獻ぐ。伏泉還た坎を習ね、歸風已に巽に回る。桐枝舊闔より長じ、蒲節新寸を抽く。山

悽愴風塵多。
關門臨二白狄一。
城影入二黃河一。
秋風別二蘇武一。
寒水送二荊軻一。
誰言氣蓋レ世。
晨起帳中歌。

る。秋風蘇武(二)に別れ、寒水荊軻(三)を送る。誰か言ふ氣は世(四)を蓋ふと、晨に起る帳(五)中の歌。

城影の句、悲壯なり。

(一)塞上の險要なる處に牆を築きて亭を置き人をして之を守らしむる也 (二)漢の使節にして匈奴に留にせられたる人也 (三)燕の太子丹の爲に秦王を刺さんとしたる人也風蕭蕭兮易水寒の句あり (四)楚の項羽の詩に力拔山兮氣蓋世とあり、世をおほひ盡すほどの大なる元氣をいふ (五)虞美人帳中に飲みて怨歌慷慨せしこと史記本紀に見ゆ

歩兵未レ飲レ酒。
中散未レ彈レ琴。
索索無二眞氣一。
昏昏有二俗心一。
涸鮒常思レ水。
驚飛每失レ林。
風雲能變レ色。
松竹且悲吟。
由來不レ得レ意。
何必往二長岑一。

歩兵(一)未だ酒を飲まず、中散(二)未だ琴を彈ぜず。索索(三)として眞氣(四)無く、昏昏(五)として俗(六)心あり。涸鮒(七)常に水を思ひ、驚飛(八)每に林を失ふ。風雲能く色を變じ、松竹且つ悲(九)吟す。由來(一〇)意を得ずとも、何ぞ必ずしも長岑(一一)に往かん。

易の震卦に云はく、震うて索索たりと。

(一)歩兵校尉の略也、晉の阮籍を指す (二)中散大夫の略也、晉の嵇康を指す (三)心安からざる貌 (四)精誠の氣をいふ (五)明ならざる貌 (六)通俗の心をいふ (七)水涸れたる處の鮒(ふな)なり (八)物に驚く鳥をいふ (九)怨しき音をたつること (一〇)逆境に在るをいふ (一一)遠山といはんが如し必ずしも山中に隱遁せずとの意

哭市聞妖獸。
穎山起怪雲。
綠林多散卒。
清波有敗軍。
智士今安用。
忠臣且未聞。
惜無萬金產。
東求滄海君。

日晚荒城上。
蒼茫餘落暉。
都護樓蘭返。
將軍疎勒歸。
馬有風塵色。
人多關塞衣。
陣雲平不動。
秋蓬卷欲飛。
聞道樓船戰。
今年不解圍。
蕭條亭障遠。

（七）綠林散卒多く、（八）清波敗軍あり。智士今安んぞ用ひん、忠臣且つ未だ聞えず。惜むらくは萬金の產なきを、東のかた滄海君（九）を求む。

隋巢子に、三苗大に亂れ、龍、廟に生じ、犬、市に哭すと。

㈠ 四海の叛亂をいふ　㈡ 群兇に同じ衆くの惡人をいふ　㈢ 天下の帝業即皇室の命運を指す　㈣ 妖雲は幾山にこもるをいふ　㈤ 哭聲の聞ゆる市場なり　㈥ 穎れかゝりし山なり　㈦ 地名、張霸の起りし處、通じて盜賊の義に用ふ　㈧ 官軍を指す　㈨ 張良が秦に報いん爲千金を投じて壯士を滄海君に求めたる故事を借りたる也

日は晚る荒城の上、蒼茫として落暉（一）を餘す。都護（二）樓蘭（三）より返り、將軍疎勒（四）より歸る。馬に風塵の色あり、人に關塞の衣多し。陣雲平にして動かず、秋蓬卷いて飛ばんと欲す、聞道樓船（五）戰ひて、今年圍を解かずと。

㈠ 夕日なり　㈡ 漢の官名、西域を總管する爲に設けられたり　㈢ 西域の國名なり　㈣ 同上　㈤ 將軍の官職なり

蕭條として亭障（一）遠く、悽愴として風塵多し。關門白狄に臨み、城影黃河に入

纖腰減二束素一。
別淚損二橫波一。
恨心終不レ歇。
紅顏無二復多一。
枯木期レ塡レ海。
青山望レ斷レ河。
搖落秋爲レ氣。
淒涼多二怨情一。
啼枯二湘水竹一。
哭壞二杞梁城一。
天亡遭二憤戰一。
日蹙値二愁兵一。
直虹朝映レ壘。
長星夜落レ營。
楚歌饒二恨曲一。
南風多二死聲一。
眼前一杯酒。
誰論二身後名一。
橫流遘二屯蹷一。
上慘結二重氛一。

塡めんと期し、青山、河を斷たんと望む。

(一)今の山海關なり　(二)胡人の吹く笛　(三)羌人の吹く笛　(四)細き腰なり　(五)白きぬの紐帶をいふ　(六)其の痩せたるをいふ　(七)目を秋波といふ　(八)目を傷つくるまでに泣くをいふ　(九)以下は望の到底達すべからざるを歎息する也

(一)搖落して秋を氣と爲し、(二)淒涼として怨情多し。啼きて湘水の竹を枯らし、(三)哭して(四)杞梁の城を壞る。(五)天亡ぼして憤戰に遭ひ、(六)日蹙りて愁兵に値ふ。(七)直虹、朝に壘に映じ、(八)長星、夜營に落つ。楚歌、(九)恨曲饒く、(一〇)南風、(一一)死聲多し。眼前一杯の酒、誰か身後の名を論ぜん。(一二)

(一)木葉のゆるぎ落つるをいふ　(二)物淋しく感ずる樣なり　(三)舜の二后の故事なり　(四)齊の杞梁の妻の故事なり　(五)天運の盡くるをいふ　(六)帝祚の危きをいふ　(七)縱に上れる虹なり　(八)流星の長く尾を引くものなり　(九)恨のこもりし音曲をいふ　(一〇)南國の歌なり　(一一)生氣なきをいふ　(一二)死後の名聲をいふ

(一)橫流、(二)屯蹷に遘し、(三)上慘、(四)重氛を結ぶ。(五)哭市妖獸を聞き、(六)頹山怪雲を起す。

疇昔國士遇。
生平知己恩。
直言珠可レ吐。
寧知炭可レ呑。
一顧重二尺璧一。
千金輕二一言一。
悲傷劉孺子。
悽愴史皇孫。
無レ因下同二武騎一。
歸守中霸陵園上。

楡關斷二音信一。
漢使絶二經過一。
胡笳落淚曲。
羌笛斷腸歌。

詠懷に擬す

無窮の孤憤、傾吐して出し、工拙都て忘れ、專ら阮に擬せず。

疇昔國士の遇、生平知己の恩。直言珠、吐くべきも、寧ぞ知らん炭、呑むべしとは。一顧尺璧よりも重く、千金一言より輕し。悲傷す劉孺子、悽愴たり史皇孫。武騎と同じく、歸りて霸陵の園を守るに因なし。

㈠前日なり ㈡國家に缺くべからざる所の人物をいふ ㈢平生に同じ ㈣能く我を理解する人 ㈤賢者の言語なり ㈥言ふ所珠と爲るをいふ ㈦晉の豫讓が炭を呑んで啞となりしをいへり ㈧徑一尺のたまをいふ ㈨漢の孺子嬰なり王莽の爲に位を簒はれたり暗に梁の太子に喩ふ ㈩物すごくいたましきをいふ ㈠㈠漢の宣帝の父なり名を進といふ後に巫蠱の事にあひて害せらる亦暗に梁の太子に喩ふ ㈠㈡司馬相如を指す ㈠㈢漢の文帝の陵をいふ

楡關音信を斷ち、漢使經過を絶つ。胡笳落淚の曲、羌笛斷腸の歌。纖腰束素を減じ、別淚橫波を損す。恨心終に歇まず、紅顏復た多きこと無し。枯木、海を

虛無推二馭辨一。
寥廓本乘レ蜺。
三門臨二苦縣一。
九井對二靈谿一。
盛レ丹須二竹節一。
量レ藥用二刀圭一。
石似二臨邛芋一。
芝如二封禪泥一。
毻毛新鵠小。
盤根古樹低。
野戍孤煙起。
春山百鳥啼。
路有二三千別一。
途經二七聖迷一。
唯當下別二關吏一。
直向中流沙西上。

虛無、(一)馭辨を推し、(二)寥廓本と(三)蜺に乘ず。(四)三門苦縣に臨み、(五)九井靈谿に對す。(六)(七)丹を盛るに竹節を須ひ、(八)(九)藥を量るに刀圭を用ふ。(一〇)石は臨邛の芋の如く、(一一)(一二)芝は封禪の泥の如し。(一三)(一四)(一五)毻毛新鵠小く、(一六)(一七)盤根古樹低し。野戍孤煙起り、(一八)春山百鳥啼く。路に三千の別あり、(一九)途に七聖の迷を經たり。(二〇)唯當に關吏に別れて、(二一)直に流沙の西に向ふべし。(二二)

神仙傳に、老子耳に三門ありと。郡國志に、苦縣の老子廟に九井ありと。○悠悠三千、路涉り難し矣とは趙至の語なり。七聖倶に迷ふとは、軒轅道を訪ふの事を用ふ。

(一) 老子の道は虛無を主とす (二) 馭は御に同じ馬を使ふこと也借りて世を治むるに用ふ、辨は判なり事を治むるを言ふ (三) ほがらかにして大なる義、以て老子の道の天と一なるを言ふ (四) 虹なり虹に雌雄あり蜺は雌なり老子の道は柔に在り雄を重んぜずして雌を重んず (五) 註を看よ (六) 老子の生地茲に在り (七) 註を看よ (八) 仙藥なり (九) 竹筒なり節を底となす也 (一〇) 匙(さじ)なり (一一) 藥石なり (一二) 縣の名 (一三) 靈芝なり (一四) 土を築き壇を作りて祭るを封といひ、地を除きて祭るを禪といふ (一五) 泥の如く芋の如しとは老子にとりては貴ぶに足らざるをいふ (一六) 毻毛(おちげ)なり (一七) 若い鵠鳥(くぐどり)なり (一八) 野營の守備なり (一九) (二〇) 共に註を看よ (二一) 函谷關の尹たりし喜を指す (二二) 西北方の砂漠地を汎稱す

岸社多ニ喬木一。
山城足ニ迴樓一。
日落江風靜。
龍吟迴ニ上游一。
河圖論ニ陣氣一。
金匱辨ニ星文一。
地中鳴ニ鼓角一。
天上下ニ將軍一。
函犀恒七屬。
絡鐵本千羣。
飛梯聊度レ絳。
合弩暫淩レ汾。
寇陣先中斷。
妖營即兩分。
連烽對レ嶺度。
嘶馬隔レ河聞。
箭飛如ニ疾雨一。
城崩似ニ壞雲一。
英王於ニ此戰一。
何用ニ武安君一。

子の吟詠をいふ　(一二) 上流なり

盧記室と同じく軍に從ふ

河圖(一)陣氣(二)を論じ、金匱(三)星文(四)を辨ず。地中鼓角(五)を鳴し、天上將軍を下す。函犀(六)恒に七屬(七)、絡鐵(八)本と千羣(九)。飛梯(一〇)聊か絳(一一)を度り、合弩(一二)暫く汾(一三)を淩ぐ。寇陣(一四)先づ中斷し、妖營(一五)即ち兩分す。連烽(一六)嶺に對して度り、嘶馬(一七)河を隔てて聞ゆ。箭飛びて疾雨(一八)の如く、城崩れて壞雲(一九)に似たり。英王此戰に於いて、何ぞ武安君(二〇)を用ひん。

(一) 河より出でたる圖をいふ　(二) 陣立の風なり　(三) 金のはこなり　(四) 天文の事　(五) 大鼓と銅角(吹き物)となり　(六) 犀の革の鎧　(七) 七段に綴ること　(八) 金具のつきたる絡(むなかひ)　(九) 千匹といふに同じ　(一〇) 高きはしご也　(一一) 山の名　(一二) 弩の勢を合すること　(一三) 水の名　(一四) 敵陣なり　(一五) 賊營をいふ　(一六) つゞけざまに打揚ぐる烽火(のろし)　(一七) いなゝく馬の聲　(一八) 急雨なり　(一九) 崩れ雲をいふ　(二〇) 秦の將白起を指す

老子の廟に至る、詔に應ず

牽レ馬向二渭橋一。
日隱山頭晡。
山簡接䍦倒。
王戎如意舞。
箏鳴金谷園。
笛韻平陽塢。
人生一百年。
歡笑惟三五。
何處覓二錢刀一。
求爲二洛陽賈一。

春江下二白帝一。
畫舸向二黄牛一。
錦纜回二沙磧一。
蘭橈避二荻洲一。
逕花隨レ水泛。
空巣逐レ樹流。
建平船梯下。
荊門戰艦浮。

は如意(一〇)もて舞ふ。箏は鳴る金谷(一一)の園、笛は韻く平陽(一二)の塢。人生一百年、歡笑惟だ三五のみ。何の處にか錢刀(一三)を覓めて、求めて洛陽の賈(一四)と爲らん。

起結佳を致す。○作意欽崎にして、終は平順に歸す。風氣然らしむる也。

(一)杜衡といふ香草也 (二)一面に地に生ずるをいふ (三)晉の石崇の愛姫也 (四)卓文君の事、司馬相如の妻也 (五)夕日の照すを言ふ (六)晉時の人也 (七)白帽なり (八)前と後を顚倒する也 (九)晉時の人、竹林七賢の一也 (一〇)僧の所持する道具にして「まごのて」といふものに似たり (一一)晉の石崇の園也 (一二)馬融の居る所也 (一三)貨幣の事 (一四)商賈人なり

江に泛ぶに奉和す

春江白帝(一)より下り、畫舸(二)黄牛(三)に向ふ。錦纜沙磧(四)を回り、蘭橈(五)荻洲(六)を避く。逕花(七)水に隨つて泛び、空巣(八)樹を逐うて流る。建平(九)船梯下り、荊門戰艦泛ぶ。岸社(一〇)喬木多く、山城迴樓足る。日落ちて江風(一一)靜に、龍吟(一二)して上游に迴る。

(一)城の名 (二)立派なる舟なり (三)峽の名 (四)砂石の多き河原也 (五)木蘭にて作りし棹也 (六)蘆荻の生へたる河の洲也 (七)うるはひたる花をいふ (八)あき巣なり (九)郡の名 (一〇)岸上立つ所の社なり (一一)天

人則治。何世無二奇才一。

促柱繁絃非二子夜一。歌聲舞態異二前溪一。御史府中何處宿。洛陽城頭那得ㇾ棲。彈ㇾ琴蜀郡卓家女。織ㇾ錦秦川竇氏妻。詎不三自驚二長淚落一。到頭啼烏恒夜啼。

春水望二桃花一。春洲藉二芳杜一。琴從二綠珠一借。酒就二文君一取。

るをいふ 一二 岐山の南をいふ 一三 巡守すること 一四 東夷の一種 一五 舟とかぢと也 一六 かなへの中味なり 一七 鹹と酸との調和は鹽と梅とによるべきをいふ也 一八 世の亂れなり

烏夜啼(一)

促柱(二)繁絃(三)子夜(四)に非ず、歌聲舞態前溪(五)に異なり、御史府(六)中何の處にか宿せん、洛陽城頭那ぞ棲むを得ん。琴を彈ずるは蜀郡卓家の女、錦を織るは秦川竇氏の妻。詎ぞ自づから長涙の落つるに驚かざる、到頭啼烏恒夜(七)に啼く。

一 樂府の曲名なり 二 張りしめたる琴の柱也 三 澤山列びたる琴の絃なり 四 晉の女子の名、歌舞を善くす 五 眼前の溪泉をいふ 六 御史の官人のつとむる役所をいふ 七 常夜に同じ

酒に對する歌

春水桃花を望み、春洲芳杜(一)を藉(二)く。琴は綠珠(三)に從つて借り、酒は文君(四)に就きて取る。馬を牽いて渭橋に向ふ、日は曝(五)す山頭の晡。山簡(六)は接䍦(七)を倒(八)にし、王戎(九)

禮樂既正。神人所以和。玉帛有序。志欲靜干戈。各分符瑞。俱誓裂山河。今日相樂。對酒且當歌。道德以喩。聽撞鐘之聲。神姦不若。觀鑄鼎之形。酆宮既朝。諸侯于是穆。岐陽或狩。淮夷自此平。若涉大川。言憑舟檝。如和鼎實。有寄於鹽梅。君臣一體。可以靜氛埃。得

(一)禮樂既に正し、神人和する(二)所以なり。(三)玉帛序あり、志、(四)干戈を靜めんと欲す。各〻(五)符瑞を分ち、倶に誓ひて(六)山河を裂く。今日相樂み、酒に對して且つ當に歌ふべし。道德以て喩し、(七)撞鐘の聲を聽き、(八)神姦若はず、(九)鑄鼎の形を觀る。(一〇)酆宮既に朝し、諸侯是に于いて(一一)穆なり。(一二)岐陽或は(一三)狩し、(一四)淮夷此より平なり。大川を涉るが若く、言に(一五)舟檝に憑り、(一六)鼎實を和するが若く、(一七)鹽梅に寄すること有り。君臣一體ならば、以て(一八)氛埃を靜む可し。人を得れば則ち治まる、何の世か奇才無からん、

別に一體を爲す。當に存して以て觀覽に備ふべし。爾時に在りて、宗廟の樂亦靡靡を用ふ。此れ蕢桴土鼓の如き也。

(一) 禮は人心を正しくする所以也、樂は人心を和ぐる所以也　(二) 心を合すること　(三) 諸侯禮を行ふに用ふる者也卽五玉三帛をいふ　(四) 戰爭なり　(五) 五等のしるしの玉なり　(六) 土地を割きて諸侯に封ずるをいふ　(七) 鐘を撞つに大叩は大鳴し小叩は小鳴す道德を喩すにも亦其才に隨つて敎訓するを言ふ也　(八) 神と姦民と相侵すを云ふ　(九) 鼎に鑄出せる諸獸の形を見て鑒誡と爲すを言ふ也　(一〇) 周の文王の作りし酆の宮なり　(一一) 平和安寧な

大而謨明。我以商應。聞義則可行。有熊爲政。訪道於容成。殷湯受命。委任於阿衡。忠其敬事。有罪不逃刑。誦其箴諫。言之無隱情。有剛有斷。四方可以寧。既頌既雅。天下乃昇平。專精一致。金石爲之開。動其兩心。妻子恩情乖。苟利社稷。無有不盡懷。昊天降佑。元首惟康哉。

則ち行ふ可し。有熊政を爲して、道を容成に訪ふ。殷湯命に受けて、任を阿衡に委す。其の敬事に忠なれば、罪ありて刑を逃れず、其箴諫を稱すれば、之を言ひて情を隱すこと無し。剛あり斷あり、四方以て寧んず可く、既に頌あり既に雅あり、天下乃ち昇平ならん。專精一致ならば、金石之が爲に開かん。其兩心を動かさば、妻子恩情乖かん。苟も社稷を利せば、懷を盡さざること有ること無し。昊天佑を降さば、元首惟れ康からん哉。

黄帝有熊氏、容成に命じて蓋天を作らしむ。

(一) 五聲調曲の一なり (二) 土性にして五聲の一也 (三) 金性にして亦五聲の一也 (四) (五) 共に註を君よ (六) 殷の湯王なり天命を受けて夏の後を繼ぐ (七) 官名、伊尹を斥す (八) 敬むべき事務をいふ (九) 忠實に働くこと (一〇) 相當の所罰を受くるをいふ (一一) 箴(いましめ)諫(いさめ)の言語をいふ (一二) 事實を其儘に表明すること (一三) 剛直の德なり (一四) 決斷の行なり (一五) 治功をうたへるもの (一六) 政事をうたへる者 (一七) 太平の意 (一八) 一心協力すること (一九) 二者の心を箇々に働かすること (二〇) 恩愛の情義なり (二一) 相背きて仲違ひするをいふ (二二) 國家なり (二三) 有らんかぎりの思慮をつくすをいふ (二四) 上帝を指す (二五) 幸福なり (二六) 天十なり (二七) 安寧無事の意

君以宮唱寬

くして雁毛を落す」と云ひ、法筵に「佛影胡人記し、經文漢語翻す」と云ひ、薛文學を訓ふるに、「羊腸九阪を連ね、熊耳雙峰を對す」と云ひ、人に和するに、「早雷蟄戸を驚かし流雪河源を長ず」と云ひ、閑庭に、「樵隱恒に路を同じうし、人禽或は巣に對す」と云ひ、清晨汎に臨むに、「猿嘯きて風還た急に、雞鳴きて潮來らんと欲す」と云ひ、冬狩に、「鷩雉鷹を逐うて飛び、騰猿、箭を看て轉ず」と云ひ、人に和するに、「絡緯機無くして織り、流螢火を帶びて寒し」と云ひ、晝屏を詠ずるに、「石險にして松横に植ち、岩懸りて澗竪に流る」「靜を愛して、魚樂を爭ひ、人に依りて鳥、懷に入る」と云ひ、堂内に入るに、「日光釵影動き、窓影鏡花搖く」と云ふが如き、少陵の云ふ所の清新なる者耶。

㊀六朝時代の一國の名なり　㊁字は子山、南陽新野の人也、徐摛と並び稱せらる、文辭甚だ綺艷なり世に之を徐庾體と謂ふ

商調曲（一）

君、（二）宮を以て唱へ、寬大にして謨明なり。我、（三）商を以て應じ、義を聞きて

一束藁。兩頭然。河邊羖䍽。飛上天。

一束の藁(一)、兩頭(二)燃ゆ(三)。河邊の羖䍽(四)、飛んで天に上る。(五)

㊀子供歌なり　㊁一たばねなり　㊂上下の二方をいふ　㊃燃え失すること　㊄羊の事

北周詩

庾信

陳隋間の人、但だ名句を得んと欲する耳。子山、琢句中に於て、復た清氣饒し。故に能く流俗の中に抜出す。所謂軒鶴、雞羣に立つ者耶。○子山の詩、固より是れ一時の作手にして、造句能く新なるを以て、事を使ふこと迹無し。何水部に比して、又之に過ぐるに似たり。武陵の陳胤倩が、少陵は青、藍より出づること能はず、直だ是れ亦歩し亦趨ると謂へるは、則ち又太甚し矣。名句、歩虛の詞に、「漢帝桃核を看、齊侯棗花を問ふ」と云ひ、山池に、「荷風浴鳥を驚かし、橋影行魚を聚む」と云ひ、宇文内史に和するに、「樹には宿る櫻を含むの鳥、花には留る蜜を釀すの蜂」と云ひ、軍行に、「塞迥にして楡葉を翻し、關寒

敕勒川。陰山下。天似二穹廬一。籠二蓋四野一。天蒼蒼。野茫茫。風吹草低見二牛羊一。

(一)敕勒の歌

北史に、北齊の神武、斛律金をして敕勒を唱へしめて、自づから和すと。

(二)敕勒の川、(三)陰山の下。天は(四)穹廬に似て、(五)四野を(六)籠蓋す。(七)天蒼蒼として、(八)野茫茫たり。風吹き草低れて牛羊を見る。

莽莽として來り、自然に高古、藻人の遺響なり。

(一)雜曲の歌辭なり　(二)陰山の北に在り、其地を流るゝ川也　(三)朔北の塞外に在り　(四)丸天井の家をいふ　(五)四面の平野なり　(六)掩ひ籠むるをいふ　(七)天の色なり　(八)野の廣きをいふ

(一)童謠

北史の齊の本紀に、後魏の末、文宣未だ禪を受けざる時、童謠あり、羹を按じて兩頭を然すと。文に于いて高と爲す。河邊の羖䍽は、水邊の羊にして、帝の名也。

(六) 番卒なり孟嘗君が柔を脱せし故事に據る (七) 飾りし劍の光あるをいふ (八) 月明りに新らしき刀を認むるをいふ (九) 註を看よ

馮淑妃(一)

琵琶の絃に感ず

雖レ蒙ニ今日寵一。
猶憶ニ昔時憐一。
欲レ知ニ心斷絶一。
應レ看ニ膝上絃一。

本と齊の後主の后にして、周師の獲る所と爲り、以て代王達に賜ひ、王に侍して琵琶を彈ずるとき、絃の斷つに因りて詩を作る。

今日の寵(二)を蒙ると雖ども、猶ほ昔時の憐(三)を憶ふ。心の斷絶を知らんと欲せば、應に膝上の絃を看るべし。

(一) 名は小憐、慧黠にして歌舞に工なり後主之に惑ひ立てゝ左皇后と爲す (二) 代王の寵愛を身に受くるをいふ

(三) 後主の愛情を忘れざるをいふ

斛律金

劒去襄城水。
未獲殉陵墓。
獨生良足恥。
慨慨思舊都。
惻惻懷君子。
白髮窺明鏡。
憂傷沒餘齒。

俠客重艱辛。
夜出小平津。
馬色迷關吏。
雞鳴起戍人。
露鮮華劒彩。
月照寶刀新。
問我將何去。
北海就孫賓。

紫色の靈芝（植物の名）〔一〇〕綠色の芷、かちもち香草）〔一一〕吳の闔閭の爲めに破られしをいふ〔一二〕簴卽鐘を懸くる璧の九龍を刻めるもの、下の千里に對する爲に之を用ふ〔一三〕秦と戰ひて千里の地を割き與へたるをいふ〔一四〕和氏の璧をいふ〔一五〕趙の都に在り〔一六〕張華の得たる劒〔一七〕楚の地名〔一八〕殉死する事〔一九〕獨り生存すること〔二〇〕憐む貌〔二一〕後梁の都、江陵也〔二二〕物をいたむ形容〔二三〕梁主を斥す〔二四〕餘生なり〔二五〕消滅の意、憂傷の爲に殘年を全うし難からんの意

周より齊に入るとき、夜、砥柱を度る〔一〕

俠客〔二〕重ねて艱辛〔三〕し、夜小平津〔四〕を出づ。馬色關吏〔五〕を迷はし、雞鳴戍人〔六〕を起す。露は鮮なり華劒〔七〕の彩、月は照す寶刀〔八〕の新。我に問ふ將に何れに去らんとすと、北海、孫賓〔九〕に就く。

後漢書に、中常侍唐衡の兄唐玹、盡く趙岐の家屬を殺さんとす。岐、難を江湖の間に逃れ、名を賣餅に匿す。時に孫嵩、岐の常人に非ざるを察して曰く、我は北海の孫賓碩なりと。因つて岐を複壁の中に藏すこと數年、諸唐後滅び、岐、赦に因りて乃ち免ぜらる。

〔一〕河中にある山の名〔二〕男達の人、之推自から謂ふ〔三〕艱難辛苦の意〔四〕地の名〔五〕關所の役人なり

十五好詩書。
二十彈冠仕。
楚王賜顏色。
出入章華裏。
作賦凌屈原。
讀書誇左史。
數從明月讌。
或侍朝雲祀。
登山摘紫芝。
泛江採綠芷。
歌舞未終曲。
風塵暗天起。
吳師破九龍。
秦兵割千里。
狐兔穴宗廟。
霜露沾朝市。
璧入邯鄲宮。

古意

十五詩書を好み、二十冠を彈じて仕ふ。楚王顏色を賜ひ、出入す章華の裏。賦を作りて屈原を凌ぎ、書を讀みて左史に誇る。數〻明月の讌に從ひ、或は朝雲の祀に侍す。山に登りて紫芝を摘み、江に泛びて綠芷を採る。歌舞未だ曲を終へず、風塵天を暗くして起る、吳師九龍を破り、秦兵千里を割く。狐兎、宗廟に穴づくり、霜露、朝市を沾す。璧は邯鄲の宮に入り、劍は襄城の水に去る。未だ陵墓に殉するを獲ず、獨生良に恥づるに足る。憫憫として舊都を思ひ、惻惻として君子を懷ふ。白髮、明鏡を窺へば、憂傷、餘齒を沒す。

直に中懷を述べ、轉た古質を見る。

㊀ 字は介、瑯琊臨沂の人なり、梁の元帝に事ふ梁亡びて周に入り御史上士と爲り隋の時太子召して文學と爲す
㊁ 詩經と書經となり ㊂ 塵を拂ふ意 ㊃ 溫顏を以て接するをいふ ㊄ 楚宮の名 ㊅ 楚王の臣、懷沙の賦又辭を作る ㊆ 行を記する史官こゝにては倚相を斥す也 ㊇ 宋玉賦中に見ゆ巫峽の神女を祭りたる廟也 ㊈

麗藻蔚ニ緣情一。
自嗤非ニ照乘一。
何以繼ニ連城一。

清波收レ潦日。
華林鳴レ籟初。
芙蓉露下落。
楊柳月中疎。
燕幃湘綺被。
趙帶流黃裾。
相思阻ニ音息一。
結レ夢感ニ離居一。

香なり　一四　段段に積み重ねたる樣を云ふ　一五　蔚なり　一六　水の落下すること　一七　威儀ある三公を指す台は三台とて星の名なり取りて三公の意に用ふ　一八　雄大なる思想をいふ　一九　きれいなる文思をいふ　二〇　佛の意味なり　二一　夜光の珠なり車の前後十二乘を照す義　二二　和氏の璧なり十五城を以て之に換ふべき價ありとの意我詩才の到底及ばざるを言ふ也

秋思

清波潦(一)を收むるの日、華林籟(二)を鳴らすの初。芙蓉露下に落ち、楊柳月中に疎なり。燕幃(三)湘綺(四)の被、趙帶(五)流黃(六)の裾。相思(七)、音息(八)阻たり、夢を結びて離居に感ず。

芙蓉の一聯、雕琢に從はずして得。自づから是れ佳句なり。

一　雨水なり　二　すべて物の音響をいふ　三　燕女の居る所の幃(とばり)なり(燕は美人の產地)　四　淺黄のかとりの衾(ふすま)　五　趙姬の圍む所の帶なり(趙も美人の產地)　六　あやぎぬの裾(もすそ)　七　情人の事　八　音信消息の意

(一)顏之推

擁レ仗返二皇州一。

(一)武帝を指す (二)地の名 (三)車輪の止め木をいふ (四)之 外すこと、即出發するをいふ (五)祭場なり (六)石だゝみの道なり (七)蓋し郷を指すならん (八)北邊の道路をいふ (九)すみわたれる警蹕(さきばらひ)の聲 (一〇)旒は旗のたれなり (一一)一年有餘の意 (一二)巡狩省察すること (一三)儀仗なり (一四)左右につきそふこと (一五)帝都即長安なり

崔侍中が駕に從つて山寺を經るに和す

鉤陳夜警徹。
河漢曉參横。
游騎騰二文馬一。
前驅轉二翠旌一。
野禽喧二曙色一。
山樹動二秋聲一。
雲表金輪見。
巖端畫栱明。
塔疑二從レ地湧一。
蓋似二積レ香成一。
泉高下溜急。
松古上枝平。
儀台多二壯思一。

鉤陳(一)、夜警徹り、河漢(二)、曉參(三)横はる。游騎(四)、文馬(五)騰け(六)、前驅(七)、翠旌を轉ず。野禽(八)、曙色に喧しく、山樹秋聲動く。(九)雲表、(一〇)金輪見はれ、巖端、畫栱(一一)明なり。塔は地より湧くかと疑はれ、(一二)蓋は香を積みて成るに似たり。(一三)(一四)泉高くして下溜急に、(一五)(一六)松古くして上枝平なり。儀台、(一七)壯思多く、(一八)麗藻、(一九)緣情(二〇)蔚なり。自から嗤ふ照乘に非ざるを、(二一)何を以て連城に繼がん。(二二)

(一)星の名、宮衞の象この星座に似たり故にこゝは直に警衞を指す (二)銀河なり (三)曉天に見ゆるからすき星をいふ (四)列外の騎兵なり (五)うつくしき馬をいふ (六)足を踊らすこと (七)先手の兵をいふ (八)夜明のけしき也 (九)雲の上をいふ (一〇)朝日なり (一一)彩色せる柱上のますがた (一二)山寺の屋根なり (一三)嫌り

歸路白雲深。
遲暮難レ爲レ別。
搖落更傷レ心。
空城落日影。
廻池浮雲陰。
送レ君自有レ涙。
不レ假レ聽二猿吟一。

城、落日の影、(七)廻池、浮雲の陰。君を送れば自づから涙あり、(八)猿吟を聽くを假らず。

翻し得て新なり。

(一)後主の時祖珽楊訓と同じく、修文御覽を撰す (二)初め隋に仕へ後に唐に仕ふ (三)羽林騎なり卽ち近衛兵をいふ (四)晩年なり (五)木葉の搖ぎ落つるをいふ (六)荒れたる城なり (七)めぐりたる池 (八)猿聲なり

蕭愨

上、回に之く (一)(二)

發レ軔城西時。
回レ輿事二北遊一。
山寒石道凍。
葉下故宮秋。
朔路傳二淸警一。
邊風卷二畫旒一。
歲餘巡省畢。

軔を發す城西の時、(五)輿を回して北遊を事とす。山寒くして石道凍り、(六)葉下りて(三)(四)故宮秋なり。(七)朔路淸警を傳へ、(八)(九)邊風畫旒を卷く。(一〇)歲餘巡省し畢り、(一一)(一二)仗に擁せら(一三)(一四)れて皇州に返る。(一五)

聲律倶に諧ふ、唐韻中の佳なる者なり。

昔日驅二駟馬一。
謁レ帝長楊宮。
旌懸二白雲外一。
騎獵二紅塵中一。
今來向二漳浦一。
素蓋轉二悲風一。
榮華與二歌笑一。
萬里盡成レ空。

舊宅青山遠。

（一）祖珽　挽歌

昔日（二）駟馬を驅り、帝に謁す（三）長楊宮。（四）旌は白雲の外に懸け、騎は紅塵の中に獵り す。今來りて（五）漳浦に向へば、（六）素蓋悲風に轉ず。榮華と歌笑と、萬里盡く（七）空と成る。

（一）柩をひく時にうたふ歌なり　（二）四頭立の馬車也　（三）宮の名　（四）はた也　（五）地の名　（六）白色の車のきぬがさをいふ　（七）榮華や歌笑や影も形もなくなるをいふ

（一）鄭公超

（二）庾（三）羽騎抱を送る

舊宅青山遠く、歸路白雲深し。（四）遲暮別を爲し難く、（五）搖落更に心を傷ましむ。（六）空

李波小妹字雍容。褰裙逐馬如卷蓬。左射右射必疊雙。婦女尚如此。男子安可逢。

李波の小妹字は雍容、裙を褰け(一)馬を逐ふこと蓬を卷くが(二)如し。左に射、右に射必ず雙を疊ぬ(三)。婦女だも尚此の如し、(四)男子安んぞ逢ふ可けんや。

(一)衣のすそをかゝぐるをいふ　(二)風のよもぎを巻き上ぐるが如く其勢の迅きをいふ　(三)一匹にあらずして一對二對と重ぬるをいふ　(四)李波を指す

(一)北齊詩

刑邵

公子を思ふ

綺羅日減帶。桃李無顏色。思君君未歸。歸來豈相識。

綺羅(二)日に帶を減じ(三)、桃李(四)顏色無し(五)。君を思へども君未だ歸らず、歸り來るとも豈に相識らんや(六)。

(一)南北朝時代の一國也　(二)あや絹や薄絹の着物を着用すること　(三)からだの瘦せゆくこと　(四)桃李の如くうつくしき容貌をいふ　(五)衰へて見る影もなしと也　(六)見忘れんとの意

可レ憐咸陽王。
奈何作レ事誤。
金牀玉几不レ
能レ眠。夜踏二霜
與一レ露。洛水湛
湛彌レ岸長。行
人那得レ渡。

咸陽王の歌

北史に、後魏の咸陽王禧、逆を謀りて誅に伏す。後に宮人之が歌を作り、其歌、江表に流る。北人南に在る者、弦管もて之を奏す、泣下らざるもの莫し。

憐む可し咸陽王、奈何ぞ事を作すの誤れる。(一)金牀(二)玉几も眠ること能はず、夜、霜と露とを踏む。洛水湛湛として(三)岸を彌へて(四)長く、行人那ぞ渡ることを得ん。(五)

宮人女子に愧づること多し矣。深情出すに婉節を以てし、自づから能く人を動かす。一時文人の詩、淺率にして味無く、

(一) 黄金の寢床なり　(二) 白玉のおしまづきなり　(三) 水湛ふる貌　(四) 向ふ岸につゞくないふ　(五) 咸陽王を斥す

李波が小妹の歌

魏書に、廣平の人李波は、宗族强盛にして、殘掠已まず。百姓之が爲に語りて云云す。刺史李安世、波等を誘ひて之を殺せしかば、州内肅然たり。

陽春二三月。楊柳齊作レ花。春風一夜入ニ閨闥一。楊花飄蕩落ニ南家一。含レ情出レ戸脚無レ力。拾ニ得楊花一涙沾レ臆。春去秋來雙燕子。願銜ニ楊花一入ニ窠裏一。

楊白花

梁書に、楊華少くして勇力あり、容貌雄偉なり。(一)魏太后之に逼迫す。華、禍に及ばんことを懼れ、其部曲を率ゐて、梁に降る。太后之を思ひ、爲に楊白花の歌を作り、宮人をして臂を連ね足を蹋みて之を歌はしむ。聲甚だ悽惋なり。

(二)陽春二三月、楊柳齊しく花を作す。春風一夜閨闥(三)に入り、楊花飄蕩(四)して南家(五)に落つ。情を含みて戸を出づれば脚に力なく、楊花を拾ひ得て涙、臆(六)を沾す。春去り秋來る雙燕子(七)、願はくば楊花を銜みて窠裏(八)に入れ。

音韻纏綿として、讀者に其穢褻を忘れしむ。後人此題を作る、意に楊花を賦して、其旨失ふ矣。柳子厚の一篇、隱すが若く、露はすが若く、劇だ佳なり。

(一) 所謂武靈后をいふ安定臨淄の人なり (二) 陽氣の春をいふ (三) 宮中の小門なり (四) ひら〳〵と散る樣をいふ (五) 梁朝は南に在り故に云ふ (六) 胸の事なり (七) 一雙のつばくろめをいふ (八) 巣の中なり卽ち閨闥を指す

羣犬吠ニ新客一。佞暗排ニ疎賓一。直途既已塞。曲路非レ所レ遵。望レ衛惋ニ祝鮀一。盼レ楚悼ニ靈均一。何用レ宣ニ憂懷一。託レ翰寄ニ輔仁一。

陳伯達に示す

北史に、叟、沮渠牧犍に入る。牧犍之を遇すること重からず。乃ち詩を爲りて伯達に示すと云ふ。

羣犬新客を吠え、(一)佞暗(二)疎賓を(三)排す。(四)直途は既に已に塞る、(五)曲路は遵ふ所に非ず。衛を望んで(六)祝鮀を惋き、楚を盼みて(七)靈均を悼む。何ぞ憂懷を宣ぶるを用ひん、(八)翰に託して(九)輔仁に寄す。

輔仁は是れ康樂一種の用法、其詞太直なり。北朝に在りて其風格を取る。

(一) 口才ありて、暗愚なるをいふ (二) 緣故の少き賓客、自ら謂ふ (三) 排斥する意 (四) 正直なる道なり (五) 邪曲なる道なり (六) 佞才あり衛公の寵臣なり (七) 屈原の字なり、楚の懷王讒を以て之を斥けたり (八) 筆の事也 (九) 友人の事也論語に友を以て仁を輔くとあり

胡太后

天臨肅ニ淸蹕一。伊臣從ニ下列一。逢レ恩信多レ幸。康衢雖ニ已泰一。弱力將安騁。

長安城中秋夜長。佳人錦石擣ニ流黃一。香杵紋砧知ニ近遠一。傳レ聲遞レ響何淒涼。七夕長河爛。中秋明月光。蟋蟀塞邊逢ニ候雁一。鴛鴦樓上望ニ天狼一。

こと（一一）齊しからざる貌（一二）漢の宮門の名（一三）梧桐樹下の井なり（一四）かすけき貌（一五）身にしむ貌（一六）行幸をいふ（一七）鈴のつけるはたなり（一八）行幸なり（一九）前拂の制止のおごそかなるをいふ（二〇）最下の御供つきとなること（二一）四通八達の大道なりむかし堯の時康衢に太平を謡ひし者あり（二二）自箇の力の微弱なる、馳驅の任に當らざるをいふ

衣を擣つ

長安の城中秋夜長く、佳人錦石（一）流黃（二）を擣つ。香杵（三）紋砧（四）近遠（五）を知り、聲を傳へ響を遞る何ぞ淒涼（六）たる。七夕（七）長河爛き、中秋（八）明月光る。蟋蟀（九）塞邊候雁（一〇）に逢ひ、鴛鴦樓上天狼（一一）を望む。

直に是れ唐人なり。

（一）立派なる石なり（二）綾絹（あやぎぬ）なり（三）うつに用ふるもの（四）模様ある石にて作りたるきぬたなり（五）音響の遠近が手に取る如く分明なるをいふ（六）物淋しく感ぜらるゝをいふ（七）長き銀河なり（八）陰暦の八月十五日也（九）荊州に在り（一〇）時候に應じて去來する雁なり（一一）星の名

胡　叟

玆城實佳麗。
飛甍自相竝。
膠葛擁行風。
岧嶢閡流景。
御溝屬淸洛。
馳道通丹屛。
湛淡水成文。
參差樹交影。
長門久已閉。
離宮一何靜。
細草緣玉階。
高枝蔭桐井。
微微夕渚暗。
肅肅暮風冷。
神行揚翠旌。

溫子昇（一）

駕の金墉城に幸するに從ふ（二）

玆城（三）實に佳麗、飛甍（四）自づから相竝ぶ。膠葛（五）行風を擁し、岧嶢（六）流景（七）を閡づ。御溝（八）淸洛に屬き、馳道丹屛（九）に通ず。湛淡（一〇）として水、文を成し、參差（一一）として樹、影を交ふ。長門（一二）久しく已に閉す、離宮一に何ぞ靜なる。細草玉階に緣り、高枝桐井（一三）を蔭ふ。微微（一四）として夕渚暗く、肅肅（一五）として暮風冷なり。神行（一六）、翠旌を揚げ、天臨（一七）、淸蹕（一八）を肅む。伊臣、下列に從ひ、恩に逢うて信に幸多し（一九）。康衢（二〇）已に泰なりと雖ども、弱力（二一）將た安くに騁せん。

略ゝ三謝の體なり。

（一）字は鵬擧、太原の人也　（二）車駕なり卽ち北魏の天子を指す　（三）金墉城を指す　（四）高きいらかをいふ　（五）上淸の氣なり　（六）山高き貌　（七）移る日影をいふ　（八）洛水なり　（九）赤き墻の中を通ずる也　（一〇）淡く滿ふる

位結ニ李强舌一。
素尚邁ニ金貞一。
清標陵ニ玉徹一。

(一)名は遵、漢の時の人也成都に於て卜筮し、毎に卦辭に依りて人に敎ふるに信義忠孝を以てす (二)微妙なる言辭なり (三)總括して要領を得るをいふ (四)書は筮を行ふ所以なり (五)敷演すること (六)質素なる志尚なり (七)金よりも固きをいふ (八)清靜なる風格なり (九)玉よりもすき徹るをいふ

揚雄(一)

蜀江導ニ清流一。
揚子挹ニ餘休一。
含レ光絶ニ後彦一。
覃レ思邈ニ前修一。
世輕久不レ賞。
玄談物無レ求。
當レ塗謝ニ權寵一。
置レ酒得ニ閑遊一。

蜀江清流を導き、揚子(二)餘休を挹む。光を含んで後彦(三)を絶ち、思を覃くして前修(四)を邈(五)とす。世輕くして久しく賞せず、玄談(六)、物(七)求むること無し。塗に當りて權寵(八)を謝(九)し、酒を置きて閑遊を得たり。

五君の詠に及ばざる者は、顔作は能く性情を寫すに、此れ只故實を引得するのみなれば也。氣體を以て大方之を收む。

(一)前漢の末の人、王莽に仕へたり (二)休は善なり諸人の遺せしものを汲み取る也 (三)後の賢者を指す (四)前の賢者を指す (五)遙かに隔つること (六)玄妙なる談說なり (七)人なり (八)權勢と寵愛となり (九)辭して受けざる也

王子挺秀質。
逸氣干青雲。
明珠既絶俗。
白鵠信驚羣。
才世苟不合。
遇否途自分。
空枉碧雞命。
徒獻金馬文。

嚴君性沈靜。
立志明霜雪。
味道綜微言。
端書演妙說。
才屈羅仲口。

王子(一)秀質(二)挺んで(三)、逸氣(四)青雲を干す。明珠既に俗を絶ち、白鵠信に羣を驚かす。(五)才世苟も合はず、(六)遇否途自づから分る。空しく碧雞の命を枉げ、徒に金馬の文を獻ず。

漢の宣帝、王褒を遣はして、金馬碧雞の神を祀らしむ。褒中道に卒す、故に空しく枉ぐと曰ひ、徒に獻ずと曰ふと云ふ。

(一) 晉の營陵の人也、其父、文帝の爲に殺されしを以て終身西に向つて坐せざりしといふ (二) 性質の秀でたること (三) 群衆に挺き出づるをいふ (四) もぬけたる氣象也 (五) 才氣と世態とをいふ (六) 時に遇ふと遇はざるとをいふ

嚴(一)君平

嚴君性沈靜に、志を立つること霜雪より明なり。道を味ひて(二)微言を綜べ、(三)書を端しくして妙說を演ぶ。(四)才は羅仲の口を屈し、位は李强の舌を結ぶ。(五)素尚(六)金(七)貞を邁ぎ、清標(八)玉徽を陵ぐ。

長卿有二豔才一。
直致二不羣性一。
鬱若二春煙擧一。
皎如二秋月映一。
遊レ梁雖レ好レ仁。
仕レ漢常稱レ病。
清眞非二我事一。
窮達委二天命一。

常景

司馬相如（一）

北史に、景、門下に淹滯し、歳を積んで至らず。顯官蜀の司馬相如、王褒、嚴君平、揚子雲皆高才ありて、重位なきを以て、乃ち意を託して以て之を讃すと。

長卿豔才（二）あり、直に不羣（三）の性を致す。鬱（四）として春煙の擧るが如く、皎（五）として秋月の映ずるが如し。梁に遊びて仁を好むと雖ども、漢に仕へて常に病（六）と稱す。清眞（七）は我事に非ず、窮達（八）は天命（九）に委す。

（一）字は長卿前漢の人也　（二）うるはしき才能あるをいふ　（三）高く羣類を出づること　（四）盛なる貌　（五）明なる貌　（六）長卿の持病は消渇症なり　（七）濁なく僞なき生活（主として道家の）　（八）志を得るを達といひ志を得ざるを窮といふ　（九）自然の運命として放任し敢へて意に關せざるをいふ

王褒（一）

胡關逐レ望新。
交河擁二塞霧一。
隴日暗二沙塵一。
唯有二孤明月一。
猶能遠送レ人。

白雲滿レ鄣來。
黃塵暗レ天起。
關山四面絕。
故鄉幾千里。

遠く人を送る。
雅音なり。

(一)王昭君の事を詠ぜしもの也 (二)永久の訣別を爲すをいふ (三)親戚賓客 (四)行けば行くほどの意 (五)眺むれば眺むるにつれての意 (六)水の名今直隷河間府に屬す

(一)北魏詩 附

劉昶

斷句

南史に、昶兵敗れて魏に奔る。母妻を棄てゝ、惟だ妾一人を攜ふ。騎馬自づから隨ひ、道に在りて慷慨し、斷句を爲ると。

(二)白雲鄣に滿ち來り、黃塵天を暗うして起る。(三)關山四面絕ゆ、故鄉幾千里ぞ。

(一)南北朝時代の一也 (二)要塞をいふ (三)通路の斷絕するをいふ

鶯啼落二春後一。
雁度在二秋前一。
平生屢二此別一。
腸斷自催レ年。

萬里風煙異。
一鳥忽相驚。
那能對二遠客一。
還作二故鄉聲一。

跨レ鞍今永訣。
垂レ淚別二親賓一。
漢地隨レ行盡。

(一)使命を受くること　(二)春さきより後るゝをいふ　(三)腸のちぎるゝ思ひをする意　(四)自分にて年を取るをいふ

韋鼎(一)

長安にて百舌を聽く

萬里風煙異にして、一鳥忽ち相驚く。(二)那ぞ能く遠客に對し、還つて(三)故鄉の聲を作すぞ。

(一)杜陵の人なり、博く經史に涉り陰陽相術に明なり　(二)不意に啼き出づる意　(三)故鄉にて聞きし聲をいふ

陳昭

昭君の詞(一)

鞍に跨りて今永訣(二)し、涙を垂れて親賓(三)に別る。漢地(四)行くに隨つて盡き、胡關望(五)みを逐うて新なり。交河(六)塞霧擁し、隴日沙塵暗し。唯だ孤明の月あり、猶ほ能く

流彩映レ山斜。
暈逐ニ連城壁一。
輪隨ニ出塞車一。
唐蓂遙合レ影。
秦桂遠分レ花。
欲レ驗ニ盈虛駛一。
方知ニ道路賒一。

出レ關登ニ隴坂一。
回レ首望ニ秦川一。
絳水通ニ西晉一。
機橋指ニ北燕一。
奔流下激レ石。
古木上參レ天。

隨ふ。(五)唐蓂遙に影を合せ、(六)秦桂遠く花を分つ。(七)盈虛の駛きを驗せんと欲し、方に道路の賒なるを知る。

秦、桂林を置く。言ふこゝろは、桂林の花、遠く月中より分るゝ也。

(一)月光なり　(二)四方に放射する光彩をいふ　(三)月暈即月の陰也　(四)月輪即ち月の圓也　(五)帝堯陶唐氏の時に生じたる蓂莢といふ草なりこよみ草と訓ず　(六)註を看よ　(七)月の滿ちたり虧けたりすること

何胥

(一)使を被りて關を出づ

關を出でて隴坂に登り、首を回らして秦川を望む。絳水西晉を通じ、機橋北燕を指す。奔流下、石に激し、古木上、天に參す。鶯啼くは(二)春後に落ち、雁度るは秋前に在り。平生此別を屢〻し、(三)腸斷えて(四)自づから年を催す。

鶯啼くの一聯、極めて風景の異なるを言ふ。

千。願君關山
及ㇾ早度。照二妾
桃李片時妍一。

征途愁轉ㇾ旆。
連騎慘停ㇾ鑣。
朔氣凌二疎木一。
江風送二上潮一。
青雀離帆遠。
朱鳶別路遙。
唯有二當ㇾ秋月一。
夜夜上二河橋一。

巖間度二月華一。

(一) 暫時の美色(桃李の如き)を照し見よとなり

張正見

秋日庚正員に別る

征途愁へて旆(一)を轉じ、(二)連騎慘みて鑣(三)を停む。(四)朔氣疎木を凌ぎ、江風上潮(五)を送る。青雀離帆遠く、(六)朱鳶別路遙なり。唯だ秋に當る月あり、夜夜河橋に上る。

好句に遇ふこと十分ならず。卑弱なる者亦便ち收入す。詩を鈔する者此に至り、眼界放下することと幾許ぞ矣。

(一) はたなり　(二) 列をなせる騎兵をいふ　(三) くつわづちなり　(四) 北地の寒氣をいふ　(五) あげ潮なり　(六) 赤色の鳶(とび)をいふ　(七) 此の秋月を見んとて橋に上るをいふ、言外に友を思ふ情あり

關山月

(一)巖間月華度り、(二)流彩山に映じて斜なり。(三)暈は連城の璧を逐ひ、(四)輪は出塞の車に

黄泉雖㆑抱㆑恨。
白日自留㆑名。
悲君感㆑義死。
不㆑作㆓負㆑恩生㆒。

寂寂青樓大
道邊。紛紛白
雪綺窗前。池
上鴛鴦不㆓獨
自㆒。帳中蘇合
還空然。屏風
有㆑意障㆓明月㆒。
燈火無㆑情照㆓
獨眠㆒。遼西水
凍春應㆑少。薊
北鴻來路幾

（一）黄泉恨を抱くと雖ども、白日（二）自づから名を留む。悲む君が義に感じて死し、恩に負きて生くることを作さざるを。

自づから汙すことを嫌はず、眞情憫む可し。

（一）黄泉の在る地下なり　（二）天日の照す地上なり

（一）閨怨の篇

（二）寂寂たる青樓（三）大道の邊、紛紛（四）たる白雪綺窗（五）の前。池上の鴛鴦（六）獨自（七）ならず、帳中の蘇合（八）還つて空然（九）。屏風意ありて明月を障り、燈火情無くして獨眠を照す。遼西水凍りて春應に少なるべし。薊北鴻來る路幾千。願はくば君關山（一〇）、早きに及びて度り、妾が桃李片時（一一）の妍を照せ。

竟に唐律に似たり、稍降らば則ち塡詞と爲らん矣。學者當に其漸を防ぐべし。

（一）篇も亦歌也　（二）淋しき貌　（三）娼家なり　（四）多き貌　（五）あやぎぬのとばりを垂れたるまどをいふ　（六）をしどりなり　（七）孤獨ならざるをいふ　（八）香の名　（九）何にも無きこと　（一〇）なるべく早く歸り來れとの意

五月度羊腸。
本畏車輪折。
翻嗟馬骨傷。
驚風起朔雁。
落照盡胡桑。
關山定何許。
徒御慘悲涼。
心逐南雲逝。
形隨北雁來。
故鄕籬下菊。
今日幾花開。

傷ふを嘆く。驚風(三)朔雁(四)を起し、落照胡桑(五)に盡く。關山定めて何の許ぞ、徒御(六)慘として悲涼(七)なり。

(一)孟春、仲春、季春をいふ　(二)建康を指す　(三)おそろしき風なり　(四)朔北の雁をいふ　(五)胡地の桑なり　(六)徒歩にて行く者も馬車にて行く者もといふ意　(七)さびしくかなしき趣が起る也

長安より楊州に歸還するとき、九月九日微山亭に行きて賦せる韻

心、南雲を逐うて逝き、形(一)、北雁に隨つて來る。故鄕籬下の菊、今日幾花か開く。

(一)身體なり

魯廣達を哭す

韓擒虎の爲に執へられて害に遇へる者なり。

紅顔辭二鞏洛一。
白首入二轘轅一。
乘レ春行二故里一。
徐歩采二芳蓀一。
逕毀悲二求仲一。
林殘憶二巨源一。
見レ桐猶識レ井。
看レ柳尚知レ門。
花落空難レ遍。
鶯啼靜易レ諠。
無三人訪二語默一。
何處敍二寒温一。
百年獨如レ此。
傷心豈復論。
三春別二帝鄕一。

隋に入りて後、南に還るの作なり。

紅顔鞏洛(一)を辭し、白首轘轅(二)に入る。春に乘じて故里(三)を行き、徐に歩して芳蓀(四)を采る。逕毀たれて求仲(五)を悲み、林殘はれて巨源(六)を憶ふ。桐を見ては猶ほ井を識り、柳を看ては尚ほ門を知る。花落ちて空、遍かり難く、鶯啼きて靜、諠かり易し。人の語默(七)を訪ふ無く、何の處にか寒温(八)を敍(九)せん。百年獨り此の如し、傷心豈に復た論ぜんや。

㊀ 二水の名　㊁ 地の名、今の河南省に在り　㊂ 考城を謂ふ　㊃ 花あやめなり　㊄ 求仲は前漢の末の人也、蔣詡の舍中の三逕、惟だ羊仲と求仲とのみ之に從つて遊べりといふ此句之を用ふ　㊅ 晉人山濤の字なり後阮籍に遇うて竹林の交を爲せり此句之を用ふ　㊆ 語り又默することと轉じて消息の義に用ふ　㊇ 時候の挨拶なり　㊈ 述ぶること

并州の羊腸坂

(一)三春帝(二)鄕に別れ、五月羊腸を度る。本、車輪の折るゝを畏れ、翻つて馬骨の

石瀨乍深淺。
崖煙遞有無。
缺碑横二古隧一。
盤木臥二荒塗一。
行行備二履歷一。
步步憐二威紆一。
高僧迹共遠。
勝地心相符。
樵隱各有レ得。
丹青獨不レ渝。
遺風佇二芳桂一。
比德喩二生芻一。
寄レ言長往客。
淒然傷二鄙夫一。

む。

丹青獨り渝らずとは、寺僧猶ほ朗詮二師、居士明紹、治中蕭彌の塑像圖を有するをいふ。

○薄か清氣あり、急に當に收入すべし。○總持、更に攝山に遊ぶ詩あり、中に云はく、荷衣林泉を步し、麥氣昏曉に凉しと。亦佳句なり。

一 清らかなる信心をいふ 二 老年なり 三 日落つる時、光は尙桑楡（くは、にれ）の上に留まる、故に借りて西方の稱と爲す 四 死期の近まることをいふ 五 波起つ川なり 六 名利物慾に拘束せらるゝをいふ 七 時節といはんが如し 八 採るべきは採り穫るべきは穫ること 九 冬の終期なり 一〇 草木の間違なく枯落するをいふ 一一 八功德水なり、澄淨、清冷、甘美、輕輭、潤澤、安和、除患、增益の八德を具へたる水をいふ 一二 四種道なり加行道、無間道、解脫道、勝進道の四者をいふ 一三 攝山のこと 一四 靈妙不可思議の氣象の集合せるをいふ 一五 缺けたる石碑なり 一六 故き墓道なり 一七 根のぐる〳〵曲れる木 一八 荒れたる道 一九 人の通りし跡をいふ 二〇 字義未詳 二一 境と心と一致すること 二二 樵夫と隱士とをいふ 二三 樵夫は薪を得隱士は道を得る也 二四 畫像を指す 二五 相ならびたる德をいふ 二六 僧の事を苾芻といふ釋氏要覽に曰く苾芻は西天の草の名なり、五德を具ふ故に將つて出家人に喩ふと 二七 往いて歸らざる人卽死者なり 二八 小人なり自から

問ふ

南に還りて草市の宅を尋ぬ

南冠獨不歸。
去雲目徒送。
離琴手自揮。
秋蓬失處所。
春草屢芳菲。
太息關山月。
風塵客子衣。

り。(七)太息す關山の月、風塵客子の衣。

(一) 字は總持、濟陽考城の人なり多く艷詞を作り陳暄、弘範等十餘人と號して狎客と爲せり (二) 郡の名 (三) 北風に嘶く胡馬ありといひて故郷を懷ふ情なかるべからざるをほのめかす也 (四) 陳は今江南に都す、故にこゝに仕官するものを南冠といへるなり (五) 風に吹きちぎられて所所に迷ふをいふ (六) 春にあうて花を開くをいふ (七) 浮世の塵に、我身の汚さるゝを關山の月に對して太息せざるを得ずと也

攝山の棲霞寺に入る

淨心抱氷雪。
暮齒逼桑楡。
太息波川迅。
悲哉人世拘。
歲華皆採穫。
冬晚共嚴枯。
濯流濟八水。
開襟入四衢。
茲山靈妙合。
當與天地倶。

(一)淨心氷雪を抱き、(二)暮齒桑楡に逼る。(三)(四)太息す波川の迅きを、(五)悲しい哉人世の拘はるゝこと。(六)(七)歲華皆採穫し、(八)冬晚共に嚴枯す。(九)(一〇)流に濯うて八水を濟り、(一一)襟を開きて四衢に入る。(一二)茲山靈妙合し、(一三)(一四)當に天地と倶なるべし。石瀨乍ち深淺、崖煙遞に有無。(一五)缺碑古隧に横はり、(一六)(一七)盤木荒塗に臥す。(一八)行行履歷を備へ、(一九)步步威紆を憐む。(二〇)高僧迹共に遠く、勝地心相符す。(二一)(二二)樵隱各〻得ること有り、(二三)丹青獨り渝らず。(二四)遺風芳桂を佇ち、(二五)比德生芻に喩ふ。(二六)言を寄す長往の客、(二七)淒然として鄙夫を傷まし(二八)

四時易二荏苒一。百齡倏將レ半。故老多零落。山僧盡凋散。宿樹倒爲レ查。舊水侵成レ岸。幽尋屬二令弟一。依然歸二舊館一。感レ物自多レ傷。況乃春鶯亂。

四時荏苒たり易く、百齡倏として將に半ならんとす。故老多くは零落し、山僧盡く凋散す。宿樹倒れて查と爲り、舊水侵して岸を成す。幽尋して令弟に屬ひ、依然として舊館に歸る。物に感じて自づから傷むこと多し、況んや乃ち春鶯の亂るゝをや。

(一)字は思行、汝南、安城の人なり梁の時國子博士と爲り陳に入りて侍中より左僕射に至る (二)隱士に伺レ郎ッ周弘讓をいふ (三)日月の進み去る貌 (四)急忽の意 (五)おちぶるゝこと、こゝにては死亡の義と爲すも可なり (六)しぼみちること、草木に喩へて人の死ぬるをいふ也 (七)むかし見し所の樹をいふ (八)いかだなり (九)土壊(つちくれ)を侵蝕すること (一〇)弟に對する美稱なり (一一)變ぜざる貌 (一二)以前の我が住家をいふ (一三)無聞矢鱈に鳴くなり

江總

長安の使に遇ひ、裴尚書に寄す

傳聞合浦葉。遠向二洛陽一飛。北風尙嘶馬。

傳へ聞く合浦の葉、遠く洛陽に向つて飛ぶと。北風尙ほ嘶馬あり、南冠獨り歸らず。去雲日徒に送り、離琴手自づから揮ふ。秋蓬處所を失ひ、春草屢〻芳菲あ

行行訪二名嶽一。處處必留連。遂至二一巖裏一。灌木上參レ天。忽見茅茨屋。曖曖有二人煙一。一士開レ門出。一士呼レ我前。相看不レ道レ姓。焉知二隱與一レ僊。

(一)周弘讓

留めて山中の隱士に贈る(二)

行き行きて名嶽(三)を訪ひ、處處必ず留連(四)す。遂に一の巖裏に至れば、灌木(五)上、天に參す(六)。忽ち見る茅茨(七)の屋、曖曖(八)として人煙あるを。一士門を開いて出で、一士我を呼びて前む。相看て姓を道はず、焉んぞ隱(九)と僊(一〇)とを知らん。

淸眞、陶詩の一派に似たり。陳隋の時之を得ること大に難し。

(一) 周弘正の弟、初め句曲茅山に隱居したりしが晩年侯景の中書侍郎と爲れり時論之を醜としき (二) 離別の名殘に此詩を贈る (三) 名のある山嶽なり、卽神仙隱者の住む處 (四) 滯留の意 (五) 叢生の木をいふ (六) 天に朝するに同じ、空にとゞくを云ふ (七) 茅葺(かやぶき)のこと (八) 暗き貌 (九) 隱者なり (一〇) 仙人なり

(一)周弘正

草堂に還りて處士の弟を尋ぬ(二)

願子厲二風規一。
歸來振二羽儀一。
嗟余今老病。
此別空長離。
白馬君來哭。
黃泉我詎知。
徒勞脫二寶劍一。
空挂二隴頭枝一。

願はくば子、風規(一)を厲くして、歸來、羽儀(二)を振へ。嗟す余、今老病す、此別空しく長く離れん(三)。白馬(四)君來り哭すとも、黃泉(五)我詎ぞ知らん。徒(六)に勞して寶劍(七)を脫すとも、空しく隴頭(八)の枝に挂けんのみ。

達に似て愈〻悲し、孝穆集中、多く得易からず。

(一) 風紀といはんが如し (二) 易の其羽以て儀と爲すべしより來る、人の儀表となるべく其容を整へよとの意也 (三) 永久の死別となるをいふ (四) 白馬素車とて死者を送るを意味す (五) 冥途をいふ (六) 無駄なる手數をかくるばかりぞといふ意 (七) 吳の季札の故事也 (八) 墓田のほとりなる樹枝なり

關山月

關山三五夜。
客子憶二秦川一。
思婦高樓上。
當レ窗應レ未レ眠。
星旗映二疎勒一。
雲陣上二祁連一。
戰氣今如レ此。
從軍復幾年。

關山三五の夜、客子秦川(一)を懷ふ。思婦(二)高樓の上、窗に當りて應に未だ眠らざるべし。星旗(三)疎勒(四)に映じ、雲陣祁連(五)に上る。戰氣(六)今此の如し、從軍復た幾年ぞ。

(一) 陝西地方なり (二) 夫の遠征を思ふ婦人なり (三) 星の印のつきたる旗なり (四) 西域の名 (五) 西域地方の山の名 (六) 戰爭の氣分なり

薊北聊長望。
黃昏心獨愁。
燕山對二古剎一。
代郡隱二城樓一。
屢戰橋恆斷。
長氷塹不レ流。
天雲如二地陣一。
漢月代二胡秋一。
漬レ土泥二函谷一。
挼レ繩縛二涼州一。
平生燕頷相。
會自得二封侯一。

薊の北門より出づる行（二）

（三）薊北聊か長望すれば、（四）黃昏心獨り愁ふ。燕山古剎（五）に對し、（六）代郡城樓隱る。屢〻戰うて橋恆に斷え、長く氷りて塹流れず。天雲、（七）地陣の如く、（八）漢月、（九）胡秋に代る。（一〇）土を漬して（一一）函谷を泥し、（一二）繩を挼みて（一三）涼州を縛す（一四）。（一五）平生（一六）燕頷の相（一七）、會ず自づから封侯（一八）を得ん。

巧句なり

（一）字は孝穆、東海郯の人なり、陳に仕へて吏部尚書と爲り左僕射國子祭酒に遷る沙門寶誌が天上の石麒麟といひしは是人也（二）歌行卽ち歌也（三）薊は今の北京なり（四）たそがれ時なり（五）古寺なり（六）北京地方をいふ（七）地上の軍陣の如く散列するをいふ（八）漢土の月色をいふ（九）匈奴の秋と更代する意（一〇）土を水にひたしてこねること（一一）關の名（一二）之を塗り塞ぐをいふ卽ち之を守る意（一三）繩をなふこと（一四）州の名今の甘肅省也（一五）しばりくゝること卽ち之を制する意（一六）肥大せる頷（おとがひ）なり漢將・班超は燕頷虎頭の相ありといへり（一七）人相なり（一八）諸侯に封ぜらるゝをいふ

毛永嘉に別る

空軫念二師情一。

鷲嶺春光遍。王城野望通。
登臨情不レ極。蕭散趣無レ窮。
鶯隨入二戸樹一。花逐下二山風一。
棟裏歸雲白。窗外落暉紅。
古石何年臥。枯樹幾春空。
淹留昔未レ及。幽桂在二芳叢一。

(一)鷲嶺春光遍く、(二)王城(三)野望通ず。登臨情極らず、(四)蕭散趣窮り無し。鶯(五)隨ひて(六)戸樹に入り、(七)花逐うて山風に下る。(八)棟裏歸雲白く、窗外(九)落暉紅なり。古石何年臥する、枯樹幾春空しき。(一〇)淹留昔、未だ及ばず、(一一)幽桂芳叢に在り。

詩は陳に至りて、專ぱら琢句を工とす、古詩一綫絶えたり矣。小陵の絶句に云ふ、頗る陰何の共だ苦心するを覺ゆと。又太白に贈りて云ふ、李侯佳句あり、往往陰鏗に似たりと。此れ特に其句を賞し、其格を取るに非ざる也。

(一)靈鷲山をいふ印度に在り晉陽窟山は即是也 (二)王舍城をいふ鷲山の下に在り、皆借用して開善寺附近の光景を描出する也 (三)野外の眺望をいふ (四)靜にしてひまなるをいふ (五)人について來ること (六)戸邊の樹木なり (七)人の後を逐ふこと (八)むなぎのうちをいふ (九)夕日なり (一〇)滯在すること (一一)かんばしきくさむらをいふ

(一)徐陵

依然臨送渚。長望倚河津。鼓聲隨聽絕。帆勢與雲隣。泊處空餘鳥。離亭已散人。林寒正下葉。釣晩欲收綸。如何相背遠。江漢與城闉。

依然(一)として送渚に臨み、長く望みて河津(二)に倚る。鼓聲聽くに隨つて絕え、帆勢(三)雲と隣る。泊處(五)空しく鳥を餘し、離亭(六)已に人を散ず。林寒くして正に葉を下し、釣晩れて綸(七)を收めんと欲す。如何ぞ相背遠(八)する、江漢と城闉(九)とに、

㊀間に合はざるをいふ　㊁別を惜みて去ること能はざる貌　㊂四川省重慶府に在り　㊃去ることの遠きをいふ　㊄舟つき場なり　㊅別れの宿場なり　㊆釣絲なり即釣道具をいふ　㊇はなれて還らざること　㊈城門外の築地(ついぢ)即ち陳の都なる建康を指す

傅郎が歲暮湘州に還るに和す(一)

蒼茫歲欲晩。辛苦客方行。大江靜猶浪。扁舟獨且征。棠枯絳葉盡。蘆凍白花輕。戍人寒不望。沙禽迴未驚。湘波各深淺。

蒼茫(二)として歲晩れんと欲し、辛苦(三)して客方に行く。大江靜にして猶浪だち、扁舟(四)獨り且つ征く。棠(五)枯れて絳葉(六)盡き、蘆凍りて白花輕し。戍人(七)寒くして望まず、沙禽迴にして未だ驚かず。湘波各〻深淺(八)、空しく軫みて歸情を念ふ。

㊀湖南長沙の地なり　㊁眼前の景の蒼茫たるに對して感を起したるなるべし、即ち人生の茫々たる意を含む也　或は之を匆忙の誤と說くもあり　㊂つらき思をすること　㊃小舟なり　㊄あま梨なり　㊅赤き葉なり　㊆番兵をいふ　㊇同一の湘波にして行く者と送る者とによりて其感ずる所に深淺の差あるをいふ

行舟逗遠樹。度鳥息危檣。滔滔不可測。一葦詎能航。

㈢春水の溜りたるもの ㈣鏡の如き湖面をいふ ㈤洞庭湖に流れ入る川の名 ㈥仝上 ㈦やぶ茗荷をいふ或はかきつばたと訓ず ㈧會稽山の禹穴を指すか ㈨揚子江なり ㈩水面に浮べる日光をいふ ⑪遠き樹の動くとも見えざる也 ⑫湖を度る鳥なり ⑬高きはばしらをいふ ⑭廣大瀰漫の貌 ⑮小舟をいふ ⑯舟にて渡り行くこと

廣陵(一)の岸に北使(二)を送る

行人引去節。送客艤歸艫。即是觀濤處。仍爲郊贈衢。汀洲浪已息。邗江路不紆。亭嘶背櫪馬。檣轉向風烏。海上春雲雜。天際晩帆孤。離舟對零雨。別渚望飛鳧。定知能下淚。非但一楊朱。

行人去節(三)を引き、送客歸艫(四)を艤(五)す。即ち是れ濤を觀る處、仍ほ郊贈(六)の衢と爲す。汀洲浪已に息み、邗江路紆(七)ならず。亭は嘶く櫪(八)に背くの馬、檣は轉ず風に向ふの烏。海上春雲雜はり、天際晩帆孤なり。離舟零雨(九)に對し、別渚飛鳧を望む。定めて知る能く涙を下すは、但だ一の楊朱(一〇)のみに非ざるを。

㈠江蘇省に在り ㈡北國の使者なり ㈢節は使者の持つべき者也今去らんとす故にいふ ㈣歸舟なり ㈤舟をよそふこと ㈥郊外贈別の意 ㈦曲折すること ㈧厩の踏み板なり ㈨降雨に同じ ㈩春秋時代に於ける一の哲學者也、楊朱岐に臨みて泣きしことは世人の知る所也

江津に劉光祿を送りて及ばず(一)

洞庭春溜滿。
平湖錦帆張。
沅水桃花色。
湘流杜若香。
穴去二茅山一近。
江連二巫峽一長。
帶レ天澄二迥碧一。
映レ日動二浮光一。

卷十四

(一)陳詩

(二)陰鏗

青草湖を渡る

亦庾信の詩に作る。

洞庭春溜滿ち、(三)平湖錦帆張る。(四)沅水桃花の色、(五)湘流杜若の香。(六)穴、(七)茅山を去ること近く、(八)江、(九)巫峽に連りて長し。天を帶びて迴碧澄み、日に映じて浮光動く。(一〇)行舟遠樹を逗め、(一一)度鳥危檣に息ふ。(一二)(一三)滔滔測る可からず、(一四)一葦詎ぞ能く航せん。(一五)(一六)

(一) 六朝の一にして梁の後を承く (二) 字は子堅、武威姑臧の人なり。五言の詩を善くし當時の重ずる所なり (三)

子履。中央有レ絲兩頭繫。小時憐レ母大憐レ壻。何不三早嫁論二家計一。

憐む、何ぞ早く嫁して家計を論ぜざる。(八)

㈠柘も桑のたぐひ也　㈡木履なり　㈢蒲生(がまふ)なり　㈣くつなり　㈤兩端をいふ　㈥いとしく思ふこと、㈦夫なり　㈧一家の生計なり

戸理二紅妝一。小弟聞二姊來一。磨レ刀霍霍向二猪羊一。開二我東閣門一。坐二我西閣牀一。脱二我戰時袍一。著二我舊時裳一。當レ窓理二雲鬢一。對レ鏡貼二花黄一。出レ門看二火伴一。火伴始驚惶。同行十二年。不レ知木蘭是女郎。雄兎脚撲朔。雌兎眼迷離。兩兎傍レ地走。安能辨二我是雄雌一。

(三〇)に同じ　(三一)木蘭に問ふ也　(三二)駱駝(らくだ)なり　(三三)たすけもつこと　(三四)化粧をすること　(三五)すばやく反復する貌　(三六)ぶたとひつじと也　(三七)寐牀なり　(三八)よろひひたゝれをいふ　(三九)雲の如き髪の毛をいふ　(四〇)黄金の花鈿をいふ　(四一)十人組を一火といふ即ち其組の仲間也　(四二)あわておどろくをいふ　(四三)女丈夫なり　(四四)兎の走りて足をすくめる形容　(四五)兎の眼のぼんやりとする形容

華陰山頭百丈井。下有二流水一。激レ骨冷。可憐女子能照レ影。不レ見二其餘一見二斜領一。

捉搦の歌(一)

華陰山頭の百丈の井、下に流水あり骨に激して冷なり。可憐(二)の女子能く影を照し、其餘(三)を見ず斜領(四)を見る。

(一)捕ふの意父母の養育にとらはるゝをいふ　(二)かはゆらしきをいふ　(三)外の處は見えずとなり　(四)斜なるえりくびだけ見ゆるなり

黄桑柘屐蒲

黄桑柘(一)の屐(二)、蒲子(三)の履(四)、中央絲あり、兩頭(五)繋ぐ。小時母を(六)憐み大にして壻を(七)

喚レ女聲一。但聞ニ燕山胡騎聲啾啾。萬里赴ニ戎機一。關山度若レ飛。朔氣傳ニ金柝一。寒光照ニ鐵衣一。將軍百戰死。壯士十年歸。歸來見ニ天子一。天子坐ニ明堂一。策勳十二轉。賞賜百千彊。可汗問ニ所レ欲。木蘭不レ用尚書郎。願馳千里足。送レ兒還ニ故鄕一。爺孃聞ニ女來一。出レ郭相扶將。阿姊聞ニ妹來一。當レ

り、雌兎眼迷離たり。(四五)兩兎地に傍うて走らば、安んぞ能く我の是れ雄雌なるを辨ぜん。

阿姊妹の來るを聞く、一に阿妹姊の來るを聞くに作る。○事奇に詩奇なり。卑靡の時此を得ること、鳳皇の鳴き、慶雲の見はるゝが如く、之が爲に快絶なり。○唐人韋元甫、木蘭の詩に擬する一篇あり。後人幷せて此篇を以て韋が作と爲すは非也。韋は中唐の人に係る。杜少陵草堂の一篇、後半は全く此詩の章法を用ひたり矣。斷じて梁人の作を以て允と爲す。

(一) 女丈夫の名 (二) 機を織る聲なり (三) 機(はた)の杼(ひ)をいふ (四) 思ひ考ふること (五) 思ひ出すこと (六) 軍隊徵發の書附 (七) 匈奴の王の號也 (八) 點檢すること (九) 卽ち軍帖なり (一〇) 父親をいふ (一一) 足の速なる馬なり (一二) 鞍(くら)と下鞍とをいふ (一三) 頭の字は意義なし、くつわの事也 (一四) 父母をいふ (一五) 水の疾く流るゝ響なり (一六) 黑龍江を指す (一七) 北胡の騎兵をいふ (一八) 胡騎の嘶く聲なり (一九) 戰爭の機に間に合ふべく赴くをいふ (二〇) 關塞以外の山をいふ (二一) 北風なり (二二) 金の拍子木をいふ (二三) 冬の日光なり (二四) 甲冑をいふ (二五) 軍卒なり (二六) 天子が諸侯を朝せしむる所卽朝廷也 (二七) 勳功を竹の札に書きとむること卽ち論功行賞なり (二八) 十二段に優劣を分つこと (二九) 物を賜ふこと (三〇) 餘あること、卽ち以上といふ

昨夜見二軍帖一。
可汗大點レ兵。
軍書十二卷。
卷卷有二爺名一。
阿爺無二大兒一。
木蘭無二長兄一。
願爲市二鞍馬一。
從レ此替レ爺征。
東市買二駿馬一。
西市買二鞍韉一。
南市買二轡頭一。
北市買二長鞭一。
朝辭二爺孃一去。
暮宿二黃河邊一。
不レ聞二爺孃喚レ
女聲一。但聞二黃
河流水鳴濺
濺一。旦辭二黃河一
去。暮至二黑水
頭一。不レ聞二爺孃

買ひ、北市に長鞭を買ふ。朝に爺孃を辭して去り、暮に黃河の邊に宿す。爺孃女を喚ぶの聲を聞かず、但だ黃河の流水鳴りて濺濺たるを聞く。旦に黃河を辭して去り、暮に黑水の頭に至る。爺孃女を喚ぶの聲を聞かず、但だ燕山の胡騎聲啾啾たるを聞く。萬里戎機に赴く、關山度りて飛ぶが若し。朔氣金柝を傳へ、寒光鐵衣を照す。將軍百戰して死し、壯士十年にして歸る。歸來天子に見ゆれば、天子明堂に坐す。策勳十二轉、賞賜百千彊。可汗欲する所を問へば、木蘭用ひず尚書郎。願はくば駝の千里の足、兒を送りて故鄕に還らしめよ。爺孃女の來るを聞き、郭を出でて相扶將す。阿姊妹の來るを聞き、戶に當りて紅妝を理む。小弟、姊の來るを聞き、刀を磨し霍霍として豬羊に向ふ。我が東閣の門を開き、我が西閣の牀に坐し、我が戰時の袍を脫ぎ、我が舊時の裳を著く。窗に當りて雲鬢を理め、鏡に對して花黃を貼し、門を出でて火伴を看れば、火伴始めて驚惶す。同行十二年、知らず木蘭の是れ女郎なるを。雄兎脚撲朔た

不レ解二漢兒歌一。

健兒須二快馬一、
快馬須二健兒一。
跳二跋黃塵下一。
然後別二雄雌一。

喞喞復喞喞。
木蘭當レ戸織。
不レ聞二機杼聲一。
惟聞二女歎息一。
問レ女何所レ思。
問レ女何所レ憶。
女亦無レ所レ思。
女亦無レ所レ憶。

(一)こんもりと茂るをいふ　(二)舞ふ貌　(三)擄と同じかどわかしをいふ支那通有の馬賊なるべし　(四)中國人を指す

健兒、快馬を須ち、快馬、健兒を須つ。黃塵の下に跳跋(一)して、然る後に雄雌(二)を別つ。

(一)跋扈といはんが如し跳り超ゆるをいふ　(二)高下の材を判決するなり

木蘭の詩(一)

喞喞(二)として復た喞喞たり、木蘭戸に當りて織る。機杼(三)の聲を聞かず、惟だ女の歎息を聞くのみ。女に問ふ何の思ふ所ぞ、女に問ふ何の憶(五)ふ所ぞ。女、亦思ふ所無く、女、亦憶ふ所無し。昨夜(六)軍帖(四)を見る、可汗(七)大に兵を點(八)ずと。軍書(九)十二卷、卷卷爺(一〇)の名あり。阿爺、大兒無く、木蘭、長兄無し。願はくば爲に鞍馬を市ひ、此より爺に替りて征かん。東市に駿馬(一一)を買ひ、西市に鞍韉(一二)を買ひ、南市に轡頭(一三)を

喉。

隴頭流水。鳴聲幽咽。遙望二秦川一。心腸斷絶。

上レ馬不レ捉レ鞭。反折二楊柳枝一。蹀レ座吹二長笛一。愁殺行客兒。遙看二孟津河一。楊柳鬱婆娑。我是摘家兒。

奇絶なり。

㊀隴山のほとりをいふ ㊁寒氣の爲に舌の縮み上るをいふ

隴頭の流水、(一)鳴聲(二)幽咽す。遙に秦川を望み、心腸(三)斷絶す。

此章漢辭と同じ。

㊀水の音なり ㊁かすかに咽ぶが如きをいふ ㊂憂悶の甚しき腸のちぎるゝをいふ

折楊柳の歌辭

馬に上りて鞭を捉らず、反つて楊柳の枝を折る。(一)座を蹀みて長笛を吹く、(二)愁殺す行客の兒。

㊀鐙（あぶみ）を蹈むこと ㊁殺の字は意義なし、旅客の心を愁へしむと也

遙に孟津の河を看れば、(一)楊柳鬱として(二)婆娑たり。我は是れ(三)摘家の兒、(四)漢兒の歌を解せず。

官家出遊雷
大鼓。細乘ニ犢
車一開ニ後戸一。
車前女子年
十五。手彈ニ琵
琶一玉節舞。
鉅鹿公主殷
照女。皇帝陛
下萬幾主。
朝發ニ欣城一。暮
宿ニ隴頭一。寒不レ
能レ語。舌卷入レ

鉅鹿公主の歌辭

(一)官家出で遊びて雷大に鼓す、(二)細く(三)犢車に乘りて(四)後戸を開く。

(一)大官運なり　(二)ちよつとの意　(三)子牛のひく車をいふ　(四)裏の戸口なり

車前の女子年十五、手に琵琶を彈じつゝ(一)玉節の舞す。

(一)舞の手振ならんか

鉅鹿公主は殷照の女、皇帝陛下は(一)萬幾の(二)主。

(一)車のきざしが一日に萬ありとの意　(二)萬幾を總裁する君主なり

隴頭の歌辭

朝に欣城を發し、暮に(一)隴頭に宿す。寒くして語ること能はず、(二)舌卷きて喉に入る。

新買二五尺刀一。
懸二著中梁柱一。
一日三摩挲。
劇二于十五女一。
客行依二主人一。
願得二主人彊一。
猛虎依二深山一。
願得二松柏長一。
憎レ馬高纏レ鬃。
遙知身是龍。
誰能騎二此馬一。
惟有二廣平公一。

新に五尺の刀を買ひ、中梁の柱に懸著す。一日三たび摩挲す、十五の女より劇し。

(一)梁の中央を支ふる柱なり　(二)撫でさすること　(三)少女にして最も愛すべき者也

客行、主人に依る、願はくば主人の彊きを得ん。猛虎、深山に依る、願はくば松柏の長きを得ん。

正意前に在り、喩意後に在り、古人往往之れ有り。

(一)身を托する意　(二)豪族などをいふ　(三)松柏の幹長く伸ぶるものは深山の状也

馬を憎みて高く鬃を纏ふ、遙に知る身は是れ龍なるを。誰か能く此馬に騎る、惟だ廣平公あり。

晉書を按ずるに、廣平公姚弼は興の子にして泓の弟也と。

(一)高きもとどりをいふ　(二)註に在り

齊著二鐵鈕鉾一。
男兒可憐蟲。
出レ門懷二死憂一。
尸喪二狹谷中一。
白骨無二人收一。

㊀前に進んで行く者　㊁くろがねの打ちかけを着用するをいふ　㊂くろがねの鉾（ほこ）をいふ

男兒可憐の蟲、門を出づれば死憂を懷く。尸は狹谷の中に喪ふ、白骨人の收むる無し。

同袍同澤の風あり。

㊀あはれむべき蟲なり　㊁死にはせずやと懸念をすること　㊂屍骸なり　㊃せまき谷間をいふ

快馬常苦レ痩。
剿兒常苦レ貧。
黃禾起二贏馬一。
有レ錢始作レ人。

幽州馬客の吟ずる歌辭

快馬常に痩に苦み、剿兒常に貧に苦み、黃禾贏馬を起しめ、錢を有して始めて人と作る。

㊀走ることの早き馬なり　㊁からだのやすること　㊂人の物を掠め取る者　㊃熟したる稻即穀物なり　㊄つかれたる馬なり

瑯琊王の歌辭

男兒欲レ作レ健。
結伴不レ須レ多。
鷂子經レ天飛。
羣雀兩向波。
前行看二後行一。
齊著二鐵裲襠一。
前頭看二後頭一。

（一）頭城の王整が妹、年十六にして敬瑜に嫁す夫亡して父母等之を嫁せしめんと欲せしかど許さず、耳を截りてと爲せり　（二）配偶（つれあひ）をいふ　（三）風雲の行をいふ

企喩歌（一）

以下横吹の笛、乃ち北音也。

男兒健を作さんと欲せば、結伴、多を須ひず。鷂子天を經て飛び、羣雀兩向の波なり。

（一）企業の比喩なり　（二）健全なる事業なり　（三）仲間を結合すること　（四）鷂（たか）なり　（五）兩向に分飛して之を避くること波の分散するが若きをいふ

前行、後行を看るに、齊しく鐵裲襠を著く。前頭、後頭を看るに、齊しく鐵鉦鉾を著く。

功立百行成。
天長地自久。
人道有二虧盈一。
未レ窮二激楚樂一。
已見二高臺傾一。
當レ令三麟閣上。
千載有二雄名一。

昔年無レ偶去。
今春猶獨歸。
故人恩義重。
不レ忍二復雙飛一。

雲の如く集まること 一五 七等の爪牙の士をあつめたるもの 一六 魚の如く列ること 一七 河閒の六郡より徴募せし兵隊 一八 次の羌と共にえびすの一種 一九 前註 二〇 隴山のほとりをいふ 二一 失神するをいふ 二二 玉門關なり 二三 物見の一里塚をいふ 二四 一等の邸宅なり 二五 修理造營すること 二六 庾は野外の粟倉なり 二七 かくることあり又みつることあるをいふ 二八 調子の激しくして而もあざやかなる音樂なり 二九 麒麟閣なり

衞敬瑜の妻王氏

孤燕の詩

南史に、貞女の居る所、戸に巢燕有り、常に雙飛して來去せしに、後忽ち孤飛せり。貞女其の偏棲ならんと感じ、乃ち縷を以て脚に繫ぎて誌と爲す。後歳此燕更に來りて、猶ほ前縷を帶ぶ。女復た詩を爲りて曰く、

昔年偶(一)なくして去り、今春猶ほ獨り歸る。(二)故人(三)恩義重く、復た雙飛するに忍びず。

貞潔の語、出すに和婉を以てす。愈〻能く人を感ぜしむ。

汗馬出長城。長城地勢險。萬里與雲平。涼秋八九月。胡騎入幽幷。飛狐白日晩。瀚海愁雲生。羽書時斷絕。刁斗晝夜驚。乘墉揮寶劍。蔽日引高旍。雲屯七萃士。魚麗六郡兵。胡笳關下思。羌笛隴頭鳴。骨都先自讋。日逐次亡精。玉門罷斥堠。甲第始脩營。位登萬庾積。

なり。涼秋八九月、胡騎幽幷(六)に入る。飛狐(七)白日晩れ、瀚海(八)愁雲生ず。羽書(九)時に斷絕し、刁斗(一〇)晝夜に驚く(一一)。墉(一二)に乘じて寶劍を揮ひ、日を蔽うて高旍(一三)を引く。雲屯(一四)す七萃(一五)の士、魚麗(一六)す六郡(一七)の兵。胡笳(一八)關下に思ひ、羌笛(一九)隴頭(二〇)に鳴る。骨都先づ自から讋れ、日逐(二一)次に精を亡ふ(二二)。玉門(二三)斥堠を罷め、甲第(二四)始めて脩營(二五)す。位登りて萬庾(二六)積み、功立ちて百行成る。天長く地自づから久しきも、人道は虧盈(二七)あり。未だ激楚(二八)の樂を窮めずして、已に高臺の傾くを見る。當に麟閣(二九)の上、千載雄名有らしむべし。

漢書に、匈奴に骨都侯あり、日逐王ありと。○雍門周、孟嘗君に說きて曰く、千秋萬歲の後、高臺既に已に傾き、曲池又已に平ならんと。○纖靡の習の囿する所と爲らず、居然たる傑作なり。

(一) 字は子光、會稽餘姚の人なり、才名あり (二) 名は去病、驃騎將軍と爲る (三) 匈奴を伐つをいふ (四) 旗じるし也竿頭に牛尾を附す (五) 萬里の長城なり (六) 幽州と幷州となり (七) 飛狐谷なり (八) 沙漠なり (九) 羽檄ともいふ急を告ぐる所以也 (一〇) 銅鑼なり (一一) 不意に起るをいふ (一二) 城壁なり (一三) 旗じるし也 (一四)

襟帶盡巖巒。
俯篁壯下矚。
危樓峻上干。
登陴越遐望。
回首見長安。
金溝朝灞滻。
甬道入鴛鸞。
鮮車驚華轂。
汗馬躍銀鞍。
少年負壯氣。
耿介立衝冠。
懷紀燕山石。
思開函谷丸。
豈如灞上戲。
羞取路傍觀。
寄言封侯者。
數奇良可歎。
擁旄爲漢將。

入る。鮮車華轂を驚せ、汗馬銀鞍を躍らす。少年壯氣を負ひ、耿介(一五)立ちて冠を衝く。懷は燕山の石に紀し、思は函谷の丸に開く。豈に如かんや灞上(一六)の戲、路傍(一七)の觀を取るを羞づ。言を寄す封侯の者、數奇良に歎ずべし。

爾時に在りて已に高響たり、

㊀ 宮の名 ㊁ 斥候のあぐる烽火なり ㊂ 郡の名 ㊃ 西域の國の名 ㊄ ひろくしてけはしきをいふ ㊅ 樹木茂りて遠く縈回するをいふ ㊆ 前後といふが如し ㊇ 長き竹なり ㊈ 高き樓なり ㊉ 城の女墻（ひめがき）をいふ 〔一一〕 遠望に同じ 〔一二〕 御河水なり 〔一三〕 二水の名 〔一四〕 馳道の外に牆を築きたるもの也 〔一五〕 固く操を守るをいふ 〔一六〕 漢の文帝の語に灞上の軍は兒戲のみといへり、灞上の軍とは劉禮を斥して之を言ふ也 〔一七〕 運命の不遇をいふ

虞(一)　羲

霍(二)將軍の北(三)伐を詠ず

旄(四)を擁して漢將と爲り、馬に汗して長城(五)を出づ。長城地勢險しく、萬里雲と平か

去時兒女悲。
歸來笳鼓競。
借問行路人。
何如霍去病。

甘泉警烽候。
上谷抵樓蘭。
此江稱豁險。
茲山復鬱盤。
表裏窮形勝。

景宗魏師を破りて凱旋す。帝光華殿に於いて、宴飲聯句す。景宗啓して詩を賦することを求む。時に韻已に盡き、惟だ競病の二字を餘すのみ。景宗筆を操りて成る。帝深く歎賞し、朝賢驚嗟すること累日なりき。

去る時兒女悲み、歸り來るに笳鼓競ふ。(二)借問す行路の人、(三)霍去病に何如と。(四)

(一) 字は子晨、新野の人なり、梁の武帝の時軍に從つて戰功あり郢州の刺史に除せらる (二) 笳音と鼓聲と相競ふをいふ (三) 霍去病は漢の武帝の時の將軍にして五たび出て匈奴を擊ちたり (四) 優劣如何にと問ふ也

徐悱

古意、到長史漑が瑯琊城に登るに酬ゆ

潤州江寧縣の西北十八里に在り。

甘泉(一)烽候(二)を警め、上谷(三)樓蘭(四)に抵る。此江、豁險(五)と稱し、茲山復鬱盤(六)たり。表裏(七)形勝を窮め、襟帶盡く巖巒なり。(八)脩篁壯に下に屬き、危樓峻しく上に干す。(九)陴に登りて越に遐望し、(一〇)(一一)首を回して長安を見る。金溝灞滻に朝し、(一二)(一三)甬道鴛鸞に(一四)

不レ堪ニ持 寄レ君。

即ち獨り寐ね寤めて宿し、永く矢うて告ぐること勿れの意。

㊀字は通明丹陽林陵の人なり、未だ弱冠ならずして諸王の侍讀に任ぜられたれども後祿を辭して句曲山に入り自から華陽の隱居子と稱す　㊁愉快に樂むこと　㊂白雲を手に持つをいふ

寒夜の怨

夜雲生。夜鴻驚。悽切嘹唳傷ニ夜情一。空山霜滿高煙平。鉛華沈照帳孤明。寒月微。寒風緊。愁心絕。愁淚盡。情人不レ勝レ怨。思來誰能忍。

夜雲生じ、夜鴻驚く。悽切嘹唳、(一)夜情を傷ましむ。空山霜滿ちて高煙平に、鉛(二)華沈み照して帳孤り明なり。(三)寒月微にして、寒風緊しく、愁心絕えて、愁淚盡く。(四)情人(五)怨むに勝へず、(六)思ひ來りて誰か能く忍びん。

音節詞に近し、空山の七字却つて高し。

㊀物淋しく身にしむをいふ　㊁鴻の鳴くをいふ　㊂御白粉なり　㊃戀人を指す　㊄怨みても仕方なきをいふ　㊅思ひ出せば誰か我慢の出來得べきぞと也

曹景宗(一)

光華殿に宴に侍して賦せる競病の韻

羞池入二綺幕一。
上下傍二離梁一。
故居猶可レ念。
故人安可レ忘。
相思昏望絶。
宿昔夢二容光一。
魂交忽在レ御。
轉側定二他鄉一。
徒然顧二枕席一。
誰與同二衣裳一。
空使三蘭膏夜。
炯炯對二繁霜一。

山中何所レ有。
嶺上多二白雲一。
只可二自怡悦一。

夜をして、炯炯(一九)として繁霜に對せしむ。

(一)字は季緯、著作佐郎より尚書吏部郎を歴、前後五たび免ぜられ辭藻後進の爲に宗とせらる (二)古詩の意に倣ふ也閨怨を詠ずるもの多し (三)古の二國の名今の直隸山西の地 (四)美人なり (五)遊冶郎 專ら此良人を指すなり (六)合せ帶の事なるべし體のやせて帶の長くなりしが如きを覺ゆる也 (七)どろつゝを云ふ (八)奧まり所の部屋なり (九)上下左右に飛び交はす樣をいふ (一〇)あやぎぬのとばりなり (一一)雕刻したるうつばりをいふ (一二)相見んとする望のきるゝこと (一三)昨夜なり (一四)顏色なり (一五)夢中の光景、良人に侍り仕ふるをいふ (一六)轉輾反側して後に目覺め、夫の猶他鄉に在るを認定したる也 (一七)手持無沙汰の樣をいふ (一八)蘭をくゆらし油を焚く夜なり (一九)耿耿に同じ、物思に目さえて眠られざるをいふ

陶　弘　景(一)

山中何の有る所ぞと詔問せらる。詩を賦して以て答ふ

齊の高帝の詔に答ふ

山中何の有る所ぞ、嶺上白雲多し。只自づから怡悦す可し、(二)持して君に寄するに堪へず。

緪瑟荊禽亂。我思二江海遊一。曾無二朝市玩一。忽寄二靈臺宿一。空軫二及關歎一。仲子入二南楚一。伯鸞出二東漢一。何敢棲二樹枝一。取二斃王孫彈一。

(六)御簾なり　(七)脚の早き馬なり　(八)うつばりの上の塵なり　(九)絃を張り締めたる瑟(こと)なり　(一〇)いばらにとまれる鳥なり　(一一)朝廷と市場と二つに分ちて說く者あり或は朝の市場と說く者あり　(一二)心なり心の宿れる所は卽ち身也　(一三)關門の開かるべき時に及ぶをいふ　(一四)陳仲子を謂ふ　(一五)梁鴻を謂ふ　(一六)死をいふ　(一七)鳥を打つ彈丸なり

劉孝綽(一)

古意(二)

燕趙多二佳麗一。白日照二紅妝一。蕩子十年別。羅衣雙帶長。春樓怨レ難レ守。玉階空自傷。復此歸飛燕。銜レ泥繞二曲房一。

燕趙(三)(四)佳麗多く、白日紅妝を照す。蕩子(五)十年別れ、羅衣雙帶(六)長し。春樓守り難きを怨み、玉階空しく自づから傷む。復た此に歸飛の燕あり、泥(七)を銜んで曲房(八)を繞る。差池(九)として綺幕(一〇)に入り、上下して雕梁(一一)に傍ふ。故居猶ほ念ふ可し、故人安んぞ忘る可き。相思昏(一二)に望み絕え、宿昔容光(一三)(一四)を夢む。魂交りて忽ち御(一五)に在り、轉(一六)側して他鄉と定む。徒然枕席(一七)を顧み、誰と與に衣裳を同じうせん。空しく蘭膏(一八)の

烏鳴山更幽。
此地動ニ歸念ー。
長年悲ニ倦遊ー。

傳語なり、當時傳誦して、以て文外の獨絕と爲す。

（一）字は文雅瑯琊臨沂の人也少うして學を好み才氣あり　（二）會稽縣の東に在り　（三）大舟なり　（四）うかうかとうかべる樣をいふ　（五）遙に遠き貌　（六）日影なり　（七）遊にあくをいふ

劉峻

江州より還りて石頭に入る詩

鼓ㇾ枻浮ニ大川ー。
延睇洛城觀。
洛城何鬱鬱。
杳與ニ雲霄ー半。
前望ニ蒼龍門ー。
斜瞻ニ白鶴館ー。
槐垂ニ御溝道ー。
柳綴ニ金隄岸ー。
迅馬晨風趨。
輕與ニ流水ー散。
高歌梁塵下。

枻を鼓して(一)大川に浮び、延睇す(二)洛城(三)の觀。洛城何ぞ鬱鬱(四)たる、杳かに雲霄と半(五)なり。前に蒼龍門を望み、斜に白鶴館を瞻る。槐は(六)御溝の道に垂れ、柳は金隄の岸に綴る。(七)迅馬晨風に趨り、輕く流水と散ず。高歌梁塵下り、(八)絙瑟(九)荊禽亂る。(一〇)我、江海の遊を思ふに、曾て朝市の玩なし。(一一)忽ち靈臺の宿を寄せ、(一二)空しく及關の歎を軫かす。(一三)仲子南楚に入り、(一四)伯鸞東漢に出づ。(一五)何ぞ敢へて樹枝に棲み、斃を王孫の彈に取らん。(一六)(一七)

（一）打ち鳴らすこと　（二）遠く見渡すをいふ　（三）洛陽城なり　（四）樹木の茂れる貌　（五）雲のゆきかふ空をいふ

暫解去鄉憂。兩岸平沙合。連山遠霧浮。客悲不自已。江上望歸舟。

已、歸ること能はずして、他舟の歸るを望む、情事黯然たり。

(一) 遙か向ふの河岸なり　(二) 穩に流るゝ川をいふ

相送る

客心已百念。孤游重千里。江暗雨欲來。浪白風初起。

客心已に百念(一)、孤游重ねて千里。江暗くして雨來らんと欲し、浪白くして風初めて起る。

(一) 棲棲　物思をいふ

王(一)籍

若耶溪に入る(二)

餘艎何泛泛。空水共悠悠。陰霞生遠岫。陽景逐迴流。蟬噪林逾靜。

(三)餘艎何ぞ泛泛(四)たる、空水共に悠悠(五)たり。陰霞遠岫に生じ、陽景迴流(六)を逐ふ。蟬噪しくして林逾ゝ靜に、鳥鳴いて山更に幽なり。此地歸念動き、長年倦遊(七)を悲む。

未レ有二西歸日一。
夜雨滴二空階一。
曉燈暗二離室一。
相悲各罷レ酒。
何時同促レ膝。

居人行轉レ軾。
客子暫維レ舟。
念此一筵笑。
分爲二兩地愁一。
露溼二寒塘草一。
月映二清淮流一。
方抱二新離恨一。
獨守二故園秋一。

暮煙起二遙岸一。
斜日照二安流一。
一同心賞夕。

く膝を促さん。(五)

㊀ 毎年なり ㊁ つき従ふこと ㊂ 一朝に同じ ㊃ 朋類なり多くの朋友を指す ㊄ 膝をつきつけて話すことなり

胡興安と夜別る

居人行ゆく軾(一)を轉じ、客子暫く舟を維ぐ。念ふ此の一筵(二)の笑、分れて兩地の愁と爲るを。露は寒塘の草を溼し、月は清淮(三)の流に映ず。方に新離の恨を抱き、獨り故園の秋を守る。

㊀ 車上の横木をいふことにては單に車と說きて可なり ㊁ 同じ筵にて面白く笑ひ樂むこと ㊂ 流清き淮河をいふ

慈姥磯

暮煙遙岸に起り、斜日(一)安流を照す。一同心賞の夕、暫く鄕を去る憂を解く。兩岸平沙(二)合し、連山遠霧浮ぶ。客悲自づから已まず、江上歸舟を望む。

霜洲渡二旅雁一。
朔飆吹二宿莽一。
夜涙坐淫淫。
是夕偏懷レ土。

曉河沒二高棟一。
斜月半二空庭一。
窗中度二落葉一。
簾外隔二飛螢一。
含レ悲下二翠帳一。
掩レ泣閉二金屏一。
昔期今未レ返。
春草寒復青。
思レ君無二轉易一。
何異二北辰星一。

歷稔共追隨。
一旦辭二羣匹一。
復如二東注水一。

（六）帆を下すこと　（七）二夜泊ること　（八）夜の深くる貌　（九）深邃の貌　（一〇）北風なり　（一一）へばりつきたる草むらをいふ　（一二）度を過ぐるをいふ　（一三）郷土を思ひ出づるをいふ

蕭諮議岑離の閨怨に和す

曉河（一）高棟（二）に沒し（三）、斜月空庭に半なり。窗中落葉度り、簾外飛螢隔つ。悲を含みて翠帳（四）を下し、泣を掩うて金屏（五）を閉す。昔期（六）今未だ返らず、春草寒くして復青し。君を思うて轉易（七）なし、何ぞ北辰（八）の星に異ならん。

（一）夜明頃の天の川をいふ　（二）高い家のむねなり　（三）かくれて見えざるをいふ　（四）翡翠の模樣あるとばりなり　（五）金泥の屏風を締めきるをいふ　（六）むかし約せし歸期なり　（七）心のうつりかはること　（八）北斗星はいつも一つ處に在るもの故に動かざる意を取りて之を喩ふる也

行に臨み故遊と夜別る

歷稔（一）共に追隨（二）し、一旦（三）羣匹（四）を辭す。復た東に注ぐ水の如く、未だ西に歸る日あらず。夜雨空階に滴り、曉燈離室に暗し。相悲みて各〻酒を罷め、何の時か同じ

各在二天一面一。
踟躕暫擧レ酒。
倏忽不二相見一。
春草似二青袍一。
秋月如二團扇一。
三五出二重雲一。
當レ知我憶レ君。
萋萋若レ被レ逕。
懷抱不二相聞一。

の如し。三五、重雲を出でば、當に知るべし我が君を憶ふを。(八)萋萋として逕に被(九)むるが若きも、懷抱相聞えざらん。(一〇)

(七)末四句、秋月春草に分頂し、手に隨つて法を成し、可ならざる所なし。

(一) 少年を謂ふ　(二) 目前を謂ふ　(三) 來會の期の遠くして知るべからざるをいふ　(四) たちまちの間をいふ　(五) 青のうはぎなり　(六) うちはをいふ　(七) 三五十五夜の滿月を指す　(八) 草の繁茂する貌　(九) 路を埋むるをいふ　(一〇) 思の胸に塞がるに比す　(一一) 胸にいだく所の我が精神を互に語らずと也

南洲浦に宿す

幽棲多二暇豫一。
從役知二辛苦一。
解纜及二朝風一。
落帆依二瞑浦一。
逢レ鄕已信次。
江月初三五。
沈沈夜看レ流。
淵淵朝聽レ鼓。

幽棲暇豫多く、(一)(二)從役辛苦を知る。(三)(四)解纜、朝風に及び、(五)落帆、瞑浦に依る。(六)鄕に逢うて已に信次し、(七)江月初めて三五。(八)沈沈として夜、流を看、(九)淵淵として朝に鼓を聽く。霜洲旅雁渡り、(一〇)朔飈宿莽を吹く。(一一)夜淚坐ろに淫淫たり、(一二)是の夕偏に土を懷ふ。(一三)

(一) 隱居といはんが如し　(二) 樂むひまをいふ　(三) 業務に從事すること　(四) つらきこと　(五) 船出すこと

北窗倒ニ長簟一。南隣夜聞レ織。棄置勿ニ復陳一。重陳長ニ歎息一。

可レ憐玉匣劒。復此飛鳧舄。未レ覺愛生レ憎。忽見雙成レ隻。一朝別ニ笑語一。萬事成ニ疇昔一。道遒若ニ波瀾一。人生異ニ金石一。願君深自愛。其念悲無レ益。

沈助教と別る

(一)憐む可し(二)玉匣の劒と、復た此の(三)飛鳧の舄と。未だ覺えず愛の(四)憎を生ずるを、忽ち見る(五)雙の隻を成すを。(六)一朝笑語を別かち、萬事(七)疇昔と成る。(八)道遒(九)波瀾の若く、(一〇)人生金石に異なり。願はくば君深く自愛して、其れ念へ悲みの益なきを。

一 愛すべしといふ程の意　二 匣（はこ）の中に藏むる雌雄二劍をいふ此は出に喩ふ　三 鳧はけり也舄はくつ也王喬の故事を借用す此れ處に喩ふ　四 愛情より憎念を生ずるをいふ　五 二つあるものが一つとなるをいふ　六 笑語を共にせざること　七 昨日なり、過去と成り了るをいふ　八 行路といはんが如し　九 翻覆常なきを喩ふ　一〇 非情の者に喩ふ

宿昔夢ニ顏色一。咫尺思ニ言宴一。何況杳ニ來期一。

蘇九德と別る

(一)宿昔顏色を夢み、(二)咫尺言宴を思ふ。何ぞ況んや來期(三)杳にして、各々天の一面に在るをや、踟蹰して暫く酒を擧げ、(四)倏忽として相見ず。春草(五)靑袍に似、秋月(六)團扇

擧帆越中流。望別上高樓。予起南枝怨。子結北風愁。邅邅山蔽日。洶洶浪隱舟。隱舟邈已遠。徘徊落日晩。歸衢並駕奔。別館空筵卷。想子斂眉去。知子銜涙返。銜涙心依依。薄暮行人稀。曖曖入塘港。蓬門已掩扉。簾中看月影。竹裡見螢飛。螢飛飛不息。獨愁空轉側。

落日晩し。歸衢、駕を竝べて奔り、別館、筵を空しうして卷く。予が眉を斂めて去るを想ひ、予が涙を銜みて返るを知る。涙を銜んで心依依たれども、薄暮行人稀なり。曖曖として塘港に入る、蓬門已に扉を掩ふ。簾中月の影を看、竹裡螢の飛ぶを見る。螢飛び飛びて息まず、獨り愁へて空しく轉側す。北窗長簟を倒にし、南鄰夜、織を聞く。棄置して復た陳ぶること勿かれ、重ねて陳ぜば歎息を長ぜん。

毎に頓挫の處に於いて、蟬聯して下り、一往情深し。

㊀ 名は齊南平王の司馬と爲る ㊁ まがり入る渚なぎさなり ㊂ 前に進むつれをいふ ㊃ 緒はいとぐち也、たぐる所なきをいふ ㊄ 物慾しき形容 ㊅ 別離の事 ㊆ 物淋しき形容 ㊇ 古詩の越鳥南枝に巣ふ意 ㊈ 古詩の胡馬北風に嘶く意 (一〇) 斜に行く貌 (一一) 水の涌く形容 (一二) 落日にかけて說く日脚の落ちんとして落ちざるをいふ (一三) 歸り來る市街なり (一四) 馬車をならぶること (一五) 人の漸く去るを寫す (一六) 愛ふる樣なり (一七) 怨む樣なり (一八) 心殘りのせらるゝをいふ (一九) 不明の貌暮れて段々とくらくなるをいふ (二〇) 塘はつゝみと訓じ土手也港は水のめぐり入る所をいふ土手も入江も暮色に包まるゝ光景也 (二一) 轉輾反側して寢がへりを打つこと (二二) 長き竹むしろなり (二三) 放任して置くをいふ (二四) 增加すること

一塗今未是。萬緒昨如非。新知雖已樂。舊愛盡暌違。望鄉空引領。極目涙沾衣。旅客長憔悴。春物自芳菲。岸花臨水發。江燕遶檣飛。無由下征帆。獨與暮潮歸。

檣を遶りて飛ぶ。征帆を下すに由なく、獨り暮潮と歸る。

（一）同遊の舊故を指す（二）薄弱なる士操をいふ（三）確定すること（四）淺薄なる技能をいふ（五）賴みにならざること（六）盡きて無くなること（七）誇き名なり（八）紛雜の貌（九）仕事にかゝるをいふ（一〇）こせく する樣をいふ（一一）晩年なり（一二）一線に進む路をいふ（一三）種種樣樣の事端をいふ（一四）以前の仲よき友人（一五）仲違をすること（一六）首をのばすこと（一七）やつれ衰ふる樣をいふ（一八）香氣あるをいふ

（二）韋司馬の別を送る

送別臨曲渚。征人慕前侶。離言雖欲繁。離思終無緒。惆悵分手畢。蕭蕭行帆擧。

別を送りて曲渚に臨み、征人前侶を慕ふ。離言繁からんと欲すと雖ども、離思終に緒なし。惆悵として分手畢り、蕭蕭として行帆擧る。帆を擧げて中流を越え、別を望みて高樓に上る。予南枝の怨を起せば、子、北風の愁を結ばん。邐邐として山、日を蔽ひ、洶洶として浪舟を隱す。隱舟邈として已に遠く、徘徊して

望レ郷雖ニ一路一。懷レ歸成ニ二想一。在昔愛ニ名山一。自知レ懽ニ獨往一。情遊乃落魄。得レ性隨怡養一。年事以蹉跎。生平任ニ浩蕩一。方還讓ニ夷路一。誰知ニ羨レ魚網一。

(一) 同じ仲間をいふ (二) 三日月をいふ (三) 暗き貌 (四) 騒がしき貌 (五) 早瀬のしぶき也 (六) 引き耐るいかだ也査は楂又は槎と同じ (七) 廣き空中を指す (八) 旅人なり (九) 幾度も故郷に背くをいふ (一〇) 一様一心をいふ (一一) 單獨にて往くこと (一二) 落ちぶるゝなり (一三) 安樂に修養するをいふ (一四) 年年の事業なり (一五) つまづく様をいふ (一六) 波心いひろ／＼と大なるに喩ふ (一七) 平坦の道路なり (一八) 淵に臨みて魚を羨むは退いて網を結ぶに如かずといふ古語あり

弱操不レ能レ植。薄技竟無レ依。淺智終已矣。令名安可レ希。擾擾從役倦。屑屑身事微。少壯輕ニ年月一。途暮惜ニ光輝一。

諸游舊に贈る（一）

弱操（二）植つること能はず（三）、薄技（四）竟に依ること無し（五）。淺智終に已みぬ矣（六）、令名安んぞ希ふべき（七）。擾擾（八）として從役倦み（九）、屑屑（一〇）として身事微なり。少壯年月を輕んじ（一一）、遲暮光輝を惜む。一塗（一二）今未だ是ならず、萬緒（一三）昨非なるが如し。新知己に樂むと雖ども、舊愛（一四）盡く暌違（一五）す。鄕を望みて空しく領を引き（一六）、目を極めて涙衣を沾す。旅客長へに憔悴（一七）し、春物自づから芳菲（一八）なり。岸花水に臨みて發き、江燕

晨纜雖同解。
晩洲阻共入。
猶如征鳥風。
差池不可及。
本願申羈旅。
何言異翔集。
君渡北江時。
詎令南浦泣。

（一）晨纜同じく解くと雖ども、晩洲共に入るを阻ぐ。猶ほ（二）征鳥の飛ぶが如く、（三）差池として及ぶ可からず。本、（四）羈旅を（五）申ねんことを願ふ、何ぞ翔集を異にすと言はん。君、北江を渡る時、（六）詎ぞ南浦に泣かしむる。

㊀ 纜は舟のともづななり　㊁ わたり鳥なり　㊂ 高低上下一ならざるをいふ　㊃ 旅路の事　㊄ 反復すること　㊅ 飛んだり止ったりすること

西塞に入りて、南府の同僚に示す（一）

露清曉風冷。
天曙江光爽。
薄雲巖際出。
初月波中上。
黯黯連嶂陰。
騷騷急沫響。
廻沓急礙浪。
羣飛爭戲廣。
伊余本羈客。
重睽復心賞。

露清くして曉風冷に、天曙けて江光爽なり。薄雲巖際より出で、（二）初月波中より上る。（三）黯黯として連嶂陰り、（四）騷騷として急沫響く。（五）廻沓急に浪に（六）礙られ、羣飛爭うて廣に（七）戲る。伊れ余は本（八）羈客、重ねて睽き、復た心賞す。（九）鄕を望めば一路なりと離ども、歸を懷うて（一〇）二想を成す。在昔名山を愛し、自づから（一一）獨往を懽ぶを知る。情遊乃ち（一二）落魄し、性を得て（一三）怡養に隨ふ。（一四）年事以て（一五）蹉跎たり、生平（一六）浩蕩に任ず、方に還りて（一七）夷路を讓る、誰か魚を（一八）羨むの網を知らん。

耿耿青雲外。城中多宴賞。絲竹常繁會。管聲已流悦。弦聲復淒切。歌聲慘如愁。舞腰凝欲絶。仲秋黄葉下。長風正騒屑。早鴈出雲歸。故燕辭檐別。晝悲在異縣。夜夢還洛汭。洛汭何悠悠。起望西南樓。的的帆向浦。團團月映洲。誰能一羽化。輕擧逐飛浮。

として愁ふるが如く、舞腰凝りて絶えんと欲す。仲秋黄葉下り、長風正に騒屑たり。早雁雲を出でて歸り、故燕檐を辭して別る。晝は異縣に在るを悲み、夜は洛汭に還るを夢む。洛汭何ぞ悠悠たる、起ちて西南の樓を望む。的的として帆、浦に向ひ、團團として月、洲に映ず。誰か能く一たび羽化し、輕く擧りて飛浮を逐ふ。

音非之を西洲に得たり。

一 字は仲言、東海郯の人なり八歳にして能く詩を賦す　二 縣の名唐の時潯陽と改む　三 光明の貌　四 酒宴を開きて風光を賞するをいふ　五 賑やかに人の集るをいふ　六 笙とか笛とかの聲なり　七 流暢にして滿足すべきをいふ　八 琴瑟、琵琶などをいふ　九 物すごく身にしむこと　一〇 歌者の眉ずみなり　一一 舞者の腰の模樣をいふ　一二 太陰曆の八月を指す　一三 さわがしき樣なり　一四 他縣に同じ　一五 洛水の岸なり　一六 分明なる貌　一七 まん圓き貌　一八 羽が生えて仙人と爲るをいふ　一九 飛ぶもの浮ぶもの皆鳥を指す

道中にして桓司馬季珪に贈る

山際見ニ來煙一。
竹中窺ニ落日一。
鳥向ニ簷上一飛。
雲從ニ窗裏一出。

湓城帶ニ湓水一。
湓水縈如レ帶。
日夕望ニ高城一。

山中雜思

山際に來煙を見、竹中に落日(一)を窺ふ。鳥は簷上(二)に向つて飛び、雲は窗裏(三)より出づ。

四句景を寫して、自づから一格を成す。

(一)夕日をいふ　(二)のきの上なり　(三)まどの中なり

何遜(一)

仲言が詩は、風骨に乏しと雖ども、而も情詞宛轉にして、淺語倶に深し。宜しく沈范の爲に心折すべし。○陰何並び稱せらる。然れども何自づから遠く勝れり。

日夕江山を望み、魚司馬に贈る

湓城(二)、湓水を帶び、湓水縈りて帶の如し。日夕高城を望めば、耿耿(三)たり青雲の外。

城中宴賞(四)多く、絲竹(五)常に繁會す。管聲(六)已に流悅(七)に、弦聲(八)復た淒切(九)なり。歌黛慘(一〇)

倚レ戸悵レ無レ懽。水傳洞庭遠。風送雁門寒。江南霜雪重。相如衣服單。沈雲隱二喬樹一。細雨滅二層巒一。且當下對二樽酒一。朱絃永夜彈上。

て雁門寒し、江南霜雪重く、相如(二)衣服單なり(三)。沈雲喬樹を隱し、細雨層巒を滅す(四)。且く當に樽酒に對し、朱絃永夜に彈ずべし。

(一)愉快なり　(二)司馬相如を謂ふ　(三)ひとへなること、其貧をいふ　(四)雨の爲に見えずなるをいふ

春詠

春從二何處一來。拂レ水復驚レ梅。雲障二青鎖闥一。風吹二承露臺一。美人隔二千里一。羅幃閉不レ開。無レ由レ得二共語一。空對二相思杯一。

春は何の處より來る、水を拂ひ復た梅を驚かす。雲は青鎖(一)の闥(二)を障り、風は承(三)露の臺を吹く。美人千里を隔て、羅幃(四)閉ぢて開かず。共に語るを得るに由なく、空しく相思(五)の杯に對す。

一起飄逸なり。

(一)漢の宮門の名　(二)門をいふ　(三)漢の時に作りし臺の名　(四)薄絹のとばりをいふ　(五)人を思ひつゝ酒を飲む時の杯なり

秋日暗二平原一。
寒蟲鳴趯趯。
落葉飛翩翩。
何用贈二分首一。
自有二北堂萱一。

本自乘軒者。
爲二君階下禽一。
摧藏多二好貌一。
清唳有二奇音一。
稻粱惠既重。
華池遇亦深。
懷レ恩未レ忍レ去。
非レ無二江海心一。

日暮憂二人起一。

倫かつて北山に隱れたり　〔一二〕淹留すること　〔一三〕夫子といはんが如し　〔一四〕鳥に比して群を抜くをいふ翮は羽也　〔一五〕（日景）ひかげなり　〔一六〕空を凌ぎあがること　〔一七〕飛躍する貌　〔一八〕ひるがへり飛ぶ形容　〔一九〕分手と同意、離別なり　〔二〇〕母の居る所なり　〔二一〕萱はわすれ草なり、北堂に之を栽うること詩經に見ゆ言ふ心は母氏の、猶は健在なるをいふ

主人池前の鶴

本自づから(一)軒に乘る者、君が階下の禽と爲る。(二)摧藏、(三)好貌多く、(四)清唳、奇音あり(五)稻粱(六)惠既に重く、(七)華池遇も亦深し。(八)恩を懷うて未だ去るに忍びず、(九)江海の心無きにしもあらず。

〔一〕大夫の乘る車のこと、衞の懿公の鶴を好みし故事を借り用ふ　〔二〕衰へやつれたるをいふ　〔三〕立派なる顏貌なり　〔四〕清くほがらかに鳴くこと　〔五〕いねの事鶴の餌也　〔六〕惠愛の意　〔七〕うつくしき池をいふ　〔八〕待遇なり　〔九〕江湖といふが如し、天下を汎稱し、之に雄飛せんの心あるをいふ

周參軍に酬ゆ

日暮、人の起つを憂へ、戸に倚りて(一)懽なきを悵む。水傳はりて洞庭遠く、風送り

参差間原陸。
一見終無緣。
懷悲空滿目。

有客告將離。
贈言重蘭蕙。
泛舟當泛濟。
結交當結桂。
濟水有清源。
桂樹多芳根。
毛公與朱亥。
俱在信陵門。
趙瑟鳳皇柱。
吳醥金罍樽。
我有北山志。
留連爲報恩。
夫君皆逸翮。
搏景復陵騫。
白雲間海樹。

早く發すること ㈥ 長短齊しからざる貌 ㈦ 高原と平地とをいふ

江主簿屯騎と別るゝに酬ゆ

客ありて將に離れんとするを告ぐ。言を贈りて蘭蕙(一)を重ぬ。舟を泛べんには當に濟(二)に泛ぶべく交を結ばんには當に桂に結ぶべし(三)。濟水に清源あり、桂樹に芳根多し。毛公(四)と朱亥(五)と、倶に信陵(六)の門に在り。趙瑟(七)鳳皇の柱(八)、吳醥(九)金罍の樽(一〇)、我に北山の志あり、留連(一一)するは報恩の爲めなり。夫君皆逸翮(一四)にして、景を搏ちて復た陵騫(一六)す。白雲海樹を間て(一二)、秋日平原に暗し。寒蟲鳴いて趯趯(一七)たり、落葉飛んで翩翩(一八)たり。何ぞ用ひん分首(一九)に贈るを、自づから北堂の萱(二〇)(二一)あり。

交を結ばんには當に桂に結ぶべし。桂は卽ち君子に當てゝ看よ。

㈠ 蘭蕙の如き芳ばしき友情を反復丁寧にするをいふ ㈡ 水の名、清流なり ㈢ 原註を看よ ㈣ 魏の隱者にして博徒なりし者也 ㈤ 魏の屠者にして强力あり ㈥ 戰國四君の一にして魏の公子無忌の事 ㈦ 趙國に產する瑟(こと) ㈧ 琴柱(ことぢ)なり ㈨ 吳國に產する醥(すみざけ) ㈩ 罍(もたひ)も亦樽なり ⑪ 周彥

然たり矣。此に于いて風氣を覘ふに足るなり。

㈠魏の曹植の事也 ㈡陳思王を指す ㈢鋼の煩悶をいふ ㈣墓塚の事なり ㈤荒廢せる墓道をいふ ㈥苑の名なり ㈦門の名なり曹植の詩に平樂に宴し丞明に調すといふ句あり、今之を用ふ ㈧王命を受くるをいふ ㈨平和條約を鄰邦に結ぶをいふ ㈩風に吹かれて飛ぶ形容 (一一)河北に同じ (一二)物を吹き動かす暴風の貌 (一三)暴風なり (一四)つらなる意 (一五)よもぎ草也 (一六)土神を祭る所 (一七)水の名 (一八)笳といふ笛の調子 (一九)地名なり

吳均(一)

柳惲に答ふ

淸晨發二隴西一。
日暮飛二狐谷一。
秋月照二層嶺一。
寒風掃二高木一。
霧露夜侵レ衣。
關山曉催レ軸。
君去欲二何之一。

淸晨隴西(二)を發し、日暮狐谷(三)に飛ぶ。秋月層嶺(四)を照し、寒風高木を掃ふ。霧露夜、衣を侵し關山曉、軸(五)を催す。君去りて何くに之かんと欲する、參差(六)として原陸(七)を間つ。一見終に緣なく、悲を懷きて空しく目に滿つ。

㈠子は叔庠、吳興故障の人也、文體淸拔にして古氣あり通史を撰び未だ成らずして卒せり ㈡鄕の名、秦の時に之を置く今の甘肅省に在り ㈢所謂飛狐口を指す今の山西省にあり ㈣重なる山をいふ ㈤車を催促して

邱壠擅二餘名一。
采レ樵枯樹盡。
犂レ田荒隧平。
寧追宴二平樂一。
詎想謁二承明一。
旦余來錫レ命。
兼言事レ結レ成。
飄颻河朔遠。
颱颱颶風鳴。
雁與レ雲倶陣。
沙將レ蓬共驚。
枯桑落二古社一。
寒鳥歸二孤城一。
隴水哀二笳曲一。
漁陽慘二鼓聲一。
離レ家來二遠客一。
安得レ不レ傷レ情。

平なり。寧ぞ追はん平樂(六)に宴するを、詎ぞ想はん承明(七)に謁するを。旦に余來りて命を錫ひ(八)、兼ねて言に成(九)を結ぶを事とす。飄颻(一〇)として河朔(一一)遠く、颱颱(一二)として颶風(一三)鳴る。雁は雲と倶に陣(一四)し、沙は蓬(一五)と共に驚く。枯桑古社(一六)に落ち、寒鳥孤城に歸る。隴水(一七)、笳曲(一八)哀く、漁陽(一九)、鼓聲慘む。家を離れて遠客來る、安んぞ情を傷めざるを得んや、

庾肩吾、張正見、其詩、聲色臭味倶に備はる。詩の佳なる者は、聲色臭味の倶に備はるに在り。庾の如く、張の如き是也。詩の高き者は、聲色臭味の倶に無きに在り。陶淵明の如き是也。○梁陳隋間の人、專ら句を琢くに工なり。庾肩吾が舟を後湖に泛ぶるの「殘虹度雨收まり、缺岸新流上る」と、張正見が白雲浦に臨むを賦し得たるの「疎葉稽竹に臨み、輕鱗鄭船に入る」と、江總が人に贈るの「露は山扉の月を洗ひ、霜は石路の煙を開く」と、隋の煬帝が「鳥擊ちて初めて樹に移り、魚寒うしく苔に隱れんと欲す」といふが如き、皆名儁を成す。然れども之を池塘春草を生ず、天際歸舟を識る等の句に比すれば、痕迹宛

泣レ血悲二東走一。
横レ戈念二北奔一。
方憑二七廟略一。
誓雪二五陵冤一。
人事今如レ此。
天道共レ誰論。

㈥北胡の雜種をいふ　㈦黄帝の事也中國は黄帝の治めし所なるを以て中國の意に借り用ふる也　㈧御成道をいふ　㈨荒漠の狀をいふ　㈩治教の休明なるをいふ休は善美の意、明は清明の意　⑪帝位の動かざるをいふ　⑫采は取る也禮法を取り守るをいふ　⑬易の畫爻をいふ　⑭爻の如く幽深にして見難きをいふ　⑮天子は七廟なり　⑯長陵、安陵、陽陵、茂陵、平陵をいふ

長信宮中の草を詠ず（一）

委翠似レ知レ節。
含芳如レ有レ情。
全由二履迹少一。
併欲二上レ階生一。

（二）委翠（三）節を知るに似たり、（四）含芳情あるが如し。全く（五）履迹の少きに由り、（六）併せて階を上りて生ぜんと欲す。

併欲の字、唐人此種の字法多し。

㈠漢の宮殿の名　㈡繁り合へる綠葉をいふ　㈢時候の氣節なり　㈣蕾を含める芳草をいふ　㈤人の通りしくつの跡なり　㈥俗語のおまけにといふが如し

陳思王の墓を經（一）

公子獨憂生。

（二）公子（三）獨憂生じ、（四）邱隴餘名を擅にす。樵を采りて枯樹盡き、田を犂きて（五）荒隧

詎假西園讌。
無勞飛蓋遊。

て鈎（かぎ）にかくること ㈢漏は水時計也夜の時刻をいふ ㈣初更、二更、三更など夜の深淺の度をはかる事也霧はかずとりをいふ ㈤星の名 ㈥同上 ㈦あらためて秋になりし如く覺ゆと也 ㈧曹植西園に宴會せし事あり、之を借り用ふ ㈨宴と同じ ㈩飛ぶが如く車を馳するをいふ蓋は車のきぬがさ也、曹植の詩の「清夜西園に讌し、蓋を飛ばして相追陪す」より轉し來れり

亂後に行きて、吳の御亭を經たり

御亭一回望。
風塵千里昏。
青袍異春草。
白馬卽吳門。
獯戎鯁伊洛。
雜種亂轘轅。
輦道同關塞。
王城似太原。
休明鼎尙重。
秉禮國猶存。
殷牖爻雖賾。
堯城吏轉尊。

御亭一たび回望すれば、風塵(一)千里昏し。青袍春草に異に、(二)白馬吳門に卽く。獯(三)戎(四)伊洛を(五)鯁し、(六)雜種(七)轘轅を亂す。(八)輦道は關塞に同じく、(九)王城は太原に似たり。(一〇)休明鼎尙ほ重く、(一一)秉禮國猶ほ存す、(一二)殷牖(一三)爻賾すと雖ども、(一四)堯城吏轉た尊し。血に泣いて東走を悲み、戈を横へて北奔を念ふ。方に七廟の略に憑り、(一五)誓つて五(一六)陵の寃を雪ぐ。人事今此の如し、天道誰と共にか論ぜん。

御亭は吳の大帝の建つる所にして、晉陵に在り。別本に郵亭に作るは誤なり。

㈠風によりて吹きあがる塵埃をいふ暗に世の爭亂を含む ㈡青色のひたゝれ、鎧の下に着るもの也 ㈢戎（えびす）の名卽ち獯鬻也是れ夏の時代の稱にして周には獫狁といひ漢には匈奴といへり ㈣二水の名 ㈤塞ぐ意

瑤華隨ㇾ步響。
幽䕵逐ㇾ袂生。
踟蹰理二金翠一。
容與納二宵淸一。

擣衣、只末首に於て正に點し、以上は情を寫すのみ。

㈠廊下を指す　㈡遠き貌　㈢離れの座敷　㈣おごそかなる形容をいふ　㈤擣衣の時用ふる所の打物なり（つちの類）　㈥擣衣の時着物を載するものなり（卽衣板）　㈦ためらふ貌　㈧黃金や翠玉のかんざしをいふ　㈨自得の貌、ゆつたりとしたる樣をいふ　㈩夜凉の意

(一)庾肩吾

春夜に奉和す。令に應ず

春牖對二芳州一。
珠簾新上ㇾ鉤。
燒ㇾ香知二夜漏一。
刻ㇾ燭驗二更籌一。
天禽下二北閣一。
織女入二西樓一。
月皎疑ㇾ非ㇾ夜。
林疎似二更秋一。
水光懸蕩ㇾ壁。
山翠下添ㇾ流。

春牖芳洲に對し、珠簾新に鉤に上る。(二)香を燒いて夜漏(三)を知り、燭を刻みて更籌(四)を驗す。天禽(五)北閣に下り、織(六)女西樓に入る。月皎くして夜に非ざるを疑ひ、林疎にして更に秋(七)なるに似たり。水光懸りて壁を蕩かし、山翠下りて流に添ふ。詎ぞ西園(八)の讌(九)を假らん、飛蓋(一〇)の遊を勞すること無かれ。

景を寫すこと娟秀なり。一結是れ令に應ずるの體なり。

㈠字は愼之、南陽新野の人也梁の元帝に事へて江州の刺史に除せられ義陽の太守を領す　㈡簾を上にひきあげ

游人淹不レ歸。
亭皐木葉下。
隴首秋雲飛。
寒園夕鳥集。
思牖草蟲悲。
嗟矣當春服。
安見二禦冬衣一。
鶴鳴勞二永歎一。
採レ葛傷二時暮一。
念二君方遠遊一。
望二妾理二紈素一。
秋風吹二綠潭一。
明月懸二高樹一。
佳人飾二淨容一。
招攜從レ所レ務。
步櫩杳不レ極。
離堂肅已扃。
軒高夕杵散。
氣爽夜砧鳴。

夕鳥集まり、思牖草蟲悲し。(五)嗟 矣當春の服、(六)安んぞ禦冬(七)の衣を見ん。

㊀征役に出て行くこと ㊁滯在すること ㊂驛亭に近き水澤也 ㊃隴頭といはんが如し田隴の上也 ㊄物思ふ窓の下をいふ ㊅春向の衣服也 ㊆防寒の意

鶴鳴いて永歎(一)を勞し、葛(二)を採りて(三)時暮を傷む。君が方に遠遊するを念はん、妾が(四)紈素を(五)理むるを望め。秋風綠潭を吹き、明月高樹に懸る。佳人淨容(六)を飾り、(七)招攜務むる所に從ふ。

㊀歎息の永きに心つかるゝをいふ ㊁綠と同じみどり草を摘むことなり ㊂四季のくれゆくをいふ ㊃よくねりたる白絹なり ㊄洗濯して手を入るゝこと ㊅さつぱりとしたる姿をいふ ㊆招かるゝも手を引かるゝも其當に務むべきを務むるのみ

(一)步櫩(二)杳として極まらず、(三)離堂肅(四)として已に扃す。軒高くして夕杵散じ、(五)氣爽にして(六)夜砧鳴る。瑤華步に隨つて響き、幽蘭袂を逐うて生ず。(七)躑躅して(八)金翠を理め、(九)容與として(一〇)宵清を納る。

奔潮溢二南浦一。
相思白露亭。
永望秋風渚。
心知二別路長一。
誰謂レ若二燕楚一。
關候日遼絕。
如何附二行旅一。
願作二野飛鳥一。
飄然自輕擧。

孤衾引二思緒一。
獨枕愴二憂端一。
深庭秋草綠。
高門白露寒。
思レ君起二清夜一。
促レ柱奏二幽蘭一。
不レ怨二飛蓬苦一。
徒傷二蕙草殘一。

行役滯二風波一。

路の長きを知る、誰か燕楚（四）の若しと謂ふ。關（五）候日に遼絕（六）す、如何ぞ行旅に附する。願はくば野に飛ぶ鳥と作りて、飄（七）然自づから輕く擧らん。

（一）冬の雲なり　（二）といふが如し隱者の居る處也　（三）疾き潮流をいふ　（四）二國の名、燕は北に在り楚は南に在り其距離の遠きをいふ　（五）關を守る斥候也　（六）遠く離るゝをいふ　（七）ひちり〳〵と飛ぶ形容

擣衣の詩（一）

孤衾（二）思緒（三）を引き、獨枕（四）憂端を愴む。深庭秋草綠に、高門白露寒し。君を思うて清夜に起き、柱（五）を促めて幽蘭（六）を奏（七）す。飛蓬（八）の苦しきを怨まず、徒に蕙草（九）の殘はれんを傷む。

（一）きぬたの事を詠ぜるもの　（二）ひとり寐のふすまをいふ　（三）思の種なり　（四）孤獨の枕をいふ　（五）琴の柱ことぢをいふ　（六）琴曲の名　（七）演奏すること　（八）蓬（よもぎ）の風に飛ぶもの、人生の遊跡に比す　（九）香草也、君子の不遇に比す

（一）行役して風波に滯し（二）、游人淹まりて歸らず。亭皐（三）木葉下り、隴首（四）秋雲飛ぶ。寒園

藤垂島易ㇾ陟。
崖傾嶼難ㇾ傍。
信是永幽棲。
豈徒暫清曠。
坐嘯昔有ㇾ委。
臥治今可ㇾ尙。

ふ　(六)形狀樸樸なり　(七)高く聳ゆること　(八)茂れる貌　(九)大なる貌　(一〇)しづかに住むをいふ　(一一)心を清くし氣をおなしくするをいふ　(一二)ゐながらうそぶきながら空とぼけて世を治めし古人あり　(一三)其人に國を委任せしをいふ　(一四)臥しながら治績をあげし汲黯の如き人あり　(一五)かゝる人は尊重すべしと也

(一)柳　惲

江南の曲

汀洲採二白蘋一。
日暖江南春。
洞庭有二歸客一。
瀟湘逢二故人一。
故人何不ㇾ返。
春花復應ㇾ晚。
不ㇾ道二新知樂一。
祇言二行路遠一。

(二)汀洲に(三)白蘋を採れば、日暖なり江南の春。(四)洞庭、歸客あり、(五)瀟湘故人に逢ふ。故人何ぞ返らざる、春花復た應に晩かるべし。(六)新知の樂を道はず、祇だ行路の遠きを言ふ。

(一)字は文暢、河東解の人也、齊の時太子洗馬と爲り、梁に至りて秘書監と爲る　(二)水邊の中洲をいふ　(三)白き花の咲きたる水草也　(四)湖の名　(五)水の名　(六)新らしき知人をいふ

呉均に贈る

寒雲晦二滄洲一。

(一)寒雲滄洲に晦く、(二)奔潮南浦に溢る。相思ふ白露の亭、永く望む秋風の渚。心に別

睚親執爲寄。
參差別念擧。
蕭稷恩波被。
小臣信多幸。
投生豈酬義。

漁潭霧未開。
赤亭風已颺。
櫂歌發中流。
鳴鞞響沓嶂。
村童忽相聚。
野老時一望。
詭怪石異象。
嶄絶峰殊狀。
森森荒樹齊。
析析寒沙漲。

命の投じ易からんやと。

㈠字は希範、吳興烏程の人也、梁の時永嘉太守と爲り司空從事中郎を拜せり　㈡早朝なり　㈢天門なり　㈣御成道なり　㈤鳴物をいふ　㈥やさしき茅花(つばな)をいふ　㈦御車をいふ　㈧御馬をいふ　㈨水草の名蕭荣に似たるあさゝなり　(一〇)前の初鳥と共に早朝の意を示す　(一一)北方開門の重任を指す　(一二)親戚(みより)なり　(一三)寄託すること　(一四)不齊の貌　(一五)おごそかに且つ安らかなるをいふ　(一六)よく恩德の餘波にうるほふこと　(一七)命を擲つをいふ　(一八)恩義の高大に報ゆるに足らざるをいふ

旦に漁浦潭を發す

漁潭霧未だ開けず、赤亭風已に颺がる。櫂歌(一)中流に發し、鳴鞞(二)沓嶂(三)に響く。村童忽ち相聚り、野老(四)時に一たび望む。詭怪(五)石、象(六)を異にし、嶄絶峯、狀(七)を殊にす。森森(八)として荒樹齊しく、析析(九)として寒沙漲る。藤垂れて島、陟り易く、崖傾きて嶼、傍ひ難し。信に是に永く幽棲(一〇)せん、豈に徒らに暫く淸曠(一一)せんや。坐嘯(一二)昔、委(一三)することあり、臥治(一四)今、尙(一五)ぶ可し。

㈠舟歌なり　㈡太鼓の音をいふ　㈢重なる峰なり　㈣ゐなかおやぢなり　㈤めづらしく不思議なるをい

輟レ春哀二國均一。
詰旦閶闔開。
馳道聞二鳳吹一。
輕荑承二玉輦一。
細草藉二龍騎一。
風遲山尙響。
雨息雲猶積。
巢空初鳥飛。
荇亂新魚戲。
寶惟北門重。

深婉と爲す。

(一)驛の宿舍なり (二)幾日經しかといふ意 (三)途中に在るをいふ (四)十日也 (五)紅顏なり (六)平生相思ふ人をいふ (七)安らかに歌ふこと是れ已を謂ふ (八)疾病の爲に琴瑟を鼓し得ざるをいふ (九)人の死するとき米を白づく者がかけ聲を出さゞるをいふ (一〇)國政を料理する人也

邱遲

宴に樂遊苑に侍り、張徐州を送る詔に應ず

(一)詰旦(二)閶闔開け、(三)馳道鳳吹を聞く。(四)輕荑玉輦を承け、(五)細草龍騎に藉く。(六)風遲くして山尙ほ響き、雨息みて雲猶ほ積もる。巢空しくして初鳥飛び、(七)荇亂れて新魚戲る、(八)寶に惟れ北門の重き、(九)親に匪ずんば孰を寄と爲ん。(一〇)參差として別念舉り、(一一)肅穆として恩波被むる。(一二)小臣信に幸多し、(一三)生を投じて豈に義に酬いんや。(一四)

(一五)史記に、齊の威王曰く、吾吏に黔夫といふ者あり、(一六)徐州を守らしむれば、(一七)則燕人北門に祭ると。(一八)故に知る徐州と關合するは、尋常の徵引に非ざることを。〇西征賦に曰く、豈に生

離燭有㆓窮輝㆒。
別念無㆓終緒㆒。
岐言未レ及レ申。
離目已先擧。
揆レ景巫衡阿。
臨レ風長楸浦。
浮雲難レ嗣レ音。
徘徊悵誰與。
儻有㆓關外驛㆒。
聊訪㆓狎鷗渚㆒。

離燭(一)、窮輝(二)あり、別念、終緒(三)なし。岐言(四)未だ申ぬるに及ばず、離目(五)、已先(六)ぐ、景を揆る巫衡の阿、(七)風に臨む長楸の浦。浮雲、音を嗣ぎ難く、徘徊(八)して悵み、誰と與にせん。儻し關外(九)の驛あらば、聊か狎鷗の渚を訪はん。

㊀離筵を照す蠟燭なり　㊁蠟燭のつきて消ゆるをいふ　㊂離別の愁のいとの如くはてなきをいふ　㊃別れの言葉なり　㊄反復すること　㊅離別間際の眼をいふ　㊆日かげを度ること時の經つをいふ　㊇風にふかるゝこと別に堪へざるをいふ　㊈消息を通ずること　㊉關塞の外のうまやぢをいふ

郡に出でて傳舍に范僕射を哭す

三首の一

與レ子別幾辰㆒。
經レ塗不レ盈レ旬。
弗レ覩㆓朱顏改㆒。
徒想㆓平生人㆒。
寧知安歌日。
非㆓君撤レ瑟晨㆒。
已矣余何嘆。

子と別れて幾辰ぞ、(二)塗を經ること(三)旬に盈たず。(四)朱顏の改まるを覩ず、(五)徒らに平生の人を想ふ。(六)寧ぞ知らん安歌の日、(七)君が瑟を撤するの晨に非ずや。(八)已んぬる矣余何をか歎かん、(九)春を輟めて國均を哀む。(一〇)

寧ぞ知らん安歌の日の一聯、人をして幾んど敢へて言はざらしむ。歡娯の情辭、極めて

孤遊從レ此辭。

促生悲二永路一。
早交傷二晩別一。
自三我隔二容徽一。
於レ焉徂二歳月一。
情非二山河阻一。
意似二江湖悅一。
東皐有二儒素一。
杳與二榮名一絕。
曾是違二賞心一。
曷用箴二余缺一。
眇焉追二平生一。
塵書廢不レ閱。
信此伊能已。
懷抱豈暫輟。
何以表二相思一。
貞松擅二嚴節一。

待する者をいふ　(一四) 郭峙を謂ふ　(一五) 任昉自身を謂ふ

徐徽君に贈る

促生、(一)永路を悲み、(二)早交、(三)晩別を傷む。(四)我れ容徽を隔ててより、(五)焉に歳月徂く。情は山河に阻てらるゝに非ず、意は江湖に悅ぶに似たり。東皐、(六)儒素あり、(七)杳かに榮名と絕つ。(八)曾て是れ賞心に違ふ、(九)曷ぞ用ひん余が缺を箴しむるを。(一〇)眇焉として(一一)平生を追ひ、(一二)塵書廢して(一三)閱せず。信に此に伊れ能く已まば、懷抱豈に暫くも輟めんや。(一四)何を以て相思を表せん、(一五)貞松、嚴節を擅にす。

(一) 生命の急促なるをいふ　(二) 人生行路の悠遠をいふ　(三) 幼年の交なり　(四) 晩年の離別なり　(五) 徽は善なり徐の姿容に對して言ふ、二人音容遠く隔つるの意　(六) 東方の水澤なり　(七) 素樸なる儒者を指す　(八) 榮達と名譽と也　(九) 幽賞の心をいふ　(一〇) 疑點短處を指す　(一一) 有るか無きか小くなる様をいふ　(一二) 平生の通りにやつてゆくこと　(一三) ほこりだらけの書籍なり　(一四) 心に懷く望をいふ　(一五) 表明すること

蕭諮議衍に別る

朝發富春渚。
蓄意忍相思。
涿令行春返。
冠蓋溢川坻。
望久方來萃。
悲懽不自持。
滄江路窮此。
湍險方自茲。
疊嶂易成響。
重以夜猿悲。
客心幸自弭。
中道遇心期。
親好自斯絕。

(一)郭桐廬に贈る。溪口を出でて、余を候せらる(二)。余既に未だ至らず、郭仍つて村に進む。舟を維ぐこと久しうして、郭生至る

朝に富春の渚を發し、(三)意を蓄へて(四)相思を忍ぶ。(五)涿令春を行りて返り、(六)冠蓋、(七)川坻に溢る。望むこと久しうして方めて來り萃り、(八)悲懽自から持せ(九)ず、滄江路此に窮まる、(一〇)湍險方に茲よりす。(一一)疊嶂(一二)響を成し易く、重ぬるに夜猿の悲しきを以てす。客心幸に自づから弭み、中道にして(一三)心期に遇ふ。(一四)親好斯より絶えん、(一五)孤遊此より辭せん。

題の如く轉落して、痕迹を見ず。長題は此種を以て式と爲す。

(一)名は峙時に桐廬縣の令たり　(二)訪問の意　(三)考を胸に藏むること　(四)相思の情を我慢すること　(五)涿縣の令滕撫を借りて郭生に擬する也　(六)衣冠と車蓋と也　(七)川の岸をいふ　(八)かなしみとよろこびと也　(九)我慢し得ざるをいふ　(一〇)瀨の危險なる箇處を指す　(一一)重なる峰なり　(一二)反響の多きをいふ　(一三)心に期

江干遠樹浮。
天末孤煙起。
江天自如レ合。
煙樹還相似。
滄流未レ可レ源。
高颿去何已。

洛陽城東西。
長作二經時別一。
昔去雪如レ花。
今來花似レ雪。

零陵郡に之きて、新亭に次る

江干遠樹浮び、(一)天末孤煙起る。(二)(三)江天自づから合へるが如く、(四)煙樹還相似たり。(五)滄(六)流未だ源す可からず、(七)高颿去りて何ぞ已まん。(八)

(一)江の岸をいふ　(二)天のはてをいふ　(三)一片の煙をいふ　(四)水天一に合すること　(五)煙と水と同じ色に見ゆること　(六)滄浪水を指す　(七)源に泝ること　(八)颿は帆と同じ

別詩

洛陽城の東西、長く經時(一)の別を作す。昔し去るとき雪、花の如く、今來るとき花、雪に似たり。

自然に之を得たり、故に佳なり。後人の歩を學ぶや、便ち意あるを覺ゆ。

(一)幾年月と時を過すをいふ

任昉

此道今已微。
物情棄二疵賤一。
何獨顧二衡闈一。
恨不下具二雞黍一。
得中與二故人一揮上。
懷レ情徒草草。
淚下空霏霏。
寄レ書雲間雁。
爲レ我西北飛。

桂水澄二夜氣一。
楚山清二曉雲一。
秋風雨鄉怨。
秋月千里分。
寒枝寧共採。
霜猿行獨聞。
捫レ蘿正憶レ我。
折レ桂方思レ君。

既に是として非なるを疑ふとは、跌宕にして神あり。

(一) 薪を采りにゆくこと (二) しばの戸をいふ (三) 僕は前ばらひ也從は御供(とも)也 (四) 珠玉と玳瑁とをいふ (五) 皮衣とうまと也 (六) 輕は皮衣にいひ、肥は馬にいふ (七) 車のきぬがさをいふ (八) 荒林をいふ (九) 驛傳にてもち來れる刺史の符印をいふ (一〇) 徐州の地方長官をいふ (一一) 一旦それと定めて復それではあらじと疑ふ也 (一二) 故舊遺れずの言、論語に在り (一三) 舊を思ふ道を指す (一四) 殆んど人に忘れらるゝをいふ (一五) 人情といはんが如し (一六) 缺點だらけの賤しき人を指す (一七) 衡門と同じかぶき門なり己の家をいふ (一八) 雞を殺し黍を爲りて人を馳走すること (一九) 杯を揮ろて酒を飮むこと (二〇) そこ〳〵に心を勞する樣をいふ (二一) 頻りに下る貌 (二二) 信書をことづけること

沈記室(一)を送りて夜別る

桂水夜氣(二)澄み、楚山曉雲淸し。秋風雨(三)鄉怨み、秋月千里分る。寒枝寧ろ共に採らん、霜猿行くゆく獨り聞く。蘿(四)を捫(五)して正に我を憶へ、桂(六)を折りて方に君を思はん。

(一) 記室は官名沈約の事也 (二) 夜氣なり (三) 送る者と別るゝ者と各鄉を異にす故にいふ (四) つたかづらを云ふ (五) 手にてつかまふること (六) かつらの木なり

高張更何已。
引レ滿終自持。
欲レ知二憂能老一。
爲レ視二鏡中絲一。

田家樵採去。
薄暮方來歸。
還聞二稺子說一。
有レ客款二柴扉一。
儐從皆珠玳。
裘馬悉輕肥。
軒蓋照二墟落一。
傳瑞生二光輝一。
疑是徐方牧。
既是復疑レ非。
思レ舊昔言有。

(一) 字は彥龍、南鄕舞陰の人なり能く文を屬し筆を下せば輙ち成る竟陵王の主簿より身を起して吏部尚書に到る (二) 少年の時を謂ふ (三) くつとくつの紐とをいふ (四) 琴絃を高く張ること、琴瑟空しく御に在るの意あり (五) 杯をあげて酒をなみ〳〵と注ぐこと獨酌無聊の意あり (六) 心配は人をして年寄らしむとなり (七) 鏡に映る鬢絲をいふ

張徐州謖に贈る

田家に樵採し去り、(一)薄暮に方に來り歸る。還りて稺子の說くを聞く、客あり柴扉を款く。(二)儐從(三)皆な珠玳に、(四)裘馬(五)悉く輕肥なり。(六)軒蓋、(七)墟落を照し、(八)傳瑞、(九)光輝を生ずと。疑ふらくは是れ徐方の牧か、(一〇)既に是として復た非なるかと疑ふ。(一一)舊を思ふこと(一二)昔言有り、(一三)此道今已に微なり。(一四)物情、(一五)疵賤を棄つ、(一六)何ぞ獨り衡闈を顧みん。(一七)恨むらくは雞黍を具して、(一八)故人と揮ふことを得ざりしを。(一九)情を懷いて徒に草草たり、(二〇)涙下りて空しく霏霏たり。(二一)書を寄す雲間の雁、我が爲に西北に飛べ。(二二)

女圭映二東海一。
佳麗多二異色一。
芬葩有二奇采一。
綺縞非レ無レ情。
光陰命レ誰待。
不下與二風雨一變上。
長共二山川一在。
人道則不然。
消散隨レ風改。

情無きに非ず、光陰誰に命じて待たん。風雨と與に變ぜず、長く山川と共に在り、(七)人道は則ち然らず、(八)消散、風に(九)隨つて改まる。

能く當時俳偶の習を脫す。然れども之を阮公に較ぶれば、相去ること數もて計るべからず。

㈠夜月なり　㈡西天のはてをいふ　㈢星の名　㈣かんばしき花をいふ　㈤めづらしき花なり　㈥綺はあやぎぬ也縞はしろぎぬ也文あるものと文なきものとをいふ　㈦人生の世渡りをいふ　㈧消えて散りうすること　㈨風次第にかはるをいふ

范雲

所思有り

如何有レ所レ思。
而無二相見時一。
宿昔夢二顏色一。
階庭尋二履綦一。

如何ぞ思ふ所ありて、而も相見るの時なき。(一)宿昔、顏色を夢み、階庭に(三)履綦を尋ぬ。(四)高く張りて更に何ぞ已めん、(五)滿を引きて終に自ら持つ。(六)憂の能く老いしむるを知らんと欲せば、爲に(七)鏡中の絲を視よ。

鸞鳥相追尋。千齡猶旦夕。萬世更浮沈。豈與異鄕士。瑜瑕論淺深。

㈠日の入る所にある木也山海經に見ゆ　㈡多くの皇帝をいふ　㈢古今輩出すること　㈣あとから〳〵と追ひつぐをいふ　㈤一朝一夕の如しとなり　㈥瑜は玉の全きものなり瑕は玉のきずあるものなり

昔余登大梁。西南望洪河。時寒原野曠。風急霜露多。仲冬正慘切。日月少精華。落葉縱橫起。飛鳥時相過。搔首廣川陰。懷歸思如何。常願反初服。閒步潁水阿。

昔余、大梁に登り、西南、洪河を望む。時寒うして原野曠しく、風急にして霜露多し。㈠仲冬正に慘切に、㈡日月精華少し。㈢落葉縱橫に起り、飛鳥時に相過ぐ。首を搔く㈣廣川の陰、歸るを懷ふ思如何ん、常に願ふ初服に反り、㈤閒に潁水の阿を歩せんことを。㈥

㈠陰暦の十一月也　㈡身にしみさるほどに寒きをいふ　㈢極めて花やかなる光をいふ　㈣踟蹰する様をいふ　㈤最初の服即仕官以前の服装をいふ　㈥潁川をいふむかし許由が耳を洗ひし處なり

宵月輝西極。

宵月、㈠西極に輝き、㈡女圭、㈢東海に映る。佳麗異色多く、㈣芬葩奇㈤采有り。㈥綺縞

中夕弄二清琴一。
戾戾曙風急。
團團明月陰。
孤雲出二北山一。
宿鳥驚二東林一。
誰謂人道廣。
憂慨自相尋。
寧知霜雪後。獨見二松竹心一。

る。(七)孤雲北山より出で、(八)宿鳥東林に驚く。誰か謂ふ人道廣しと、憂慨自から相尋ぬ。寧ぞ知らん霜雪の後、獨り松竹の心を見るを。

(一)晉の阮籍なり　(二)いたましき感情をいふ　(三)日没頃に當るをいふ　(四)戾は至なり風の吹き來る形容　(五)朝風なり　(六)まん圓き貌　(七)一片のはなれ雲なり　(八)宿鳥をいふ

少年學二擊劍一。
從レ師至二幽州一。
燕趙兵馬地。
唯見二古時邱一。
登レ城望二山水一。
平原獨悠悠。
寒暑有二往來一。
功名安可レ留。
若木出二海外一。
本自二丹水陰一。
羣帝共上下。

少年にして擊劍を學び、師に從つて幽州(一)に至る。燕趙兵馬の地、唯古時の邱を見る。城に登りて山水を望めば、平原獨り悠悠(二)たり。寒暑往來有り、功名安くに留むべき。

(一)幽州をいふ古の九州の一也　(二)遙に遠き貌

(一)若木海外より出で、本と丹水の陰よりす。(二)羣帝(三)共に上下し、(四)鸞鳥相追尋す。千齡猶ほ(五)旦夕、萬世更に浮沈す。豈に異鄉の士と與に、(六)瑜瑕、淺深を論ぜん。

西北秋風至。
楚客心悠哉。
日暮碧雲合。
佳人殊未來。
露彩方泛豔。
月華始徘徊。
寶書爲君掩。
瑤琴詎能開。
相思巫山渚。
悵望陽雲臺。
高鑪絕沈燎。
綺席生浮埃。
桂火日千里。
因之平生懷。
歲暮懷感傷。

休上人別を怨む

西北秋風至り、(一)楚客心悠なる哉。日暮碧雲合し、(二)佳人殊に未だ來らず。(三)露彩方に豔を泛べ、(四)月華始めて(五)徘徊す。寶書君が爲に掩ふ、瑤琴詎ぞ能く開かん。相思ふ(六)巫山の渚、悵望す陽雲の臺。(七)(八)高鑪、(九)沈燎を絕ち、(一〇)綺席、(一一)浮埃を生ず。桂火日に千里、之に平生の懷を因す。

佳句あり。

(一)楚人宋玉の秋を悲みしことなどを思ひ比べたるならん　(二)相思の美人なり　(三)露の光なり　(四)月光を指す　(五)いざよひ出づるをいふ　(六)美人に關係ある地處也　(七)同上　(八)香鑪の事　(九)沈香を燒くこと　(一〇)綾ぎぬのしとねをいふ　(一一)ほこりのうきあがるをいふ

(二)阮公の詩に效ふ

歲暮、(一)感傷を懷き、(二)中夕、(三)清琴を弄す。(四)戾戾として(五)曙風急に、(六)團團として明月陰く

治亂推二冥數一。
種レ苗在二東皐一。
苗生滿二阡陌一。
雖レ有二荷レ鉏倦一。
濁酒聊自適。
日暮巾二柴車一。
路闇光已夕。
歸人望二煙火一。
稚子候二簷隙一。
問レ君亦何爲。
百年會有レ役。
但願桑麻成。
蠶月得二紡績一。
素心正如レ此。
開レ徑望二三益一。

嚴會をいふ　(二五) 天の運命なり

陶徵君潛の田居 (一)

苗を種ゑて東皐(二)に在り、苗生じて阡陌(四)に滿つ。鉏(五)を荷うて倦むこと有りと雖ども、濁酒聊か自ら適す(六)。日暮、柴車を巾り(七)、路闇くして光已に夕なり。歸人煙火(八)を望み、稚子(九)簷隙(一〇)に候つ。君に問ふ亦何をか爲すかと、百年會ず役有らん。但願ふ桑麻の成りて(一一)、蠶月(一二)紡績(一三)を得んことを。素心(一四)正に此の如し、徑を開いて三益(一五)を望む。

彭澤の清逸を得たり。

(一) 字は淵明晉の處士にして宋に徵せらる故に徵君といふ (二) 田園の居を指す (三) 田居の東にある澤をいふ (四) 田間の路なり東西を陌といひ南北を阡といふ (五) すきの如き農具也 (六) 心にかなふこと (七) 幕にて蔽ふこと (八) 炊事の煙火なり (九) をさなき子供をいふ (一〇) のき下なり (一一) 成長すること (一二) 養蠶の月なり (一三) 絲をうみつむぐこと (一四) 平素の心願をいふ (一五) 三益友をいふ論語の「直を友とし諒を友とし多聞を友とするは益なり」より出づ

幽并逢虎據。
伊余荷寵靈。
感激徇馳驚。
雖無六奇術。
冀與張韓遇。
甯戚扣角歌。
桓公遭乃擧。
荀息冒險難。
實以忠貞故。
空令日月逝。
愧無古人度。
飲馬出城壕。
北望沙漠路。
千里何蕭條。
白日隱寒樹。
投袂既憤懣。
撫枕懷百慮。
功名惜未立。
玄髪已改素。
時哉苟有會。

ば張韓と遇はん。(一三)甯戚、(一四)角を扣いて歌へば、(一五)桓公遭うて乃ち擧ぐ。(一六)荀息險難を冒すは、實に忠貞の故を以てす。空しく日月をして逝かしむ、愧づらくは古人の度なきを。(一七)馬に飲かはんとして城壕に出で、(一八)北のかた沙漠の路を望む。千里何ぞ蕭條たる、(一九)白日、寒樹に隱る。(二〇)袂を投じて既に憤懣し、(二一)枕を撫して百慮を懐く。功名惜むらくは未だ立たざるに、(二二)玄髪已に素に改まる。(二三)時なる哉苟に會あり、(二四)治亂、冥數を推さん。(二五)

末段悲壯、大尉を去ること遠からず。

(一) 字は越石、中山の人なり、少うして雄豪を以て名を著はす (二) 卽西晉を指す (三) 厄運なり卽ち陽雜を謂ふ (四) 殺氣なり (五) 秦は西安府鄴は彰德府 (六) 侵略の意 (七) 幽は北京、并は平陽府 (八) 英雄の根據となるをいふ (九) 特別の寵遇をいふ (一〇) 有がたく感じて興奮するをいふ (一一) 奔走の意 (一二) 陳平が六たび奇計せし故事をいふ (一三) 張良と韓信とをいふ (一四) 衞の人也甯越ともいふ、牛角を叩いて歌ひしことあり (一五) 齊の君なり (一六) 晉の獻公の臣にして奚齊の傅たり事は左傳に詳なり (一七) 才略をいふ (一八) 城外のほりをいふ (一九) さびしき形容 (二〇) 奮迅の態度なり (二一) 不平不滿の意 (二二) 黑髪なり (二三) 白髪と爲るをいふ (二四)

妾身長別離。
願ニ一見ニ顏色一。
不レ異ニ瓊樹枝一。
兎絲及ニ水萍一。
所レ寄終不レ移。

紈扇如ニ團月一。
出レ自ニ機中素一。
畫作ニ秦王女一。
乘レ鸞向ニ煙霧一。
彩色世所レ重。
雖レ新不レ代レ故。
竊愁秋風至。
吹ニ我玉階樹一。
君子恩未レ畢。
零落在ニ中路一。

皇晉遭ニ陽九一。
天下橫ニ氛霧一。
秦趙值ニ薄蝕一。

㊀雜曲の歌辭也 ㊁今の大同府にあり ㊂のきさきをいふ ㊃香草なり ㊄路程をいふ ㊅天の一方のはてをいふ ㊆玉の木の枝を折るよりも猶難きを意味す ㊇蔦蘿(つたかづら)なり ㊈浮草なり ㊉蔦は木に寄り萍は水に寄るをいふ ⑪貞節の心を動かさゞるに譬ふ

(一)班婕妤扇を詠ず

紈扇(二)、團月(三)の如く、機中(四)の素(五)より出づ。畫いて秦王の女を作り、鸞に乘じて煙霧に向ふ。彩色(六)は世の重んずる所、新と雖ども故に代へず、竊に愁ふ秋風至り、我が玉階(七)の樹を吹き、君子恩未だ畢らざるに、零落(八)して中路(九)に在らんことを。

㊀漢の成帝の時の女官也 ㊁絹張の團扇なり ㊂まんまるき月をいふ ㊃はた也 ㊄白ぎぬ也 ㊅五色のいろどりをいふ ㊆君王を指す ㊇おちぶるゝをいふ ㊈路上に棄てらるゝをいふ

(一)劉太尉琨亂を傷む

皇晉(二)、陽九(三)に遭ひ、天下氛霧(四)横はる。秦趙(五)、薄蝕(六)に値ひ、幽并(七)、虎據(八)に逢ふ。伊れ余れ(九)寵靈を荷ひ、(一〇)感激して(一一)馳騖に徇ふ。(一二)六奇の術無しと雖ども、冀はく

悲風撓二重林一。
雲霞肅川漲。
歳晏君如何。
零涙露二衣裳一。
玉柱空掩レ露。
金尊坐含レ霜。
一聞二苦寒奏一。
再使二豔歌傷一。

て傷ましむ。

蕭瑟なり。

(一) 楊子江と漢水とをいふ (二) 楚國の要塞なり (三) きりの木とひばの木とをいふ (四) 縣の名 (五) 要塞につゞく郊野をいふ (六) 尊は樽也 (七) 晏闌なり (八) あだめきたる歌をいふ

古離別(一)

雜擬共に三十首、今五首を存す。

遠與レ君別者。
乃至二雁門關一。
黄雲蔽二千里一。
遊子何時還。
送レ君如二昨日一。
簷前露已團。
不レ惜二蕙草晩一。
所レ悲道里寒。
君在二天一涯一。

遠く君と別れては、乃ち雁門關(二)に至る。黄雲千里を蔽ふ、遊子何の時か還らん。君を送ること昨日の如きに、簷(三)前露已に團なり。蕙草(四)の晩きを惜まず、悲む所は道里(五)の寒きなり。君は天の一(六)涯に在り、妾が身長く別離す。一たび顔色を見んことを願へども、瓊樹(七)の枝に異ならず。兎絲(八)と水萍(九)と、寄る所(一〇)終に移らず(一一)。淮南子に曰く、夫れ萍は根を水に樹ゑ、木は根を土に樹うるは、天地の性也。此に借りて以て己が志の貞なるを表す。

中座瞰二蜿虹一。
俛伏視二流星一。
不レ尋二遐怪極一。
則知二耳目驚一。
日落長沙渚。
曾陰萬里生。
藉レ蘭素多レ意。
臨レ風默含情。
方學二松柏隱一。
羞レ逐二市井名一。
幸承二光誦末一。
伏思レ託二後旂一。

奉レ詔至二江漢一。
始知二楚塞長一。
南關繞二桐柏一。
西嶽出二魯陽一。
寒郊無レ留レ影。
秋日懸二清光一。

誦の末を承け、伏して(一九)後旂に託せんことを思ふ。

㊟ (一) 字は文通、濟陽考城の人なり、齊の時秘書監と爲り梁に入りて金祿大夫に進め (二) 將軍の名號なり (三) 廣成子を云ふ軒黨の時の人にして崆峒山の石室中に隱居せり (四) 淮南王劉安をい (五) 道家の書也 (六) 鸞は鳥の名鳳に似て五采あり青白色也、或は云ふ鳳の雛なりと (七) 翕は合也艴は赤也、そろうて赤きをいふ (八) 色の青青たるをいふ (九) 赤色の大氣をいふ (一〇) まとひせまること (一一) はるかにくらきをいふ (一二) 長く横はれる虹(にじ)をいふ (一三) うつぶすをいふ (一四) 大にあやしきこと (一五) 層陰なり雲の幾重もかさなりて空の陰るをいふ (一六) 松栢(ひば)の間にかくるゝをいふ (一七) 俗間の名譽をいふ (一八) 光榮ある吟誦をいふ (一九) 旂は旌と同じはたじるし也御供の中に身を托するをいふ

荊山を望む

詔を奉じて(一)江漢に至り、始めて(二)楚塞の長きを知る。南關、(三)桐柏を繞らし、西嶽、(四)魯陽より出づ。(五)寒郊、影を留むること無く、秋日清光を懸く。悲風重林を撓め、雲霞、肅川に漲る。歳晏れて君如何ん、零淚、衣裳を霑す。玉柱空しく露に掩はれ、(六)金尊坐ろに霜を含む。一たび(七)苦寒の奏を聞き、再たび(八)讌歌をし

廣成愛神鼎。
淮南好丹經。
此山具鸞鶴。
往來盡仙靈。
瑤草正翕赩。
玉樹信蔥青。
絳氣下縈薄。
白雲上杳冥。

卷十三

梁詩

江淹（一）

文通頗る能く修飾すれども、而も風骨未だ高からず。

（二）冠軍建平王に從つて、廬山の香爐峰に登る

（三）廣成、神鼎を愛し、（四）淮南は丹經を好む。（五）此山鸞鶴を具し、（六）往來盡く仙靈なり。瑤草正に翕赩に、（七）玉樹信に蔥青なり。（八）絳氣下に縈薄し、（九）白雲上に杳冥なり。（一〇）中座して蜿虹を瞰、（一一）（一二）俛伏して流星を視る。（一三）遐怪の極を尋ねず、（一四）則ち耳目の驚くを知る。日は落つ長沙の渚、（一五）曾陰萬里生ず。蘭を藉きて素より意多く、風に臨みて默して情を含む。方に松柏の隱を學び、（一六）市井の名を逐ふを羞づ。（一七）幸に光（一八）

表レ閭欽二逸軌一。
式レ墓禮二眞魂一。
化塗終眇默。
神理曖猶存。
塵經未レ輟レ幌。
高衡已委レ門。
日蕪子雲舍。
徒望董生園。
華陰無二遺布一。
楚席有二靈樽一。
元泉倘能慰。
長夜且勿レ論。

(一)閭を表して(二)逸軌を欽ひ、墓に(三)式して眞魂を禮す。(四)化塗終に(五)眇默し、(六)神理(七)曖として猶ほ存す。(八)塵經未だ(九)幌を輟めず。(一〇)高衡已に門に委す。日に(一一)蕪す(一二)子雲の舍、徒に望む(一三)董生の園。華陰遺布無く、楚席靈樽有り。元泉倘ほ能く慰めん。長夜且つ論ずること勿かれ。

華陰の句は、王烈が牛を盜みし者の布を遺てし事を用ふ。

(一) 里門を閭といふ之を表はすは賢を尊ぶの意也　(二) 世に勝れたる行跡をいふ　(三) 車の前の横木に手をつきて敬意を表すること　(四) 治化の道を指す　(五) 眇は妙と通じ精微也默は幽靜也　(六) 靈妙なる政治をいふ　(七) 不明の貌おぼろげなるをいふ　(八) 塵の積りし經書をいふ　(九) とばりなり　(一〇) 門の上に横たふかぶきをいふ　(一一) 荒るゝこと　(一二) 漢の揚雄の事なり　(一三) 漢の董仲舒の事也

忘レ歸屬ニ蘭杜一。懷レ祿寄ニ芳荃一。眷言采ニ三秀一。徘徊望ニ九仙一。

廉公失ニ權勢一。
門館有ニ虛盈一。
貴賤猶レ如レ此。
況乃曲池平。
高車塵未レ滅。
珠履故餘聲。
賓階綠錢滿。
客位紫苔生。
誰當ニ九原上一。
鬱鬱望ニ佳城一。

冬節の後、(一)丞相の第に至り、世子に詣る(二)車中の作

齊書に、豫章の王嶷薨ず、丞相を贈らる。揚州の牧子廉世子たり。

廉公、權勢を失ひ、門館(三)、虛盈(四)有り、貴賤猶ほ此の如し。況んや乃ち曲池の平なるをや。高車塵未だ滅せず、珠履(五)故らに餘聲あり。賓階(六)綠錢滿ち、客位(七)紫苔生ず。誰か九原の上に當り、鬱鬱(八)として佳城(九)を望む。

史記廉頗の傳に曰く、廉頗勢を失ふの時、故客盡く去れり。復たび將と爲るに及び、又復た至る。

(一) 冬至の節なり (二) 謁見すること (三) 食客の詰所 (四) 滿ちたりかけたりする事 (五) 珠にて作れる履（クツ）をいふ (六) 賓客の上る階段を指していふ (七) 客の居るべき位置也 (八) 憂ふる貌 (九) 棺椁をいふ

竟陵王が劉瓛が墓を經るに奉和す

朋來握二石髓一。
賓至駕二輕鴻一。
都令二人徑絕一。
惟使二雲路通一。
一擧凌二倒景一。
無レ事レ適二華嵩一。寄レ言賞心客。歲暮爾來同。

に外物に作るを可とす (一〇) 光なく形なき道をいふ心を自然に游ばす事也 (一一) 仙藥の名、柔滑なること飴の如しといふ (一二) 人間の通行するみちなり (一三) 神仙の通行する所なり (一四) 一たび足をあぐるをいふ (一五) 天上なり、身、日月の上に在れば、日月反つて下より照す之を倒景といふ (一六) 華陰山と嵩山とを指す (一七) 幽賞の心ある人なり (一八) 晩年に喩ふ

早く定山を發す

夙齡愛二遠壑一。
晚莅見二奇山一。
標レ峰綵虹外。
置レ嶺白雲間。
傾壁忽斜竪。
絕頂復孤圓。
歸レ流海漫漫。
出レ浦水濺濺。
野棠開未レ落。
山櫻發欲レ然。

夙齡(一)、遠壑を愛し、晚莅(二)、奇山を見る。峯を標す彩虹(三)の外、嶺を置く白雲の間。傾壁忽ち斜に竪ち、絕頂復た孤り圓なり。流を歸して海漫漫(四)に、浦を出でて水濺濺(五)たり。野棠開いて未だ落ちず、山櫻發いて然えんと欲す。歸を忘れて蘭杜に屬し、祿を懷うて芳荃(六)に寄す。眷みて言三秀(七)を采り、徘徊して九仙を望む。

通體對偶、亦一格を成す。

(一) 少年なり (二) 晚年といはんが如し (三) 五色の虹（にじ）なり (四) ひろ〱と遠き形容 (五) 水のそゝぐ貌 (六) あやめ草なり (七) 芝草なり

秦皇御二宇宙一。漢帝恢二武功一。
歡娛人事盡。情性猶未レ充。
銳二意三山上一。託二慕九霄中一。
既表二祈年觀一。復立二望僊宮一。
寧爲二心好レ道。直由二意無一レ窮。
曰余知二止足一。是願不レ須レ豐。
遇下可二淹留一處上。便欲レ息二微躬一。
山嶂遠重疊。竹樹近蒙籠。
開レ襟濯二寒水一。解レ帶臨二淸風一。
所レ累非二物外一。爲レ念在二玄空一。

秦皇(二)、宇宙を御し(三)(四)、漢帝、武功を恢にす(五)。歡娛人事盡くれども(六)、情性猶ほ未だ充たず。意を三山の上に銳くし(七)(八)、慕を九霄の中に託す(九)。既に祈年觀を表し(一〇)、復た望僊宮を立つ(一一)。寧ぞ心、道を好むと爲んや、直だ意の窮まりなきに由るのみ。曰に余、止足を知る(一二)、是願、豐なるを須ひず。淹留す可き處に遇はば(一三)、便ち微躬を息めんと欲す(一四)。山嶂遠く重疊し(一五)(一六)、竹樹近く蒙籠す(一七)。襟を開いて寒水に濯ぎ、帶を解きて淸風に臨む。累とする所物外に非す(一八)(一九)。念と爲すは玄空に在り(二〇)。朋來りて石髓を握り(二一)、賓至りて輕鴻に駕す。都て人徑をして絕えしめ(二二)、惟だ雲路をして通ぜしむ(二三)。一擧倒景を凌ぎ(二四)(二五)、華嵩に適くを事とする無し(二六)。言を寄す賞心の客(二七)、歲暮爾來り同じうせよ(二八)

(一) 道術を修むる人士の稱　(二) 秦の始皇を指す　(三) 天下なり　(四) 治むること　(五) 漢の武帝なり　(六) 娛樂なり　(七) 心中なり　(八) 蓬萊、方丈、瀛洲なり卽ち東海の三神山をいふ　(九) 九天なり天の最高所をいふ　(一〇) 秦の穆公の走れる所　(一一) 漢の武帝の作れる所　(一二) 止まる所と足る所となり　(一三) 逗留の意　(一四) 己を指す謙辭也　(一五) 嶂は峰と同じ　(一六) かさなること　(一七) 茂り合ふこと　(一八) 心の累(わづらひ)なり　(一九) 一本

吏部信才傑。
文峰振二奇響一。
調與二金石一諧。
思逐二風雲一上。
豈言陵霜質。
忽隨二人事一往。
尺璧爾何寃。
一旦同二丘壤一。

噭噭夜猿鳴。
溶溶晨霧合。
不レ知二聲遠近一。
惟見二山重沓一。
既歡二東嶺唱一。
復佇二西巖答一。

(一)吏部、信に(二)才傑、(三)文峯、(四)奇響を振ふ。調は金石と諧ひ、思は風雲を逐うて上る。豈に言はんや(五)陵霜の質なり、忽ち人事に隨つて往く。(六)尺璧(七)爾何の(八)寃ぞ、(九)一旦(一〇)丘壤を同じうす。

三四語、能く謝朓の詩を狀す。

(一) 吏部なり謝朓かつて此官に任ぜり (二) 才氣ある傑物なり (三) 文藻の高きを山に譬へていふ (四) 人の意表に出づるほどの詩の響あるをいふ (五) 霜をしのぐこと (六) さしわたし一尺の璧(たま)なり朓に譬ふ (七) 尺璧を指して謝に擬す (八) 無實の罪也 (九) 一朝に同じ (一〇) 丘陵の土卽ち墳墓を意味す

石塘瀨に猿を聽く

(一)噭噭として夜猿鳴き、(二)溶溶として晨霧合ふ。聲の遠近を知らず、惟だ山の(三)重沓するを見る。既に東嶺の(四)唱を歡び、復た西巖の(五)答を佇つ。

(一) 呼ぶ貌 (二) たゞよふ貌 (三) 重り合ふをいふ (四) 先だちてとなふること (五) 之に和すること

(一)沈道士の館に遊ぶ

豈止歲云暮。
若蒙二西山藥一。
頽齡倘能度。

生平少年日。
分レ手易二前期一。
及レ爾同二衰暮一。
非二復別離時一。
勿レ言一尊酒。
明日難二重持一。
夢中不レ識レ路。
何以慰二相思一。

物に驚けるくじかをいふ (一六) 渡り鳥なり雁の如きをいふ (一七) かや葺の家のおねをいふ (一八) ものがなしく啼くみゝづくをいふ (一九) 冬のうさぎなり (二〇) 夕ぐもりなり (二一) 頂なる岡なり (二二) 白の生絹(きぎぬ)をいふ (二三) 光陰即ち月日をいふ (二四) 老年なり

(一)范安成に別る

(二)生平少年の日、(三)手を分つとも前期し易し。爾と(四)衰暮を同じうす、復た別離の時に非ず。言ふこと勿かれ(五)一尊の酒、明日重ねて(六)持し難しと。夢中、路を識らず、何を以て(七)相思を慰めん。

一片の眞氣流出し、句句轉じ、字字厚し、十九首を去ること遠からず。

(一) 名は岫、字は棼賓齊の時に安成内史と爲る (二) 平常といはんが如し (三) 別時に於て會期を約するをいふ (四) 年老いて氣力のおとろふるをいふ (五) 尊は樽たる也 (六) 手に把りて酌みがたきをいふ (七) 相思の人即己を指す

謝朓を傷む

陳王鬭レ雞道。安仁采レ樵路。東郊豈異レ昔。聊可レ閒ニ余步一。野徑既盤紆。荒阡亦交互。槿籬疎復密。荊扉新且故。樹頂鳴ニ風飇一。草根積ニ霜露一。驚麏去不レ息。征鳥時相顧。茅棟嘯ニ愁鴟一。平岡走ニ寒兎一。夕陰帶ニ層阜一。長煙引ニ輕素一。飛光忽我遒。

東園に宿す

陳王鶏を鬭はすの道、安仁樵を采るの路。東郊豈に昔に異ならんや、聊か余が歩を閒る可し。野徑既に盤紆し、荒阡亦交互す。槿籬疎復た密に、荊扉新且つ故なり。樹頂、風飇鳴り、草根、霜露積る。驚麏去りて息まず、征鳥時に相顧みる。茅棟、愁鴟嘯き、平岡、寒兎走る。夕陰、層阜に帶び、長煙、輕素を引く。飛光忽ち我遒、豈止だ歳云に暮るゝのみならんや。若し西山の藥を蒙らば、頹齡倘は能く度らん。

潘岳の詩に曰く、東郊より出でて、憂心搖搖たり。彼の萊田に遵ひて、言に其樵を采ると。○西山の藥は、魏文の詩に見ゆ。

(一) 名は岳、晉の中年の人なり (二) 薪なり (三) 野中の小路なり (四) ぐる〳〵とまはるをいふ (五) 荒れたる田間の路なり (六) 入り交ること (七) 木槿むくげのまがき (八) 目のあらきこと (九) 目のつまること (一〇) いばらの戸なり (一一) ふるさをいふ (一二) 木の頂上をいふ (一三) 野分の風なり (一四) 草の根本ねもとなり (一五)

俯映石磷磷。
紛吾隔囂滓。
寧假濯衣巾。
願以瀑溪水。
霑君纓上塵。

秋風吹廣陌。
蕭瑟入南闈。
愁人掩軒臥。
高窗時動扉。
虛館淸陰滿。
神宇曖微微。
網蟲垂戶織。
夕鳥傍櫩飛。
纓珮空爲忝。
江海事多違。
山中有桂樹。
歲暮可言歸。

とはること (七)水の淺くして能く淸むをいふ (八)明鏡といはんが如し水面の平靜なるに喩ふ (九)八尺を仞といふ (一〇)游泳する魚類なり (一一)濟水の下流をいふ (一二)山東の北部を流るゝ川の名 (一三)舟渡し場をいふ (一四)新安江に浮ぶを指す (一五)玉石の光る貌 (一六)下の囂滓に係る其多きをいふ也 (一七)滓はかす也かまびすしく且つ汚れたる浮世をいふ (一八)水の流るゝ貌 (一九)冠の紐をいふ

學省に直して愁臥す

學省は國學也。

秋風廣陌(一)を吹き、蕭瑟(二)として南闈(三)に入る。愁人軒を掩うて臥し、高窗時に扉を動かす。虛館(四)淸陰滿ち、神宇(五)曖くして微微(六)たり。網蟲(七)戶に垂れて織り(八)、夕鳥櫩(九)に傍うて飛ぶ。纓珮(一〇)空しく忝かしむることを爲し、江海(一一)事多くは違ふ。山中、桂(一二)樹有り、歲暮、言に歸る可し。

詩品自づから在り、是れ文選の體なり。

(一)廣小路なり (二)寂しき貌 (三)宮中の小門を闈といふ (四)がらんどうの家をいふ (五)神々しきのき下をいふ (六)ぼんやりとかすかなるをいふ (七)網を作る蟲即ち蜘蛛（くも）なり (八)巧に縱橫に網を張るをいふ (九)檐に同じのきなり (一〇)冠の紐と佩玉なり猶衣冠といはんが如し (一一)世間なり (一二)かつらの木なり

河漢縱且橫。
北斗橫復直。
星漢空如レ此。
寧知ニ心有一レ憶。
孤曖曖不レ明。
寒機曉猶織。
零淚向レ誰道。
雞鳴徒歎息。

(二)河漢は縱に且つ橫に、(三)北斗橫に復た直し、(四)星漢空しく此の如く、寧ぞ心に憶ふこと有るを知らん。孤燈、(五)曖として明ならず、(六)寒機、曉に猶ほ織る。(七)零淚誰に向つて道はん、鷄鳴いて徒らに(八)歎息す。

㊀ 雜曲の歌辭なり ㊁ 天の川也 ㊂ 北斗七星なり ㊃ 北斗星と河漢とをいふ ㊄ 暗き貌 ㊅ 冬の機（はた）なり ㊆ 零は落也おつる涙をいふ ㊇ ためいきをつくこと

(一)新安江至りて清く、淺深底を見る、(二)京邑の(三)遊好に貽る

眷言訪ニ舟客一。
茲川信可レ珍。
洞澈隨ニ清淺一。
皎鏡無ニ冬春一。
千仞寫ニ高樹一。
百丈見ニ遊鱗一。
滄浪有レ時濁。
清濟涸無レ津。
豈若ニ乘レ斯去一。

眷みて(四)言舟客を訪ふ、(五)茲川信に珍とす可し。(六)洞澈、(七)清淺に隨ひ、(八)皎鏡、冬春無し。千仞高樹を寫し、(一〇)百丈遊鱗を見る。(一一)滄浪時ありて濁り、(一二)清濟涸れて(一三)津無し。豈に(九)斯に乘じて去るに若かんや、俯して映ず石の(一五)磷磷たるに。(一六)紛として吾、(一七)囂滓を(一四)隔つ、寧ぞ衣巾を濯ふことを假らん。願はくば(一八)潺湲たる水を以て、君が(一九)纓上の塵を霑さん。

㊀ 川の名 ㊁ 建康の都をいふ ㊂ 遊び仲間を指す ㊃ 同舟の人をいふ ㊄ 新安江なり ㊅ 底まですき

家令の詩、之を鮑謝に較ぶるに、性情聲色、倶に一格を讓る矣。然れども蕭梁の代に在りては、亦大家を推す。邊幅尙ほ闊く、詞氣尙ほ厚く、能く古詩の一脈を存するを以て也。爾時、江屯騎、何水曹各自づから家を成す、以て鼎足たるべし。○水部名句極めて多し、然れども漸く近體に入る。

(一) 字は休文、吳興武康の人なり、聰明人に過ぐ、太子家令と爲り吏部に遷り後尙書僕射と爲る

臨高臺

高臺不レ可レ望。
望遠使二人愁一。
連山無二斷絕一。
河水復悠悠。
所思竟何在。
洛陽南陌頭。
可レ望不レ可レ見。
何用解二人憂一。

高臺望む可からず、望遠くして人をして愁へしむ。連山、(一)斷絕無く、河水復た(二)悠悠たり。(三)所思竟に何くにか在る、(四)洛陽(五)南陌の頭。望む可くして見る可からず、何ぞ用ひん人の憂を解くを。

(一) 中間の斷るゝをいふ　(二) 遙かに遠き形容　(三) 思ふ所の人を指す　(四) 東都の名　(五) 南の市街をいふ

(一)夜夜の曲

拂レ簷應レ有レ意。
偏宜二桃李人一。

星、遠戍に依り、斜月、平林に半なりの二語、澹遠にして諷す可し。此に摘錄す。

(一)名は繹字は世誠、武帝の第七子也　(二)のき前の柳なり　(三)花の咲く木なり　(四)櫻に近く依り傍ふこと　(五)白粉の色蓋し美人の顏をいふ　(六)赤き手ぬぐひ也蓋し美人の持つ物也　(七)簾內の人影をいふ　(八)風吹く也　(九)ざしきのほこり也　(一〇)顏色の桃李に似たる人を指す

折楊柳

巫山巫峽長。
垂柳復垂楊。
同心且同折。
故人懷二故鄕一。
山似二蓮花豔一。
流如二明月光一。
寒夜猿聲徹。
遊子淚霑レ裳。

巫山巫峽長く、垂柳復た垂楊。同(一)心且つ同(二)折し、故(三)人、故鄕を懷ふ。山は蓮花の豔(四)に似、流は明月の光の如し。寒夜猿聲徹し、遊子淚、裳(五)を霑す。上篇に連ねて、此種の音節は、竟に是れ五言の近體なり矣。古詩の亡ぶる、齊梁の間に亡ぶ。唐の陳射洪、起りて之を廓淸す。文は昌黎を得、詩は射洪を得て、挽回の功小ならず。

(一)一つ心をいふ　(二)一緒に折り取るをいふ　(三)故舊の人を指す　(四)艷麗と艷しろゝはしきをいふ　(五)下裳なりはかまをいふ

(一)沈約

輕風時入ㇾ襟。落花還就ㇾ影。驚蟬乍失ㇾ林。遊魚吹二水沫一。神蔡上二荷心一。翠竹垂二秋采一。丹棗映二疎砧一。無ㇾ勞二夜遊曲一。寄ㇾ此託二微吟一。

翠竹、秋采を垂れ、丹棗、疎砧に映ず。夜遊の曲を勞すること無く、此に寄せて微吟を託す。

(一)西に傾きたる日影をいふ (二)行くことの疾きをいふ日脚のすみやかなる事也 (三)溜池のつゝみ也 (四)半分かげの出來るをいふ (五)高く成長したる梧桐あをぎりの木なり (六)水面の泡沫あわをいふ (七)龜なり四靈の一也故に神といふ (八)蓮葉の中央をいふ (九)秋色といはんが如し (一〇)赤く熟したるなつめなり (一一)時時用ふる砧きぬたのこと (一二)煩はさゞるをいふ (一三)我が吟詠を此に託すと也

(一)元帝

陽雲樓の簷柳を詠ず(二)

楊柳非二花樹一。依ㇾ樓自覺ㇾ春。枝邊通二粉色一。葉裏映二紅巾一。帶ㇾ日交二簾影一。因ㇾ吹掃二席塵一。

楊柳、花樹に非ざれども、樓に依りて自づから春を覺ゆ。枝邊、粉色通じ、葉裏、紅巾映ず、日を帶びて簾影を交へ、吹くに因りて席塵を掃ふ。簷を拂ふ應に意有るなるべし、偏に桃李の人に宜し。

楊御を詠ずる者、唐人佳句甚だ多し。然れども梁元の二語の天然の致あるに如かず。○落

高臺半行雲。
望望高不レ極。
草樹無二參差一。
山河同一色。
彷彿洛陽道。
道遠難二別識一。
玉階故情人。
情來共相憶。

斜日晚駸駸。
池塘生二半陰一。
避レ暑高梧側。

臨高臺

高臺半ば行雲(一)、望み望めば高さ極まらず。草樹參差(二)たる無く、山河同じく一色。彷彿(三)たる洛陽の道、道遠くして別識(四)し難し。玉階の故情(五)の人、情(六)來らば共に相憶はん。

山河同じく一色とは、自づから是れ登高の遠望、神理あり。少陵の登塔に云ふ、俯視すれば但た一氣、焉んぞ能く皇州を辨ぜんと。更に雄跨數倍するを覺ゆ。

㊀半分以上行く雲　㊁長短不齊の事なく皆一樣なるをいふ　㊂不明なる形容　㊃見分くること　㊄ふるき馴染の人を指す　㊅人の字を略す

納涼

斜日(一)晚に駸駸(二)たり、池塘(三)、半陰(四)を生ず。暑を避く高梧(五)の側、輕風時に襟に入る。落花還た影に就き、驚蟬乍ち林を失ふ。遊魚、水沫(六)を吹き、神蔡(七)、荷心(八)に上る。

び打つは天子躬耕の儀式なりとか　(一四)衆民をいふ

簡文帝(一)

詩、蕭梁に至りて、君臣上下、惟だ艶情を以て娯と爲し、温柔敦厚の旨を失ひ、漢魏の遺軌、蕩然として地を拂へり矣。故に選する所略に從ふ。

折楊柳(二)

楊柳亂成レ絲。
攀折上春時。
葉密鳥飛礙。
風輕花落遲。
城高短簫發。
林空畫角悲。
曲中無二別意一。
併是爲二相思一。

楊柳亂れて絲を成し、攀折(三)す上春(四)の時。葉密にして鳥飛ぶこと礙げられ、風輕くして花落つること遲し。城高くして短簫(五)發し、林空しくして畫角(六)悲し。曲中、別意(七)なく、併せて(八)是れ相思(九)と爲す。

風輕くして花落つること遲しの五字雋絶なり。

(一)名は綱字は世瓚武帝の第三子也六歳にして能く文を屬せしといふ　(二)樂府の曲名にして、湘東王に和する三曲の一也　(三)枝によぢて之を折ること　(四)早春なり　(五)多くの短管を備ふる笛也　(六)文彩を刻める一種の吹きもの也　(七)別箇の意味なしと也　(八)どちら共にといふに同じ　(九)相思ふ中をいふ

律中二方星鳥一、
千畝士膏紫。
萬頃陂色縹。
嚴レ駕佇二霞昕一。
浥レ露逗二光曉一、
啓レ行天猶暗。
伐レ鼓地未レ悄、
蒼龍發蟠蜿。
青旂引窈窕、
仁化洽二孩蟲一、
德令禁二胎夭一。
耕藉乘二月映一。
遺滯指二秋杪一。
年豐廉讓多。
歲薄禮節少。
公卿秉二耒耜一。
庶甿荷二鋤耰一、
一人慙二百王一。
三推先二億兆一。

り。(九)駕を嚴めて(一〇)霞昕に佇み、露に浥うて(一一)光曉に逗まる。(一二)行を啓けども天猶ほ暗く、(一三)鼓を伐てども地未だ悄へず。蒼龍發して(一四)蟠蜿たり。(一五)青旂引いて(一六)窈窕たり。(一七)(一八)仁化孩蟲に洽く、(一九)(二〇)德令胎夭を禁ず。(二一)耕籍、(二二)月映に乘じ、(二三)遺滯、(二四)秋杪を指す。年豐にして(二五)廉讓多く、(二六)歲薄くして禮節少し。(二七)公卿(二八)耒耜を秉り、(二九)庶甿(三〇)鋤耰を荷ふ。(三一)一人、(三二)百王に慙ぢんや。(三三)三推を(三四)億兆に先んず。

典重肅穆にして能く題と稱ふ。

(一) 天子躬耕して祭祀の穀を收むる出也 (二) 禮意を以て接するをいふ (三) 十二月を十二律に配す。方星は四方の星座なり (四) 南方の星朱鳥七星を指す以て仲春の時候を表す (五) 土地の濕潤膏(あぶら)の如きをいふ (六) 一頃は百畝なり (七) つゝみの色をいふ (八) はなだ色卽淺黃也 (九) きびしく馬車をいましむるをいふ (一〇) 霞たなびくあけぼのをいふ (一一) ほの白む頃をいふ (一二) 出發すること (一三) 出發を告ぐる號令の大鼓也 (一四) 龍蛇の動く貌蒼龍を形容する也 (一五) 青色の旗也 (一六) 美しき象、青旂を形容する也 (一七) 仁愛的敎化なり (一八) 生れしばかりの蟲をいふ (一九) 恩德的命令なり (二〇) 胎內に在る者と未發育の者とを指す (二一) 藉田を耕すこと (二二) 月光をいふ (二三) 遺秉落穗(おちぼ)の事 (二四) 收穫期の晩秋を指す (二五) 廉恥心ありて禮讓に厚きをいふ (二六) 收穫の少きをいふ (二七) 三公九卿の歷歷をいふ (二八) くはの柄とさきと也 (二九) 庶民と同じ (三〇) くはと土を打つ槌と也 (三一) 天子を指す武帝自ら謂ふ (三二) 百代の王也 (三三) 推は打つ也農具を以て三た

玉。三春已暮
花從風空留
可憐誰與同。
乘和蕩猶豫。
此焉聊止息。
連山去無限。
長洲望不極。
參差照光彩。
左右皆春色。
晻曖矚遊絲。
出沒看飛翼。
其樂信難忘。
翛然寧有適。
寅賓始出日。

(八) 臙脂(べに)と鉛粉(おしろい)と也 (九) 年齢をいふ (一〇) たをやかなる形容 (一一) ならぶものなきをいふ
(一二) 孟春仲春季春 (一三) 風のまゝに散るをいふ (一四) 愛らしき人をいふ (一五) 相共に美貌を競むをいふ

天安寺の疏圃堂

和に乘じて蕩として猶豫し、此に聊か止息す。連山去りて限り無く、長洲望みて極まらず。參差として光彩を照し、左右皆春色なり。晻曖として遊絲を矚、出沒して飛翼を看る。其樂信に忘れ難く、翛然として寧ろ適すること有らん。

(一) 春和の時候に乘ずるをいふ (二) 心ののびやかなるをいふ (三) 徘徊といはんが如し (四) 足を停めて休息すること (五) 何處まで往つても盡きざるをいふ (六) 眺めのはてなきをいふ (七) 高くなり低くなるをいふ (八) 右も左もといふに同じ (九) どんよりと暗き貌 (一〇) いというといひ又かげろふと云ふ (一一) 見え隱るゝをいふ (一二) 飛鳥なり (一三) 疾き貌 (一四) 意に適する所あるをいふ

籍田

寅んで始出の日を賓し、律は方星の鳥に中る。千畝土膏紫に、萬頃陂色縹た

香。頭上金釵十二行。足下絲履五文章。珊瑚挂ㇾ鏡爛生ㇾ光。平頭奴子擎二履箱一。人生富貴何所ㇾ望。恨不三早嫁二東家王一。

ふ ㊈ 黄金のかんざし也 ㊉ 十二列に挿すをいふ ㊀㊀ 絹絲を以て縫ひたるくつ也 ㊀㊁ 五色の模樣也 ㊀㊂ 光輝ある形容 ㊀㊃ 低頭といはんが如し ㊀㊄ やつこ郎ち下部をいふ ㊀㊅ 東鄰の王生を指す

東飛の伯勞の歌

東飛伯勞西飛燕。黄姑織女時相見。誰家兒女對ㇾ門居。開ㇾ顏發ㇾ豔照二里閭一。南窗北牖挂二明光一。羅幃綺帳脂粉香。女兒年紀十五六。窈窕無雙顏如ㇾ

一に古辭に作る。

東飛の伯勞西飛の燕、黄姑(一)織女(二)時に相見る。誰家の兒女ぞ門に對して居り、顏を開き豔(三)を發して里閭(四)を照す。南窗北牖(五)、明光を挂け、羅幃(六)綺帳(七)、脂粉(八)香し。女兒の年紀(九)十五六、窈窕(一〇)無雙(一一)、顏、玉(一二)の如し。三春(一三)已に暮れて花、風に從ひ、空しく可憐(一四)を留めて誰と與に同じうせん(一五)。

何許の駘宕ぞ。

㊀ 牽牛星をいふ、ひこぼし也 ㊁ 織女星をいふおりひめ也 ㊂ うつくしきつやの現はるゝをいふ ㊃ 里の門也、顏色の里門を照すほど美麗なるをいふ ㊄ 牖もまた窗(まど)也 ㊅ 薄絹のとばり也 ㊆ 厚絹のとばり

既縮了物形。與君隔平生。月似雲掩光。葉似霜摧老。當途竟自容。莫肯爲妾道。

㈠ 古詩十九首の中に此句あり ㈡ 羃々と同じ覆ふ貌 ㈢ 戸に絲を以て縫（ぬひ）を施すをいふ ㈣ 門前約束したる歸來の日を云ふ ㈤ 柱（ことぢ）をしめたる瑟の音や、こゝにては音信と解するを可とす ㈥ 半分睡りたるを云ふ ㈦ 歸り來るをいふ ㈧ 雲の月光を掩ふこと倒字法を用ふ ㈨ 霜の老葉を摧くこと亦倒字法を用ふ

河中の水の歌(一)

一に晉辭に作る。

河中之水向東流。洛陽女兒名莫愁。莫愁十三能織綺。十四采桑南陌頭。十五嫁爲盧家婦。十六生兒字阿侯。盧家蘭室桂爲梁。中有鬱金蘇合

河中の水東に向つて流る、洛陽の女兒、莫愁と名づく。莫愁十三能く綺を織り、十四桑を采る南陌(三)の頭。十五嫁して盧家(四)の婦と爲り、十六兒を生みて阿侯と字す。盧家の蘭室(五)桂を梁(六)と爲し、中に鬱金(七)蘇合香(八)あり。頭上の金釵十二行(九)、足下の絲履(一〇)五文章(一一)。珊瑚鏡に挂け爛(一三)として光を生じ、平頭(一四)の奴子履箱(一五)を擎ぐ。人生富貴(一二)何の望む所ぞ、恨むらくは早く東家の王に嫁がざりしを(一六)。

㈠ 雜曲の歌辭なり ㈡ 模樣ある厚絹をいふ ㈢ 田間の道南北に通ずる者也 ㈣ 富家の姓なり ㈤ 壁に蘭を塗り籠めたる室 ㈥ うつばりの事 ㈦ 鬱金香なり大秦國より出づといふ ㈧ 香油なり大食國より出づとい

憶レ郎郎不レ至。仰レ首望ニ飛鴻一。飛鴻滿ニ西洲一。望レ郎上ニ青樓一。樓高望不レ見。盡日闌干頭。闌干十二曲。垂レ手明如レ玉。卷レ簾天自高。海水搖ニ空綠一。海水夢悠悠。君愁我亦愁。南風知ニ我意一。吹レ夢到ニ西洲一。

す。

(一)雜曲の歌辭なり　(二)單衣なり　(三)杏は木の名あんずと訓ずその如く赤きを之ふ　(四)頭髮の兩方のびんづちをいふ　(五)からすのひな也その如く黑きをいふ　(六)槳はかぢ也槳の左右にある舟也　(七)百舌鳥もずをいふ　(八)唐櫨はじの木なり　(九)みどり色の釵かんざしをいふ　(一〇)西洲の南のつゝみをいふ　(一一)蓮の實なり　(一二)ふところたもとのうちを云ふ　(一三)底の底まで也　(一四)飛雁也鴻は雁の大なる者をいふ　(一五)酒樓なり或は轉じて娼家の意に用ふることあり　(一六)没し盡したる日光也終日の意にあらず　(一七)てすりの事　(一八)天空の綠色水に映じて波と共に動く也　(一九)夢に見る所の如く杳遠なるを云ふ

幕幕繡ニ戶絲一。悠悠懷ニ昔期一。昔期久不レ歸。鄉國曠ニ音徽一。音徽空結遲。半寢覺レ如レ至。

青青たる河畔の草に擬す(一)

幕幕として戶絲(二)を繡し、悠悠として昔期(四)を懷ふ。昔期久しく歸らず、鄉國、音徽(五)曠し。音徽空しく結ぶこと遲く、半ば(六)寢ねて至る(七)が如きを覺ゆ。既に寤めて了に形無く、君と平生を隔つ。月は雲(八)の光を掩ふに似、葉は霜(九)の老を摧くに似たり。途に當りて竟に自づから容づくるとも、肯へて妾の爲に道ふこと莫かれ。

憶梅下西洲。折梅寄江北。
單衫杏子紅。雙鬢鴉雛色。
西洲在何處。兩槳橋頭渡。
日暮伯勞飛。風吹烏桕樹。
樹下卽門前。門中露翠鈿。
開門郎不至。出門采紅蓮。
采蓮南塘秋。蓮花過人頭。
低頭弄蓮子。蓮子青如水。
置蓮懷袖中。蓮心徹底紅。

一に曾辭に作る。

梅を憶うて西洲に下り、梅を折りて江北に寄す。單衫(二)、杏子の紅、雙鬢(四)、鴉雛(五)の色。西洲何れの處にかある、兩槳(六)、橋頭に渡る。日暮伯勞(七)飛び、風、烏桕(八)の樹を吹く。樹下卽ち門前、門中翠鈿(九)を露す。門を開けども郎至らず、門を出でて紅蓮を采る。蓮を采る南塘(一〇)の秋、蓮花人頭を過ぐ。頭を低れて蓮子(一二)を弄すれば、蓮子青きこと水の如し。蓮を懐袖(一一)の中に置けば、蓮心底(一三)に徹して紅なり。郎を憶へども郎至らず、首を仰いで飛鴻(一四)を望む。飛鴻、西洲に滿つ、郎を望んで青樓(一五)に上る。樓高くして望めども見えず、盡日(一六)闌干(一七)の頭。闌干十二曲、手を垂れて明、玉の如し。簾を卷けば天自づから高く、海水空綠(一八)を搖かす。海水夢悠悠(一九)たり、君愁ふれば我も亦愁ふ。南風我が意を知らば、夢を吹いて西洲に到れ。

續續として相生じ、蹈を連ね萼を接し、搖曳窮り無く、情味愈〻出づ。○絕句數首、攢簇して成るに似たり。樂府中又一體を生ず、初唐の張若虛、劉希夷の七言古は、源を此に發

如二壟生木一。木有二異心一。如二林鳴鳥一。鳥有二殊音一。如二江遊魚一。魚有二浮沈一。巖巖山高。湛湛水深。事跡易レ見。理相難レ尋。

梁詩（一）

武帝（二）

逸民（三）

壟（四）に生ずる木の如く、木に異心（五）あり。林に鳴く鳥の如く、鳥に殊音（六）あり。江に遊ぶ魚の如く、魚に浮沈あり。巖巖（七）として山のごとく高く、湛湛（八）として水のごとく深し。事跡（九）は見易く、理相（一〇）は尋ね難し。

淵淵渾渾として、齊梁の風格に類せず。

（一）梁は六朝の一にして齊の後を承く　（二）姓は蕭氏、名は衍、字は叔達、齊の禪を受けて帝位に即く　（三）隱逸の人をいふ　（四）丘陵なり　（五）心膸各異なるを云ふ　（六）音聲それぞ〲ことなるをいふ　（七）高き貌　（八）深き貌　（九）行狀なり　（一〇）心狀なり

西洲の曲（一）

驅レ馬一連翩。
日下情不レ息。
芳樹似ニ佳人一。
惆悵余何極。
薄暮苦ニ羈愁一。
終朝傷ニ旅食一。
丈夫許ニ人世一。
安得レ顧ニ心憶一。
按レ劍勿レ復言。
誰能耕與レ織。

閲武堂。種ニ楊
柳一。至尊屠レ肉。
潘妃沽レ酒。

北のかた瑯琊城を成る詩

馬を驅りて一たび連翩(一)たれば、日下れども情息まず。芳樹佳人に似たり。惆悵して余何ぞ極らん。薄暮羈愁(二)を苦み、終朝(三)旅食を傷む。丈夫人世(四)に許す、安んぞ心憶(五)を顧みるを得んや。劍を按じて(六)復た言ふこと勿かれ、誰か能く耕と織とをせんとは。

(一) 勢よく馳する樣をいふ　(二) 旅愁と同じ　(三) 旦より朝食までの間をいふ　(四) 天下なり　(五) 心に思ふ事　(六) 刀に手をかくるをいふ

東昏の時の百姓の歌

金陵志に、東昏侯は卽ち臺城、閲武堂は芳樂苑と爲す。又苑中に於て、店肆を立て、潘妃を以て市令と爲す。

閲武堂、楊柳を種う。至尊肉を屠り、潘妃酒を沽る。

林交日容缺。陰澗落ニ春榮一。寒巖留ニ夏雪一。

留む。陰森なり

㊃ 日かげの谷間をいふ

陸厥（一）

㊀ 字は德璉、會稽山陰の人なり記室より廷尉を歷、太子詹事に遷れり ㊁ 天空の形なり ㊂ 太陽の姿なり

木葉下。江波連。秋月照ㇾ浦。雲歇ㇾ山。秋思不ㇾ可ㇾ裁。復帶ニ秋葉一來。秋風來已寒。白露驚ニ羅紈一。節士慷慨髮衝ㇾ冠。彎弓挂ニ若木一。長劍竦ニ雲端一。

臨江王節（二）士の歌

木葉下りて、江波連り、秋月浦を照して、雲、山に歇ふ。秋思裁つ可からず、復た秋聲を帶びて來る。秋風來りて已に寒く、白露、羅（三）紈を驚かす。節士慷慨して、髮、冠（四）を衝き、彎弓（五）は若木（六）に挂り、長劍は雲端に竦ゆ。

㊀ 字は韓卿少くして風概あり秀才に擧げらる ㊁ 節義を守る士たり ㊂ 絹張りの團扇をいふ ㊃ 怒れる樣を寫す也 ㊄ 曲りたる弓たり ㊅ 星の名

江孝嗣

別離安可再。
而我更重之。
佳人不相見。
明月空在帷。
共御滿堂酌。
獨斂向隅眉。
中心亂如雪。
寧知有所思。

石險天貌分。

(一)劉繪

所思有り

別離安んぞ再びす可けんや。而も我更に之を重ぬ。佳人相見ず、明月空しく(二)帷に在り。共に滿堂の(三)酌を御し、獨り(四)向隅の眉を斂む。(五)中心亂れて雪の如く、寧ぞ所思あるを知らん。

(一)字は士章、彭城安上里の人、雅麗にして風則あり初め參軍と爲り中書郎を歷大司馬に轉ぜり　(二)窓にかくる幕也　(三)供ふる意　(四)一人隅に向つて泣くをいふ　(五)一座諸人の心中を指す

(一)孔稚圭

太平山に遊ぶ

(一)石險しくして天貌分れ、(二)林交りて(三)日容缺く。(四)陰澗、春榮を落し、寒巖、夏雪を

巫山彩雲沒。淇上綠楊稀。待レ君竟不レ至。秋雁雙雙飛。

霜氣下二孟津一。
秋風度二函谷一。
念レ君凄以寒。
當レ軒卷二羅縠一。
纖手廢二裁縫一。
曲鬢罷二膏沐一。
千里不二相聞一。
寸心鬱紛蘊。
況復飛螢夜。
木葉亂紛紛。

霜氣孟津(一)に下り、秋風函谷(二)を渡る。君を念へば凄(三)として以て寒く、軒(四)に當りて羅縠(五)を卷く。纖手(六)、裁縫を廢し、曲鬢(七)、膏沐(八)を罷む。千里相聞え(九)ず、寸心鬱として紛蘊(一〇)たり。況んや復た飛螢の夜、木葉亂れて紛紛たるをや。

(一) 濟水の北に在る地の名 (二) 河南の西境に在る山の名 (三) ぞつと身にしむをいふ (四) 欄干をいふ (五) うす絹とちゞみとをいふ (六) かぼそき手なり (七) 曲げて結びたる髮なり (八) 膏は油をつくること沐は髮を洗ふこと (九) 消息なきをいふ (一〇) 紛紜と同じ心のもつるゝをいふ

張融(一) 別詩

白雲山上盡。
清風松下歇。
欲レ識二離人悲一。
孤臺見二明月一。

白雲山上に盡き、清風松下に歇む。離人の悲を識らんと欲せば、孤臺に明月を見よ。

(一) 字は思光吳郡の人たり宋に仕へて封溪の令と爲る

徘徊將二所愛一。
惜レ別在二河梁一。
衿袖三春隔。
江山千里長。
寸心無二遠近一。
邊地有二風霜一。
勉哉勤二歲暮一。
敬矣事二容光一。
山中殊未レ懌。
杜若空自芳。

遊禽暮知レ返。
行人獨未レ歸。
坐銷二芳草氣一。
空度二明月輝一。
嚬容入二朝鏡一。
思淚點二春衣一。

蕭諮議が西上の夜集、(一)

徘徊、(二)所愛を將ゐ、別を惜んで(三)河梁に在り。(四)衿袖(五)三春(六)隔り、江山千里長し。(七)寸心、遠近無く、(八)邊地、風霜有り。勉めよ哉、(九)歲暮を勤めよ、敬まん矣、(一〇)容光を事とせよ。山中殊に未だ懌ばしからず、(一一)杜若空しく自づから芳し。

(一)竟陵に往くこと　(二)愛する所の友人をいふ　(三)橋なり　(四)着物のえりとそでとをいふ　(五)孟春仲春季春　(六)たもとを分つ意　(七)己が區々の心を指す　(八)友のゆく僻地を指す　(九)老年をいふ　(一〇)顏色をいふ　(一一)やぶ茗荷の事

王友德元の古意に和す、二首

遊禽暮に返るを知り、行人獨り未だ歸らず。坐ろに芳草の氣を銷し、空しく明月の輝を度る。(一)嚬容、朝鏡に入り、(二)思淚、春衣に點ず。巫山彩雲沒し、(三)淇上綠楊稀なり　君を待てども竟に至らず、(四)秋雁雙雙飛ぶ。

(一)眉をひそめたる顏つきをいふ　(二)戀ひ慕ふ淚をいふ　(三)淇水の岸を指す　(四)二羽づゝ飛び交ふなり

交鶯變二春旭一。
瓊樹落二晨紅一。
瑤塘水初淥。
日霽沙溦明。
風泉動二華燭一。
遵レ渚泛二蘭觴一。
乘レ漪弄二清曲一。
斗酒千金輕。
寸陰百年促。
何用盡二歡娛一。
王度式如レ玉。

想像巫山高。
薄暮陽臺曲。
煙霞乍舒卷。
猿鳥時斷續。
彼美如レ可レ期。
寤言紛在レ矚。
憮然坐相思。
秋風下二庭綠一。

日霽れて沙溦(八)明に、風泉、華燭を動かす。渚(九)に遵つて蘭觴を泛べ、漪(一〇)に乘じて清曲を弄す。斗酒千金輕く、寸陰百年促す。何ぞ用ひん歡娛(一一)を盡すを、王度(一二)式れ玉の如し。

㊀ 字は元長、宋の中書舍人僧達の孫なり、少にして齊武帝の時秘書丞と爲り中書郎を歷たり ㊁ 水の名、又淥水に作る ㊂ 霧の湛湛と深きをいふ（詩傳に本づく） ㊃ 冬官なり冬官が春官と爲りたるをいふ ㊄ 鶯の交交と飛ぶをいふ（詩傳に本づく） ㊅ 瓊は玉なり春樹を美めていふ ㊆ 瑤も玉也春塘を美めていふ ㊇ 溦は浦をいふ ㊈ 小洲なり (一〇) 細波さゞなみをいふ (一一) 歡樂と同じ (一二) 帝王の法度也

巫山高

想像す巫山(一)の高きを、薄暮陽臺の曲(二)。煙霞乍ち舒卷(三)し、猿鳥時に斷續す。彼美(四)、期す可きが如し、寤言(五)、紛として矚(六)に在り。憮然(七)として坐ろに相思ひ、秋風、庭綠に下る。

㊀ 楚國の山の名、襄王の故事あり ㊁ 隅なり ㊂ 舒はのぶと同じたなびくをいふ、卷はまくと同じをさまるをいふ ㊃ 神女を指す ㊄ 晤言と同じ ㊅ 目前に在るをいふ ㊆ 失意の貌

雑樹紅英發。
無レ論ニ君不一レ歸。
君歸芳已歇。

悵望ニ南浦一時。
徙倚北梁步。
葉上涼風初。
日隱輕霞暮。
荒城迴易レ陰。
秋溪廣難レ渡。
沫泣豈徒然。
君子行多レ露。

湛露改ニ寒司一。

ば(四)芳已に歇まん。

㊀雑曲の歌辭にして閨怨を詠じたる者也　㊁紅花と同じ　㊂何も言ふ所なきをいふ　㊃春芳を以て己の容姿に比する也

溪に臨みて別を送る

悵として南浦を望む時、(一)徙倚として(二)北梁を歩す。葉上涼風の初め、日は隱る輕霞の暮。(三)荒城迴にして陰り易く、秋溪廣くして渡り難し。(四)沫泣豈に(五)徒然ならんや。君子、行に露多し。

㊀たちもとほるをいふ、猶徘徊といはんが如し　㊁北の橋なり　㊂荒れたる城をいふ　㊃つばきと涙となり　㊄偶然といふに同じ

(一)王融

(二)淥水曲

(三)湛露、(四)寒司を改め、(五)交鶯、春旭を變ず。(六)瓊樹晨紅を落し、(七)瑤塘水初めて淸し。

聞二君此夜琴一。
蕭瑟滿林聽。
輕鳴響レ澗音。
無レ爲澹容與。
蹉跎江海心。

を。(八)蹉跎たり(九)江海の心。

(一)月を指す　(二)蕙蘭の香を傳ふる風なり　(三)內ぶところをいふ　(四)物さびしき形容、惡一に颯に作る　(五)聲といはんが如し　(六)澹泊なり　(七)從容の貌　(八)つまづく意　(九)世間榮達の心を指す

離夜(一)

玉繩隱二高樹一。
斜漢耿層臺一。
離堂華燭盡。
別幌清琴哀。
翻潮尙知レ恨。
客思渺難レ裁。
山川不レ可レ盡。
況乃故人杯。

(二)玉繩、高樹に隱れ、(三)斜漢、(四)層臺に耿なり。離堂華燭盡き、(五)別幌清琴哀し。(六)翻潮尙ほ恨を知り、客思渺として裁し難し。(七)山川盡す可からず、況んや乃ち故人の杯をや。

(一)別離の夜をいふ　(二)星の名　(三)斜に横はれる天の河を云ふ　(四)重れるうてな也　(五)離別の筵に垂れたる幕をいふ　(六)打ちかへす潮也　(七)抑へ難きをいふ

王孫遊(一)

綠草蔓如レ絲。

綠草蔓りて絲の如く、雜樹紅英(二)發す。君の歸らざるを論ずること(三)なし。君歸ら

微言超已領。
不レ見城壕側。
思レ君朝夕頃。
廻舟方在レ辰。
何以慰ニ延頸一。

春城麗ニ白日一。
阿閣跨ニ層樓一。
蒼江忽渺渺。
驅レ馬復悠悠。
京洛多ニ塵霧一。
淮濟未ニ安流一。
豈不レ思ニ撫劍一。
惜哉無ニ輕舟一。
夫君良自勉。
歲暮勿ニ淹留一。

涼風吹ニ月露一。
圓景動ニ清陰一。
蕙風入ニ懷抱一。

り 〔一三〕塵氣を帶びざる詩章をいふ 〔一四〕茂盛の意 〔一五〕微妙なる言辭をいふ 〔一六〕了解すること 〔一七〕城を繞る堀のこと 〔一八〕舟の方向を廻轉するをいふ 〔一九〕辰は時なり丁度其時なるをいふ 〔二〇〕くびを延ばして望むをいふ

江丞が北のかた瑯琊城を戍るに和す

春城、白日麗かに、(一)阿閣、層樓に跨る。蒼江忽ち渺渺たり。(二)馬を驅りて復た悠悠たり。(三)京洛、(四)塵務多く、淮濟、(五)未だ安流ならず。(六)豈に撫劍を思はざらんや。(七)惜い哉輕舟なし。(八)夫君良に自づから勉めよ。(九)歲暮、淹留すること勿かれ。(一〇)

〔一〕四角の樓閣なり 〔二〕遙に遠き形容 〔三〕遠き貌 〔四〕洛陽のこと 〔五〕二水の名 〔六〕川流の穩ならざるに託して時勢の安からざるを示す 〔七〕馮煖の故事を用ひて待遇の增進する意を示す 〔八〕甘寧の故事を用ひて援客の意を示す 〔九〕夫子といはんが如し江孝嗣を指す 〔一〇〕滯留の意

王中丞の琴を聞くに和す

涼風、月露を吹き、圓景、(一)清陰に動く。蕙風(二)懷抱(三)に入り、君が此夜琴を聞く。蕭瑟(四)たり滿林(五)の聽、輕く鳴る澗に響くの音。爲すこと無かれ、澹(六)として容與(七)たる

冠とをいふ之に與くとは賓從の中に列せざること也 四九 淸みたるさかづき卽酒を意味す 五〇 さしつさゝれつすること 五一 良き書物をいふ 五二 詩の佳句に喩ふ 五三 餘分の文采に喩ふ 五四 行きて事を行ふをいふ 五五 地の名 五六 遊樂の意

新に北窗を治め、何從事に和す。

國小暇日多。
民淳紛務屛。
闢ㇾ牖期二淸曠一。
開ㇾ簾候二風景一。
泱泱日照ㇾ溪。
團團雲去ㇾ嶺。
岧嶢蘭橑峻。
駢闐石路整。
池北樹如ㇾ浮。
竹外山猶影。
自來彌二弦望一。
及三君臨二箕潁一。
淸文蔚且詠。

國小にして暇日多く、民淳(一)にして紛務(二)屛く(三)。牖を闢いて淸曠(四)を期し、簾を開いて風景を候つ。泱泱(五)として日溪を照し、團團(六)として雲、嶺を去る。岧嶢(七)として蘭橑(八)峻しく、駢闐(九)として石路整ふ。池北、樹浮ぶが如く、竹外、山猶ほ影あり。自來(一〇)、弦望(一一)に彌ち、君の箕潁(一二)に臨むに及ぶ。淸文蔚(一三)(一四)として且つ詠じ、微言(一五)超として已に領す(一六)。見ずや城濠(一七)の側、君を思ふ朝夕の頃。廻舟(一八)方に辰(一九)に在り、何を以て延頸(二〇)を慰めん。

一 厚也人情の輕薄ならざるをいふ 二 紛糾したる事務なり 三 除き去ること 四 はれ〴〵したる大氣をいふ 五 廣大なる貌 六 聚合する貌 七 山の高き形容 八 木蘭にて作りし椽(たるき) 九 連續する形容 一〇 爾來と同じ 一一 弦月と望月とをいふ卽一箇月を意味す 一二 箕山と潁水とをいふ許由巢父の隱れし處な

荒池秋草徧。
雄圖悵若レ茲。
茂宰深二遐睠一。
幽客滯二江皐一。
從賞乖二纓弁一。
淸卮阻二獻酬一。
良書限二聞見一。
幸藉二芳音一多。
承レ風采二餘絢一。
于役儻有レ期。
鄂渚同二遊衍一。

ふ也。○三國名臣頌に曰く、三光參分し、宇宙暫く隔つと。此に分裂を謂ふと言ふ者は、幾んど天下を混一にせんと欲する也。參差として世祀忽に以下は、亡國の後を指し說く。○茂宰とは伏武昌を謂ひ、幽客とは自から謂ふ。○墨子に曰く、墨子、書を惠王に獻す。王受けて之を讀みて曰く、此れ良書也と。此れは武昌の原作を指す。○宣城は游和に係る、共に城に登る者に非ず、末の二句を玩べば、自づから見はる。

(一) 名を曼容をいふ (二) 武昌を指す (三) 漢帝をいふ漢は火德を以て王たれば也 (四) 帝位をいふ (五) 魏を指す (六) 群雄の爭戰をいふ易の龍野に戰ふより出づ (七) 王者たらんとする企畫をいふ (八) 中原の事 (九) 覇者の功業なり (一〇) 天下といふが如し (一一) 吳の地をいふ (一二) 荊州地方をいふ (一三) えりとおびとなり、地勢衿帶の如く嶮險なる所を極むるをいふ (一四) 帷幄をいふ (一五) 註に在り (一六) 同 (一七) 馬のくつわをいふ (一八) 註に在り (一九) 鎧(よろひ)と袍(ひたゝれ)とをいふ (二〇) 世間をいふ (二一) 英氣ある目つきをいふ (二二) 皮衣と帽冠となり註に在り (二三) 上帝の祭也 (二四) 註に在り、地相を選へ吉日を定むるをいふ (二五) 離宮のこと (二六) 臺の名 (二七) 武を講じて車徒を閱すること (二八) 衰山をいふ (二九) 盛なる貌 (三〇) 赤熾なる貌 (三一) 日月星なり (三二) 光線を分ち照すこと (三三) 文字と車軌とをいふ (三四) 分布の意 (三五) 不齊の貌 (三六) 代代の祭祀なり (三七) 忽諸にして祀られざるをいふ (三八) ひつそりと淋しき貌 (三九) 建康の市街を指す、或は市場と朝廷と二つに分ちて說くも可也 (四〇) 殘礎に同じ (四一) 歌を唱へし樓をいふ (四二) 餘音に同じ (四三) 壯大なる謀計をいふ (四四) 茂才ある長官なり (四五) 遠顧なり (四六) 眺自から謂ふ (四七) 江水の岸を謂ふ (四八) 冠の組と

鳳翔凌二楚甸一。
衿帶窮二巖險一。
幃帟盡二謀選一。
北拒溺二驂鑣一。
西龕收二組練一。
江海既無レ波。
俯仰流二英眄一。
裘冕類二禋郊一。
卜揆崇二離殿一。
釣臺臨二講閱一。
樊山開二廣讌一。
文物共葳蕤。
聲明且葱蒨。
三光厭二分景一。
書軌欲二同薦一。
參差世祀忽。
寂寞市朝變。
舞館識二餘基一。
歌梁想二遺轉一。
故林衰木平。

す。裘冕、禋郊に類し、卜揆、離殿を崇くす。釣臺、講閱に臨み、樊山、廣讌を開く。文物共に、葳蕤として、聲明且つ葱蒨なり。三光、分景を厭ひ、書軌同じく薦めんことを欲す。參差として世祀忽たり、寂寞として市朝變ず。舞館、餘基を識り、歌梁、遺轉を想ふ。故林衰木平に、荒池秋草偏し。雄圖悵として玆の若く、茂宰、遐ーを深くす。幽客、江皐に滯り、從賞、纓弁に乖く。淸卮、獻酬を阻て、良書、聞見を限る。幸に芳音の多きに藉り、風を承けて餘絢を采る。于役儻し期あらば、鄂渚、遊衍を同じくせん。

炎靈とは漢を謂ひ、塗に當るとは魏を謂ふ。言ふこゝろは、道に當りて高大なる者は魏なりと。○幃帟謀選を盡すとは、帷帳事を共にする者は、皆筭謀にして諸侯の選なるを言ふ也。○北拒とは曹操を禦ぐを謂ひ、西龕とは西蜀を敗るを謂ふ、龕は戡と同し。○周禮に曰く、王、昊天上帝を祀るときは、則ち大裘を服して冕す、五帝を祀るも亦之の如くす。卜揆とは卽ち卜曰く其れ吉なりと、之を揆るに日を以てすることなり。室を作るを言

連翩戒征軸。再遠館娃宮。兩去河陽谷。風煙四時犯。霜雨朝夜沐。春秀良已彫。秋場庶能築。

炎靈遺劍璽。當塗駭龍戰。聖期缺中壤。霸功興寓縣。鵠起登吳山。

（一）大別と小別との二山なり（二）漢水の中の小洲をいふ（三）闕谷なり二陵あるを以て故に名づく（四）黄河の曲れる處（五）八公山を指す、淮南王安の八才子が昇天せし處なりと傳ふ（六）山頂の鋭く尖れる貌（七）隔城なり（八）淮水の流域をいふ（九）鋸定の意（一〇）秦の始皇の作りし處（一一）澤の名（一二）茂密の貌（一三）竹の茂れる形容（一四）長き竹なり（一五）谷の事（一六）山巓の事（一七）樓雉の隱見するをいふ（一八）城樓の雉堞也（一九）夷狄即ち秦の苻堅を指す（二〇）中華を指す（二一）晉室をいふ（二二）河南の二水の名（二三）危に臨むこと（二四）衆人の宗とする所の袁州の刺史謝安を指す（二五）註に在り（二六）賢明なる地方官謝玄を指す（二七）謀議をいふ（二八）宏遠なる形容（二九）親屬知己なり（三〇）擧動の疾かなる貌（三一）行東なり（三二）吳の夫差が築いて以て西施を貯へし者なり（三三）石崇の河陽の金谷をいふ（三四）春の榮也その彫むとは精神の已に衰へたるをいふ也（三五）秋の田圃也その築くとは官を去りて隱居するをいふ也

伏武昌が孫權の故城に登るに和す（一）（二）

伏曼容は武昌の太守たり

（三）炎靈、（四）劍璽を遺て、（五）當塗、（六）龍戰に駭く。（七）聖期、（八）中壤を缺き、（九）霸功、（一〇）寓縣に興る。（一一）鵠起ちて吳山に登り、（一二）鳳翔りて楚甸を凌ぐ。（一三）衿帶巖險を窮め、（一四）幃帟、（一五）謀選を盡す。（一六）北拒、（一七）驂鑣を溺らし、（一八）西龕、（一九）組練を收む。（二〇）江海既に波無く、俯仰、（二一）英盼を流

分區奠淮服。
東限瑯琊臺。
西距孟諸陸。
阡眠起雜樹。
檀欒蔭修竹。
日隱澗疑空。
雲聚岫如複。
出沒眺樓雉。
遠近送春目。
戎州昔亂華。
素景淪伊穀。
阽危賴宗袞。
微管寄明牧。
長蛇固能翦。
奔鯨自此曝。
道峻芳塵流。
業遙年運倏。
平生仰令圖。
吁嗟命不淑。
浩蕩別親知。

竹蔭ふ。日隱れて澗空しき(一五)かと疑はれ、雲聚りて岫複なる(一六)が如し。出沒(一七)して樓雉(一八)を眺め、遠近に春目を送る。(一九)戎州昔、(二〇)華を亂り、(二一)素景、(二二)伊穀に淪む。(二三)阽危、(二四)宗袞に賴り、(二五)微管、(二六)明牧に寄す。長蛇固より能く翦り、奔鯨、自づから此に曝す。道峻しくして芳塵流れ、業遙かにして年運倏なり。(二七)平生令圖を仰ぐに、吁嗟命、淑からず。(二八)浩蕩として(二九)親知に別れ、(三〇)連翩として(三一)征軸を戒む。(三二)再たび館娃宮に還かり、(三三)兩たび河陽谷を去る。風煙四時に犯し、(三四)霜雨朝夜に沐す。春秀、良に已に彫めり、(三五)秋場庶はくば能く築かん。

戎州華を敗るとは苻堅を謂ひ、素景とは晉の金德を以て王たるを謂ふ也。○宗袞とは謝安を謂ひ、明牧とは謝玄を謂ひ、微管とは卽ち管仲微かりせば吾其れ被髮左衽せんの意。古人の引用には、割截する者多し。○長蛇奔鯨とは苻堅、苻融を謂ふ也。平生令圖を仰ぐ以下は、皆眺自づから謂ふ。○小謝の詩、俱に流利を極む。而して此篇及び伏武昌に和する作は、典重質實にして、俱に康樂を宗仰す。

坐觀ニ階前濕一。
誰能長分居。
秋盡冬復及。

春心澹容與。
挾レ弋步ニ中林一。
朝光映ニ紅蕚一。
微風吹ニ好音一。
江陲得ニ淸賞一。
山際果ニ幽尋一。
未ニ嘗遠離別一。
知三此悵ニ歸心一。
流泝終靡レ已。
嗟レ行方至レ今。

二別阻ニ漢坻一。
雙崤望ニ河澳一。
茲嶺復巑岏。

也 (十五)輕き幕をいふ (十六)離れて居ると

何議曹の郊遊に和す

春心澹(一)として容與(二)たり、弋(三)を挾みて中林(四)を歩す。朝光、紅蕚(五)に映じ、微風、好音を吹く。江陲(六)に淸賞(七)を得、山際に幽尋(八)を果す。未だ嘗て遠く離別せず、此の歸心に悵ふを知る。流泝(九)終に已むこと靡く、行を嗟きて方に今に至る。

(一)澹泊にして何の慾もなきこと (二)ゆつたりと落ちつくこと (三)手に持つこと (四)林中なり (五)赤き花をいふ (六)川の岸なり (七)淸らかに賞翫すること (八)靜かにたどりゆくこと (九)流のまゝに下り、又流れに逆上ること

王著作融の八公山に和す

謝玄が苻堅を敗りし處なり

二別(一)漢坻(二)を阻て、雙崤(三)河澳(四)を望む。茲嶺(五)復た巑岏(六)たり、區(七)を分ちて淮服(八)を奠む(九)。東は瑯琊の臺(一〇)を限り、西は孟諸(一一)の陸を距つ。阡眠(一二)として雜樹起り、檀欒(一三)として修(一四)

方レ舟泛二春渚一。
携レ手趨二上京一。
安知慕歸客
詎憶山中情。
香風蕊上發。
好鳥葉間鳴。
揮レ袂送レ君已。
獨此夜琴聲。

秋夜促織鳴。
南鄰擣衣急。
思レ君隔二九重一。
夜夜空佇立。
北牕輕幔垂。
西戸月光入。
何知二白露下一。

江兵曹(一)・檀主簿(二)・朱孝廉の上國(三)に還るを送る

舟を方べて春渚に泛び、手を攜へて上京(四)に趨く。安んぞ知らん慕歸(五)の客、詎ぞ憶はん山中の情、香風(六)蕊上に發し、好鳥葉間に鳴く。(七)袂を揮うて君を送り已めば、獨り此に夜琴の聲あり。

(一)名は泌字は士清　(二)名は超字は悦祖　(三)京師を指す　(四)金陵の事　(五)自身を指す　(六)花のしべ也　(七)別を惜まざる態度をいふ

秋夜

秋夜促織(一)鳴き、南鄰擣衣(二)急なり。君を思へども九重(三)を隔て、夜夜空しく佇立(四)す。(五)北牕輕幔垂れ、西戸月光入る。何ぞ白露の下るを知らん、坐ろに階前の濕ふを視る。誰か能く長く分居(六)する、秋盡きなば冬復た及ばん。

(一)蟋蟀なり、きりぎりすと訓ず　(二)きぬたの音也　(三)九重の門をいふ　(四)たゝずむこと　(五)北側のまど

既乏二瑯琊政一。
方憩二洛陽社一。
疲レ策倦二人世一。
斂レ性就二幽蓬一。
停レ琴佇二涼月一。
滅レ燭聽二歸鴻一。
涼藿乘レ暮析。
秋華臨レ夜空。
葉低知二露密一。
崖斷識二雲重一。
折レ荷葺二寒袂一。
開レ鏡盻二衰容一。
海暮騰二清氣一。
河關祕二棲沖一。
煙衡時未レ歇。
芝蘭去相從。

の始皇が臺を作り石を刻みて德を頌せし處たり

病を移して(一)園に還り、(二)親屬に示す

(三)策に疲れて人世に倦み、(四)性を斂めて(五)幽蓬に就く、琴を停めて涼月を佇ち、燭を滅して(六)歸鴻を聽く。(七)涼藿暮に乘じて析け、秋華夜に臨みて空し。葉低れて露の密なるを知り、崖斷えて雲の重るを識る。(八)荷を折りて(九)寒袂を葺き、(一〇)鏡を開いて衰容を盻る。(一一)海暮、清氣を騰げ、(一二)河關、(一三)棲沖を祕す。(一四)煙衡時に未だ歇まず、(一五)芝蘭去つて相從ふ。

(一)病を以て官を解くこと (二)家園なり親屬はみよりの者をいふ (三)馬をうつ鞭也、官途に疲るゝをいふ (四)心を靜めて生を養ふこと (五)しづかなるよもぎの家即我住居を指す (六)歸雁なり (七)涼しげなるひめよしをいふ (八)荷は蓮也之を折り取ること (九)寒素なる衣服也 (一〇)蘿絲にて破綻をつくろふこと (一一)海邊の夕暮をいふ (一二)河上の關門なり (一三)棲は地に止まること沖は天に擧ること即ち生死をいふ (一四)煙霞と杜衡(草の名、葵に似たるもの)となり、共に人の病を醫する者也 (一五)親屬を指して言ふ

紛詭諒非ㇾ一。
安得ㇾ掃二蓬逕一。
鎖二吾愁與ㇾ疾一。

明なる貌（五）柔てゝ垂るゝ形容（六）きれいに手洗ふこと（七）筆を執りて簿書に書き入るゝをいふ（八）俎は肉を盛るもの也、食卓の上に幾種の料理を排列すること（九）食ふものは唯だ一味に過ぎずと也（一〇）出づるときに幾輛の馬車を連ぬるをいふ（一一）居る所は陋隘のはひるだけなりとの意（一二）人情紛々として詭詐を懐くをいふ（一三）よもぎ草の生ひしげれる小路を指す

落日悵望（一）

昧旦多二紛喧一。
日晏未ㇾ遑ㇾ舍。
落日餘二清陰一。
高ㇾ枕東窗下。
寒槐漸如ㇾ束。
秋菊行當ㇾ把。
借問此何時。
涼風懷二朔馬一。
已傷二暮歸客一。
復思二離居者一。
情嗜幸非ㇾ多。
案牘偏爲ㇾ寡。

（二）昧旦より紛喧多く、（三）日晏れて未だ舍するに暇あらず。落日清陰を餘し、枕を高うす東窗の下。（五）寒槐漸く束ぬるが如く、（六）秋菊行くゆく當に把るべし。借問す此れ何の時ぞ、涼風、（七）朔馬を懷ふ。已に暮歸の客を傷み、復た離居の者を思ふ。（八）情嗜幸に多きに非ず、（九）案牘偏に寡しと爲す。既に（一〇）瑯琊の政に乏しく、方に洛陽の社に憩ふ。

（一）入日の頃を指す（二）まだ暗き朝をいふ（三）事務の繁冗なること（四）部屋に入りて休息するをいふ（五）ゑんじゆの樹をいふ（六）葉の落ち去る樣をいふ（七）朔北の馬也、古詩の胡馬北風に嘶くより來る（八）心に嗜むもの（九）文書なり、事務の閒なるをいふ（一〇）春秋時代の齊の邑、秦の時に始めて郡を置く、本と山の名泰

平生蚤事邊。
誰規鼎食盛。
寧要孤白鮮。
方棄汝南諸。
言稅遼東田。

公孫度(こうそんたく)の令、海外に行はるゝを聞き、遂に遼東(れうとう)に至ると。

(一) 詩の常用語にして假りに自から問ふ意 (二) 着任の日をいふ (三) 月の事 (四) 一面の叢林をいふ、平林と同じ (五) 山の名 (六) 水の名 (七) 長く留れる貌 (八) 遂につゞく畿内の地をいふ (九) 高峻の貌 (一〇) 急速なる貌 (一一) 天氣くもりて風ふくこと (一二) 柘もまた桑の屬なり (一三) 夕もやをいふ (一四) 白光の貌 (一五) 年少の時をいふ (一六) 邊境に事あるをいふ (一七) 非常なる馳走を意味す (一八) 孤白裘と一非常に高價なるもの也 (一九) 立派なるをいふ (二〇) 註を見よ (二一) 註を見よ (二二) 纓を税きて致仕するをいふ

高齋(かうさい)(一)に事を視る(二)

餘雪映二青山一。
寒霧開二白日一。
曖曖江村見。
離離海樹出。
披レ衣就清盥。
憑レ軒方秉レ筆。
列俎歸二單味一。
連駕止レ容レ膝。
空爲二大國憂一。

(三)餘雪(よせつ)、青山に映(えい)し、寒霧(かんむ)、白日を開く。(四)曖曖(あいあい)として江村見はれ、(五)離離として海樹出づ。衣を披(ひら)きて就ち(六)清盥(せいくわん)し、軒に憑(よ)りて方に(七)筆を秉(と)る。(八)列俎(れつそ)も(九)單味に歸し、(一〇)連(れん)駕(が)も(一一)膝を容るゝに止まる。空しく大國の爲(ため)に憂ふ、(一二)紛詭(ふんき)譎(きつ)に一に非ず。安んぞ(一三)蓬逕(けい)を掃(はら)ふことを得て、吾が愁(うれへ)と疾(やまひ)とを鎖(とざ)さん。

起四句、雪後を寫して神に入る。

㈠ 宮城郡内の高齋なり ㈡ 案牘を閲すること ㈢ 殘雪なり、寒霧の句と併せて早春の景を描き出す ㈣ 不

以て承露の盤を作り盤上に仙人の掌あり 〔一〇〕すきとほること 〔一一〕あやぎぬを以て連錢の形に結ぶこと 〔一二〕窗外に張りて雀をふせぐもの 〔一三〕赤き芍藥をいふ 〔一四〕青いこけ也 〔一五〕階段のたゝみ石をいふ 〔一六〕佩は佩玉のこと步む時に音響あり故に鳴佩といふ 〔一七〕園中なり 〔一八〕俯仰に同じ 〔一九〕氣のふさがること 〔二〇〕のどやかなること 〔二一〕風をおしきる羽翼をいふ

朋情以鬱陶。
春物方駘蕩。
安得凌風翰。
聊恣山泉賞。

借問下車日。
匪直望舒圓。
寒城一以眺。
平楚正蒼然。
山積陵陽阻。
溪流春穀泉。
威紆距遙甸。
巉巖帶遠天。
切切陰風暮。
桑柘起寒煙。
悵望心已極。
惝怳魂屢遷。
結髮倦爲旅。

宣城郡內登望

(一)借問す車を下るの日、(二)直に望舒(三)の圓なるのみにあらず。寒城一たび以て眺むれば、(四)平楚正に蒼然たり。山は積む(五)陵陽の阻、溪は流る、(六)春穀の泉。(七)威紆として(八)遙甸を距て、(九)巉巖として、遠天を帶ぶ。(一〇)切切として(一一)陰風暮れ、(一二)桑柘(一三)寒煙を起す。悵望して心已に極あり、(一四)惝怳として魂屢遷る。(一五)結髮旅を爲すに倦み、平生蚤に邊を事とす。(一六)誰か鼎食(一七)の盛を規らん、寧ぞ狐白(一八)の鮮(一九)を要せん。方に汝南(二〇)の諸を棄てて、言に遼東(二一)の田に稅がん(二二)。

寒城一聯格高し、朱子も亦之を賞せり。○續漢書に曰く、汝南の太守宗資、范滂を任用す、時人謠うて曰く、汝南の太守范孟博、南陽の宗資畫諾を主とすと。○魏志に曰く、管寧、

去矣方滯淫。
懷哉罷歡宴。
佳期悵何許。
淚下如流霰。
有情知望鄉。
誰能鬒不變。

（一）るをいふ （六）殘霞と同じ、日没時の夕紅也 （七）あやぎぬ也 （八）ねりぎぬ也 （九）かまびすしくさへづる鳥也 （一〇）色々の花也 （一一）旬は畿内の地即金陵をいふ （一二）滯留すること （一三）歡樂的宴會なり （一四）塚れ混ぶ朔也 （一五）霰（あられ）の降るをいふ （一六）有情の人を指す

中書省に直す(一)(二)

紫殿肅陰陰。
彤庭赫弘敞。
風動萬年枝。
日華承露掌。
玲瓏結綺錢。
深沈映朱網。
紅藥當階翻。
蒼苔依砌上。
茲言翔鳳池。
鳴珮多清響。
信美非吾室。
中園思偃仰。

紫殿肅(三)として陰陰(四)に、彤庭(五)赫(六)として弘敞(七)なり。風は動かす萬年の枝(八)、日は華やぐ承露(九)の掌。玲瓏(一〇)として綺錢を結び(一一)、深沈として朱網(一二)に映ず。紅藥(一三)階に當りて翻り、蒼苔(一四)砌(一五)に依りて上る。茲に言ふ翔鳳の池、鳴珮(一六)清響多し。信に美なれども吾室に非ず、中園(一七)に偃仰(一八)を思ふ。朋情以て鬱陶(一九)たり、春物方に駘蕩(二〇)たり。安んぞ凌風(二一)の翰を得て、聊か山泉の賞を恣にせん。

東宮舊事(二二)に曰く、窗に四面あり、綺を結び錢を連ぬと。

（一）官省の名、右曹とも稱す （二）常直すること （三）おごそかなる貌 （四）沈んで靜なる形容 （五）朱ぬりの宮庭なり （六）かゞやく樣をいふ （七）ひろくはがらかなること （八）冬青木の事、穢（あをき） （九）漢の武帝銅ヶ

渌蟻方獨持。
夏李沈二朱實一。
秋藕折二輕絲一。
良辰竟何許。
夙昔夢二佳期一。
坐嘯徒可ㇾ積。
爲ㇾ邦歲已朞。
絃歌終莫ㇾ取。
撫ㇾ几令自嗤。

灞涘望二長安一。
河陽視二京縣一。
白日麗二飛甍一。
參差皆可ㇾ見。
餘霞散成ㇾ綺。
澄江靜如ㇾ練。
喧鳥覆二春洲一。
雜英滿二芳甸一。

の成瑨但だ坐嘯すと

(一) 郡の名汲黯かつて太守たり、臥しながら之を治せしとぞ (二) もゝとひぢとなり、天子の頼りとする所の良臣をいふ (三) 隠居といふに同じ (四) 連日曇天の事 (五) 農事の盛なる時節なり (六) かさ也雨を禦く者也農夫を指す (七) 東の新田をいふ (八) 人の通行せざる荒れたる庭をいふ (九) 訴訟公事なり (一〇) 新らしき竹むしろ也 (一一) 涼しき風なり (一二) 魴は大魚なり和名不詳 (一三) 渌は漉と同じこすこと也。渌蟻とは酒をいふ (一四) 夏のすもゝ也 (一五) 秋の蓮也 (一六) 宿昔と同じ少壮の時を指す (一七) 歳の一周をいふ (一八) 孔子の弟子言偃が武城の宰たるとき絃歌を以て之を治めたる故事による (一九) おしまづき也

晩に三山に登り。還りて京邑を望む。

灞涘(一)、長安を望み、河陽(二)、京縣(三)を視る。白日飛甍(四)に麗き、參差(五)として皆見る可し。餘霞(六)散じて綺(七)を成し、澄江靜にして練(八)の如し。喧鳥(九)春洲を覆ひ、雜英(一〇)芳甸(一一)に滿つ。去れ、方に滯淫(一二)す、懷へる哉歡宴(一三)を罷む。佳期(一四)悵むこと何許ぞ、涙下りて流(一五)霰の如し。有情(一六)、鄉を望むことを知る、誰か能く鬒變ぜざらん。

(一) 秦中を流るゝ灞水の岸をいふ (二) 地の名 (三) 金陵を指す (四) 高きむね瓦をいふ (五) 長短高低一ならざ

既歎㆓懷祿情㆒。
復協㆓滄洲趣㆒。
囂塵自㆑茲隔。
賞心於㆑此遇。
雖㆑無㆓玄豹姿㆒。
終隱㆓南山霧㆒。

(一)揚子江の水路なり (二)本へ歸りて流るゝこと卽ち逆に流るゝをいふ、水と反對の方向にゆくをはのめかせる也 (三)憂ふる貌 (四)獨行すること (五)祿を懷ふこと卽ち仕官の意 (六)滄浪州なり隱遁の意を表す (七)かまびすしき人世をいふ (八)自然を賞美する心の具有者卽ち風流人をいふ (九)黑色の豹也、列女傳の陶答子の妻の故事を借り、玄豹の霧にかくれて其身を全うせしをいへる也

郡に在りて病に臥し、沈尚書に呈す

尚書の約也。

淮陽股肱守。
高臥猶在㆑茲。
況復南山曲。
何異㆓幽棲時㆒。
連陰盛農節。
薹笠聚㆓東菑㆒。
高閣常書掩。
荒階少㆓諍辭㆒。
珍簟淸㆓夏室㆒。
輕扇動㆓涼颸㆒。
嘉魴聊可㆑薦。

(一)淮陽股肱(二)の守、高臥猶ほ茲に在り。況んや復南山の曲なるをや、何ぞ(三)幽棲の時に異らんや。(四)連陰、(五)盛農の節、(六)薹笠、(七)東菑に聚る。高閣常に書掩ひ、(八)荒階、(九)諍辭少し。(一〇)珍簟、夏室淸しく、輕扇、(一一)涼颸動く。(一二)嘉魴聊か薦む可く、(一三)淥蟻方に獨り持つ。(一四)夏李朱實を沈め、(一五)秋藕輕絲を折る。良辰竟に何許ぞ、(一六)夙昔佳期を夢む。坐嘯徒に積む可く、邦を爲めて歲已に朞なり。(一七)(一八)絃歌終に取ること莫く、(一九)几を撫して令自から媸ふ。

南陽つ太守、弘農の成瑨、功曹岑晊を任ず。時人語りて曰く、南陽の太守岑公の孝、弘農

輟棹子夷猶。
廣平聽方籍。
茂陵將見求。
心事俱已矣。
江上徒離憂。

言ふこゝろは 范、廣平と同しくして聲聽方に籍き、已當に茂陵の下に居り、將に彼に因りて見ることを求めんとすべしと也。郭表は廣平の太守たり。

㊀郡の名、雲時に郡の内史たり ㊁洞庭湖の中に在る山の名 ㊂黄帝咸池の樂を茲に奏せり ㊃湖水に流れ入る川の名 ㊄舜の二女娥皇女英を指す ㊅地の名瀟湘に近き處に在り、舜此に崩ぜり ㊆楊子江と漢江となり ㊇副馬なり ㊈猶豫と同 ためろふこと ㊉郡の名、其太守周處を指す (一一)三年の滯訟、一朝に斷決し、其聲名のよく傳播するに譬ふ (一二)郡の名、司馬相如を指す (一三)相如病を謝して茂陵に居りしが武帝人を遣はして其書を求めしめたるに已に卒せり、此故事を借りて自から比すること (一四)憂にかゝりて心配すること

宣城郡に之き、新林浦に出で、板橋に向ふ

江路西南永。
歸流東北騖。
天際識歸舟。
雲中辨江樹。
旅思倦搖搖。
孤遊昔已屢。

(一)江路西南に永く、(二)歸流して東北に騖す。天際、歸舟を識り、雲中、江樹を辨ず。旅思倦みて(三)搖搖たり、(四)孤遊昔已に屢ゝす。既に(五)懷祿の情を歡び、復た(六)滄州の趣に協ふ。(七)囂塵玆より隔て、(八)賞心此に遇ふ。(九)玄豹の姿なしと雖、終に南山の霧に隱る。

庭際俯喬林。
日出衆鳥散。
山瞑孤猿吟。
已有池上酌。
復此風中琴。
非君美無度。
孰爲勞寸心。
惠而能好我。
問以瑤華音。
若遺金門步。
見就玉山岑。

君が美の度（一〇）りなきに非ずんば、孰か寸心（一一）を勞することを爲ん。惠（一二）んで能く我に好（一三）し、問（一四）ふに瑤華（一五）の音を以てす。金門（一六）の步（一七）を遺れて、玉山（一八）の岑に就くを見るが若し。

（一）高樓の燕息の室也　（二）閑に乘じて眺望すること　（三）法曹とは刑名を掌る官也名を借玲といふ　（四）作りかまへのこと、山川を自家の庭園として言を立つ　（五）遙に遠き形容　（六）遮ぎるものなく廣く見渡すこと　（七）山に高といひ川に深といふ　（八）山嶺を岫といふ或は山に穴あるをいふ　（九）喬木の森林也　（一〇）測られざるをいふ　（一一）己の心をいふ　（一二）詩を贈ること　（一三）引出物とすること　（一四）存問の意　（一五）呂の贈詩をほめていふ華麗なる詩といふ事也　（一六）所謂金馬門なり官場を指す　（一七）出入することを忘るゝこと　（一八）木石のうつくしき山なり

新亭渚にして范零陵雲に別る

洞庭張樂地。
瀟湘帝子遊。
雲去蒼梧野。
水還江漢流。
停驂我悵望。

洞庭（一）樂（二）を張るの地、瀟湘（四）帝子（五）遊ぶ。雲は去る蒼梧（六）の野、水は還る江漢（七）の流。驂（八）を停めて我悵望し、棹を輟めて子夷猶（九）す。廣平（一〇）聽（一一）方に籍き、茂陵（一二）將に求められんとす。心事俱に已みぬ矣、江上徒に離憂（一四）す。

寧知鴻雁飛。
拂霧朝青閣。
日旰坐彤闈。
悵望一途阻。
參差百慮依。
春草秋更綠。
公子未西歸。
誰能久京洛。
緇塵染素衣。

て百慮依る。春草秋更に綠なれども、公子未だ西に歸らず。誰か能く京洛に久しく、緇塵、素衣を染めん。

楚辭に曰く、白露紛として以て塗しと。塗は厚を謂ふ也。○鴻雁は南の方衡陽に棲み、晉安の郡に入らず、故に寧ぞ知らんと曰ふ。晉安は則ち今の泉州なり。

㊀少き形容　㊁厚き形容　㊂汎く南方を指す　㊃蜜柑や朱欒（じやぼん）の類　㊄青色の楼閣なり　㊅宮中の門を闈と曰ふ、彤は赤く塗りたる色　㊆心を痛めつゝ眺むること　㊇入り交ること　㊈種々の物思がより重なること　㊉春えし草の一旦萎みかけて又新に色を作すをいふ　⑪黑き塵（ちり）也　⑫白き着物也黑塵白衣をそむるとは久しく京師に留るをいふ也

郡內高齋の閑望。呂法曹に答ふ

郡は宣城郡と爲す。

結構何迢遞。
曠望極高深。
窗中列遠岫。

結構何ぞ迢遞なる、曠望高深を極む。窗中遠岫を列ね、庭際喬林を俯す。日出でて衆鳥散じ、山暝くして孤猿吟す。已に池上の酌有り、復た此の風中の琴あり。

思レ見二昭邱陽一。
馳暉不レ可レ接。
何況隔二兩鄉一。
風雲有二鳥道一。
江漢限無レ梁。
常恐鷹隼擊。
時菊委二嚴霜一。
寄レ言罻羅者。
寥廓已高翔。

し。京を望む一段、眷戀して已まず。〇秋河の六語は、關山近しに應じ、驅車の六語は、返路長しに應ず。時に眺、讒を被りて去る、故に末の一語あり。言ふこゝろは、已に寥廓に翔へり、羅する者如何ともすること無しと也。長卿が父老を難ずる檄の語意を用ひたり。

㈠都下と同じ、或は金陵と說く者あり ㈡浦の名 ㈢丹陽卽金陵なり ㈣王の府也 ㈤同役をいふ ㈥楊子江なり ㈦つきずと訓ずるも可也 ㈧關塞に近き山 ㈨都を去るの遠きを言ふ ㈩西府を距るの遠きを言ふ ⑪秋の夜に見ゆる天の河 ⑫小明の貌 ⑬首を延ばすこと ⑭金陵を指す ⑮宮城の譙壁也 ⑯月光を指す ⑰觀の名 ⑱星の名 ⑲宮の名 ⑳金陵の南門を指す註に見ゆ ㉑楚の昭王の陵なり ㉒過ぎ去る日影を指す ㉓接續すること ㉔金陵と隋王府のある所の荊州とを指す ㉕鳥の通ふ路なり ㉖楊子江と漢江となり ㉗渡るべき橋なきをいふ ㉘たかとはやぶさとをいふ ㉙小鳥を擊ち殺すこと、愈秋の氣分となるをいふ ㉚時節花の菊を指す、自から言ふ ㉛委棄と解し霜に萎み枯るゝをいふ ㉜鳥をとる網也、獵師に托して讒者を指す ㉝天の事

稍稍枝蚤勁。
塗塗露晚稀。
南中榮二橘柚一。

王晉安に酬ゆ

㈠稍稍枝蚤に勁く、㈡塗塗露晚に稀なり。㈢南中橘柚榮ゆ、㈣寧ぞ鴻雁の飛ぶを知らん。霧を拂つて㈤靑閣に朝し、日旰れて㈥彤闈に坐す。㈦悵望すれば一途阻て、㈧參差とし

魚戲新荷動。
鳥散餘花落。
不ㇾ對二芳春酒一。
還望二青山一親。

大江流二日夜一。
客心悲未ㇾ央。
徒念二關山近一。
終知二返路長一。
秋河曙耿耿。
寒渚夜蒼蒼。
引ㇾ領見二京室一。
宮雉正相望。
金波麗二鳷鵲一。
玉繩低二建章一。
驅二車鼎門外一。

樹といふ (五) 閣は肉桂の一種、之を用ひて作れる樓閣をいふ (六) 美しく茂れる形容 (七) 霧のこと (八) 多きこと (九) 廣く遠き貌 (一〇) 蓮の若葉をいふ (一一) 殘花のこと (一二) 三春行樂の酒也 (一三) 青山に近き丹陽の城郭を指す

暫く(一)下都に使し、夜新林(二)を發して、京邑(三)に至り、西府(四)の同僚(五)に贈る。

(六)大江、日夜に流れ、客心、悲み未だ央(七)ならず。徒(八)に關山(九)の近きを念ひ、終に返路の長(一〇)きを知る。秋河(一一)曙(一二)に耿耿たり、寒渚夜蒼蒼たり。(一三)領を引きて京室(一四)を見れば、宮(一五)雉正に相望む。金波(一六)、鳷鵲(一七)に麗なり、玉繩(一八)、建章(一九)に低る。車を鼎門(二〇)の外に驅り、昭邱(二一)の陽を見んことを思ふ。馳暉(二二)、接すべからず(二三)、何んぞ況んや兩鄉(二四)を隔つるをや。風雲鳥道(二五)あり、江漢(二六)限るに梁(二七)なし。常に恐る、鷹隼(二八)の擊ちて(二九)、時(三〇)菊嚴霜(三一)に委するを。言を寄す、罻羅(三二)の者、寥廓(三三)已に高く翔へり。

王、鼎を郟鄏に定め、其南門を鼎門と曰ふ。○一起滔滔莽莽として、其來ること端な

獨鶴方朝唳。
飢鼯此夜啼。
深雲已漫漫。
夕雨赤淒淒。
我行雖紆組。
兼得尋幽蹊。
緣源殊未極。
歸徑沓如迷。
要欲追奇趣。
即此凌丹梯。
皇恩今已矣。
茲理庶無暌。

戚戚苦無悰。
携手共行樂。
尋雲陟累榭。
隨山望菌閣。
遠樹曖阡阡。
生煙紛漠漠。

ぐ。皇恩今已みぬ矣、茲理庶はくば暌くこと無からん。

(一)寧國府の西十里に在り連叢峰の如し　(二)敬亭山を謂ふ　(三)重なり合ふこと　(四)かくれしずむこと即隱遁者を指す　(五)其身を此に托するをいふ　(六)神仙などを指す　(七)そのまゝといふが如し　(八)くるくるとまがれる谷をいふ　(九)藤かづらのからみあひたるもの　(一〇)敵と同じ　(一一)曲りくねりし樹の枝をいふ　(一二)一羽の鶴也伴なきをいふ　(一三)飢ゑたるむさゝびをいふ　(一四)濃厚なる雲也　(一五)長くたなびける樣をいふ　(一六)物すごくさびしき樣をいふ　(一七)印や冠やの組紐(くみひも)をいふ官途たる事を意味す　(一八)幽靜なる小路をたどるをいふ　(一九)攀緣すべき溪川の源をいふ　(二〇)遙なること　(二一)尋ぬること　(二二)奇妙なる風致をいふ　(二三)にぬりのかけはし即ち仙人の通る所也　(二四)今の字一本に竟の字に作り、つひにと訓ず　(二五)丹梯を凌ぎて奇趣を追ふの理を指す　(二六)違背すること

東田に遊ぶ

戚戚として悰無きに苦み、手を携へて共に行樂す。雲を尋ねて累榭を陟り、山に隨つて菌閣を望む。遠樹曖として阡阡たり、生煙紛として漠漠たり。魚戲れて新荷動き、鳥散じて餘花落つ。芳春の酒に對せず、還つて青山を望んで親む。

(一)謝朓の別莊の在る所　(二)憂ふる貌　(三)遊山をすること　(四)幾重にもかさなれるうてな也、樹木のあるを

春色滿二皇州一。
結二軫青郊路一。
廻二瞰蒼江流一。
日華川上動。
風光草際浮。
桃李成二蹊徑一。
桑楡蔭二道周一。
東都已俶レ載。
言歸望二綠疇一。

茲山亙二百里一。
合沓與レ雲齊。
隱淪既已託。
靈異居然棲。
上干蔽二白日一。
下屬帶二廻谿一。
交藤荒且蔓。
樛枝聳復低。

を瞰る、日華川上に動き、風光草際に浮ぶ。桃李、蹊徑を成し、桑楡、道周を蔭ふ。東都已に載を俶む。言に歸りて綠疇を望め。

(一)河南の二縣の名　(二)遨も亦遊ぶ也　(三)帝州と同じく京畿を指す即ち宛洛の事也　(四)軫は車の横木也之を結ぶは途に上るをいふ也　(五)春の郊外を謂ふ　(六)日光といふに同じ　(七)空氣の色　(八)桃李言はず、下おのづから蹊(こみち)を成すの古語より來る　(九)くはの木とにれの木と也　(一〇)周は曲なり道の曲りこみたる處をいふ　(一一)宛洛の事を謂ふ　(一二)詩經に出でたる文にして農事を開始するをいふ　(一三)綠田に同じ　疇は田のうね也

敬亭山に遊ぶ

茲山、百里に亙り、合沓して雲と齊し。隱淪既に已に託し、靈異居然として棲む。上干して白日を蔽ひ、下屬きて廻谿を帶ぶ。交藤荒うて且つ蔓り、樛枝聳えて復た低る。獨鶴方に朝に唳き、飢鼯此に夜啼く。深雲已に漫漫たり、夕雨亦淒淒たり。我行組を紆ふと雖、兼ねて幽蹊を尋ぬるを得たり。緣源殊に未だ極めず、歸徑窅として迷ふが如し。奇趣を追はんと欲することを要し、卽ち此に丹梯を淩

擾擾整ニ夜裝一。
肅肅戒ニ徂兩一。
曉星正寥落。
晨光復瀁漭。
猶沾ニ餘露團一。
稍見ニ朝霞上一。
故鄕邈已夐。
山川修且廣。
文奏方盈レ前。
懷レ人去ニ心賞一。
敕レ躬每跼蹐。
瞻レ恩惟震蕩。
行矣倦ニ路長一。
無レ由レ稅ニ歸鞅一。

宛洛佳ニ遨遊一。

擾擾として夜裝を整へ、肅肅として徂兩を戒む。曉星正に寥落に、晨光復た瀁漭たり。猶ほ餘露の團なるに沾ひ、稍く朝霞の上るを見る。故鄕邈として已に夐に、山川修くして且つ廣し。文奏方に前に盈ち、人を懷うて心賞を去る。躬を敕へて每に跼蹐し、恩を瞻て惟だ震蕩す。行きて路の長きに倦めども、歸鞅を稅ぐに由なし。

(一) 金陵より出づる道也 (二) 夜中に出發すること (三) 混雜する形容 (四) おごそかなる形容 (五) 行車といふに同じ、兩は輛の事也 (六) 少くまばらになるをいふ (七) 不明の貌 (八) 殘露と同じ (九) 遙なる貌 (一〇) 簿書を指す (一一) 故鄕の人をいふ (一二) 賞美の心を失ふをいふ (一三) 跼は背をかゞむること蹐はぬき足して歩むこと、要するに恐懼の狀態をいふ (一四) 君の恩をいふ (一五) 震動の意、恐れ懼るゝこと (一六) 原文矣の字古詩賞析には久の字と標す (一七) 鞅は胸がい也、卽ち歸京の車馬を指す (一八) 馬を車より離すこと

徐都曹の新亭渚を出づるに和す

徐勉に昧旦新亭渚を出づる詩あり

宛洛は遨遊するに佳く、春色、皇州に滿つ。軫を青郊の路に結び、廻つて蒼江の流

疊鼓送二華輈一。
獻納雲臺表。
功名良可レ收。

周圍を繞る幕即みかはみづ也 ㈨ 笳は一種の吹きものにて其のこり固まりし如き音調をいふ ㈩ 高き車の蓋(やね)をいふ (一一) 左右にありて吹奏すること (一二) 幾つも列べたる太鼓をいふ (一三) 立派なる車の轅(ながえ)也 (一四) 後に隨ひて奏し行く也 (一五) たてまつること (一六) 青雲のうてな即朝廷へ上表すること (一七) 自然にといふが如し (一八) 手に入るゝこと功名の成就するをいふ

佳期期未レ歸。
望望下二鳴機一。
徘徊東陌上。
月出行人稀。

王主簿の所思ありに同す(一)

(二)佳期、期すれども未だ歸らず、(三)望望として(四)鳴機を下る。(五)徘徊す(六)東陌の上、月出でて行人稀なり。

即景情を含み、怨、言外に在り。

㈠ 王主簿の作の「所思あり」といふに和したる者也 ㈡ よき期日をいふ即歸來の日也 ㈢ 失意の貌 ㈣ 機を織るときは札札聲あり故に鳴機といふ ㈤ ぶらぶら歩行すること ㈥ 田間を通ずる路を陌といふ

京路夜發す(一)

丹陽より宣陽郡に入る。

玉杯邀二上客一。
車馬一東西。
別後思二今夕一。

江南佳麗地。
金陵帝王州。
透迤帶二綠水一。
迢遞起二朱樓一。
飛甍夾二馳道一。
垂楊蔭二御溝一。
凝笳翼二高蓋一。

ん。

別離の情事、潜潜の語を以て之を出す。其情自づから蘇李より深し。詩も亦、蹙蹶の辭を作さざる也。

㊀ 晉の石祟の別荘を金谷園といふ、蓋し其藁に托して其別離を詠ぜる也、雜曲の一也 ㊁ 碗は椀の誤ならん、車渠と車椀と也車渠とは車の大輪をいひ椀とは車の後輾(あとおさへ)をいふ ㊂ 貴遊の賓客を指す ㊃ 東と西とに別るゝをいふ

入朝曲

隋王鼓吹曲十首の一

江南佳麗の地、(一)(二)金陵帝王の州。(三)透迤として綠水を帶び、(四)迢遞として朱樓を起す。(五)

飛甍、(六)馳道を夾み、(七)垂楊、御溝を蔭ふ。(八)凝笳、(九)高蓋を翼け、(一〇)(一一)壘鼓、(一二)華輈を送る。(一三)(一四)

獻納す雲臺の表、(一五)(一六)功名良に收む可し。(一七)(一八)

㊀ 揚子江南方一帯の總稱也 ㊁ 山水のうるはしきをいふ ㊂ 江蘇省江寧府を指す、六朝時代の都也 ㊃ 自得の貌ゆつたりとしたるをいふ ㊄ 遙かに遠き形容 ㊅ 高きむね瓦をいふ ㊆ 天子の御成道也 ㊇ 宮殿の

帳を下にし、朝晡に酒脯粻糒の屬を上せよとあり 六 こんもりと茂りたる形容 七 曹操の墓也 八 鼓するもの吹くものをいふ、即ち匏土革木絲竹金石の八音をふくめて音樂の事を指す也 九 銅雀臺は武帝が二喬を置きて傲奢を極めたる所ゆゑ美人の事を列べて或は芳襟といひ或は嬋娟といひて其本事を揣出する也 一〇 涙のながれしあと也 一一 女の姿のたをやかなるを指していふ 一二 帝王の座所をいふ 一三 さびしき形容

玉階怨（一）

夕殿下ニ珠簾一。
流螢飛復息。
長夜縫ニ羅衣一。
思レ君此何極。

夕殿（二）に珠簾（三）を下せば、流螢（四）飛んで復た息ふ。長夜に羅衣（五）を縫へば、君を思ふも此に何ぞ極らむ（六）。

竟に是れ唐人の絶句。唐人の中に在らば、最上者たらん。

一 宮中の階庭を指す所謂宮怨を賦したる者也 二 黄昏時の宮殿也 三 珠玉を以て飾りたるすだれ也 四 螢の飛ぶはふはりと光り引きて流るゝが如く見ゆる故にしかいふ 五 うすものゝ着物をいふ 六 怨思の限りなきをいふ

金谷聚（一）

渠碗送ニ佳人一。

渠碗（二）、佳人を送り、玉杯、上客（三）を邀ふ。車馬一たび東西（四）せば、別後今夕を思は

踟躕日已暮。
蓮葉尙田田。
淇水不レ可レ渡。
願子淹二桂舟一。
時同二千里路一。
千里既相許。
桂舟復容與。
江上可レ采レ菱。
淸歌共二南楚一。

繐帷飄二井幹一。
樽酒若二平生一。
鬱鬱西陵樹。
詎聞二鼓吹聲一。
芳襟染二淚迹一。
嬋娟空復情。
玉座猶寂寞。
況乃妾身輕。

願ばくは子、桂舟(四)を淹め(五)よ、時に千里の路を同じうせん。千里既に相許し、桂舟復た容與(六)たり。江上(七)菱を采るべく、清歌、南楚(八)を共にせん。

(一)陰陽轉易すること陽氣が陰氣に易はる也　(二)たちもとはること徘徊の意　(三)水の名　(四)桂にて製したる舟　(五)滯留の意　(六)徐緩の義、ゆつたりとしたる形容　(七)江南曲に采蓮采菱あり　(八)國の名、古の荊州の域にして東楚西楚南楚と區別せらる。江南は卽ち南楚也。楚の都を郢といふ、むかし郢中に歌ふものあり、其始を下里巴人といひ次を陽阿薤露といひ次を陽春白雪といふ、楚調を以て共に唱へんとの意也

謝諮議(一)と同じく銅雀臺(二)を詠ず

繐帷(三)、井幹(四)に飄り(五)、樽酒、平生の若し。鬱鬱(六)たる西陵(七)の樹、詎ぞ鼓吹(八)の聲を聞かん。芳襟(九)淚迹(一〇)を染め、嬋娟(一一)空しく復た情あり。玉座(一二)猶ほ寂寞(一三)たり、況んや乃ち妾が身の輕きをや。

魏武を笑ふ也。而して之を樹に托するは、何等の含蓄ぞ。立言の妙を悟るべし。

(一)謝璟の事也　(二)魏の曹操作りし所の三臺の一也　(三)凡そ布の細くして疎きものを繐といふ、涼しきとばり也　(四)井上の木闌(みげた)に似たる樓檐をいふ　(五)魏の武帝が諸子に遺命せし中に、上に六尺の牀を施し、繐

卷十二

齊詩(一)

謝朓(二)

玄暉、靈心秀口にして、每に名句を誦す。淵然冷然として、筆墨の中、筆墨の外、別に一段の深情妙理あるを覺ゆ。○康樂は每に板拙に、玄暉は多く淸俊なり。然れども詩品、終に康樂の下に在るは、淸を能くして厚を能くせざれば也。

(一) 齊は六朝の一にして宋の後を受くるもの也　(二) 南齊陽夏の人、少にして學を好み文章淸麗なり、嘗て宣城の太守なりしを以て世に謝宣城と稱せり

江上曲

易陽春草出。

(一)易陽、春草出で、踟躕して日已に暮る。蓮葉尚ほ田田に、(三)淇水渡るべからず。

可レ憐白符鳩。
枉ニ殺檀江州一。

可レ憐石頭城。
寧爲ニ袁粲一死。
不下作ニ褚淵一生上。

日暮風吹。葉落依レ枝。丹心寸意。愁ニ君未レ知。

憐むべし白符鳩(一)、檀江洲(二)を枉殺せり。

(一) 宋王を指して言ふ　(二) 高平の人、汝の萬里の長城を壞ると叫んで殺されし人なり

石城の謠

南史に、袁粲が兵を擧げて齊の高帝を誅せんことを謀るや、褚淵其の謀を發き、粲は害に遇うて、淵のみ獨り政を輔けたり。百姓語つて曰く、

憐むべし石頭城(一)、寧ろ袁粲と爲つて死すとも、褚淵と作つて生きず。

(一) 江寧縣石頭山後に在り

青溪(一)の小姑が歌

蔣侯が妹なり。

日暮風吹き、葉落ちて枝に依る。丹心寸意(二)、君が未だ知らざるを愁ふ。

(一) 江蘇江寧縣に在る水名　(二) 赤誠の心中をいふ、寸は謙辭

竹竿籊籊。河水浟浟。相忘爲レ樂。貪レ餌呑レ鉤。非レ夷非レ惠。聊以忘レ憂。

漁父

孫緬に答ふる歌

南史に、潯陽の太守孫緬、漁父に遇ひ、與に用世(一)の道を論ず。漁父曰く、僕は山海の狂人にして、世務に達せず、未だ貧賤を(二)も辨ぜず、榮貴に論無しと。乃ち歌ふこと云々。是に於て悠然として椎を鼓して去りき。

竹竿籊籊(三)たり、河水浟浟(四)たり。相忘れて樂を爲し、餌を貪り鉤を呑む。夷(五)に非ず惠に非ず、聊か以て憂を忘る。

(一)世間に用ひられ立身出世する方法　(二)貧賤の事も判らず況んや富貴をやの義　(三)竹長うしき鋭き貌　(四)迅急に流るゝ貌　(五)伯夷にもあらず柳下惠にもあらず

宋人の歌

南史に、檀道濟は宋の良將なり、敵の爲に畏れらる。宋主疑うて之を殺すや、宋人歌を作りぬ。

含君千里光。
巷中情思滿。
斷絕孤妾腸。
悲風盪帷帳。
瑤翠坐自傷。
妾心依天末。
思與浮雲長。
嘯歌視秋草。
幽葉豈再揚。
暮蘭不待歲。
離華能幾芳。願作張女引。流悲繞君堂。君堂嚴且祕。絕調徒飛揚。

悲風は帷帳を盪かし、瑤翠坐に自ら傷む。妾が心は天末(二)に依り、思は浮雲と長し。嘯歌して秋草を視る、幽葉(三)豈再び揚らんや。暮蘭は歳を待たず、離華能く幾か芳しからん。願はくば張女の引(四)を作し、悲を流して君が堂を繞らしめん。君が堂は嚴且つ祕なり、絕調(五)徒に飛揚せん。

(一) 君が妾を照すかと疑ふ程なりとの意　(二) 遥なる遠方　(三) 隱れたる樹葉　(四) 張女引ともいふ古曲の名なり　(五) 激絕せる調子も、は曲を成す能はざらんとなり

劉俁

詩一首

城上草。植根非不高。所恨風霜蚤。

城上の草、根を植つること高からざるに非ず、恨む所は風霜の蚤きなり。(一)

(一) 身を富貴に託すれば却つて苦辛多き義なり

折レ花逢二驛使一。寄二與隴頭人一。江南無レ所レ有。聊贈二一枝春一。

明月照二高樓一。

陸凱

范曄に贈る詩

荊州記に曰く、凱と范曄と交り善し。江南より梅花一枝を寄せ、曄に與へて詩を贈る云々と。

花を折つて(一)驛使に逢ひ、(二)隴頭の人に寄與す。江南は有る所無し、聊か一枝の春を贈る。

(一) 飛脚の類 (二) 天下の隴坂に行役せる范曄を指す

湯惠休

怨詩行

明月高樓を照し、(一)君が千里の光を含む。巷中に情思滿ち、孤妾の腸を斷絕す。

久没二離宮地一。安識二壽陵闕一。仲秋邊風起。孤蓬卷二霜根一。白日無二精景一。黄沙千里昏。顯軌莫レ殊レ轍。幽途豈異レ魂。聖賢良已矣。抱レ命復何怨。

ぬ、命を抱いて復何をか怨みん。

㈠ 游宮に同じ ㈡ 盛なりし周も大なりし漢も皆一時の榮華のみ ㈢ 黄沙の為に天も昏昧なり

微生遇二多幸一。得レ逢二時運昌一。朽老筋力盡。徒步還二南岡一。辭二榮此聖世一。何媿二張子房一。

沈慶之

宴に侍する詩

南史に云ふ、孝武は羣臣をして詩を賦せしむ。慶之は口辯有るも、手に書する能はず。上賦を作さしむ。慶之曰く、臣請ふ師伯に口授せんと。上は顔師伯をして筆を執らしむるに慶之云々せり。上甚だ悦び、衆坐も並に其詞意の美を稱しぬと。

微生多幸に遇ひ、(一)時運の昌なるに逢ふを得たり。朽老筋力盡き、徒步して南岡に還る。(二)榮を此の聖世に辭すとも、何ぞ張子房に媿ぢんや。

㈠ 聖代隆昌の時 ㈡ 聖代に榮名を辭して退隱せば漢の張良が退身せしが如くならんとの意

結遊略年義。篤顧棄浮沈。寒榮共偃曝。春醞時獻斟。聿來歲序暄。輕雲出東岑。麥壟多秀色。楊園流好音。歡此乘日暇。忽忘逝景侵。幽衷何用慰。翰墨久謠吟。棲鳳難爲條。淑貺非所臨。誦以永周旋。匣以代兼金。

か慰めん、翰墨久しく謠吟す。(七)棲鳳は條を爲し難く、淑貺は臨む所に非ず。誦して以て永く周旋し、匣にして以て(八)兼金に代へん。

(一) 司馬長卿と魯仲連と屢々前出せり華陽は四川省なり (二) 玉の如き麗は文府に光り精理の妙も道心を窮む (三) 高尚なる情思は古人の事跡に一致す (四) 仰臥して暖を日光に取るなり (五) 黃鳥等の聲をいふ (六) 幽深なる衷情 (七) 鳳凰は梧桐に非ざれば棲まず故に爲し難しとなり (八) 孟子に兼金一百と見ゆ兼は好良の意

瑯琊王の依古に和す

少年好馳俠。旅宦遊關源。既踐終古跡。聊訊興亡言。隆周爲藪澤。皐漢成山樊。

少年にして馳俠を好み、(一)旅宦して關源に遊ぶ。既に終古の跡を踐み、聊か興亡の言を訊ふ。隆周も藪澤と爲り、皐漢も山樊と成る。久しく離宮の地に沒す、安んぞ壽陵の園を識らん、仲秋に邊風起り、孤蓬霜根を卷く。白日も精景無く、(二)黃沙千里も昏し。顯軌は轍を殊にする莫し、幽途豈魂を異にせんや。聖賢良に已ん

詎憶二無衣苦一。
但知二狐白温一。
日暗牛羊下。
野雀滿二空園一。
孟冬寒風起。
東壁正中昏。朱火獨照レ人。抱レ景自愁怨。誰知心曲亂。所思不レ可レ論。

は論ずべからず。

(一)遠行の良人を思慕する婦人　(二)人の婦を言ふ　(三)詩經秦風無衣の篇參見　(四)狐白の裘なり　(五)昴宿の名なり昏に東壁の中するは仲冬なり

王僧達

顏延年に答ふ

長卿冠二華陽一。
仲連擅二海陰一。
珪璋既文府。
精理亦道心。
君子聳二高駕一。
塵軌實爲レ林。
崇情符二遠跡一。
淸氣溢二素襟一。

(一)長卿は華陽に冠とし、仲連は海陰に擅なり。(二)珪璋既に文府あり、精理亦道心なり。君子は高駕を聳げ、塵軌實に林を爲せり。(三)崇情は遠跡に符ひ、淸氣は素襟に溢つ。結遊に年義を略し、篤く顧みて浮沈を棄つ。寒き榮に共に偃曝し、(四)春醞時に獻斟す。聿に來つて歲序喧く、輕雲東岑より出づ。麥壟に秀色多く、楊園に(五)好音を流す。此の日に乘るの暇を歡び、忽ち逝景の倏すを忘る。(六)幽衷何を用て

寸心從レ此殫。
遣二妾長憔悴一。
豈復歌笑顔。
簷隱二千霜樹一。
庭枯二十載蘭一。
經レ春不レ擧レ袖。
秋落寧復看。
一見願レ道レ意。君門已九關。虞卿棄二相印一。擔レ簦爲二同歡一。閨陰欲二蚤霜一。何事空盤桓。

て蚤く霜らんと欲す、何事ぞ空しく盤桓する。(九)

(一)離別を惜む貌　(二)以下四句はこの人が主人と同じく役に從ひ飢寒を共にする者なることを敍す　(三)以下婦の託する書辭なり　(四)千年をも經る程に茂り行く樹木　(五)袖を擧げて歌笑する期無しとなり　(六)歐重に鎖せり　(七)史記に見ゆ趙王に一見して上卿となりしが後に官を棄てゝ書を著しゝ人　(八)大雨傘の類　(九)徘徊躊躇する意

王徽

雜詩

思婦臨二高臺一。
長想憑二華軒一。
弄レ絃不レ成レ曲。
哀歌送二苦言一。
箕帚留二江介一。
良人處二雁門一。

(一)思婦高臺に臨み、長く想うて華軒に憑る。絃を弄して曲を成さず、哀歌して苦言を送る。(二)箕帚は江介に留り、良人は雁門に處る。詎ぞ無衣の苦を憶はん、(三)但狐白(四)の溫を知る。日暗うして牛羊下り、野雀空園に滿つ。孟冬に寒風起り、東壁正に中昏す。朱火獨り人を照し、景を抱いて自ら愁怨す。誰か知らん心曲の亂(五)、所思

荊揚春蚕和。幽薊猶霜霰。北寒妾已知。南心君不レ見。誰爲道二辛苦一。寄二情雙飛燕一。形迫杼煎レ絲。顏落風催レ電。容華一朝改。惟餘二心不一レ變。

(五)顏落ちて風電を催す。容華一朝に改り、惟心の變ぜざるを餘すのみ。

(一)毛布もて飾多き絹衣に代ふ　(二)冠上を蔽ふ防寒具　(三)南方に住する妾には君の心見えず　(四)身は多忙にして緩織りては直に絲を煉るとなり　(五)顏色衰ふる意

長相思

晨有二行路客一。依依造二門端一。人馬風塵色。知下從二河塞一還上。時我有二同棲一。結宦游二邯鄲一。將下不レ異二客子一。分レ飢復共レ寒。煩レ君尺帛書。

晨に行路の客有り、依依として門端に造る。人馬風塵の色、河塞より還るを知る。(一)時に我に同棲有り、(二)結宦して邯鄲に遊ぶ。將に客子に異らず、飢を分つて復寒を共にせんとす。(三)君を煩はす尺帛の書、寸心此より殫きん。妾をして長く憔悴せしむ。豈復歌笑の顏あらんや。(四)簷は千霜の樹に隱れ、庭には十載の蘭枯る。春を經るも(五)袖を擧げず、秋落つとも寧ぞ復看んや。一見して意を道はんことを願へども、君が門は已に(六)九關せり。(七)虞卿は相印を棄て、(八)簦を擔つて同歡を爲しぬ。閨陰り

輕レ命重ニ意氣一。
古來豈但今。
緩レ頰獻ニ一說一。
揚レ眉受ニ千金一。
邊風落ニ寒草一。
鳴笳墮ニ飛禽一。
越情結ニ楚思一。
漢耳聽ニ胡音一。
既懷ニ離俗傷一。
復悲ニ朝光侵一。
日當ニ故鄉沒一。
遙見ニ浮雲陰一。

寒鄉無ニ異服一。
氈褐代ニ文練一。
日月望ニ君歸一。
年年不レ解レ縱。

胡笳曲

命を輕んじて意氣を重んず、古來但但今のみならんや。(一)頰を緩うして一說を獻じ、眉を揚げて千金を受く。邊風寒草を落し、鳴笳飛禽を墮す、(二)越情は楚思に結ぼり、(三)漢耳もて胡音を聽く。既に離俗の傷を懷ひ、復朝光の侵すを悲しむ。(四)日は故鄉に當つて沒す。遙に浮雲の陰を見る。

(一)史記に酈生が漢王を說きし語中に見ゆ顏容をやさしくする意　(二)昂然得意の說　(三)越人の思慕が楚にある客の胸に通ずとなり　(四)日沒處卽ち故鄉の方角なるをいふ

古意、今人に贈る

寒鄉に異服無く、氈褐もて文練に代ふ。日に月に君が歸るを望み、年年に(一)縱を解かず。(二)荊揚春蚤く和ぎ、幽薊は猶霜霰なり。北寒うして妾已に知るも、(三)南心に君見えず。誰が爲に辛苦を道はん、情を雙飛の燕に寄す。(四)形迫りて杼もて絲を煎、

知レ同ニ憂怨晨一。
芳華豈矜レ貌。
霜露不レ憐レ人。
君非ニ青雲逝一。
飄迹事ニ咸秦一。
妾持ニ一生涙一。經レ秋復度レ春。

逝くに非ず、飄迹咸秦を事とす。妾は一生の涙を持し、秋を徑りて復春を度る。

㊀ 帷を垂るゝも月光はうすものの衾を照す ㊁ 妾が貌を誇るに非ず苦辛のために憔悴するを恥づ ㊂ 君は游宦せるに非ずしてたゞ秦中の地に遊蕩せりとなり

吳邁遠

書後に題して行人に寄す

自ニ君之出一矣。
臨レ軒不レ解レ顏。
砧杵夜不レ發。
高門晝恆關。
帳中流ニ熠燿一。
庭前華ニ紫蘭一。
楊枯識ニ節異一。
鴻歸知ニ客寒一。遊用暮冬盡。除春待ニ君還一。

君の出でしより、軒に臨んで顏を解かず。砧杵夜發せず、高門晝も恆に關す。帳中に熠燿を流し、庭前に紫蘭を華さかす。楊枯れて節の異なるを識り、鴻歸つて客の寒きを知る。遊んで用て暮冬盡く、除春に君が還るを待たん。

㊀ 愁思に勝へざる也 ㊁ 螢火をいふ ㊂ 舒春の義、春の開くる初をいふ

玉鉤隔ニ鎖窗一。
三五二八時。
千里與レ君同。
夜移衡漢落。
徘徊帷戸中。
歸華先委レ露。
別葉蚤辭レ風。
客遊厭ニ苦辛一。
仕子倦ニ飄塵一。休澣自レ公日。宴慰及ニ私辰一。蜀琴抽ニ白雪一。郢曲發ニ陽春一。肴乾酒未レ闋。金壺起ニ夕淪一。廻レ軒駐ニ輕蓋一。留レ酌待ニ情人一。

く風に辭す。客遊に苦辛を厭ふ。仕子は飄塵に倦む。(八)休澣す公よりする日、宴慰私辰に及ぶ。蜀琴は白雪を(七)抽き、郢曲は陽春を發す。肴乾くも酒未だ闋まず、金壺に夕淪を起す。軒を廻して輕蓋を駐め、酌を留めて情人を待つ。

(一) 尖鋭なる貌にいふ　(二) 珠を飾れる窓　(三) 鎖は瑣に同じ窓のれんじなり　(四) 十五夜十六夜　(五) 北斗銀漢の移るをいふ　(六) 休暇を請うて安息する日　(七) 陽春白雪は高尚の調なり

鮑令暉

葛沙門が妻郭小玉に代つて作る

明月何皎皎。
垂レ幌照ニ羅茵一。
若共ニ相思夜一。

明月何ぞ皎皎たる、(一)幌を垂るれば羅茵を照す。若し相思の夜を共にせば、憂怨の晨を同じうするを知らん。(二)芳華豈貌を矜らんや、霜露人を憐れまず。(三)君は青雲の

空庭聚山雀。既遠人世歡。還覩泉卉樂。折柳樊場圃。負綆汲潭壑。霽旦見雲峰。風夜聞海鶴。江介早寒來。白露先秋落。麻壟方結葉。瓜田已掃籜。傾暉忽西下。廻景思華幕。攀蘿席中軒。臨觴不能酌。終古自多恨。幽悲共論鑠。

綆を負うて潭壑に汲む。霽旦に雲峯を見、風夜に海鶴を聞く。江介早寒來り、白露秋に先つて落つ。(四)麻壟方に葉を結び、瓜田已に籜を掃ふ。(五)傾暉は忽ち西に下り廻景は華幕を思ふ。蘿を攀ぢて中軒に席し、觴に臨んで酌む能はず。終古自ら恨多し。幽悲共に論鑠す。(六)

(一)農耕に從事するなり (二)山水花木の娛樂 (三)垣根をつくる (四)麻のはたけ (五)西に傾く太陽 (六)沈みとくるなり鬱結して解けざる也

始見西南流。纖纖如玉鉤。未映西北墀。娟娟似蛾眉。蛾眉蔽珠櫳。

月を城西門廨中に翫ぶ

始めて見しとき西南に流れ、纖纖として玉鉤の如し。未だ西北の墀に映ぜず、娟娟として蛾眉に似たり。蛾眉珠櫳に蔽はれ、(一)(二)玉鉤鎖窗に隔る。(三)三五二八の時、(四)千里君と同じうす。夜移りて衡漢落ち、(五)徘徊す帷戶の中、歸華先づ露に委し、別葉蚤

水芝韜二內策一。寶餌緩二童年一。命レ藥駐二衰曆一。矧蓄二終古情一。重拾二煙霧迹一。羊角棲二斷雲一。榼口流二隘石一。銅溪晝深沉。乳竇夜涓滴。既類二風門磴一。復像二天井壁一。蹀蹀寒葉離。瀧瀧秋水積。松色隨レ野深。月露依レ草白。空守二江海思一。豈愧二梁鄭客一。得レ仁古無レ怨。順レ道今何惜。

駐む。矧んや終古の情を蓄へ、重ねて煙霧の迹を拾ふをや。(三)羊角に斷雲を棲め、(四)榼口に隘石を流す。銅溪晝も深沉、(五)乳竇夜も涓滴、既に(六)風門の磴に類し、復天井の壁に像たり。蹀蹀として寒葉離り、瀧瀧として秋水積る。松色野に隨つて深く、月露草に依りて白し。空しく江海の思を守る。豈梁鄭の客に愧ぢんや。(七)仁を得ては古より怨む無し、道に順はば今も何ぞ惜まん。

(一) 土の膏脂なり　(二) 過ぎ行く暦日　(三) 旋風をいふ　(四) 榼の如く酒器の如き形したる入口か　(五) 鍾乳石ある岩穴　(六) 風谷山なるべし石壁に大洞ある佛經を刻せる石柱多しといふ　(七) 仁を求めて仁を得たる意なり

秋夜

遯レ跡避二紛喧一。貨レ農棲二寂寞一。荒徑馳二野鼠一。

跡を遯して紛喧を避け、(一)農を貨うて寂寞に棲む。荒徑に野鼠を馳せ、空庭に山雀を聚む。既に人世の歡に遠ざかり、(二)還泉卉の樂に賴る。柳を折つて場圃に樊し、(三)

千里歌二別鶴一。
絃絶空咨嗟。
形音誰賞錄。
辛苦異二人狀一。美貌改如レ玉。徒畜二巧言鳥一。不レ解二心款曲一。

畜へども、心款の曲を解せず。

㊀風吹く貌にいふ　㊁不滿足の貌　㊂琴曲名なり　㊃物言ふ鳥あれども我が長情を悟らずとなり

胡風吹二朔雪一。
千里度二龍山一。
集二君瑤臺上一。
飛二舞兩楹前一。
茲晨自爲レ美。
當レ避二豔陽天一。
豔陽桃李節。
皎潔不レ成レ妍。

劉公幹の體を學ぶ

胡風朔雪を吹き、千里龍山(一)を度る。君が瑤臺の上に集り、兩楹(二)の前に飛舞す。茲の晨自ら美を爲り、當に(三)豔陽の天を避くべし。豔陽桃李の節は、(四)皎潔も妍を成さず。

㊀正しくは連龍山といふとぞ　㊁二本の廻り柱即ち君王の政廳を指す　㊂積雪の光景は春陽三日の景に勝るとなり　㊃潔白のみにては群花に比べ難しとなり

土肪閟二中經一。

銅山に黄精を掘るに遇ふ

(一)土肪中經を閟し、水芝內策に韜まる。寶餌もて童年を緩うし、藥を命じて衰曆(二)を

恩榮難二久恃一。
隆寵易二衰偏一。
觀レ席妾悽愴。
覩レ翰君泫然。徒抱二忠孝志一。猶爲二葑菲遷一。

㈠ 賤しくつまらずとなり ㈡ 華美の盛宴 ㈢ 盛んなる恩寵は却つて衰ふる期早し ㈣ 空席なり翰は音信を指す ㈤ 取るべき一節ある義詩經に據る

昔與レ君別時。
蠶妾初獻レ絲。
何言年月駛。
寒衣已擣治。
縱繡多廢亂。
篇帛久塵緇。
離心壯爲レ劇。
飛念如レ懸レ旗。石席我不レ爽。德音君勿レ欺。

昔は君と別れし時、蠶妾初めて絲を獻じぬ。何ぞ言はん年月駛く、寒衣已に擣治せんとは、(一)縱繡多く廢亂し、篇帛久しく塵に緇む。離心壯にして劇を爲し、飛念は(二)旗を懸くるが如し。(三)石席我爽はず、德音君欺く勿れ。

㈠ 錦繡の美服を汎稱す ㈡ 搖動して定まらざるをいふ ㈢ 我が心石に非ず席に非ずとの意

瑟瑟涼二海風一。
竦竦寒二山木一。
紛紛羇思盈。
慊慊夜絃促。
訪言山海路。

(一)瑟瑟として海風涼しく、竦竦として山木寒し。(二)紛紛たる羇思盈ち、慊慊として夜(二)絃促し。訪ふ言に山海の路、(三)千里別鶴を歌へり。絃絶えて空しく咨嗟し、形音誰か賞錄せん。辛苦す人の狀に異なり、美貌改めて玉の如し。(四)徒に巧言の鳥を

蜀漢多₂奇山₁。
仰望與ㇾ雲平。
陰崖積₂夏雪₁。
陽谷散₂秋榮₁。
朝朝見₂雲歸₁。
夜夜聞₂猿鳴₁。
憂人本自悲。
孤客易ㇾ傷ㇾ情。
臨ㇾ堂設₂樽酒₁。
留ㇾ酌思₂平生₁。石以ㇾ堅爲ㇾ性。君勿ㇾ憇₂素誠₁。

蜀漢に奇山多く、仰ぎ望めば雲と平かなり。(一)陰崖に夏雪を積み、陽谷に秋榮を散ず。朝朝雲の歸るを見、夜夜猿の鳴くを聞く。憂人本自ら悲しみ、孤客は情を傷め易し。堂に臨んで樽酒を設け、酌を留めて平生を思ふ。石は堅を以て性と爲す、(二)君素誠に憇づる勿れ。

(一) 山北には雪あるに山南には花開けり　(二) 君よ素質の誠心を失ふこと勿れとの意

古辭に紹ぐ

橘生₂湘水側₁。
菲陋人莫ㇾ傳。
逢₂君金華宴₁。
得ㇾ在₂玉几前₁。
三川窮₂名利₁。
京洛富₂妖妍₁。

橘は湘水の側に生ず。(一)菲陋にして人傳ふる莫し。君が(二)金華の宴に逢うて、玉几の前に在るを得たり。三川名利に窮し、京洛妖妍に富む。恩榮久しく恃み難く、(三)隆寵は衰偏し易し。(四)席を觀て妾悽愴し、輪を覩て君泫然。徒に忠孝の志を抱く、猶(五)葑菲の爲に遷る。

提レ爵止二中山一。日夕登二城隅一。周廻視二洛川一。街衢積二凍草一。城郭宿二寒煙一。繁華悉何在。宮闕久崩塡。空謗二齊景非一。徒稱二夷叔賢一。

空しく齊景(六)の非を謗り、徒に夷叔(七)が賢を稱す。

一 北方の丘陵　二 波の漫なるが如く繁多なる意　三 衞に在る縣名　四 直隷省の西部に在り　五 回顧するなり　六 齊の景公なり晏子春秋參照　七 伯夷叔齊の事屢々出せり

河畔草未レ黄。胡雁已矯レ翼。秋螢扶レ戸吟。寒婦成二夜織一。去歲征人還。流傳舊相識。聞君上レ隴時。東望久歎息。宿昔改二衣帶一。朝旦異二容色一。念レ此憂如何。夜長愁更多。明鏡塵二匣中一。瑤琴生二網羅一。

河畔草未だ黄ならず、胡雁(一)已に翼を矯ぐ。秋螢は戸に扶りて吟じ、寒婦は夜織を成す。去歲征人還り、(二)流傳す舊相識と。聞く君が(三)隴に上りし時、東望して久しく歎息せりと。宿昔に衣帶を改め、朝旦に容色を異にす。此を念うて憂如何、夜長うして愁更に多し。明鏡は匣中に塵れ、(四)瑤琴は網羅を生ず。

一 北方より雁飛び來る　二 君の良人と戰地にて相知りたりと稱するなり　三 天水郡の隴山　四 蜘蛛の網に埋るとなり

幽并重二騎射一。
少年好二馳逐一。
氈帶佩二雙鞬一。
象弧插二雕服一。
獸肥春草短。
飛レ鞚越二平陸一。
朝遊二雁門上一。
暮還二樓煩宿一。
石梁有二餘勁一。
驚雀無二全目一。
漢虜方未レ和。邊城屢翻覆。留二我一白羽一。將三以分二符竹一。

鑿レ井北陵隈。
百丈不レ及レ泉。
生レ事本瀾漫。
何用獨精堅。
幼壯重二寸陰一。
衰暮及レ輕レ年。
放レ鶻息二朝歌一。

(一)幽并は騎射を重んじ、少年も馳逐を好む。氈帶に雙鞬を佩び、(二)象弧を雕服に挿めり。獸肥えて春草短く、鞚を飛ばして(三)平陸を越ゆ。朝に雁門の上に遊び、暮に樓煩の宿に還る。(四)石梁に餘勁有り、驚雀に全目無し。漢と虜と方に未だ和せず、邊城屢々翻覆す。我が(五)一白羽を留めて、將に以て符竹を分たんとす。

(一)幽州并州の地方　(二)象牙もて弓端を飾れる弓　(三)平坦なる土地　(四)石橋を射ても羽を飲み雀の眼をも射る程の名手　(五)一本の白羽の矢もて銅虎符竹使符の賞を得んとすとなり

井を鑿つ(一)北陵の隈、百丈まで泉に及ばず。事を生す本(二)瀾漫、何を用てか獨り精堅ならん。幼壯に寸陰を重んじ、衰暮に年を輕んずるに及ぶ。鶻を放つて(三)朝歌に息ひ、爵を提げて(四)中山に止る。日夕に城隅に登り、(五)周廻して洛川を視る。街衢に凍草を積み、城郭に寒煙を宿す。繁華悉く何んか在る、宮闕久しく崩壞す。

與馬塞二衢路一。
宗黨生二光輝一。
賓僕遠傾慕。
富貴人所レ欲。
道德亦何懼。
南國有二儒生一。迷レ方獨淪誤。伐二木清江湄一。設レ罝守二㲋兎一。

うて獨り淪誤す。(四)木を清江の湄に伐り、(五)罝を設けて㲋兎を守る。

(一) 誰とも定めず假言するのみ金は金印を受くる義　(二) 國君の恩の上に宰相の眷顧を受くとなり楚の大臣を令尹といへり　(三) 吳の地なり作者自ら謂ふ　(四) 沈淪謬誤の意　(五) 下二句詩經によりて書けり

十五諷二詩書一。
篇翰靡レ不レ通。
弱冠參二多士一。
飛步遊二秦宮一。
側觀二君子論一。
預見二古人風一。
兩說窮二舌端一。
五車摧二筆鋒一。
羞レ當二白璧貺一。
恥レ受二聊城功一。
晚節從二世務一。
乘レ障遠和レ戎。
解レ佩襲二犀渠一。卷レ袠奉二盧弓一。始願力不レ足。安知二今所一レ終。

十五にして詩書を諷し、(一)篇翰通ぜざる靡し。弱冠にして多士に參り、飛步して秦宮に遊ぶ。側に君子の論を觀、預じめ古人の風を君る。(二)兩說舌端を窮め、(三)五車筆鋒を摧く。白璧の貺に當るを羞ぢ、聊城の功を受くるを恥づ。晚節に世務に從ひ、(四)障を乘つて遠く戎を和す。佩を解いて(五)犀渠を襲ひ、袠を卷いて盧弓を奉ず。始願は力足らず、安ぞ今の終る所を知らんや。

(一) 筆墨といふ程の意　(二) 魯仲連が新垣衍を說けると聊城を下せるとの說なり史記參見　(三) 莊子に惠施の藏書多きを稱せり　(四)、山をいふ障に通ず　(五) 犀皮もて作れるよろひをいふ

三川養ニ聲利一。千金不ニ市死一。明經有ニ高位一。京城十二衢。飛甍各鱗次。仕子彯ニ華纓一。游客竦ニ輕轡一。明星晨未レ晞。軒蓋已雲至。賓御紛颯沓。鞍馬光照レ地。寒暑在ニ一時一。繁華及レ春媚。君平獨寂寞。身世兩相棄。

の十二衢、飛甍各々鱗次せり。(五)仕子は華纓を彯し、游客は輕轡を竦ぐ。明星晨未だ晞ならず、(六)軒蓋已に雲のごとく至る。賓御紛として颯沓し、鞍馬の光は地を照す。寒暑も一時に在り、繁華春に及んで媚ぶ。(七)君平のみ獨り寂寞、身世兩つながら相棄つ。

(一) 洛陽邯鄲臨淄宛成都　(二) 河と洛と伊と　(三) 富豪の子弟なり　(四) 經術に明通する者　(五) 官途の人は花やかに冠緒を飾る　(六) 車幌と車蓋と　(七) 蜀の嚴君平は戸を閉ぢて世を絶てりし人

魯客事ニ楚王一。懷レ金襲ニ丹素一。既荷ニ主人恩一。又蒙ニ令尹顧一。日晏罷レ朝歸。

古に擬す

魯客楚王に事ふ、金を懷いて丹素を襲ぬ。既に主人の恩を荷ひ、又令尹の顧を蒙る。日晏れて朝を罷め歸るに、輿馬は衢路に塞がる。宗黨に光輝を生じ、賓僕も遠く傾慕す。富貴は人の欲する所、道徳亦何ぞ懼れん。(一)南國に儒生有り、方に迷

後渚を發す

江上氣蚤寒。仲秋始霜雪。從レ軍乏二衣糧一。方レ冬與レ家別。蕭條背レ鄉心。悽愴清渚發。涼埃暉二平皐一。飛潮隱二修樾一。孤光獨徘徊。空煙視二昇滅一。塗隨二前峯一遠。意逐二後雲一結。華志分二馳年一。韶顏慘二驚節一。推レ琴三起レ歎。聲爲レ君斷絕。

江上は氣蚤く寒く、仲秋始めて霜雪あり。軍に從つて衣糧に乏しく、(一)冬に方つて家と別る。蕭條たり鄉に背くの心、悽愴として清渚を發す。涼埃は平皐に暉り、(二)飛潮は修樾に隱る。(三)孤光獨り徘徊し、(四)空煙昇滅を視る。(五)塗は前峯に隨つて遠く、意は後雲を逐うて結ぶ。(六)華志は馳年に分れ、(七)韶顏は驚節を慘む。琴を推して三たび歎を起し、聲は君が爲に斷絕す。

(一)十月に家を辭して軍に從ふ　(二)一本暉を晦に作る　(三)長き並木　(四)寂しげなる太陽　(五)薄きもやの類　(六)後方の雲を見て心思結集す　(七)志業容顏皆歲月の爲に敗殘する意

史を詠す

五都矜二財雄一。

(一)五都に財雄を矜り、(二)三川に聲利を養ふ。(三)千金市に死せず、(四)明經に高位有り。京城

牛叔不レ違レ食。君子樹二令名一。細人效二命力一。不レ見長河水。清濁倶不レ息。

昨夜宿二南陵一。今旦入二蘆洲一。
客行惜二日月一。崩波不レ可レ留。
侵レ星赴二早路一。畢レ景逐二前儔一。
鱗鱗夕雲起。獵獵晚風遒。
騰沙鬱二黃霧一。翻浪揚二白鷗一。
登レ艫眺二淮甸一。掩レ泣望二荊流一。
絕レ目盡二平原一。時見二遠煙浮一。
倏忽坐還合。俄思甚二兼秋一。未三嘗違二戶庭一。安能千里游。誰令下乏二古節一。貽中此越鄉憂上。

潯陽に上り都に還る道中の作

昨夜南陵に宿し、今旦蘆洲に入る。(一)客行に日月を惜む、崩波は留むべからず。(二)星を侵して(三)早路に赴き、景を畢へて前儔を逐ふ。鱗鱗として夕雲起り、獵獵として晚風遒し。(四)騰沙は黃霧鬱く、翻浪は白鷗を揚ぐ。艫に登つて淮甸を眺め、(五)泣を掩うて荊流を望む。目を絕てば平原に盡き、時に遠煙の浮ぶを見る。倏忽にして坐て還合し、俄に思うて兼秋より甚し。(六)未だ嘗て戶庭を違らず、安んぞ能く千里に游ばん。誰か古節に乏しくして、(七)此の越鄉の憂を貽さしむる。(八)

(一) 一地方の名には非ず蘆葦叢生せる水中の小島といふ程の意 (二) 崩るゝ波の支ふべからざるが如く日月も引きとむべからず (三) 早晨をいふ (四) 黃沙空に飛んでくらし (五) 淮水の地方 (六) 三秋に同じ (七) 古人の如き高節無しとなり (八) 左傳に壁を懐いて鄉を越ゆ云々とあるに據る

孤雁集洲沚。邂逅兩相親。緣念共無已。風雨好東西。一隔頓萬里。追憶棲宿時。聲容滿心耳。落日川渚寒。愁雲繞天起。短翮不能翔。徘徊煙霧裏。

に已む無し。風雨好し東西して、一隔頓に萬里なり。追憶す棲宿の時、聲容心耳に滿つ。落日川渚寒く、愁雲天を繞つて起る。(三)短翮翔る能はず、徘徊す煙霧の裏。

(一)偶然に出遭ふなり　(二)風雨の爲に東西に別れ去る　(三)翼短き鳥なり自ら喩ふ

京口に行いて竹里に至る

高柯危且竦。鋒石橫復仄。複澗隱松聲。重崖伏雲色。冰閉寒方壯。風動鳥傾翼。斯志逢彫巖。孤遊値曠逼。兼途無憩鞍。

(一)高柯危にして且竦、鋒石橫復仄。(二)複澗は松聲を隱し、重崖は雲色を伏す。冰閉ぢて寒方に壯、風動いて鳥は翼を傾く。(三)斯の志彫巖に逢ひ、孤遊曠の逼るに値ふ。(四)兼塗に憩鞍無く、(五)半菽も食ふに遑あらず、君子令名を樹て、(六)細人命力を效す。見ずや長河の水、清濁倶に息まざるを。

(一)高技なり高うして聳ゆるをいふ　(二)重なり合へる溪谷　(三)京口に遊ばんと欲する志　(四)晝夜兼行の途上　(五)僅少なる粗食　(六)小人の心力を盡す意

風起洲渚寒。雲上日無輝。連山眇煙霧。長波迴難依。旅雁方南過。浮客未西歸。已經江海別。復與親眷違。奔景易有窮。離袂安可揮。懽觴爲悲酌。歌服成泣衣。溫念終不渝。藻志遠存追。役人多牽滯。顧路暫奮飛。昧心附遠翰。烱言藏佩韋。

吳興の黄浦亭に庾中郎と別る

風起つて洲渚寒く、雲上つて日に輝無し。連山煙霧眇に、長波迴にして依り難し、旅雁方に南に過ぎ、(二)浮客未だ西に歸らず。已に江海の別を經、復親眷と違ふ、(三)奔景は窮有り易く、離袂は安ぞ揮ふべけん。(四)懽觴もて悲酌を爲し、歌服もて泣衣を成す。溫念終に渝らず、藻志遠く存追。役人に牽滯多く、路を顧みて暫く奮ひ飛ぶ。(五)昧心遠翰に附し、烱言佩韋に藏す。

(一) 近づき難き意 (二) 他郷を旅行中なる客子 (三) 日月は過ぎ易しとなり (四) 歡の酒杯に悲愁を酌み歌舞の服に涙をそゝぐ (五) 暗昧なる心を遠く手紙に寄せ君の箴言をわが胸に藏す

輕鴻戲江潭。

傅都曹の別に贈る

輕鴻江潭に戯れ、孤雁洲沚に集る。(一)邂逅して兩つながら相親しみ、緣り念うて共

還夏有西浮。
三崖隱丹磴。
九派引滄流。
淚竹感湘別。
弄珠懷漢游。
豈伊藥餌泰。
得奪旅人憂。

旅人乏愉樂。
薄暮增思深。
日落嶺雲歸。
延頸望江陰。
亂流灇大壑。
長霧帀高林。
林際無窮極。
雲邊不可尋。
惟見獨飛鳥。
千里一揚音。
推其感物情。
寧知遊子心。
君居帝京內。
高會日揮金。
豈念慕羣客。
咨嗟戀景沉。

んや、旅人の憂を奪ひ得たり。

(一) 悲清なる音を發する琴絃　(二) 漁夫などの舟歌　(三) 楚に行くに車無く中國に還るに舟有り　(四) 堯の二女の故事なり下は漢帝の二妃が介甫に逢ひし故事

日落ちて江を望み、荀丞に贈る

旅人愉樂に乏しく、薄暮思を增すこと深し。日落ちて嶺雲歸る、頸を延いて(一)江陰を望む。亂流は大壑に灇ぎ、長霧は高林を帀る。林際に窮極無く、雲邊は尋ぬべからず。惟見る(二)獨飛の鳥の、千里一たび音を揚ぐるを。其の物に感ずるの情を推せば、則ち遊子の心を知らん。君は帝京の內に居り、(三)高會して日に金を揮ふ。(四)豈羣客を念ひ慕はんや、咨嗟して景の沉むを戀ふ。

(一) 江南方面なり　(二) 孤鳥の聲を自ら比するなり　(三) 盛んなる宴會　(四) 予はその群客を慕はざるも沈み行く日を思ふとなり

見二我顏色衰一。意中索寞與レ先異。還二君金釵玳瑁簪一。不レ忍三見レ之益二愁思一。

中庭雜樹多。偏爲レ梅咨嗟。問レ君何獨然。念其霜中能作レ花。霜中能作レ實。搖二蕩春風一媚二春日一。念爾零落逐二寒風一。徒有二霜華一無二霜質一。

梅花落

中庭に雜樹多く、偏に(一)梅の爲に咨嗟す。君に問ふ何ぞ獨り然るを、念ふ其の(二)霜中に能く花を作すを。(二)霜中能く實を作し、春風に搖蕩せられて春日に媚ぶ。(三)念ふ爾が零落して寒風を逐ひ、徒に霜華有りて霜質無きこと。

(一) 雜樹が梅を羨むなり　(二) 一本霜中に作る是なり　(三) 或る木は却つて梅の寒風に散るを謗れる義

木落江渡寒。雁還風送レ秋。臨レ流斷二商絃一。瞰レ川悲二棹謳一。適レ郢無二東轅一。

黄鶴磯に登る

木落ちて江渡寒く、雁還つて風秋を送る。流に臨んで(一)商絃を斷ち、川を瞰して(二)棹謳を悲しむ。(三)郢に適くに東轅無く、夏に還るに西浮有り、三崖は丹磴を隱し、九派は滄流を引く。(四)淚竹は湘別に感じ、弄珠は漢游を懷ふ。豈伊れ藥餌の泰なら

一株先作花。陽春妖冶二三月。從風簸蕩落西家。西家思婦見悲惋。零涙沾衣撫心歎。初我送君出戸時。何言淹留節廻換。牀帝生塵明鏡垢。纖腰痩削髮蓬亂。人生不得恒稱意。惆悵倚徙至夜半。

落つ。西家の思婦は見て悲惋(二)し、零涙衣を沾し心を撫つて歎く。初め我れ君を送つて戸を出でし時、何ぞ言はん淹留して節廻換せん(三)と。牀席は塵を生じ明鏡は垢れ、纖腰痩削して髮は蓬のごとく亂る。(四)人生は恒に意に稱ふことを得ず、惆悵として倚徙して夜半に至る。

(一) 艶美なる貌　(二) 怨しみ傷む貌　(三) 久しく滯留して時節の變遷する頃までも不在なるべしとなり　(四) 桃花の落ち易きが如く人生も亦の如くなる能はざる也

剉蘗染黃絲。黃絲歷亂不可治。我昔與君始相値。爾時自謂可君意。結帶與君言。死生好惡不相置。今朝

蘗(一)を剉りて黃絲を染む、黃絲歷亂して治むべからず。我昔君と始めて相値ふ、爾の時自ら謂ふらく君が意に可なりと。帶(二)を結んで君と言ふ、死生好惡相置てじと。今朝我が顏色の衰ふるを見て、(三)意中索寞先と異なり。君に金釵玳瑁の簪を還さん、之を見て愁思を益すに忍びず。

(一) 一種の染料木　(二) 婚姻を結ぶ意　(三) 君の心中空漠たり

戲。看ㇾ婦機中織。自ㇾ古聖賢盡貧賤。何況我輩孤且直。

なりとの意

愁思忽而至。跨ㇾ馬出二北門一。擧ㇾ頭四顧望。但見二松柏園一。荊棘鬱蹲蹲。中有二一鳥一名二杜鵑一。言是古時蜀帝魂。聲音哀苦鳴不ㇾ息。羽毛憔悴似二人髠一。飛二走樹間一啄二蟲蟻一。豈憶往日天子尊。念ㇾ此死生變化非二常理一。中心惻愴不ㇾ能ㇾ言。

愁思忽にして至る、馬に跨つて北門(一)を出づ。頭を擧げて四に顧望するに、但(二)松柏の園を見る。荊棘は鬱として蹲蹲(三)、中に一鳥有り杜鵑と名づく、言ふ是古時の蜀帝の魂と。聲音哀苦鳴いて息まず、羽毛憔悴して人の髠(四)するに似たり。樹間を飛走して蟲蟻を啄む、豈憶はんや往日の天子の尊。此を念へば死生變化は常理(五)に非ず、中心惻愴して言ふこと能はず。

(一) 洛陽城の北門　(二) 北邙山の帝陵等を指す　(三) 茂盛の貌　(四) 毛髮のなくなりたるなり　(五) 因果應報の正しき理窟あるに非ずとなり

中庭五株桃。

中庭五株の桃・一株先づ花を作す。陽春妖冶(一)二三月、風に從ひ簸蕩して西家に

瀉レ水置二平地一。各自東西南北流。人生亦有レ命。安能行歎復坐愁。酌レ酒以自寛。擧レ杯斷絶歌二路難一。心非二木石一豈無レ感。呑レ聲躑躅不二敢言一。

水を瀉いで平地に置くに、各自に東西南北に流る。(一)人生亦命有り、安ぞ能く行いて歎じ復坐して愁へん。酒を酌んで以て自ら寛うし、杯を擧げて斷絶して(二)路難を歌ふ。心木石に非ず豈感無からんや、聲を呑んで(三)躑躅して敢て言はず。

(一)人自ら天命有り　(二)人生行路の難きを指す　(三)忍び難きを忍んで躊躇するなり

對レ案不レ能レ食。拔レ劍擊レ柱長歎息。丈夫生レ世會幾時。安能蹀躞垂二羽翼一。棄置罷レ官去。還レ家自休息。朝出與レ親辭。暮還在二親側一。弄レ兒牀前

案に對して食ふこと能はず、劍を拔いて柱を擊つて長く歎息す。丈夫の世に生るゝ會ゝ幾時ぞ、安ぞ能く(一)蹀躞して羽翼を垂れん。(二)棄置して官を罷め去り、家に還つて自ら休息す。朝に出でて親と辭し、暮に還つて親の側に在り。兒を弄するに牀前に戲れ、婦を看るに機中に織れり。古より聖賢は盡く貧賤なり、(三)何に況んや我輩孤にして且直きをや。

(一)連り從つて雌伏するなり　(二)官事を棄て、仕を致す　(三)我は孤立無援にして狷直なり貧賤なることその分

刻二秦女攜レ手僊一。承二君清夜之歡娯一。列二置韓裏明燭前一。外發二龍鱗之丹綵一。內含二麝芬之紫煙一。如今君心一朝異。對レ此長歎終二百年一。

し、內には麝芬の紫煙を含む。(三)如今君が心一朝に異なり、此に對して長歎して百年を終へん。

(一) 海山の形を爲せる香爐なり (二) 秦王の女弄玉が仙となり簫史と天に昇りし故事 (三) 今日は君の心變りの爲に妾は終生の長歎を續くとなり

璇閨玉墀上二椒閣一。文窗繡戶垂二羅幕一。中有二一人一字金蘭。被服纖羅采二芳藿一。春燕參差風散レ梅。開レ幃對レ景弄二春爵一。含レ歌攬レ涕恆悲愁。人生幾時得レ爲レ樂。寧作二野中之雙鳧一。不レ願二雲間之別鶴一。

(一)璇閨玉墀椒閣に上り、文窗繡戶羅幕を垂る。中に一人有り字は金蘭、(二)被服は纖羅にして芳藿を采る。春燕參差として風は梅を散じ、幃を開き景に對して春爵を弄す。(三)歌を含み涕を攬りて恆に悲み愁ふ、人生幾時か樂を爲すを得ん。寧ろ野中の雙鳧と作るとも、雲間の別鶴たるを願はず。(四)

(一) 玉を飾れる寢室や敷石なり椒閣は椒を塗りこみし壁を有する樓閣 (二) 易經に同心の友をいふ假設するなり (三) 春時の酒杯 (四) 鶴は貴くとも別離するは悲しとなり豪富の家に棄てらるゝを恨む意

潔誠洗レ志期二暮年一。烏白馬角寧足レ言。

奉レ君金卮之美酒。瑇瑁玉匣之雕琴。七綵芙蓉之羽帳。九華葡萄之錦衾。紅顔零落歳將レ暮。寒光宛轉時欲レ沈。願君裁レ悲且減レ思。聽二我抵レ節行路吟一。不レ見柏梁銅雀上。寧聞古時淸吹音。

行路難に擬す

君に奉ぜん金卮の美酒と、瑇瑁玉匣の雕琴と、七綵芙蓉の羽帳と、九華葡萄の錦衾とを。(一)紅顔零落して歳將に暮れんとし、(二)寒光宛轉として時沈まんと欲す。願はくは君悲を截して且思を減じ、我が節を抵つ行路の吟を聽け。見ずや(三)柏梁銅雀の上、寧ぞ聞かんや古時淸吹の音を。

(一) 美酒玉琴美衣錦服を呈せんとなり　(二) 歳暮の寒き日光が弧の如くめぐり動くなり　(三) 柏梁臺の聯句魏武の樂府などを聞くに及ばざらんとの意

洛陽名工鑄。爲二金博山一。千斲復萬鏤。上

洛陽の名工鑄て(一)金博山を爲る、千斲復萬鏤、(二)上に秦女手を攜ふるの僊を刻し、君が淸夜の歡娛を承けて、幃裏明燭の前に列置せらる。外には龍鱗の丹綵を發

趙瑟挾二笙竽一。垂レ璫散レ珮盈二玉除一。停レ觴不レ御。欲二誰須一。三星參差露霑溼。絲悲管清月將レ入。寒光蕭條候蟲急。荊王流歎楚妃泣。紅顏難レ長時易レ戢。凝レ華結レ藻久延立。非二君之故一豈安集。池中赤鯉庖所レ捐。琴高乘去騰上レ天。命逢二福世一丁二溢恩一。簪レ金藉レ綺升二曲紘一。恩厚德深委如レ山。

(一)共に有名なる樂器物の名なり以下數句皆建物器物の華美なるを叙せり　(二)宴の筵席の器皆名あり中に笙竽を交ふとなり

(一)三星參差として露霑ひ溼す、絲悲しみ管清うして月將に入らんとす。寒光蕭條として候蟲急に、(二)荊王流歎して楚妃泣く。紅顏長きこと難く時は戢り易し。華を凝し藻を結んで久しく延立す、君の故に非ずんば豈(三)安集せんや。

(一)參星なりとする說と心星なりとする說とあり　(二)楚王なり　(三)心を安んじて和悅なる能はずとなり

池中の赤鯉は庖の捐つる所、(一)琴高乘り去つて騰つて天に上る。(二)命は福世に逢うて溢恩に丁り、金を簪にし綺を籍いて曲紘に升る。恩厚德深委すると山の如し、潔誠志を洗うて暮年を期す。(三)烏白と馬角と寧ぞ言ふに足らん。

(一)古代の仙人よく鯉に乘る　(二)幸福なる世に逢うて雨露の恩に浴す　(三)白頭烏と馬生角と共に燕太子丹が秦に在りし時の故事

呉刀楚製爲ニ佩褘一。繊羅霧縠垂ニ羽衣一。含レ商咀レ徴歌ニ露晞一。珠履颯沓紈袖飛。凄風夏起素雲回。車怠馬煩客忘レ歸。蘭膏明燭承ニ夜輝一。

白紵舞の歌辭に代ふ四首

奉詔の作に係る。

(一)呉刀楚製佩褘を爲り、繊羅霧縠羽衣を垂る。(二)商を含み徴を咀んで露晞くを歌ひ、(三)珠履颯沓として紈袖飛び、凄風夏に起つて素雲回る。車怠り馬煩うて客は歸るを忘れ、蘭膏明燭は夜輝を承く。

(一) 精選して被服製するを叙す　(二) 商徴共に音律の名　(三) 以下舞容を叙す

桂宮柏寢擬ニ天居一。朱爵文窗韜ニ綺疎一。象牀瑤席鎭ニ犀渠一。雕屛匼匝組ニ帷舒一。秦箏

(一)桂宮・柏寢天居に擬し、朱爵文窗綺疎を韜む。象牀瑤席犀渠を鎭し、雕屛匼匝帷舒を組にす。(二)秦箏趙瑟は笙竽を挾み、璫を垂れ珮を散じて玉除に盈つ。觴を停めて御せず誰をか須たんと欲する。

鸞歌鳳舞斷ニ君腸ー。朱城九門門九閨。願逐ニ明月ー入ニ君懷ー。入ニ君懷ー結ニ君佩ー。怨レ君恨レ君恃ニ君愛ー。築レ城思レ堅劍思レ利。同レ盛同レ衰莫ニ相棄ー。

うし衰を同じうして相棄つる莫れ。

(一)漢の劉安なり　(二)仙人の食を求む　(三)紫芝もて飾れる仙居　(四)宮城に門多く潜り戸多きをいふ　(五)佩玉なり　(六)恩愛を深うせんことを求むる意を寓す

獻歲發。吾將レ行。春山茂。春日明。園中鳥。多ニ嘉聲ー。梅始發。桃始青。泛舟艫。齊櫂驚。奏ニ采菱ー。歌ニ鹿鳴ー。微風起。波微生。絃亦發。酒亦傾。入ニ蓮池ー。折ニ桂枝ー。芳袖動。芬葉披。兩相レ思。兩不レ知。

春日行に代ふ

獻歲發す、吾將に行かんとす。春山茂り、春日明かなり。園中の鳥、嘉聲多し。(二)梅始めて發き、桃始めて青し。泛舟の艫、(二)齊櫂驚く。(三)采菱を奏し、鹿鳴を歌ふ。微風起り、波微に生ず。絃も亦發し、酒も亦傾く。蓮池に入り、桂枝を折る。芳袖動き、芬葉披く。(四)兩つながら相思ふも、兩つながら知らず。

(一)新年となる意　(二)一齊に操れる櫂突然に動く　(三)采菱曲など前出、鹿鳴は宴賓の歌詞なり　(四)双方より相思へども互に其名姓を知らずとなり

嗈嗈鳴鴈鳴始旦。齊ㇾ行命ㇾ侶入二雲漢一。中夜相失羣離亂。留連徘徊不ㇾ忍ㇾ散。憔悴儀容君不ㇾ知。辛苦風霜亦何爲。

淮南王。好二長生一。服ㇾ食鍊ㇾ氣讀二仙經一。琉璃作ㇾ盌牙作ㇾ盤。金鼎玉七合二神丹一。合二神丹一。戲二紫房一。紫房綵女弄二明璫一。

鳴雁行に代ふ

(一)嗈嗈たる鳴雁鳴いて始めて旦なり、(二)行を齊へ侶に命じて雲漢に入る。中夜に相失して羣離亂し、留連徘徊して散ずるに忍びず。(三)憔悴せる儀容も君知らず、辛苦風霜亦何の爲ぞ。

(一) 聲の和らげる貌　(二) 雁が列を整へ仲間を呼び集むるなり　(三) 顔色の衰毀せるなり

淮南王に代ふ

(一)淮南王、長生を好む。食を服し氣を鍊つて仙經を讀む。琉璃を盌と作し牙を盤と作す、金鼎玉七神丹を(二)合す。神丹を合して、(三)紫房に戲る。紫房の綵女は明璫を弄す。鸞歌鳳舞して君が腸を斷たしむ。(四)朱城の九門は門ごとに九閨なり、願はくは明月を逐うて君が懷に入らん。君が懷に入り、君が(五)佩を結ばん。君を怨み君を恨んで君が愛を恃まん。(六)城を築けば堅を思ひ劍には利を思ふ、盛を同じ

惠。不レ愧ニ田子魂一。

薊の北門より出づる行に代ふ

羽檄起ニ邊亭一。烽火入ニ咸陽一。徵レ師屯ニ廣武一。分レ兵救ニ朔方一。嚴秋筋竿勁。胡陣精且彊。天子按レ劍怒。使者遙相望。雁行緣ニ石徑一。魚貫度ニ飛梁一。簫鼓流ニ漢颸一。旌甲被ニ胡霜一。疾風衝レ塞起。沙礫自飄揚。馬毛縮如レ蝟。角弓不レ可レ張。時危見ニ臣節一。世亂識ニ忠良一。投レ軀報ニ明主一。身死爲ニ國殤一。

羽檄(一)邊亭に起り、烽火咸陽に入る。師を徵して廣武(二)に屯し、兵を分つて朔方を救ふ。嚴秋筋竿(三)勁く、胡陣精且つ彊なり。天子劍を按じて怒り、使者遙に相望む。雁行して石徑に緣り、魚貫(四)して飛梁を度る。簫鼓は漢颸(五)に流れ、旌甲は胡霜に被る。疾風塞を衝いて起れば、沙礫も自ら飄揚す。馬毛縮んで蝟の如く、角弓(六)も張るべからず。時危くして臣節を見、世亂れて忠良を識る。軀を投じて明主に報じ、身死して國殤(七)と爲る。

(一) 邊警起りて京師に急報するなり (二) 山西省の地名、朔方は甘肅に在り (三) 弓箭をいふ (四) 一人ずつ連り進むをいふ (五) 中國の涼風に響く (六) 獸角を飾れる弓 (七) 護國の鬼といふ程の意

賤子歌二一言一。僕本寒鄉士。出レ身蒙二漢恩一。始隨二張校尉一。占募到二河源一。後逐二李輕車一。追レ虜窮二塞垣一。密塗亙二萬里一。寧歲猶七奔。肌力盡二鞍甲一。心思歷二涼溫一。將軍既下世。部曲亦罕レ存。時事一朝異。孤績誰復論。少壯辭レ家去。窮老還入レ門。腰レ鎌刈二葵藿一。倚レ杖牧二雞豚一。昔如二鞲上鷹一。今似二檻中猿一。徒結二千載恨一。空負二百年怨一。棄席思二君幄一。疲馬戀二君軒一。願垂二晉主

を蒙れり。始は(一)張校尉に隨ひ、占募して河源に到りぬ。後に(二)李輕車を逐ひ、虜を追うて塞垣を窮めき。密しき塗は萬里に亙り、(三)寧き歲にも猶七奔せり。肌力は鞍甲に盡き、(四)心思に涼溫を歷る。將軍既に下世し、(五)部曲亦存する罕なり。時事は一朝に異に、(六)孤績誰か復論ぜん。少壯に家を辭して去り、窮老に還つて門を入る。鎌を腰にして葵藿を刈り、杖に倚つて雞豚を牧す。昔は(七)鞲上の鷹の如く今は檻中の猿に似たり。徒に千載の恨を結び、空しく百年の怨を負ふ。(八)棄席にも君が幄を思ひ、疲馬も君が軒を戀ふ。願はくは晉主の惠を垂れて、(九)田子が魂に愧ぢざれ。

(一) 張衛の募集に應ぜしを謂ふ　(二) 李廣に從つて長城に到る　(三) 邊患無き年にも數々命を受けて出役せり　(四) 異鄉に在りて多夏をわたる　(五) 部曲舊時の同僚にも死者多し　(六) 僕の僅かなる人知らぬ功績　(七) 鷹だすきの上にとまれる鷹の如く大いに才を伸ばし得しを指す　(八) 晉文公が國に入る時席蓐籩豆を棄てよとの命を出せし話に據る　(九) 田子方が老馬を見て之を購ひし話による

直如朱絲繩。清如玉壺冰。何慙宿昔意。猜恨坐相仍。人情賤恩舊。世議逐衰興。毫髮一爲瑕。邱山不可勝。食苗實碩鼠。點白信蒼蠅。鳧鵠遠成美。薪芻前見陵。申黜褒女進。班去趙姬升。周王日淪惑。漢帝益嗟稱。心傷猶難恃。貌恭豈易憑。古來共如此。非君獨撫膺。

直きこと朱絲(一)の繩の如く、清きこと玉壺の冰の如し。(二)何ぞ宿昔の意に慙ぢん、猜恨坐ら相仍る。人情は恩舊を賤しみ、世議は衰興を逐ふ。(三)毫髮一たび瑕を爲せば、邱山も勝ふべからず。苗を食ふは實に碩鼠、(四)白を點すは信に蒼蠅。鳧鵠遠く美を成し、薪芻前に陵さる。申黜けられて褒女進み、班去りて趙姬升る。周王は日に淪惑し、漢帝は益ゝ嗟稱す。(五)心傷猶恃み難く、(六)貌恭は豈憑み易からんや。(七)古來共に此の如し、君が獨り膺を撫するのみに非ず。

(一) 琴瑟の絃を喩へいふ (二) 妾は昔日の意に異らずとなり (三) 衰頽の人に微瑕あれば山の如き瑕瑕なりと評判する意 (四) 大なる鼠なり中傷者に比す (五) 周幽王の后なり褒女は褒姒 (六) 漢武帝の班婕妤と趙飛燕と (七) 殊勝げなる容貌

主人且勿諠。

東武吟に代ふ

主人且く諠する勿れ、賤子一言を歌はん。僕は本寒鄉の士なり、身を出して漢恩

蓼蟲避二葵菫一。習レ苦不レ言レ非。小人自齷齪。安知二曠士懷一。雞鳴洛城裏。禁門平旦開。冠蓋縱橫至。車馬四方來。素帶曳二長飆一。華纓結二遠埃一。日中安能止。鐘鳴猶未レ歸。夷世不レ可レ逢。賢君信愛レ才。明慮自レ天斷。不レ受二外嫌猜一。一言分二珪爵一。片善辭二草萊一。豈伊白璧賜。將レ起二黃金臺一。今君有二何疾一。臨レ路獨遲迴。

蓼蟲は(一)葵菫を避け、苦を習うて非を言はず。小人は自ら齷齪たり、安ぞ(二)曠士の懷を知らんや。雞は鳴く洛城の裏、(三)禁門平旦に開く。冠蓋縱橫に至り、車馬四方より來る。(四)素帶を長飆に曳き、華纓を遠埃に結ぶ。日中にして安んぞ能く止まんや、鐘鳴るも猶未だ歸らず。(五)夷世は逢ふべからず、賢君は信に才を愛す。明慮天より斷じ、外の嫌猜を受けず。(六)一言もて珪爵を分ち、片善にして草萊を辭す。(七)豈伊れ白璧の賜のみならんや、將に黃金臺を起さんとす。(八)今は君何の疾か有る、路に臨んで獨り遲迴する。

(一) 甘美の菜なり (二) 達人といふに同じ (三) 宮城の門が夜明方に開くなり (四) 白き大夫の帶や花やかに美しき冠の紐 (五) 太平の世の中以下群小の讒言を叙す (六) 一言を進めて封侯せられ小藝を行うて登用せらる (七) 燕の昭王が天下の士を延きし故事 (八) 曠士といへる冒頭の語に應ず

白頭吟に代ふ

傷禽惡ニ弦驚一。
倦客惡ニ離聲一。
離聲斷ニ客情一。
賓御皆涕零。
涕零心斷絕。
將レ去復還訣。
一息不ニ相知一。
何況異鄉別。
遙遙征駕遠。
杳杳白日晚。
居人掩レ閨臥。
行子夜中飯。
野風吹ニ草木一。
行子心腸斷。食レ梅常苦レ酸。衣レ葛常苦レ寒。絲竹徒滿レ座。憂人不レ解レ顏。長歌欲ニ自慰一。彌起ニ長恨端一。

東門行に代ふ

(一)傷禽は弦の驚くを惡み、倦客は離の聲を惡む。離の聲は客情を斷ち、(二)賓御皆涕零つ。涕零ちて心斷絕し、將に去らんとして復還つて訣る。(三)一息も相知らず、何ぞ況んや異鄉の別をや。遙遙として征駕遠く、杳杳として白日晚る。居人は閨を掩うて臥し、(四)行子は夜中に飯す。野風は草木を吹き、行子は心腸斷ゆ。梅を食うて常に酸に苦しみ、葛を衣て常に寒に苦しむ。絲竹徒に座に滿ち、(五)憂人顏を解かず。長歌して自ら慰めんと欲す、彌〻長恨の端を起す。

(一) 風聲鶴淚にも驚く意なり　(二) 送らるゝ人と御者と　(三) 倏忽の意　(四) 旅客をいふ　(五) 旅愁の人は旅歌を聞けども悅ばずとなり

放歌行に代ふ

輕霞澄ニ暮陰一。微風淸ニ幽幌一。餘日照ニ靑林一。收光漸窗歇。窮園自荒深。綠池翻ニ素景一。秋懷響ニ寒音一。伊人儻同レ愛。絃酒共棲尋。

漸く窗に歇き、窮園自ら荒深なり。綠池は素景を翻し、秋懷は寒音を響かす。伊の人儻し愛を同じうせば、絃酒もて共に棲尋(三)せん。

(一) 奥深く張りまはせる幌幕　(二) 夕やけの餘光も収まり盡す　(三) 棲息して遊間を同じうせんとなり

鮑照

明遠が樂府は、五丁(一)が山を鑿りて人を開くが如く、世の未だ有らざる所たり。後に太白は往々之に效へり。五言古も亦顏謝(二)の間に在り。(三)音を抗げて懷を吐き、毎に亮節を成す。其の高き處は、遠く機雲(四)に軼ぎ、上つかた操植を追ふ。

五言古は、彫琢は謝公と相似るも、自然の處は及ばず。

(一) 蜀に入るべき山道を開きし力士　(二) 顏延之謝靈運なり　(三) 慷慨の氣を盛んにす　(四) 陸機兄弟なり下に曹操曹植

日落泛二澄瀛一。星羅游二輕橈一。憩レ榭面二曲汜一。臨レ流對二廻潮一。輟レ策共駢レ筵。並坐相招要。哀鴻鳴二沙渚一。悲猿響二山椒一。亭亭映レ江月。飂飂出レ谷飆。斐斐氣羃レ岫。泫泫露盈レ條。近矚袪二幽蘊一。遠視蕩二諠囂一。晤言不レ知レ罷。從レ夕至二淸朝一。

日落れて澄瀛(一)に泛ぶに、星羅つて輕橈を游ばしむ。榭(二)に憩うて曲汜に面し、流に臨んで廻潮に對ふ。策を輟めて共に筵を駢べ、並び坐して相招要す(三)。哀鴻は沙渚に鳴き、悲猿は山椒(四)に響く。亭亭たり江に映るの月、飂飂たり谷を出づるの飆。斐斐(五)として氣は岫を羃ひ、泫泫として露は條に盈つ。近く矚て幽蘊(六)を袪り、遠く視て喧囂を蕩ぐ。晤言して罷を知らず、夕より淸朝に至る。

(一)淸く澄みわたる水上　(二)水邊の家なり　(三)相與に徜徉す　(四)山陵の高うして四方墮つるを椒郎といふ　(五)輕き貌泫々は垂るゝ貌　(六)憂鬱の思の積れるを拂ひ去る

謝莊

北宅の秘園

夕天霽二晩氣一。

夕天晩氣霽れ、輕霞暮陰に澄む。微風は幽幌(一)を淸め、餘日は靑林を照す。收光(二)

寒商動二清閨一。孤燈曖二幽幔一。耿介繁慮積。展轉長宵半。夷險難二預謀一。倚伏昧二前算一。雖レ好二相如達一。不レ同二長卿慢一。頗悅二鄭生偃一。無レ取二白衣宦一。未レ知二古人心一。且從二性所一レ翫。賓至可レ命レ觴。朋來當レ染レ翰。高臺驟登踐。清淺時歷亂。頽魄不二再圓一。傾羲無二兩旦一。金石終銷毀。丹青暫雕煥。各勉二玄髮歡一。無レ貽二白首歎一。因レ歌遂成レ賦。聊用布二親串一。

……白衣の宦を取ること無し。未だ古人の心を知らず、且く性の翫ふ所に從ふ。賓至らば觴を命ずべく、朋來らば當に翰を染むべし。高臺驟〻登り踐み、(八)清淺時に歷亂す。(九)頽魄は再び圓ならず、傾羲は兩び旦なると無し。金石も終に銷毀し、丹青も暫く彫煥す。(一〇)各〻玄髮の歡を勉めて、(一一)白首の歎を貽すこと無らん。歌に因りて遂に賦を成し、聊か用て親串に布く。(一二)

(一) 志意を遂げ得ざる意　(二) 凌ぎ勝つなり　(三) 風聲を雜へし蟬聲　(四) 孤獨にして思慮する所多しとなり　(五) 安危は豫算し難く禍福も亦前知し難し　(六) 司馬相如は達にして慢なりき長卿は其の字　(七) 鄭均は官を辭して歸臥せしが賜祿依然たりしかば世人之を白衣尚書と稱しぬ　(八) 淺く清らかなる流などを徒涉するなり　(九) 月も日も復引き返すこと能はず　(一〇) 書圖の光彩も當時の間のみ　(一一) 黑髮の間に歡遊して老後に後悔する勿れ　(一二) 親近の人々をいふ

湖に泛んで歸り、樓中に出でて月を望む。

積素成原隰。
曲汜薄停旅。
通川絶行舟。
臨津不得濟。
佇楫阻風波。
蕭條洲渚際。
氣色少諧和。
西瞻興遊歎。
東睇起悽歎。
積憤成疢痗。
無萱將如何。

平生無志意。
少小嬰憂患。
如何乘苦心。
矧復値秋晏。
皎皎天月明。
奕奕河宿爛。
蕭瑟含風蟬。
寥唳度雲雁。

(一)重疊せる山々　(二)高低せる地面といふ程の義　(三)積れる白雪

津に臨むに濟るを得ず、楫を佇めて風波に阻てらる。蕭條たり洲渚の際、氣色に(二)諧和すること少し。西に瞻て遊歎を興し、東に睇て悽歎を起す。(三)積憤は疢痗を成す、(四)萱無くば將に如何かせん。

(一)わたし場　(二)風氣日色共に清和ならざるなり　(三)不愉快積み重なれば病氣をなす　(四)憂を忘るゝ草

愁懷

平生(一)志意を無し、少小より憂患に嬰る。如何ぞ苦心に(二)乘ぜん、矧んや復秋の晏きに値ふをや。皎皎として天月明に、奕奕として河宿爛く。蕭瑟たり(三)風を含むの蟬、寥唳たり雲を度るの雁。寒商は清閨に動き、孤燈は幽幔に曖し。(四)耿介にして繁慮積み、展轉して長宵半なり。(五)夷險は預じめ謀り難く、倚伏は前算に昧し。(六)相如が達を好すと雖も、長卿が慢には同じうせず。頗る(七)鄭生が偃を悦ぶも、

相送越二坰林一。
飲二餞野亭館一。
分二袂澄湖陰一。
悽二悽留子言一。
眷二眷浮客心一。
廻塘隱二艫栧一。
遠望絕二形音一。
靡靡卽二長路一。
戚戚抱二遙悲一。
悲遙但自弭。
路長當レ語レ誰。
行行道轉遠。
去去情彌遲。
昨發二浦陽汭一。
今宿二浙江湄一。
屯雲蔽二曾嶺一。
驚風湧二飛流一。
零雨潤二墳澤一。
落雪灑二林邱一。
浮氣晦二崖巘一。

つ。留子の言に悽悽として、浮客の心に眷眷たり。廻塘に艫栧を隱し、遠望して形音を絕つ。

㊀靈運が別離を惜むをいふ　㊁留る者の言に感ず　㊂船の頭部へさきと檝と

靡靡として長路に卽き、戚戚として遙悲を抱く。悲遙にして但自ら弭む、路長うして當に誰にか語るべき。行き行いて道轉た遠く、去り去つて情彌〻遲し。昨は浦陽の汭を發し、今は浙江の湄に宿す。

㊀悲愁を懷いて心進まざる貌　㊁江水中流の地名、汭は水のほとりなり

屯雲は曾嶺を蔽ひ、驚風は飛流を涌す。零つる雨は墳澤を潤し、落雪は林邱に灑ぐ。浮氣崖巘に晦く、積素原疇を成す。曲汜に薄に旅を停め、通川に行舟を絕つ。

簪レ玉出二北房一。鳴レ金步二南階一。櫩高砧響發。楹長杵聲哀。微芳起二兩袖一。輕汗染二雙題一。紈素既已成。君子行未レ歸。裁用二笥中刀一。縫爲二萬里衣一。盈レ篋自二予手一。幽緘俟二君開一。腰帶準二疇昔一。不レ知二今是非一。

手よりす、幽緘は君が開くを俟つ。(六)腰帶は疇昔に準せり、今の是非を知らず。

(一)玉衡牽牛の二星の循行をいふ　(二)はたおり虫なり寒螿は蟬の一種　(三)装を整へて相携へ行く　(四)少しの汗は額ににじむ　(五)衣服を方形の箱に藏めて封じ送る　(六)帶は昔日の寸法とせり今日君の瘦肥を知らずとなり

西陵に風に遇ひ、康樂に獻ず

我行指二孟春一。春仲尙未レ發。趣レ途遠有レ期。念レ離情無レ歇。成レ裝候二良辰一。漾レ舟陶二嘉月一。瞻レ塗意少レ悰。還顧情多レ闕。哲兄感二仳別一。

(一)我が行孟春を指すに、春仲なるに尙未だ發せず。途に趣くこと遠く期有り、離を思うて情は歇む無し。裝を成して良辰を候ち、舟を漾べて嘉月を陶す。(二)塗を瞻て意に悰少し、還り顧うて情に闕くること多し。

(一)初春に行くべきものを仲春まで遷延せるをいふ　(二)喜樂する意

(三)哲兄は仳別を感じ、相送つて坰林を越ゆ。野亭館に飲餞し、袂を澄湖の陰に分

扶光迫ニ西汜一。歡餘宴有レ窮。逝矣將レ歸客。養レ素克有レ終。臨レ流怨レ莫レ從。歡心歎ニ飛蓬一。

謝惠連

謝宣遠が詩は、一味の鏤刻ありて、自然の致を失す。張子房を詠ずる作は、生硬の尤なる者爲り。當時推重せりと雖も、之を刪る。

衣を擣つ

衡紀無レ淹レ度。晷運倏如レ催。白露滋ニ園菊一。秋風落ニ庭槐一。肅肅莎雞羽。烈烈寒螿啼。夕陰結ニ空幕一。宵月皓ニ中閨一。美人戒ニ裳服一。端飾相招攜。

衡紀は度を淹むる無く、晷運は倏ち催すが如し。白露は園菊を滋ほし、秋風は(一)庭槐に落つ。肅肅たり莎雞の羽、烈烈たり寒螿の啼。夕陰は空幕に結ぼり、宵月は中閨に皓し。美人(二)裳服を戒しめ、(三)端飾して相招攜す。玉を簪にして北房を出で、金を鳴して南階に歩す。櫩高うして砧響發し、楹長うして杵聲哀し。微芳は兩袖より起り、(四)輕汗は雙題を染む。紈素は既已に成るに、君子は行いて未だ歸らず。裁つに笥中の刀を用てし、縫うて萬里の衣と爲す。(五)篋に盈すは予が

殷憂暫爲レ輕。率率酬二嘉藻一。長揖愧二吾生一。

九日、宋公が戯馬臺集に從つて、孔令を送りし詩

宋の高祖、戯馬臺に遊び、孔靖を送る。僚佐に命じて詩を賦せしむるに、瞻が作は一時に冠たりき。

風至授二寒服一。
霜降休二百工一。
繁林收二陽彩一。
密苑解二華叢一。
巣レ幕無二留燕一。
遵レ渚有二來鴻一。
輕霞冠二秋日一。
迅商薄二淸穹一。
聖心眷二嘉節一。
揚レ鑾戻二行宮一。
四筵霑二芳醴一。
中堂起二絲桐一。

(一)風至つて寒服を授け、霜降つて百工を休す。繁林に陽彩を收め、密苑に華叢を解く、(二)幕に巣うて留る燕無く、渚に遵つて來る鴻有り。輕霞秋日を冠ひ、(三)迅商淸穹に薄る。(四)聖心嘉節を眷りみ、鑾を揚げて行宮に戻る。四筵は芳醴に霑ひ、中堂に(五)絲桐を起す。(六)扶光は西汜に迫り、歡餘つて宴は窮る有り。逝け將に歸らんとするの客、(七)素を養うて克く終有り。流に臨んで從ふ莫きを怨み、歡心に飛蓬を歎く。

(一)秋に至りて涼風の吹き來る時 (二)燕去りて雁來るを叙す巣幕は左傳に出でし語 (三)迅速なる秋風 (四)宋武帝が戯馬臺に幸せしを叙す (五)琴瑟などをいふ (六)日光西山に傾く意 (七)眞を全うし性情を長養す

夕霽風氣涼。
閒房有ニ餘淸一。
開レ軒滅ニ華燭一。
月露皓已盈。
獨夜無ニ物役一。
寢者亦云寧。
忽獲ニ愁霖唱一。
懷レ勞奏レ所レ誠。
歎ニ彼行旅艱一。
深ニ茲眷言情一。
伊余雖レ寡レ慰。

巻十一

宋詩

謝瞻

靈運に答ふ

夕霽れて風氣涼しく、閒房に餘淸有り。(一) 軒を開いて華燭を滅するに、月露皓として已に盈てり。(二) 獨夜に物の役無く、(三) 寢る者亦云に寧し。忽ち愁霖の唱を獲て、(四) 勞を懷うて誠とする所を奏す。(五) 彼の行旅の艱を歎き、茲の眷言の情を深うす。伊れ余慰寡しと雖も、殷憂暫く輕しと爲す。(六) 牽率して嘉藻に酬い、長揖して吾生に愧づ。

(一) 室外に涼しき意 (二) 月光の映れる露珠 (三) 外物の來り侵すなき意 (四) 靈運より贈り來りし霖雨を傷む詩 (五) 贈詩中の句による (六) 來詩に牽かれてこの贈詩を酬答す

莫レ辨二百代後一。安知二千載前一。且中二獨往意一。乘レ月弄二潺湲一。恆充二俄頃用一。豈爲二古今一然。

殷憂不レ能レ寐。
苦二此夜難一レ頽。
明月照二積雪一。
朔風勁且哀。
運往無二淹物一。
年逝覺已催。

歲暮

（一）殷憂して寐ぬる能はず、此の夜の頽し難きに苦しむ。明月は積雪を照し、朔風は勁うして且つ哀し。（二）運往いて淹物無く、年逝いて覺已に催す。（闕文）

㊀ 憂愁の甚だしきなり ㊁ 日月の運行速にして年内餘日無きを歎ずるなり。以下缺文

九派理空存。靈物恡珍怪。異人祕精魂。金膏滅明光。水碧綴流溫。徒作千里曲。絃絶念彌敦。

南州實炎德。
桂樹陵寒山。
銅陵映碧澗。
石磴瀉紅泉。
既枉隱淪客。
亦棲肥遯賢。
險逕無測度。
天路非術阡。
遂登羣峰首。
邈若升雲煙。
羽人絶髣髴。
丹邱徒空筌。
圖牒復磨滅。
碑版誰聞傳。

華子岡に入る、是麻源の第三谷なり

南州は實に炎德あり、(一)桂樹は寒山を陵ぐ。(二)銅陵は碧澗に映じ、石磴は紅泉を瀉ぐ。既に隱淪の客を枉げ、(三)亦肥遯の賢を棲ましむ。(四)險徑は測度する無く、天路は術阡に非ず。遂に羣峯の首に登るに、邈として雲煙に升ぼるが若し。(五)羽人絶えて髣髴、丹邱徒に空筌。(六)圖牒復磨滅し、碑版誰か聞き傳へん。百代の後を辨ずる莫くば、安ぞ千載の前を知らんや。且く獨往の意を申べて、(七)月に乘じて潺湲を弄ぶ。恆に俄頃の用に充つ、豈古今の爲に然らんや。

(一) 南方に溫暖の德あり桂花冬開く (二) 銅山なり (三) 駕を枉げて來らしむ (四) 道險にして測量し難く昇天の路は地上の道と違ふとなり (五) 仙人無くたゞ彷彿の姿を想ふのみとなり下句も亦同意 (六) 圖書譜碑皆讀むべからずとなり (七) 自然に任して世間を顧みざる義

殊響俱清越。妙物莫爲賞。芳醑誰與伐。美人竟不來。陽阿徒晞髮。

徒に山の南面に髪を乾すのみ

彭蠡湖口に入る

客遊倦水宿。風潮難具論。洲島驟迴合。圻岸屢崩奔。乘月聽哀猿。浥露馥芳蓀。春晚綠野秀。巖高白雲屯。千念集日夜。萬感盈朝昏。攀崖照石鏡。牽葉入松門。三江事多往。

客遊して水宿(一)に倦む、風潮具に論じ難し。洲島驟く廻合し、折岸(二)屢崩奔す。月に乘じて哀猿を聽き、露に浥うて芳蓀(三)馥し。春晩れて綠野秀で、巖高うして白雲屯る。千念日夜に集り、萬感朝昏に盈てり。崖を攀ぢて石鏡(四)を照し、葉を牽いて松門(五)に入る。三江事多く往き、九派(六)理空しく存せり。靈物は珍怪を吝み、異人は精魂を祕す。金膏(七)もて明光を滅し、水碧もて流溫を綴る。徒に千里の曲を作すに、絃絶えて念彌敦し。

(一) 舟中に宿す (二) 折れ曲りて崩れかゝれる岸邊 (三) 香草の名 (四) 山名なり山頂に一圓石あり鏡の如し (五) 湖岸數十里に青松の林立せる處をいふ (六) 揚子江下流の九分せるところ即ち九江なり (七) 水碧と共に一種の寶玉なり

負心二十載。於今廢將迎。理棹遄歸期。遵渚騖修坰。遡溪終水涉。登嶺始山行。野曠沙岸靜。天高秋月明。憩石挹飛泉。攀林搴落英。戰勝臞者肥。鑒止流歸停。即是羲唐化。獲我擊壤情。

仕官せり　(三) 利を貪り名を競ふの徒　(四) 僅かに少しの主義　(五) 論語に周任の力を陳ぶる語あるに據る庸は用なり　(六) 司馬相如に消渇病ありき　(七) 尚長字は子平子の爲に嫁娶するや我を死者と思へと宣言せり　(八) 名は丹官祿二千石に過ぎず輙ち免れ去りき　(九) 安帝の年號この頃まで出仕せり　(一〇) 退官する意景平は少帝の年號　(一一) 送迎に同じ　(一二) 長き林野　(一三) 韓非子に子夏が先王の義と富貴との戰に勝つて肥えたる話見ゆ　(一四) 莊子に「流水に鑑みる莫くして止水に鑑みる」の語見ゆ　(一五) 伏羲氏唐堯氏の政化なり擊壤歌は前出

朝搴苑中蘭。畏彼霜下歇。暝還雲際宿。弄此石上月。鳥鳴識夜棲。木落知風發。異音同至聽。

夜石門に宿る

朝に苑中の蘭を搴り、彼の霜下に歇くるを畏る。暝に雲際の宿に還り、此の石上の月を弄す。鳥鳴いて夜棲むを識り、(一)木落ちて風發るを知る。異音同じく聽に至り、(二)殊響俱に清越なり。(三)妙物も爲に賞する莫し、(四)芳醑誰か與に伐らん。(五)美人竟に來らず、陽阿に徒に髮を晞かす。

(一) 棲宿の鳥あるを知る　(二) 特別なる音響の清く澄み冴ゆる意　(三) 珍味佳肴　(四) 美酒なり　(五) 友人來らず

彭薛裁知レ恥。
貢公未レ遺レ榮。
或可レ優二貪競一。
豈足レ稱二達生一。
伊余秉二微尚一。
拙訥謝二浮名一。
廬園當二棲巖一。
卑位代二躬耕一。
顧レ己雖二自許一。
心跡猶未レ幷。
無三庸方二周任一。
有三疾象二長卿一。
畢レ娶類二尙子一。
薄遊似二邴生一。
恭承二古人意一。
促レ裝返二柴荊一。
牽レ絲及二元興一。
解レ龜在二景平一。

永嘉の守爲ること二年、疾と稱して職を去り、始寧に還りぬ。

(一)彭薛は裁に恥を知り、(二)貢公は未だ榮を遺れず。或は(三)貪競に勝るべきも、豈達生と稱するに足らんや。伊れ余(四)微尙を秉り、拙訥浮名を謝す。廬園は棲巖に當り、卑位もて躬耕に代ふ。己を顧みて自ら許すと雖も、心跡猶未だ幷せず。(五)庸は周任に方ぶべき無く、(六)疾の長卿に象たる有り。娶を畢るは(七)尙子に類し、薄遊するは(八)邴生に似たり。恭んで古人の意を承け、裝を促して柴荊に返る。絲を牽いて(九)元興に及び、(一〇)龜を解いて景平に在り。心に負くこと二十載、今に於て(一一)將迎を廢す。棹を理めて歸期を遄にし、渚に遵つて(一二)修坰に騖す。溪を遡つて終に水渉し、嶺に登りて始めて山行す。野曠くして沙岸靜に、天高うして秋月明かなり。石に憩うて飛泉を掬み、林を攀ぢて落英を搴る。(一三)戰勝つて臞者も肥え、(一四)止に鑒みて流は停に歸す。是の(一五)羲唐の化に卽いて、我が擊壤の情を獲たり。

(一) 漢の彭宣と薛廣德と共に王莽に慊らずして骸骨を乞ひし人なり　(二) 貢禹も亦漢人なり一時官を去りしが後又

想見山阿人。薜蘿若レ在レ眼。握レ蘭勤徒結。折レ麻心莫レ展。情用レ賞爲レ美。事昧竟誰辨。觀レ此遺二物慮一。一悟得レ所レ遺。

白岸亭を過る詩

拂レ衣遵二沙垣一。緩步入二蓬屋一。近澗涓二密石一。遠山映二疎木一。空翠難二強名一。漁釣易レ爲レ曲。援レ蘿聆二青崖一。春心自相屬。交交止二栩黃一。呦呦食二苹鹿一。傷彼人百哀。嘉爾承二筐樂一。榮悴迭去來。窮通成二休戚一。未レ若常疎散。萬事恆抱レ朴。

衣を拂うて沙垣に遵ひ、緩步して蓬屋に入る。(一)近澗は密石に涓り、遠山は疎木に映ず。(二)空翠强ひて名け難く、漁釣曲を爲し易し。蘿を援つて青崖に聆くに、春心自ら相屬せり。(三)交交として栩黃を止め、(四)呦呦として苹鹿に食ます。傷む彼の人の百哀、嘉す爾が筐樂を承くるを。榮悴迭に去來し、窮通して休戚を成す。未だ若かず常に疎散にして、萬事に恆に朴を抱かんには。(五)

(一) 澗水の石に滴り落つるを近く見る (二) 一種の山氣なり (三) 詩經小雅黃鳥の篇黃鳥の栩に止る意 (四) 詩經小雅鹿鳴篇參照下句はその詩中に在り (五) 朴質にして天眞を保持するなり

初めて郡を去る

天雞弄和風。撫化心無厭。覽物眷彌重。不惜去人遠。但恨莫與同。孤遊非情歎。賞廢理誰通。

猿鳴誠知曙。谷幽光未顯。
巖下雲方合。花上露猶泫。
逶迤傍隈隩。迢遞陟陘峴。
過澗既厲急。登棧亦陵緬。
川渚屢經復。乘流翫迴轉。
蘋萍泛沈深。菰蒲冒清淺。
企石挹飛泉。攀林摘葉卷。

斤竹澗より嶺を越えて溪行す

猿鳴いて誠に曙を知る、谷幽にして光未だ顯はれず。巖下雲方に合し、花上露猶泫る。逶迤として隈隩(一)に傍ひ、迢遞として陘峴(二)を陟る。澗を過ぎて既に急に厲り、棧(三)に登つて亦緬を陵る。川渚屢〻經復し、流に乘りて(四)迴轉を翫ぶ。蘋萍は沈深に泛び、菰蒲は淸淺を冒へり。石を企つて飛泉を挹み、林を攀ぢて葉卷(五)を摘む。想見す山阿の人(六)、薜蘿眼に在るが若し。蘭を握りて勤に徒に(七)結び、麻を折つて心に展ぶる莫し。情は賞を用て美と爲す、事昧し竟に誰か辨ぜん。此を觀て物慮を遺れ、一悟して遣る所(八)を得たり。

(一) 山の片隅をいふ (二) 遠山の中斷するを陘とし山嶺の小高きを峴とす (三) 懸け渡したる路 (四) 舟に乘りて川を下るとき流の回轉するなり (五) 嫩葉をいふ (六) 山中隱栖の仙人 (七) 下句と共に贈るべき友無き義 (八) 人情は賞美を以て佳とすれども道理上よりは果して然りや否やを定め難しとなり

感往慮有レ復。理來情無レ存。庶持二乗レ日車一。得三以慰二營魂一。匪下爲二衆人一說上。冀與二智者一論。

南山より北山に往き湖中を經て瞻眺す

朝旦發二陽崖一。景落憩二陰峯一。舍レ舟眺二迴渚一。停レ策倚二茂松一。側徑既窈窕。環洲亦玲瓏。俯視二喬木杪一。仰聆二大壑漴一。石横水分レ流。林密蹊絕レ蹤。解作竟何感。升長皆丰容。初篁苞二綠籜一。新蒲含二紫茸一。海鷗戲二春岸一。

朝旦に陽崖(一)を發し、景落ちて陰峯に憩ふ。舟を舍てて迴渚を眺め、策を停めて茂松に倚る。側徑(二)も既に窈窕、環洲も亦玲瓏。俯して喬木の杪を視、仰いで大壑(三)の漴たるを聆く。石横はりて水流を分ち、林密にして蹊蹤を絕つ。(四)解作竟に何をか感ぜしむる、升長(五)皆丰容たり。初篁は綠籜に苞まれ、新蒲は紫茸を含めり。海鷗は春岸に戲れ、天雞は和風を弄す。化を撫して心に厭く無く、物を覽て眷彌〻重し。惜まず去人の遠きを、但恨む與(六)に同じうする莫きを。孤遊は情の歎に非ず、賞廢れば(七)理誰か通ぜん。

(一) 日向の山崖　(二) 卑隘なる小道　(三) 大谷の波の聲　(四) 易に天地解けて雷雨作り雷雨作つて百果草木皆甲拆すと見ゆ　(五) 生長發育して皆悅び繁茂せりとなり　(六) 萬物萬化の狀を觀て飽くところ無し　(七) 人の去るを惜まざれど共遊の人無きは殘念なりとの意

躋レ險築二幽居一。
披レ雲臥二石門一。
苔滑誰能步。
葛弱豈可レ捫。
嫋嫋秋風過。
萋萋春草繁。
美人遊不レ還。
佳期何由敦。
芳塵凝二瑤席一。
清醑滿二金尊一。
洞庭空波瀾。
桂枝徒攀翻。
結レ念屬二霄漢一。
孤レ景莫二與諼一。
俯濯二石下潭一。
仰看二條上猿一。
蚤聞二夕飈急一。
晚見二朝日暾一。
崖傾光難レ留。
林深響易レ奔。

險に躋つて幽居を築き、雲を披いて石門(一)に臥す。苔滑にして誰か能く步せん。葛弱し豈捫るべけんや。嫋嫋(二)として秋風過ぎ、萋萋として春草繁し、美人遊んで還らず。佳期何に由りて敦めん。芳塵は瑤席に凝り、清醑(三)は金尊に滿てり。洞(四)庭空しく波瀾あり、桂枝徒に攀翻たり。(五)念を結んで霄漢に屬し、景に孤いて與に諼るゝ莫し。俯しては石下の潭に濯ぎ、仰いでは條上の猿を看る。蚤に夕飈の急なるを聞き、晚に朝日の暾を見る。崖傾いて光留り難く、林深うして響奔り易し。(六)感往いて慮復ること有り、理來るも情は存する無し。庶くは日に乘るの車を持して、以て(七)營魂を慰するを得ん。衆人の爲に說くに匪ず、冀くは智者と論ぜん。

(一) 石門山なり前に屢出せり (二) 風の樹木を搖かす貌 (三) 淸らかなる酒 (四) 湖名この邊皆楚辭に據りて叙せり (五) 情念は天漢の如く單身は遂に憂を忘れ難しとなり (六) 悲哀の感は去るも復新なる憂愁回り來るなり (七) 精神魂魄といふ程の意

晨策尋二絕壁一。夕息在二山棲一。疏レ峯抗二高館一。對レ嶺臨二迴溪一。長林羅二戸庭一。積石擁二階基一。連巖覺二路塞一。密竹使二徑迷一。來人忘二新術一。去子惑二故蹊一。活活夕流駛。噭噭夜猿啼。沈冥豈別レ理。守レ道自不レ攜。心契九秋幹。目翫三春荑。居レ常以得レ終。處レ順故安排。惜無二同懷客一。共登二青雲梯一。

晨に策つて絶壁を尋ね、夕に息うて山棲に在り。峯を疏りて高館を抗げ、嶺に對して迴溪に臨む。長林は戸庭に羅り、(一)積石は階基を擁す。連巖路の塞るを覺え、密竹徑をして迷はしむ。來る人は新術(二)を忘れ、去る子は故蹊に惑ふ。(三)活活(四)として夕の流駛く、噭噭として夜の猿啼く。(五)沈冥豈理を別にせんや。道を守つて自ら攜れず。心は契る九秋(六)の幹、目は翫ぶ三春の荑。(七)常に居て以て終を得、順に處て故に安排す。惜むらくは同懷の客の、共に靑雲の梯に登るもの無きこと。

(一) 山中の住居 (二) 石を積みあげて石垣とするなり (三) 新らしき道路なり故蹊は古き路 (四) 水の急流する響 (五) 沈ミ玄默にして測り難き義 (六) 秋九十日の稱、幹は黄葉葉落ち殺せる樹幹なり (七) 貧は士の常なり故にいふ

石門に新に住む所を營む、四面は高山・迴溪・石瀨・茂林・修竹なり

迢遞瞰二高峯一。寡慾不レ期レ勞。即レ事罕二八功一。唯開二蔣生徑一。永懷二求羊蹤一。賞心不レ可レ忘。妙善冀能同。

石壁精舍より湖中に還る作（一）

昏旦變二氣候一。山水含二清暉一。清暉能娯レ人。遊子澹忘レ歸。出レ谷日尚蚤。入レ舟陽已微。林壑斂二暝色一。雲霞收二夕霏一。芰荷迭映蔚。蒲稗相因依。披拂趨二南徑一。愉悅偃二東扉一。慮澹物自輕。意愜理無レ違。寄レ言攝生客。試用二此道一推。

昏旦に氣候を變じ、山水は清暉（二）を含めり。清暉能く人を娯しましめ、遊子澹として歸るを忘る。谷を出づるに日尚蚤く、舟に入るに陽已に微なり。林壑は暝色（三）を斂り、雲霞夕霏收る。芰荷迭に映蔚し、蒲稗相因り依る。披拂して（四）南徑に趨き、愉悅して東扉に偃す。慮澹うして（五）物自ら輕く、意愜うて理違ふ無し。言を寄す攝生の客（六）、試に此の道を用て推せ。

（一）石壁の書齋　（二）淸鮮なる色をいふ　（三）晩暮の景既に夜景に變ずる也　（四）雜草を排し開く　（五）虛心適意の道を叙す　（六）生を養ひ壽を希ふ人々

石門の最高頂に登る

既笑二沮溺苦一。又哂二子雲閣一。執レ戟亦以疲。耕稼豈云レ樂。萬事難二並歡一。達生幸可レ託。

田南に園を樹て流を激ぎ援を植う(一)

命題箇古なり。

樵隱俱在レ山。
由來事不レ同。
不同非二一事一。
養レ痾亦園中。
中園屛二紛雜一。
清曠招二遠風一。
卜レ室倚二北阜一。
啓レ扉面二南江一。
激レ澗代レ汲レ井。
插レ槿當レ列レ墉。
羣木既羅レ戸。
衆山亦當レ窗。
靡迤趨二下田一。

(二)樵隱俱に山に在り、由來事同じからず。(三)不同は一事に非ず、痾を養ふも亦園中なり。中園に紛雜を屛け、(四)清曠遠風を招ぐ。室を卜して北阜に倚り、扉を啓いて南江に面す。澗を激いで井を汲むに代へ、槿を插して墉に列ぶるに當つ。羣木既に戸に羅り、衆山亦窗に當る。(五)靡迤として下田に趨き、迢遞として高峯を瞰る。寡慾にして勞を期せず。事に卽いて(六)人功罕なり。(七)唯蔣生が徑を開き、永く求羊の蹤を懷ふ。賞心忘るべからず。(八)妙善冀くは能く同じうせん。

(一) 生垣を環らすなり　(二) 樵夫と隱者と　(三) 同じからざるもの唯この樵隱のみには非ず　(四) 清明曠遠の氣象を迎へんとす　(五) 逶迤に同じ　(六) 人事の稀なる義　(七) 蔣詡は杜陵に隱れ舍中三逕を開くのみ唯羊仲と求仲と之に從つて遊べり　(八) 妙善の道に入り合す

殘夕奄昏曙。
藪黔皆周悉。
蠱上貴不事。
履二美貞吉。
幽人常坦步。高尙邈難匹。頤阿竟何端。寂寂寄抱一。恬如既已交。繕性自此出。

(一) 徐行するなり　(二) 淡々たる小波　(三) 圓形をなせる林樹　(四) 夕方の行歩も忽ち夜明の如しとなり　(五) 易の蠱の上九には不事の心を高うすとあり　(六) 天澤履の九二に幽人貞にして吉と見ゆ　(七) 多方の求めなり　(八) 唯一の眞を守る意、老子に出づ

齋中に書を讀む

昔余遊京華。
未嘗廢邱壑。
矧乃歸山川。
心跡兩寂漠。
虛館絶諍訟。
空庭來鳥雀。
臥疾豐暇豫。
翰墨時間作。
懷抱觀古今。
寢食展戲謔。

昔余京華に遊びしも、未だ嘗て邱壑を廢せず。矧んや乃ち山川に歸るをや。心跡(一)兩つながら寂漠たり。虛館に諍訟(二)絶え、空庭に鳥雀を來す。疾に臥して(三)暇豫豐に、翰墨時に間〻作る。懷抱に古今を觀て、寢食に戲謔を展ぶ。既に(四)沮溺が苦を笑ひ、又(五)子雲が閣を陋ふ。(六)戟を執るも亦以だ疲る、耕稼は豈樂しと云はんや。萬事は並に歡し難く、(七)達生のみ幸に託すべし。

(一) 京師に遊びても山水隱居の情を忘れざりき　(二) 心懷と行迹と　(三) 閑暇に娯樂多し　(四) 長沮桀溺が耕種に從事せし苦　(五) 揚雄が天祿閣に書を校せし故事　(六) 揚雄は官執戟郎たりき　(七) 莊周が達生の情を學ばんとなり

雲日相輝映。積水共澄鮮。表レ靈物莫レ賞。蘊レ眞誰爲傳。想二像崑山姿一。緬邈區中緣。始信安期術。得レ盡二養生年一。

とを。

(一) 徘徊するなり　(二) 光陰をいふ　(三) 兩岸と斷絶せる水中　(四) 人の之を賞する無き意　(五) 崑崙山の仙靈を想へば塵俗の所緣を隔絶すとなり　(六) 列仙傳に見えたる古代の仙人

裹レ糧杖二輕策一。懷レ遲上二幽室一。行レ源徑轉遠。距レ陸情未レ畢。澹瀲結二寒姿一。團欒潤二霜質一。澗委水屢迷。林迥巖逾密。眷レ西謂二初月一。顧レ東疑二落日一。

永嘉の綠嶂山に登りし詩

糧を裹んで輕策に杖り、(一)遲を懷うて幽室に上る。源に行くに徑轉遠く、陸を距てて情未だ畢らず。(二)澹瀲は寒姿を結び、(三)團欒は霜質に潤ふ。澗委して水屢迷ひ、林迥にして巖逾密なり。西を眷みて初月かと謂ひ、東を顧みて落日かと疑ふ。(四)踐夕奄ち昏曙、蔽翳皆周悉。(五)蠱上は不事を貴うし、(六)履二に貞吉を美とす。(七)頤阿竟に何の端ぞ、寂寂として(八)抱一を寄す。恬として既已に交るが如く、性を繕むること此より出づ。

川后時安ㇾ流。天吳靜不ㇾ發。揚ㇾ帆采二石華一。挂ㇾ席拾二海月一。溟漲無二端倪一。虛舟有二超越一。仲連輕二齊組一。子牟眷二魏闕一。矜ㇾ名道不ㇾ足。適ㇾ已物可ㇾ忽。請附二任公言一。終然謝二天伐一。

は足らず、己に適へば物忽にすべし。請ふ任公(九)が言に附して、終然に天伐を謝せん。

(一)山名なり海に臨めり　(二)舟中に宿泊す　(三)水のほとりなる海岸の義　(四)極北不毛の地名　(五)川の神なり天吳は波の神　(六)海といふ程の意　(七)荷無し舟の軽疾なる義　(八)前出子牟は魏公子牟なり呂氏春秋に見ゆ　(九)莊子に見ゆ孔子に直木先づ伐らるゝを說きし人也

江中の孤嶼に登る

永嘉の江心に在り。

江南倦二歷覽一。江北曠周旋。懷ㇾ新道轉迥。尋ㇾ異景不ㇾ延。亂ㇾ流趨二正絕一。孤嶼媚二中川一。

江南歷覽に倦み、江北曠(一)に周旋す。新を懷うて道轉た迥く、異を尋ねて景延から(二)ず。流を亂りて正絕(三)に趨けば、孤嶼は中川に媚びたり。雲日相輝映し、積水共に澄鮮。靈を表はせども物(四)賞する無く、眞を蘊めども誰か爲に傳へん。崑山(五)の姿を想像するに、緬邈たり區中の緣。始めて信ず安期(六)が術、養生の年を盡し得るこ

遠峰隱半規。久痗昏墊苦。旅館眺郊岐。澤蘭漸被徑。芙蓉始發池。未厭青春好。已覩朱明移。戚戚感物歎。星星白髮垂。藥餌情所止。衰疾忽在斯。逝將候秋水。息景偃舊崖。我志誰與亮。賞心惟良知。

めて池に發けり。未だ青春の好を厭はず。已に朱明(四)の移るを覩る。戚戚として物に感じて歎き、星星(五)として白髮垂る。藥餌は情の止む所、衰疾忽ち斯に在り。逝いて將に秋水を候ち、景を息めて舊崖(六)に偃す。我が志誰か與に亮なる、賞心(七)惟良に知んぬ。

(一)霖雨新に晴る　(二)半圓形となれる太陽　(三)心昏迷して身の困苦するなり郊岐は郊外の岐路　(四)夏の來るに驚くなり　(五)白色の點々たる貌　(六)始寧の山崖に在る別墅　(七)風物を賞美する心情

(一)赤石に遊んで進んで海に泛ぶ

首夏猶清和。芳草亦未歇。水宿淹晨暮。陰霞屢興沒。周覽倦瀛壖。況乃凌窮髮。

首夏猶清和、芳草亦未だ歇まず。水宿(二)して晨暮を淹しうし、陰霞屢ゝ興り沒る。周く覽て瀛壖(三)に倦む、況んや乃ち窮髮(四)を凌ぐ。(五)川后時に流を安にし、天吳靜にして發らず。帆を揚げて石華を采り、席を挂げて海月を拾ふ。(六)溟漲に端倪無く、(七)虛舟に超越有り。(八)仲連は齊の組を輕んじ、子牟は魏闕を眷みる。名に矜るも道

退耕力不レ任。
徇レ祿反二窮海一。
臥レ痾對二空林一。
衾枕昧二節候一。
褰開暫窺臨。
傾レ耳聆二波瀾一。
擧レ目眺二嶇嶔一。
初景革二緒風一。
新陽改二故陰一。
池塘生二春草一。
園柳變二鳴禽一。
祁祁傷二豳歌一。萋萋感二楚吟一。索居易二永久一。離羣難レ處レ心。持レ操豈獨古。無レ悶徵在レ今。

を傾けて波瀾を聆き、目を擧げて嶇嶔を眺る。初景は緒風を革め、新陽は故陰を改む。池塘に春草を生じ、園柳は鳴禽を變ず。(五)(六)祁祁として(七)豳歌を傷み、萋萋として楚吟に感ず。索居は永久なり易く、離羣は心を處き難し。操を持する豈獨り古ならんや。悶無きの徵(八)は今に在り。

(一) 潛虬に同じ深く潛れて眞を保つとなり (二) 我は飛鴻のいづれをも學び得ず進退共に不可なりとの意を含む (三) 永嘉郡を指す (四) 常に病臥して季節をも知らずとなり (五) 山高きなり (六) 初春の草は寒さの殘れるを拂ひ去る (七) 詩經豳風に春日遲々蘩を采ること祁々とあり楚吟は楚辭なり (八) 證據といふ程の義

時竟夕澄霽。
雲歸日西馳。
密林含二餘清一。

南亭に遊ぶ

亦永嘉郡にあり。

(一)時竟つて夕澄み霽れ、雲歸つて日西に馳す。密林に餘清を含み、遠峯は半規を隱す(二)。久しく昏墊(三)の苦に痾み、旅館に郊岐を眺る。澤蘭は漸く徑に被り、芙蓉は始

晨積展遊眺。孤客傷逝湍。徒旅苦奔峭。石淺水潺湲。日落山照曜。荒林紛沃若。哀禽相叫嘯。遭物悼遷斥。存期得要妙。既秉上皇心。豈屑末代誚。目覩嚴子瀨。想屬任公釣。誰謂今古殊。異代可同調。

石淺うして水潺湲、日落れて山照曜。荒林紛として（三）沃若、哀禽相叫嘯す。（四）物に遭うて遷斥を悼み、期を存して要妙を得。既に上皇の（五）心を秉る、豈末代の誚を屑とせんや。目に（六）嚴子が瀨を覩て、想うて（七）任公が釣に屬せんとす。誰か謂ふ今古殊なりと、異代も調を同じうすべし。

㊀瀨は嚴陵瀨の上流に在り　㊁旅愁の心情　㊂柔和なる貌　㊃萬物を見ては遷移に感じ中和の要諦を悟るとなり　㊄天神の精神　㊅漢の嚴光が釣に隱れしといふ瀨名　㊆莊子に見えたる古代の釣者なり

池上樓に登る

永嘉郡に在り。

潛虬媚幽姿。飛鴻響遠音。薄霄愧雲浮。棲川怍淵沈。進德智所拙。

（一）潛虬は幽姿に媚び、飛鴻は遠音を響かす。（二）霄に薄りて雲の浮ぶに愧ぢ、川に棲んで淵の沈きに怍づ。進德は智の拙なる所、退畊は力任へず。祿に徇つて（三）窮海に反り、痾に臥して空林に對す。（四）衾枕節候に昧く、褰げ開いて暫く窺臨す。耳

二紀及茲年。緇磷謝清曠。疲薾慙貞堅。拙疾相倚薄。還得靜者便。剖竹守滄海。枉帆過舊山。山行窮登頓。水涉盡洄沿。巖峭嶺稠疊。洲縈渚連綿。白雲抱幽石。綠篠媚清漣。葺宇臨廻江。築觀基層巓。揮手告鄕曲。三載期歸旋。且爲樹枌檟。無令孤願言。

薄し、還靜者の便を得たり。竹を剖いて滄海を守り、帆を枉げて舊山に過る。山行して登頓(六)を窮め、水涉して洄沿(五)を盡す。巖峭しく嶺は稠疊し、洲縈りて渚は連綿。白雲は幽石を抱き、綠篠は清漣に媚ぶ。宇を葺いて廻江に臨み、觀(一〇)を築いて層巓に基す。手を揮うて鄕曲に告げ、三載(八)歸旋を期す。且く爲に枌檟(九)を樹ゑよ、願言に孤かしむること無れ。

(一) 外事の爲に耿介の質を損すとなり (二) 仕官して二十四年を經たる義 (三) 汚れ黑める我は清明の士に愧ぢ疲憊しては貞固の士に恥づ (四) 拙陋と疾病との爲に退隱の便利を得たりとなり (五) 郡守となる義 (六) 昇降するなり (七) 稠疊をいふ (八) 二三年にして歸鄕せんことを期す (九) 棺を作るべき樹名なり

七里瀨(一)

羈心積秋晨。

(一)羈心秋晨に積り、晨に積つて遊眺を展ぶ。孤客逝湍を傷み、徒旅奔峭に苦しむ。

祇レ役出二皇邑一。相期憩二甌越一。解レ纜及二流潮一。懷レ舊不レ能レ發。析析就二衰林一。皎皎明二秋月一。含レ情易レ爲レ盈。遇レ物難レ可レ歇。積レ痾謝二生慮一。寡レ慾罕レ所レ闕。資レ此永幽棲。豈伊千歳別。各勉二日新志一。音塵慰二寂蔑一。

役を祇んで皇邑を出で、相期して甌越に憩ふ。纜を解いて流潮に及び、舊を(一)懷うて發する能はず。(二)析析として衰林に就き、皎皎として秋月明かなり。情を含んで(三)盈を爲し易く、(四)物に遇うて歇むべきに難し。(五)痾を積んで生慮を謝し、慾を寡くして(六)闕く所罕なり。此に資りて永く幽棲せん、豈伊れ千歳の別ならんや。各〻日新の志を勉めて、(七)音塵寂蔑を慰めよ。

(一) 永嘉の太守となりしを指す　(二) 風の木を吹き分くる貌　(三) 離情の胸にみつる意　(四) 衰林秋日を見て憫悵迫るとなり　(五) 生存の念を斷つ　(六) 不滿足に思ふ所　(七) 音信を通じて寂しき予が境遇を慰めよとなり

子寧の墅に過る

束レ髮懷二耿介一。逐レ物遂推遷。違レ志似レ如レ昨。

髮を束ねてより耿介を懷き、(一)物を逐うて遂に推し遷る。志に違ひしは昨の如きに似たるも、(二)二紀茲の年に及べり。(三)緇磷清曠に謝し、疲薾貞堅に慙つ。拙疾相倚

季秋邊朔苦。
旅雁違霜雪。
凄凄陽卉腓。
皎皎寒潭潔。
良辰感聖心。
雲旗興暮節。
鳴笳戻朱宮。
蘭巵獻時哲。
餞宴光有孚。
和樂隆所缺。
在宥天下理。
吹萬羣方悅。
歸客遂海隅。
脫冠謝朝列。
弭棹薄枉渚。
指景待樂闋。

季秋邊朔苦しみ、旅雁霜雪を違る。凄凄として（三）陽卉腓り、皎皎として寒潭潔し。良辰は聖心を感ぜしめ、雲旗は暮節に興る。（四）笳を鳴して朱宮に戻り、蘭巵もて時哲に獻ず。（五）餞宴は孚有るを光し、和樂は缺く所を隆にす。（六）在宥して天下理り、萬を吹いて羣方悅ぶ。歸客海隅に遂き、冠を脫して（七）朝列に謝す。棹を弭めて枉渚に薄り、景を指して樂の闋るを待つ。河流に急瀾有り、（八）浮驂に緩轍無し。豈伊れ川途の念ならんや。宿心將に別れんとするを愧づ。彼の美なる（九）邱園の道、喟焉として薄劣を傷む。

㈠ 後の宋の帝武なり臺は項羽を以て名あり　㈡ 名は端尙書令たり　㈢ 落葉木の黃變するをいふ　㈣ 路を啓いて宮殿に至るとなり時哲はその時代の權貴を指す　㈤ 送別宴なり　㈥ 察して寬なる意吹萬は萬物各々所を得る程の義　㈦ 在朝の同列に辭謝し去らんとす　㈧ 旋る馬車の疾速なる義　㈨ 田園閑居の意

鄰里相送つて方山に至る

河流有急瀾。浮驂無緩轍。豈伊川途念。宿心愧將別。彼美邱園道。喟焉傷薄劣。

遙遙播二淸塵一。淸塵竟誰嗣。明哲垂二經綸一。委レ轡轄二道論一。改レ服康二世屯一。屯難既云康。尊レ主隆二斯民一。

中原昔喪亂。喪亂豈解已。崩二騰永嘉末一。逼二迫太元始一。河外無二反正一。江分有二蹶圮一。萬邦咸震懾。橫流賴二君子一。拯レ溺由二道情一。龕レ暴資二神理一。秦趙欣二來蘇一。燕魏遲二文軌一。賢相謝二世運一。遠圖因レ事止。高揖七州外。拂二衣五湖裏一。隨レ山疏二濬潭一。傍レ巖藝二枌梓一。遺レ情捨二塵物一。貞觀二邱壑美一。

中原昔喪亂せり、喪亂豈解け已まんや。永嘉(一)の末に崩騰して、太元(二)の始に逼迫す。(三)河外に反正無く、江分に蹶圮有り。萬邦咸震ひ懾れ、橫流して君子に賴る。(四)溺を拯うし道情に由り、暴に龕つて神理に資る。秦趙は來り蘇する(五)を欣び、燕魏も文軌を遲つ。賢相世運を謝し、遠圖事に因りて止る。七州(六)の外に高く揖して、衣を五湖(七)の裏に拂ふ。山に隨つて濬潭(八)を疏き、巖に傍うて枌梓を藝う。情を遺れて塵物を捨て、貞しく邱壑の美を觀る。

㈠晉懷帝の年號　㈡孝武帝の年號　㈢西晉遂に衰亡し東晉も亦縮少せりとなり　㈣謝玄の功績なり　㈤書經に君來らばそれ蘇せん云々と見ゆ　㈥天下十二州晉はその七を有てり　㈦太湖の別名なりといふ　㈧深き淵を作る

九日、宋公(一)が戲馬臺の集に從つて孔令(二)を送る

達人貴二自我一。
高情屬二天雲一。
兼抱二濟レ物性一。
而不レ纓二垢氛一。
段生蕃二魏國一。
展季救二魯人一。
弦高犒二晉師一。
仲連却二秦軍一。
臨レ組乍不レ緤。
對レ珪寧肯分。
惠レ物辭レ所レ賞。
勵レ志故絕レ人。
苕苕歷二千載一。

じらし、志を范蠡の擧に期す。
王父とは玄を謂ふなり。龕は戡に同じ、勝なり。淮南を龕定すとは、苻堅を敗りし事を謂ふ。

（一）謝玄なり次に見ゆ （二）居を會稽に料して山澤の遊を專にせし事を自叙するなり

（一）達人は自我を貴び、高情天雲に屬す。兼ねて物を濟ふの性を抱きて、（二）垢氛に纓らず。（三）段生は魏國に蕃となり、展季は魯人を救へり。（四）弦高は晉師を犒ひ、仲連は秦軍を却く。組に臨んで乍ち緤がれず、珪に對して寧ぞ肯て分たんや。（五）物を惠んで賞する所を辭し、志を勵めて故に人に絕つ。（六）苕苕として千載を歷、遙遙として淸塵を搢く。淸塵竟に誰か嗣がん、明哲經綸を垂る。（七）講を委して道論を輟め、服を改めて世屯を康んず。屯難既に云に康し、（八）主を尊んで斯の民を隆にす。

（一）大人物は自己を尊重して常に思を天空に馳すとなり （二）世間の塵累に拘束せられず （三）段干木柳下惠の事前に出づ （四）晉師を說いて鄭を存せし賢人なり魯仲連の事前出 （五）恩を施して報を受けざる意 （六）遙に長き貌 （七）講義を止めて戎服し世の艱難を安らかにす （八）以上謝玄の功業を叙す

昔聞二汾水遊一。
今見二塵外鑣一。
鳴レ笳發二春渚一。
税レ鑾登二山椒一。
張レ組眺二倒景一。
列レ筵矚二歸潮一。
遠巖映二蘭薄一。
白日麗二江皐一。
原隰荑二綠柳一。
墟囿散二紅桃一。
皇心美二陽澤一。
萬象咸光昭。
顧レ己枉二維縶一。撫レ志慙二場苗一。工拙各所レ宜。終以返二林巢一。曾是縈二舊想一。覽レ物奏二長謠一。

巖は蘭薄に映じ、白日は江皐に麗く。原隰に綠柳を荑し、墟囿に紅桃を散ず。皇心に陽澤を美とし、萬象咸く光昭す。己を顧みて維縶を枉げ、志を撫して場苗に慙づ。工拙各ゝ宜しき所、終に以て林巢に返らん。曾ち是れ舊想を縈らし、物を覽て長謠を奏す。

（一）山名なり帝は宋の武帝　（二）天子の印なり黄屋は天子の車　（三）王鑾黄屋を用ふるを指す　（四）帝堯は汾水の陽に遊び今帝はこの淸遊を試む　（五）山頂に同じ　（六）綵日ある幕を張りて水に映れる山影を眺む　（七）蘭の茂れる林　（八）江岸に同じ　（九）高祖の心に陽春の惠澤を感ず　（一〇）我は不才にして官に維がれ官祿に覊ぐとなり　（一一）舊くより有せし隱居の素願

祖德を述ぶる詩二首

序に曰く、太元中に、（一）王父は淮南を龕定す。世業を負荷し、主に、專に人に隆し。賢相徂き謝し、君子の道消するに逮んで、（二）衣を蕃岳に拂ひ、卜を東山に考へ、事を樂生の時に同

玉璽誡二誠信一。
黄屋示二崇高一。
事爲二名教一用。
道以二神理一超。

陶詩の高き處は排せざるに在り、謝詩の勝る處は排するに在り。(五)終に一籌を遜る所以なり。(六)

劉勰が明詩篇に曰く、老莊退を告げてより山水方に滋し。(七)山水に遊ぶ詩を見るに、康樂を以て最と爲す。

㈠ 詩風流暢華麗なるに喩ふ　㈡ 理窟めく處　㈢ 工夫して辛苦す　㈣ 曹植以下王劉の諸子なり　㈤ 排偶をつとむる意　㈥ 少しく劣る義　㈦ 老莊が山水の間に退居して之を樂しみし以來之を樂しみて吟咏せしもの多しとなり

京口の北固に從遊す、詔に應ず(一)

宋の武帝に從ふなり。

(二)玉璽もて誠信を誡しめ、黄屋もて崇高を示す。(三)事は名教の爲に用ひ、道は神理を以て超ゆ。昔は汾水の遊を聞き、(四)今は塵外の鑣を見る。笳を鳴して春渚を發し、鑾を稅して(五)山椒に登る。(六)組を張りて倒景を眺め、筵を列して歸潮を矚る。遠

聲急由ㇾ調起。
自三昔枉二光塵一。
結ㇾ言固二終始一。
如何久爲ㇾ別。
百行諐二諸己一。
君子失二明義一。
誰與偕沒ㇾ齒。
愧二彼行露詩一。
甘ㇾ之二長川氾一。

で終始を固うせり。如何ぞ久しく別を爲し、百行(三)諸を己に諐てる。君子明義を失はば、誰と與にか偕に(四)齒を沒へん。彼の(五)行露の詩に愧づ。長川の氾に之かんことを甘ふ。

(一)婦の緊張せる言辭を形容す　(二)娶られしを諫言す　(三)百行を誤って少しも悟らずとなり　(四)死に至らんとなり　(五)詩經召南行露の篇なり下句は水に赴いて死せんのみとの意

謝靈運

前人康樂の詩を評して謂ふ。東海に帆を揚げて、(一)風日流利なりと。此れ甚だ允ならす。大約經營慘憺、深を鉤し隱を索めて、而して一に自然に歸す。山水閒適、時に理趣に(二)遇ふも、匠(三)心獨運して規少し。往には則ち建安(四)諸公も、都て屑とする所に非ず、況んや士衡以下をや。

陶詩は自然に合す。及ぶべからざる處は、眞に在り厚に在り。謝が詩は追琢して自然に返る。及ぶべからざる處は、新に在り俊に在り。千古並稱、厥れ由有るかな。

婦來空復辭。遲遲前途盡。依依造門基。上堂拜嘉慶。入室問何之。日暮行來歸。物色桑楡時。美人望昏至。慙歎前相持。

門基に造る。堂に上つて嘉慶を拜し、(三)室に入つて何くに之くかを問ふ。日暮に行ゝ歸り來る、(四)物色桑楡の時。美人昏を望んで至り、(五)前に相持せしことを慙ぢ歎く。

(一)婦の高節近づき難し　(二)去來の意　(三)母を拜するなり問は婦の行く所を問ふなり　(四)暮色蒼然たる時　(五)桑間にて問語せし次第

有懷誰能已。聊用申苦言。離居殊年載。一別阻河關。春來無時豫。秋至恆蚤寒。明發動愁心。閨中起長歎。慘悽歲方晏。日落遊子顏。

懷有りて誰か能く已まん、聊か用て苦言を申ぶ。(一)離居年載を殊にし、一別河關を阻つ。春來るも時に豫しむ無く、秋至れば恆に蚤く寒し。(二)明發に愁心を發し、閨中に長歎を起す。慘悽として歲方に晏れ、(三)日は落ちて遊子顏あり。

(一)別居後の苦艱を述ぶ　(二)夜明なり　(三)日暮に良人の顏容を思ひ浮ぶ

高張生絶絃。

(一)高く張れば絶絃を生じ、聲急なるは調由り起る。(二)昔光塵を枉げしより、言を結ん

反路遵山河。
昔辭秋未素。
今也歲載華。
蠶月歡時暇。
桑野多經過。
佳人從所務。
窈窕援高柯。
傾城誰不顧。
弭節停中阿。
年往誠思勞。
路遠闊音形。
雖爲五載別。
相與昧平生。
捨車遵往路。
鳧藻馳目成。
南金豈不重。
聊自意所輕。
義心多苦調。
密比金玉聲。
高節難久淹。

き、今は也歲載ち華く。(一)蠶月に時暇を歡び、桑野に多く經過す。(三)佳人務むる所に從ひ、窈窕として高柯を援く。傾城誰か顧みざらん、(四)節を弭めて中阿に停る。

(一) 休暇を得て歸鄕する意　(二) 養蠶月に休暇を得しこと　(三) 美人の仕事につとむるなり　(四) 官吏たる旗印を駐めて道の中央に立留る

年往いて誠に思ひ勞し、路遠くして(一)音形闊し。五載の別を爲すと雖も、(二)相與に平生に昧し。車を捨てて(三)往路に遵ひ、(四)鳧藻して目成を馳す。(五)南金豈重からざらんや、聊か自ら意に輕んずる所たり。(六)義心に苦調多し、密に金玉の聲に比す。

(一) 音信も通ぜず形容も知るに由なし　(二) 消息少くして平生の事を知らずとなり　(三) 少しく引返す　(四) 目もて情を馳せて鳧の藻に戲るゝが如く美人の歡心を得んと欲す　(五) 南國產の良金もて之に贈る　(六) 佳人は節操正しく義もてその贈を却けたりとなり

(一)高節久しく淹り難し、(二)朅來して空しく復辭す。遲遲として前途盡き、依依として

三陟窮二晨暮一。嚴レ駕越二風寒一。解レ鞍犯二霜露一。原隰多二悲涼一。迴飆卷二高樹一。離獸起二荒蹊一。驚鳥縱橫去。悲哉遊宦子。勞二此山川路一。

霜露を犯す。原隰(二)に悲涼多く、迴飆は高樹を卷く。離獸は荒蹊に起ち、驚鳥は縱橫して去る。悲しい哉遊宦(三)の子、此の山川の路に勞す。

(一) 屢々坂路を登つて行役すとなり　(二) 低濕なる原野　(三) 異郷に仕官する人物

迢遞行人遠。宛轉年運徂。良時爲二此別一。日月方向レ除。孰知二寒暑積一。僶俛見二榮枯一。歲暮臨二空房一。涼風起二坐隅一。寢興日已寒。白露生二庭蕪一。

迢遞(一)として行人遠く、宛轉として年運徂く。良時(二)此の別を爲す、日月方に除るに向んとす。孰か寒暑の積るを知らんや、僶俛(三)して榮枯を見る。歲暮に空房に臨めば、涼風坐隅より起る。寢興日已に寒く、白露庭蕪に生ず。

(一) 遠く遙なる貌　(二) 初嫁の時をいふ　(三) 歲月の迅速なるを喩へ言ふ

勸レ役從二歸願一。

役を勤めて歸願(一)に從ひ、路を反るに山河に遵ふ。昔辭せしとき秋未だ素せざり

寒谷待ニ鳴律一。影響豈不レ懷。自レ遠每相匹。婉彼幽閑女。作レ嬪ニ君子室一。峻節貫ニ秋霜一。明豔侔ニ朝日一。嘉運既我從。欣願自レ此畢。燕居未レ及レ好。良人顧有レ違。脫ニ巾千里外一。結レ綬登ニ王畿一。戒レ徒在ニ昧旦一。左右來相依。驅レ車出ニ郊郭一。行路正威遲。存爲ニ久離別一。沒爲ニ長不一レ歸。嗟余怨ニ行役一。

婉たる彼の幽閑(四)の女、君子の室に嬪と作る。峻節は秋霜を貫き、明豔は朝日に侔し。(五)嘉運既に我に從ふ、欣願此より畢へん。

㈠列女傳に見えたる衞の節婦の心中を想像して作れる詩　㈡梓と桐と共に枝を傾けて鳳凰を待つとなり　㈢燕の寒谷は五穀を生ぜず鄒衍の律を吹くや黍を生ずといへり　㈣幽貞閑雅の女子　㈤我既に嘉き運命に逢遭して秋胡の妻となれりとなり

燕居未だ好(一)するに及ばず、良人顧つて違る有り。巾(二)を千里の外に脫し、綬を結んで王畿に登る。徒を戒しむる昧旦に在り、左右來つて相依る。車を驅りて郊郭を出で、行路正に威遲(三)たり。(四)存しては久離別を爲し、沒しては長へに歸らざるを爲す。

㈠夫妻の相親和する意　㈡頭巾を脫して千里の外に仕官す　㈢遲く路を經る貌　㈣生にも死にも悲劇を爲すとの意

嗟余行役を怨み、(一)三たび陟つて晨暮を窮む。駕を嚴めて風寒を越え、鞍を解いて

實稟二生民秀一。
達レ音何用深。
識レ微在二金奏一。
郭奕已心醉。
山公非二虛觀一。
屢薦不レ入レ官。
一麾乃出守。
向秀甘二澹薄一。
深心託二豪素一。
探レ道好二淵源一。
觀レ書鄙二章句一。
交レ呂既鴻軒。
攀レ嵆亦鳳擧。
流二連河裏遊一。
惻二愴山陽賦一。
椅梧傾二高鳳一。

こと金奏に在り。(四)郭奕は已に心醉し、(五)山公は虛しく觀るに非ず。屢〻薦むれども官に入らず、(六)一たび麾いて乃ち出でて守たり。

(一)咸は始平の太守なりき　(二)顯要に登るべき性格　(三)咸よく音樂に通曉せり　(四)太原の人なり咸を見て心醉せり　(五)山濤なり常に咸を賞美せり　(六)荀勗の爲に嫉まれて地方官となりしをいふ

(一)向常侍（秀）

向秀は澹薄に甘んじ、深心を(二)豪素に託す。道を探つて淵玄を好み、書を觀て章句を鄙しむ。(三)呂に交るに既に鴻のごとく軒り、(四)嵆を攀づるに亦鳳のごとく擧る。(五)河裏の遊に流連し、山陽の賦に惻愴せり。

(一)向秀は散騎常侍の官にありき　(二)筆紙に同じ　(三)呂安と友とし善かりしを指す　(四)嵆康なり鴻軒鳳擧は呂嵆の死を言ふ　(五)河内に遊んで山陽賦を作りしを指す

(一)秋胡詩九首

(二)椅梧高鳳に傾き、(三)寒谷鳴律を待つ。影響豈懷はざらんや、遠きより何に相匹ふ。

本自餐霞人。
形解驗二默僊一。
吐レ論知レ凝レ神。
立レ俗迕二流議一。
尋レ山洽二隱淪一。
鸞翮有レ時鎩。
龍性誰能馴。

劉伶善閉レ關。
懷レ情滅二聞見一。
鼓鐘不レ足レ歡。
榮色豈能眩。
韜レ精日沈飲。
誰知非二荒宴一。
頌レ酒雖二短章一。
深衷自レ此見。

仲容青雲器。

むるを知る。俗に立つて流議に迕ひ、山を尋ねて隱淪に洽ふ。(三)鸞翮も時有りて鎩がる、龍性誰か能く馴つけん。

(一)稽康は中散大夫たり　(二)世間に一致せず　(三)身死して仙となるをいふ　(四)鳳凰の翼なり康の傑物なるをいふ

劉參軍（伶）(一)

劉伶は善く關(二)を閉ぢ、情を懷いて聞見を滅す。鼓鐘も歡ばしむるに足らず、榮色も豈能く眩さんや。精を韜んで日に沈飲す、誰か知らん荒宴(三)に非るを。酒(四)を頌せしは短章なりと雖も、深衷は此より見はれき。

(一)劉伶は建威參軍たりき　(二)人欲を防止するなり老子に見ゆ　(三)故ありて沈飲すとなり　(四)酒德頌なり文選に出づ

阮始平（咸）(一)

仲容は青雲の器、(二)實に生民の秀を稟く。(三)音に達すること何ぞ用て深き、微を識る

阮公雖ㇾ淪ㇾ迹。
識密鑒亦洞。
沈醉似ㇾ埋ㇾ照。
寓ㇾ辭類ㇾ託ㇾ諷。
長嘯若ㇾ懷ㇾ人。
越ㇾ禮自驚ㇾ衆。
物故不ㇾ可ㇾ論。
途窮能無ㇾ慟。

中散不ㇾ偶ㇾ世。

五君詠五首

竹林七賢、山濤・王戎は、貴顯を以て斥けらる。

(一)阮歩兵（籍）

阮公は迹を淪すと雖も、(二)識密にして鑒も亦洞し。(三)沈醉して照を埋すに似、辭を寓して諷に託くに類せり。(四)長嘯して人を懷ふが若く、禮に越えて自ら衆を驚かす。(五)物故は論ずべからず、途窮りて能く慟する無らんや。

(一)阮籍は歩兵校尉たりき (二)識量精密にして人を鑑照するの明あり (三)深く醉うて起つ能はざる體 (四)籍はよく長嘯をなせし人なり (五)物事といふに同じ下句は籍が世を遁れしを指す

(一)嵇中散（康）

中散は世に(二)偶せず、本自ら餐霞の人なり。(三)形解は默僊を驗し、論を吐けば神を凝

首レ路跼二險艱一。振レ楫發二吳洲一。秣レ馬陵二楚山一。塗出二梁宋郊一。道由二周鄭間一。前登二陽城路一。日夕望二三川一。在昔輟二期運一。經始闊二聖賢一。伊瀔絕二津濟一。臺館無二尺椽一。宮陛多二巢穴一。城闕生二雲煙一。王猷升二八表一。嗟行方暮年。陰風振二涼野一。飛雲瞀二窮天一。臨レ塗未レ及レ引。置酒慘無レ言。隱閔徒御悲。威遲良馬煩。遊役去二芳時一。歸來屢徂レ諐。蓬心既已矣。飛薄殊亦然。

秣うて楚山を陵る。塗は梁宋の郊に出で、道は周鄭の間よりす。前んで陽城（二）の路に登り、日夕にして三川を望む。（三）在昔は期運を輟めて、經始して聖賢を闊にせり。（四）伊瀔に津濟を絕ち、臺館に（五）尺椽無し。宮陛に巢穴多く、城闕に雲煙を生ず。（六）王猷は八表に升る、嗟行くこと方に暮年なり。陰風は涼野に振ひ、飛雲は（七）窮天に瞀し。塗に臨んで未だ引くに及ばず、置酒して慘として言無し。（八）陰閔にして徒御悲しみ、（九）威遲として良馬煩ふ。遊役して芳時（一〇）を去る、歸來屢徂くこと諐つ。（一一）蓬心既に已んぬ、飛薄も殊に亦然り。

（一）江東の地をいふ　（二）汝南郡に在り三川は前に出せり　（三）晉室衰へて經綸の才人少き意　（四）二水の名　（五）僅少なるたるきすら殘らずとなり　（六）宋の王業は八方に光被せり　（七）窮冬の天空　（八）憂懼歎息の義　（九）追み得ずして躊躇する貌　（一〇）行役の期を誤り春時に於てせずとなり　（一一）轉々として奔走することを希望する心

炎天方埃鬱。
暑晏闋二塵紛一。
獨靜闋二偶坐一。
臨レ堂對二星分一。
側聽風薄レ木。
遙睇月開レ雲。
夜蟬當レ夏急。
陰蟲先レ秋聞。
歲候初過レ半。
荃蕙豈久芳。
屛レ居惻二物變一。
慕レ類抱二情殷一。
九逝非レ空思。
七襄無レ成レ文。
改レ服飭二徒旅一。

散騎字は敬宗、車長沙字は仲遠。

炎天方に埃鬱り、暑晏けて塵紛を闋る。獨り靜にして偶坐を闋き、(一)堂に臨んで星分に對ぶ。(二)側に聽く風の木に薄るを、遙に睇る月の雲を開くを。夜蟬は夏に當つて急に、陰蟲は秋に先つて聞ゆ。歲候初めて半を過ぐ、荃蕙(三)豈久しく芳しからんや。居を屛けて物の變を惻み、(四)類を慕うて情殷を抱く。九逝(五)は思を空しうするに非ず、七襄も文を成すこと無し。

(一) 並び坐する友人無し　(二) 夜の列星を眺む　(三) 香草なり　(四) 己も亦變化する萬物の一たればなり　(五) 一夕に九たび往くといふ楚辭の語に據る七襄は七たびも繰返す意

北のかた洛に使す

宋書に曰く、延之が洛陽道中の作は、文辭藻麗なり。謝晦・傅亮が賞する所と爲りき。

服を改めて徒旅を飭へ、路に首つて險艱を蹈む。檝を振けて(一)吳洲を發し、馬に

雖レ祕猶彰徹。
聆レ龍瞻ニ九淵一。
聞レ鳳窺ニ丹穴一。
歴聽豈多レ士。
藹然覿ニ時哲一。
舒レ文廣ニ國華一。
敷レ言遠ニ朝列一。
德輝灼ニ邦懋一。
芳風被ニ鄕耋一。
側同ニ幽人居一。
郊扉常晝閉。
林閭時晏開。
亟廻ニ長者轍一。
庭昏見ニ野陰一。
山明望ニ松雪一。
靜惟浹ニ羣化一。
徂生入ニ窮節一。豫往誠歡歇。悲來非ニ樂闋一。屬レ美謝ニ繁翰一。遙懷具ニ短札一。

(三)藹然として時哲を覿る。文を舒べて國華を廣うし、言を敷いて朝列を遠しとす。(四)德輝は邦懋を灼し、芳風は鄕耋に被はる。(五)側なること幽人の居に同じく、郊扉は常に晝も閉せり。(六)林閭時に晏く開き、亟長者の轍を廻らす。庭昏うして野陰を見、山明にして松雪を望む。靜に惟うて(七)羣化を浹くし、(八)徂生窮節に入る。豫み往くは誠に歡び歇くればなり、悲み來るは樂の闋るには非ず。美を屬せし(九)繁翰を謝し、遙に懷うて短札に具にす。

㊀ 方折の水に玉あり圓折の水に珠ありとぞ　㊁ 珠は九重の淵に住む龍領に在り鳳は丹穴の山に棲むといふ　㊂ 高蹈拔群の貌　㊃ 君の德風は國威を盛にし鄕里の老人をも懽喜せしむとなり　㊄ 褊陋なる意　㊅ 野外の里門　㊆ 往き去り化し來る萬物　㊇ 生死に同じ生命の窮るべき時期に至れりとなり　㊈ 美しく見事なる君の手紙に愧づとをり

夏夜、從兄散騎と車長沙とに呈す

維聖饗帝。維孝饗親。皇乎備矣。有事上春。禮行宗祀。敬達郊禋。金枝中樹。廣樂四陳。陟配在京。降鑒在民。奔精昭夜。高燎揚晨。陰明浮爍。沈禜深淪。告成大報。受釐元神。月御按節。星驅扶輪。遙興遠駕。曜曜振振。

維聖にして帝を饗し、維孝にして親を饗す。（一）皇として備はり、上春に事有り、禮もて宗祀を行ひ、敬もて（二）郊禋に達す。（三）金枝中に樹ゑ、廣樂四に陳ぶ。（四）陟配は京に在り。降鑒は民に在り。（五）奔精は夜を昭にし、高燎は晨を揚ぐ。（六）陰明浮爍にして、沈禜深淪たり。成を告げて大報し、釐を元神に受く。（七）月御は節を按じ、星驅は輪を扶く。遙に興つて遠く駕し、曜曜振振たり。

（一）明白廣大の意　（二）意を誠にして郊祀を享くるなり　（三）金枝の銅鐙なり祭祀に使用す　（四）詩經に見ゆ　（五）流星をいふ　（六）宋は水德にして辰を主る故に浮爍にして光を揚げ水を祭つて深沈なりといふなり　（七）羽輪の御者なり

王太常に贈る

玉水記方流。璇源載圓折。蓄寶每希聲。

（一）玉水方流を記し、璇源圓折を載す。寶を蓄ふること每に聲希に、祕すと雖も猶彰徹。（二）龍を聆いて九淵を瞻、鳳を聞いて丹穴を窺ふ。歷く聽く豈士多からんや、

恩充報屈。有ㇾ悔可ㇾ悛。滞瑕難ㇾ拂。

完二其朔一……月不ㇾ掩ㇾ望。航ㇾ深越ㇾ水。輦ㇾ賮齎ㇾ琛。……恭二帝祖一。燭ㇾ海表ㇾ岱。系ㇾ唐冑ㇾ楚。靈監二睿文一。民屬二睿武一。奄受敷ㇾ錫。宅ㇾ中拓ㇾ宇。亘ㇾ地稱ㇾ王。辟ㇾ天作ㇾ主。月竁來賓。日際奉ㇾ土。開ㇾ元首ㇾ正。禮交樂擧。六典聯ㇾ事。九官列ㇾ序。有ㇾ牷在ㇾ滌。有ㇾ絜在ㇾ俎。薦二饗王衷一。以答二神祜一。

㈠ 自ら謂ふ ㈡ 延年は太子舍人、尚書儀曹郎太子中舍人となり又正員外郎、員外常侍、始安太守、中書侍郎、太子中庶子等の官を歴たり ㈢ 官途安易なれども我は運命不善すとなり

郊祀歌

欽んで寶命を威れ、嚴に帝祖を恭しみ、(一)海を燭し岱を表にし、唐に系いで楚に冑ぎ、靈は睿文を監し、民は睿武に屬す。(二)奄いに受けて錫を敷にし、(三)中に宅り宇を招き、地に亘りて王と稱し、天を辟して主と作る。(四)月竁も來賓し、(五)日際も土を奉ず。元を開き正を首め、禮交り樂擧る。(六)六典は事を聯ね、九官は序を列ぬ。(七)牷有り滌に有り、絜有り俎に在り。(八)王衷に薦饗して、以て神祜に答ふ。

㈠ 先祖を曰ふ ㈡ 徐州より起れるをいふ ㈢ 帝堯氏の後なる楚元王の後なる意 ㈣ 國の中央に居りて土宇を開拓す ㈤ 日月の如き遠境の蠻夷も來貢すとなり ㈥ 治禮教政刑事を六典とす九官は舜の九官なり書經參照 ㈦ 牲となる牛羊などの潔齋して祭祀に用ひらるゝを謂ふ ㈧ 王の中心のまごゝろ

楙和鈞。屏京維服。
朏魄雙交。月氣參變。開榮灑澤。舒虹爍電。化際無間。皇情爰眷。伊思鎬飲。每惟洛宴。
郊餞有壇。君舉有禮。幙帷蘭甸。畫流高陛。分庭薦樂。析波浮醴。
仰閱豐施。降惟微物。三妨儲隷。五塵朝黻。途泰命屯。

夏衛附の二王がよく其藩封を治むる意 (四)京師の藩屏となる

(一)朏魄雙び交り、月氣參變す。榮を開き澤を灑き、虹を舒べ電を爍す。(二)化は間無きに際り、皇情爰に眷みる。(三)伊に鎬飲を思ひ、每に洛宴を惟ふ。

(一)月の三日也參變は三月の意 (二)德化の無限に及ぶ意 (三)周武周公の宴會を追思して之に傚ふとなり

(一)郊餞に壇有り、君の擧に禮有り。蘭甸に幙帷して、高陛に畫流す。庭を分つて樂を薦め、波を析つて醴を浮ぶ。(三)豫は夏の諺に同じく、事は出濟を兼ぬ。

(一)郊送に同じ (二)美庭高閣の下に帳を張り班を分つ (三)孟子に夏の諺に吾が王豫しまずば云々とあり出濟は詩經の出でゝ濟に宿るに據れり

仰いで豐施を閲ふるに、惟の(一)微物を降せり。(二)三たび儲隷を妨げ、五たび朝黻を塵しぬ。(三)途は泰にして命は屯り、恩は充つるに報は屈せり。悔有り悛むべし、滯瑕は拂ひ難し。

崇レ虚非レ徵。積レ實莫レ尙。豈伊人和。實靈所レ貺。日完二其朔一。月不レ掩レ望。航レ琛越レ水。輦レ賮踰レ嶂。

帝體麗レ明。儀レ辰作レ貳。君二彼東朝一。金昭玉粹。德有レ潤レ身。禮不レ愆レ器。柔中淵映。芳猷蘭秘。

昔在二文昭一。今惟武穆。於赫王宰。方旦居レ叔。有二叡蕃一。爰履二奠牧一。寧

(一)虚を崇うするは徵あるに非ず、實を積むこと尙ふる莫し。豈伊れ人の和ならんや、實に靈の貺ふ所なり。(二)日は其朔を完うし、月は望を掩はず。(三)琛を航にして水を越り、賮を輦にして嶂を踰ゆ。

㊀虚を貴み實を積んで物を動かし心を移さゞるなり　㊁日蝕なく月陰なき義　㊂寶玉を積んで行旅獻納する意

(一)帝體に明に麗んで、辰に儀つて貳と作る。彼の(二)東朝に君として、金のごとく昭に玉のごとく粹し。(三)德は身を潤すこと有り、禮は器を愆たず。(四)柔中は淵のごとく映り、芳猷は蘭のごとく秘し。

㊀太子の帝に附せるをいふ　㊁東宮を謂ふ　㊂二句共に禮記に據る　㊃和柔中正の德

昔は(一)文昭に在り、今は惟武穆なり。於赫たる(二)王宰、旦に方んで叔に居り、(三)睟たる叡藩有り。爰に奠牧を履み、寧んじて和鈞を極め、(四)京に屏として服を維む。

㊀祖廟は父を昭とし子を穆とす　㊁宋の司徒彭城王義康は周公旦の如く皆文王の叔父たり　㊂粹和なる江

道隱二未形一。治彰二既亂一。帝跡懸レ衡。皇流共レ貫。惟王創レ物。永錫二洪算一。仁固開レ周。義高登レ漢。

祚融二世哲一。業光二列聖一。太上正レ位。天臨海鏡。制以二化裁一。樹二之形性一。惠浸二萌生一。信及二翔泳一。

清風の如しと。是を雅音と爲す。

詔に應ず、曲水に讌せしとき作りし詩八章

宋略に曰く、文帝の元嘉十一年三月丙申、樂遊苑に禊飲し、且つ江夏王義恭と衡陽王義季とを祖す。詔有り、會する者は詩を賦しぬ。

道は未形に隱れ、(一)治は既亂に彰はる。帝跡衡を懸け、(二)皇流貫を共にす。惟王物を創めて、永く洪算を錫ふ。(三)仁固に周を開き、(四)義高うして漢に登る。

(一)老子に道は隱れて名無しとあり　(二)帝の功績は衡を懸けて稱るが如しとなり　(三)大なる年數　(四)周は仁厚もて國を開き漢室は義を以て天下を取れり

祚は世哲に融り、(一)業は列聖に光る。(二)太上位を正して、天臨海鏡のごとし。制するに化裁を以てし、之を形性に樹う。(三)惠は萌生を浸し、(四)信は翔泳に及ぶ。

(一)世々の哲王　(二)晉の文帝を指す　(三)形體性質の意　(四)鳥獸鳥魚にまで及ぶとなり

不ㇾ願ㇾ棲二園林一。古有下避ㇾ世士上。抗二志青霄岑一。浩然寄二卜肆一。揮ㇾ棹通二川陰一。逍二遙風塵外一。散ㇾ髪撫二鳴琴一。卿相非ㇾ所ㇾ盻。何況於二千金一。功名豈不ㇾ美。寵辱亦相尋。冰炭結二六府一。憂虞纏二胸襟一。當ㇾ世須二大度一。量ㇾ己不ㇾ克ㇾ任。三二復泉流誡一。自警良已深。

を揮うて川陰に通じ、風塵の外に逍遙して、髪を散じて鳴琴を撫せり。卿相も盻る所に非ず、何ぞ況んや千金に於てをや。功名豈美ならざらんや、(四)寵辱亦相尋ぐ。(五)冰炭六府に結ぼり、憂虞胸襟に纏はる。世に當るには大度を須つ、己を量るに任に克へず。(六)泉流の誡を三復して、自ら警しむること良に已に深し。

(一) 世俗に依附せざるをいふ (二) 食多き庭園中なり仕官するを謂ふ (三) 市中に卜を賣りし事前に出でたり (四) 官仕の人には毀譽交々至るとなり (五) 白と黑と憂と喜との矛盾せる思想が五臟六腑にしみわたる意 (六) 詩經の川流不息の義に取るか、或は漢書に錢貨流布の事をいへるを指すか

顏延之

顏詩は、惠休は品して鏤金錯采と爲せり。然も鏤刻太甚に、塡綴して工を求め、轉た眞氣を傷る。中間五君詠・秋胡行の如きは、皆淸眞高逸の者なり。

士衡は敷陳に長じ、延之は鏤刻に長ず。然も亦此に緣りて累を爲す。詩に云ふ、穆として

寒螢翔二水曲一。秋兎依二山基一。芳年有二華月一。佳人無二還期一。日夕涼風起。對レ酒長相思。悲發二江南調一。憂委二子衿詩一。臥覺二明燈晦一。坐見二輕紈緇一。涙容不レ可レ飾。幽鏡難二復持一。願垂二薄暮景一。照二妾桑榆時一。

しては明燈の晦きを覺え、坐しては輕紈の緇むを見る。涙容は飾るべからず、幽鏡は復持し難し。願はくは(八)薄暮の景を垂れて、妾が桑楡の時を照せ。

(一) 遙に遠き貌 (二) 京都の城郭と離れ去る意 (三) いづことも無く入來せる塵埃 (四) つくつくぼうし (五) 年歲毎に二三月の華月あり (六) 漢の樂府に江南題あり (七) 詩經鄭風參照 (八) 願はくば君よ歸來して妾が晩年を安んぜよとの意

何承天

雉子の原澤に遊ぶ篇

雉子遊二原澤一。幼懷二耿介心一。飮啄雖二勤苦一。

雉子原澤に遊び、幼より耿介(一)の心を懷く。飮啄に勤苦すと雖も、園林(二)に棲むを願はず。古へ世を避けし士有り、志を青霄の岑に抗げ、浩然として卜肆(三)に寄せ、棹

南平王鑠

白紵曲

僊僊徐動何盈盈。玉腕俱凝若雲行。佳人擧袖輝青蛾。摻摻擢手映鮮羅。狀似明月泛雲河。體如輕風動流波。

（一）僊僊として徐に動くこと何ぞ盈盈たる、玉腕俱に凝ること雲の行くが若し。佳人袖を擧げて青蛾を輝かし、（二）摻摻として手を擢いて鮮羅に映ず。狀は明月の雲河に泛ぶに似て、體は輕風の流波を動かすが如し。

(一) 纖弱として起舞する貌　(二) 纖細の貌

行く重ねて行くに擬す

眇眇陵長道。遙遙行遠之。廻車背京里。揮手從此辭。堂上流塵生。庭中綠草滋。

（一）眇眇として長道を陵ぎ、遙遙として行いて遠く之く。車を廻らして（二）京里に背き、手を揮うて此より辭す。堂上に（三）流塵生じ、庭中に綠草滋し。（四）寒螿は水曲に翔り、秋兎は山基に依る。（五）芳年に華月有れども、佳人には還る期無し。日夕にして凉風起り、酒に對して長く相思ふ。悲は（六）江南の調に發し、憂は（七）子衿の詩に委す。臥

自二君之出一矣。
金翠闇無レ精。
思レ君如二日月一。
回還晝夜生。

巻十

宋詩

孝武帝

宋人の詩は日に弱に流る。古の終にして律の始なり。鮑・謝二公無かりせば、恐らくは風雅色無からん。

孝武の詩時に巧思有り。

君の出でてより

君の出でてより、金翠闇うして精無し。(一) 君を思へば日月の如し、(二) 回還して晝夜生ず。

(一) 鏡なり主人去りし後に光無しとなり　(二) 一本日月無しに作る。回還は反覆の意

鄴中女子莫千妖。前至二二月一抱二胡腰一。

五馬浮渡レ江。一馬化爲レ龍。

豆子山。打二瓦鼓一。揚平山。撒二白雨一。下二白雨一。取二龍女一。織得絹二丈五。一半屬二羅江一。一半屬二玄武一。

(一)鄴中の女子莫として千妖、前(二)二月に至つて胡腰を抱かん。

(一) 石勒が據りし鄴中に美女甚だ多き意　(二) 二ケ月後に胡人を迎ふるならんとなり

惠帝が大安中の童謠

晉書五行志に見ゆ。後に中原大亂、宗藩多く絶えしが、唯琅琊・汝南・西陽・南頓・彭城のみ、同じく江東に至りて、元帝は統を嗣ぎたり。

(一)五馬浮んで江を渡り、(二)一馬は化して龍と爲る。

(一) 序詞中の五王を指す晉の司馬姓なるに應ず　(二) 元帝は卽ち瑯琊王なり

綿州の巴歌(一)

豆子山に、(二)瓦鼓を打ち、楊平山に、(三)白雨を撒す。白雨を下し、(四)龍女を取り、織り得たり絹二丈五。(五)一半は羅江に屬し、一半は玄武に屬す。

(一) 風俗歌の意　(二) 溪流の音の鼓聲の如くなる意　(三) 瀑布を形容す　(四) 龍の如き長川なり　(五) 二丈五尺の半分は羅江湖に他は玄武湖に灌ぐとなり

裁作衣。舊紅番作裏。廻黄轉縁無定期。世事返復君所知。

淒淒烈烈。北風爲雪。船道不通。歩道斷絶。

南風起兮吹白沙。遙望魯國何嵯峨。千歲髑髏生齒牙。

知る所たり。

㊀黄色のきぬを或は裏とし表とするなり　㊁世事の反覆も亦此の帛の如しとなり

安東平

(一)淒淒烈烈、北風雪を爲す。船道は通ぜず、歩道は斷絶す。

㊀寒威烈し道路閉塞せり君行くこと勿れとなり

惠帝の元康中京洛の童謠

晉書の五行志に見ゆ。

(一)南風起りて白沙を吹く、(二)遙に魯國を望めば何ぞ嵯峨たる、(三)千歲の髑髏に齒牙を生ぜん。

㊀賈后が太子遹を殺したる意　㊁賈氏の族の盛なる意　㊂愍懷が賈氏に咬みつかんとなり

惠帝の時の洛陽の童謠

晉書に見ゆ、明年にして石勒反しぬ。

下有㆓同心草㆒。
草生已日長。
人生日就ㇾ老。

春蠶不ㇾ應ㇾ老。
晝夜常懷ㇾ絲。
何惜㆓微軀盡㆒。
纏綿自有ㇾ時。

休ㇾ洗ㇾ紅。洗多
紅色澹。不ㇾ惜㆓
故縫衣㆒。記㆓得
初按茜㆒。人壽
百年能幾何。
後來新婦今
爲ㇾ婆。
休ㇾ洗ㇾ紅。洗多
紅在ㇾ水。新紅

に就く。

㊀木末ヲ標とす末端の意　㊁來難を指す

蠶絲を作る

春蠶は應に老ゆべからず、晝夜に常に絲を懐く。何ぞ微軀の盡くるを惜まん、纏綿として自ら時有り。

㊀蠶は老い易き義　㊁心緒の憂苦を指し喩ふ　㊂絲の衣となるが如く情人に逢ふを喩ふ

紅を洗ふを休めよ二章

紅を洗ふを休めよ、洗ふこと多ければ紅色澹れん。故縫の衣を惜まず、初按の茜を記得せり。人壽百年能く幾何ぞ、後來の新婦も今は婆と作りぬ。

㊀わが昔縫ひし衣　㊁最初の染色を忘れずとなり

紅を洗ふを休めよ、洗ふこと多ければ紅水に在らん。新紅もて裁ちて衣を作り、舊紅もて番うて裏と作す。黄を廻し綠を轉じて定期無し、世事の返復は君が

隴上壯士有二陳安一。軀幹雖レ小腹中寬。愛二養將士一同二心肝一。驄父馬鐵鍛鞍。七尺大刀奮如レ湍。丈八蛇矛左右盤。十盪十決無レ當レ前。百騎俱出如二雲浮一。追者千萬騎悠悠。戰始三交失二蛇矛一。棄二我驌驄一竄二巖幽一。爲二我外援一而懸レ頭。西流之水東流河。一去不レ還奈二子何一。

るに及んで、隴上は之が歌を爲りぬ。

(一)隴上の壯士に陳安有り、軀幹小なりと雖も腹中は寬なり。將士を愛養して心肝を同じうし、(二)驌驄父馬鐵鍛の鞍あり。七尺の大刀奮ふこと(三)湍の如く、丈八の蛇矛左右に盤る。(四)十盪十決前に當るもの無し、百騎俱に出でて(五)雲の浮ぶが如く、追ふ者千萬騎悠悠。戰始めて三たび交り蛇矛を失ふ、我が驌驄を棄てて(六)巖幽に竄る。(七)我が外援爲るに而るに頭を懸けぬ。西流の水東流の河、(八)一たび去つて還らず子を奈何せん。

(一)甘肅省の隴縣　(二)葦毛色美はしき駿馬の名、父は文の誤なるべし　(三)早瀬の如く速かなり　(四)十たび動けば十たび斷る　(五)敗走の狀をいふ　(六)奥深き巖窟　(七)我國の外寇を保障すべき勇將なりしものをとの意　(八)運命詮方なけれど君は誠に惜しかりきとなり

來羅

鬱金黃花標。

鬱金の黃花の標、(一)下に同心の草有り。(二)草生じて已に日に長じ、人生れて日に老

聲涙沾ㇾ衣。
我欲ㇾ上ㇾ蜀蜀水難。蹋㆓蹀珂頭㆒腰環環。

朝見㆓黄牛㆒。暮見㆓黄牛㆒。三朝三暮。黄牛如ㇾ故。

㊀前詩を見よ

(二)我蜀に上らんと欲するに蜀水難なり、(三)珂頭を蹋み蹀んで腰環環。

㊁江を溯りて蜀に入る　㊂馬勒を珂といふ珂を蹋んで音を發しながら陸路より進むの意

三峽謠

水經注に曰く、峽中に灘有り、名づけて黄牛と曰ふ。巖石既に高く、江流紆廻せり。途に(一)信宿を經と雖も、猶之を望み見るべし。故に行く者謠つて云ふ。

朝に(二)黄牛を見、暮に黄牛を見る。(三)三朝三暮、黄牛は故の如し。

㊀途中二宿するも望見するを得となり　㊁宜昌の西方に在る峽名人の刀を負うて黄牛を引く狀をなせり　㊂三日三夜

隴上歌

晉書に、劉曜の陳安を隴城に圍むや、安は敗走せり。曜は將軍平先をして之を追はしむ。平は安を澗曲に斬りぬ。安は下を撫するに善く、吉凶夷險、衆と之を共にせり。死す

發二金石一媚二笙簧一。羅袿徐轉紅袖揚。清歌流レ響繞二鳳梁一。如レ矜若レ思凝且翔。轉レ盼遺レ精豔二輝光一。將レ流將レ引雙雁行。歡來何晚意何長。明君御レ世永歌レ昌。
淫豫大如レ馬。瞿唐不レ可レ下。淫豫大如レ象。瞿唐不レ可レ上。
巴東三峽猿鳴悲。夜鳴三

り且つ翔る。盻を轉じ精を遺つて輝光を豔にし、(三)將に流れんとし將に引かんとし雙雁行る。歡來ること何ぞ晚き意何ぞ長き、明君世を御し永く昌を歌ふ。

㊀歩く度毎に錦の玉の搖動して音を發するなり　㊁鳳凰を刻せるうつばり　㊂舞容を爲すなり

淫豫

國史補に云ふ、蜀の三峽(一)は、最も峻急と號せらる。四月五月尤も險なり。故に行く者之を歌ふと。一に灔豫に作る。峽中の灘なり。

(二)淫豫大馬の如くなれば、(三)瞿唐は下るべからず。淫豫大象の如くなれば、瞿唐は上るべからず。

㊀瞿唐峽と巫峽と西陵峽となり　㊁峽口に在る大石なり冬は水面より出づる二十餘丈夏は沒すといふ　㊂即ち瞿唐峽なり一廣に溪峽とも曰ふ

女兒子

(一)巴東三峽猿鳴き悲しむ、夜鳴いて三聲涙衣を沾す。

若二龍轉一乍低昂。凝二停善睞一容儀光。如レ推若レ引留且行。隨レ世而變誠無レ方。舞以盡レ神安可レ忘。晉世方昌樂未レ央。質如二輕雲一色如レ銀。愛レ之遺レ誰贈二佳人一。制以爲レ袍餘作レ巾。袍以光レ軀巾拂レ塵。麗服在レ御會二佳賓一。醪醴盈レ樽美且淳。清歌徐舞降二祇神一。四座歡樂胡可レ陳。

く留りて且つ行き、(四)世に隨つて變じて誠に方無し。舞は以て神を盡す安ぞ忘るべけんや、晉の世方に昌にして樂み未だ央きず。(五)質は輕雲の如く色は銀の如し、之を愛して誰にか遺らん佳人に贈らん。制して以て(六)袍を爲り餘は巾を作る、袍は以て軀を光し巾もて塵を拂ふ。麗服(七)御に在り佳賓を會す、醪醴樽に盈ちて美且つ淳なり。清歌徐舞して(八)祇神を降す、四座歡樂胡ぞ陳すべけん。

(一) 東晉の太平を欲する歌なり白紵は江東に產する織物 (二) 白鳥をいふ (三) 美しき目つきを凝して容姿光る如し (四) 歌舞の段落に從つて一定せずとなり (五) 白紵に就きいふ (六) 上着なり羽織の類。巾は頭巾なり (七) 君王に侍坐する意 (八) 天神地祇をいふ

陽春白日風花香。趨步明玉舞瑤璫。聲

陽春白日風花香し、(一)趨步明玉舞瑤璫。聲は金石より發して笙簧に媚び、羅袿徐に轉じて紅袖揚る。清歌響を流して(二)鳳梁を繞り、矜るが如く思ふが若く凝

尙可。水深殺レ我。雍雍雙雁。游二戯田畔一。我欲レ射レ雁。念二子孤散一。翩翩浮萍。得レ風搖輕。我心何合。與レ之同幷。空牀低レ帷誰。知レ無レ人。夜衣二錦繡一。誰別二僞眞一。刀鳴二鞘中一。倚レ牀無レ施。父寃不レ報。欲二活何爲一。猛虎斑斑。遊二戯山間一。虎欲レ殺レ人。不レ避二豪賢一。

輕軀徐起何洋洋。高擧二兩手一白鵠翔。宛

雙雁、田畔に游戯す。我雁を射んと欲すれども、子の孤散せんことを念ふ。翩翩たる浮萍、風を得て搖ぐこと輕し。我が心何にか合する、(四)之と同じく幷ぶ。空牀に帷を低る、誰か人無きを知らん。夜錦繡を衣る、誰か僞眞を別たん。刀は(六)鞘中に鳴れども、(五)牀に倚りて施す無し。父の寃報いずば、活きて何をか爲さんと欲する。(七)猛虎斑斑として、山間に遊戯す。虎人を殺さんとすれば、(八)豪賢をも避けず。

(一) 獨り下流に居る意　(二) 死を致して復仇せんと欲すとなり　(三) 和らげる貌　(四) 浮萍と同じく依る所無きを忍　(五) 一夜仇人の室に忍び入りしも仇人在らざりしを敍す　(六) 鞘に同じ　(七) 自ら喩ふ　(八) 權貴豪右の人をも恐れず

晉の白紵舞の歌辭(一)

輕軀徐に起つ何ぞ洋洋たる、高く兩手を擧げて(二)白鵠のごとく翔る。宛として龍の轉ずるが若く乍ち低昻、(三)善睞を凝停して容儀光る。推すが若く引くが若

不レ見雀來入ニ燕室一。但見浮雲蔽ニ白日一。

見ずや雀(一)の來つて燕(二)の室に入るを、但見る浮雲(三)の白日を蔽ふを。

(一) 慕容氏の夫人をいふ　(二) 秦王を指す　(三) 浮雲を夫人に白日を秦王に比す

無名氏

短兵篇

劍爲ニ短兵一。其勢險危。疾踰ニ飛電一。回旋應レ規。武節齊レ聲。或合或離。電發星騖。若レ景若レ差。兵法攸レ衆。軍容是儀。

劍は短兵(一)爲り、其勢險危なり。疾は飛電に踰え、回旋(二)規に應ず。武節(三)聲を齊しうし、或は合し或は離る。電のごとく發し星のごとく騖せ、景(四)の若く差の若し。兵法(五)に衆しとする攸、軍容是儀る。

(一) 短く鋭き兵器　(二) めぐり動くこと法度に應ず　(三) 歩武節奏の調子　(四) 日影の如く列ぶが如き義　(五) 兵法には劍道を重要なりとする意

獨漉篇

獨漉獨漉。水深泥濁。泥濁

獨漉獨漉(一)、水深く泥濁る。泥の濁るは倘可なり、(二)水深ければ我を殺す。(三)雍雍たる

峩峩東嶽高。
秀極沖二青天一。
巖中開二虛宇一。
寂寞幽以玄。
非レ工復非レ匠。
雲構發二自然一。
氣象爾何物。
遂令二我屢遷一。
逝將レ宅二斯宇一。
可三以盡二天年一。

山に登る

峩峩として東嶽(一)高く、秀極(二)は青天に沖す。巖中に虛宇(三)を開へ、寂寞として幽にして以て玄なり。工に非ず復匠に非ず、雲構(四)自然に發す。氣象よ爾は何物か。遂に我をして屢遷(五)らしむ。逝いて將に斯の字に宅らんとす、以て天年を盡すべし。

(一)泰山を謂ふ　(二)高嶺の絕頂　(三)住む人なき家屋　(四)雲の形象にて家の如く見ゆる意　(五)心を惑かるゝなり

趙整（附符秦詩）

諫歌

秦王堅、慕容垂の夫人と、輦を同じうして後庭に遊ぶ。宦官趙整歌つて云々。堅は容を改めて之を謝し、夫人に命じて輦を下らしめき。

徑然忘ㇾ所ㇾ適。揮ㇾ手撫二雲門一。靈關安足ㇾ闢。流ㇾ心叩二玄扃一。感二至理弗レ隔。孰是騰二九霄一。不ㇾ奮二沖天翮一。妙同趣自均。一悟超二三益一。

連峰數千里。修林帶二平津一。雲過遠山翳。風至梗二荒榛一。茅茨隱不ㇾ見。雞鳴知ㇾ有ㇾ人。閑歩踐二其徑一。處處見二遺薪一。始知百代下。故有二上皇民一。

るに、沖天の翮を奮はざる。(六)妙同じく趣も自ら均し、一悟三益に超ゆ。

(一)奥深き山穴に珍異なる事蹟あり　(二)微音多くの物音と響く　(三)目當もなく遊ぶ　(四)忽然に同じ　(五)神神しき關門は自から開けたり　(六)佛教と道教と皆趣致を一にすとなり三益は三益友の略

帛道猷

峯に陵つて藥を采り興に觸れて詩を爲る

連峯數千里、修林(一)平津に帶す。雲過ぎて遠山翳れ、風至りて(二)荒榛を梗ぐ。茅茨隱れて見えず、雞鳴いて人有るを知る。閑歩して其徑を踐み、處處に(三)遺薪を見る。始めて知る百代の下、故に(四)上皇の民有ることを。

(一)長き林が平遠なる川縁に帶の如く生ず　(二)荒れ亂れたる雜木の下路　(三)棄て置ける薪　(四)太古の民の如く純眞なるに感ずるなり

謝道韞

超興非レ有レ本。
理感興自生。
忽聞二石門遊一。
奇唱發二幽情一。
褰レ裳思二雲駕一。
望レ崖想二曾城一。
馳步乘二長巖一。
不レ覺質有レ輕。
矯レ首登二雲闕一。
眇若レ凌二太淸一。
端居運二虛輪一。
轉二彼玄中經一。
神仙同物化。
未レ若二兩俱冥一。

崇巖吐二淸氣一。
幽岫棲二神跡一。
希聲奏二羣籟一。
響出山溜滴。
有レ客獨冥游。

超興(一)は本有るに非ず、理感(二)ずれば興自ら生ず。忽ち石門の遊を聞いて、奇唱(三)して幽情を發す。裳を褰げては雲駕を思ひ、崖を望んでは曾城(四)を想ふ。馳步して長巖に乘れば、覺えず質の輕きこと有り、首を矯げて雲闕に登れば、眇として太淸(五)を凌ぐが若し。端居して虛輪(六)を運らし、彼の玄中の經に轉ず。神仙同じく物化す。未だ兩つながら俱に冥れんには若かじ。

(一)凡俗に超出する程の淸興 (二)感覺といふ程の意 (三)珍らしき提唱なり石門に遊ぶの言を指す (四)崑崙山に在る天帝の居處 (五)天上の宮殿 (六)心を動かして不立文字の妙經に參すとなり

惠遠

廬山東林雜詩

崇巖淸氣を吐き、幽岫(一)神跡を棲む。希聲(二)羣籟を奏し、響出でて山溜滴る。客有り獨り冥游(三)し、徑然(四)として適く所を忘る。手を揮つて雲門を撫す、靈關(五)安んぞ闢くに足らんや。心を流いて玄扃を叩き、至理の隔てざるに感ず。孰か是九霄に騰

豈虛明(一六)の其照を朗にし、閒邃の其情を雋らするを以てならずや。並に斯の談を三復(一七)すれども、猶昧然として未だ盡さず。俄にして太陽は夕を告げ、存(一八)する所已に往く。乃ち幽人の玄覽を悟り、恆物(一九)の大情に達す。其の神趣爲る、豈山水のみならんや。是に於て崇嶺に徘徊し、流目して四矚するに、九江(二〇)は帶の如く、邱阜は垤を成す。此に因りて推せば、形に巨細有り、智も亦宜しく然るべし。迺ち喟然として歎ずらく、宇宙遐なりと雖も古今は一契(二一)たり。靈鷲(二二)は邈たり、荒途日に隔る。哲人有らずんば、風迹(二三)存すと雖も、應に深悟遠かるべしと。慨然として長く懷ふ。各一遇(二四)の歡を同じうせしを欣び、良辰の再びし難きを感じぬ。情中に發して、遂に共に之を詠ずと爾云ふ。

(一) 廬山の禪寺　(二) 三泉の水相會して石門の下に流出す　(三) 僧法師なり　(四) 錫杖を杖づく　(五) 危險の地にのぼる　(六) 手を伸ばして相援引す　(七) 勝景を抱き持つ　(七) 二個の石門　(八) 高き巖石が四方に構ふるなり　(九) 獸類の形像　(一〇) 文彩ある岩石　(一一) 衆人の喜悅するをいふ　(一二) 天上の露なり山頂なればいふ　(一三) 仙を調ふ　(一四) 神秘的の音響　(一五) 空無にして樂しむなり　(一六) 日光なり　(一七) 再三再四繰返して述ぶるなり　(一八) 實在せる山水の景が見えずなることなり　(一九) 不滅の物象について其眞諦を知る　(二〇) 廬山下の川流　(二一) 一致の意　(二二) 釋迦の法華經を說きし印度の山名　(二三) 遺風遺蹟なり　(二四) 千歲一遇の歡會

闕は其前に對峙し、重巖は後に映帶し、巒阜周廻して以て障を爲し、崇巖四營して宇を開く。其中には則ち石臺石池、宮館の象(九)、觸類の形有りて、致樂しむべし。清泉分流して合注し、淥淵は天池に鏡のごとく淨く(一〇)、文石は彩を發し、煥若として面を披き、檉松芳草、蔚然として日を光す。其の神麗爲ること、亦已に備はれり。斯の日や、衆(一一)情奔悅し、矚覽厭く無く、游觀未だ久しからざるに、天氣屢變ず。霄霧(一二)塵のごとく集れば、則ち萬象も形を隱し、流光廻り照せば、則ち衆山影を倒にす。開闢の際より、狀に靈有りて、而も測るべからざるなり。乃ち其れ將に登らんとし、則ち翔禽は翮を拂ひ、鳴禽は響を厲しうす。歸雲駕を廻らして、羽人(一三)の來儀を想ひ、哀聲相和して、玄音(一四)の寄する有るが若し。髣髴として猶聞ゆるがごとしと雖も、而も神は之を以て暢び、樂み歡を期せずと雖も、而も欣んで以て日を永うす。其の沖豫自得(一五)するに當りては、信に味有り、而も未だ言ひ易からざるなり。退いて之を尋ぬるに、夫れ崖谷の間は、會物に主無し、應に情を以てせざるべくして、而も興を開き人を引き、致深きこと此の若し。

廬山諸道人

石門に遊ぶ詩

石門は精舍(一)の南十餘里に在り、一に障山と名づく。基は大嶺に連り、體は衆阜に絶す。三泉(二)の會を闢き、竝び立ちて流を開く。傾巖は玄く其上に映じ、形を蒙けて自然に表る。故に因りて以て名を爲す。此れ廬山の一隅なりと雖も、實に斯の地の奇觀なり。皆之を舊俗より傳へて、而も未だ睹ざる者衆し。將に懸瀨險峻にして、人獸の迹絶え、徑は曲阜を廻り、路阻に行難きに由り、故に經ること罕なり。釋法師は、隆安四年仲春の月を以て、山水を詠ずるに因り、遂に錫(四)に杖りて遊ぶ。時に交徒(三)の趣を同じうするもの三十餘人、咸衣を拂うて晨に征き、悵然として興を增す。林壑幽邃なりと雖も、而も塗を開いて競ひ進み、危に乘り石を履むと雖も、並に悅ぶ所を以て安しと爲す。既に至るや則ち木を援き葛を尋ね、險(五)を歷り崖を窮め、猿臂(六)相引いて、僅に乃ち極に造れり。是に於て勝(七)を擁し巖に倚り、詳に其下を觀て、始めて七嶺の美、奇を此に蘊むを知りぬ。雙(八)

悲風蕩二繁囿一。白雲屯二曾阿一。
景昃鳴禽集。水木湛二清華一。
褰レ裳順二蘭沚一。徙倚引二芳柯一。
美人愆二歲月一。遲暮獨如何。
無レ爲レ牽二所思一。南榮戒二其多一。

其多きを戒しめき。

㊀ 詩經に蟋蟀堂に在り歲聿に云に暮る云々と韓詩に勞者其事を歌ふ云々とあるに據る ㊁ 屈曲せる道は大丘に加へて城門に通ず ㊂ 靜和なる風 ㊃ 層重せる山の曲 ㊄ 期を誤つて遲るゝなり ㊅ 莊子に南榮趎が庚桑楚に戒しめられし話見ゆ

呉隱之

貪泉を酌む詩

古人云二此水一。一歃懷二千金一。
試使二夷齊飲一。終當レ不レ易レ心。

晉書に、隱之が廣州の刺史と爲るや、未だ州に至らざること十里にして、地の石門と名づくるあり、水有り貪と曰ふ。飲む者は厭く無きの欲を懷くと。隱之酌んで之を飲み、因り此の詩を賦す。州に至るに及んで、清操愈〻厲しかりき。

古人此の水を云ふらく、一たび歃れば千金を懷ふと。試に夷齊(一)をして飲ましむとも、終に當に心を易へざるべし。

㊀ 伯夷叔齊

幽室一已閉。千年不二復朝一。千年不二復朝一。賢達將二奈何一。向來相送人。各自還二其家一。親戚或餘レ悲。他人亦已歌。死去何所レ道。託レ體同二山阿一。

（一）死者自ら謂ふ　（二）高く寂しき貌　（三）墓の壙穴　（四）賢者達人も亦如何ともしかたし　（五）親戚の者は猶悲しみ他人は歌ひさわぐ皆我をして山阿に安んぜしめんが爲に外ならずとなり

謝混

西池に遊ぶ

悟二彼蟋蟀唱一。信二此勞者歌一。有レ來豈不レ疾。良遊常蹉跎。逍遙越二城肆一。願言屢經過。廻阡被二陵闕一。高臺眺二飛霞一。

彼の蟋蟀の唱を悟り、此の勞者の歌を信ず。來る有り豈疾からずや、良遊は常に（一）蹉跎たり、逍遙して城肆を越え、願はくは言に屢〻經過せん。（二）廻阡は陵闕を被り、高臺に飛霞を眺む。（三）惠風は繁囿に蕩き、白雲は（四）曾阿に屯まる。景仄いて鳴禽集り、水木は清華を湛ふ。裳を褰げて蘭沚に順ひ、徙倚して芳柯を引く。美人は歳月を愆つ、（五）遲暮獨り如何。所思に牽かるゝを爲すこと無らん、（六）南榮は

時還讀ニ我書一。窮巷隔ニ深轍一。頗廻ニ故人車一。歡言酌ニ春酒一。摘ニ我園中蔬一。微雨從レ東來。好風與レ之俱。泛覽ニ周王傳一。流觀ニ山海圖一。俯仰終ニ宇宙一。不レ樂復何如。

より來り、好風之と俱なふ。(三)泛く周王の傳を覽て、流く(四)山海の圖を觀る。(五)俯仰して宇宙を終ふ。樂しまずんば復何如せん。

(一)枝葉盛なる貌 (二)貧苦しく狹きちまたは大道より隔絶せり (三)八駿を驅りし穆天子の傳 (四)山海經を披見す (五)俯仰の間に天地を周行するが如し

荒草何茫茫。白楊亦蕭蕭。嚴霜九月中。送レ我出ニ遠郊一。四面無ニ人居一。高墳正嶕嶢。馬爲仰レ天鳴。風爲自蕭條。

輓歌詞に擬す

荒草何ぞ茫茫たる、白楊亦蕭蕭たり。嚴霜九月の中、(一)我を送りて遠郊に出づ。四面に人居無く、高墳の正に(二)嶢たり。馬は爲に天を仰いで鳴き、風は爲に自ら蕭條たり。(三)幽室一たび已に閉づれば、千年復朝あらず。千年復朝あらず、(四)賢達も將に奈何せんとかする。向來相送りし人、各自ら其家に還る。(五)親戚或は悲を餘し、他人も亦已に歌ふ。死し去つて何の道る所ぞ、體を託して山阿に同じうす。

漸離擊二悲筑一。宋意唱二高聲一。蕭蕭哀風逝。淡淡寒波生。商音更流レ涕。羽奏壯士驚。心知二去不一レ歸。且レ有二後世名一。登レ車何時顧。飛レ蓋入二秦庭一。淩厲越二萬里一。逶迤過二千城一。圖窮事自至。豪主正怔營。惜哉劍術疎。奇功遂不レ成。其人雖二已沒一。千載有二餘情一。

圖(一〇)窮りて事自ら至り、豪主(一一)も正に怔營。惜い哉劍術疎く、奇功遂に成らず。其人已に沒したりと雖も、千載まで餘情有り。

(一)燕の太子丹　(二)强秦なり嬴は秦の本姓　(三)荊軻を謂ふ　(四)白毛の駿馬が廣き街道に嘶く　(五)毛髮雄々しく立ちて高き冠を衝く　(六)高漸離なり　(七)宋如意なり皆軻の親友たり　(八)羽と共に五聲の一　(九)行くこと疾速なる貌　(一〇)燕の督亢の地圖中に匕首を卷きこみて秦皇に謁見せるなり　(一一)始皇もあわて懼る

孟夏草木長。繞レ屋樹扶疎。衆鳥欣レ有レ託。吾亦愛二吾廬一。既耕亦已種。

山海經を讀む

孟夏に草木長じ、屋を繞つて樹扶疎(一)たり。衆鳥は託する有るを欣び、吾も亦吾が廬を愛す。既に耕して亦已に種ゑ、時に還つて我が書を讀む。窮巷(二)は深轍を隔て、頗る故人の車を廻らす。歡言して春酒を酌み、我が園中の蔬を摘む。微雨東

此士胡獨然。實由罕所同。介焉安其業。所樂非窮通。人事固以拙。聊得長相從。

(一)張仲蔚は漢人なり一生仕へざりし人　(二)茂り蔽へる貌　(三)劉向の孫なりといふ　(四)張と同じき志の人稀なりしが故なりとなり　(五)本分に作る陶集により介に改む　(六)困窮榮達の意　(七)張仲蔚に從はんとなり

荊軻を詠ず

燕丹善養士。志在報強嬴。招集百夫良。歲暮得荊卿。君子死知己。提劍出燕京。素驥鳴廣陌。慷慨送我行。雄髮指危冠。猛氣衝長纓。飲餞易水上。四座列羣英。

燕丹は善く士を養ふ、志は強嬴(一)に報ずるに在り。百夫の良を招集して、歲暮に(二)荊卿を得たり。君子は知己に死す、劍を提げて燕京を出づ。(四)素驥は廣陌に鳴き、(三)慷慨して我が行を送る。(五)雄髮は危冠を指し、猛氣は長纓を衝く。易水の上に飲餞するに、四座に羣英を列ぬ。(六)漸離は悲筑を擊ち、(七)宋意は高聲を唱ふ。蕭蕭として哀風逝き、淡淡として寒波生ず。(八)商音は更に涕を流し、羽奏は壯士驚く。心に去つて歸らざるを知る、且に後世の名有らんとす。車に登るに何の時か顧みん。蓋を飛ばして秦庭に入る。(九)凌厲として萬里を越り、逶迤として千城を過ぐ。

袁安困ニ積雪一。邈然不レ可レ干。阮公見ニ錢入一。即日棄ニ其官一。芻藁有ニ常溫一。采レ莒足ニ朝餐一。豈不ニ實辛苦一。所レ懼非ニ飢寒一。貧富常交戰。道勝無ニ戚顏一。至德冠ニ邦閭一。清節映ニ西關一。

(一)袁安は積雪に苦しむ、邈然として干むべからず。(二)阮公は錢の入るを見て、即日に其官を棄てき。(三)芻藁も常溫有り、莒を采れば朝餐に足る。豈實に辛苦せざらんや、懼るゝ所は飢寒に非ず、(四)貧富常に交〻戰ひ、道勝ちて戚ふる顏無し。(五)至德邦閭に冠たり、清節西關に映ず。

(一)漢の洛陽の人にして大雪に雪を掃はざりし人　(二)阮籍は官に在りし時錢貨の府中に入るを見て即日に其官を棄てたり　(三)藁草にても煖を得る意　(四)卜子夏が貧富の爭の事諸書に見えたり　(五)國門なり國中に賢者ありて内外の患無き義

仲蔚愛ニ窮居一。繞レ宅生ニ蒿蓬一。翳然絕ニ交遊一。賦レ詩頗能工。舉レ世無ニ知者一。止有ニ一劉龔一。

(一)仲蔚は窮居を愛し、宅を繞らして蒿蓬を生じき。(二)翳然として交遊を絕ち、詩を賦するに頗る能く工なりき。世を舉げて知る者無く、(三)止一劉龔のみ有りき。此の士は胡ぞ獨り然りしや、(四)實に同じき所罕なるに由れり。(五)介焉として其業に安んず、樂しむ所は(六)窮通に非ず。人事固に以だ拙なり、聊か(七)長く相從ふを得ん。

窺ㇾ竈不ㇾ見ㇾ煙。
詩書塞ニ座外一。
日昃不ㇾ遑ㇾ研。
閑居非ニ陳厄一。
竊有ニ慍見一ㇾ言。
何以慰ニ我懷一。賴古多ニ此賢一。

る有り、何を以てか我が懷を慰めん、(六)賴古に此の賢多かりき。

(一) 寒氣烈しき貌 (二) 粗服を被て日向に暖をとる (三) 壺中には前日の餘瀝も無くかまどには火の氣も無し (四) 日暮まで研究の暇無し (五) 孔子が陳蔡に圍まれし災厄なり儞は子路を指す論語參照 (六) 唯古人には貧にして賢なるもの多かりき

榮叟老帶ㇾ索。
欣然方彈ㇾ琴。
原生納ニ決履一。
清歌暢ニ高音一。
重華去ㇾ我久。
貧士世相尋。
敝襟不ㇾ掩ㇾ肘。
藜羹常乏ㇾ斟。
豈忘ㇾ襲ニ輕裘一。
苟得非ㇾ所ㇾ欽。
賜也徒能辯。乃不ㇾ見ニ吾心一。

(一)榮叟は老いて索を帶とし、欣然として方に琴を彈じぬ。(二)原生は決履を納れ、清歌して高音を暢べき。(三)重華我を去ること久しく、貧士世々相尋ぐ。(四)敝襟は肘を掩はず、藜羹は常に斟むに乏し。豈輕裘を襲ぬるを忘れんや、(五)苟も得んは欽ふ所に非ず、(六)賜や徒に能く辯なるも、乃ち吾が心を見ず。

(一) 榮啓期なり列子參照 (二) 原憲は破れ草履を穿けり (三) 舜の名は重華 (四) 衣食に乏しきをいふ (五) 不義にして富を得る意 (六) 端木賜なり

貧士を詠ず

萬族各有レ託。孤雲獨無レ依。曖曖空中滅。何時見二餘暉一。朝霞開二宿霧一。衆鳥相與飛。遲遲出レ林翮。未レ夕復來歸。量レ力守二故轍一。豈不二寒與一レ飢。知音苟不レ存。已矣何所レ悲。

(一)萬族は各託する有るに、孤雲のみ獨り依る無し。(二)曖曖として空中に滅ゆ、何の時か餘暉を見ん。(三)朝霞宿霧を開けば、衆鳥相與に飛ぶ。(四)遲遲として林を出づるの翮、未だ夕ならざるに復來り歸る。力を量つて(五)故轍を守る、豈寒と飢とにあらざらんや、(六)知音苟も存せず、已んぬるかな何の悲しむ所ぞ。

(一)萬物に同じ　(二)物に蔽はれて不明なる貌孤雲は自ら喩ふるなり　(三)他の受け殘せる陽光　(四)困窮せる鳥は他に比して遲く出で早く歸るとなり　(五)舊節を守る意　(六)明察にして我を知る人物

淒厲歲云暮。擁レ褐曝二前軒一。南圃無二遺秀一。枯條盈二北園一。傾レ壺絕二餘瀝一。

(一)淒厲として歲云に暮れ、(二)褐を擁して前軒に曝す。南圃に遺秀無く、枯條は北園に盈つ。(三)壺を傾けて餘瀝を絕ち、竈を窺ふに煙を見ず、詩書は座外を塞げども、(四)日昃くまで硏くに遑あらず。閑居は(五)陳厄に非ざれども、竊に慍の言に見はる

欲㆑言無㆓予和㆒。揮㆑杯勸㆓孤影㆒。日月擲㆑人去。有㆑志不㆑獲㆑騁。念㆑此懷㆓悲悽㆒。終曉不㆑能㆑靜。

(一)西方の水面に沈み入る　(二)廣大なる貌　(三)單身獨酌を敍す　(四)高遠の志あれども展ぶるを得ずとなり　(五)夜明頃なり徹夜するをいふ

代㆑耕本非㆑望。所㆑業在㆓田桑㆒。躬親未㆓曾替㆒。寒餒常糟糠。豈期㆑過㆓滿腹㆒。便願㆑飽㆓粳糧㆒。御㆑冬足㆓大布㆒。麤絺以應㆑陽。正爾不㆑能㆑得。哀哉亦可㆑傷。人皆盡獲㆑宜。拙生失㆓其方㆒。理也可㆓奈何㆒。且㆑爲㆓陶一觴㆒。

耕に代ふる(一)は本望に非ず、業とする所は田桑に在り、(二)躬親から未だ曾て替てざるに、寒餒常に糟糠。(三)豈滿腹に過ぐるを期せんや、便ち粳糧に飽かんことを願ふ。冬を御ぐは大布(四)に足り、麤絺(五)は以て陽に應ず。正に爾く得る能はず、哀しい哉亦傷むべし。人皆盡く宜しきを獲て、拙生(六)は其方を失ふ。理や奈何かすべき、且に陶(七)を一觴に爲さんとす。

(一)仕官して祿を得ること　(二)我が業を廢棄せざれども常に貧窮なり　(三)粱飯なり滿腹の食を望むのみとなり　(四)木綿の衣服　(五)あらき麻布　(六)自己の謂なり　(七)酒により陶然の樂を買はんとなり

人生無二根蔕一。
飄如二陌上塵一。
分散逐レ風轉。
此已非二常身一。
落レ地爲二兄弟一。
何必骨肉親。
得レ歡當レ作レ樂。
斗酒聚二比隣一。
盛年不二重來一。
一日難二再晨一。及レ時當二勉勵一。歲月不レ待レ人。

人生根蔕(一)無し、飄として陌上の塵の如し。分散風を逐うて轉ず、此れ已に常の身に非ず。地に落ちて兄弟と爲る、何ぞ必ずしも骨肉の親ならんっ 歡を得ては當に樂を作すべし。(二)斗酒比鄰を聚む。(三)盛年重ねて來らず、一日再び晨なり難し。時に及んで當に勉勵すべし、歲月は人を待たず。

(一)根もなく依るべきへたも無し　(二)少しの酒もて近鄰の人に振舞ふ　(三)年若き時代を繰返すこと能はず

白日淪二西河一。
素月出二東嶺一。
遙遙萬里輝。
蕩蕩空中景。
風來入二房戸一。
夜中枕席冷。
氣變悟二時易一。
不レ眠知二夕永一。

白日(一)西河に淪み、素月東嶺に出づ。遙遙たり萬里の輝、(二)蕩蕩たり空中の景。風來つては房戸に入り、夜中に枕席冷かなり。氣變じて時の易ることを悟り、眠らずして夕の永きを知る。言はんと欲すれども予和する無く、(三)杯を揮うて孤影に勸む。日月人を擲つて去り、(四)志有れども騁するを獲ず。此を念うて悲悽を懷き、(五)終曉まで靜なること能はず。

張掖至幽州。
飢食首陽薇。
渴飲易水流。
不見相知人。
惟見古時邱。
路邊兩高墳。
伯牙與莊周。
此士難再得。吾行欲何求。

ず、惟古時の邱を見る。(四)路邊に兩高墳あり、伯牙と莊周となり。(五)此の士再び得難し、吾行いて何をか求めんと欲する。

(一)古代に弱水と稱せし川の下流流域　(二)伯夷叔齊が故事　(三)燕の荊軻が故事　(四)墳墓の義　(五)伯牙は春秋時代の樂師莊周は即ち莊子なり

雜詩

種桑長江邊。
三年望當采。
枝條始欲茂。
忽値山河改。
柯葉自摧折。
根株浮滄海。
春蠶既無食。
寒衣欲誰待。
本不植高原。
今日復何悔。

桑を種う長江の邊、(一)三年當に采るべきを望む。枝條始めて茂らんと欲し、忽ち山河の改るに値ふ。(二)柯葉自ら摧折し、根株滄海に浮ぶ。春蠶既に食無し、(三)寒衣誰をか待たんと欲せん。(四)本高原に植ゑず、今日復何ぞ悔いん。

(一)楊子江をいふ　(二)桑田變じて海となる意　(三)蠶寒くとも衣るべき服無しとなり　(四)高處に植ゑ置かば今日の災無かりしならんと、高原を顯貴に喩ふるなり

青松夾レ路生。
白雲宿二簷端一。
知二我故來意一。
取レ琴爲レ我彈。上絃驚二別鶴一。下絃操二孤鸞一。願留就レ君住。從レ今至二歳寒一。

(一)君子を謂ふ　(二)說苑に子思が衞に居て困乏なりしを敍せし語なり　(三)黃河をわたり關塞を過ぐ　(四)琴調高低して或は別鶴操の如く或は離鸞曲の如しとなり　(五)老年に及ぶまでの義

日暮天無レ雲。
春風扇二微和一。
佳人美二清夜一。
達レ曙酣且歌。
歌竟長歎息。
持レ此感レ人多。
皎皎雲間月。
灼灼葉中華。
豈無二一時好一。不レ久當二如何一。

日暮に天に雲無く、春風微和を扇ぐ。(一)佳人清夜を美し、曙に達るまで酣み且つ歌ふ。歌竟つて長く歎息し、(二)此を持して人を感ぜしむること多し。皎皎たり雲間の月、灼灼たり葉中の華。(三)豈一時の好無らんや、久しからざるを當に如何かすべき。

(一)和げる微風　(二)かくの如き生活を繼續す　(三)月と花と共に一時はよろしけれど永久なり難しとなり

少時壯且厲。
撫レ劍獨行遊。
誰言行遊近。

少時壯にして且厲しく、劍を撫して獨り行遊す。誰か言ふ行遊近しと、(一)張掖より幽州に至る。饑ゑては(二)首陽の薇を食ひ、渇しては(三)易水の流を飲む。相知の人を見

分明望四荒。
暮作歸雲宅。
朝爲飛鳥堂。
山河滿目中。
平原獨茫茫。
古時功名士。
慷慨爭此場。
一旦百歲後。
相與還北邙。
松柏爲人伐。高墳互低昂。頹基無遺主。游魂在何方。榮華誠足貴。亦復可憐傷。

堂と爲る。(二)山河滿目の中、平原獨り茫茫。古時功名の士、慷慨此の場を爭へり。一旦百歲の後、相與に北邙に還る。(三)松柏人の爲に伐られ、高墳互に低昂あり。頹基に遺主無し、游魂は何の方にか在る。(四)榮華は誠に貴ぶに足る、亦復憐傷すべし。

(一)高く遙なる貌　(二)百尺樓上の大觀を叙す　(三)墓を標する木も皆伐り去らるとなり　(四)榮華は貴ぶべきも一朝のみ寧ろ悲しむべしとなり

東方有一士。
被服常不完。
三旬九遇食。
十年著一冠。
辛苦無此比。
常有好容顏。
我欲觀其人。
晨去越河關。

東方に一士有り、被服常に完からず。(一)三旬に九たび食に遇ひ、十年に一冠を著く。(二)辛苦此の比無きに、常に好容顏有り。我は其人を觀んと欲し、晨に去りて(三)河關を越るに、青松は路を夾んで生ひ、白雲は簷端に宿せり。我が故に來りし意を知り、琴を取つて我が爲に彈ず。(四)上絃は別鶴を驚かし、下絃は孤鸞を操る。願くは留つて君に就いて住まん、今より(五)歲寒に至らん。

聞有二田子春一。
節義爲二士雄一。
斯人久已死。
郷里習二其風一。
生有二高世名一。
既沒傳二無窮一。
不レ學狂馳子。
直在二百年中一。
仲春遘二時雨一。
始雷發二東隅一。
衆蟄各潛駭。
草木縦横舒。
翩翩新來燕。
雙雙入二我廬一。
先巣故尙在。
相將還二舊居一。
自二從分別一來。
門庭日荒蕪。
我心固匪レ石。
君情定何如。
迢迢百尺樓。

る。學びず(五)狂馳の子が、直に百年の中に在ることを。

㈠陶集に行に作る　㈡商用にもあらず戎旅にもあらず　㈢漢の田春は劉虞の使となり命を果して公孫瓚に殺られ終に屈せざりし義士なり　㈣世俗に高く抜け出でたる名聲　㈤名利に狂奔する人々が生時に東奔西走することに傚はず

(一)仲春に時雨に遘ひ、始雷は東隅に發す。衆蟄各〻潛駭し、草木は縦横に舒ぶ。翩たり新來の燕、雙雙我が廬に入る。(二)先巣故より尙在り、相將ゐて舊居に還る。分別してより來、門庭は日に荒蕪す。(三)我が心は固に石に匪ず、君が情は定めて何如。

㈠二月に適度の雨あり　㈡去年作りし巣　㈢君の去りてより我が家は荒れたれども我は心を變へず君は今如何となり

(一)迢迢たり百尺の樓、分明に四荒を望む。暮には歸雲の宅と作り、朝には飛鳥の

榮榮窻下蘭。密密堂前柳。初與レ君別時。不レ謂行當レ久。出レ門萬里客。中道逢二嘉友一。未レ言心先醉。不レ在レ接二杯酒一。蘭枯柳亦衰。遂令二此言負一。多謝諸少年。相知不二忠厚一。意氣傾二人命一。離隔復何有。辭レ家夙嚴レ駕。當レ往志無レ終。問レ君今何有。非レ商復非レ戎。

擬古

榮榮たり窻下の蘭、密密たり堂前の柳。初め君と別れし時、謂はざりき行當に久しかるべしとは、門を出でし萬里の客、(一)中道にして嘉友に逢ふ。未だ言はざるに心先づ醉ふ、杯酒を接するには在らず。(二)蘭枯れて柳亦衰へ、遂に此の言をして負かしむ。多謝す諸少年、相知る忠厚ならざらんや。(三)意氣は人命を傾く、離隔復何か有らん。

(一) 途中にして良友に邂逅せり　(二) 時節過ぎ易くして遂に最初の訣別の辭に背けりとなり　(三) 意氣投合すれば人命をも傾け致す

家を辭して夙に駕を嚴しめ、當に往いて志終ること無るべし。君に問ふ今何か有(一)る、(二)商に非ず復戎に非ず。聞く(三)田子春有り、節義にして士の雄爲りと。斯の人久しく已に死し、鄕里其風を習ふ。生きて(四)高世の名有り、既に沒して無窮に傳は

爲ること未だ已まず。(二)登歳の功は、既に希ふべからず、朝夕の養る所、煙火裁に通ずるのみ。旬日已來、始めて飢乏を念ふ。(三)歳云に夕なり、慨焉として詠懐す。今我述べずんば、後生何をか聞かんや。

(一)歳の歉なるに逢へり　(二)豐年を希望すること　(三)歳將に暮れんとす

弱年逢ㇾ家乏。
老至更長ㇾ飢。
菽麥實所ㇾ羨。
孰敢慕ㇾ甘肥。
惄如亞ㇾ九飯。
當ㇾ暑厭ㇾ寒衣。
歲月將ㇾ欲ㇾ暮。
如何辛苦悲。
常善ㇾ粥者心。
深恨ㇾ蒙袂非。
嗟來何足ㇾ吝。
徒沒空自遺。
斯濫豈彼志。
固窮夙所ㇾ歸。
餒也已矣夫。
在昔余多ㇾ師。

弱年にして家の乏しきに逢ひ、老至りて更に飢を長ず。(一)菽麥も實に羨む所たり、孰か敢て甘肥を慕はん。(二)惄如として九飯に亞ぎ、暑に當りて寒衣を厭ふ。歲月將に暮れんと欲せんとす。如何か辛苦悲しき。常に(三)粥者の心を善みし、深く(四)蒙袂の非なるを恨む。(五)嗟來何ぞ吝むに足らんや、徒に沒して空しく自ら遺す。(六)斯の濫は豈彼の志ならんや、固窮夙に歸する所たり。餒や已んぬるかな、(七)在昔は余に師多かりき。

(一)年老いて益々貧乏なるを言ふ　(二)憂ふる貌なり、三旬に九食するが如き亞流なりとなり　(三)施しの粥を與ふる者　(四)黔敖を斥けし餓者なり禮記に見ゆ　(五)右の黔敖が語中にあり　(六)食を斥けし人の行爲をいふ　(七)古人には師とすべき人多かりしとなり

羲農去レ我久。
擧世少レ復レ眞。
汲汲魯中叟。
彌縫使二其淳一。
鳳鳥雖レ不レ至。
禮樂暫得レ新。
洙泗輟二微響一。
漂流逮二狂秦一。
詩書復何罪。
一朝成二灰塵一。
區區諸老翁。
爲レ事誠殷勤。
如何絶世下。
六籍無二一親一。
終日馳レ車走。不レ見二所レ問津一。若復不二快飲一。空負二頭上巾一。但恨多二謬誤一。君當レ恕二醉人一。

(一)羲農我を去ること久しく、擧世眞に復るもの少なり。汲汲たり(二)魯中の叟、彌縫して其をして淳ならしむ。(三)鳳鳥至らずと雖も、禮樂暫く新なるを得たり。(四)洙泗に微響を輟め、漂流して狂秦に逮ぶ。詩書復何の罪がある、一朝にして(五)灰塵と成る。(六)區區たる諸老翁、事を爲す誠に殷勤。如何せん絶世の下、六籍一も親しむ無し。終日車を馳せて走るも、(七)問ふ所の津を見ず。若し復快飲せずば、空しく(八)頭上の巾に負かん。但恨むらくは謬誤多からん、君當に醉人を恕すべし。

(一) 伏羲氏神農氏　(二) 魯の孔子が世道一心を匡せしを指す　(三) 聖人世に出でざる義論語に見ゆ　(四) 魯の二水の名孔孟の鄉が狂秦に亂されしを指す　(五) 秦の焚書坑儒をいふ　(六) 漢以下歴代の諸儒が六經を註釋せしを指す　(七) 道を問ふべき大人物無し　(八) 淵明常に頭巾を以て酒を漉し飲めり

會する有りて作る

舊穀既に沒して、新穀未だ登らず、頗る老農と爲りて、而も年災に値ふ。(一)日月尙悠し、患

挈レ壺相與至。
班レ荊坐二松下一。
數斟已復醉。
父老雜亂言。
觴酌失二行次一。
不レ覺二知有一レ我。
安知二物爲一レ貴。
悠悠迷レ所レ留。酒中有二深味一。

で已に復醉ふ。父老雜亂して言ひ、觴酌(三)行次を失ふ。(四)我有るを覺え知らず、安んぞ物の貴爲るを知らんや。悠悠として留(五)る所に迷ふ、酒中に深味有り。

(一)知合の故老　(二)雜草などを敷物とす　(三)杯をめぐらす順序を失ふなり　(四)我を忘るゝ位なれば他人の尊貴など眼中にある筈なしとなり　(五)留る所を知らずして名利に迷ふ人を戒しむるなり

少年罕二人事一。
遊好在二六經一。
行行向不レ惑。
淹留遂無レ成。
竟抱二固窮節一。
飢寒飽レ所レ更。
敝廬交二悲風一。
荒草沒二前庭一。
被レ褐守二長夜一。晨雞不二肯鳴一。孟公不レ在レ茲。終以翳二吾情一。

少年は人事罕に、遊好(一)六經に在り。行き行いて向つて惑はず、淹留するも遂に成る無し。竟に固窮の節を抱き、飢寒更る所に飽く。敝廬悲風を交へ、荒草前庭を沒す。(二)褐を被て長夜を守る、晨雞肯て鳴かず。(三)孟公玆に在らず、終に以て吾が情を翳さん。

(一)詩書易禮樂春秋を勸修すとなり　(二)賤者の衣服　(三)漢の陳遵字は孟公は酒を好んで毎に客と大飲せり

一世皆尙レ同。
願君汨二其泥一。
深感二父老言一。
稟氣寡レ所レ諧。
紆レ轡誠可レ學。
違レ己詎非レ迷。且共歡二此飮一。吾駕不レ可レ回。

らず。

(一)不意の來客に狼狽するなり　(二)殊勝なる考へありて酒を携へて來るとなり　(三)粗衣破屋に高樓に及ばず少しく忍びて世に出でよと說くなり　(四)天性に同じ　(五)復世に出仕するなり

在昔曾遠遊。
直至二東海隅一。
道路迥且長。
風波阻二中塗一。
此行誰使レ然。
似二爲レ飢所一レ驅。
傾レ身營二一飽一。
少許便有レ餘。
恐此非二名計一。息レ駕歸二閑居一。

在昔は曾て遠遊し、直に東海の隅に至りぬ。道路迥にして且長く、風波中塗を阻てき。此の(一)行誰か然らしめし、(二)飢の爲に驅られしに似たり。(三)身を傾けて一飽を營み、少許なれば便ち餘有り。恐らくは此れ(四)名計に非じ、駕を息へて閑居に歸らん。

(一)出仕せしことを述ぶ　(二)乞食の詩參照　(三)食に足れば滿足して他を求めず　(四)名利の計策

故人賞二我趣一。

(一)故人我が趣を賞し、壺を挈へて相與に至る。(二)荊を班いて松下に坐し、數斟ん

飛鳥相與還。此中有二眞味一。欲レ辨已忘レ言。

秋菊有二佳色一。裛レ露掇二其英一。汎二此忘憂物一。遺二我遠世情一。一觴雖二獨進一。杯盡壺自傾。日入羣動息。歸鳥趨レ林鳴。嘯傲東軒下。聊復得二此生一。

秋菊に佳色有り、露に裛うて其英を掇る。此の(一)忘憂の物を汎べて、我が遠世の(二)情を遺る。一觴獨り進むと雖も、杯盡くれば壺自ら傾く。日入りて(三)羣動息み、歸鳥林に趨つて鳴く。嘯傲す東軒の下、聊か復此の生を得たり。

(一)菊花を盃に浮ぶ　(二)世に離れたる情を慰む　(三)群生物の活動

淸晨聞レ叩レ門。倒レ裳往自開。問子爲レ誰歟。田父有二好懷一。壺漿遠見レ候。疑二我與レ時乖一。襤縷茅檐下。未レ足レ爲二高棲一。

淸晨に門を叩くを聞き、裳を倒しまにして往いて自ら開く。問ふ子は誰とかると。田父に(一)好懷有り。(二)壺漿遠く候せらる、我を時と乖くかと疑ふ。(三)襤檐の下、未だ高棲と爲すに足らず。一世皆同を尙ぶ、願くは君其の泥を汨せ。深く父老の言に感ずるも、(四)稟氣諧ふ所寡し。(五)轡を紆すは誠に學ぶべきも、己に違ふは詎ぞ迷ふに非ざらん。且く共に此の飲を歡ばん、吾が駕は回らすべか

不レ賴二固窮節一。
百世當二誰傳一。
道喪向二千載一。
人人惜二其情一。
有レ酒不二肯飲一。
但顧二世間名一。
所三以貴二我身一。
豈不レ在二一生一。
一生能復幾。
倏如二流電驚一。
鼎二鼎百年內一。
持レ此欲二何成一。
結レ廬在二人境一。
而無二車馬喧一。
問レ君何能爾。
心遠地自偏。
采二菊東籬下一。
悠然見二南山一。
山氣日夕佳。

人々

道喪びて千歳に向んとし、人人其情を惜む。酒有れども肯て飲まず、但世間の名を顧みる。我が身を貴ぶ所以は、豈一生に在らずや。一生も能く復幾ばくぞ、倏として流電の驚くが如し。百年の內に鼎鼎として、此を持して何をか成さんと欲する。

(一)戰國以後の意　(二)世人は名利の爲に一杯の酒だに甜飲せずとなり　(三)寬慢なる貌

廬を結ぶこと人境に在り、而も車馬の喧無し。君に問ふ何ぞ能く爾るや、心遠くして地自ら偏る。菊を東籬の下に采り、悠然として南山を見る。山氣日夕に佳く、飛鳥相與に還る。此中眞味有り、辨ぜんと欲するに已に言を忘る。

(一)俗人の住む境地に近し　(二)心に人境を離るゝが故に土地も亦然るに似たりとなり　(三)大自然の眞意なり說明せんとするに其の語を忘るとなり

遙謝荷レ篠翁一。
聊得二從レ君棲一。

衰榮無二定在一。
彼此更共レ之。
邵生瓜二田中一。
寧似二東陵時一。
寒暑有二代謝一。
人道每如レ茲。
達人解二其會一。
逝將レ不二復疑一。
忽與二一觴酒一。
日夕懽相持。

積レ善云レ有レ報。
夷叔在二西山一。
善惡苟不レ應。
何事立二空言一。
九十行帶レ索。
飢寒況當年。

し。影を顧みて獨り盡し、忽焉として復醉ふ。既に醉ふの後は、輒ち數句を題して自ら樂しみ、紙墨遂に多きも、辭には詮次無し。聊か故人に命じて之を書せしめ、以て歡笑を爲すのみ。

衰榮は定の在る無し、彼此更ゝ之を共にす。(一)邵生は田中に瓜つくる、寧ぞ東陵の時に似んや。寒暑に代謝有り、人道は每に茲の如し。(二)達人は其會を解し、逝いて將に復疑はざらんとす。忽ち一觴の酒を與へば、日夕に懽んで相持せん。

(一)漢の邵平は故秦の東陵侯なりしが秦破れて庶人となり長安城外に瓜を作りぬ　(二)達觀の人物は其消息を明察す

善を積めば報有りと云ふも、(一)夷叔は西山に在りき。善惡苟に應ぜずんば、何事か空言を立てん。(二)九十にして行くに索を帶とす、飢寒況んや當年をや。(三)固窮の節に頼らずんば、百世當に誰にか傳ふべき。

(一)伯夷叔齊は善人なりしが終に餓死せり　(二)列子に榮啓期の事を叙したるに據る　(三)貧に甘んじて節を守る

貧居依二稼穡一。戮レ力東林隈。
不レ言二春作苦一。常恐レ負レ所レ懷。
司田眷二有秋一。寄レ聲與レ我諧。
飢者歡二初飽一。束帶候二鳴雞一。
揚レ檝越二平湖一。汎隨二淸壑一迴。
鬱鬱荒山裏。猿聲閑且哀。
悲風愛二靜夜一。林鳥喜二晨開一。
曰余作レ此來。三四星火頽。
姿年逝已老。其事未二云乖一。

丙辰の歳八月中ごろ、下潠の田舍に於て穫る(一)

貧居は稼穡に依る、力を戮す東林の隈。(二)春作の苦を言はず、常に懷ふ所に負かんことを恐る。(三)司田は有秋を眷み、聲を寄せて我と諧ふ。飢ゑたる者は初めて飽くを歡び、(四)束帶して鳴雞を候ふ。檝を揚げて平湖を越え、汎として淸壑に隨つて廻る。鬱鬱たり荒山の裏、猿聲閑にして且つ哀し。悲風に靜夜を愛し、林鳥(五)に晨の開くを喜ぶ。曰に余此を作して來、(六)三四たび星火頽れき。(七)姿年は逝いて已に老ゆ、其事未だ云に乖かず。遙に謝す(八)篠を荷ふの翁、聊か君に從つて栖むを得たり。

(一)地名 (二)春には農耕多忙なるを謂ふ (三)田を掌る小役人 (四)束裝して夜明を待つ (五)夜明となる意 (六)三四年を經過せりとなり (七)年も逝き姿も老ゆ (八)論語に篠を荷へる丈人の話あり

酒を飲む

余間居して歡寡し、此の夜の已に長きを兼ぬ。偶々名酒有れば、夕として飲まざる無

即事多レ所レ欣。耕種有レ時息。行者無レ問レ津。日入相與歸。壺漿勞二近鄰一。長吟掩二柴門一。聊爲二隴畝民一。

人生歸二有道一。衣食固其端。孰是都不レ營。而以求二自安一。開春理二常業一。歲功聊可レ觀。晨出肆二微勤一。日入負レ耒還。山中饒二霜露一。風氣亦先寒。田家豈不レ苦。弗レ獲レ辭二此難一。四體誠乃疲。庶無二異患干一。盥濯息二簷下一。斗酒散二襟顏一。遙遙沮溺心。千載乃相關。但願長如レ此。躬耕非レ所レ歎。

庚戌の歲九月中ごろ、西田に於て早稲を穫る

人生は有道に歸す、衣食固に其の端なり。(一)孰か是都て營まずして、而も以て自安を求めん。(二)開春に常業を理むれば、歲功聊か觀るべし。晨に出でて微勤を(三)肆にし、日入りて耒を負うて還る。山中に霜露饒く、風氣亦先づ寒し。田家豈苦しまざらんや、此の難を(四)辭することを獲ず。四體誠に乃ち疲れば、庶くは異(五)患の干す無らん。盥濯して簷下に息ひ、斗酒もて襟顏に散ず。遙遙たり沮溺が(六)心、千載乃ち相關す。但願はくは長へに此の如けん、躬耕も歎ぜん所に非ず。

(一) 有道の一端は卽ち衣食なればなり　(二) 早春に同じ　(三) 勤勞を十分にして少しく疲るゝ意　(四) 肉體を勞する艱難なり　(五) 不慮の災禍をいふ　(六) 長沮桀溺なり前出せりこゝには沮溺の心と相契合する感ありとなり

春興豈自免。
夙晨裝二吾駕一。
啓レ塗情已緬。
鳥弄懽二新節一。
冷風送二餘善一。
寒竹被二荒蹊一。
地爲レ罕レ人遠。
是以植レ杖翁。
悠然不二復返一。
即理愧二通識一。
所レ保詎乃淺。
先師有二遺訓一。
憂レ道不レ憂レ貧。
瞻望邈難レ逮。
轉欲二志常勤一。
秉レ耒懽二時務一。
解レ顔勸二農人一。
平疇交二遠風一。
良苗亦懷レ新。
雖レ未レ量二歲功一。

弄して新節を懽び、冷風は(三)餘善を送る。寒竹は荒蹊に被り、地爲に人罕にして遠し。是を以て(四)杖を植つるの翁、悠然として復返らず。(五)卽し理は通識に愧づるとも、保つ所は詎ぞ乃ち淺からん。

㊀南畝の耕すべきを聞きしも未だ經驗せざりき ㊁論語回や屢空しの語に取る、出仕の貧よりも歸耕を可とする意 ㊂意外の快樂 ㊃論語に子路が逢ひたる丈人、淵明自ら謂ふ ㊄博通達識の人士には愧づかしけれどとなり

(一)先師に遺訓有り、道を憂へて貧を憂へず。瞻望すれども邈として逮び難く、轉志の常に勤めんことを欲す。(二)耒を秉つて時務を懽び、顔を解いて農人を勸む。(三)平疇に遠風を交へ、良苗亦新を懷ふ。(四)未だ歲功を量らずと雖も、卽事に欣ぶ所多し。耕種は時に息ふこと有り、(五)行者は津を問ふこと無し。日入りて相與に歸り、壺漿もて近鄰を勞ふ。長吟して柴門を掩ひ、聊か(六)隴畝の民と爲る。

㊀孔子なり語は論語に出づ ㊁すきを執つて今日農耕の務を成す ㊂平野に風吹き到るなり ㊃秋の收穫をいふ ㊄來客稀なるを言ふ子路が津を問ひしに據れり ㊅農耕に從事する人民

取足蔽牀席。
鄰曲時時來。
抗言談在昔。
奇文共欣賞。疑義相與析。

(一) 南村に素樸の人物多きを聞きしためなり (二) 今始めて南村に遷るとなり (三) 鄰里の人々 (四) 或は詩文を賞し或は疑義を質す

春秋多佳日。
登高賦新詩。
過門更相呼。
有酒斟酌之。
農務各自歸。
閑暇輙相思。
相思則披衣。
言笑無厭時。
此理將不勝。
無爲忽去茲。
衣食當須紀。
力耕不吾欺。
在昔聞南畝。
當年竟未踐。
屢空既有人。

春秋に佳日多く、高に登つて新詩を賦す。門に過りて更に相呼び、酒有れば之を(一)斟酌す。農務に各自ら歸り、閑暇あれば輙ち相思ふ。相思へば則ち衣を(二)披き、言笑して厭く時無し。(三)此の理將に勝へざらんとす、忽ち茲を去ることを爲す無らん。衣食は當に須らく(四)紀すべし、力耕吾を欺かず。

(一) 汲みかはす (二) 農衣を脱して閑居の服に改む (三) この生活は娯楽多きに勝へずとなり (四) 自ら經營する義

癸卯の歲始春、古の田舍を懷ふ二首

在昔南畝を聞きしが、當年竟に未だ踐まざりき。(一)屢空しきは既に人有り、春興は豈自ら免れんや。夙晨に吾が駕を裝ひ、塗を啓いて情已に緬なり。鳥は

銜戢知二何謝一。冥報以相貽。

今日天氣佳。
清吹與二鳴彈一。
感二彼柏下人一。
安得レ不レ爲レ懽。
清歌散二新聲一。
綠酒開二芳顏一。
未レ知明日事。
余襟良已殫。

昔欲レ居二南村一。
非レ爲レト二其宅一。
聞レ多二素心人一。
樂三與數二晨夕一。
懷レ此頗有レ年。
今日從二茲役一。
弊廬何必レ廣。

諸人と共に周家墓柏の下に遊ぶ

今日天氣佳し、清吹(一)と鳴彈とあり。彼の柏下(二)の人を感ぜしむ、安ぞ懽を爲さざるを得ん。清歌は新聲を散じ、綠酒は芳顏を開く。未だ知らず明日の事、余が襟良(三)に已に殫きぬ。

(一) 吹奏彈奏の樂器　(二) 古は庶人の死するや松柏を植ゑて之を標せり　(三) 我が深憂も既に散じ盡したり

居を移す二首

昔は南村に居らんと欲しぬ、其宅をトせんが爲には非ず。素心(一)の人多きを聞き、與に晨夕を數へんことを樂しみき。此を懷うて頗る年有り、今日(二)茲の役に從ふ。弊廬何ぞ廣きを必せん、足ることを牀席を蔽ふに取るのみ。鄰曲(三)時時に來り、言を抗げて在昔を談ず。(四)奇文は共に欣賞し、疑義は相與に析つ。

飢來驅レ我去。
不レ知竟何之。
行行至ニ斯里一。
叩レ門拙ニ言辭一。
主人解ニ余意一。
遺贈副ニ虛期一。
談話終ニ日夕一。
觴至輒傾レ巵。
情欣ニ新知懽一。
言詠遂賦レ詩。
感ニ子漂母惠一。
愧ニ我非ニ韓才一。

巻九

晉詩

陶潛　下

食を乞ふ

(一)饑來つて我を驅りて去る、知らず竟に何んか之くぞ。行き行いて斯の里に至り、門を叩いて言辭拙し。主人余が意を解し、(二)遺贈虛期に副ふ。談話して日夕を終へ、觴至れば輒ち巵を傾く。情は新知の懽を欣び、(三)言詠して遂に詩を賦す。子が(四)漂母の惠に感じ、我が韓の才に非るを愧づ。(五)銜み戢めて何をか謝せんことを知る、冥報以て相貽らん。

(一) 人に饑す我は食のために働けりとなり　(二) 償を償はざる希望に副へて食を與ふ　(三) 歡宴談笑長くして詩を賦するにまで及べり　(四) 漢の韓信が漂母に一飯の恩を受けし故事に據る　(五) 厚恩心に銘せり死後に之を報ぜんとなり

未レ謂事已及。
興言在二茲春一。
飄飄西來風。
悠悠東去雲。
山川千里外。
言笑難レ爲レ因。
才華不レ隱レ世。
江湖多二賤貧一。
脫有二經過便一。
念三來存二故人一。

(一) 二泊を信といふ (二) 去年は南里に居てしばらく君と近鄰となりきとなり (三) 宵晨に作るべし朝暮なり (四) 殷は出仕して陶と趣を殊にするを言ふ (五) 言笑歡談の機會を作り難し (六) よき序もあらば我を忘るゝ勿れとの意

隻雞招近局。
日入室中闇。
荊薪代明燭。
懽來苦夕短。
已復至天旭。

游好非久長。
一遇盡殷勤。
信宿酬清話。
益復知爲親。
去歲家南里。
薄作少時鄰。
負杖肆遊從。
淹留忘宵晨。
語默自殊勢。
亦知當乖分。

至る。

（一）雜草繁茂の地　（二）憂を消すに足るとなり　（三）近隣の人々　（四）灌木の薪なり

殷晉安と別る

殷先に晉の安南府の長史掾と爲り、因りて潯陽に居る。後に太尉參軍と作り、家を移して東下す。此を作つて以て贈る。

游好久長に非ざるも、一たび遇うて殷勤を盡しぬ。信宿（一）清話に酬い、益〻復親爲るを知る。去歲（二）南里に家し、薄か少時の鄰と作る。杖を負うて遊從を肆にし、淹留して宵晨（三）を忘る。語默（四）自ら勢を殊にす、亦知る當に分に乖くべきを。未だ謂はざりき事已に及んで、興言茲の春に在らんとは。飄飄たる西來の風、悠悠たる東去の雲。山川千里の外、言笑（五）因を爲し難し。才華世に隱れず、江湖に賤貧多し。脱し經過の便有らば、來りて故人（六）を存せんことを念へ。

久去二山澤遊一。
浪二莽林野娯一。
試携二子姪輩一。
披レ榛歩二荒墟一。
徘二徊邱壟間一。
依二依昔人居一。
井竈有二遺處一。
桑竹殘二朽株一。
借問采レ薪者。
此人皆焉如。
薪者向レ我言。
死殁無二復餘一。
一世異二朝市一。此語眞不レ虚。人生似二幻化一。終當レ歸二空無一。

久しく山澤の遊を去つて、林野の娯を浪莽(一)にす。試に子姪の輩を携へ、榛(二)を披いて荒墟に歩す。(三)邱壟の間に徘徊して、(四)昔人の居に依依たり。(五)井竈に遺るゝ處有り、桑竹は朽株を殘す。借問す薪を采る者、此の人皆焉んか如く。(六)薪者我に向うて言ふ、死殁して復餘す無し、一世に(七)朝市を異にすと。此の語眞に虚ならず。人生は幻化に似たり、終に當に空無に歸すべきのみ。

(一) 粗略にして顧みず　(二) 亂生せる雜草　(三) 丘陵に同じ　(四) 出仕前の舊友　(五) 井戸やかまどの在り處を云ふ　(六) 薪を采る人　(七) 朝廷に在ると市中に在ると

悵恨獨策還。
崎嶇歷二榛曲一。
山澗清且淺。
遇以濯二我足一。
漉二我新熟酒一。

悵恨して獨り策き還り、崎嶇として(一)榛曲を歷る。山澗は清うして且淺く、(二)遇ゝ以て我が足を濯ぐ。我が新熟の酒を漉し、隻雞もて(三)近局を招く。日入りて室中闇く、(四)荊薪もて明燭に代ふ。懽び來つて夕の短きに苦しめば、已に復天旭に

野外罕二人事一。窮巷寡二輪鞅一。白日掩二荊扉一。虛室絕二塵想一。時復墟曲中。披レ草共來往。相見無二雜言一。但道桑麻長。桑麻日已長。我土日已廣。常恐霜霰至。零落同二草莽一。

野外は人事罕に、窮巷に輪鞅寡し。白日に荊扉を掩ひ、虛室に塵想を絕つ。時に復墟曲の中、草を披いて共に來往す。相見て雜言無く、但道ふ桑麻長ずと。桑麻は日に已に長じ、我が土は日に已に廣し。常に恐らくは霜霰の至つて、零落して草莽に同じうせんことを。

㊀見苦しきちまたに車馬の至ること稀なり　㊁村落なり墟里に同じ　㊂唯農耕の事を謂ふのみとなり　㊃作物の衰殘して雜草の如くならんことをのみ憂ふ

種レ豆南山下。草盛豆苗稀。晨興理二荒穢一。帶レ月荷レ鋤歸。道狹草木長。夕露沾二我衣一。衣沾不レ足レ惜。但使二願無一レ違。

豆を種う南山の下、草盛にして豆苗は稀なり。晨に興きて荒穢を理め、月を帶びて鋤を荷うて歸る。道狹うして草木長じ、夕露は我が衣を沾す。衣の沾ふは惜むに足らず、但願をして違ふ無らしめん。

㊀雜草を拔き耕地を整齊す　㊁夜に入るまで働くなり　㊂豆の長育せんことを願ふ

雖ㇾ無㆓紀歷誌㆒。四時自成ㇾ歲。怡然有㆓餘樂㆒。於ㇾ何勞㆓智慧㆒。奇蹤隱五百。一朝敞㆓神界㆒。淳薄既異ㇾ原。旋復還㆓幽蔽㆒。借問游方士。焉測㆓塵囂外㆒。願言躡㆓輕風㆒。高擧尋㆓吾契㆒。

田園の居に歸る五首

少うして俗韻(一)に適する無く、性本邱山を愛す。誤つて塵網(二)の中に落ち、一去三十年なり。羈鳥は舊林を戀ひ、池魚は故淵を思ふ。荒を開く南野の際、拙(三)を守つて園田に歸る。方宅(四)十餘畝、草屋八九間。楡柳後簷を蔭ひ、桃李堂前に羅る。曖(五)曖たり遠人の村、依依(六)たり墟里の煙。狗は深巷の中に吠え、雞は桑樹の顚に鳴く、戶庭に塵雜無く、虛室に餘閑有り。久しく樊籠(七)の裏に在りて、復自然に返ることを得たり。

(一) 俗世間の風潮 (二) 仕官して束縛を受けしを指す (三) 迂拙なる人格を保守す (四) 四角なる地面 (五) 物に蔽はれて不分明なる貌 (六) もや立てる村落の煙 (七) 仕官の羈束を鳥の籠中に在るに喩ふ

少無ㇾ適㆓俗韻㆒。性本愛㆓邱山㆒。誤落㆓塵網中㆒。一去三十年。羈鳥戀㆓舊林㆒。池魚思㆓故淵㆒。開ㇾ荒南野際。守ㇾ拙歸㆓園田㆒。方宅十餘畝。草屋八九間。楡柳蔭㆓後簷㆒。桃李羅㆓堂前㆒。曖曖遠人村。依依墟里煙。狗吠㆓深巷中㆒。雞鳴㆓桑樹顚㆒。戶庭無㆓塵雜㆒。虛室有㆓餘閑㆒。久在㆓樊籠裏㆒。復得ㇾ返㆓自然㆒。

嬴氏亂二天紀一。
賢者避二其世一。
黃綺之二商山一。
伊人亦云逝。
往迹浸復湮。
來逕遂蕪廢。
相命肆二農耕一。
日入從レ所レ憩。
桑竹垂二餘蔭一。
菽稷隨レ時藝。
春蠶收二長絲一。
秋熟靡二王稅一。
荒路曖交通。
雞犬互鳴吠。
俎豆有二古法一。
衣裳無二新製一。
童孺縱行歌。
班白歡遊詣。
草榮識二節和一。
木衰知二風厲一。

嬴氏(一)天紀を亂り　賢者は其世を避く。(二)黃綺は商山に之く、伊の人亦云に逝く。往迹浸く復湮び、(三)來逕遂に蕪廢す。相命じて農耕を肆ひ、(四)日入りて憩ふ所に從ふ。桑竹は餘蔭を垂れ、菽稷は時に隨つて藝う。春蠶は長絲を收め、秋熟に(五)王稅靡し。荒路曖(六)として交通し、雞犬互に鳴き吠ゆ。(七)俎豆に古法有り、衣裳に新製無し。童孺縱に行歌し、(八)班白歡んで遊詣す。草榮ゆれば節の和なるを識り、木衰へて風の厲きを知る。(九)紀歷の誌無しと雖も、四時自ら歲を成す。怡然として餘樂有り、何に於てか智慧を勞せん。(一〇)奇縱隱るゝこと五百なり、一朝神界を敞く。(一一)淳薄既に源を異にす、旋ち復幽蔽に還る。借問す游方の士、(一二)焉んか塵囂の外を測る。願くば言に輕風を躡んで、高擧して(一三)吾が契を尋ねん。

(一) 秦氏の本性　(二) 商山四皓の夏黃公、綺里季　(三) 來りし道路　(四) 堯の擊壤歌參見　(五) 王室の稅賦無し　(六) 物に蔽はれて暗き貌　(七) 祭器なり一般の食器をもいふ　(八) 髪に白黑相交る五六十才の者　(九) こよみ無き意　(一〇) この不思議なる仙鄉が世に現はれざりしこと大約五百年なり　(一一) 淳樸の風と輕薄の俗と　(一二) 俗世間の人々　(一三) この理想鄉に入らんことを願はずやとなり

て家に還り、酒を設け雞を殺して食を作る。村中は此の人有るを聞き、咸來りて問訊す。自ら云ふらく、先世(八)秦時の亂を避け、妻子邑人を率ゐて、此の絶境に來り、復出でず。遂に外人と間隔せり。問ふ今は是何の世ぞと。乃ち漢有るをも知らず、魏晉に論無し。此の人一一爲に具に聞く所を言へば、皆歎惋(九)せり。餘人各々復延いて其家に至らしめ、皆酒食を出す。停ること數日にして辭し去る。此の中の人語りて云ふ、(一〇)外人の爲に道ふに足らざるなりと。既に出でて其船を得、便ち向の路に扶り、處々に之を誌す。郡下(一一)に及び、太守に詣りて說くこと此の如し。太守卽ち人を遣はし、其に隨つて往かしめ、向に誌しし所を尋ねしに、遂に迷うて復路を得ざりき。南陽の劉子驥は高尚の士なり、之を聞いて欣然として往かんと欲す。未だ果さず、尋いで病んで終りき。後遂に津を問ふ者無し。

武帝の年號　(二) 落花の盛に散亂するなり　(三) 細小なる洞穴　(四) 種まき耕し仕事を營む　(五) 桃花源以外一般世人の服に似たり　(六) 老人小兒　(七) 强制するなり　(八) 先代の人々なり卽ち源人の先祖　(九) 歎息し驚愕す　(一〇) 世人に言ふこと勿れとの意　(一一) 武陵の郡城

皛皛川上平。懷レ役不レ遑レ寐。中宵尚孤征。商歌非二吾事一。依依在二耦耕一。投レ冠旋二舊墟一。不レ爲二好爵一縈。養レ眞衡茅下。庶以レ善自名。

㊀休暇を得るなり　㊁江陵は荆州州治なり　㊂月光の中空に明かなる貌　㊃明かなる貌　㊄職務の事を思ふ　㊅前出寗戚が飯牛歌　㊆二人並び耕せし長沮桀溺が故事　㊇本性を衡門茅屋の下に養はん

桃花源詩并記

晉の太元(二)中、武陵の人、魚を捕へて業と爲すものあり。溪に縁うて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花林に逢ふに、岸を夾むこと數百歩、中に雜樹無く、芳草鮮美にして、落英(一)繽紛たり。漁人甚だ之を異しみ、復前み行いて、其林を窮めんと欲するに、林は水源に盡きて、便ち一山を得たり。山に小口(三)有り、髣髴として光有るが若し。便ち船を捨てゝ口より入るに、初は極めて狹く、纔に人を通ずるのみ。復行くこと數十歩にして、豁然として開朗し、土地平曠、屋舍儼然、良田美池桑竹の屬有り。阡陌交り通じ、雞犬相聞ゆ。其の中に往來種作(四)する男女の衣著は、悉く(五)外人の如く、黄髪垂髫(六)、並に怡然として自ら樂しむ。漁人を見て乃ち大いに驚き、從りて來る所を問ふ。具に之を答ふるに、便ち要し(七)

目倦二川途異一。
心念二山澤居一。
望レ雲慙二高鳥一。
臨レ水愧二遊魚一。
眞想初在レ襟。誰謂二形迹拘一。聊且憑二化遷一。終返二班生廬一。

（一）世事の外に心を存す（二）處士の粗服（三）運命の至る處（四）郷を出て、仕官す（五）山水の間に隱居する事（六）一身の束縛せられて魚鳥の如くなる能はざるを愧づるなり（七）名利に惑はざる本性あり決して今之に迷ふには非ず（八）班固の幽通賦に據る自己の草廬を謂へり

辛丑の歳七月、（一）暇に赴いて江陵に還る、夜行塗中の作

閑居三十載。
遂與二塵事一冥。
詩書敦二宿好一。
林園無二俗情一。
如何捨レ此去。
遙遙至二南荊一。
叩二枻新秋月一。
臨レ流別二友生一。
涼風起將レ夕。
夜景湛二虛明一。
昭昭天宇闊。

閑居三十載、遂に塵事と冥なり。詩書宿好を敦うし、林園に俗情無し。如何ぞ此を捨てて去るや、遙遙として（二）南荊に至る。枻を新秋の月に叩いて、流に臨んで友生と別る。涼風起つて將に夕ならんとし、（三）夜景虛明に湛ふ。昭昭として天宇闊く、（四）皛皛として川上平かなり。（五）役を懷うて寐るに遑あらず、中宵に尚孤り征く。（六）商歌は吾が事に非ず、依依として（七）耦耕に在り。冠を投じて舊墟に旋り、好爵に縶はれず。（八）眞を養ふ衡茅の下、庶くは善を以て自ら名づけん。

了無二一可レ悦。
歷二覽千載書一。
時時見二遺烈一。
高操非レ所レ攀。深得二固窮節一。平津苟不レ由。棲遲詎爲レ拙。寄レ意一言外。茲契誰能別。

空しといふ意に同じ　(五)古人の遺功に感ず　(六)貧に處して平然として心を移さざるなり　(七)漢の公孫弘が平津侯に封ぜられしより仕官の義に用ふ　(八)此の間の消息といふに同じ

始めて鎭軍參軍と爲り、曲阿を經しときの作

弱齡寄二事外一。
委レ懷在二琴書一。
被レ褐欣自得。
屢空常晏如。
時來苟冥會。
宛レ轡憩二通衢一。
投レ策命二晨裝一。
暫與二園田一疎。
眇眇孤舟逝。
綿綿歸思紆。
我行豈不レ遙。
登降千里餘。

弱齡事外に寄せ、(一)懷を委して琴書に在り。(二)褐を被て欣んで自得し、屢〻空しけれども常に晏如たり。時來れば苟に冥會し、(三)轡を宛ねて通衢に憩ふ。(四)策を投じて晨裝を命じ、暫く園田と疎し。眇眇として孤舟逝き、綿綿として歸思紆る。我が行豈遙ならざらんや、登降千里餘なり。目は川途の異なるに倦み、心は山澤(五)の居を念ふ。雲を望んでは高鳥(六)に慚ぢ、水に臨んでは遊魚に愧づ。(七)眞想初より襟に在り、誰か形迹拘はると謂はん。聊か且く化の遷るに憑る、終に班生(八)が廬に返らん。

多謝綺與ㇾ角。
精爽今何如。
紫芝誰復采。
深谷久應ㇾ蕪。
駟馬無ㇾ貰ㇾ患、貧賤有ㇾ交ㇾ娛。淸謠結ニ心曲一、人乖運見ㇾ疎。擁ㇾ懷累代下。言盡意不ㇾ舒。

塞越え難しとなり ㊄ 病氣に罹る ㊅ 漢の四皓が棲みし山なり ㊆ 綺里季と角里先生と共に四皓中の人たり ㊇ 四皓の紫芝歌は前出せり ㊈ 富貴も憂を忘れ難く貧賤却つて樂ありとなり ㊉ 運命に疎隔されて商山に近づき得ずとなり

癸卯十二月中の作、從弟敬遠に與ふ

寢ニ跡衡門下一。
邈與ㇾ世相絕。
顧眄莫ニ誰知一。
荊扉晝長閉。
淒淒歲暮風。
翳翳經ㇾ日雪。
傾ㇾ耳無ニ希聲一。
在ㇾ目皓已潔。
勁氣侵ニ襟袖一。
簞瓢謝ニ屢設一。
蕭索空宇中。

跡を衡門(一)の下に寢め、邈として世と相絕つ。顧眄誰を知ることも莫く、荊扉(二)晝も長く閉ぢたり。淒淒たり歲暮の風、翳翳たり日を經るの雪。耳を傾くるに希聲(三)無く、目に在れば皓として已に潔し。勁氣は襟袖を侵し、簞瓢(四)は屢く設くるを謝す。蕭索たり空宇の中、了に一の悅ぶべき無し。千載の書を歷覽して、時時に遺烈(五)を見る。高操は攀ぢん所に非ず、深く固窮(六)の節を得たり。平津(七)苟も由らず、棲遲も詎ぞ拙なりと爲んや。意を寄す一言の外、茲の契(八)誰か能く別たん。

㊀ 世を遁れて粗末なる冠木門の中に隱る ㊁ 柴のとぼそ ㊂ かすかに微小なる音聲だに無し ㊃ 簞瓢屢々

銜レ觴念二幽人一。千載撫二爾訣一。檢レ素不レ獲レ展。厭厭竟二良月一。

愚生三季後。
慨然念二黃虞一。
得レ知二千載外一。
正賴二古人書一。
賢聖留二餘跡一。
事事在二中都一。
豈忘レ游二心目一。
關河不レ可レ踰。
九域甫已一。
逝將レ理二舟輿一。
聞君當二先邁一。
負レ痾不レ獲レ俱。
路若經二商山一。
爲レ我少躊躇。

羊長史に贈る

左軍羊長史、使を秦川に銜むや、此を作つて之に與へき。

愚生(一)三季の後、慨然として(二)黃虞を念ふ。千載の外を知るを得るは、正に古人の書に賴る。賢聖餘跡を留め、事事(三)中都に在り。豈心目を游ばすを忘れんや、(四)關河は踰ゆべからず。九域甫めて已に一なり、逝いて將に舟輿を理せんとす。聞く君當に先づ邁くべしと、(五)痾を負うて俱にするを獲ず。路若し(六)商山を經ば、我が爲に少しく躊躇せよ。多謝す綺と角と、精爽今何如。紫芝誰か復采らん、深谷久しく應に蕪なるべし。(八)駟馬(七)患を貰ること無く、貧賤娛を交ふること有り。淸謠心曲に結ぼり、(九)人乖いて運は疎んぜらる。懷を擁す累代の下、言盡くれども意は舒びず。

(一) 三代の末也　(二) 黃帝と虞舜と　(三) 中原の都會洛陽長安の類　(四) 往いて餘迹を見んと欲すれども天下大亂

舊穀猶儲レ今。
營レ己良有レ極。
過レ足非レ所レ欽。
春レ秫作二美酒一。
酒熟吾自斟。
弱子戲二我側一。
學レ語未レ成レ音。此事眞復樂。聊用忘二華簪一。遙遙望二白雲一。懷レ古一何深。

未だ音を成さず。此の事眞に復樂し、聊か用て(七)華簪を忘れん。遙遙として白雲を望む、古を懷ふこと一に何ぞ深き。

(一)繁茂の貌 (二)南風をいふ (三)適意の閑事業 (四)知足安分もて目標となす (五)糯粟を曰ふ (六)幼兒なり (七)仕官する義

和澤周二三春一。
清涼素秋節。
露凝無二游氛一。
天高風景澈。
陵岑聳二逸峰一。
遙瞻皆奇絕。
芳菊開レ林耀。
青松冠レ巖列。
懷此貞秀姿。
卓爲二霜下傑一。

(一)和澤三春に周く、清涼なり素秋の節。露凝りて游氛無く、天高うして風景澈む。(二)陵岑逸峯を聳ぐ、遙に瞻るに皆奇絕なり。芳菊は林を開いて耀き、青松は巖に冠して列る。懷ふ此の(三)貞秀の姿、卓として霜下の傑と爲る。觴を銜んで幽人を念ひ、千載爾の訣を撫せん。(四)素を檢すれども展ぶることを獲ず、(五)厭厭として良月を竟ふ。

(一)溫和なる三春既に過ぎ去る (二)丘陵の處々高峰聳えたるなど皆清く見ゆ (三)松を言ひ下句は菊を指す (四)君の來書を點檢すれども予が情を通ずるを得ずとなり (五)安靜の貌

窮居寡二人事一。時忘二四運周一。櫚庭多二落葉一。慨然知二已秋一。新葵鬱二北牖一。嘉穟養二南疇一。今我不レ爲レ樂。知下有二來歲一不上。命レ室携二童弱一。良日登遠遊。

藹藹堂前林。中夏貯二清陰一。凱風因レ時來。回飆開二我襟一。息レ交遊二閑業一。臥起弄二書琴一。園蔬有二餘滋一。

劉柴桑に酬ゆ

窮居して人事を寡くし、時に(一)四運の周るを忘る。櫚庭に落葉多く、慨然として已に秋なるを知る。新葵は北牖に(二)鬱たり、(三)嘉穟は南疇に養はる。今我樂を爲さずんば、來歲有りや不やを知らんや。(四)室に命じて童弱を携へ、良日に登つて遠く遊ばん。

(一)四季の變遷をも打忘る　(二)花りんの茂れる庭　(三)良好なる稻麥の穗　(四)家妻を云ふ

郭主簿に和す二首

(一)藹藹たる堂前の林、中夏に清陰を貯ふ。(二)凱風時に因りて來り、回飆我が襟を開く。交を息めて(三)閑業に遊び、臥起して書琴を弄す。園蔬に餘滋有り、舊穀猶今にも儲ふ。己を營むこと良に極有り、(四)足るを過ぐるは欽ふ所に非ず。(五)秫を舂いて美酒を作り、酒熟すれば吾自ら斟む。(六)弱子我が側に戯れ、語を學んで

山澤久見招。胡事乃躊躇。直爲親舊故。未忍言索居。良辰入奇懷。挈杖還西廬。荒塗無歸人。時時見廢墟。茅茨已就治。新疇復應畬。谷風轉淒薄。春醪解飢劬。弱女雖非男。慰情良勝無。棲棲世中事。歲月共相疎。耕織稱其用。過此奚所須。去去百年外。身名同翳如。

劉柴桑に和す（一）

山澤久しく招かる、胡事ぞ乃ち躊躇する。直親舊爲るが故に、（二）未だ索居を言ふに忍びず。良辰（三）奇懷に入り、杖を挈へて西廬（四）に還る。荒塗に歸る人無く、時時廢墟を見るのみ。茅茨已に治に就き、新疇復應に畬すべし。（五）谷風轉凄薄、春醪飢劬を解く。（六）弱女は男に非ずと雖も、情を慰むるは良に無きに勝れり。（七）棲棲たる世中の事、歲月共に相疎んず。耕織其用に稱ふ、（八）此を過ぐとも奚の須ゐる所ぞ。去り去る百年の外、身名同じく翳如（九）たらん。

（一）字は程之白蓮社を結んで淵明を招く（二）離居の事情を告げて別れ辭する能はず（三）吉日に歸宅の心を起せりとなり（四）淵明の故宅（五）東風に同じ（六）家中の婦女子なり薄酒を喩ふ（七）繁忙なる貌（八）用に足るだけの耕織をつとむれば其以上は無用となり（九）泯滅する貌

肆レ志無二猒際一。
即レ事如二已高一。
何必升二華嵩一。

余閑居して、重九の名を愛す。秋菊は園に盈てるに、而も醪を持するに由靡し。空しく九(九)華を服して、懷(一)を言に寄す。

● 九月九日重陽の節 (二) 九日の菊花なるべし

世短意常多。
斯人樂二久生一。
日月依レ辰至。
擧レ俗愛二其名一。
露凄暄風息。
氣澈天象明。
往燕無二遺影一。
來雁有二餘聲一。
酒能祛二百慮一。
菊爲制二頽齡一。
如何蓬廬士。
空視二時運傾一。
塵爵恥二虛罍一。
寒華徒自榮。
斂レ襟獨閑謠。
緬焉起二深情一。
棲遲固多レ娯。
淹留豈無レ成。

世短くして意は常に多く、斯の人久生を樂しむ。日月辰に依りて至り、俗を擧げて其名を愛す。(一)露凄やかにして暄風(二)息み、氣澈みて天象明かなり。往燕に遺影無く、來雁に餘聲有り。酒は能く百慮を祛き、菊は爲に頽齡を制す。如何ぞ蓬廬の(三)士、空しく時運の傾くを視んや。塵爵に(四)虛罍を恥ぢ、寒華は徒に自ら榮ゆ。襟を斂めて獨り閑に謠ひ、緬焉(五)として深情を起す。棲遲(六)は固に娯多し、淹留は豈成すこと無らんや。

● 長生を欲思するなり (二) 温暖なる風 (三) 蓬戸の裡に閑居する處士 (四) 塵爵を見て家に酒無きを愧づ (五) 懷思の貌 (六) 遊息し隱居するなり下句隱居、無聊にはあらずとなり

物新人惟舊。
弱毫多ㇾ所ㇾ宜し。
情通㆓萬里外㆒。形迹滯㆓江山㆒。君其愛㆓體素㆒。來會在㆓何年㆒。

身體といふに同じ

虛舟縱㆓逸棹㆒。
回復遂無ㇾ窮。
發歲始俯仰。
星紀奄將ㇾ中。
南窗罕㆓悴物㆒。
北林榮且豐。
神淵瀉㆓時雨㆒。
晨色奏㆓景風㆒。
既來孰不ㇾ去。
人理固有ㇾ終。
居常待㆓其盡㆒。
曲ㇾ肱豈傷ㇾ沖。
遷化或夷險。

五月旦の作、戴主簿に和す

(一)虛舟逸棹を縱にして、廻復遂に窮り無し。發歲始めて俯仰、(二)星紀奄に將に中せんとす。南窗に悴物罕に、北林も榮且つ豐なり。神淵は時雨を瀉ぎ、晨色は(三)景風を奏す。既に來る孰か去らざらん、人理固に終ること有り。居常に其盡るを待つ、(四)肱を曲ぐとも豈沖を傷らんや。遷化或は夷險なるも、志を肆にして窊隆無し。事に卽いて已に高きが如し。何ぞ必ずしも(五)華嵩に升らんや。

(一) 乘人無き舟を縱横に漕ぎ廻すとなり (二) 星の次するをいふ (三) 南風をいふ (四) 論語に肱を曲げて之を枕とするすら樂其中に在りと出でたるに據る (五) 華岳と嵩岳と共に五嶽中の高山なり

九日閑居

雖レ微二九重秀一。顧瞻無二匹儔一。提レ壺接二賓侶一。引レ滿更獻酬。未レ知從レ今去。當三復如レ此不。中レ觴縱二遙情一。忘二彼千載憂一。且極二今朝樂一。明日非レ所レ求。

明日は求むる所に非ず。(五)

(一)吾が壽命の愈縮まるを覺ゆとなり　(二)壯健なる時の意　(三)緩く流るゝ瀬　(四)崑崙增城の如く高さには非ずとなり　(五)今日以後の事は如何にても構はずとなり

相知何必舊。傾蓋定二前言一。有レ客賞二我趣一。每每顧二林園一。談諧無二俗調一。所レ說聖人篇。或有二數斗酒一。閑飲自歡然。我實幽居士。無二復東西緣一。

龐參軍に答ふ

相知は何ぞ必ずしも舊ならん。傾蓋(一)にも前言を定む。客有り我が趣を賞し、每每(二)に林園を顧みる。談諧うて俗調無く、說く所は聖人の篇なり。或は數斗の酒有れば、閑飲して自ら歡然たり。我は實に幽居の士のみ、(三)復東西の緣無し。物は新にして人のみ惟舊く、(四)弱毫に宣る所多し。情は萬里の外に通じ、形迹は江山に滯る。君其れ體素(五)を愛せよ、來り會せんこと何の年にか在らん。

(一)寸時の交遊にても定まる意　(二)時々我を訪ひ顧みるとなり　(三)隣家たる關係　(四)柔らかなる毛筆　(五)

て以て翻り飛ぶ。彼の南阜は、名は實に舊けれども復び之せず。乃ち爲に嗟歎す。若し夫の曾城は、旁に依接する無く、獨り中皐に秀でたり。遙に靈山を望んで、嘉名を愛することと有り、欣び對へども足らず、率爾として詩を賦し、日月の遂に往くを悲しみ、吾が年の留らざるを悼む。各ゝ年紀鄕里を疏して、以て其時日を記す。

(一) 東晉の隆安五年 (二) 星子縣に在る山名 (三) 江西の阜陵なり古けれども知るべからざるなり (四) 中野に同じ (五) 欣然として相對するのみにては心滿足せず (六) 書き列ぬ

開レ歲倏五日。
吾生行歸休。
念レ之動二中懷一。
及レ辰爲二茲遊一。
氣和天惟澄。
班レ坐依二遠流一。
弱湍馳二文魴一。
閑谷矯二鳴鷗一。
迥澤散二遊目一。
緬然睇二曾邱一。

歲を開いて倏ち五日、吾が生行ゝ歸休す。之を念へば中懷を動かし、辰に及んで玆の遊を爲す。氣和して天惟澄み、坐を班つて遠流に依る。弱湍には文魴を馳せ、閑谷には鳴鷗を矯うす。迥澤に遊目を散じ、緬然として曾邱を睇る。九重の秀微しと雖も、顧瞻するに匹儔無し。壺を提げて賓旅に接し、觴を引いて更に獻酬す。未だ知らず今より去りて、當に復此の如くなるべきや不やと。觴を中にして遙情を縱にし、彼の千載の憂を忘る。且く今朝の樂を極めん。

依。遇ㇾ雲頡頏。相鳴而歸。遐路誠悠。性愛無ㇾ遺。

㊀ 悄起つて依止せんとす ㊁ 鳥の飛んで上下する貌上るを頡とし下るを頏といふ

翼翼歸鳥。馴ㇾ林徘徊。豈思ㇾ天路。欣ㇾ及二舊棲一。雖ㇾ無二昔侶一。衆聲每諧。日夕氣淸。悠然其懷。

翼翼たる歸鳥、林に馴れて徘徊す。豈天路を思はんや。(一)舊棲に及ぶことを欣ぶ。昔の侶無しと雖も、(二)衆聲每に諧ぐ。(三)日夕にして氣淸く、悠然たる其れ懷あり。

㊀ 第一首求心の意に同じ ㊁ 元の住家に歸るなり ㊂ 衆人の機宜なるに喩ふ

翼翼歸鳥。戢ㇾ羽寒條。遊不ㇾ曠ㇾ林。宿則森標。晨風淸興。好音時交。矰繳奚施。已卷安勞。

翼翼たる歸鳥、羽を寒條に戢む。遊ぶに林を曠しうせず。(一)宿れば則ち森に標す。晨風淸く興り、好音時に交る。(二)矰繳奚ぞ施さん、已に卷めり安ぞ勞せんや。(三)

㊀ 林に遊び梢に宿するをいふ ㊁ いぐるみもて鳥を捕ふることをなさず ㊂ 倦に同じ

斜川に遊ぶ

辛丑の歲正月五日、天氣澄和、風物閑美なり。二三の鄰曲と、同じく斜川に遊ぶ。長(一)流に臨んで、層城を望めば、魴鯉は鱗を躍らして於に將に夕れんとし、水鷗は和に乘じ(二)

里。餐勝如歸。聆善若始。匪惟諧也。屢有良由。載言載眺。以寫我憂。放歡一遇。既醉還休。實欣心期。方從我遊。

(一)地方官として直を行ひ耳目聰明なり (二)美行善言なり

惟諧ふのみに匪ず、屢〻良由有り。載ち言ひ載ち眺て、以て我が憂を寫く。歡を放にして一たび遇ひ、既に醉うて還休む。實に心期を欣ぶ、方に我が遊に從はん。

(一)政化の和ぎ整ふなり (二)除去の意 (三)心中に相許せる朋友

歸鳥四章

翼翼歸鳥。晨去於林。遠之八表。近憩雲岑。和風不洽。翻翮求心。顧儔相鳴。景庇清陰。

翼翼たる歸鳥、晨に林を去つて、遠く八表に之き、近く雲岑に憩ふ。和風洽からず、翮を翻して心を求む。儔を顧みて相鳴き、景は清陰を庇へり。

(一)壯健なる貌 (二)雲に聳ゆる高嶺 (三)歸つて志を求むる義

翼翼歸鳥。載翔載飛。雖不懷遊。見林情

翼翼たる歸鳥、載ち翔り載ち飛ぶ。遊を懷はずと雖も、林を見れば情依り、雲に過へば頡頏し、相鳴いて歸る。遐路誠に悠なり、性愛して遺るゝ無し。

念レ玆在レ玆。尙想二孔伋一。庶其企而。

厲夜生レ子。遽而求レ火。凡百有レ心。奚特二於我一。旣見二其生一。實欲二其可一。人亦有レ言。斯情無レ假。

日居月諸。漸免二於孩一。福不二虛至一。禍亦易レ來。夙興夜寐。願二爾斯才一。爾之不才。亦已焉哉。

有レ客有レ客。爰來爰止。秉レ直司レ聽。于惠二百

企てよ。

一 吉日良時を占卜す　二 儼の德を思ひ考へて行ふべし　三 孔子の孫子思なり求思といふ字によりて書す

(一)厲夜子を生み、遽にして火を求む。凡百心有り、奚ぞ我に特ならんや。既に其生を見れば、實に其可ならんことを欲す。人亦言へる有り、(二)斯の情は假無しと。

一 莊子に見ゆ癩病の人が子を生むや火を取りて己に似ることを恐れ視るとぞ　二 可を欲するの情は世人すべて僞なし

日や月や、(一)漸く孩より免る。福は虛しく至らず、禍も亦來り易し。(二)夙に興き夜に寐ね、爾の斯に才ならんことを願ふ。爾の不才なるは、(三)亦已まんかな。

一 漸次に生長するなり　二 日夜につとめ思ふ義　三 我はまた如何ともする能はずとなり

丁柴桑に酬ゆる二章

客有り客有り、爰に來り爰に止る。(一)直を秉り聽を司り、于に百里を惠む。(二)勝を餐ふこと歸するが如く、善を聆くこと始むるが若し。

孔就道德。樊須是鄙。董樂琴書。田園不履。若能超然。投迹高軌。敢不斂衽。敬讃美德。

嗟予寡陋。瞻望弗及。顧慙華鬢。負影隻立。三千之罪。無後爲急。我誠念哉。呱聞爾泣。

卜云嘉日。占亦良時。名汝曰儼。字汝求思。溫恭朝夕。

孔(一)は道德に就り、樊須を是鄙しめり。董(二)は琴書を樂しんで、田園を履まざりき。若し能く超然として、迹(三)を高軌に投ぜば、敢て衽を斂めて、敬んで美德を讃せざらんや。

(一) 孔子は樊須の農事を學ぶを鄙とせり　(二) 董仲舒は三年まで舍園を窺はざりき　(三) 以上二公の跡に從ふ者は我も亦之を讃美せんとなり

子に命ず

嗟予寡陋、瞻望すれども及ばず(一)。顧みて華鬢(二)に慙ぢ、影を負うて隻り立つ。三千(三)の罪、後無きを急と爲す。我誠に念へるかな、呱として爾の泣くを聲く。

(一) 祖宗に及ばざる也　(二) 壯にして功未だ立たざるを愧づ　(三) 孝經に五刑の屬三千罪不孝より大なるなし云々と見ゆ

卜(一)すれば云に嘉日、占するに亦良時なり。汝に名づけて儼と曰ひ、汝を求思と字(二)す。溫恭朝夕、茲(三)を念うて茲に在れ。尚くは孔伋を想うて、庶くは其れ

熙熙令音。猗猗原陸。卉木繁榮。和風清穆。紛紛士女。趣時競逐。桑婦宵征。農夫野宿。

氣節易過。和澤難久。冀缺攜儷。沮溺結耦。相彼賢達。猶勤隴畝。矧伊衆庶。曳裾拱手。

民生在勤。勤則不匱。宴安自逸。歲暮奚冀。儋石不儲。飢寒交至。顧爾儔列。能不懷愧。

(一)熙熙たる令音、猗猗たる原陸。卉木繁榮し、和風清穆なり。紛紛たる士女、時に(二)趣いて競ひ逐ふ。(三)桑婦は宵征き、農夫は野に宿る。

(一) 和らげる春時の群響と美盛なる原野と　(二) 時節に遲れざらんとす　(三) 二句夜中も亦働らく意

氣節は過ぎ易く、和澤は久しかり難し。(一)冀缺は儷を携へ、(二)沮溺は耦を結ぶ。彼の賢達を相るに、猶隴畝に勤めたり。矧んや伊れ衆庶、(三)裾を曳き手を拱かんや。

(一) 冀州の郤缺其妻と野に耕すに相敬すること賓の如くなりき　(二) 長沮と桀溺と耦耕せり　(三) 怠惰にして爲す所無き義

(一)民生は勤に在り、勤むれば則ち匱しからず。宴安して自ら逸すれば、歲暮に奚をか冀はん。(二)儋石儲へずば、飢寒交至らん。(三)爾の儔列を顧みて、能く愧を懷かざらんや。

(一) 左傳に見えし欒武子が語なり　(二) 僅少の米の貯藏だに無し　(三) 仲間なり農夫としての友人を言ふ

斯晨斯夕。言息二其廬一。花藥分列。林竹翳如。清琴橫レ牀。濁酒半レ壺。黃唐莫レ逮。慨獨在レ予。

悠悠上古。厥初生人。傲然自足。抱レ樸含レ眞。智巧既萌。資待靡レ因。誰其贍レ之。實賴二哲人一。

哲人伊誰。時惟后稷。贍レ之伊何。實曰二播殖一。舜既躬耕。禹亦稼穡。遠若二周典一。八政始レ食。

斯に晨し斯に夕し、言に其廬に息ふ。花藥（一）分列し、林竹翳如（二）たり。淸琴は牀に橫はり、濁酒は壺に半す。（三）黃唐逮ぶ莫く、慨として獨り予に在り。

（一）芍藥の花　（二）地を蔽へる貌　（三）黃帝唐堯の聖代は遠し慨けども訴ふべき處なしとなり

勸農六章

悠悠たる上古、厥の初の生人（一）は、傲然として自ら足り、樸（二）を抱き眞を含む。智巧既に萌せば、（三）資待因る靡し。誰か其れ之を贍はさん、（四）實に哲人に賴らんのみ。

（一）生民なり　（二）自然の狀態をいふ　（三）衣食の資料なり　（四）資料はすべて明智の人に指導せらるゝ意

哲人伊れ誰ぞ、時は惟后稷（一）。之を贍はすとは伊れ何ぞ、實に播殖を曰ふ。舜も既に躬から耕し、禹も亦（二）稼穡せり。遠く周典（三）の若きすら、八政に食に始まれり。

（一）堯の時に農作を掌りし人　（二）播種し收穫す　（三）書經に八政の語あり食貨祀司空司徒司寇賓師是なり

邁邁時運。穆穆良朋。襲我春服。薄言東郊。山滌餘靄。宇曖微霄。有風自南。翼彼新苗。

洋洋平津。乃漱乃濯。邈邈遐景。載欣載矚。稱心而言。人亦易足。揮玆一觴。陶然自樂。

延目中流。悠悠清沂。童冠齊業。閒詠以歸。我愛其靜。寤寐交輝。但恨殊世。邈不可追。

（一）邁邁たる時運、穆穆たる良朋。我が春服を襲ねて、薄か言に東郊にゆく。（二）山は餘靄を滌ぎ、宇は微霄を曖ふ。風有り南よりして、彼の（三）新苗を翼つ。

㈠ 行いて顧覩せざる貌　㈡ 山腹は餘靄に洗はれ原野は雲氣に蔽はる　㈢ 耕種の草木を吹く

（一）洋洋たる平津、乃ち漱ぎ乃ち濯ふ。（二）邈邈たる遐景、載ち欣び載ち矚る。（三）心に稱うて言へば、人は亦足り易し。玆の一觴を揮うて、（四）陶然として自ら樂しむ。

㈠ 平遠なる川のほとり　㈡ 茫漠たる遠景　㈢ 放言して情を暢ばしむるなり　㈣ 心氣の暢びるなり

目を中流に延けば、悠悠たり清沂。（一）（二）童冠は業を齊しうし、閒に詠じて以て歸る。我は其靜を愛し、（三）寤寐に輝を交ふ。但恨むらくは世を殊にして、邈として追ふべからず。

㈠ 淸らかなる沂水　㈡ 少壯年の弟子なり論語曾晳が故事による　㈢ 夢中にも曾氏と神靈相照すとなり

言懷レ人。舟車靡レ從。

東園之樹。枝條再榮。競用二新好一。以招二余情一。人亦有レ言。日月于征。安得三促レ席。說二彼平生一。

翩翩飛鳥。息二我庭柯一。斂レ翮閒止。好聲相和。豈無二他人一。念レ子實多。願言不レ獲。抱レ恨如何。

東園の樹、枝條(一)再び榮ゆ。競うて(二)新好を用ひ、以て余が情を招く。人亦言ふ有り、(三)日月于に征くと。安んぞ(四)席を促して、彼の平生を說くを得んや。

(一)再び春に遭ふ　(二)春花予を慰むとなり　(三)光陰過ぎ易き哉　(四)友と對生せんは何時なるべきかの意

翩翩たる飛鳥、我が(一)庭柯に息ふ。翮を斂めて閒に止り、好聲もて相和す。(二)豈他人無からんや、子を念ふこと實に多し。願言すれども獲ず、(三)恨を抱くこと如何。

(一)庭樹の枝　(二)他の世人は多けれども予は君をのみ思ふとなり　(三)懷恨無窮なりとの意

時運四章

時運は暮春に遊ぶなり。春服既に成り、景物斯に和ぐ。影に偶んで獨り遊ぶに、欣慨心に交はる。

停雲四章

停雲は親友を思ふなり、罇に新醪を湛へ、園に初榮を列し、願へども言に從はず、(一)歎息して襟に彌つ。

(一)親友の來りて朝夕を共にする者なし

靄靄停雲。濛濛時雨。八表同昏。平路伊阻。靜寄二東軒一。春醪獨撫。良朋幽邈。搔レ首延佇。

(一)靄靄たる停雲、濛濛たる時雨。(二)八表同じく昏れ、平路伊れ阻る。靜に東軒に寄り、春醪獨り撫す。(三)良朋幽邈、首を搔いて延佇す。

(一)雲の集る貌　(二)八方皆雨の爲に昏し　(三)良友の消息を知り難く意を決して留り佇む

停雲靄靄。時雨濛濛。八表同昏。平陸成レ江。有レ酒有レ酒。閒飲二東窗一。願

停雲靄靄たり、時雨濛濛たり。八表同じく昏れ、(一)平陸江を成す。酒有り酒有り、閒に東窗に飲む。(二)願言して人を懷へども、舟車の從ふもの靡し。

(一)平野も川と成る　(二)友人を思念すれども來る者無し

仰視㆓碧天際㆒。
俯瞰㆓淥水濱㆒。
寥闃無㆓涯觀㆒。
寓㆑目理自陳。
大矣造化工。
萬殊莫㆑不㆑均。
羣籟雖㆓參差㆒。
適㆑我無㆑非㆑新。

(一)蘭亭集の序文なり古文眞寶に出づ　(一)此の本詩を見よ

仰いで碧天の際を視、俯して淥(一)水の濱を瞰る。(二)寥闃として涯觀無く、目を寓すれば理自ら陳す。大なるかな造化の工、(三)萬殊均しからざる莫し。(四)羣籟參差たりと雖も、我に適して新に非るは無し。

(一)綠水に同じ　(二)靜寂渺茫の貌　(三)萬變無窮の事物を謂ふ　(四)多くの物音入り亂るれども我より之を聞くに皆珍しとなり

陶潛

淵明は名臣の後を以て、易代(一)の時に際し、言はんと欲するも言ひ難く、時々寄託せり。獨り荊軻を詠ぜし一章のみならざるなり。六朝(二)第一流の人物なり。其の詩の千古に獨歩せざる者有らんや。鍾嶸が、其の原の應璩に出でしを謂へるは、何の議論をか成さんや。清遠間放は是其の本色にして、其中自ら一段淵深朴茂、幾及すべからざる處有り。唐人、(三)王・儲・韋・柳諸公、焉を學んで、其の性の近き所を得たり。

(一)晉と宋とのかはり目　(二)魏晉以下隋に至る間を謂ふ　(三)王維・儲光羲・韋應物・柳宗元

寒興御二紈素一。佳人理二衣衾一。冬夜淸且永。皓月照二堂陰一。纖手疊二輕素一。朗杵叩二鳴砧一。淸風流二繁節一。廻飈灑二微吟一。嗟二此嘉運速一。悼二彼幽滯心一。二物感二余懷一。豈但聲與レ音。

夜擣衣を聽く

寒興つて紈素を御し、佳人衣衾を理む。冬夜淸うして且永く、皓月堂陰を照す。纖手もて輕素(一)を疊み、朗杵もて(二)鳴砧を叩く。淸風繁節を流し、廻飈微吟を灑ぐ。此の嘉運の速なるを嗟き、彼の幽滯の心を悼む。二物余が懷を感ぜしむ、豈但(三)聲と音とのみならんや。

(一)白絹の被服　(二)明淨の槌もて砧盤を叩く　(三)時節の速に過ぐるを歎き沈滯愁愁の心情を起すとなり

王羲之

蘭亭集の詩

獨り序(一)の佳なるのみならず、詩も亦淸超越俗。(二)目を寓すれば理自ら陳し、我に適して新に非るは無しとは、道を學んで得ること有る者に非ずんば、言ふこと能はざるなり。序は人人の爲に誦述せらる、故に錄せず。

姮娥揚二妙音一。洪崖頷二其頤一。升降隨二長煙一。飄颻戲二九垓一。奇齡邁二五龍一。千歳方嬰孩。燕昭無二靈氣一。漢武非二僊才一。

㊀國語に爰居といへるに同じ鳥名なり　㊁以下洪崖に至るまで皆神仙なり今は略に從ふ　㊂九天の上の意に用ひたり　㊃長壽なること古の五龍皇にも過ぐとなり五龍は父子四人皆神仙なりき　㊄燕の昭王人をして蓬萊を求めしめ漢武帝も亦仙を希ひたり

晦朔如二循環一。月盈已復魄。蓐收清二西陸一。朱羲將レ由レ白。寒露拂二陵苕一。女蘿辭二松柏一。蕣榮不レ終レ朝。蜉蝣豈見レ夕。圓邱有二奇草一。鍾山出二靈液一。王孫列二八珍一。安期錬二五石一。長揖當塗人。去來山林客。

(一)晦朔は循環の如く、月盈ちて已に復魄あり。(二)蓐收西陸を清め、(三)朱羲將に白に由らんとす。(四)寒露陵苕を拂ひ、女蘿松柏を辭す。蕣の榮は朝を終へず、蜉蝣は豈夕を見んや。(五)圓邱に奇草有り、鍾山には靈液を出す。(六)王孫は八珍を列ね、安期は五石を錬る。長揖す當塗の人、去らんいざ山林の客。

㊀月の始と終との變化　㊁月の白き影なり月の十六日には魄生ず　㊂孟秋の神名　㊃日輪なり秋分に日月道を同じうするを謂ふ　㊄不死樹有りとぞ鍾山は神草靈液及び千歳の芝草を出すといふ　㊅貴公子は美味を食するも却つて壽を縮め安期生は五石を錬つて壽を延ばせり

曹毘

迴レ日向二三舍一。臨レ川哀二年邁一。撫レ心獨悲咤。
逸翮思レ拂レ霄。迅足羨二遠游一。清源無二增瀾一。安得レ運二吞舟一。珪璋雖二特達一。明月難二闇投一。潛穎怨二青陽一。陵苕哀二素秋一。悲來惻二丹心一。零淚緣レ纓流。

逸翮霄を拂はんことを思ひ、迅足遠く遊ぶを羨む。(一)清源に增瀾無し、安ぞ吞舟を運らすを得ん。(二)珪璋は特り達すと雖も、明月は闇に投じ難し。(三)潛穎青陽を怨み、陵苕素秋を哀しむ。悲來れば丹心を惻ましめ、零淚は纓に緣りて流る。

(一) 吞舟の魚は小溪に動かず塵俗は仙を容れ得ざるに喩ふ (二) 美玉なり仙に喩ふ (三) 隱れたる稻穗は春の神の去ること晩きを怨み凌霄花は秋の至るを悲しむとなり

雜縣寓二魯門一。風暖將レ爲レ災。吞舟涌二海底一。高浪駕二蓬萊一。神仙排レ雲出。但見二金銀臺一。陵陽挹二丹溜一。容成揮二玉杯一。

(一)雜縣の魯門に寓するや、風暖にして將に災を爲さんとす。吞舟海底に涌き、高浪蓬萊に駕す。神仙雲を排して出で、但金銀臺を見る。(二)陵陽は丹溜を挹み、容成は玉杯を揮ふ。姮娥妙音を揚げ、洪崖其の頤を頷す。升降して長煙に隨ひ、飄颻として(三)九垓に戲る。(四)奇齡は五龍に邁ぎ、千歲方に嬰孩なり。(五)燕昭は靈氣無く、漢武は僊才に非ず。

蒙籠蓋二一山一。
中有二冥寂士一。
靜嘯撫二清絃一。
放レ情凌二霄外一。
嚼レ蘂挹二飛泉一。
赤松臨二上遊一。
駕レ鴻乘二紫烟一。
左挹二浮邱袖一。
右拍二洪崖肩一。借問蜉蝣輩。寧知二龜鶴年一。

ぎ、蘂を嚼うて飛泉を挹む。(四)赤松は上遊に臨み、鴻に駕して紫烟に乘ず。左に(五)浮邱が袖を挹り、右に(六)洪崖が肩を拍つ。借問す(七)蜉蝣の輩、寧ぞ龜鶴の年を知らんや。

(一)かはせみが芳草秀蘭に遊ぶなり　(二)茂り蔽ふ貌　(三)霄空の外に遊ぶ　(四)上代の仙人赤松子　(五)列仙傳に見えたる神仙　(六)神仙傳に洪崖先生の事蹟見ゆ　(七)かげろふの如き人類一般

六龍安可レ頓。
運流有二代謝一。
時變感二人思一。
已秋復願レ夏。
淮海變二微禽一。
吾生獨不レ化。
雖レ欲レ騰二丹谿一。
雲螭非二我駕一。
愧無二魯陽德。

(一)六龍安ぞ頓むべけん、運流に代謝有り。時變りて人の思に感じ、已に秋にして復夏を願ふ。(二)淮海は微禽を變ふ、吾が生のみ獨り化せず。丹谿に騰らんと欲すと雖も、(三)雲螭は我が駕に非ず。愧づらくは(四)魯陽の德、日を廻して三舍を向はしむる無きを。川に臨んで年の邁くを哀しみ、心を撫して獨り悲咤す。

(一)日の運る車なり光陰停むべからずとなり　(二)雀は海に入りて蛤となり雉は淮に入りて蜃となるとぞ　(三)風雲螭龍共に昇天の御たり　(四)魯陽公が戈を擧げて落日を反せし事淮南子に見えたり

進則保二龍見一。
退爲二觸レ藩羝一。
高蹈風塵外。
長揖謝二夷齊一。

青溪千餘仞。
中有二一道士一。
雲生二梁棟間一。
風出二窗戸裏一。
借問此何誰。
云是鬼谷子。
翹レ迹企二潁陽一。
臨レ河思二洗耳一。
閶闔西南來。
潛波渙鱗起。
靈妃顧レ我笑。粲然啓二玉齒一。蹇修時不レ存。要レ之將誰使。

(六) 莊周嘗て漆園の吏となれり　(七) 老萊子の妻は萊子の進仕を屑とせずして去りし人なり　(八) 易に出でたる語なり進退に窮するを謂ふ　(九) 伯夷叔齊

青溪(一)千餘仞、中に一道士有り。雲は梁棟の間に生じ、風は窗戸の裏より出づ。借問す此れ何の誰ぞ、云ふ是鬼谷子(二)。迹を翹げて潁陽(三)を企ひ、河に臨んで洗耳を思ふ。閶闔(四)西南より來り、潛波渙として鱗のごとく起る。靈妃(五)我を顧みて笑ひ、粲然として玉齒を啓く。蹇修(六)時に存せず、之を要するに將誰をか使めん。

(一) 臨沮縣に在る山名　(二) 隱者の通號なり戰國の人のみを言ふに非ず　(三) 許由が耳を潁川に洗ひし故事による　(四) 西南風をいふ　(五) 江中の虚妃なり水神なりとぞ　(六) 楚辭に見ゆ伏羲氏の臣なり轉じて媒介者の意に用ふ

翡翠戲二蘭苕一。
容色更相鮮。
綠蘿結二高林一。

翡翠蘭苕に戲れ、容色更に相鮮かなり。綠蘿は高林に結び、蒙籠(一)として一山を蓋ふ。中に冥寂の士有り、靜嘯(二)して清絃を撫す。情を放にして霄外を淩

岑。言以レ忘得。
交以レ瀞成。匪レ
同伊和。惟我
與レ生。爾神余
契。我懷子情。
携レ手一豁。安
知二塵冥一。

す。爾の神は余の契、我が懷は子が情なり。手を携へて一たび豁(三)がんに、安んぞ塵冥を知らんや。

(一) 苔は異るも同山に生ずとなり　(二) 雷同せずして眞に和合するなり　(三) 歡談して心情を披瀝す

遊仙詩

京華遊俠窟。
山林隱遯棲。
朱門何足レ榮。
未レ若レ託二蓬萊一。
臨レ源挹二清波一。
陵レ岡掇二丹荑一。
靈谿可二潛盤一。
安事レ登二雲梯一。
漆園有二傲吏一。
萊氏有二逸妻一。

遊仙詩は、本托するところ有りて(一)坎壈を言ふなり。詠懷は其の本旨なり。鍾嶸が其の列仙の趣を少くを貶せるは、謬れり。

京華は遊俠の窟、山林は隱遯の棲。(二)朱門何ぞ榮とするに足らん。未だ蓬萊(三)に託せんには若かじ。源に臨んで清波を挹み、岡を淩いで丹荑(四)を掇る。靈谿(五)は潛に盤しむべし。安ぞ雲梯に登るを事とせんや、漆園(六)に傲吏有り、萊氏(七)に逸妻有り。進んでは則ち龍見を保てども、退いては藩(八)に觸るゝの羝と爲る。高蹈す風塵の外、長揖して夷齊(九)に謝す。

(一) 志を得ざるなり　(二) 權貴の家　(三) 神仙の棲む東海中の山名　(四) 一種の芝草　(五) 荊州に在りといふ谿名

下泉游二冽清一。
曠野增二遼索一。
登レ高眺二遐荒一。
極望無二崖鄂一。
形變隨レ時化。
神感因レ物作。
澹乎至人心。
恬然存二玄漠一。

青陽二三月。
柳青桃復紅。
車馬不二相識一。
音落二黄埃中一。

人亦有レ言。松
竹有レ林。及二爾
臭味一。異苔同レ

㈠歳月の移り行く貌なり圓象方儀は天地を指す　㈡食ふべき雜草　㈢北邙山と黄河と　㈣伊水と洛水と　㈤落葉の聲なり蘂は花の垂るゝ貌　㈥水は清冽野は空漠たりとなり　㈦際限といふに同じ

謝尙

大道曲

樂府廣題に曰く、尙が鎭西將軍と爲るや、嘗て㈠紫羅襦を着て胡牀に據り、市中の佛國門樓上に在りて琵琶を彈じ、大道の曲を作る。市人㈡三公爲るを知らざりき。

㈢青陽二三月、柳青くして桃復紅なり。車馬相識らず、㈣音は黄埃の中に落つ。

㈠紫色の薄絹の肌着　㈡大臣といふに同じ　㈢陽春に同じ　㈣音響すべて黄塵の中に在りとなり

郭璞

温嶠に贈る

人亦言ふ有り、松竹に林有りと。爾の臭味に及んでは、㈠異苔も岑を同じうす。言は忘を以て得られ、交は澹を以て成る。㈡同に匪ずして伊れ和、惟我のみ生を與に

義隨二周旋一積。豈謂鄕曲譽。謬充二本州役一。乖離令二我感一。悲欣使二情惕一。理以二精神一通。匪レ曰二形骸隔一。妙詩申二篤好一。清義貫二幽頤一。恨無三隨侯珠一以酬二荊文璧一。

友なり子惻を指す　㈥　友情なり　㈦　飛狐と共に西北邊境の地名　㈧　無沙汰によりて、恩情益々感を深うす　㈨　小名譽の予が故鄕の重任を受くとなり　㈩　君の來詩に懇惻を述べて深奥なる道理を道破せりとなり　㈪　詩美ならず君の來詩に酬ゆるに足らずとなり

亹亹圓象運。
悠悠方儀廓。
忽忽歲云暮。
游レ原采二蕭藿一。
北踰二芒與レ河一。
南臨二伊與レ洛一。
凝霜霑二蔓草一。
悲風振二林薄一。
摵摵芳葉零。
蕤蕤芬華落。

時與詩

亹亹として圓象運り、悠悠として方儀廓かなり。忽忽として歲云に暮る、原に游んで(二)蕭藿を采る。北のかた(三)芒と河とを踰え、南のかた(四)伊と洛とに臨む。凝霜は蔓草を霑し、悲風は林薄に振ふ。(五)摵摵として芳葉零ち、蕤蕤として芬華落つ。下(六)泉は洌清を激し、曠野は遼索を增す。高に登つて遐荒を眺め、極め望むに崖(七)堮無し。形變は時に隨つて化し、神感は物に因りて作る。澹乎たる至人の心、恬然として玄漠に存す。

崇臺非二一幹一。
珍裘非二一腋一。
多士成二大業一。
羣賢濟二弘績一。
適蒙二時來會一。
聊齊二朝彥跡一。
顧二此腹背羽一。
愧二彼排虛翮一。
寄レ身蔭二四岳一。
託レ好憑二三益一。
傾レ蓋雖レ終レ朝。
大分邁二疇昔一。
在レ危每同レ險。
處レ安不レ異レ易。
俱涉二晉昌艱一。
共更二飛狐厄一。
恩由二契濶一生。

魏子悌に答ふ

崇臺は一幹に非ず、珍裘は一腋に非ず。多士は大業を成し、羣賢は弘績を濟す。(一)適 時來の會を蒙り、(二)聊か朝彥の跡に齊しうす。此の(三)腹背の羽を顧みて、彼の排虛の翮を愧づ。身を寄せて(四)四岳に蔭はれ、好を託して(五)三益に憑る。蓋を傾けて朝を終ふと雖も、(六)大分は疇昔に邁ぐ。危に在りては每に險を同じうし、安に處ては易を異にせず、俱に(七)晉昌の艱を涉り、共に飛狐の厄を更る。恩は(八)契濶に由りて生じ、義は周旋に隨つて積む。豈謂はんや(九)鄉曲の譽、謬つて本州の役に充てられんとは、乖離は我をして感ぜしめ、悲欣は情をして惕れしむ。理は精神を以て通ず、形骸隔ると曰ふには匪ず。(一〇)妙詩に篤好を申べ、淸義は幽頤を貫く。恨むらくは(一一)隋侯の珠の、以て荆文の璧に酬ゆる無きことを。

(一) 高き家は一木にて成るに非ず (二) 子悌の如き君子と並び立つとなり (三) 無能の意韓詩外傳に鴻鵠の一擧千里なるは六翮を恃むのみ腹背の羽は多くとも少くとも飛に大害なき旨見えたり (四) 劉琨を指す (五) 論語の三益

烈烈悲風起。
泠泠澗水流。
揮ㇾ手長相謝。
哽咽不ㇾ能ㇾ言。
浮雲爲ㇾ我結。
歸鳥爲ㇾ我旋。
去ㇾ家日已遠。
安知ニ存與ㇾ亡。
慷ニ慨窮林中ー。
抱ㇾ膝獨摧藏。
麋鹿游ニ我前ー。
猿猴戲ニ我側ー。
資糧既乏盡。
薇蕨安可ㇾ食。
攬ㇾ轡命ニ徒侶ー。吟ニ嘯絶巖中ー。君子道微矣。夫子故有ㇾ窮。惟昔李騫ㇾ期。寄在ニ匈奴庭ー。忠信反獲ㇾ罪。漢武不ㇾ見ㇾ明。我欲ㇾ竟ニ此曲ー。此曲悲且長。棄置勿ニ重陳ー。重陳令ニ心傷ー。

猿猴は我が側に戯る。資糧既に乏盡す、薇蕨安ぞ食ふべけんや。轡を攬りて徒侶に命じ、絶巖の中に吟嘯す。(九)君子の道微なり、夫子も故窮すること有り、惟ふ昔李は期を騫ち、寄りて匈奴の庭に在るに、忠信反つて罪を獲て、(一〇)(一一)漢武に明されざりき。我此の曲を竟へんと欲するに、此の曲悲にして且長し。棄置して重ねて陳すること勿れ、重ねて陳せば心をして傷ましめん。

(一)洛陽城の北門なり　(二)丹水の發源地名　(三)古良弓の名　(四)名劍なり龍泉ともいふ　(五)空に高く聳えたる軒のうち　(六)悲歎して氣の結ぼるゝなり　(七)奥深き林の中　(八)心憂愁するなり　(九)正人君子の道は不遇なること多しとの意　(一〇)李陵が期を愆つて匈奴に降りしを指す　(一一)漢の武帝は終に李陵の眞精神を知る能はざりき

盧諶

宣尼悲獲麟。
西狩涕孔丘。
功業未及建。
夕陽忽西流。
時哉不吾與。去乎若雲浮。朱實隕勁風。繁英落素秋。狹路傾華蓋。駭駟摧雙輈。何意百鍊
剛。化爲繞指柔。

褒以下の五人に任じたり（七）齊の桓公は己の袖を射たる管仲を相とせり（八）論語に見えたる孔子の語なり（九）時勢に通達する義（一〇）孔子が麟に泣きしをいふ（一一）歳月我を待たざる義（一二）路狹くして車敗れ馬驚いて轅砕くとなり自家の敗戰を悲恨するなり

扶風歌

朝發廣莫門。
暮宿丹水山。
左手彎繁弱。
右手揮龍淵。
顧瞻望宮闕。
俯仰御飛軒。
據鞍長歎息。
淚下如流泉。
繫馬長松下。
發鞍高岳頭。

朝に廣莫（一）の門を發し、暮に丹水山（二）に宿す。左手に繁弱（三）を彎き、右手に龍淵（四）を揮ふ。顧瞻して宮闕を望み、俯仰して飛軒（五）に御す。鞍に據りて長く歎息し、涙下ること流泉の如し。馬を繫ぐ長松の下、鞍を發す高岳の頭。烈烈として悲風起り、冷冷として澗水流る。手を揮つて長く相謝し、哽咽（六）して言ふこと能はず。浮雲は我が爲に結び、歸鳥は我が爲に旋る。家を去つて日已に遠く、安ぞ存と亡とを知らんや。窮林（七）の中に慷慨して、膝を抱いて獨り摧藏（八）す。麋鹿は我が前に遊び

握中有玄璧。
本自荊山璆。
惟彼太公望。
昔在渭濱叟。
鄧生何感激。
千里來相求。
白登幸曲逆。
鴻門賴留侯。
重耳任五賢。
小白相射鉤。
苟能隆二伯。
安問黨與讐。
中夜撫枕歎。
相與數子遊。
吾衰久矣夫。
何其不夢周。
誰云聖達節。
知命故不憂。

重ねて盧諶に贈る

(一)握中に玄璧有り、本自ら荊山の璆なり。惟ふ彼の太公望、(二)昔在は渭濱の叟なりき。(三)鄧生は何ぞ感激せる、千里來りて相求む。(四)白登は曲逆を幸とし、(五)鴻門は留侯に賴る。(六)重耳は五賢に任じ、(七)小白は射鉤を相とす。苟も能く二伯を隆にせば、安ぞ黨と讐とを問はん。中夜に枕を撫して歎じ、相與に數子と遊ぶ。(八)吾が衰へたること久しいかな、何ぞ其れ周を夢みざる。誰か云ふ聖は(九)節に達す、命を知るが故に憂へずと。(一〇)宣尼は獲麟を悲しみ、西狩は孔邱を涕かしむ。功業未だ建つに及ばず、夕陽忽ち西に流る。(一一)時哉吾と與にせず、去ること雲の浮ぶが若し。朱實は勁風に隕ち、繁英は素秋に落つ。(一二)狹路に華蓋を傾け、駭駟は雙輈を摧く。何ぞ意はん百錬の剛、化して指を繞るの柔と爲らんとは。

(一)掌中の美玉は即ち盧を意味す　(二)周の佐命の臣呂尚　(三)後漢の鄧禹は遂に河を渡りて光武に謁しぬ　(四)漢高は曲逆侯陳平の謀によりて匈奴の難を免る　(五)張良が鴻門に高祖を脱せしめし故事　(六)晉の文公は狐偃趙

羽一。翰撫二西翼一。我之。敬レ之、廢レ歡輟レ職。

音以レ賞奏。味以レ殊珍。文以明レ言。言以暢レ神。之子之往。四美不レ臻。澄醪覆レ觴。絲竹生レ塵。素卷莫レ啓。幄無二談賓一。既孤二我德一。又闕二我鄰一。

音は賞を以て奏し、味は殊を以て珍とせらる。文は以て言を明にし、言は以て神を暢ぶ。㈠之の子之往く、㈡四美臻らず。澄醪は觴を覆ひ、絲竹は塵を生ず。素卷啓くこと莫く、幄に談賓無し。㈢既に我が德を孤にし、又我が鄰を闕く。（其七）

㈠賞せらるゝが爲に演奏す　㈡盧去りて音味文言皆至らず　㈢我が孤獨となるをいふ

光光段生。出レ谷遷レ喬。資レ忠履レ信。武烈文昭。旃弓騂騂。輿馬翹翹。乃奮二長縻一。是縶是鑣。何以贈レ子。竭二心公朝一。何以敍レ懷。引レ領長謠。

光光たる段生、㈠谷を出でて喬に遷り、㈡忠に資り信を履み、武烈に文昭なり。旃弓㈢は騂騂たり。輿馬は翹翹たり。乃ち長縻㈣を奮うて、是縶し是鑣す。何を以てか子に贈らん、心を公朝㈤に竭せ。何を以てか懷を叙せん、領を引いて長く謠はん。（其八）

㈠段氏を指す　㈡幽谷を出でゝ喬木に遷るとなり　㈢儀仗に謂ふ旃又旌に作る　㈣長きさづな　㈤晉室なり

族偕覆。三孽竝ㇾ根。長慙ニ舊孤一。永負ニ寃魂一。亭亭孤幹。獨生無ㇾ伴。綠葉繁縟。柔條修竿。朝采ニ爾實一。夕捋ニ爾竿一。竿翠豐ㇾ尋。逸珠盈ㇾ椀。實消ニ我憂一。憂急用緩。逝將ㇾ去乎。庭虛情滿。

虛滿伊何。蘭桂移植。茂ニ彼春林一。瘁ニ此秋棘一。有ㇾ鳥翩飛。不ㇾ遑ニ休息一。匪ㇾ桐不ㇾ棲。匪ㇾ竹不ㇾ食。永戢ニ東

㈠ 和らぎて美好なる貌下も同じ　㈡ 劉氏と盧氏となり　㈢ 琨の兄の子等を指す　㈣ 我不才にして姪子を扶けて復仇せしめ能はざるを愧づとなり

亭亭たる孤幹(一)、獨生して伴無し。綠葉繁縟にして、柔條修竿(二)なり。朝に爾の實を采り、夕に爾の竿を捋るに、竿翠(三)は尋に豐に、逸珠は椀に盈てり。實に我が憂を消し、憂急なるも用て緩し。逝いて(四)將に去らんとするか、庭虛しくして情滿つ。(其五)

㈠ 桐を指す盧の才の美に喩ふ　㈡ 竹なり亦盧に喩ふ　㈢ 竹竿は八尺を越ゆ　㈣ 盧が將に我を去つて段日磾に從はんとするを恨む意

虛滿(一)は伊れ何ぞ、蘭桂移植せり。彼の春林を茂くし、此の秋棘(二)を瘁ましむ。鳥有り翩り翻り飛んで、休息に遑あらず。桐に匪ざれば棲まず、竹に匪ざれば食はず。永(三)く東羽を戢め、翰んで西翼を撫す。我之を敬しみ、歡を廢して職(四)を輟む。(其六)

㈠ 庭虛憤滿の句にとる　㈡ 自ら喩ふ　㈢ 盧が幷州を去つて幽州に赴く意　㈣ 職務を荒廢す

冬發。如ニ彼龜玉一。韞レ櫝毀レ諸。芻狗之談。其最得乎。

㈣ 老子に出づ人を草製の狗の如く取扱ふとなり

沓余軟弱。弗レ克ニ負荷一。愆釁仍彰。榮寵屢加。威之不レ建。禍延凶播。忠隕ニ于國一。孝愆ニ于家一。斯罪之積。如ニ彼山河一。斯釁之深。終莫ニ能磨一。

沓余軟弱にして、㈠負荷に克へず。愆釁仍に彰はれ、榮寵屢〻加はる。㈡威の建たざるや、禍延き凶播く。忠は國に隕ち、孝は家に愆つ。斯の罪の積るや、彼の山河の如く、斯の釁の深きや、終に能く㈢磨すること莫し。(其三)

㈠ 國事の責任を負ひ荷ふ力無しとなり　㈡ 我が威勢の衰ふるが爲に禍害は一族にまで及びたり　㈢ 消え失すること無し

郁穆舊姻。嬿婉新婚。褰レ糧攜レ弱。匍匐星奔。未レ輟ニ爾駕一。已隳ニ我門一。二

㈠郁穆たる舊姻、嬿婉たる新婚。糧を褰み弱を攜へ、匍匐して星のごとく奔る。未だ爾の駕を輟めざるに、已に我が門を隳れり。㈡二族偕に覆へるに、㈢三孽根を並べたり。㈣長く舊孤に慙ぢ、永く寃魂に負く。(其四)

厄運初遘。陽爻在六。乾象棟傾。坤儀舟覆。横厲糾紛。羣妖競逐。火燎神州。洪流華域。彼黍離離。彼稷育育。哀我皇晉。痛心在目。
天地無心。萬物同塗。禍因莫驗。福善則虛。逆有全邑。義無完都。英蕊夏落。毒卉

叛亂に困せる意なり　(五)蕭行子然たるにいふ　(六)熱病などの病患　(七)楚の卞知の得し璧はたゞ楚王の掌にのみあるべからず　(八)隋侯が齊に往くときに得たる大珠なり以上盧の大才に喩ふ　(九)別離にいふ　(一〇)老儒莊周なり前文が應ず　(一一)阮籍の字　(一二)駿馬が吳の城北の坂にて轅に凭りて良き伯樂を待ちたりといふ故事による　(一三)元規の大夫にして後に秦に仕へし人　(一四)君は今適當の主人知己に遇へり　(一五)一度の返書を望む

厄運初めて遘ひ、陽爻六に在り。(一)乾象棟傾き、坤儀舟覆る。(二)横厲糾紛して、羣妖競逐す。火もて神州を燎き、(三)洪もて華域を流す。彼の(四)黍は離離たり、彼の稷は育育たり。哀し我が皇晉、心を痛ましめて目に在り。(其一)

(一)易の乾の上九なり貴高にして厄あるを示す　(二)暴狂して亂れみだる　(三)洪水の略言　(四)晉室衰亡して京師も田圃となれる意

天地心無く、萬物塗を同じうす。禍因は驗莫く、福善は則ち虛し。(一)逆も邑を全うする有り、義も都を完うする無し。(二)英蕊夏落ち、毒卉冬も發く。彼の(三)龜玉の如く、櫝に韞めるも諸を毀る。(四)芻狗の談は、其れ最も得たるか。(其二)

(一)逆亂にして釆邑を保つ者あり　(二)下二句時ならざるを言ふ　(三)龜甲と玉とを箱に藏するなり論語に見ゆ

りてか生じ、哀樂は何に由つてか至るかを怪しみき。自頃(四)輈張、逆亂に困しみ、國破れ家亡び、親友凋殘す。(五)杖を負うて行吟すれば、則ち百憂倶に至り、塊然として獨坐すれば則ち哀憤兩つながら集る。時に復相與に觴を擧げて膝を對し、涕を破りて笑と爲し、終身の積慘を排し、數刻の暫歡を求む。譬へば猶ほ疾疢(六)の年を彌るに、而も一丸を以て之を消さんと欲するが如し、其れ得べけんや。夫れ才は世に生ず、世は實に才を須つ。(七)和氏の璧は、焉ぞ獨り郢握に曜くを得んや。(八)夜光の珠は、何ぞ專ら隋掌に玩ばるゝを得んや。天下の寶は、當に天下之を共にすべし。(九)但分析の日は、(一〇)悵恨せざる能はざるのみ。然して後に聃周の虛誕爲り、(一一)嗣宗の妄作爲るを知りぬ。昔は、(一二)騄驥の轅に吳坂に倚り、良樂に長鳴せしは、知と不知となり。(一三)百里奚の虞に愚にして秦に智なりしは、遇と不遇となり。今は(一四)君之に遇へり、之を勖めんのみ。復意を文に屬せざること、二十餘年なり。久廢すれば則ち次無し、想ふに必ず(一五)其一反を欲するならん。故に旨に稱して一篇を送る。適に以て來詩の益々美なるを彰すに足らんのみ。琨頓首々々。

㊀古今一貫の大精神　㊁行爲を檢束す　㊂阮籍は形骸を土木とせる人　㊃この頃恐懼憂慮すとなり劉聰の

卷八

晉詩

劉琨

(一)越石は英雄なり、(二)路を失うて萬緒悲涼なり。故に其詩は、筆に随って哀音を傾け吐くこと(三)次無し。讀む者烏ぞ語句の間に於て之を求むるを得ん。

(一)琨の字　(二)失敗して逆境に立つ　(三)次序なくして亂出す

盧諶に答ふ

琨頓首、書及び詩を損せられ、酸辛の苦言を備へ、(一)經通の遠旨を暢べらる。執玩反覆して、手を釋く能はず。慨然として以て悲しみ、歡然として以て喜ぶ。昔在は少壯、未だ嘗て(二)撿括せず。遠く老莊の物を齊しうするを慕ひ、近く(三)阮生が放曠を嘉し、厚薄は何に從

況復雁南飛。
衣工秉ニ刀尺一。
棄レ我忽若レ遺。
人不レ取ニ諸身一。
世事焉所レ希。
況復已朝餐。
曷由知ニ我飢一。

らん。(五)況んや復已に朝餐せるをや、曷に由りてか我が飢を知らん。

㊀貧困なる女子　㊁才有るも用ひられざるに喩ふ　㊂裁縫の人剪刀と物指とを手にするなり　㊃世間の同無情き者は何事も成就し難しとの意　㊄朝食すれば飢を忘るゝ如く仕官すれば他人に構はずとなり

靡靡忽至レ今。王事離二我志一。殊隔過二商參一。昔往鶬鶊鳴。今來蟋蟀吟。人情還二舊鄉一。客鳥思二故林一。師涓久不レ奏。誰能宣二我心一。

り、今來るに蟋蟀吟ず。人情舊鄉に還らんとし、(四)客鳥は故林を思ふ。(五)師涓久しく奏せず、誰か能く我が心を宣べん。

(一)分れ離るゝ意 (二)遲々に同じ (三)王事の爲に吾が志を傷め地方官となりて相離るゝこと遠き意 (四)一本懷に作る從ふべし (五)衞の名樂手なり韓非子に出づ

郭泰機

傅咸に答ふ

皦皦白素絲。織爲二寒女衣一。寒女雖二妙巧一。不レ得レ秉二杼機一。天寒知二運速一。

皦皦たる白素絲、織りて(一)寒女の衣と爲す。寒女は妙巧なりと雖も、(二)杼機を秉るを得ず。天寒うして運の速かなるを知る、況んや復鴈の南に飛ぶをや。(三)衣工刀尺を秉り、我を棄てて忽ち遺るゝが若し。(四)人諸を身に取らずんば、世事焉ぞ希ふ所あ

富貴他人合。
貧賤親戚離。
廉藺門易軌。
田竇相奪移。
晨風集茂林。
棲鳥去枯枝。
今我唯困蒙。
羣士所背馳。
鄉人敦懿義。
濟濟蔭光儀。
對賓頌有客。
擧觴咏露斯。
臨樂何所歎。
素絲與路岐。

朔風動秋草。
邊馬有歸心。
胡寧久分析。

感舊詩

富貴なれば他人も合し、貧賤なれば親戚も離る。廉藺(一)の門に軌を易へ、田竇(二)は相奪移せり。晨風茂林に集り、棲鳥は枯枝を去る。今我唯困蒙(三)、羣士の背馳する所たり。鄉人は懿義に敦く、濟濟(四)として光儀を蔭ふ。賓に對して有客(五)を頌し、觴を擧げて露斯を咏ず。樂に臨んで何の歎く所ぞ、素絲(六)と路岐となり。

(一) 廉頗藺相如なり史記參照 (二) 漢の竇嬰と田蚡と權を相爭ひし故事 (三) 貧困にして愚蒙 (四) 多く莊嚴して美容を失はしめざらんとす (五) 詩經の篇名なり露斯も亦同じ (六) 墨翟は練絲に泣き楊朱は岐路に泣けり事諸書に出でたり

王讚

雜詩

朔風秋草を動かし、邊馬に歸心有り。胡寧れぞ久しく分析する、靡靡(一)として忽ち今に至れり。王事我が志に離り、殊隔して商參に過ぐ。昔往きしとき鶬鶊鳴け

晨風飄二岐路一。
零雨被二秋草一。
傾レ城遠追送。
餞二我千里道一。
三命皆有レ極。
咄嗟安可レ保。
莫レ大レ於二殤子一。
彭聃猶爲レ夭。
吉凶如二糾纆一。
憂喜相紛繞。
天地爲二我鑪一。
萬物一何小。
達人垂二大觀一。
誠此苦レ不レ早。
乖離即二長衢一。
惆悵盈二懷抱一。
孰能察二其心一。
鑒之以二蒼昊一。
齊レ契在二今朝一。
守レ之與偕老。

孫楚

征西官屬を陟陽侯に送りし作詩

(一)晨風岐路に飄り、零雨秋草に被る。(二)城を傾けて遠く追送し、我を千里の道に餞す。(三)三命皆極有り、咄嗟安ぞ保つべけん。(四)殤子より大なる莫く、(五)彭聃を猶ほ夭と爲す。吉凶は糾へる纆の如く、憂喜相紛繞す。(六)天地は我が鑪爲り、萬物一に何ぞ小なる。(七)達人は大觀を垂る。此を誡めて早からざるを苦しむ。乖離して長衢に即き、惆悵して懷抱に盈つ。孰か能く其心を察せん、之を鑒みるに(八)蒼昊を以てす。契を齊ふるは今朝に在り、之を守つて與に偕に老いん。

(一)一種の隼鷹なり李陵の詩參照　(二)城中すべての人が送別するなり　(三)人壽に上中下あるを謂ふ三命あるも皆終極あり　(四)幼兒の時死するなり　(五)八百歳の彭祖二百餘歳の老聃など却つて早死なり　(六)天地は萬物を陶冶する火鑪なりといふ　(七)死生を一の如く達觀するなり　(八)自己の中情を蒼天に訴ふる意

曹攄

行雲思二故山一。閩越衣二文蛇一。胡馬願レ度レ燕。土風安レ所レ習。由來有二固然一。

結二宇窮岡曲一。耦二耕幽藪陰一。荒庭寂以閒。幽岫峭且深。凄風起二東谷一。有三渰興二南岑一。雖レ無二箕畢期一。膚寸自成レ霖。澤雉登レ壟雊。寒猿擁レ條吟。溪壑無二人跡一。荒楚鬱蕭森。投レ耒循二岸垂一。時聞二樵採音一。重基可レ擬レ志。迴淵可レ比レ心。養レ眞尚二無爲一。道勝貴二陸沈一。遊二思竹素園一。寄二辭翰墨林一。

宇を窮岡の曲に結んで、幽藪の陰に(一)耦耕す。荒庭寂として以て閒に、幽岫峭にして且つ深し。凄風は東谷に起り、(二)渰として南岑に興ること有り。(三)箕畢の期無しと雖も、(四)膚寸自ら霖を成す。澤雉は壟に登つて雊き、寒猿は條を擁して吟ず。溪壑に人跡無く、(五)荒楚は鬱として蕭森。耒を投じて岸の垂に循ひ、時に樵採の音を聞く。(六)重基は志を擬すべく、迴淵は心を比すべし。眞を養ふに無爲を尚び、(七)道勝には陸沈を貴ぶ。思を(八)竹素の園に遊ばし、辭を翰墨の林に寄す。

(一)二人並び耕すなり　(二)雲興り雨至る意　(三)月の箕星にかゝるや風多く畢にかゝれば雨多しとぞ　(四)微小の雲も相合して遂に天下の霖雨をなす　(五)荒れはてし森林　(六)山なり人意をして遠からしむる意　(七)道を守り人格を重んずるには世に顯はれざる方よろしとの義　(八)紙なり翰墨は筆墨をいふ

大火流ニ坤維一。白日馳ニ西陸一。浮陽映ニ翠林一。廻飈扇ニ綠竹一。飛雨灑ニ朝蘭一。輕露棲ニ叢菊一。龍蟄暄氣凝。天高萬物嘯。弱條不ニ重結一。芳蘂豈再馥。人生ニ瀛海內一。忽如ニ鳥過レ目。川上之歎レ逝。前修以自勗。

(一)大火坤維に流り、白日西陸に(二)馳す。(三)浮陽は翠林に映じ、廻飈は綠竹を扇ぐ。飛雨は朝蘭に灑ぎ、輕露は叢菊に棲る。(四)龍蟄して暄氣凝り、天高うして萬物嘯く。弱條重ねて結ばず、(五)芳蘂豈再び馥しからんや。人の(六)瀛海の內に生るゝや、忽として鳥の目を過ぐるが如し。(七)川上に逝を歎じて、前修以て自ら勗めたり。

(一)大火星が西南の坤維星下に下るとなり　(二)西方の星宿昴の星座をいふ　(三)日光なり　(四)仲秋の月は龍蟄居して陽氣潜藏す　(五)香ばしき草木の花　(六)浮世といふ程の義　(七)孔子が河に臨んで歎ぜし故事による

違レ職投ニ邊城一。羈ニ束戎旅間一。下レ車如ニ昨日一。望舒四五圓。借問此何時。蝴蝶飛ニ南園一。流波戀ニ舊浦一。

職を述べて(一)邊城に投じ、戎旅の間に羈束せらる。車を下りしは昨日の如くなれども、(二)望舒四五たび圓なり。借問す此れ何の時ぞ、蝴蝶南園に飛べり。流波は舊浦を戀ひ、行雲は故山を思ふ。(三)閩越は文蚫を衣、胡馬は燕を度らんことを願ふ。土風は習ふ所に安んず、由來固に然ること有り。

(一)片田舍に赴任す　(二)月をいふ四五回程滿月に逢へりとなり　(三)越人は模様入の蛇の皮を被る習俗あり

輕風摧二勁艸一。凝霜竦二高木一。密葉日夜疎。叢林森如レ束。疇昔歎二時遲一。晩節悲二年促一。歳暮懷二百憂一。將下從二季主一卜上。

（前略）に(三)季主に從つてトせんとす。

(一) 赤き氣が日出所にはの見ゆるなり暘一に湯に作る　(二) 少年の時は月日の遲きを怨み今老いては早きに過ぐるを恨む　(三) 楚の司馬季主常に市中にトせり史記に出づ

昔我資二章甫一。聊以適二諸越一。行行入二幽荒一。甌駱從二祝髮一。窮年非レ所レ用。此貨將二安設一。瓴甋夸二璵璠一。魚目笑二明月一。不レ見郢中歌。能否居然別。陽春無二和者一。巴人皆下節。流俗多二昏迷一。此理誰能察。

昔我章甫(一)を資り、聊か以て諸越に適けり。行き行いて幽荒に入るに、(二)甌駱は祝髮に從ふ。(三)窮年用ふる所に非ず、此の貨將に安んか設けんとする。(四)瓴甋璵璠に夸り、魚目明月を笑ふ。見ずや(五)郢中の歌、能否居然として別るゝを。(六)陽春は和する者無く、巴人は皆下節のみ。流俗に昏迷多し、此の理誰か能く察せん。

(一) 冠の名なり越は冠を要せざる國名　(二) 越人は皆斷髮なりとの意　(三) 終歳冠を用ひず　(四) 瓦石が美玉に誇るとなり世態皆然りとなり　(五) 戰國策に出づ參照すべし　(六) 陽春白雪の調は高尚にして和する者少く下里巴人の調は卑俗のために和する者多し

雜詩

秋夜涼風起。清氣蕩二暄濁一。蜻蛚吟二階下一。飛蛾拂二明燭一。君子從二遠役一。佳人守二煢獨一。離居幾何時。鑽レ燧忽改レ木。房櫳無二行跡一。庭草萋以綠。青苔依二空牆一。蜘蛛網二四屋一。感レ物多レ所レ懷。沈憂結二心曲一。

秋夜涼風起り、清氣(一)暄濁を蕩す。(二)蜻蛚は階下に吟じ、飛蛾は明燭を拂ふ。君子遠役に從ひ、佳人煢獨を守る。離居幾何時ぞ、(三)燧を鑽つて忽ち木を改む。(四)房櫳に行跡無く、庭草萋として以て綠なり。青苔は空牆に依り、蜘蛛は(五)四屋に網はる。物に感じて懷ふ所多く、沈憂心曲に結ぼる。

(一)暖く濁れる氣 (二)蟋蟀に同じ (三)ひうちもて火を作るに燧の木を取換ふる義、年月を經過せりとなり (四)部屋の窓の欄に足跡をも留めず (五)四方の檐端なり

朝霞迎二白日一。丹氣臨二暘谷一。翳翳結二繁雲一。森森散二雨足一。

朝霞白日を迎へ、(一)丹氣暘谷に臨む。翳翳として繁雲を結び、森森として雨足を散ず。輕風は勁艸を摧き、凝霜は高木を竦ぐ。密葉日夜に疎に、叢林森として東ぬるが如し。(二)疇昔時の遲きを歎じ、晩節年の促きを悲しむ。歳暮に百憂を懷く、將

皆云漢世生。恭文遙相望。原陵鬱膴膴。季世喪亂起。賊盜如豺虎。毀壞過一坏。便房啓幽戸。珠柙離玉體。珍寶見剽虜。園寢化爲墟。周墉無遺堵。蒙蘢荊棘生。蹊逕登童豎。狐兎窟其中。蕪穢不復掃。頽隴並墾發。萌隷營農圃。昔爲萬乘君。今爲丘山土。感彼雍門言。悽愴哀今古。

(五)壤を毀つこと一坏に過ぐれば、便房幽戸を啓く。(六)珠柙は玉體を離れ、珍寶は剽虜せらる。(七)園寢化して墟と爲り、周墉に遺堵無し。(八)蒙蘢として荊棘生じ、蹊逕に童豎を登らす。狐兎は其中に窟し、荒穢して復帰はず。(九)頽隴並に墾發し、萌隷は農圃を營む。昔は萬乘の君爲り、今は丘山の土と爲る。彼の(一〇)雍門の言に感じ、悽愴として今古を哀しむ。

(一) 洛陽城外の山名 (二) 漢代の天子たりし人々 (三) 安帝と順帝との陵 (四) 光武帝の山陵に草木茂盛せるなり (五) 少しく深く墓を毀てば塚中の室戸皆開くとなり (六) 珠を飾れる被服や棺箱の飾 (七) 墓所皆廢址となり周圍の垣も殘る所なく破壞せらる (八) 草木の茂り蔽へる貌 (九) 崩れし塚は開墾せられ人民は耕圃となす (一〇) 雍門周が孟嘗君に死後の慘を說きし語なり淮南子に見ゆ

張協

惠連非二吾屈一。首陽非二吾仁一。相與觀レ所レ尚。逍遙撰二良辰一。

左貴嬪

啄木詩

南山有レ鳥。自名二啄木一。飢則啄レ樹。暮則巣宿。無レ干二於人一。惟志所レ欲。性清者榮。性濁者辱。

南山に鳥有り、自ら(一)啄木と名づく。飢うれば則ち樹を啄ばみ、暮るれば則ち巣に宿る。人に干むる無く、(二)惟志の欲する所、性清なる者は榮え、性濁なる者は辱かしめらる。

(一)鳥名、きつゝき　(二)自己の志願に從つて行動するのみ

張載

七哀詩

北芒何壘壘。高陵有二四五一。借問誰家墳。

(一)北芒何ぞ壘壘たる、高陵四五有り。借問す誰が家の墳ぞ、皆云ふ(二)漢の世主と。(三)恭文遙に相望み、(四)原陵鬱として膴膴たり。季世に喪亂起り、賊盜豺虎の如し。

纖鱗或浮沈。非ニ必絲與一レ竹。山水有ニ清音一。何事待ニ嘯歌一。灌木自悲吟。秋菊兼ニ餱糧一。幽蘭間ニ重襟一。躊躇足力煩。聊欲レ投ニ吾簪一。

が簪を投ぜんと欲す。

㊀荒れはてたる路は古より塞かれり　㊁人工を施さず　㊂美玉なり　㊃樂器なり樂器の必要なしとなり　㊄菊は食の代となり蘭は衣の代となる意　㊅仙居の近づき難きに疲勞を覺えたりとなり

經ニ始東山廬一。果下自成レ榛。前有ニ寒泉井一。聊可レ瑩ニ心神一。峭蒨青蔥間。竹柏得ニ其眞一。弱葉棲ニ霜雪一。飛榮流ニ餘津一。爵服無ニ常玩一。好惡有ニ屈伸一。結レ綬生ニ纏牽一。彈レ冠去ニ埃塵一。

東山の盧を經始するに、果下ちて自ら榛を成せり。前に寒泉井有り、聊か心神を瑩くべし。(二)峭蒨たる青蔥の間、竹柏其眞を得たり。弱葉に霜雪を棲め、(三)飛榮は餘津を流す。(四)爵服に常玩無く、好惡に屈伸有り。(五)綬を結べば纏牽を生ず、冠を彈するとも埃塵を去るのみ。(六)惠連は吾が屈に非ず、首陽は吾が仁に非ず、相與に尚ぶ所を觀て、逍遙して良辰を撲ばん。

㊀作りはじむ　㊁鮮明なる青綠の色　㊂飛花に露滴の伴なふを指す　㊃官位官服の人は時に不本意の事を爲すべき事情ある義　㊄仕官すれば束縛を受くるをいふ　㊅柳下惠と少連との如く志を屈したくはなく夷齊の如き仁も吾之を望まずとなり

計策棄不レ收。
塊若二枯池魚一。
外望無二寸祿一。
內顧無二斗儲一。
親戚還相蔑。
朋友日夜疎。
蘇秦北遊說。
李斯西上書。
俛仰生二榮華一。咄嗟復彫枯。飲レ河期二滿腹一。貴レ足不レ願レ餘。巢レ林棲二一枝一。可レ爲二達士模一。

を生じ、咄嗟に復彫枯す。(七)河に飲んで滿腹を期し、足を貴んで餘を願はず。林に巢くへば一枝に棲む、達士の模と爲すべし。

(一)歘々飛びて羽ならしする貌　(二)失意獨居の貌　(三)邪魔物多くして仕進の路を塞ぐに喩ふ　(四)外より到る俸祿無く內には一升の貯蓄もなし　(五)戰國の時諸侯に游說して尊寵を得たる人　(六)秦に仕へて宰相に上りし人蘇秦と共に末路は皆よからざりき　(七)莊子に見えたる偃鼠飲河云々の語參照すべし

招隱二首

杖レ策招二隱士一。
荒塗橫二古今一。
巖穴無二結構一。
丘中有二鳴琴一。
白雲停二陰岡一。
丹葩曜二陽林一。
石泉漱二瓊瑤一。

策に杖りて隱士を招ぬ、(一)荒塗古今に橫はる。巖穴に(二)結構無く、丘中に鳴琴有り。白雲は陰岡に停り、丹葩は陽林に曜く。石泉(三)瓊瑤に漱ぎ、纖鱗或は浮沈す。(四)必ずしも絲と竹とには非ず、山水に清音有り。何事ぞ嘯歌を待たん、灌木自ら悲吟す。(五)秋菊は餱糧を兼ね、幽蘭は重襟に間はる。(六)躊躇して足力煩はし、聊か吾

骨肉還相薄。
買臣困二樵採一。
伉儷不レ安レ宅。
陳平無二產業一。
歸來翳二負郭一。
長卿還二成都一。
壁立何寥廓。
四賢豈不レ偉。
遺烈光二篇籍一。
當二其未レ遇時一。
憂在レ塡二溝壑一。
英雄有二迍邅一。由來自二古昔一。何世無二奇才一。遺レ之在二草澤一。

(三)陳平は產業無く、歸來して負郭に翳る。(四)長卿の成都に還るや、壁立何ぞ寥廓たる。四賢は豈偉ならざらんや、遺烈は篇籍に光く。其の未だ遇はざるの時に當つては、(五)憂溝壑に塡つるに在りき。英雄に(六)迍邅有り、由來古昔よりす。何の世か奇才無からん、之を遺れて草澤に在らしむ。

(一)臨淄の人主父偃は上書して仕官せり其初は親戚皆之を輕蔑せり (二)朱買臣は貧の爲に妻に棄てられし人 (三)漢初の功臣なり初は一定の產業なく貧民窟の一隅に蟄居したり (四)司馬相如の卓文君を得て歸るや家徒に四壁立つのみなりき (五)溝谷に橫死せんことを憂へたり (六)障碍のために志を得ざるなり

習習籠中鳥。
擧レ翮觸二四隅一。
落落窮巷士。
抱レ影守二空廬一。
出レ門無二通路一。
枳棘塞二中塗一。

(一)習習たる籠中の鳥、翮を擧ぐれば四隅に觸る。(二)落落たる窮巷の士、影を抱いて空廬を守る。門を出づるに通路無く、(三)枳棘中塗を塞げり。計策棄てて收められず、塊として枯池の魚の若し。(四)外望するも寸祿無く、內顧するに斗儲無し。親戚還つて相蔑んじ、朋友日夜に疎なり。(五)蘇秦北に游說し、(六)李斯西に上書す。俛仰して榮華

自レ非二攀龍客一。何爲欻來游。被レ褐出二閶闔一。高步追二許由一。振二衣千仞岡一。濯二足萬里流一。

㈠支那全土をいふ　㈡天子の宮殿　㈢壯大なる貌　㈣龍鱗を攀づる義、天子に取りつくなり　㈤濟陽城西門の名　㈥堯代の隱者

荊軻飲二燕市一。酒酣氣益震。哀歌和二漸離一。謂レ若二傍無一レ人。雖レ無二壯士節一。與レ世亦殊レ倫。高眄邈二四海一。豪右何足レ陳。貴者雖二自貴一。視レ之若二埃塵一。賤者雖二自賤一。重レ之若二千鈞一。

(一)荊軻燕市に飲み、酒酣にして氣益震ふ。哀歌して(二)漸離に和し、傍ら人無きが若しと謂へり。壯士の節無しと雖も、世と亦倫を殊にす。高く眄て四海を邈とし、(三)豪右何ぞ陳するに足らん。貴者は自ら貴ぶと雖も、之を視ること埃塵の若くす。(四)賤者は自ら賤しむと雖も、之を重んずること千鈞の若し。

㈠秦王を刺さんとせし荊軻が今の北京の地に宴飲せしを指す　㈡軻の親友高漸離　㈢豪族や有力者やは終に荊軻の心事に敵し難しとなり　㈣作者自ら軻に倣はんと欲する意を示す

主父宦不レ達。

(一)主父は宦達せず、骨肉還つて相薄うす。(二)買臣は樵採に困し、伉儷も宅に安んぜず。

赫赫王侯居。
冠蓋蔭二四術一。
朱輪竟二長衢一。
朝集二金張館一。
暮宿二許史廬一。
南鄰擊二鐘磬一。
北里吹二笙竽一。
寂寂揚子宅。
門無二卿相輿一。
寥寥空宇中。
所レ講在二玄虛一。言論準二宣尼一。辭賦擬二相如一。悠悠百世後。英名擅二八區一。

る。朝に金張(三)の館に集り、暮に許史(四)が廬に宿る。南鄰に鐘磬を撃ち、北里に笙竽を吹く。寂寂たり揚子(五)が宅、門に卿相の輿無し。寥寥たり空宇の中、講ずる所は玄虛(六)に在り。言論は宣尼に準へ、辭賦は相如に擬す。悠悠たる百世の後、英名八區(七)に擅なり。

(一)威儀の盛なる貌　(二)冠冕と車のきぬがさとが四方の道に充滿するなり　(三)前出　(四)漢元帝の外戚許氏と宣帝の外戚史氏と　(五)大玄經を著はせる揚雄　(六)揚雄の法言を孔子の立言に比するなり　(七)宇內に同じ

皓天舒二白日一。
靈景耀二神州一。
列レ宅紫宮裏。
飛宇若二雲浮一。
峩峩高門內。
藹藹皆王侯。

皓天白日を舒べ、靈景(一)神州に輝く。宅を列ぶ紫宮(二)の裏、飛宇は雲の浮ぶが如し。峩峩たる高門の內、藹藹(三)として皆王侯。攀龍(四)の客に非るよりは、何爲れぞ欻ち來遊せん。褐を被て閶闔(五)を出で、高歩して許由(六)を追ふ。衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ぐ。

英俊沈二下僚一。地勢使二之然一。由來非二一朝一。金張藉二舊業一。七葉珥二漢貂一。馮公豈不レ偉。白首不レ見レ招。

招かれず。

(一) 纎く細小なる貌 (二) 世襲の弱子は愚なるも高位に在り (三) 金日磾と張湯との家は七代迄も榮華を受けたり (四) 馮唐は高行ありしも官は郎中に過ぎざりき

吾希段干木。偃息藩二魏君一。吾慕魯仲連。談笑却二秦軍一。當レ世貴二不羈一。遭レ難能解レ紛。功成恥レ受レ賞。高節卓不レ羣。臨レ組不レ肯レ紲。對レ珪寧肯分。連璽曜二前庭一。比レ之猶二浮雲一。

吾は希ふ段干木(一)、偃息して魏君に藩たり。吾は慕ふ魯仲連(二)、談笑して秦軍を却く。世に當つては不羈(三)を貴び、難に遭つては能く紛を解く。功成るも賞を受るを恥ぢ、高節卓として羣あらず。(四)組に臨めども紲を肯んぜず、珪に對するも寧ぞ肯で分たん。連璽前庭に曜けども、之を比するに浮雲の猶し。

(一) 魏の名士なり戰國策史記等參照 (二) 齊の名士曩前出せり (三) 放逸にして束縛せられざるなり (四) 魯連は賞を受けず楚に趙に辭し後に齊に謝したり

濟濟京城内。

(一)濟濟たり京城の内、赫赫たり王侯の居。(二)冠蓋は四衢を蔭ひ、朱輪は長衢を竟

弱冠弄二柔翰一。卓犖觀二群書一。著レ論準二過秦一。作レ賦擬二子虛一。邊城苦二鳴鏑一。羽檄飛二京都一。雖レ非二甲冑士一。疇昔覽二穰苴一。長嘯激二清風一。志若レ無二東吳一。鉛刀貴二一割一。夢想騁二良圖一。左眄澄二江湘一。右眄定二羌胡一。功成不レ受レ爵。長揖歸二田廬一。

弱冠より柔翰(一)を弄し、卓犖として群書を觀る。(二)論を著して過秦に準し、賦を作つて子虛に擬す。(三)邊城鳴鏑に苦しみ、羽檄京都に飛ぶ。甲冑の士に非ずと雖も、疇昔に穰苴(四)を覽たり。長嘯して清風に激し、志は東吳(五)を無みするが若し。(六)鉛刀は一割を貴び、夢想良圖を騁す。(七)左眄して江湘を澄ましめ、右眄して羌胡を定む。功成るも爵を受けず、長揖(八)して田廬に歸る。

(一)毛筆をいふ　(二)賈誼の過秦論司馬相如の子虛賦になぞらふ　(三)地方には徵兵の書を草する多しとなり　(四)司馬穰苴をいふ　(五)吳の孫氏の一族をも輕視する程の氣象　(六)自己の才は一用に適するのみ再用すべからずとなり　(七)吳を平げ夷狄を伐つを言ふ　(八)恭しく謝讓するなり

鬱鬱澗底松。離離山上苗。以二彼徑寸莖一。蔭二此百尺條一。世胄躡二高位一。

鬱鬱たり澗底の松、(一)離離たり山上の苗。彼の徑寸の莖を以て、此の百尺の條を蔭ふ。世胄高位を躡み、英俊下僚に沈む。地勢之をして然らしむ、由來一朝に非ず。(二)(三)金張は舊業に籍り、七葉まで漢貂を珥む。(四)馮公豈偉ならざらんや、白首まで

り。故に是一代の作手なり。豈潘陸輩が能く比埒㈢する所ならんや。

㈠左思の字なり　㈡漢魏の詩風を自家の胸中に鎔鑄して別に自家の詩を作る義　㈢列次し比伍するなり

雜詩

秋風何冽冽。
白露爲二朝霜一。
柔條旦夕勁。
綠葉日夜黃。
明月出二雲崖一。
皦皦流二素光一。
披レ軒臨二前庭一。
嗷嗷晨鴈翔。
高志局二四海一。
塊然守二空堂一。
壯齒不二恒居一。
歲暮常慨慷。

秋風何ぞ冽冽㈠たる、白露朝霜と爲る。㈡柔條旦夕に勁く、綠葉日夜に黃ばむ。明月雲崖を出で、㈢皦皦として素光を流す。軒を披いて前庭に臨めば、嗷嗷として晨鴈翔る。㈣高志は四海を局しとし、塊然として空堂を守る。壯齒恒に居らず、歲暮に常に慨慷す。

㈠寒さのきびしき貌　㈡柔かき枝も漸く勁く固くなるとなり　㈢光の白きをいふ　㈣遠大の志ありて天下をも狹しとなし獨居慷慨せるうちに既に老境に入れりとなり

咏史八首

張翰

雜詩

春春和氣應。
白日照二園林一。
青條若二總翠一。
黃花如二散金一。
嘉卉亮有レ觀。
顧此難二久耽一。
延レ頸無二良塗一。
頓レ足託二幽深一。
榮與レ壯俱去。
賤與レ老相尋。
歡樂不レ照レ顏。
慘愴發二謳吟一。
謳吟何嗟及。
古人可レ慰レ心。

暮春に(一)和氣應じ、白日園林を照す。(二)青條は總翠の若く、黃花は散金の如し。嘉卉亮に觀有り、顧ふに此れ久しく耽り難し。頸を延けども(三)良塗無く、足を頓めて幽深に託す。榮と壯と倶に去り、(四)賤と老と相尋ぬ。歡樂顏を照さず、慘愴として謳吟を發す。謳吟何の嗟か及ばん、(五)古人心を慰むべし。

(一) 時節に應じて起る中和の三氣 (二) 靑々したる枝は一條に集めたるが如しとなり (三) 屋外に出づべき良路 (四) 貧賤と衰老と相會すとなり (五) 古人を想ふことによりて襟懷を慰むとなり

左思

鍾嶸は左が詩を評して謂ふ、陸機より野にして、潘岳より深しと。此れ(一)太冲を知らざる者なり。太冲は胸次高曠にして、筆力又復雄邁。(二)漢魏を陶冶して、自ら偉詞を製せ

皎皎窗中月。照我室南端。清商應秋至。溽暑隨節闌。凜凜涼風升。始覺夏衾單。豈曰無重纊。誰與同歲寒。歲寒無與同。明月何朧朧。展轉眄枕席。長簟竟牀空。牀空委清塵。室虛來悲風。獨無李氏靈。髣髴覩爾容。撫衿長歎息。不覺涙霑胸。霑胸安能已。悲懷從中起。寢興目存形。遺音猶在耳。上慚東門吳。下愧蒙莊子。賦詩欲言志。此志難具紀。命也可奈何。長戚自令鄙。

皎皎たる窗中の月、我が室の南端を照す。清商秋に應じて至り、溽暑節に隨つて闌く。凜凜として涼風升り、始めて夏衾(一)の單なるを覺ゆ。豈重纊(二)無しと曰はんや、誰か與に歲寒を同じうせん。歲寒與に同じうするもの無し、明月何ぞ朧朧たる。(三)展轉して枕席を眄るに、長簟は牀に竟つて空し。牀空しうして清塵に委し、室虛にして悲風を來す。獨り李氏(四)の靈無し、髣髴として爾の容を觀る。衿を撫して長く歎息し、覺えず涙胸を霑す。胸を霑して安ぞ能く已まん、悲懷は中より起る。寢興に目に形を存し、遺音は猶耳に在り。上は東門吳(五)に慙ぢ、下は(六)蒙莊子に愧づ。詩を賦して志を言はんと欲するも、此の志は具に紀し難し。命なるかな奈何かすべき、長く戚へて自ら鄙ならしむ。

(一) 涼風のために夏の單衣にては肌寒く感ずとなり (二) 綿入の衣服 (三) 眠られざるなり (四) 漢の李夫人の事前に出でたり (五) 魏人なり子の死せしに憂へざりし人なり列子に見ゆ (六) 莊周なり前詩の末句參照

荏苒冬春謝。寒暑忽流易。之子歸二窮泉一。重壤永幽隔。私懷誰克從。淹留亦何益。僶俛恭二朝命一。廻レ心反二初役一。望レ廬思二其人一。入レ室想レ所レ歷。幃屏無二髣髴一。翰墨有二餘跡一。流芳未レ及レ歇。遺挂猶在レ壁。悵怳如二或存一。周遑忡驚惕。如二彼翰林鳥一。雙棲一朝隻。如二彼游川魚一。比目中路析。春風緣レ隙來。晨溜承レ簷滴。寢息何時忘。沈憂日盈積。庶幾有二時衰一。莊缶猶可レ擊。

（一）荏苒として冬春謝し、寒暑忽ち流易す。（二）之の子窮泉に歸し、重壤永く幽隔す。私懷誰か克く從はん、淹留すとも亦何の益かあらん。（三）僶俛して朝命を恭しみ、心を廻らして（四）初役に反る。廬を望んで其の人を思ひ、室に入つて歷る所を想ふ。幃屏に髣髴たる無く、（五）翰墨に餘跡有り。流芳未だ歇むに及ばず、（六）遺挂猶壁に在り。悵怳として或は存するが如く、（七）周遑として忡へて驚き惕る。彼の翰林の鳥の雙棲して一朝に隻なるが如く、彼の游川の魚の、比目にして中路に析るゝが如し。春風隙緣り來り、晨溜簷を承けて滴る。（八）寢息何の時か忘れん、沈憂は日に盈積す。（九）庶幾は時に衰ふる有らんことを、莊缶猶擊つべし。

（一）過ぎ行く貌　（二）妻を指し言ふ　（三）勉強に同じ　（四）任地に歸り來る　（五）文章筆蹟なり　（六）遺されし彼服等の桁に在るもの　（七）周章惶懼の貌　（八）寢ても醒めてもといふ義　（九）予は未だ年若けれども早く衰老に及びたし莊周が妻を亡うて缶を鼓せしに類するは悲しとなり

煢煢妾獨止。
山河安可踰。
永路隔萬里。
京室多妖冶。
粲粲都人子。
雅步擢纖腰。
巧言發皓齒。
佳麗良可美。
衰賤焉足紀。
遠蒙眷顧言。
銜恩非望始。

を隔つ。京室に妖冶多し、粲粲たり都人の子。雅步は纖腰を擢き、巧言は皓齒より發す。(二)佳麗良に美とすべし、(三)衰賤焉ぞ紀するに足らん。遠く眷顧の言を蒙れり、恩を銜んで始(四)を望むには非ず。

(一)獨り行く貌 (二)京師には美人多しとなり以下美人を敍す (三)衰へて賤しき妾は忘れらるべき管なり (四)恩情の最初の如く厚からんことを望むには非ずとなり

潘岳

安仁が詩品は、又士衡が下に在り。茲に特に悼亡の二詩を取る。格は高からずと雖も、其情自ら深ければなり。

安仁は賈后に黨し、太子遹を殺すを謀るとき、與つて力有りき。人品此の如し、詩安んぞ佳なるを得んや。

潘陸の詩は、剪綵して花を爲るが如く、絕だ生韻少なり。故に收むる所略に從ふ。

悼亡詩

閒居外レ物。靜言樂レ幽。繩樞增レ結。甕牖綢繆。和神當レ春。清節爲レ秋。天地則爾。戸庭已悠。

我在二三川陽一。子居二五湖陰一。山川一何曠。譬二彼飛與一レ沈。目想二清慧姿一。耳存二淑媚音一。獨寐多二遠念一。寤言撫二空衿一。彼美同懷子。非レ爾誰爲レ心。悠悠君行邁。

谷風

閒居して物(一)を外にし、靜に言に幽を樂しむ。(二)繩樞に結を增し、甕牖に綢繆す。(三)和神春に當り、清節秋を爲す。天地則ち爾り、戸庭已に悠なり。

(一) 俗物と隔離す　(二) 繩の樞斷てば又結び破甕の窓を修繕す　(三) 和樂にして清廉なるは春と秋とに相當す

顧彥先が爲に婦に贈る

我は(一)三川の陽に在り、子は(二)五湖の陰に居る。山川一に何ぞ曠き、彼の(三)飛と沈とに譬ふ。目は清慧の姿を想ひ、耳は(四)淑媚の音を存す。獨り寐て遠念多く、寤めて言に空衿を撫す。彼の美なる同懷の子、爾に非ずば誰か心を爲さん。

(一) 涇渭洛三水の流灌する地方　(二) 洞庭以下諸湖の散在する地方　(三) 空飛ぶ鳥と淵に沈む魚との如く相距る
(四) 善美佳良の聲、巧音耳に殘るとなり

悠悠として君行き邁き、(一)煢煢として妾獨り止る。山河安ぞ踰ゆべけん、永路萬里

虎嘯深谷底。雞鳴高樹巔。哀風中夜流。孤獸更我前。悲情觸物感。沈思鬱纏綿。佇立望故鄉。顧影悽自憐。

㈠ 慈親に同じ　㈡ 世間の塵累　㈢ 思慕の情を致すなり　㈣ 林野の道に淡泊として靜閑なる意　㈤ 深き思慕の情が烈しく起りて絶えずとなり

遠遊越山川。山川修且廣。振策陟崇丘。安轡遵平莽。夕息抱影寐。朝徂銜思往。頓轡倚高巖。側聽悲風響。清露墜素輝。明月一何朗。撫枕不能寐。振衣獨長想。

遠游して山川を越ゆ、山川修うして且廣し。策を振つて崇丘に陟り、轡を安んじて平莽に遵ふ。夕に息うて影を抱いて寐ね、朝に徂いて思を銜んで往く。轡を頓めて高巖に倚り、側に悲風の響を聽く。清露は素輝を墜す、明月一に何ぞ朗なる。枕を撫して寐ぬる能はず、衣を振うて獨り長く想ふ。

㈠ 獨り往くを謂ふ　㈡ 露の月光に輝けるものが風によりて落つるなり

陸雲

詩は士衡と、亦復伯仲なり。

游宦久不歸。山川修且闊。形影參商乖。音息曠不達。離合非有常。譬彼絃與筈。顧保金石軀。慰妾長飢渴。

て、妾が長き飢渇を慰めよ。

(一) 顛榮の遠く他郷にあるを指す　(二) 形影の如き夫婦が商と參との如く相隔たるとなり　(三) 音信消息　(四) 矢のはずと弓の絃との如く必ず相合せんとなり

總轡登長路。嗚咽辭密親。借問子何之。世網嬰我身。永歎遵北渚。遺思結南津。行行遂已遠。野途曠無人。山澤紛紆餘。林薄杳阡眠。

洛に赴く道中の作

轡を總べて長路に登り、嗚咽して密親を辭す。借問す子は何んか之く、(一)世網我が身に嬰れり。永歎して北渚に遵ひ(二)、遺思して南津に結ぼる。行き行いて遂に已に遠く、野途曠として人無し。山澤紛として紆餘(三)、(四)林薄杳として阡眠。虎は深谷の底に嘯き、雞は高樹の巓に鳴く。哀風中夜に流れ、孤獸我が前を更。悲情は物に觸れて感じ、(五)沉思は鬱として纒綿。佇立して故郷を望み、影を顧みて悽として自ら憐れむ。

顧彦先が爲に婦に贈る

辭レ家遠行邁。悠悠三千里。京洛多二風塵一。素衣化爲レ緇。修レ身悼二憂苦一。感念二同懷子一。隆思亂二心曲一。沈歡滯不レ起。歡沈難二剋興一。心亂誰爲レ理。願假二歸鴻翼一。翻飛二浙江汜一。

家を辭して遠く行き邁く、悠悠たる三千里。京洛に風塵多く、(一)素衣化して緇と爲る。身を修めて憂苦を悼み、感じて(二)同懷の子を念ふ。(三)隆思心曲を亂り、沈歡滯つて起らず。歡沈んで剋く興し難し、心亂るゝ誰か理むることを爲ん。願はくは歸鴻の翼を假り、翻つて(四)浙江の汜に飛ばん。

(一)白衣も化して黑衣となる　(二)我と同樣の心思を懷抱せる人物　(三)盛んなる思慕の情なり沈歡は憂の爲に沈める歡情　(四)顧榮が婦の居る所

東南有二思婦一。長歎充二幽闥一。借問歎何爲。佳人眇二天末一。

東南に思婦有り、長歎して幽闥に充つ。借問す歎くは何の爲ぞ、(一)佳人天末に眇なり。游宦して久しく歸らず、山川修うして且闊し。(二)形影參商乖き、(三)音息曠として達せず。離合常有るに非ず、(四)彼の絃と筈とに譬ふ。願くは金石の軀を保つ

頽響赴二曾曲一。至樂非レ有レ假。安事レ澆二淳樸一。富貴難二苟圖一。税レ駕從レ所レ欲。

馮文羆に贈る

昔與二二三子一。游二息承華南一。拊レ翼同二枝條一。翻飛各異レ尋。苟無二凌風翮一。徘徊守二故林一。慷慨誰爲レ感。願言懷レ所レ欽。發二軫淸洛汭一。驅二馬大河陰一。佇立望二朔塗一。悠悠迥且深。分レ索古所レ悲。志士多二苦心一。悲情臨レ川結。苦言隨レ風吟。愧無二雜佩贈一。良訊代二兼金一。夫子茂二遠猷一。款誠寄二惠音一。

昔は二三子と、承華(一)の南に游息しき。翼を拊つて枝條を同じうし、翻飛して各、尋を異にせり。苟に凌風の翮無く、徘徊して故林を守る。慷慨すとも誰か感を爲し、願言して欽する所(二)を懷はん。軫を淸洛(三)の汭に發し、馬を大河の陰に驅る。佇立して朔塗(四)を望めば、悠悠として迥にして且深し。古の悲しむ所を分ち索めて、志士に苦心多し。悲情は川に臨んで結ぼれ、苦言は風に隨つて吟ず。愧づらくは雜佩(五)の贈無し、良訊(六)もて兼金に代へん。夫子遠猷を茂にして、欵誠惠音を寄せよ。

(一) 殿門の名なり　(二) 慕ひ願ふ所の人物　(三) 淸き洛水のほとり　(四) 北方の道　(五) 詩經に子の來るを知る雜佩もて之に贈らん云々とあり　(六) 良き言葉をいふ

晴昔同宴友。輸飛戻二高冥一。服レ美改二聲聽一。居レ愉遺二舊情一。織女無二機杼一。大梁不レ架レ楹。

名ありて實なきをいふ大梁は地名、梁は又うつばりなり支ふる柱あるべきに然らずとなり

招隱詩

明發心不レ夷。振レ衣聊躑躅。躑躅欲二安之一。幽人在二浚谷一。朝采二南澗藻一。夕息二西山足一。輕條象二雲構一。密葉承二翠幄一。激楚佇二蘭林一。回芳薄二秀木一。山溜何泠泠。飛泉漱二鳴玉一。哀音附二靈波一。

(一)明發まで心夷かならず、衣を振うて聊か躑躅す。躑躅して安くに之かんとか欲する、幽人浚谷(二)に在り。朝に南澗の藻を采り、夕に西山の足に息ふ。(三)輕條は雲構に象、密葉は翠幄に承く。(四)激楚は蘭林に佇ち、回芳は秀木に薄る。山溜何ぞ泠泠たる、飛泉鳴玉を漱ぐ。哀音靈波に附き、頹響曾曲に赴く。至樂は假有るに非ず、安ぞ淳樸(五)を澆うするを事とせん。富貴は苟に圖り難し、(六)駕を税して欲する所に從はん。

(一)夜を徹して曉に至るまで　(二)深き谷間　(三)枝は雲に入る如く高く密生せり　(四)曲名なり下文皆山中の秀景を叙す　(五)眞仙淳樸の風俗を薄うして俗化す　(六)官を辭する義

安二寢北堂上一。
明月入二我牖一。
照レ之有二餘輝一。
攬レ之不レ盈レ手。
涼風繞二曲房一。
寒蟬鳴二高柳一。
踟蹰感二物節一。
我行永已久。
游宦會無レ成。
離思難二常守一。
歲暮涼風發。
昊天肅明明。
招搖西北指。
天漢東南傾。
朗月照二閑房一。
蟋蟀吟二戸庭一。
翩翩歸鴈集。
嘒嘒寒蟬鳴。

明月何ぞ皎皎に擬す

北堂の上に安寢すれば、明月我が牖に入る。(一)之を照して餘輝有り、之を攬るに手に盈たず。涼風は(二)曲房を繞り、寒蟬は高柳に鳴く。踟蹰して物節に感ず、我が行永く已に久しく、(三)游宦會に成る無し、離思常に守り難し。

(一) 月光を手に受くるなり　(二) 屈曲せる奥深き房室　(三) 客遊して仕官を求むるなり

明月皎夜光に擬す

歲暮に涼風發し、昊天肅として明明たり。(一)招搖西北に指し、天漢東南に傾く。(二)朗月閑房を照し、蟋蟀戸庭に吟ず。翩翩として歸鴈集り、(三)嘒嘒として寒蟬鳴く。疇昔同宴の友、翰く飛んで(四)高冥に戻れり。美を服して聲聽を改め、愉に居て舊情を遺る。(五)織女に機杼無く、大梁に楹を架せず。

(一) 星名なり　(二) 明月は靜寂なる室を照す　(三) 聲の微にして急なる貌　(四) 高く奥暗き青雲の上に至る　(五)

懦響。亮節難ㇾ爲ㇾ音。人生誠未ㇾ易。曷云開二此衿一。眷二我耿介懷一。俯仰愧二古今一。

江籬生二幽渚一。微芳不ㇾ足ㇾ宣。被二蒙風雲會一。移居二華池邊一。發ㇾ藻玉臺下。垂ㇾ影滄浪泉。霑潤既已渥。結ㇾ根奥且堅。四節逝不ㇾ處。繁華難二久鮮一。淑氣與ㇾ時殞。餘芳隨ㇾ風捐。天道有二遷易一。人理無二常全一。男懽二智傾ㇾ愚。女愛二衰避ㇾ妍。不ㇾ惜二微軀退一。但懼二蒼蠅前一。願君廣二末光一。照二妾薄暮年一。

塘上行

江籬(一)は幽渚に生じ、微芳宣ぶるに足らず。風雲の會を被蒙して、移りて(二)華池の邊に居る。藻を發す玉臺の下、影を垂る滄浪泉。霑潤既に已に渥く、根を結んで奥く且堅し。四節逝いて處らず、繁華久しく鮮かなり難し。(三)淑氣時と殞ち、餘芳風に隨つて捐る。天道に遷易有り、人理に常全無し。男は智ありて(四)愚を傾くるを懽び、女は衰の妍を避くるを愛す。微軀の退くを惜まず、但(五)蒼蠅の前むを懼る。願くは君(六)末光を廣うして、妾が薄暮の年を照せ。

(一) 一種香草蘼蕪、自ら喩ふ (二) 恩寵に浴して御苑に移植せらるゝをいふ (三) 好き氣は時と共に衰へ去る (四) 男は愚者を翻弄し去り、女は衰へたるものの自己の美色を避くるをよろこぶ (五) 讒諛の小臣に喩ふ (六) 晩年といふ程の義日没前の日光なり

懸。豈曰レ無レ才。
世鮮二興賢一。

渴不レ飲二盜泉水一。熱不レ息二惡木陰一。惡木豈無レ枝。志士多二苦心一。整レ駕肅二時命一。杖レ策將二遠尋一。飢食二猛虎窟一。寒棲二野雀林一。日歸功未レ建。時往歲載陰。崇雲臨レ岸駭。鳴條隨レ風吟。靜言二幽谷底一。長嘯二高山岑一。急弦無二

（一）形を見て事を知り象によりて應を知る　（二）俊傑の登用せられて興起する者なり

猛虎行

渴しても盜泉の水を飲まず、熱けれども惡木の陰に息はず。惡木豈枝無らんや、志士に苦心多し。駕を整へて（一）時命を肅しみ、策を杖いて將に遠く尋ねんとす。飢ゑては猛虎の窟に食ひ、寒うしては野雀の林に棲む。日歸つて（二）功未だ建たず、時往いて歲載ち陰る。（三）崇雲岸に臨んで駭き、鳴條風に隨つて吟ず。靜に幽谷の底に言ひ、長く高山の岑に嘯く。（四）急弦に懦響無く、亮節音を爲し難し。人生誠に未だ易からず、曷ぞ云に此の衿を開かん。（五）我が耿介の懷を眷みて、俯仰して古今に愧づ。

（一）時の王者の命令　（二）光陰の過ぎ易きをいふ　（三）高き雲なり岸は崖岸の義　（四）緊張せる琴絃は常にひきしまりたる音を發すとなり　（五）胸襟を披いて心中を披瀝する意

置二酒高堂一。悲歌臨レ觴。人壽幾何。逝如二朝霜一。時無二重至一。華不二再揚一。蘋以レ春暉。蘭以レ秋芳。來日苦短。去日苦長。今我不レ樂。蟋蟀在レ房。樂以レ會興。悲以レ別章。豈曰レ無レ感。憂爲レ子忘。我酒既旨。我肴既臧。短歌有レ詠。長夜無レ荒。

短歌行

高堂に置酒し、悲歌して觴に臨む。人壽幾何ぞ、逝くこと朝霜の如し。時は重ねて至る無く、華は再び揚がず。(一)蘋は春を以て暉き、蘭は秋を以て芳し。來日は苦だ短く、去日は苦だ長し。今我樂しまずば、蟋蟀房に在らん。(二)樂は會を以つて興り、悲は別を以て章はす。豈感無しと曰んや、憂は子が爲に忘れん。(三)我が酒既に旨く、我が肴既に臧し。短歌詠有り、長夜荒む無らん。

(一) 花は再び開くことなし　(二) 忽にして秋とならんとなり　(三) 君の爲にしばらく憂を忘れ去らん

我靜如レ鏡。民動如レ煙。事以レ形兆。應以レ象

隴西行

我は靜にして鏡の如く、民は動いて煙の如し。(一)事は形を以て兆あり、應は象を以て懸る。豈才無しと曰はんや、世に興賢鮮し。(二)

降りて梁陳よりは、工を隊仗(四)に專にして、邊幅復狹く、閲る者をして、白日に臥せ(五)んと欲せしむ。未だ必ずしも士衡が之が濫觴(六)を爲ししに非んばあらざるなり。玆に特に能く運動(七)せる者十二章を取る。士衡の詩中、亦堆垜(八)を專にせざる者有るを見んとなり。

謝康樂の詩、亦多く排を用ふ。然も能く意を造す。便ち潘陸(九)が輩とは迥に別なり。

士衡は名將の後、國を破り家を亡へるを以て、情を稱ぐれば言必ず哀怨多きも、乃ち詞旨は敷淺(一〇)なり。但塗澤(一一)に工なりとも、復何ぞ貴ばんや。

蘇李子(一二)と十九首と、毎に風に近し。士衡が輩、作賦の體を以て之を行る、所以に未だ人を感ぜしむる能はず。

(一三)文賦に云ふ、詩は情に縁りて綺靡なりと。殊に詩人の旨に非ず。

(一) 偉大ならんと欲す　(二) 胸中に大才無し　(三) 聲律にのみ拘泥する一派　(四) 詩の體裁を整ふる意　(五) 白晝に眠氣を催すとなり　(六) はじめなり　(七) 字句のよく活動する者　(八) 對偶聲律に拘泥せざる意　(九) 潘岳陸機等　(一〇) 淺はかなる意　(一一) 舞文粉飾を謂ふ　(一二) 蘇武李陵贈答の詩と古詩十九首とは共に詩經の風に近しとなり　(一三) 陸機の文賦なり文選に見ゆ

鱗鼓レ翼振振
其音。賓寫ニ爾
誠一。主竭ニ其心一。
時之和矣。何
思何修。文化
內輯。武功外
悠。

百草應レ節生。
含レ氣有ニ深淺一。
秋蓬獨何辜。
飄颻隨レ風轉。
長飆一飛薄。
吹レ我之ニ四遠一。
搔レ首望ニ故株一
邈然無レ由レ返。

いで、(三)武功外に悠なり。

(一)君主なり　(二)群臣を調ふ　(三)時既に和平にして文武の德化ありとなり

司馬彪

雜詩

百草節に應じて生じ、(一)氣を含むに深淺有り。秋蓬獨り何の辜か、飄颻して風に隨つて轉ず。長飆一たび飛び薄り、(二)我を吹いて四遠に之かしむ。(三)首を搔いて故株を望むに、邈然として返るに由無し。

(一)四季の氣を享くること或は深く或は淺し　(二)秋蓬を指す自ら喩ふるなり　(三)歎息悲傷して元の根に返らんことを求む

陸機

士衡は詩も亦大家を推す。然も意に(一)博を逞しうせんと欲して、胸に(二)懸珠少く、筆又以て之を擧ぐるに足らず、遂に(三)排偶一家を開き出しぬ。西京以來は、空靈矯健の氣復存せず。

瞻二彼崇丘一。其林藹藹。植物斯高。動物斯大。周風既洽。王猷允泰。漫漫方輿。回回洪覆。何類不レ繁。何生不レ茂。物極二其性一。人永二其壽一。恢恢大圜。芒芒九壤。資レ生仰レ化。于レ何不レ養。人無二道夭一。物極則長。

彼の崇丘を瞻れば、其林藹藹たり。(一)植物斯に高く、動物斯に大に、(二)周風既に洽く、王猷允に泰なり。(三)漫漫たる方輿、回回として洪覆す。(四)何の類か繁らざらん、何の生か茂せざらん。物は其性を極め、人は其壽を永うす。恢恢たる大圜、芒芒たる九壤。(五)生に資り化を仰ぐ、(六)何に于てか養はざらん。人に道夭無ければ、(七)物極めて則ち長ず。

(一) 高き岡なり (二) 茂盛の貌 (三) 周室の恩恵は洽く行きわたる (四) 廣大なる世界に天覆ひ地載す (五) 九州に同じ (六) 有生のもの皆徳化を仰ぐ (七) 中道にして死するを謂ふ

由儀

由儀は萬物の性、各々其儀を得る也。

肅肅君子。由レ儀率レ性。明明后辟。仁以爲レ政。魚遊二清沼一。鳥萃二平林一。濯レ

肅肅たる君子、儀に由り性に率ふ。明明たる后辟、(一)仁以て政を爲す。魚は清沼に遊び、鳥は平林に萃る。鱗を濯ぎ翼を鼓し、振振たる其音あり。賓は爾の誠を寫し、(二)主は其心を竭す。時の和げる、(三)何をか思ひ何をか修めん。文化内に輯

不レ播。無二下不一レ殖。芒芒其稼。參參其穡。稀二我王委一。充二我民食一。玉燭陽明。顯猷翼翼。

蕩蕩夷庚。物則由レ之。蠢蠢庶類。王亦柔レ之。道之既由。化之既柔。木以レ秋零。草以レ春抽。獸在二于草一。魚躍二順流一。四時遞謝。八風代扇。纖阿按レ晷。星變二其躔一。五緯不レ愆。六氣無レ易。愔愔我王。紹二文之跡一。

と(四)多くして長ずる貌 (五)君子の政を爲すや必ず三年の蓄あり是を委といふ (六)四時の氣和して大道明白なりとの意

由庚

由庚は萬物其道に由るを得るなり。

蕩蕩たる夷庚、(一)物則ち之に由る。(二)蠢蠢たる庶類、王亦之を柔んず。道の既に由る、化の既に柔げる、木は秋を以て零ち、草は春を以て抽んづ。獸は草に在り、魚は順流に躍る。四時遞に謝し、(三)八風代り扇ぐ。(四)纖阿晷を按じ、星は其躔を變ず。(五)五緯愆らず、六氣易る無し。(六)愔愔たる我が王、文の跡に紹げり。

(一)庚は道なり夷は常なり常道の意 (二)動き行く貌 (三)八方の風をいふ (四)月の御者なり (五)雨暘燠風時を五緯とし陰陽風雨晦明を六氣とす (六)安和なる我が王は能く周文王につぐとなり

崇丘

崇丘は萬物其高大を極むるを得る也。

華絳趺。在陵之陬。猗猗士子。涅而不渝。竭誠盡敬。亹亹忘劬。白華玄足。在丘之曲。堂堂處子。無營無欲。鮮侔晨葩。莫之點辱。

黯黯重雲。輯輯和風。黍華陵巓。麥秀丘中。靡田不播。九穀斯豐。奕奕玄霄。濛濛甘霤。黍發稠華。亦挺其秀。靡田不殖。九穀斯茂。無高

り、堂堂たる處子(七)、營む無く欲する無し。鮮は晨葩に侔し、之を點辱すること莫れ。

(一)草深き處に白花朱萼の花咲けり　(二)父に代つて門に當るべき正妻の婦子　(三)赤き萼足をいふ　(四)鮮明なる貌　(五)論語に涅にすれども緇まずとあり　(六)勉め勵む貌　(七)處士に同じ

華黍

華黍は時和し歲豐に、黍稷に宜しき也。

黯黯(一)たる重雲、輯輯たる和風。黍は陵巓に華き、麥は丘中に秀づ。田として播せざる靡く、九穀(二)斯れ豐なり。奕奕(三)たる玄霄、濛濛たる甘霤。黍は稠華を發し、亦其秀を挺んづ。田として殖ゑざる靡く、九穀斯れ茂る。高しとして播かざる無く、下しとして殖ゑざる無し。芒芒(四)たる其の稼、參參たる其の稷。我が王の委(五)を稸へ、我が民の食を充たす。玉燭(六)陽明にして、顯猷翼翼たり。

(一)雲色不明の貌文選に默々に作る　(二)稷、黍、秫、稻、麻、大小豆、大小麥をいふ　(三)光ある黑雲と雨降りの水流

晨餐一。循二彼南陔一。厥草油油。彼居之子。色思二其柔一。眷二戀庭闈一。心不二遑留一。罄二爾夕膳一。潔二爾晨羞一。有レ獺有レ獺。在二河之涘一。淩レ波赴レ汨。噬レ魴捕レ鯉。嗷嗷林烏。受二哺于子一。養隆敬薄。惟禽之似。勗増二爾虔一。以介二丕祉一。

獺布り獺有り、(六)河の涘に在り。波を淩いで汨に赴き、魴を噬ひ鯉を捕ふ。嗷嗷たる林烏、哺を子に受く。(七)養隆んに敬薄きは、惟禽に之似たり。勗めて爾の虔を増し、以て丕なる祉を介けよ。

(一)両親の居る家庭　(二)心安息するに暇あらず　(三)家に在りて未だ仕へざる子　(四)草の色によりて己も亦色を柔げよとなり　(五)朝げなり羞は滋味有る食品なり　(六)獺の魚を祭るが如く珍異を求めて其親を養ふべしとなり　(七)烏に反哺の孝あり

白華

白華朱萼。被二于幽薄一。粲粲門子。如レ磨如レ錯。終晨三省。匪レ惰二其恪一。白

白華は孝子の潔白なるなり。

白華朱萼、幽薄に被る。粲粲たる門子、(一)磨するが如く錯くが如し。終晨に三省し、其の恪(二)を惰るに匪ず。白華絳趺、(三)陵の阪に在り。蒨蒨たる士子、(四)涅にすれども渝らず。(五)誠を竭し敬を盡し、亹亹として(六)劬を忘る。白華玄足、丘の曲に在

所レ願。

序曰。皙與二同業疇人一肆二修鄉飲之禮一。然所レ詠之詩。或有レ義無レ詞。音樂取レ節。闕而不レ備。於レ是遙想二既往一。存二思在昔一。補二著其文一。以綴二舊制一。

循二彼南陔一。言采二其蘭一。眷二戀庭闈一。心不レ遑安。彼居之子。罔二或游盤一。馨二爾夕膳一。潔二爾

補亡詩六章

序に曰く、皙と同業疇人と、鄉飲の禮を肆修す。然も詠ずる所の詩、或は義有りて詞無く音樂節を取るに、闕けて備はらず。是に於て遙に既往を想ひ、在昔を存思し、其文を補著して、以て舊制を綴りぬ。

一 誦習の意

南陔

南陔は、孝子相戒しむるに養を以てするなり。

彼の南陔に循つて、言に其の蘭を采る。庭闈を眷戀して、心遑安せず。彼の居る之の子、或は游盤する罔れ。爾の夕膳を馨しうし、爾の晨餐を潔うせよ。彼の南陔に循ふに、厥の草油油たり。彼の居る之の子、色は其の柔を思へ。庭闈を眷戀して、心に遑留せず。爾の夕膳を馨しうし、爾の晨羞を潔うせよ。

燕人美兮趙女佳。其室則邇兮限二曾崖一。雲爲レ車兮風爲レ馬。玉在レ山兮蘭在レ野。雲無レ期兮風有レ止。思多端兮誰能理。

車遙遙兮馬洋洋。追二思君一兮不レ可レ忘。君安遊兮西入レ秦。願爲レ影兮隨二君身一。君在レ陰兮影不レ見。君依レ光兮妾

呉楚歌

燕人は美なり趙女は佳なり。其の室は則ち邇きも(一)層崖に限らる。雲は車爲り風は馬爲り。玉は山に在り蘭は野に在り。(二)雲に期無く風に止む有り。思ふこと多端なり誰か能く理めん。

(一)居相近きも中間に崖岸ありて通じ難し　(二)車馬も通じ難しとの意を寓す

車遙遙篇

車(一)遙遙たり馬洋洋たり。君を追思して忘るべからず。君安んか遊ぶ西のかた秦(二)に入る、願はくは影と爲りて君が身に隨はん。(三)君陰に在れば影は見えず、君の光に依らんは妾が願ふ所なり。

(一)遠く行く貌下も亦同じ　(二)關中の地を言ふ　(三)君が日陰に立つ時は影を見る能はず

束晳

志士惜二日短一
愁人知二夜長一
攝レ衣步二前庭一。
仰觀二南鴈翔一。
玄景隨レ形運。
流響歸二空房一。
清風何飄颻。
微月出二西方一。
繁星依二青天一。
列宿自成レ行。
蟬鳴二高樹間一。
野鳥號二東廂一。
纖雲時髣髴。
渥露沾二我裳一。良時無二停影一。北斗忽低昂。常恐寒節至。凝氣結爲レ霜。落葉隨レ風摧。一絕如二流光一。

志士は日の短きを惜み、愁人は夜の長きを知る。衣を攝して前庭に步し、仰いで(一)南鴈の翔るを觀る。(二)玄景形に隨つて運り、流響空房に歸す。清風何ぞ飄颻たる、微月西方に出づ。(三)繁星は青天に依り、列宿は自ら行を成す。蟬は高樹の間に鳴き、野鳥は東廂に號ぶ。纖雲時に髣髴、(四)渥露我が裳を沾す。良時に停る影無く、北斗忽ち低昂。常に恐らくは寒節至つて、(五)凝氣の結んで霜と爲らんことを。落葉風に隨つて摧け、一絕して流光の如し。

(一) 南に飛び行く雁影　(二) 日月移り進んで餘光は人無き房室を照す　(三) 繁く多き星なり　(四) 多くして濃々たる露　(五) 凝り結ぶ寒氣

雜言

雷隱隱感二妾
心一。傾レ耳清聽
非二車音一。

(一)雷隱隱として妾が心を感ぜしむ、耳を傾けて清聽するに車音には非ず。

(一) 雷聲の轟くは君王の車響なるべしと誤認せるなり隱は殷に同じ

與レ形。何意一去。心如二流星一。昔君與レ我。兩心相結。何意今日。忽然兩絕。

皎皎明月光。灼灼朝日暉。昔爲二春蠶絲一。今爲二秋女衣一。丹脣列二素齒一。翠彩發二蛾眉一。嬌子多二好言一。歡合易レ爲レ姿。玉顏盛有レ時。秀色隨レ年衰。常恐二新間レ舊。變故興二細微一。浮萍本無レ根。非レ水將何依。憂喜更相接。樂極還自悲。

明月篇

皎皎たる明月の光、灼灼たる朝日の暉。昔は春の蠶絲爲り、今は秋の女衣爲り。(一)丹脣素齒を列ね、翠彩蛾眉に發す。(二)嬌子に好言多く、歡合姿を爲し易し。玉顏盛なること時有り、秀色年に隨つて衰ふ。常に新の舊を間てんことを恐る、(三)變故は細微より興る。浮萍は本根無し、水に非ずば將何にか依らん。(四)憂喜して更相接す、樂極つて還自ら悲しむ。

(一)赤き唇に白き齒あり　(二)遊蕩の士人　(三)變事に同じ　(四)一憂一喜互に相交り到るとなり

雜詩

挾レ纊如レ懷レ冰。伏レ枕終二遙夕一。寤言莫二予應一。永思慮二崇替一。慨然獨拊レ膺。

長安高城。層樓亭亭。干雲四起。上貫二天庭一。蜉蝣何整。行如二軍征一。蟋蟀何感。中夜哀鳴。蚍蜉愉樂。粲粲其榮。寤寐念レ之。誰知二我情一。昔君視レ我。如二掌中珠一。何意一朝。棄二我溝渠一。昔君與レ我。如二影

傅玄

休奕が詩は、聰慧の處に時に累句を帶ぶ。大約樂府に長じて、古詩に拙なり。

短歌行

長安の高城、層樓亭亭たり。干雲四に起り、上天庭を貫く。蜉蝣何ぞ整へる、行くこと軍の(一)征くが如し。蟋蟀(二)何をか感ずる、中夜に哀鳴す。(三)蚍蜉愉樂して、(四)粲たり其の榮。寤寐に之を念ふ、誰か我が情を知らんや。昔は君の我を視るや、掌中の珠の如くなりき。何ぞ意はん一朝にして、我を(五)溝渠に棄てんとは。昔は君と我と、影と形との如くなりき。何ぞ意はん一去して、(六)心流星の如くならんとは。昔は君と我と、兩心相結べり。何ぞ意はん今日、忽然として(七)兩つながら絶えんとは。

(一) 即ち我が夫君の居る所たり　(二) 一本千雲に作る　(三) 夫君に喩ふ淺行して顧みずとなり　(四) 笑ひさゞめく貌　(五) 溝中に投棄せり　(六) 去つて還ることなきに喩ふ　(七) 夫妻の相絕つ意

游目四野外。
逍遙獨延佇。
蘭蕙緣清渠。
繁華蔭綠渚。
佳人不在茲。
取此欲誰與。
巢居知風寒。
穴處識陰雨。
不曾遠別離。
安知慕儔侶。

晷度隨天運。
四時互相承。
東壁正昏中。
涸陰寒節升。
繁霜降當夕。
悲風中夜興。
朱火青無光。
蘭膏坐自凝。
重衾無暖氣。

目を(一)四野の外に游ばし、逍遙して獨り延佇(二)す。蘭蕙清渠を緣とり、(三)繁華綠渚を蔭へり。佳人茲に在らず、此を取つて誰と與にせんとか欲する。(四)巢居して風寒を知り、穴處して陰雨を識る。曾て遠く別離せずば、安ぞ儔侶を慕ふを知らんや。

(一) 四方に同じ　(二) 留り佇立す　(三) 蘭蕙の繁き美花　(四) 二句は下文の前提なり境遇によりて眞情を知るとなり

雜詩

(一)晷度天に隨つて運り、四時互に相承く。(二)東壁正に昏中し、涸陰寒節升る。(三)繁霜當夕に降り、悲風中夜に興る。(四)朱火青うして光無く、蘭膏坐に自ら凝る。衾を重ぬれども暖氣無く、纊を挾めども冰を懷くが如し。枕に伏して遙夕を終へ、寤言して予に應ずる莫し。永く思うて(五)崇替を慮かり、慨然として獨り胸を拊つ。

(一) 日月の運行をいふ　(二) 仲冬の月なり禮記に見ゆ　(三) 今夜に嚴霜あり　(四) 火も亦寒に堪へずと形容するなり　(五) 盛衰榮枯の意

自レ昔同寮寀。於レ今比二園廬一。衰夕近二辱殆一。庶幾並懸レ輿。散二髪重陰下一。抱レ杖臨二清渠一。屬レ耳聽二鶯鳴一。流目玩二鯈魚一。從容養二餘日一。取二樂於桑楡一。

樂を桑楡に取らん。(七)

㊀迫切にしてうるさく人を拘束す　㊁冠の紐は冠をつなぐ縄となり法令は終に犯すべからず　㊂恬淡安易の貌　㊃同じ役所に勤務したりとなり　㊄今は舊宅に列び住み養老に及ばんとなり　㊅退官する義以下退官後の優遊を叙す　㊆日暮をいふ晩年に喩ふ

情詩

清風動二帷簾一。晨月照二幽房一。佳人處二遐遠一。蘭室無二容光一。襟懷擁二虛景一。輕衾覆二空牀一。居レ歡惜二夜促一。在レ慼怨二宵長一。拊レ枕獨嘯歎。感慨心內傷。

清風帷簾を動かし、(一)晨月幽房を照す。佳人遐遠に處り、(二)蘭室に容光無し。(三)襟懷虛景を擁し、輕衾空牀を覆ふ。歡に居て夜の促きを惜み、(四)慼に在りて宵の長きを怨む。枕を拊つて獨り嘯歎し、感慨して心內に傷む。

㊀有明の月　㊁芳蘭の好室に美姿を見はさず　㊂心中に空想を浮ぶ　㊃憂愁の時なり

復レ禮終レ朝。天下歸レ仁。若二金受一レ礪。若二泥在一レ鈞。進レ德修レ業。輝光日新。隰朋仰慕。予亦何人。

(一)禮に復して朝を終ふれば、天下仁に歸す。金の礪を受くるが若く、(二)泥の鈞に在るが若し。德を進め業を修めて、輝光日に新なり。(三)隰朋仰ぎ慕へり、予亦何人ぞや。

(一) 克己復禮を以て爲政の方針とす (二) 泥をこねて陶器を作る時の型た物といふ (三) 齊の名臣なり管仲と同時の人

吏道何其迫。窘然坐自拘。纓緌爲二徽纆一。文憲焉可レ踰。恬曠若レ不レ足。煩促每有レ餘。良朋貽二新詩一。示レ我以二遊娛一。穆如レ灑二清風一。奐若二春華發一。

何劭に答ふ

吏道は何ぞ其れ迫るや、窘然として坐ら自ら拘はる。(一)纓緌は徽纆と爲る、文憲焉ぞ踰ゆべけん。(二)恬曠にして足らざるを苦しみ、煩促にして每に餘有り。良朋新詩を貽り、我に示すに遊娛を以てす。穆として淸風に灑ぐが如く、奐として春華の發くが若し。昔より(四)寮寀を同じうせり、今に於て(五)園廬に比す。衰夕にして辱殆に近く、庶幾は並に(六)輿を懸けん。髮を重陰の下に散じ、杖を抱いて淸溪に臨まん。耳を屬けて鶯鳴を聽き、流目して鯈魚を玩ばん。從容として餘日を養ひ、

安ニ心恬蕩一。棲ニ志浮雲一。體レ之以レ質。彪レ之以レ文。如ニ彼南畝一。力耒既勤。穮蔉致レ功。必有ニ豐殷一。

水積成レ淵、載瀾載清。土積成レ山。歊蒸鬱冥。山不レ讓レ塵。川不レ辭レ盈。勉致ニ含弘一。以隆ニ德聲一。

高以レ下基。洪由レ纖起。川廣自レ源。成レ人在レ始。累レ微以著。乃物之理。纏牽之長。實累ニ千里一。

心を恬蕩(一)に安らかにし、志を浮雲に棲ましむ。之を體するに質を以てし、之を彪(二)にするに文を以てす。彼の南畝の如く、力耒既に勤め、穮蔉(三)功を致せば、必ず豐殷有らん。

(一)恬淡安易の貌　(二)斑をつけて飾る　(三)左傳に穮蔉とあり是なり。耘し草を除き培養する義

水積んで淵を成し、載ち瀾だち載ち清し。土積んで山を成し、歊蒸鬱冥(一)なり。山は塵を讓らず、川は盈を辭せず。勉めて含弘(二)を致し、以て德聲を隆にす。

(一)氣の上り蒸して鬱積するなり　(二)遠大廣濶の氣象

高は下を以て基とし、洪(一)は纖由り起る。川の廣きは源よりし、人と成るは始に在り。微を累ねて以て著るゝは、乃ち物の理なり。纏牽(二)の長き、實に千里を累はん。

(一)大は小より起る　(二)長索を綱とすれば千里の馬も充分に蹴足を伸ばすを得ず、戰國策に出づ

仁道不レ遐。德輶如レ羽。求焉斯至。衆鮮レ克擧。大猷玄漠。將レ抽二厥緒一。先民有レ作。遺二我高矩一。

雖レ有二淑姿一。放レ心縱逸。田般二于遊一。居多二暇日一。如二彼梓材一。弗レ勤二丹漆一。雖レ勞二朴斲一。終負二素質一。

養由矯レ矢。獸號二于林一。蒲盧縈レ繳。神感二飛禽一。末技之妙。動レ物應レ心。研レ精就レ道。安有二幽深一。

(一)仁道遐からず、德輶きこと羽の如し。求むれば斯に至るも、(二)衆克く擧ぐるもの鮮し。(三)大猷玄漠、將に厥の緖を抽かんとす。(四)先民作ること有り、我に高矩を貽せり。

(一) 論語に仁を欲すれば仁至るとある意に採る (二) 輕きこと毛の如きものなれども之を擧げ得ずとなり (三) 遠大なる計謀 (四) 上世の君子は我に良規範を殘しくれたり

(一)淑姿有りと雖も、心を放つこと縱逸なり。田して遊に般しみ、居るに暇日多し、彼の梓材の如き、丹漆を勤めずば、(二)朴斲を勞すと雖も、終に素質に負かん。

(一) よき姿貌なり (二) 斲ち削り彫琢をなさずば却つて其素質に背かんとなり

(一)養由矢を矯めて、獸は林に號び、(二)蒲盧繳を縈うて、神は飛禽を感ぜしむ。末技の妙も、物を動かし心に應ず。(三)精を研き道に就らんに、安んぞ幽深有らんや。

(一) 古代の善射者 (二) 古代の善くいぐるみを飛ばせし人名 (三) 精神一到せば道 幽深をも必ず得べしとなり

太儀斡運。天廻地游。四氣鱗次。寒暑環周。星火既夕。忽焉素秋。涼風振落。熠燿宵流。

吉士思秋。實感物化。日與月與。荏苒代謝。逝者如斯。曾無日夜。嗟爾庶士。胡寧自舍。

張華

茂先が詩は、詩品に謂ふ、其れ兒女の情多くして風雲の氣少しと。此も亦盡く終らず。之を總じて筆力高からず。凌空矯捷の致を少く。

勵志の詩

(一)太儀斡運し、天廻り地游る。(二)四氣鱗のごとく次で、寒暑環のごとく周る。(三)星火既に夕にして、忽焉として素秋なり。涼風振落して、(四)熠燿宵流る。

(一)吉士秋を思うて、實に物化に感ず。日か月か、(二)荏苒として代謝す。逝く者は斯の如し、曾ち日夜無し。嗟爾庶士、胡寧れぞ自ら舍まん。

(一)天運の移りめぐるなり　(二)春夏秋冬の氣　(三)星のめぐりが既に秋となる意　(四)螢火などを指す

(一)好人なり、詩經に吉士之を誘ふとあるによる　(二)展轉の間に四季の變遷する義

天地開闢。日月重光。遭逢際會。奉辭遐方。將掃逋穢。還過故鄉。肅淸萬里。總齊八荒。告成歸老。待罪武陽。

巻七

晉詩

司馬懿

讌飲詩

晉書に、高祖の公孫淵を伐つや、溫を過ぎて父老故舊を見、燕飲して日を累ね、歌を作りぬ。

天地開闢して、日月光を重ぬ。遭逢際會、(一)辭を遐方に奉ず。將に逋穢を掃はん(二)とし、還りて故鄉を過ぐ。萬里を肅淸し、八荒を總齊す。(三)成を告げて歸老し、罪を武陽に待たん。(四)

(一) 魏の賢主に遭うて遠く出征せりとなり (二) 逋逃せる醜穢の徒公孫淵の黨を指す (三) 八方を總べ整ふ (四) 論功行賞を待つことを自ら謙言す

銜レ刀游渡レ江。
不レ畏二岸上虎一。
但畏二水中龍一。

る。

㈠ 吳の末主なり孫權の孫にして後に晉に歸す ㈡ 童兒といふに同じ ㈢ 水中より來るを恐るゝ義なり王濬の龍驤將軍は是に應ずるなり

雖レ思レ復。心焉内疚。庶レ㑥二將來一。無レ譽無レ臭。采二薇山阿一。散二髮巖岫一。永嘯長吟。頤レ性養レ壽。

呉の謠（附）

曲有レ誤。周郞顧。

呉志に、周瑜は意を音樂に精しうし、(一)三爵の後、闕誤有れば、瑜必ず之を知り、之を知れば必ず顧る。時人語つて曰く、

(二)曲に誤有れば、周郞顧る。

(一)酒杯斂巡の後　(二)歌曲に若し過誤有るときは周瑜顧眄すとなり

孫皓が天紀中の童謠

阿童復阿童。

晉書五行志に、(一)孫皓の天紀中に童謠あり。晉武之を聞き、王濬に龍驤將軍を加へ、呉を征するに及び、江西の衆軍過ぐる者無きに、濬は先づ秣陵を定めたり。

(二)阿童復阿童、刀を銜んで游いで江を渡る。岸上の虎を畏れず、但水中の(三)龍を畏

罄。神氣晏如。咨予不レ淑。嬰レ累多レ虞。匪レ降レ自レ天。實由二頑疎一。理弊患結。卒致二囹圄一。對答鄙訊。縶二此幽阻一。實恥二頌寃一。時不二我與一。雖レ曰二義直一。神辱志沮。澡二身滄浪一。豈曰二能補一。嗈嗈鳴鴈。奮レ翼北遊。順レ時而動。得レ意忘レ憂。嗟我憤歎。曾莫二能儔一。事與レ願違。遘二玆淹留一。窮達有レ命。亦又何求。古人有レ言。善莫レ近レ名。奉レ時恭默。咎悔不レ生。萬石周愼。安レ親保レ榮。世務紛紜。祇攪二予情一。安樂必誠。乃終二利貞一。煌煌靈芝。一年三秀。予獨何爲。有レ志不レ就。懲レ

も就らざる。難(二三)に懲り復を思ひ、心焉に内に疚し。庶くは將來を勗めて、馨(二四)も無く臭も無く、薇を山阿に采り、髪を巖岫に散じ、永嘯長吟して、性を頤ひ壽を養はん。

一 家道未だ成らざる時 二 幼にしてむつきの中に在り 三 恣にして默々つげたるなり 四 志を高尚にして古人を學ばんとす 五 老莊の學を好みしを指す 六 眞素樸實恬澹の風を守らんと欲す 七 楚の大夫なり左傳を參照すべし 八 大人物は大きく度やかにして能く恥辱をも寬容すとなり 九 恐懼戒愼して傷つけるが如くす 一〇 柳下惠なり孫登は嵇康を戒めて今の世に免れ難からんと云ひし人 一一 鄭守眞と嚴君平と共に隱居して長壽を保ちし人 一二 自らこの災禍に罹れりとなり 一三 獄裡の人となる 一四 問はるゝに答ふることと鄙陋なり 一五 訟寃に同じ 一六 楚の屈原の漁父の辭參照 一七 雁の鳴く聲にいふ 一八 繫獄の久しきを歎ずるなり 一九 莊子に善を爲して名を求むるの弊を言へり 二〇 書經易經などによりて言けり 二一 漢の萬石君は極めて恭謹の人なりき 二二 安樂の時に戒愼を加ふれば必ず幸福なりとの義 二三 難を免れて復せんことを願ふ 二四 空々漠々世間と沒交渉にて性命を全うせんとなり

身。志在レ守レ樸。養レ素全レ眞。曰余不敏。好レ善闇レ人。子玉之敗。屢增二維塵一。大人含弘。藏レ垢懷レ恥。民之多レ僻。政不レ由レ己。惟此褊心。顯二明臧否一。感悟思レ愆。怛若二創痏一。欲レ寡二其過一。謗議沸騰。性不レ傷レ物。頻致二怨憎一。昔慚二柳惠一。今媿二孫登一。內負二宿心一。外恧二良朋一。仰慕二嚴鄭一。樂レ道閑居。與レ世無レ

を寡うせんと欲するも、謗議は沸騰せり。性は物を傷はざるも、頻に怨憎を致し、昔は柳惠(一〇)に慚ぢ、今は孫登に媿づ。內は宿心に負き、外は良朋に恧づ。仰いで嚴鄭(一一)を慕ひ、道を樂しんで閑居す。世と營む無く、神氣晏如たり。咨予淑からず、累に嬰りて虞多し。天より降るに匪ず、實に頑疎なるに由れり。理弊れ患結ぼり、卒に囹圄(一三)を致しぬ。對答鄙訊(一四)、此の幽阻(一二)に繫がれ、實に頌寃(一五)を恥づ。時は我と與ならず、義直なりと曰ふと雖も、神辱しめられ志沮む。身を滄浪(一六)に澡ぐ、豈能く補ふと曰はんや。嚶嚶(一七)たる鳴雁、翼を奮うて北遊し、時に順つて動き、意を得ては憂を忘る。嗟我が憤歎、曾ち能く儔ふもの莫し。事は願と違ひ、茲の淹留(一八)に遘へり。窮達命有り、亦又何をか求めん。古人言へる有り、善(一九)は名に近づく莫れ、時(二〇)に奉じて恭默なれば、咎悔生ぜずと。萬石(二一)の周愼なる、親を安んじ榮を保ちき。世務紛紜、祇に予が情を攪す、安樂(二二)は必ず誠しむれば、乃ち利貞に終らん。煌煌たる靈芝、一年に三たび秀づ。予獨り何爲れぞ、志有る

鼓彈。仰慕二同趣一。其馨如レ蘭。佳人不レ存。能不二永歎一。

幽憤の詩

晉書に、康と呂安と善し。安は後に兄の爲に枉訴せられ、事を以て獄に繫がる。詞もて相證引するに、遂に康をも收めき。康乃ち此の詩を作りぬ。

嗟余薄レ祜。少遭二不造一。哀煢靡レ識。越在二繦緥一。母兄鞠育。有レ慈無レ威。恃レ愛肆姐。不レ訓不レ師。爰及二冠帶一。憑レ寵自放。抗レ心希レ古。任二其所一レ尚。託二好老莊一。賤レ物貴レ

嗟余祜薄うして、少うして(一)不造に遭へり。哀煢にして識る靡く、越に(二)繦緥に在り。母兄鞠育し、慈有るも威無し。愛を恃んで(三)肆姐、訓あらず師あらず。爰に冠帶に及び、寵を憑んで自ら放にし、(四)心を抗げて古を希ひ、其尙ふ所に任せたり。(五)好を老莊に託し、物を賤しみ身を貴くし、志は(六)樸を守るに在りて、素を養ひ眞を全うせんとす。曰に余不敏、善を好めども人に闇く、(七)子玉の敗、屢〻塵を增しぬ。大人(八)含弘、垢を藏し恥を懷く。民の僻多きや、政己に由らず。惟此の褊心、臧否を顯明にす。感悟して愆を思ひ、(九)怛として創痏の若し。其過

言出遊。日夕忘ㇾ歸。思ニ我良朋ー。如ㇾ渴如ㇾ饑。願言不ㇾ獲。愴矣其悲。

㊀ 岡境なり ㊁ 水中に出没する貌 ㊂ 良朋に會見せんことを願へども得ずとなり

息ニ徒蘭圃ー。秣ニ馬華山ー。流ニ磻平皐ー。垂ニ綸長川ー。目ニ送歸鴻ー。手揮ニ五絃ー。俯仰自得。游ニ心太玄ー。嘉ニ彼釣叟ー。得ㇾ魚忘ㇾ筌。郢人逝矣。誰與盡ㇾ言。

徒を蘭圃に息へ、馬に華山に秣かふ。磻を平皐に流し、綸を長川に垂る。歸鴻を目送して、手に五絃を揮ふ。俯仰自得して、心を太玄に游ばす。彼の釣叟を嘉す、魚を得て筌を忘れしを。郢人逝けり、誰と與にか言を盡さん。

㊀ 蕙蘭の園圃 ㊁ いぐるみに著くる石をいふ ㊂ 一種の樂器 ㊃ 莊子に魚を得て筌を忘れし話見ゆ ㊄ 莊子に惠子の墓を過ぎて郢人云々の話あり參見すべし

閑夜肅清。朗月照ㇾ軒。微風動ㇾ袿。組帳高褰。旨酒盈ㇾ樽。莫ニ與交ㇾ歡。鳴琴在ㇾ御。誰與

閑夜肅清、朗月軒を照す。微風袿を動かし、組帳高く褰ぐ。旨酒は樽に盈つ、與に歡を交ふる莫し。鳴琴は御に在り、誰と與にか鼓彈せん。仰いでは同趣を慕ふ、其馨蘭の如し。佳人存せず、能く永歎せざらんや。

㊀ 衣裾に同じ ㊁ 友朋無きをいふ從兄の去るを指す ㊂ 易に同心の言は其臭蘭の如しとあり

生ㇾ姿。携二我好仇一。載二我輕車一。南凌二長阜一。北厲二清渠一。仰落二驚鴻一。俯引二淵魚一。盤二于游田一。其樂只且。

㊀楚王の名弓なり忘歸は矢の名　㊁日月の光を追ひ進むとの意　㊂好き相手なり　㊃田獵遊漁の樂みに耽るとなり

輕車迅邁。息二彼長林一。春木載榮。布ㇾ葉垂ㇾ陰。習習谷風。吹二我素琴一。咬咬黃鳥。顧ㇾ儔弄ㇾ音。感悟馳ㇾ情。思二我所一ㇾ欽。心之憂矣。永嘯長吟。

輕車迅く邁き、彼の長林に息ふ。春木載ち榮き、葉を布き陰を垂る。習習（一）たる谷風、我が素琴を吹く。咬咬（二）たる黃鳥、儔を顧みて音を弄す。感悟して情を馳せ、我が欽ふ所を思ふ。心之を憂へて、永嘯し長吟す。

㊀和順なる風　㊁美好の聲にいふ

浩浩洪流。帶二我邦畿一。萋萋綠林。奮ㇾ榮揚ㇾ暉。魚龍瀺灂。山鳥羣飛。駕

浩浩たる洪流、我が邦畿（一）を帶る。萋萋たる綠林、榮を奮ひ暉を揚ぐ。魚龍瀺（二）灂として、山鳥羣り飛ぶ。駕して言に出遊し、日夕まで歸るを忘る。我が良朋を思ふこと、渴くが如く饑うるが如し。（三）願言して獲ず、愴として其れ悲しむ。

携レ手同レ車。龍驤翼翼。揚レ鑣踟躕。蕭蕭宵征。造ニ我友廬一。光燈吐レ輝。華幔長舒。鸞觴酌レ醴。神鼎烹レ魚。絃超ニ子野一。歎過ニ綿駒一。流ニ詠太素一。俯讃ニ玄虚一。孰克英賢。與レ爾剖レ符。

鼎もて魚を烹る。絃は子野に超え、(四)歎は綿駒に過ぐ。(五)(六)太素を流詠し、俯して玄虚を讃す。孰か克く英賢なる、爾と符を剖かん。

(一)高く天の一隅に懸る　(二)駿馬の蕭々として車を引くなり　(三)下句の神鼎と共に美稱するなり　(四)晉の師曠が字　(五)高唐に居りし上代の名歌者　(六)宇宙物質の始なり玄虚は無形衆妙の道なり

良馬既閑。麗服有レ暉。左攬ニ繁弱一。右接ニ忘歸一。風馳電逝。躡レ景追レ飛。淩ニ厲中原一。顧盼

秀才の軍に入るに贈る

從兄秀才公穆、即ち嵆なり。

良馬既に閑ひ、麗服暉有り。左に繁弱を攬り、(一)右に忘歸を接す。風のごとく馳せ電のごとく逝き、(二)景を躡み飛を追ひ、中原を淩厲し、顧盼して姿を生ず。(三)我が好仇を携へ、我が輕車に載り、南のかた長阜を凌ぎ、北のかた清渠を厲り、仰いで驚鴻を落し、俯して淵魚を引く。(四)游田に盤しんで、其樂み只且。

天地解兮六合開。星辰隕兮日月頽。我騰而上。將ニ何懷一。

微風清扇。雲氣四除。皎皎亮月。麗ニ于高隅一。興命ニ公子一。

大人先生の歌

(一)天地解けて六合開き、星辰隕ちて日月頽る。(二)我騰つて上る、將に何をか懷はんとせん。

(一)天地破壞す　(二)この時予獨り脫躍して自由に優遊せんと欲すとなり

嵇康

叔夜が四言は、時に俊語多し。三百篇に摹倣せず。允に晉人の先聲爲り。

雜詩

微風清く扇ぎ、雲氣四に除ふ。皎皎たる亮月、(一)高隅に麗く。興つて公子に命じ、手を携へて車を同じうす。(二)龍驥翼翼、鑣を揚げて踟蹰し、肅肅として宵征き、我が友の廬に造る。光燈は輝を吐き、華幔は長く舒ぶ。(三)鸞觴もて醴を酌み、神

林中有二奇鳥一。自言是鳳凰。清朝飲二醴泉一。日夕棲二山岡一。高鳴徹二九州一。延レ頸望二八荒一。適逢二商風起一。羽翼自摧藏。一去二崑崙西一。何時復廻翔。但恨處非レ位。愴悢使二心傷一。

林中に奇鳥有り、自ら言ふ是鳳凰と。清朝に醴泉(一)を飲み、日夕は山岡に棲む。高く鳴けば九州に徹し、頸を延けば八荒(二)を望む。適〻商風の起るに逢ひ、羽翼自ら摧藏す。一たび崑崙(三)の西に去らば、何の時か復廻翔せん。但恨む處ること位に非ず(四)、愴悢として心をして傷ましむ。

(一) 老を養ふ良水を出す美泉の名　(二) 八方の邊地　(三) 天帝の下都と稱せらる西域に在り　(四) 予も亦鳳凰の如くならんと欲すれど、境遇は適切ならずとなり

出レ門望二佳人一。佳人豈在レ茲。三山招二松喬一。萬世誰與期。存亡有二長短一。慷慨將焉知。忽忽朝日潰。行行將二何之一。不レ見季秋草。摧折在二今時一。

門を出でて佳人を望む、佳人豈茲に在らんや。三山(一)は松喬を招く、萬世誰と與にか期せん。存亡に長短有り、慷慨將焉ぞ知らん。忽忽として朝日潰え、行行(二)と して將に何くに之かんとする。見ずや季秋の草、摧折(三)今の時に在ることを。

(一) 海中の三仙山より赤松子王子喬の徒を招くとなり　(二) 長道を渉り行く貌　(三) 折れくじけ衰へ悴むなり

濔洄紛交流。
孔聖臨㆓長川㆒。
惜㆑逝忽若㆑浮。
去者余不㆑及。
來者吾不㆑留。
願登㆓太華山㆒。上與㆓松子㆒遊。漁父知㆓世患㆒。乘㆑流泛㆓輕舟㆒。

（五）漁父は世の患を知る、流に乘じて輕舟を泛ぶ。

㊀短き日月を一日も九十日の秋の如く考ふるは如何なる理由ぞとなり　㊁齊の景公なり晏子春秋參照　㊂孔子が河に臨んで歎息せし故事　㊃古代の仙人赤松子　㊄屈原に說きし漁父の類を指す

儒者通㆓六藝㆒。
立志不㆑可㆑干。
違㆑禮不㆑爲㆑動。
非㆑法不㆓肯言㆒。
渴飲㆓清泉流㆒。
饑食幷㆓一簞㆒。
歲時無㆓以祀㆒。
衣服常苦寒。
屣履詠㆓南風㆒。
縕袍笑㆓華軒㆒。
信㆑道守㆓詩書㆒。義不㆑受㆓一餐㆒。烈烈褒貶辭。老氏用長歎。

儒者は六藝（一）に通ず、立志は干すべからず。禮（二）に違へば動を爲さず、法に非ざれば肯て言はず。渴して清泉の流を飲み、饑ゑ食ふに（三）一簞を幷す。歲時に以て祀る無く、衣服常に苦だ寒し。（四）屣履して南風を詠じ、（五）縕袍にして華軒を笑ふ。道を信じて詩書を守り、義一餐をも受けず。（六）烈烈たる褒貶の辭あり、老氏以て長歎せり。

㊀詩書易禮樂春秋なり　㊁禮に非ざれば動かざる義　㊂一箱の食物を數日に食ふが如き貧困をいふなるべし　㊃履物をつつかけばきしたるなり　㊄花やかなる大車　㊅儒家の義を聞いて老氏の徒歎息すとなり

駕言發二魏都一。南向望二吹臺一。簫管有二遺音一。梁王安在哉。戰士食二糟糠一。賢者處二蒿萊一。歌舞曲未レ終。秦兵已復來。夾林非二吾有一。朱宮生二塵埃一。軍敗二華陽下一。身竟爲二土灰一。

駕して言に魏都を發し、南向して吹臺(一)を望む。簫管に遺音有り、梁王安くに在りや。戰士は糟糠を食ひ、賢者は蒿萊(二)に處る。歌舞の曲未だ終らず、秦兵已に復來る。(三)夾林は吾が有に非ず、朱宮に塵埃を生ず。(四)軍は華陽の下に敗れて、身は竟に土灰と爲りぬ。

(一) 春秋晉の平公の樂師師曠が晉樂堂なりとぞ後に梁の孝王之を修治せり　(二) 偏鄙の地に隱居して粗衣粗食す
(三) 梁宮の名　(四) 史記韓世家を參照すべし

朝陽不二再盛一。白日忽西幽。去レ此若二俯仰一。如何似二九秋一。人生若二塵露一。天道邈悠悠。齊景升二丘山一。

朝陽は再び盛ならず、白日は忽ち西に幽る。(一)此を去るに俯仰の若し、如何か九秋に似たる。人生は塵露の若く、天道は邈として悠悠。(二)齊景は丘山に升り、涕泗紛として交流す。(三)孔聖長川に臨み、逝を惜んで忽として浮ぶが若し。去る者は余及ばず、來る者は吾留めず、願くは太華山に登つて、上のかた(四)松子と遊ばん。

左右珮ニ雙璜一。
修容耀ニ姿美一。
順レ風振ニ微芳一。
登レ高眺レ所レ思。
擧レ袂當ニ朝陽一。
寄ニ顏雲霄間一。
揮レ袖淩レ虛翔。
飄颻恍惚中。流盼顧ニ我傍一。悅懌未ニ交接一。晤言用感傷。

め、袂を擧げて朝陽に當る。顏を雲霄(三)の間に寄せ、袖を揮うて虛を淩いで翔る。飄颻恍惚の中、流盼(四)して我が傍を顧みる。悅懌して未だ交接せず、晤言して用て感傷す。

(一)細微美麗なるうす絹の衣服　(二)二つの耳飾りの玉　(三)空間天雲の際　(四)流目に顧視す

於レ心懷ニ寸陰一。
羲陽將レ欲レ冥。
揮レ袂撫ニ長劍一。
仰觀浮雲征一。
雲間有ニ玄鶴一。
抗レ志揚ニ哀聲一。
一飛冲ニ靑天一。
曠レ世不ニ再鳴一。
豈與ニ鶉鷃一遊。連翩戲ニ中庭一。

心に於て寸陰(一)を懷へども、羲陽は將に冥れんと欲す。袂を揮つて長劍を撫し、仰いで浮雲の征くを觀る。雲間に玄鶴(二)有り、志を抗げて哀聲を揚ぐ。一飛して靑天に冲り、(三)世を曠しうして再鳴かず。豈鶉鷃(四)と遊ばんや、連翩として中庭に戲むる。

(一)寸陰を惜む意　(二)年老いて黑くなれる鶴　(三)世に稀なる義　(四)小鳥なり小人に喩ふ

離獸東南下。日暮思二親友一。晤言用自寫。

懸車在二西南一。
羲和將レ欲レ傾。
流光耀二四海一。
忽忽至二夕冥一。
朝爲二咸池暉一。
蒙汜受二其榮一。
豈知窮達士。
一死不二再生一。
視彼桃李花。
誰能久熒熒。
君子在二何許一。
歎息未二合并一。
瞻二仰景山松一。可三以慰二吾情一。

懸車西南に在り、羲和將に傾かんと欲せんとす。流光四海に耀き、忽忽として夕冥(一)に至る。朝に咸池(二)の暉を爲し、蒙汜(三)は其榮を受く。豈知らんや窮達の士、一たび死して再生せざるを。視る彼の桃李の花、誰か能く久しく熒熒(四)たらん。君子何の許にか在る。歎息して未だ合并せず。景山(五)の松を瞻仰して、以て吾が情を慰むべし。

(一) 日光なり義和は日輪の御なり前出 (二) 日出處なりとぞ (三) 日入所なり又濛汜に作る (四) 光彩ある貌 (五) 江南の名山なり梟麗諸山の冠たりといふ

西方有二佳人一。
皎若二白日光一。
被二服纖羅衣一。

西方に佳人有り、皎として白日の光の若し。纖羅の衣を被服して、左右に雙璜(一)を佩ぶ。修容は姿の美に耀き、風に順つて微芳(二)を振ふ。高に登つて思ふ所を眺

還顧望大梁。
綠水揚洪波。
曠野莽茫茫。
走獸交橫馳。
飛鳥相隨翔。
是時鶉火中。
日月正相望。
朔風厲嚴寒。
陰氣下微霜。
羇旅無儔匹。
俛仰懷哀傷。
小人計其功。君子道其常。豈惜終憔悴。詠言著斯章。

として茫茫。走獸は交〻横ざまに馳せ、飛鳥は相隨ひ翔る。是の時鶉火(二)中し、日月正に相望む。朔風嚴寒に厲く、陰氣微霜を下す。羇旅に儔匹無し、俛仰して哀傷を懷く。(三)小人は其功を計り、君子は其常を道とす。豈終に憔悴するを惜まんや詠言して斯の章を著す。

(一) 河南開封府に在る地名　(二) 九月十月の頃なり鶉火は星名　(三) 小人は功利をのみ考へ君子は常道を履む故に憔悴辛苦多し

獨坐空堂上。
誰可共歡者。
出門臨永路。
不見行車馬。
登高望九州。
悠悠分曠野。
孤鳥西北飛。

獨り空堂の上に坐す、誰か共に歡ぶべき者ぞ。門を出でて永路(一)に臨むに、行く車馬を見ず。高(二)に登つて九州を望めば、悠悠として曠野分る。孤鳥西北に飛び、離(三)獸東南に下る。日暮れて親友を思ひ晤言(四)して用て自ら寫す。

(一) 曠遠たる長途　(二) 高丘に登るなり　(三) 群を離れし獸が東南卑濕の地に馳け下るなり　(四) 面談して心情を吐く義

蟋蟀鳴ニ林帷一。感ㇾ物懷ニ殷憂一。悄悄令ニ心悲一。多言焉所ㇾ告。繁辭將ㇾ訴ㇾ誰。微風吹ニ羅袂一。明月耀ニ清暉一。晨雞鳴ニ高樹一。命ㇾ駕起旋歸。

して悲しましむ。(三)多言焉ぞ告ぐる所あらん、繁辭將に誰にか訴へんとする。微風羅袂を吹き、明月清暉を耀かす。晨雞は高樹に鳴く、(四)駕を命じて起つて旋り歸る。

㊀初秋に同じ　㊁盛んなる憂思　㊂多言すとも告ぐる所無き意　㊃行装を整へて歸り去らんとなり

昔年十四五。志尚好ニ詩書一。被ㇾ褐懷ニ珠玉一。顏閔相與期。開ㇾ軒臨ニ四野一。登ㇾ高望ㇾ所ㇾ思。丘墓蔽ニ山岡一。萬代同一時。千秋萬歲後。榮名安所ㇾ之。乃悟羨門子。噭噭今自嗤。

昔年十四五、志尚詩書を好めり。(一)褐を被て珠玉を懷き、顏閔相與に期せり。(二)軒を開いて四野に臨み、高に登つて思ふ所を望む。丘墓山岡を蔽ひ、萬代同一時のみ。千秋萬歲の後、榮名安くに之く所ぞ。乃ち悟る(三)羨門子、(四)噭噭として今自ら嗤ふ。

㊀粗服にして德を修め古の顏回閔子騫の如くならんことを希へり　㊁戶を開く意　㊂秦代の仙人なり　㊃明白に自己の過去を嘲笑すとなり

裴ニ徊蓬池上一。

(一)蓬池の上に裴徊して、還顧して、大梁を望む。綠水は洪波を揚げ、曠野は莽

玄雲起二重陰一。
鳴雁飛南征。
鶗鴂發二哀音一。
素質游二商聲一。悽愴傷二我心一。

(一)伯夷叔齊の隱れし山名　(二)世路險惡にして良時無きを言ふ　(三)杜鵑なりこの鳥啼けば青芳歇むといふ　(四)秋心なり游は由の義に使用せり

湛湛長江水。
上有二楓樹林一。
皐蘭被二徑路一。
青驪逝駸駸。
遠望令二人悲一。
春風感二我心一。
三楚多二秀士一。
朝雲進二荒淫一。
朱華振二芬芳一。
高蔡相追尋。
一爲二黄雀一哀。涙下誰能禁。

(一)湛湛たる長江の水、上に楓樹の林有り。(二)皐蘭は徑路に被り、(三)青驪は逝いて駸駸たり。遠望すれば人をして悲しましむ、春風我が心に感ず。(四)三楚は秀士多く、(五)朝雲は荒淫を進めき。朱華芬芳を振ひ、(六)高蔡相追尋す。一たび黄雀の爲に哀しむ、涙下るとも誰か能く禁ぜん。

(一)水平かなる貌　(二)澤のほとりの香蘭　(三)青黒の馬なり光陰に喩ふ　(四)郢と鄂と高唐となり　(五)高唐にて楚王に枕席をすゝめし美女なり　(六)蔡の靈公が高蔡の地に美人を追尋せし類

開秋兆二涼氣一。

(一)開秋に涼氣を兆し、蟋蟀は牀帷に鳴く。物に感じて(二)殷憂を懷き、悄悄として心を

灼灼西隤日。餘光照ニ我衣一。廻風吹ニ四壁一。寒鳥相因依。周周尚銜レ羽。蛩蛩亦念レ饑。如何當路子。磬折忘レ所レ歸。豈爲ニ夸譽名一。憔悴使ニ心悲一。寧與ニ燕雀一翔。不下隨ニ黃鵠一飛上。黃鵠遊ニ四海一。中路將ニ安歸一。

灼灼たり西に隤るゝの日、餘光我が衣を照す。(一)廻風四壁を吹き、寒鳥相因り依る。(二)周周尚羽を銜み、蛩蛩亦饑を念ふ。如何ぞ當路の子、(三)磬折して歸る所を忘るゝ。(四)豈夸譽の名の爲ならんや、憔悴して心を悲しましむ。寧ろ燕雀と翔り、黃鵠に隨つて飛ばじ。黃鵠四海に遊ぶも、中路に將に安んか歸らんとせん。

(一) 突風の吹き起るなり　(二) 鳥に周々あり獸に蛩々あり周々は首重し故に尾を銜へて飲む　(三) 官途にありて身を屈め禮を守る意　(四) 名譽に誇らんが爲なりやとなり

歩出ニ上東門一。北望ニ首陽岑一。下有ニ采薇士一。上有ニ嘉樹林一。良辰在ニ何許一。凝霜沾ニ衣襟一。寒風振ニ山岡一。

歩して上東門より出で、北のかた(一)首陽の岑を望む。下に采薇の士有り、上に嘉樹の林有り、(二)良辰何の許にか在る、凝霜衣襟を沾す。寒風山岡に振ひ、玄雲重陰を起す。鳴雁飛んで南に征き、(三)鶗鴂哀音を發す。(四)素質商聲に游りて、悽愴として我が心を傷ましむ。

輕薄好二絃歌一。西遊二咸陽中一。趙李相經過。娛樂未二終極一。白日忽蹉跎。驅レ車復來歸。反顧望二三河一。黃金百鎰盡。資用常苦多。北臨二太行道一。失レ路將如何。

せり。娛樂して未だ終極あらず、白日忽ち蹉跎たり。車を驅りて復來り歸り、反顧して(二)三河を望む。黃金百鎰盡き、(三)資用常に苦だ多し。北のかた(四)太行の道に臨み、路を失うて將如何せん。

(一) 趙飛燕李夫人の如き善歌妙舞の才人を訪へりとなり　(二) 河東河內河南の稱　(三) 費用の不足を憂ふ　(四) 太行山に登らんとするなり隱居の志を寓す

昔聞東陵瓜。近在二青門外一。連レ畛距二阡陌一。子母相鉤帶。五色耀二朝日一。嘉賓四面會。膏火自煎熬。多財爲二患害一。布衣可レ終レ身。寵祿豈足レ賴。

昔は聞く、(一)東陵の瓜、近く青門の外に在り。畛を連ねて阡陌を距て、(二)子母相鉤帶す。五色朝日に耀き、嘉賓四面に會す。(三)膏火自ら煎熬し、多財患害を爲す。布衣もて身を終ふべし、寵祿は豈賴むに足らんや。

(一) 史記に見えたる邵平が美瓜なり　(二) 瓜の相連りて生ずるをいふ　(三) 油は自ら煎り財多きは却つて害を爲すとなり

猗靡情歡愛。千載不相忘。
傾城迷下蔡。容好結中腸。
感激生憂思。萱草樹蘭房。
膏沐爲誰施。其雨怨朝陽。如何金石交。一旦更離傷。

ん、(六)其れ雨るに朝陽を怨む。如何か金石の交、一旦にして更に離傷する。

㊀韓詩外傳に見えたる江上の二仙女 ㊁鄭交甫なり ㊂情意相傾委するなり ㊃文選の好色賦に見ゆ便佞の人に喩ふる也 ㊄粉脂を施し髪を洗ひ飾る ㊅詩經衞風伯兮の篇參照

嘉樹下成蹊。東園桃與李。
秋風吹飛藿。零落從此始。
繁華有憔悴。堂上生荊杞。
驅馬舍之去。去上西山趾。
一身不自保。何況戀妻子。
凝霜被野草。歲暮亦云已。
平生少年時。

(一)嘉樹の下は蹊を成す、東園の桃と李と。秋風(二)飛藿を吹き、零落此より始る。繁華も憔悴有り、堂上に(三)荊杞を生ず。馬を驅つて之を舍てて去り、去つて(四)西山の趾に上る。一身自ら保たず、何に況んや妻子を戀ふをや。凝霜野草を被ふ、(五)歲暮れて亦云に已む。

㊀桃李の下に路を成す意嘉樹は君子に喩ふ ㊁豆の葉なり ㊂いばらと枸杞と ㊃首陽山に夷齊を學ぶ意 ㊄歲暮に萬事休するが如く自己も亦然りとなり

平生少年の時、輕薄にして絃歌を好めり。西のかた咸陽の中に遊び、(一)趙李相經過

阮公が詠懷は、零亂を反覆して、興寄(一)端無く、和愉哀怨、中に雜集し、讀者をして歸趣を求むる莫らしむ、此れ其れ阮公の詩爲り。必ず時事を求めて以て之に(二)實するは、則ち鑿なり。

其原は離騷より來る。

夜中不能寐。
起坐彈鳴琴。
薄帷鑒明月。
清風吹我襟。
孤鴻號外野。
翔鳥鳴北林。
徘徊將何見。
憂思獨傷心。

夜中寐ぬる能はず、起坐して鳴琴を彈ず。(三)薄帷明月に鑒り、清風我が襟を吹く。(四)孤鴻外野に號び、翔鳥北林に鳴く。(五)徘徊して將に何をか見んとする、憂思して獨り心を傷ましむ。

(一)感興を寄托すること一様ならずとなり　(二)事實をあてはむることなり　(三)薄き窓掩ひの類　(四)仲間を別れし雁　(五)徘徊獨行何物をも見んと欲せざるなり

二妃遊江濱。
逍遙順風翔。
交甫懷環珮。
婉孌有芬芳。

(一)二妃江濱に遊び、逍遙して風に順つて翔る。(二)交甫環珮を懷き、婉孌として芬芳有り。(三)猗靡として情に歡愛し、千載まで相忘れず。(四)城を傾けて下蔡を迷はし、容好中腸に結ぶ。感激して憂思を生じ、萱草を蘭房に樹う。(五)膏沐誰が爲にか施さ

白日入二虞淵一。懸車息二駟馬一。造化雖二神明一。安能復存レ我。形容稍歇滅。齒髮行當レ墮。自レ古皆有レ然。誰能離レ此者。

誰か能く此を離るゝ者ぞ。

(一) 西方日の沒する所 (二) 日輪の車も休息す (三) 造化の神も復我を生す能はず (四) 昔より皆死有りとなり

左延年

從軍行 (亦漢詞に作る)

苦哉邊地人。一歲三從レ軍。三子到二燉煌一。二子詣二隴西一。五子遠鬪去。五婦皆懷身。

(一)苦しい哉邊地の人、一歲に三たび軍に從ふ。三子は燉煌に到り、二子は隴西に詣り、(二)五子は遠く鬪つて去り、(三)五婦は皆懷身せり。

(一) 燉煌隴西共に今の甘肅省に在り (二) 第五子は戰場に在りとなり (三) 五子の妻女は皆妊娠中なる義

阮籍

詠懷

戰二滎陽一。汴水陂。戎士憤怒貫レ甲馳。陣未レ成。退二徐滎一。二萬騎。塹壘平。戎馬傷。六軍驚。勢不レ集。衆幾傾。白日沒。時晦冥。顧二中牟一。心屏營。同盟疑。計無レ成。賴二我武皇一萬國寧。

漢の思悲翁を改めて、戰滎陽と爲す。曹公を言ふなり。

(一)滎陽に戰ふ、汴水の陂。戎士憤怒して甲を貫いて馳す。陣未だ成らず、徐滎に退く。二萬騎あり、塹壘平かなり、戎馬傷づき、六軍驚く。勢集らず、衆幾ど傾く。白日沒し、時は晦冥なり。(二)中牟を顧みて、心屏營す。同盟疑つて、計成る無し。我が(三)武皇に賴りて萬國寧し。

(一) 河南の要衝なり汴水其附近を流る　(二) 河南の一地名なり　(三) 魏曹操を謂ふ

挽歌

生時遊二國都一。死沒棄二中野一。朝發二高堂上一。暮宿二黄泉下一。

生時に國都に遊び、死沒して中野に棄てらる。朝に高堂の上を發し、暮に黄泉の下に宿す。白日(一)虞淵に入り、(二)懸車駟馬を息はす。(三)造化神明なりと雖も、安ぞ能く復我を存せん。形容稍歇滅し、齒髮行ゝ當に墮つべし。(四)古より皆然る有り、

復顧二室家一。計窮慮盡。求二來連和一。和不レ時。心中憂戚。賊衆內潰。君臣奔レ北。拔二鄴城一。奄二有魏國一。王業艱難。覽二觀古今一。可レ爲二長歎一。

㊀奔流橫逸の波浪　㊁袁紹の子譚と尙と也　㊂冀州に在り之を注いで水攻とするなり　㊃相提携し和解せんとす　㊄時機好からず　㊅奄ひ保有するなり

居柳城

居二柳城一。功誠難。越二度隴塞一。路漫漫。北踰二岡平一。但聞二悲風正酸一。蹋頓授レ首。遂登二白狼山一。神武慹二海外一。永無二北顧患一。

漢の巫山高を改めて居柳城と爲す。曹公が北塞を越え白檀を歷、三郡の烏桓を柳城に破りしを言ふなり。

柳城(一)を居る、功誠に難し。隴塞(二)を越え度りて路漫漫たり。北のかた岡平(三)を踰え、但悲風の正に酸なるを聞く。蹋頓(四)も首を授け、遂に白狼山(五)に登る。神武海外を慹らして、永く北顧の患無し。

㊀熱河の凌源縣に在り　㊁隴城なり甘肅省淸水縣北に在り　㊂山坂の名　㊃單于の王なり曹操の爲に敗死す　㊄後の白鹿山なり熱河塔溝縣に在り

戰滎陽

傍。風飛揚。轉戰不レ利士卒傷。今日不レ勝後何望。土山卒地道不レ可當。卒勝大捷震二冀方一。屠レ城破レ邑。神武遂章。

震ひ、城を屠り邑を破りて、神武遂に章かなり。

(一)袁紹なり官渡は延州陽武縣東に在り白馬も亦津名　(二)沙の丘陵なり　(三)土山を起し地道を穿ち遂に紹を敗りしを指す　(四)冀州の地方

定二武功一。濟二黃河一。河水湯湯。旦暮有二橫流波一。袁氏欲レ衰。兄弟尋二干戈一。決二漳水一。水流滂沱。嗟城中如二流魚一。誰能

定武功

漢の戰城南を改めて定武功と爲す。曹公が初めて鄴城を破るや、武功の定ること、此に始るを言ふなり。

武功を定めんと、黃河を濟る。河水湯湯、旦暮に橫流(一)の波有り。袁氏衰へんと欲して、兄弟(二)干戈を尋ふ。(三)漳水を決し、水流滂沱たり。嗟城中は流魚の如し、誰か能く復室家を顧みん。計窮し慮盡き、(四)連和を求め來る。和すること時ならず、(五)心中憂戚す。賊衆内に潰え、君臣北に奔る。鄴城を拔いて、魏國を奄有す(六)。王業は艱難なり。古今を覽觀するに、長歎を爲すべし。

曲突不ㇾ見ㇾ賓。焦爛爲二上客一。思願獻二良規一。江海倘不ㇾ逆。狂言雖ㇾ寡ㇾ善。猶有ㇾ如二雞跖一。雞跖食不ㇾ已。齊王爲肥澤。

(一)膚理によりて治せば皮膚を刺して藥用するに及ばざらんとなり (二)事物の現はれざる前よりよく明察す (三)曲れる煙突を作れと勸めしは從はれず失火の時火を救うて頭を焦し額を爛らせし者は賞あり 漢書の話による (四)善法なり江海は世間に同じ (五)雞の足うらは極めて滋養多しとぞ呂氏春秋に見ゆ

繆襲

克官渡

克二紹官渡一。由二白馬一。僵尸流血被二原野一。賊衆如二犬羊一。王師尙寡。沙塠

晉書の樂志に曰く、漢の上之回を改めて克官渡と爲す。曹公と袁紹と戰ひ、之を官渡に破りしを言ふなりと。

(一)紹に官後に克つは白馬由りす、僵尸流血原野を被ふ。賊衆は犬羊の如く、王師は尙寡し。(二)沙塠の傍、風飛揚し、轉戰利あらずして士卒傷づく。今日勝たずんば後に何をか望まん。(三)土山地道は當るべからず。卒に勝ち大いに捷つて(四)冀方に

田家無所有。酌醴焚枯魚。問我何功德。三入承明廬。所占於此土。是謂仁智居。文章不經國。筐篋無尺書。用等稱才學。往往見歡譽。避席跪自陳。賤子實空虛。宋人遇周客。慙愧靡所如。

か才學を稱せられ、往往に歡譽せらるゝ。席を避けて跪いて自ら陳ずらく、賤子實に空虛なり。(八)宋人周客に遇ふ、慙愧して如ふ所靡し。

(一) 百一の名に就いては諸說ありて定め難し姑く小序の說に從ふ (二) 世俗には安處し難し (三) 平素より長く世間に知らるゝなり (四) 甘酒を酌みかはし干魚をすゝむ (五) 拜除の命を受くる意 (六) 山水の勝あるが爲なり (七) 君は經國の功なく又書籍の箱も持たざるに非ずや (八) 宋の愚人が石を玉と誤認して珍藏し周人の笑を受け却つて益々珍藏せし話による

雜詩

細微苟不愼。隄潰自蟻穴。腠理早從事。安復勞鍼石。哲人覩未形。愚夫闇明白。

細微苟も愼まずば、隄は蟻穴より潰る。(一)腠理早く事に從はば、安ぞ復鍼石を勞せん。哲人は未形に覩、(二)愚夫は明白にも闇し。(三)曲突は賓とせられず、焦爛は上客爲り。思願して(四)良規を獻ぜんに、江海倘し逆はずば、狂言善寡しと雖も、猶ほ(五)雞跖の如きもの有らん。雞跖食うて已まず、齊王は爲に肥澤しき。

日暮歸二故山一。
行役懷二舊土一。
悲思不レ能レ言。
悠悠涉二千里一。
未レ知二何時旋一。

下流不レ可レ處。
君子愼二厥初一。
名高不二宿著一。
易三用受二侵誣一。
前者隳レ官去。
有レ人適二我閭一。

悠悠として千里を涉る。未だ何の時旋らんかを知らず。

(一)四海の内に飄々たり　(二)軀を他鄉に乘ずるなり

應璩

百一詩(一)

百一詩序に曰く、時に曹爽に謂つて曰く、今公は周公巍々の稱を聞けり、安んぞ百慮に一失有るを知らんやと。百一の名は此に取る。

璩が詩百餘篇、大率時事を風刺せり。

(二)下流は處るべからず、君子は厥の初を愼しむ。名高くとも(三)宿め著れずば、用て侵誣を受け易し。前者官を隳てて去るに、人有り我が閭に適く。田家有る所無し、(四)醴を酌んで枯魚を焚く。問ふ我何の功德ぞ、三たび(五)承明廬に入る。此土に占むる所は、是を(六)仁智の居と謂ふ。(七)文章國を經めず、筐篋に尺書無し。等を用て

遠行蒙二霜雪一。毛羽日摧頽。常恐傷二肌骨一。身隕沈二黃泥一。簡珠墮二沙石一。何能中自諧。欲下因二雲雨會一。濯レ翼陵中高梯上。良遇不レ可レ値。伸レ眉路何階。公子敬二愛客一。樂飲不レ知レ疲。和顏既以暢。乃肯顧二細微一。贈レ詩見二存慰一。小子非レ所レ宜。爲且レ極二歡情一。不レ醉其無レ歸。凡百敬二爾位一。以副二飢渴懷一。

は値ふべからず。眉を伸べて路何にか階らん。公子は客を敬愛し、樂飲して疲を知らず。和顏既に以て暢び、乃ち肯て(八)細微を顧みんや。詩を贈りて(九)存慰せらる、小子宜しき所に非ず、爲に且に歡情を極めんとす、醉はずんば其れ歸ること無れ。(一〇)凡百爾の位を敬しみ、以て飢渴の懷に副へよ。

(一) 瑒自ら謂ふ　(二) 一に塗門に作る　(三) 南嶽衡山の南方　(四) 淮南郡の地方　(五) 大珠なり沙土の間に落つるも遂に之と同化せずとなり　(六) 機會を得るなり今日の集會などを指す　(七) 好機會は再び會ひ難し五官中郎將に依りて天路に登るの外なしとの意　(八) 微小なる瑒が如き者　(九) 見舞ひ慰む　(一〇) 一座の人々よ公子が士を待つこと飢渴の如くなる本意に背く勿れとなり

別詩

朝雲浮二四海一。

(一)朝雲四海に浮び、日暮に故山に歸る。(二)行役して舊土を懷ひ、悲思して言ふ能はず。

飄飄不レ可レ寄。
徙倚徒相思。
人離皆復會。
君獨無二返期一。
自二君之出一矣。
明鏡暗不レ治。
思レ君如二流水一。
何有二窮已時一。

倚として徒に相思ふ。人離れては皆復會するに、君獨り返る期無し。君の出でてより、(四)明鏡暗うして治せず。君を思うて流水の如し、何ぞ窮り已む時有らん。

(一)歸依する所なき貌　(二)書信を寄托すべからず　(三)低回するなり　(四)暗く曇りて澄み冴えずとなり

應瑒

五官中郎將が建章臺集に侍する詩一首

朝鴈鳴二雲中一。
音響一何哀。
問レ子遊二何鄕一。
戢レ翼正徘徊。
言我寒門來。
將下就二衡陽一棲上。
往春翔二北土一。
今冬客二南淮一。

建安十六年、天子は世子丕に命じて、五官中郎將と爲せり。

(一)朝鴈雲中に鳴く、音響一に何ぞ哀しき。子に問ふ何の鄕にか遊ぶと。翼を戢めて正に徘徊す。言ふ我は(二)寒門より來り、將に(三)衡陽に就いて棲まんとす。往春は北土に翔り、今冬は(四)南淮に客たり、遠行して霜雪を蒙り、毛羽日に摧隤す。常に恐らくは肌膚を傷づけ、身隕ちて黃泥に沈まんことを。(五)簡珠沙石に墮つ。何ぞ能く中に自ら諧へん。(六)雲雨の會に因りて、翼を濯うて高梯を陵がんと欲す。(七)良遇

豈不二常勤苦一。
羞下與二黄雀一羣上。
何時當二來儀一。
將レ須二聖明君一。

㊀鳳凰の産するといふ南方の丹穴　㊁蒼天に上り去る　㊂勤勞を忌むには非ず雀などと群するを恥づるのみなり　㊃來り舞うて容儀ある意

徐幹

室思

人靡レ不レ有レ初。
想レ君能終レ之。
別來歷二年歲一。
舊恩何可レ期。
重レ新而忘レ故。
君子所二猶譏一。
寄レ聲雖レ在レ遠。
豈忘レ君須臾。
既厚不レ爲レ薄。
想君時見レ思。

人初め有らざる靡し、(一)君を想うて能く之を終へん。別來年歲を歷たり、舊恩何ぞ期すべけん。新を重ねて故を忘る、(二)君子の猶ほ譏る所たり。(三)聲を寄する遠に在りと雖も、豈君を忘れて須臾せんや。(四)既に厚しとして薄しと爲ず。想ふに君も時に思はれん。

㊀よく終あること鮮しといへども妾は然らずとなり　㊁新によりて古を棄つるは君子の惜む所なり　㊂書信を與ふるなり　㊃君の恩愛を厚しとして決して薄しとは考へず

雜詩

浮雲何洋洋。
願因通二我詞一。

浮雲何ぞ洋洋たる、(一)願くは因りて我が詞を通ぜん。(二)飄飄とし寄すべからず、(三)徙

汎汎東流水。磷磷水中石。蘋藻生二其涯一。華紛何擾溺。采レ之薦二宗廟一。可三以羞二嘉客一。豈無二園中葵一。懿三此出二深澤一。亭亭山上松。瑟瑟谷中風。風聲一何盛。松枝一何勁。氷霜正慘悽。終歳常端正。豈不レ羅二凝寒一。松柏有二本性一。鳳凰集二南嶽一。裴二徊孤竹根一。於レ心有レ不レ厭。奮レ翅凌二紫氛一。

汎汎(一)たり東流の水、磷磷たり水中の石。蘋藻其涯に生ず、華紛れて何ぞ擾溺(二)たる。之を采つて宗廟に薦め、以て嘉客に羞むべし。豈園中の葵無らんや。此の深澤(三)より出づるを懿なりとす。

(一)水の流るゝ貌 (二)多くして集れるをいふ (三)朝臣に喩ふ朝臣ならずともこの蘋藻の如き良臣ありとなり

亭亭たる山上の松、瑟瑟たる谷中(一)の風、風聲一に何ぞ盛なる、松枝一に何ぞ勁き。氷霜正に慘悽、終歳常に端正。豈凝寒(二)に罹らざらんや、松柏に本性有り。

(一)下の氷霜と共に患難に喩ふ (二)寒威は強烈なれども松の本性強きが故に犯されずとなり

鳳凰(一)南嶽に集り、孤竹の根に徘徊す。心に於て厭かざる有れば、翅を奮うて紫氛(二)を凌ぐ。豈(三)常に勤苦せざらんや、黄雀と羣するを羞づ。何の時か當に來儀(四)すべき、將に聖明の君を須たんとす。

城。長城何連連。連連三千里。邊城多健少。內舍多寡婦。作書與內舍。便嫁莫留住。善侍新姑嫜。時時念我故夫子。報書往邊地。君今出語一何鄙。身在禍難中。何爲稽留他家子。生男愼莫擧。生女哺用脯。君獨不見長城下。死人骸骨相撑拄。結髮行事君。慊慊心意間。明知邊地苦。賤妾何能久自全。

爲れぞ他家の子を稽留せんや。(七)男を生まば愼んで擧ぐる莫く、女を生まば哺するに(八)脯を用てせん。君獨り見ずや長城の下、死人の骸骨相撑拄すと。(九)結髮より行いて君に事へ、心意の間に慊慊たり。(一〇)明に邊地の苦を知る、賤妾何ぞ能く久しく自ら全うせん。(一一)

(一) 山西の太原より來れる戍卒を無理に留住せしむること勿れ (二) 官の工事は自ら一定の規制あり築城の事は他人と聲を合せて働けとなり (三) 憂愁して樂しまざる貌 (四) 鄕里の留守宅 (五) 新に嫁すべき家の舅姑なり (六) 婦女よりの返事 (七) 他人の子たる妻女を家に留むるを得ず (八) 女兒ならば養育するに魚鳥の乾肉を以てすべしとなり (九) 相重なり支ふるなり (一〇) 不足を感ぜずとなり (一一) 君と生死を共にせんとの義

劉楨

從弟に贈る三首

行者不二顧反一。出レ門與レ家辭。子弟多二俘虜一。哭泣無二已時一。天下盡樂土。何爲久留レ茲。蓼蟲不レ知レ辛。去來勿二與諧一。

(一)經歷せる義 (二)還は旋に通用せり (三)市中の道路なり路上に征戍軍隊の旗多しとなり (四)子弟多く捕虜となる義 (五)此の地の人は蓼に馴れて蓼と思はざるならん與に計るとも良策無からん去るに如かじとなり

陳琳

馬を長城の窟に飲ふ行

飲二馬長城窟一。水寒傷二馬骨一。往謂二長城吏一。愼莫レ稽二留太原卒一。官作自有レ程。擧レ築諧二汝聲一。男兒寧當二格鬪死一。何能怫鬱築二長

馬を長城の窟に飲ふ、水寒うして馬骨を傷る。往いて長城の吏に謂ふらく、愼しんで(一)太原の卒を稽留する莫れと。(二)官作自ら程有り、築を擧げて汝の聲を諧へよと。男兒は寧ろ當に格鬪して死すべし、何ぞ能く(三)怫鬱として長城を築かんと。長城何ぞ連連たる、連連三千里。邊城に健少多く、(四)內舍に寡婦多し。書を作つて內舍に與ふ、便ち嫁して留住する莫れ。善く(五)新姑嫜に侍し、時時我が故夫の子を念へと。(六)報書の邊地に往くや、君今語を出す一に何ぞ鄙しきと。身は禍難の中に在り、何

日暮愁ニ我心一。
山間有ニ餘映一。
巖阿增ニ重陰一。
狐狸馳赴レ穴。
飛鳥翔ニ故林一。
流波激ニ清響一。
猴猿臨レ岸吟。
迅風拂ニ裳袂一。
白露沾ニ衣襟一。獨夜不レ能レ寐。攝レ衣起撫レ琴。絲桐感ニ人情一。爲レ我發ニ悲音一。羇旅無ニ終極一。憂思壯難レ任。

き、飛鳥故林に翔る。流波清響を激し、猴猿岸に臨んで吟ず。(三)迅風裳袂を拂ひ、白露衣襟を沾す。獨夜寐る能はず、衣を攝して起つて琴を撫す。(四)絲桐人情を感じ、我が爲に悲音を發す。(五)羇旅に終極無く、憂思壯にして任へ難し。

(一)久しくとゞこほるなり　(二)日輪の餘光を受けて巖陰などは既に薄暗しとなり　(三)疾速なる秋風　(四)琴を曰ふ　(五)旅行中の愁心に窮極する所無し

邊城使ニ心悲一。
昔我親更レ之。
氷雪截ニ肌膚一。
風飄無ニ止期一。
百里不レ見レ人。
草木誰當レ遲。
登レ城望ニ亭隧一。
翩翩飛戍旗。

邊城は心をして悲しましむ。昔我親しく之を更たり。(一)氷雪肌膚を截り、風飄りて止む期無し。百里人を見ず、草木誰か當に遲むべき。(二)城に登つて亭隧を望むに、(三)翩翩たり飛戍の旗。行く者は顧反せず、門を出でて家と辭す。(四)子弟に俘虜多く、哭泣して已む時無し。天下は盡く樂土たり、何爲れぞ久しく玆に留らん。蓼蟲は辛を知らず、(五)去來與に諮ること勿れ。

西京亂無象。豺虎方遘患。復棄中國去。委身適荊蠻。親戚對我悲。朋友相追攀。出門無所見。白骨蔽平原。路有飢婦人。抱子棄草間。顧聞號泣聲。揮涕獨不還。未知身死處。何能兩相完。驅馬棄之去。不忍聽此言。南登霸陵岸。回首望長安。悟彼下泉人。喟然傷心肝。

西京(一)亂れて象無く、豺虎方に患を遘す。復中國を棄てて去り、身を委して(二)荊蠻に適く。親戚我に對して悲しみ、朋友相追攀す。門を出づるに見る所無く、白骨は平原を蔽へり。路に飢ゑたる婦人有り、子を抱いて草間に棄つ。顧みて號泣の聲を聞くも、涕を揮うて獨り還らず。未だ身の死せん處を知らず、何ぞ能く兩(三)ながら相完うせん。馬を驅つて之を棄て去る、此言を聽くに忍びず、南のかた霸陵(四)の岸に登り、首を回らして長安を望む。(五)悟る彼の下泉の人、喟然として心肝を傷ましむるを。

(一) 長安を指す董卓等の亂に遭へるを言ふ (二) 身を棄てゝ荊楚に逃れ去るとなり (三) 母子共に無事なる能はずとなり (四) 陝西の東部に在り (五) 黃泉下の人が歎傷しつゝあるを悟了せりとなり

荊蠻非吾鄉。何爲久滯淫。方舟泝大江。

荊蠻は吾が鄕に非ず、何爲れぞ久しく滯淫(一)せん。舟を方べて大江を泝り、日暮に我が心を愁へしむ。山岡に餘映(二)有り、巖阿に重陰を增す。狐狸馳せて穴に赴

悠悠世路。亂離多阻。濟岱江行。邈焉異處。風流雲散。一別如雨。人生實難。願其弗與。瞻望遐路。允企伊佇。烈烈冬日。肅肅淒風。潛鱗在淵。歸鴈在軒。苟非鴻鵰。孰能飛翻。雖則追慕予思罔宣。瞻望東路。慘愴增歎。率彼江流。爰逝靡期。君子信誓。不遷于時。及子同寮。生死固之。何以贈行。言授斯詩。中心孔悼。涕淚漣洏。嗟爾君子。如何勿思。

烈烈たる冬日肅肅たる淒風。潛鱗は淵に在り、歸鴈は軒に在り、苟も鴻鵰に非ずば、孰か能く飛翻せん。則ち追慕すと雖も、予が思は宣(七)ること罔し。東路を瞻望して、慘愴として歎を增す。彼の江流に率つて、(八)爰に逝くこと期靡し。君子信に誓ふ、時に遷らず、子と寮(九)を同じうす、生死之を固うせん。何を以てか行に贈らん。言に斯の詩を授く。中心孔だ悼み、涕淚漣洏(一〇)たり。嗟爾君子、如何ぞ思ふこと勿らん。

(一) 飛ぶ貌なり子篤に喩ふ (二) 方舟に同じ (三) 荒れはてたる道は何の爲に塞りて通り難しとなり (四) 兗州に近し子が是所に往くに行は荊州に近し王粲が居る所なり (五) 人事は困難多しわが願は遂ぐる能はざらんかとなり (六) 佇立躊躇の貌 (七) 宣暢釋然たること能はず (八) 流水の如く逝けども歸期圖られずとなり (九) 官司に於て同僚たり (一〇) 涙の流れ出づる貌、洏は助辭なりといふ

七哀詩

巻六

魏詩

王粲

蔡子篤に贈る詩

蔡睦字は子篤、尚書と爲る。仲宣之と同じく難を荊州に避く。子篤の還るや、仲宣此を作つて之に贈りぬ。

翼翼たる飛鸞、載ち飛び載ち東す。我が友云に徂き、言に舊邦に戻る。(一)舫舟翩(二)翩として、以て大江を泝る。(三)蔚たる荒塗、時行通ずる靡し。慨として我懷慕す、君子の同じうする所たり。悠悠たる世路、亂離して阻多し。(四)濟岱江行、邈焉として處を異にす。風のごとく流れ雲のごとく散じ、一別して雨の如し。人生實に難し。(五)願へども其れ與ならざらん。遐路を瞻望して、(六)允に企ち伊に佇る。

翼翼飛鸞。載飛載東。我友云徂。言戻舊邦。舫舟翩翩。以泝大江。蔚矣荒塗。時行靡通。慨我懷慕。君子所同。

遊子歎黍離。處者歌式微。慷慨對嘉賓。悽愴內傷悲。

煮豆持作羹。
漉豉以爲汁。
萁在釜中然。
豆在釜中泣。
本是同根生。
相煎何太急。

七步の詩

世說新語に、文帝嘗て東阿王をして、七步の中に詩を作らしむ。(一)成らずんば大法有らんと。聲に應じて云々。帝は慙づる色有りき。

豆を煮て持て羹と作し、(二)豉を漉して以て汁と爲す。(三)萁は釜中に在りて然え、豆は釜中に在りて泣く。(四)本是同根生なり。相煎ること何ぞ太だ急なる。

(一) 詩成らずば重刑に行はんとなり　(二) 味噌に同じ　(三) 豆がらを焚くなり　(四) 豆も豉も萁も同じく一本の所生なればなり

悲歎有二餘哀一。
借問歎者誰。
言是宕子妻。
君行踰二十年一。
孤妾常獨棲。
君若二清路塵一。
妾在二濁水泥一。
浮沈各異レ勢。
會合何時諧。願爲二西南風一。長逝入二君懷一。君懷良不レ開。賤妾當二何依一。

(三)清路の塵の若く、妾は濁水の泥に在り。浮沈各〻勢を異にす、會合何の時か諧はん。願くは西南の風と爲りて、長く逝いて(四)君が懷に入らん。君が懷良に開けずば、賤妾當に何にか依るべき。

(一)月光の搖動するを言ふ　(二)文選は客子に作る　(三)同じく土なれども君は路上に在り妾は水底に在りとなり　(四)君若し妾を拒まんには妾は爲すべき術無けんとなり

情詩

微陰翳二陽景一。
清風飄二我衣一。
遊魚潛二綠水一。
翔鳥薄レ天飛。
眇眇客行士。
遙役不レ得レ歸。
始出嚴霜結。
今來白露晞。

(一)微陰陽景を翳し、清風我が衣を飄へす、遊魚綠水に潛み、翔鳥天に薄り飛ぶ。(二)眇眇たる客行の士、(三)遙役して歸ることを得ず。始め出でしとき嚴霜結び、今來るや白露晞けり。遊子(四)黍離を歎じ、處る者式微を歌ふ。慷慨して嘉賓に對し、悽愴として內に傷悲す。

(一)僅なる雲氣が日光を隱す義　(二)遙にかすかなる貌　(三)遠方に役行す　(四)式微と共に詩經を參照すべし

僕夫早嚴レ駕。
吾將二遠行遊一。
遠遊欲二何之一。
吳國爲二我仇一。
將レ騁二萬里塗一。
東路安足レ由。
江介多二悲風一。
淮泗馳二急流一。
願欲二一輕濟一。
惜哉無二方舟一。
閑居非二吾志一。
甘心赴二國憂一。

(一)僕夫早く駕を嚴へよ、吾將に遠く行遊せんとす。遠遊して何くに之かんと欲するぞ、(二)吳國は我が仇爲り。將に萬里の塗に騁せんとす、(三)東路は安ぞ由るに足らん。(四)江介に悲風多く、淮泗は急流を馳す。願くは一たび輕く濟らんと欲するも、惜しい哉方舟無し。閑居は吾が志に非ず、(五)甘心して國憂に赴かん。

(一)車を御する役徒　(二)孫權を伐たんとするを言ふ　(三)江東の地は近し言ふに足らずとなり　(四)揚子江邊なり淮泗は二水の名江蘇地方をいふ　(五)國難に赴くべき方舟などを與へよとの意

七哀詩

明月照二高樓一。
流光正徘徊。
上有二愁思婦一。

韻語陽秋に、痛んで哀、義にして哀、感じて哀、怨んで哀、耳目聞見して哀、口歎して哀、鼻酸して哀、之を七哀と謂ふと。

明月高樓を照し、(一)流光正に徘徊。上に愁思の婦有り、悲歎して餘哀有り。借問す歎く者は誰ぞ、言ふ是れ(二)宕子が妻。君行いて十年を踰ゆ、孤妾常に獨り棲む。君は

誰爲發二皓齒一。
俛仰歲將レ暮。
榮耀難二久恃一。
攬レ衣出二中閨一。
逍遙步二兩楹一。
閑房何寂寞。
綠草被二階庭一。
空室自生レ風。
百鳥翻南征。
春思安可レ忘。
憂戚與レ我并。
佳人在二遠道一。
妾身單且煢。
歡會難二再遇一。
芝蘭不二重榮一。
人皆棄二舊愛一。
君豈若二平生一。寄レ松爲二女蘿一。依レ水如二浮萍一。齎レ身奉二衿帶一。朝夕不二墮傾一。倘終二顧眄恩一。永副二我中情一。

りて顯榮の恃み難きをいふ

衣を攬つて中閨を出で、逍遙して兩楹(一)に步す。閑房(二)何ぞ寂寞たる、綠草階庭に被れり。空室自ら風を生じ、百鳥翻として南に征く。春思(三)安ぞ忘るべけん、憂戚我と并ぶ。佳人遠道に在り、妾が身は單(四)且つ煢なり。歡會再び遇ひ難く、芝蘭(五)は重ねて榮かず。人皆舊愛を棄つ、君豈平生の若くならんや。松に寄りては女蘿と爲り、水に依りては浮萍の如し。身を齎して(六)衿帶を奉じ、朝夕隨ひ傾かず。倘し(七)顧眄の恩を終へば、永く我が中情に副はん。

㊀ 二本の柱の間 ㊁ 閑寂なる房室 ㊂ 夫婿を思ふ情あるが故に憂思も亦起るとなり ㊃ 孤獨にして寂寥 ㊄ 香草なり ㊅ 身を致して妻の役目を行ふ ㊆ 君若し恩愛の情あらば妾を一顧せよとなり

願欲レ托二遺音一。形影忽不レ見。翩翩傷二我心一。

轉蓬離二本根一。飄颻隨二長風一。何意廻飆擧。吹レ我入二雲中一。高高上無レ極。天路安可レ窮。類レ此遊客子。捐レ軀遠從レ戎。毛褐不レ掩レ形。薇藿常不レ充。去去莫二復道一。沈憂令二人老一。

南國有二佳人一。容華若二桃李一。朝遊二江北岸一。夕宿二瀟湘沚一。時俗薄二朱顏一。

に托して陳ぜんとなり

(一)轉蓬本根を離れ、飄颻として長風に隨ふ。何の意か廻飆擧り、我を吹いて雲中に入らしむ。高高として上極り無く、(二)天路安ぞ窮むべけん。此に類す遊客の子、(三)軀を捐てて遠く戎に從ふ。(四)毛褐は形を掩はず、薇藿は常に充たず。去り去つて復道ふこと莫れ、沈憂は人をして老いしむ。

㊀ 歷前出せり ㊁ 上天の道究極すべからずとなり ㊂ 作者が各地に還れるを征戰に關係ありしが如く喩へしなり ㊃ 下二句衣食の不足を歎ずるなり

(一)南國に佳人有り、容華桃李の若し。朝に江北の岸に遊び、夕に瀟湘の沚に宿す。(二)時俗は朱顏を薄しとす。誰が爲にか皓齒を發せん。俛仰して歲將に暮れんとす、(三)榮耀は久しく恃み難し。

㊀ 江南なり作者自らたとふ ㊁ 時代の風として賢德を重んぜず從つて美才を發すべきやうなし ㊂ 容姿に假

我友之二朔方一。
親昵並集送。
置二酒此河陽一。
中饋豈獨薄。
賓飲不レ盡レ觴。
愛至望苦深。
豈不レ愧二中腸一。
山川阻且遠。別促會日長。願爲二比翼鳥一。施レ翮起高翔。

豈中腸に愧ぢざらんや。山川阻たつて且遠し、別促にして會日は長し。願くは比翼の鳥と爲り、翮を施いて起つて高く翔らん。

(一)清明太平の時 (二)親密綢繆の情 (三)祖宴の飲食物なり (四)應氏の愁苦して多く飲まざるをいふ (五)君の我に望むこと深きも我は今不遇の地に在り君の期待に副ふ能はざるを愧づとなり

高臺多二悲風一。
朝日照二北林一。
之子在二萬里一。
江湖迥且深。
方舟安可レ極。
離思故難レ任。
孤鴈飛南遊。
過レ庭長哀吟。
翹レ思慕二遠人一。

雜詩

(一)高臺に悲風多し、朝日北林を照す。(二)之の子萬里に在り、江湖迥に且深し。(三)方舟安ぞ極るべけん、離思故任へ難し。孤鴈飛んで南遊し、庭を過ぎて長く哀吟す。思を翹げて遠人を慕ひ、(四)願くは遺音を托せんと欲す。形影忽ち見えず、翩翩として我心を傷ましむ。

(一)京師を指すなり朝日は君王に喩ふ (二)曹植自ら言ふ (三)舟を並べて進むなり (四)帯を指し言ふ中情を雁

步登㆓北邙阪㆒。
遙望㆓洛陽山㆒。
洛陽何寂寞。
宮室盡燒焚。
垣牆皆頓擗。
荊棘上參㆑天。
不㆑見㆓舊耆老㆒。
但覩㆓新少年㆒。
側㆑足無㆓行徑㆒。
荒疇不㆓復田㆒。
游子久不㆑歸。
不㆑識㆓陌與㆒㆑阡。
中野何蕭條。千里無㆓人煙㆒。念㆓我平生親㆒。氣結不㆑能㆑言。

步して北邙阪(一)に登り、遙に洛陽の山を望む。洛陽何ぞ寂寞たる、(二)宮室盡く燒焚せり。(三)垣牆は皆頓擗、荊棘上つて天に參す。(四)舊耆老を見ず、但新少年を覩る。(五)足を側てて行徑無く、荒疇復田らず。游子久しく歸らず、陌と阡とを識らず。中野何ぞ蕭條たる、千里人煙無し。我が平生(六)の親を念ひ、氣結ぼれて言ふこと能はず。

㈠洛北にある山坂の名　㈡時に董卓が亂に遭へるなり　㈢垣根は悉く壞れ拆けたり　㈣舊知の老人　㈤道路荒廢して田圃も手入する者無しとなり　㈥應氏に對する平生親密の情

清時難㆓屢得㆒。
嘉會不㆑可㆑常。
天地無㆓終極㆒。
人命若㆓朝霜㆒。
願得㆑展㆓嬿婉㆒。

(一)清時は屢〻得難し、嘉會は常にすべからず。天地は終極無く、人命は朝霜の若し、願くば嬿婉(二)を展ぶるを得ん。我が友朔方に之く、親昵並に集り送り、此の河陽に置酒す。(三)中饋豈獨り薄からんや、(四)賓飲に觴を盡さず。(五)愛至りて望苦た深し、

王其愛二玉體一。俱享二黃髮期一。收レ淚卽二長路一。援レ筆從レ此辭。

端坐苦二愁思一。攬レ衣起西遊。樹木發二春華一。清池激二長流一。中有二孤鴛鴦一。哀鳴求二匹儔一。我願レ執二此鳥一。惜哉無二輕舟一。欲レ歸忘二故道一。顧望但懷レ愁。悲風鳴二我側一。羲和逝不レ留。重陰潤二萬物一。何懼二澤不一レ周。誰令二君多一レ念。自使レ懷二百憂一。

王粲に贈る

端坐(一)して愁思に苦しみ、衣を攬つて起つて西遊す。樹木は春華を發し、清池は長流を激す。中に孤鴛鴦(二)有り、哀鳴して匹儔を求む。我此鳥を執へんことを願へども、惜しい哉輕舟無し。歸らんと欲して故道を忘れ、顧望して但愁を懷く。悲風我側に鳴り、(三)羲和逝いて留らず。(四)重陰萬物を潤す、何ぞ澤の周からざるを懼れん。誰か君をして念多からしむる、自ら百憂を懷かしむ。

(一) 正しく室中に獨坐す　(二) 王粲を指す　(三) 日輪の御者を曰ふ　(四) 太祖を暗示す

應氏を送る詩二首

心悲動二我神一。
棄置莫二復陳一。
丈夫志二四海一。
萬里猶二比鄰一。
恩愛苟不レ虧。
在レ遠分日親。
何必同二衾幬一。
然後展二殷勤一。
憂思成二疢疾一。
無二乃兒女仁一。
倉卒骨肉情。
能不レ懷二苦辛一。
苦辛何慮思。
天命信可レ疑。
虛無求二列仙一。
松子久吾欺。
變故在二斯須一。
百年誰能持。
離別永無レ會。
執レ手將二何時一。

心に悲しんで我が神を動かす、(一)棄置して復陳すること莫れ。丈夫四海に志す、萬里猶比鄰のごとし。恩愛苟も虧けずば、遠に在るも分(二)は日に親し。何ぞ必ずしも衾幬(三)を同じうして、然して後に殷勤を展べんや。憂思して疢疾(四)を成すは、乃ち兒女の仁たる無らんや。倉卒(五)たる骨肉の情、能く苦辛を懷かざらんや。

一 心思を愁惑せしめて年命を短縮する恐ありとなり　二 天分の義意志といふ程の意に用ふ　三 同宿して歡洽するなり　四 病氣患害を謂ふ　五 急遽に別れ去る意

苦辛して何をか慮思せん、天命は信に疑ふべし。虛無(一)列仙を求む、松子(二)は久しく吾を欺く。(三)變故は斯須に在り、百年誰か能く持せん。離別せば永く會無らん。手を執るは將に何の時ならんとする。王其れ玉體を愛せよ、倶に黃髮(四)の期を享けん。涙を收めて長路に即き、筆(五)を援つて此より辭せん。

一 心を恬淡にして仙人の得度を求むとなり　二 古代の仙人赤松子　三 世事は瞬間に起る　四 壽考の義に出せり　五 筆を引き收むとなり

白日忽西匿。
歸鳥赴二高林一。
翩翩厲二羽翼一。
孤獸走索レ羣。
銜レ草不レ遑レ食。感レ物傷二我懷一。撫レ心長太息。

我が懐を傷め、心を撫して長く太息す。

(一)君と相思慕す　(二)羽を動かすこと疾速なり　(三)自ら喩ふるなり

太息將二何爲一。
天命與レ我違。
奈何念二同生一。
一往形不レ歸。
孤魂翔二故域一。
靈柩寄二京師一。
存者忽復過。
亡沒身自衰。
人生處二一世一。
去若二朝露晞一。
年在二桑楡間一。
影響不レ能レ追。
自顧非二金石一。咄唶令二心悲一。

太息して將に何をか爲さん。(一)天命我と違ふ。奈何にせん同生を念ふに、(二)一往して形は歸らず。孤魂故域を翔り、靈柩のみ京師に寄す。存する者は忽として復過ぎ、亡沒して身は自ら衰ふ。人生の一世に處る、去ること朝露の晞くが若し。(三)年は桑楡の間に在りて、影響も追ふこと能はず。自ら顧ふに金石には非ず、(四)咄唶して心をして悲しましむ。

(一)運命は我に幸を與へざる義　(二)同生の兄たる曹彪を憫むなり　(三)年將に老いんとして光陰は影響の如く早く去るとなり　(四)悔恨する貌

修坂造レ雲日。我馬玄以黄。

玄黄猶能進。我思鬱以紆。鬱紆將何念。親愛在離居。本圖相與偕。中更不克俱。鴟梟鳴衡軛。豺狼當路衢。蒼蠅間白黑。讒巧反親疎。欲還絕無蹊。攬轡止踟躕。

(一)玄黄猶能く進むも、我が思は鬱として以て紆る。鬱紆として將に何をか念はんとする、親愛は離居に在り。本相與に偕にせんと圖りしに、(二)中ろ更に俱にする能はず。(三)鴟梟は衡軛に鳴き、豺狼は路衢に當る。蒼蠅は白黒を間へ、讒巧は親疎を反す。(四)還らんと欲するに絕えて蹊無し、轡を攬つて止て踟躕す。

(一)疲馬猶よく進む　(二)突然君命を受けて相合宿するを得ず　(三)惡小人に喩ふ車下に集り到るとなり　(四)帝都に還る能はざる意

踟躕亦何留。相思無終極。秋風發微涼。寒蟬鳴我側。原野何蕭條。

踟躕すとも亦何ぞ留らん、(一)相思ふに終極無し。秋風微涼を發し、寒蟬我が側に鳴く。原野何ぞ蕭條たる、白日忽ち西に匿る。歸鳥は高林に赴き、翩翩として(二)羽翼を厲ぐ。(三)孤獸は走つて羣を索め、草を銜んで食ふに遑あらず。物に感じて

有司。以三二王歸二レ藩。道路宜レ異二宿止一。意每恨レ之。蓋以三大別在二數日一。是用自剖。與レ王辭焉。憤而成レ篇。

謁二帝承明廬一。
逝將レ歸二舊疆一。
清晨發二皇邑一。
日夕過二首陽一。
伊洛廣且深。
欲レ濟川無レ梁。
汎レ舟越二洪濤一。
怨二彼東路長一。
顧瞻戀二城闕一。
引レ領情內傷。
大谷何寥廓。
山樹鬱蒼蒼。
霖雨泥二我塗一。
流潦浩縱橫。
中逵絕無レ軌。
改レ轍登二高岡一。

帝に承明廬(一)に謁し、逝いて將に舊疆(二)に歸らんとす。清晨に皇邑を發し、日夕に首陽(三)を過ぐ。伊洛廣うして且深く、濟らんと欲するも川に梁無し。舟を汎べて洪濤を越え、彼の東路(四)の長きを怨む。顧瞻して城闕を戀ひ、頸を引いて情は內に傷む。

(一) 承明門側の宿直所なり (二) 時に植は鄄城に在りき (三) 首陽山麓なり (四) 鄄城に歸るべき路

大谷(一)何ぞ寥廓たる、山樹鬱として蒼蒼。霖雨は我が塗に泥し、流潦(二)は浩として縱橫、中逵(三)に絕えて軌無く、轍を改めて高岡に登る。修坂(四)は雲日に造り、我が馬玄(五)以て黃なり。

(一) 洛陽の西南方に在り (二) 雨後途上の水たまり (三) 中路に同じ (四) 山高うして坂長く天上に近づくが如し (五) 黑馬疲れて黃色となるとなり、詩經參照

涇渭揚二濁清一。
壯哉帝王居。
佳麗殊二百城一。
員闕出二浮雲一。
承露扢二太清一。
皇佐揚二天惠一。
四海無二交兵一。
權家雖レ愛レ勝。
全國爲二令名一。
君子在二末位一。不レ能レ歌二德聲一。丁生怨レ在レ朝。王子歡二自營一。歡怨非二貞則一。中和誠可レ經。

を扢ぐ。皇佐天惠を揚げ、(五)四海交兵無し。(六)權家勝を愛すと雖も、全國令名をなす。君子末位に在り、(七)德聲を歌ふこと能はず。丁生は朝に在るを怨み、王子は自ら營むを歡ぶ。(八)歡怨は貞則に非ず、中和は誠に經とすべし。

(一)函谷關を越ゆ　(二)涇水は濁渭水は清故に曰ふ　(三)圓門といふ程の意　(四)承露盤高うして天上に聳ゆとなり　(五)大祖を指す　(六)兵家は勝利を貴ぶも德聲聞譽は必ずしも然らずとなり　(七)丁王二氏を指す　(八)一歡一怨は忠貞正大の常法となすべからず

序曰。黃初四年正月。白馬王任城王。與レ余俱朝二京師一。會二節氣一。到二洛陽一。任城王薨。至二七月一。與二白馬王一還レ國。後

白馬王彪に贈る

序に曰く、黃初四年正月、白馬王、(一)任城王、余と俱に京師に朝し、節氣に會す。洛陽に到るに、任城王は薨じぬ。七月に至り、白馬王と與に國に還る、後に有司、二王が藩に歸るとき、道路は宜しく宿止を異にすべきを以てす。意毎に之を恨む。蓋し大別の數日に在るを以て、(二)是を用て自ら剖きて、(三)王と辭し、憤りて篇を成しぬ。

(一)曹彪と曹彰と共に作者の兄弟たり　(二)離別をいふ　(三)情を割いて悉にせざる義

初秋涼氣發。庭樹微銷落。凝霜依玉除。清風飄飛閣。朝雲不歸山。霖雨成川澤。黍稷委疇隴。農夫安所穫。在貴多忘賤。爲恩誰能博。狐白足禦冬。焉念無衣客。思慕延陵子。寶劍非所惜。子其寧爾心。親交義不薄。

初秋に涼氣發し、庭樹微く銷落す。凝霜は玉除(一)に依り、淸風は飛閣に飄る。朝雲山に歸らず、霖雨川澤を成す。黍稷は疇隴に委す、(二)農夫安の穫る所あらん。貴に在れば多く賤を忘る、恩を爲すこと誰か能く博からん。狐白は冬を禦ぐに足る、(三)焉ぞ無衣の客を念はん。思慕す延陵子、(四)寶劍は惜む所に非ず。子其れ爾が心を寧んぜよ、親交は義薄からず。

(一) 玉宮の殿階 (二) 長雨のために收穫する能はずして黍稷の腐敗するをいふ (三) 狐白の貴裘を衣る者は寒に苦しむ士の事を打忘るとなり (四) 呉の季札なり前出せり

又丁儀と王粲とに贈る一首

從軍度函谷。驅馬過西京。山岑高無極。

軍に從つて函谷(一)を度り、馬を驅つて西京を過ぐ。山岑高うして極無く、涇渭(二)濁淸を揚ぐ。壯なる哉帝王の居、佳麗百城に殊なり。員闕(三)は浮雲を出で、承露(四)は太淸

衆星燦以繁。志士營ニ世業一。小人亦不レ閒。聊且知行遊。遊ニ彼雙闕間一。文昌鬱雲興。迎風高ニ中天一。春鳩鳴ニ飛棟一。流猋激ニ櫺軒一。顧念蓬室士。貧賤誠足レ憐。薇藿弗レ充レ虛。皮褐猶不レ全。慷慨有ニ悲心一。興レ文自成レ篇。寶棄怨ニ何人一。和氏有ニ其愆一。彈レ冠俟ニ知己一。知己誰不レ然。良田無ニ晚歲一。膏澤多ニ豐年一。亮懷ニ璵璠美一。積レ久德愈宣。親交義在レ敦。申レ章復何言。

ぶ。文昌鬱として雲のごとく興り、(三)迎風(四)中天に高し。春鳩は飛棟に鳴き、流猋(五)は櫺軒に激す。顧念す蓬室の士、貧賤誠に憐むに足れり。薇藿(六)虛を充さず、皮褐猶全からず。慷慨して悲心有り、文を興せば自ら篇を成す。寶(七)の棄てらるゝ何人をか怨みん、和氏に其愆有り。冠を彈して知己を俟つ、知己誰か然らざらん。良田に晚歲(九)無く、膏澤に豐年多し。亮(一〇)に璵璠の美を懷く、久しきを積んで德愈ゝ宣ぶ。親交の義は敦きに在らん、章を申ねて復何をか言はん。

(一) 太陽西山に沒して月未だ明光なし　(二) 世間の功業に同じ　(三) 魏宮の正殿名　(四) 觀名亦都に在り　(五) 方の定まらざる風が格子窓に當るなり君命の檻下に嘯ふ　(六) 粗食して空腹を充す能はず　(七) 徐氏の不遇を指す　(八) 楚人卞和が璧を獻じて刖せられし話による　(九) 收穫の遲延する意　(一〇) 眞に美玉の如き資質ある徐君は必ず登用せらるゝの機あらんと慰むる義なり

丁儀に贈る

抜レ劍捎ニ羅網一。黄雀得ニ飛飛一。飛飛摩ニ蒼天一。來下謝ニ少年一。

龍欲レ升レ天（一）ニ浮雲一。人之仕進在ニ中人一。衆口可ニ以鑠レ金。讒言三至。慈母不レ親。憒憒俗間。不レ辨ニ僞眞一。願欲レ披レ心自說ニ陳君門一。以ニ九重道遠河無レ津。

驚風飄ニ白日一。忽然歸ニ西山一。圓景光未レ滿。

(一)高きもの大なるものには災厄多しとなり　(二)自己の利益をなすべき條件の類　(三)雀の類なり雀之を恐れて網にかゝる意　(四)作者に有利の條件無く從つて帝に疎んぜらるゝを歎ずるなり

當牆欲高行

龍の天に升らんと欲するや浮雲を須つ、人の仕進は中人に在り。衆口は以て金を鑠すべく、讒言三たび至れば、慈母も親しまず。(二)憒憒たる俗間、僞眞を辨ぜず、願くは心を披いて自ら君が門に說陳せんと欲するも、(三)九重道遠くして河に津無きを以てす。

(一)中間に立つて周旋する人を言ふ　(二)心思の亂るゝ貌なり君主の不明なるに喩ふ　(三)闕門多くして通ずるに方便無しとなり

徐幹に贈る

(一)驚風白日を飄し、忽然として西山に歸す。圓景光未だ滿たず、衆星燦として以て繁し。志士(二)世業を營み、小人亦閒あらず。聊か且夜行遊し、彼の雙闕の間に遊

日苦短。樂有餘。乃置玉樽。辨東廚。廣情故。心相於。闔門置酒。和樂欣欣。遊馬後來。轅車解輪。今日同堂。出門異鄉。別易會難。各盡杯觴。

日の短きを苦しむ、樂は餘有り。乃ち玉樽を置きて、東廚を辨ぜしめ、(二)情故を廣うして、(三)心相於す。闔門置酒して、和樂欣欣たり。(四)遊馬後れ來り、轅車輪を解く。今日堂を同じうするも、門を出づれば鄕を異にす。別は易く會は難し、各〻杯觴を盡せ。

(一)善哉行の首句に取るなり　(二)親戚故舊を會同す　(三)中心相和通す　(四)友人の後れ來りし者に就いて言ふなり

野田黃雀行

高樹多悲風。海水揚其波。利劍不在掌。結交何須多。不見籬間雀。見鷂自投羅。羅家得雀喜。少年見雀悲。

(一)高樹に悲風多く、海水は其波を揚ぐ。(二)利劍は掌に在らず、交を結ぶに何ぞ多きを須ひん。見ずや籬間の雀、(三)鷂を見て自ら羅に投ずるを。羅家は雀を得て喜び、少年は雀を見て悲しむ。(四)劍を拔いて羅網を捎へば、黃雀は飛び飛ぶを得たり。飛び飛んで蒼天を摩し、來り下つて少年に謝す。

有ㇾ鳥飛來集。拊ㇾ翼以悲鳴。悲鳴夫何爲。丹華實不ㇾ成。拊ㇾ心常歎息。無ㇾ子當ㇾ歸寧。有ㇾ子月經ㇾ天。無ㇾ子若二流星一。天月相終始。流星沒無ㇾ精。棲遲失ㇾ所ㇾ宜。下與二瓦石一幷。憂懷從ㇾ中來。歎息通二鷄鳴一。反側不ㇾ能ㇾ寐。逍二遙於前庭一。踟躕還入ㇾ房。肅肅帷幕聲。褰ㇾ帷更攝ㇾ帶。撫ㇾ絃彈二鳴箏一。慷慨有二餘音一。要妙悲且淸。收ㇾ淚長歎息。何以負二神靈一。招搖待二霜露一。何必春夏成。晩穫爲二良實一。願君且安寧。

相終始し、流星は沒して精無し。棲遲して宜しき所を失ひ、下のかた瓦石と幷ばん。(五)憂懷中より來り、歎息して鷄鳴に通ず。反側して寐る能はず、前庭に逍遙す。踟躕して還つて房に入れば、肅肅として帷幕聲あり。帷を褰げて更に帶を攝め、絃を撫して鳴箏を彈ず。慷慨餘音有り、要妙にして悲しく且つ淸し。淚を收めて長く歎息す、(六)何を以てか神靈に負かん。(七)招搖として霜露を待たば、何ぞ必ずしも春夏に成らんや。晩穫を良實と爲す、願くは君且つ安寧なれ。

(一)珠玉の垂るゝ貌　(二)善き神靈なり美果を指す　(三)子無き者は去るといふ語によりて離緣せらるゝをいふ　(四)終始相離れざるなり　(五)地位を失して卑賤に下る意　(六)神靈に副うて子を生まんとなり　(七)秋を示す搖光星なり何事も老年に至らざれば滿足に成就せざる義なり

來日大いに難しに當つ(二)

忽然下沈泉。驚飈接我出。故歸彼中田。當南而更北。謂東而反西。宕宕當何依。忽亡而忽存。飄颻周八澤。連翩歷五山。流轉無恆處。誰知吾苦艱。願爲中林草。秋隨野火燔。糜滅豈不痛。願與根荄連。

草と爲り、秋に野火に隨つて燔かれん。(九)糜滅豈傷ましからざらんや。願くは根荄と連らん。

(一)轉蓬、如く飛散遷轉するを歎くなり自ら喩ふ　(二)本根を離れてしばらくも休む間無き義　(三)天路の究極する所まで達せんとの意　(四)九泉の下に吹き落さる　(五)經過の貌　(六)八方、澤なり五山は五嶽に同じ　(七)一定せる住所　(八)禁衛兵となり陣沒して遂に父皇武帝に見えんとの意を寓す　(九)燔滅は悲しむべけれど根と連るを得るは嬉しとなり

棄婦篇

石榴植前庭。綠葉搖縹青。丹華灼烈烈。璀璨有光榮。光榮曄流離。可以處淑靈。

石榴前庭に植ゑ、綠葉縹青を搖かす。丹華灼として烈烈、(一)璀璨として光榮有り。光榮曄として流離、以て(二)淑靈を處らしむべし。鳥有り飛び來り集り、翼を拊つて以て悲鳴す。悲鳴は夫何の爲ぞ、丹華は實成らず。心を拊つて常に歎息す。(三)子無ければ當に歸寧すべし。子有れば(四)月天を經り、子無ければ流星の若し。天月は

諸王自計念。無三功衛二厚德一。思二一效一筋力一。糜レ軀以報レ[illegible]。鴻臚擁レ節衞。副使隨經營。貴戚並出送。夾レ道交二輜軿一。車服齊整設。韡燁曜二天精一。武騎衞二前後一。鼓吹簫笳聲。祖二道魏東門一。淚下霑二冠纓一。攀蓋因レ內顧。俛仰慕二同生一。行行將二日暮一。何時還二闕庭一。車輪爲徘徊。四馬躊躇鳴。路人尚酸鼻。何況骨肉情。

の東門に開く　（二五）肉身の兄弟を指す　（二六）悲痛の情にいふ

吁嗟此轉蓬。居レ世何獨然。長去二本根一逝。夙夜無二休閒一。東西經二七陌一。南北越二九阡一。卒遇二回風起一。吹レ我入二雲間一。自謂終二天路一。

吁嗟篇

時の法制、藩國を待つこと峻迫なり。植は十一年に三たび都を徙せり、故に云ふ。

吁嗟す此の轉蓬、（一）世に居る何ぞ獨り然る。（二）長く本根を去りて逝き、夙夜に休閒無し。東西七陌を經り、南北九阡を越ゆ。卒に回風の起るに遇ひ、我を吹きて雲間に入る。自ら謂ふ（三）天路を終へんと。忽然として（四）沈泉に下る。驚飇は我を接して出で、故に彼の中田に歸る。南すべくして更に北し、東を謂うて反つて西す。（五）宕宕として當に何にか依るべき、忽ち亡びて忽ち存す。飄颻として（六）八澤を周り、連翩として五山を歷る。流轉して（七）恆處無し、誰か我が苦艱を知らん。（八）願くは中林の

侍臣省レ文奏。
陛下體二仁慈一。
沈吟有二愛戀一。
不レ忍レ聽二可之一。
迫有二官典憲一。
不レ得レ顧二恩私一。
諸王當レ就レ國。
璽綬何累縗。
便時舍二外殿一。
宮省寂無レ人。
主上增二顧念一。
皇母懷二苦辛一。
何以爲二贈賜一。
傾府竭二寶珍一。
文錢百億萬。
采帛若二煙雲一。
乘輿服御物。
錦羅與二金銀一。
龍旂垂二九旒一。
羽蓋參二班輪一。

皇母は苦辛を懷く。何を以てか贈賜と爲ん、府を傾けて寶珍を竭す。文錢百億萬(七)彩帛は煙雲の若し。乘輿服御の物、錦羅と金銀と。(八)龍旂は九旒を垂れ、羽蓋は班輪に參はる。諸王自ら計り念ふに、(九)功の厚德を荷ふ無し。思ふらく一たび筋力を效し、軀を糜らして以て國に報ぜんと。(一〇)鴻臚は節を擁して衞り、副使は隨つて經營す。貴戚並に出で送り、道を夾んで(一一)輜軿を交ふ。(一二)車服齊しく整設し、(一三)韡燁として天精に曜く。武騎前後を衞り、鼓吹簫笳の聲あり。魏の東門に(一四)祖道すれば、涙下りて冠纓を霑す。蓋を攀ぢて內因り顧み、俛仰して同生を慕ふ。行き行いて將に日暮れんとす。何の時か闕庭に還らん。車輪爲に(一五)徘徊し、四馬躊躇して鳴く。路人尙(一六)酸鼻す。何ぞ況んや骨肉の情をや。

(一)天意に應ずる義　(二)在國の重臣なり諸公は藩王を指す　(三)舊來の法律に從ひ居る　(四)私情愛憐の恩義を以てすること能はず　(五)侯王たるしるしの印綬が垂下せるなり　(六)謁見するに便宜なる時刻　(七)卞太后を指す　(八)龍を描ける旗は吹き流しに交はる　(九)寸功無くして厚恩を荷ふ哉　(一〇)外國の賓客を掌る外交官　(一一)車後に蔽あると四方に蔽ある車と　(一二)車を牽く馬　(一三)輝き盛にして日光に照り映ゆ　(一四)送別の宴を洛陽

仰レ手接二飛猱一。俯レ身散二馬蹄一。狡捷過二猴猿一。勇剽若二豹螭一。邊城多二警急一。胡虜數遷移。羽檄從レ北來。厲レ馬登二高隄一。長驅蹈二匈奴一。左顧凌二鮮卑一。棄二身鋒刃端一。性命安可レ懷。父母且不レ顧。何言二子與一レ妻。名編二壯士籍一。不レ得二中顧一レ私。捐レ軀赴二國難一。視レ死忽如レ歸。

母すら且顧みず、何ぞ子と妻とを言はん。名は壯士の籍に編せらる。(七)中に私を顧るを得ず。軀を捐てて國難に赴き、死を視る忽ち歸するが如し。

(一)黄金もて作り馬頭をまとへる物　(二)幽州と幷州との俠勇少年　(三)一種の竹もて製せる矢　(四)射的なり　(五)勇猛の意　(六)戎狄の者が時々其の居處を轉移するをいふ　(七)生命惜み顧みる所無しとなり

聖皇應二曆數一。正康帝道休。九州咸賓服。威德洞二八幽一。三公奏二諸公一。不レ得二久淹留一。藩位任至重。舊章咸率由。

聖皇篇

聖皇曆數に應じ、(一)正に康うして帝道休なり。九州咸賓服し、威德八幽に洞る。三公諸公を奏し、久しく淹留するを得ず。藩位任は至重、(三)舊章咸く率由す。侍(二)臣文を省て奏し、陛下は仁慈を體す。沈吟して愛戀有るも、之を聽可するに忍びず。迫るに官(四)典憲有り、恩私を顧ふを得ず。諸王は常に國に就くべし。(五)璽綬何ぞ累縲たる。(六)便時に外殿に舍するに、宮省に寂として人無し。主上は顧念を増し、

青樓臨二大路一。高門結二重關一。容華耀二朝日一。誰不レ希二令顏一。媒氏何所レ營。玉帛不二時安一。佳人慕二高義一。求レ賢良獨難。衆人徒嗷嗷。安知二彼所一レ觀。盛年處二房室一。中夜起長歎。

しばらく恍惚たりとなり　(八) 美貌にあやかりたく思ふ　(九) 納采の物なり婚約の整ひ難きをいふ　(一〇) 君子の深意を知る者稀なるに喩ふ

白馬飾二金羈一。連翩西北馳。借問誰家子。幽幷遊俠兒。少小去二鄕邑一。揚二聲沙漠垂一。宿昔秉二良弓一。楛矢何參差。控レ弦破二左的一。右發摧二月支一。

白馬篇

白馬は言ふ、人當に功を立てゝ國の爲にすべし、私を念ふべからずと。

白馬に(一)金羈を飾り、連翩として西北に馳す。借問す誰が家の子ぞ、(二)幽幷の遊俠兒たる。少小にして鄕邑を去り、聲を沙漠の垂に揚ぐ。宿昔良弓を秉る、(三)楛矢何ぞ參差たる。弦を控いて左的を破り、右に發して(四)月支を摧く。手を仰いで飛猱を接け、身を俯して馬蹄を散ず。狡捷は猴猿にも過ぎ、(五)勇剽は豹螭の若し。邊城に警急多く、(六)胡虜數〻遷移す。羽檄北より來り、馬を厲まして高隄に登る。長驅して匈奴を蹈み、左顧して鮮卑を凌ぐ。身を鋒刃の端に棄つ、性命安ぞ懷ふべけん。父

美女妖且閑。採二桑岐路間一。
柔條紛冉冉。落葉何翩翩。
攘レ袖見二素手一。皓腕約二金環一。
頭上金爵釵。腰佩二翠琅玕一。
明珠交二玉體一。珊瑚間二木難一。
羅衣何飄颻。輕裾隨レ風還。
顧盼遺二光彩一。長嘯氣若レ蘭。
行徒用息レ駕。休者以忘レ餐。
借問女安居。乃在二城南端一。

若し時に遇はざれば、徴求せらる(一)と雖も終に屈せずと。

美女妖にして且閑なり、桑を岐路の間に採る。(二)柔條紛として冉冉たり、(三)落葉何ぞ翩翩たる。袖を攘げて素手を見はし、皓腕に金環を約す。頭上の金爵釵、(四)腰には翠琅玕を佩ぶ。明珠は玉體に交はり、珊瑚は木難に(五)間はる。羅衣何ぞ飄颻たる。輕裾風に隨つて還る。顧盼して光彩を(六)遺し、長嘯するに氣は蘭の若し。行徒用て駕を息へ、休む者以て餐を忘る。借問す女は安んか居る、乃ち城の南端に在り。(七)青樓大路に臨み、高門重關を結ぶ。容華朝日に耀く、誰か令顏(八)を希はざらん。媒氏は何の營む所ぞ、玉帛(九)時に安んぜず。佳人は高義を慕ふ、賢を求むる良に獨り難し。衆人は徒に嗷嗷、(一〇)安ぞ彼の觀る所を知らん。盛年にして房室に處り、(一一)中夜に起つて長歎す。

(一) 召し求めらる (二) 君子堂に在るに喩ふ (三) 桑の柔軟なる枝が延び生ぜるをいふ (四) 金製の雀を飾れるかんざし (五) 金翅鳥の沫の凝り成せる一種の珠なりとぞ (六) 光彩のいつまでも眼に殘れる義 (七) 旅行の人々も

馳騁未レ能レ半。雙兎過二我前一。攬レ弓捷二鳴鏑一。長驅上二南山一。左挽因右發。一縱兩禽連。餘巧未レ及レ展。仰レ手接二飛鳶一。觀者咸稱レ善。衆工歸二我妍一。歸來宴二平樂一。美酒斗十千。膾レ鯉臇二胎鰕一。炮レ鼈炙二熊蹯一。鳴レ儔嘯二匹侶一。列坐竟二長筵一。連翩擊二鞠壤一。巧捷惟萬端。白日西南馳光景不レ可レ攀。雲散還二城邑一。清晨復來還。

く。觀る者咸善と稱し、衆工我に妍を歸す。歸り來つて平樂に宴す、(七)美酒斗十千、鯉を膾にして胎鰕を臇にし、(八)鼈を炮いて熊蹯を炙る。儔に鳴き匹侶に嘯き、(九)列坐して長筵を竟ふ。連翩として鞠壤を撃ち、(一〇)巧捷惟萬端なり。白日西南に馳せ、光景攀づべからず。雲散して城邑に還り、(一一)清晨に復來り還る。

(一) 幷に戰國時代よりの名都なり　(二) 美女の義　(三) 長く續けるひさぎの並樹　(四) 鏑矢を番ふ　(五) 射藝巧妙の處は未だあらはさず　(六) 手を擧げて上空を射るなり　(七) 洛陽西門外の平樂觀なり　(八) はらごもりのえび　(九) 同遊の友と快談する意　(一〇) 鞠と壤と共に一種の器　(一一) 淹日斯の如くば國家を奈せんとの意を言外にせるなり

美女篇

美女は以て君子に喩ふるなり。言ふ君子に美行有り、賢君を得て之に事へんことを願ふも、

震雷風且寒。拔レ樹偃ニ秋稼一。天威不レ可レ干。素服開ニ金縢一。感悟求ニ其端一。公且事既顯。成王乃哀歎。吾欲レ竟ニ此曲一。此曲悲且長。今日樂相樂。別後莫ニ相忘一。

(一)忠信なれども認められざるなり　(二)周公が成王を佐くるや管蔡の流言によりて周公疑はる成王即ち史官の記録を金縢中に得て始めて周公の功を知了せり　(三)管叔と蔡叔と　(四)上天の神明なり　(五)周公の功績はじめて世に明かなり　(六)曹植は明帝の叔父たり周公の成王におけるに似たり故に比喩してこの曲を作せるなり

名都多ニ妖女一。京洛出ニ少年一。寶劍値千金。被服麗且鮮。鬬レ雞東郊道。走レ馬長楸間。

名都篇

名都は(一)邯鄲臨淄の類なり。以て時人が騎射の妙と游騁の樂とありて、國を憂ふるの心無きを刺るなり。

名都に妖女多く、京洛に少年を出す。寶劍値千金、被服麗にして且つ鮮かなり。雞を鬬はす(二)東郊の道、馬を走らす長楸(三)の間、馳騁未だ半なる能はず、雙兎我が前を過ぐ。弓を攬りて鳴鏑(四)を捷み、長驅して南山に上る。左に挽いて因りて右に發し、一縱して兩禽を連ぬ。餘巧(五)は未だ展ぶるに及ばず、(六)手を仰いで飛鳶を接

薄レ終義所レ尤。
謙謙君子德。
磬折欲二何求一。
驚風飄二白日一。光景馳西流。盛時不レ可レ再。百年忽我遒。生存華屋處。零落歸二山丘一。先民誰不レ死。知レ命復何憂。

帶をゆるめて御馳走を致す（七）舊交を思慕して終を完うする義（八）君子自ら謙遜するなり（九）突風は日輪をして西に傾かしめ日光速に流れ去るとなり（一〇）花やかなる金殿玉樓など（一一）古人といふに同じ

怨歌行

爲レ君既不レ易。
爲レ臣良獨難。
忠信事不レ顯。
乃有二見レ疑患一。
周公佐二成王一。
金縢功不レ刊。
推レ心輔二王室一。
二叔反流言。
待レ罪居二東國一。
泣涕常留連。
皇靈大動變。

君爲ること既に易からず、臣爲ること良に獨り難し。（一）忠信事顯はれず、乃ち疑はるゝの患有り。周公は成王を佐け、（二）金縢功刊られず。心を推して王室を輔くるに、二叔反つて流言す。罪を待つて東國に居り、泣涕して常に留連す。（四）皇靈大いに（三）動變し、震雷し風ふいて且寒し。樹を拔いて禾稼を偃し、天威干すべからず。素服して金縢を開き、感悟して其端を求む。（五）公旦事既に顯はれ、成公乃ち哀歎す。吾（六）此曲を竟へんと欲するに、此曲悲しんで且長し。今日樂しんで相樂しみ、別後に相忘るゝこと莫れ。

寄二身於草野一。妻子象二禽獸一。行止依二林阻一。柴門何蕭條。狐兎翔二我宇一。

㊀土地によりて風土自ら相異る義　㊁草深き田舎の矮舎　㊂行止皆險峻僻遠の地にあり

箜篌引

置二酒高殿上一。親友從レ我遊。中廚辦二豐膳一。烹レ羊宰二肥牛一。秦箏何慷慨。齊瑟和且柔。陽阿奏二奇舞一。京洛出二名謳一。樂飲過二三爵一。緩帶傾二庶羞一。主稱二千年壽一。賓奉二萬年酬一。久要不レ可レ忘。

高殿の上に置酒す、親友我に從つて遊ぶ。中廚に豐膳を辦じ、羊を烹て肥牛を宰く。秦箏何ぞ慷慨なる、齊瑟は和にして且柔なり。陽阿は奇舞を奏し、京洛に名謳を出す。樂飲して三爵を過し、緩帶して庶羞を傾く。主は千年の壽を稱し、賓は萬年の酬を奉ず。久要忘るべからず、終を薄うするは義の尤むる所。謙謙たり君子の德、磬折して何をか求めんと欲する。驚風白日を飄し、光景馳せて西に流る。盛時は再びすべからず、百年忽として我に遒る。生存して華屋に處り、零落して山丘に歸す。先民誰か死せざらん、命を知らば復何をか憂へん。

㊀くりやにて燕膳を整ふ　㊁樂人十三絃の箏に巧なり瑟は二十五絃　㊂古倡優の名　㊃名高き歌者　㊄

鰕䱇游二潢潦一。不レ知二江海流一。燕雀戲二藩柴一。安識二鴻鵠遊一。世士此誠明。大德固無レ儔。駕言登二五嶽一。然後小二陵丘一。俯觀二上レ路人一。勢利惟是謀。讎高念二皇家一。遠懷柔二九州一。撫レ劍而雷音。猛氣縱橫浮。汎泊徒嗷嗷。誰知二壯士憂一。

(一)鰕䱇潢潦に游んで、江海の流を知らず。燕雀は藩柴(二)に戲る、安んぞ鴻鵠の遊を識らん。世士此れ誠に明なり、大德固に儔無し。駕して言に五嶽に登つて、然して後に陵丘を小とす(三)。俯して路に上るの人を觀るに、勢利惟れ是謀る(四)。(五)讎高うして皇家を念ひ、遠く懷うて九州を柔んず。(六)劍を撫して雷音あり、猛氣縱橫に浮ぶ。(七)汎泊して徒に嗷嗷たり、誰か壯士の憂を知らんや。

(一)えびうなぎ等の小魚が水たまりに游ぶなり　(二)垣根といふに同じ　(三)孔子は泰山に登つて天下を小とせり　(四)權勢利欲に沒頭する意　(五)歐州外患の強盛なる意か　(六)慷慨嗟歎する意　(七)江湖漂泊の義

泰山梁父行

八方各異レ氣。千里殊二風雨一。劇哉邊海民。

(一)八方各〻氣を異にし、千里風雨殊なり。劇しい哉邊海の民、身を草墅(二)に寄す。妻子は禽獸に象、行止は林阻に依る。(三)柴門何ぞ蕭條たる、狐兎我が宇に翔る。

希。今我旋止
素雪云飛。俯
降二千仞一。仰登二
天阻一。風飄蓬
飛。載離二寒暑一。
千仞易レ陟。天
阻可レ越。昔我
同胞。今用乖
別。子好芳草一。
豈忘二爾貽一。繁
華將レ茂。秋霜
悴レ之。君不レ垂レ
眷。豈云二其誠一。
秋蘭可レ喩。桂樹冬榮。絃歌蕩レ思。誰與消レ憂。臨レ川暮思。何爲汎レ舟。豈無二和樂一。遊非二我鄰一。誰忘レ
汎レ舟。愧レ無二傍人一。

悴る。君の眷を垂れざる、豈其の誠なりと云はんや。秋蘭喩へつべく、桂樹冬も榮く。絃歌して思を蕩かせども、(一〇)誰と與にか憂を消さん。川に臨んで暮に思へども、何爲れぞ舟を汎べん。豈和樂無らんや、(一一)遊は我が鄰に非ず。誰か舟を汎ぶるを忘れんや、(一二)傍人無きを愧づ。(一三)

(一) 北風によりて河南の鄴都を追懷す (二) 馬の名產地なり (三) 南風によりて南吳の孫氏などを思ふ (四) 春夏秋冬變遷し日月運り行く (五) 別れて幾時も經ざるに既に三秋を過ぎたるの感あり (六) 東河に遷されし初 (七) 一ケ年を經過せりとなり (八) 兄弟とも今は別離せるを言ふ (九) 君主の賢臣を好むに喩ふ芳草を君に贈らんとせし意 (一〇) 其本心にはあらざるべし (一一) 絃歌も憂思を慰めがたしとなり (一二) 歡和樂を希望するに非ず (一三) 榜に作るべし舟人なり

鰕䱉篇

䱇は鱓に同じ、旦に從うて且には從はず。他本に誤つて䱉に作るも、此字は無し。

子建の詩は、(一)五色相宣べ、(二)八音朗暢なり。才を使つて才に矜らず、博を用て博を逞しうせず。蘇李以下、故大家を推す。(三)仲宣公幹は、烏ぞ金鼓を執つて、顏を抗げて行くべけんや。

(一)青赤黃白黑をいふ　(二)金石匏土絲竹革木の音なり　(三)王粲劉楨等皆鄴下の秀才なり

朔風の詩

仰ニ彼朔風一。用懷ニ魏都一。願䮷ニ代馬一。倏忽北征。凱風永至。思ニ彼蠻方一。願隨ニ越鳥一。翻飛南翔。四氣代謝。懸景運周。別如ニ俯仰一。脫若ニ三秋一。昔我初遷。朱華未

彼の(一)朔風を仰ぎて、用て魏都を懷ふ。願くは代馬を䮷せ、倏忽として北に征かん。(二)凱風永く至り、彼の蠻方を思ふ。願くは越鳥に隨うて、翻り飛んで南に翔らん。(四)四氣代謝し、懸景運周す。(五)別れて俯仰の如く、脫として三秋の如し。昔は我が(六)初めて遷りしとき、朱華未だ希ならざりき。今我旋り止るに、素雪云に飛べり。俯して千仭を降り、仰いで天阻に登る。風と飄り蓬と飛び、(七)載ち寒暑に離れり。千仭は陟り易く、天阻は越ゆべし。昔我が(八)同胞、今用て乖別せり。(九)子は芳草を好む、豈爾の貽を忘れんや。繁華將に茂からんとすれば、秋霜之を

出亦復苦愁。入亦復苦愁。邊地多二悲風一。樹木何脩脩。從レ軍致二獨樂一。延年壽千秋。

明帝

種瓜篇

種二瓜東井上一。冉冉自踰レ垣。與レ君新爲レ婚。瓜葛相結連。寄二託不肖軀一。有レ如レ倚二大山一。兎絲無二根株一。蔓延自登緣。萍藻托二清流一。常恐二身不一レ全。被二蒙丘山惠一。賤妾執拳拳。天日照二知之一。想君亦俱然。

瓜を東井の上に種う、冉冉として(一)自ら垣を踰ゆ。君と新に婚を爲し、瓜葛(二)相結び連る。不肖の軀を寄託し、大山に倚るが如きもの有り。兎絲(三)に根株無きも、蔓延して自ら登り緣る。萍藻は淸流に托し、常に身の全からざることを恐る。丘(四)山の惠を被蒙して、賤妾執つて拳拳たり。天日之を照知せん、想ふに君も亦俱に然らん。

(一)延べ長ずる貌　(二)瓜蔓の延び行く意　(三)根なしかづらなり幸運に乘ずるに喩へ萍を以て不幸者に喩ふ　(四)大なる恩惠を被り恭謹に之を執り守る義

曹植

蒲生我池中。
綠葉何離離。
傍能行仁義。
莫若妾自知。
衆口鑠黄金。
使君生別離。
念君去我時。
獨愁常苦悲。
想見君顏色。
感結傷心脾。
念君常苦悲。
夜夜不能寐。
莫以賢豪故。
棄捐素所愛。
莫以魚肉賤。
棄捐葱與薤。
莫以麻枲賤。
棄捐菅與蒯。

塘上行

蒲あり我が池中に生ず、(二)綠葉何ぞ離離たる。(三)傍く能く仁義を行へども、妾が自ら知るに若くは莫し。衆口は黄金をも鑠し、君をして生きながら(四)別離せしむ。念ふ君が我を去りし時、獨り愁ひて常に苦悲せり。君が顏色を想見し、感結んで心脾を傷ましめき。(五)君を念うて常に苦悲し、夜夜寐ぬる能はず。(六)賢豪を以ての故に素愛せし所を棄捐すること莫れ、(七)魚肉を以て賤しくとも、葱と薤とを棄捐する莫れ。麻枲を以て賤しくとも、菅と蒯とを棄捐する莫れ。(八)出づるも亦復苦愁し、入るも亦復苦愁す。邊地に悲風多し、樹木何ぞ(九)脩脩たる。軍に從つて(一〇)獨樂を致す延年壽は千秋。

(一) 魏文帝の后として明帝を生みし人 (二) 一本其葉に作る (三) 衆人は色々と云ふ所あれども妾が仁義を行ふことは妾尤もよく知るとなり (四) 郭后の讒に遭うて遠ざけられしを指す (五) 遠征途上の君を思慕す (六) 賢才ありて知能秀でたる郭后の如き人物 (七) 郭后に比し下句は自ら喩ふ下文も同意 (八) 出入ともに苦愁す (九) 木葉の傷殘するに喩ふ (一〇) 妾を顧みずして千秋萬歳の壽を保てとなり

秋風蕭瑟天氣涼。草木搖落露爲ㇾ霜。羣燕辭歸鴈南翔。念二君客遊一思斷ㇾ腸。慊慊思ㇾ歸戀二故鄉一。君何淹留寄二他方一。賤妾煢煢守二空房一。憂來思ㇾ君不二敢忘一。不ㇾ覺淚下沾二衣裳一。援ㇾ琴鳴ㇾ絃發二淸商一。短歌微吟不ㇾ能ㇾ長。明月皎皎照二我牀一。星漢西流夜未ㇾ央。牽牛織女遙相望。爾獨何辜限二河梁一。

秋風蕭瑟として天氣涼しく、草木搖落(一)して露は霜と爲る。羣燕辭し歸つて鴈南に翔る、君が客遊を念うて思腸を斷つ。慊慊(二)歸を思うて故鄉を戀ふ。君何ぞ淹留(三)して他方に寄るぞ、賤妾は煢煢として空房を守る。憂來つて君を思うて敢て忘れず、覺えず淚下つて衣裳を沾す。琴を援つて絃を鳴らして淸商(四)を發し、短歌微吟して長きこと能はず(五)。明月皎皎我が牀を照し、星漢西に流れて夜未だ央ならず。牽牛織女遙に相望む、爾獨り何の辜ありてか河梁(六)を限れる。

(一)木葉の搖れ落つる義　(二)君も亦不滿足にして早く歸らんとするなるべしとなり　(三)久しく滯留する也　(四)淸苦にして哀愁を含める音調　(五)心の激せるがために長つゞきせずとなり　(六)二星の間に銀河ありて會し得ざるを言ふなり

甄后(二)

霜露紛兮交下。木葉落兮淒淒。候鴈叫ニ兮雲中ー。歸燕翩兮徘徊。妾心感兮惆悵。白日忽兮西頽。守ニ長夜ー兮思レ君。魂一夕兮九乖。悵延佇兮仰視。星月隨兮天廻。徒引レ領兮入レ房。竊自憐ニ兮孤栖ー。願從レ君兮終沒。愁何可ニ兮久懷ー。

友人阮元瑜(一)早く亡す。其妻の寡居せるを傷んで、爲に是の詩を作りぬ。

霜露紛として交〻下り、木葉落ちて淒淒たり。候鴈(二)は雲中に叫び、歸燕は翩として徘徊す。妾が心感じて惆悵し、(三)白日忽として西に頽る。長夜を守つて君を思ひ、(四)魂は一夕に九たび乖く。悵として延佇(五)して仰ぎ視るに、星月隨つて天に廻る。徒に領を引いて房に入り、竊に自ら孤栖を憐れむ。願くは君に從つて終(六)に沒せん、愁は何ぞ久しく懷くべけん。

(一) 名は瑀曹操の記室たりき建安七子の一人なり　(二) 候鳥なる雁燕　(三) 亡夫を思慕して長夜の如き義　(四) 我が魂の我が身を離るゝこと一夜に九回となり楚辭に據りて書けり　(五) 長く立ちどまる　(六) 君に黄泉の下に從ひ死せんとなり

燕歌行

廣題に曰く、燕は地名。言ふらく、良人役に燕に從へり。而して此曲を爲ると。

觀㆑兵臨㆓江水㆒。水流何湯湯。戈矛成㆓山林㆒。玄甲耀㆓日光㆒。猛將懷㆓暴怒㆒。膽氣正縱橫。誰云江水廣。一葦可㆓以航㆒。不㆑戰屈㆓敵虜㆒。戢㆑兵稱㆓賢良㆒。古公宅㆓岐邑㆒。實始翦㆓殷商㆒。孟獻營㆓虎牢㆒。鄭人懼稽顙。充國務㆓耕殖㆒。先零自破亡。興㆓農淮泗間㆒。築㆑室都㆓徐方㆒。量㆑宜運㆓權略㆒。六軍咸悅康。豈如㆓東山詩㆒。悠悠多憂傷。

兵を觀して江水に臨めば、水流何ぞ湯湯たる。戈矛山林を成し、玄甲(一)日光に耀く。猛將は暴怒を懷き、膽氣正に縱橫。誰か(二)云ふ江水廣しと、一葦以て航るべし。戰はずして敵虜(三)を屈し、兵を戢めて賢良を稱す。古公(四)は岐邑に宅り、實に始めて殷商を翦てり。孟獻(五)は虎牢に營み、鄭人懼れて稽顙す。充國(六)は耕殖を務むるに、先零自ら破亡しぬ。農を淮泗(七)の間に興し、室を築いて徐方(八)に都す。宜を量りて權略を運らさば、六軍咸く悅康せん。豈(九)東山の詩の如くにして、悠悠として多く憂傷せんや。

(一) 鐵甲の類なり (二) 孫權が江南に在るを指す (三) 敵虜に同じ (四) 周室の始祖古公亶父 (五) 魯の孟獻子仲孫蔑なり鄭を伐つてその虎牢を降せり (六) 漢の趙充國は屯田の策にて羌種先零を滅せり (七) 江蘇の地方 (八) 今の安徽地方なり (九) 魏武の苦寒行に出だせり

寡婦

天漢回西流。三五正縱橫。草蟲鳴何悲。孤鴈獨南翔。鬱鬱多二悲思一。緜緜思二故鄕一。願レ飛安得レ翼。欲レ濟河無レ梁。向レ風長歎息。斷二絕我中腸一。

風に向つて長へに歎息し、我が中腸を斷絕す。

(一)衣を著くる意　(二)徘徊遑遑に同じ　(三)星の多きをいふ　(四)不快憂傷の貌　(五)思の絕えざる貌

西北有二浮雲一。亭亭如二車蓋一。惜哉時不レ遇。適與二飄風一會。吹レ我東南行。行行至二吳會一。吳會非二我鄕一。安得二久留滯一。棄置勿二復陳一。客子常畏レ人。

西北に浮雲有り、(一)亭亭として車蓋の如し。惜い哉時遇はず、適に(二)飄風と會す。我を吹いて東南に行かしめ、行き行いて(三)吳會に至る。吳會は我が鄕に非ず、安ぞ久しく留滯するを得ん。(四)棄置して復陳ずること勿れ、客子常に人を畏る。

(一)高うして依る所無き貌　(二)つむじ風なり南方の反亂に喩ふ　(三)吳郡と會稽郡とを合せいふなり　(四)南鄙に棄て置くなど言うて予が歸心を傷ましむる勿れとなり

廣陵に至る馬上に於ての作

崖。林木有レ枝。憂來無レ方。人莫二之知一。人生如レ寄。多憂何爲。今我不レ樂。歳月如レ馳。湯湯川流。中有二行舟一。隨レ波轉薄。有レ似二客遊一。策二我良馬一。被二我輕裘一。載馳載驅。聊以忘レ憂。

たる川流、中に行舟有り。波に隨つて轉薄して、(五)客遊に似たる有り。我が良馬に策ち、我が輕裘を被て、(六)載ち馳せ載ち驅り、聊か以て憂を忘れん。

(一)客游の苦に喩ふ　(二)猿の相連續して樹上を度り飛ぶにいふ　(三)山頂疊の貌　(四)前出古詩十九首中に見ゆ　(五)轉々として岸邊に至りつく義　(六)追逐出游の樂を受けんことを望むなり

漫漫秋夜長。
烈烈北風涼。
展轉不レ能レ寐。
披レ衣起彷徨。
彷徨忽已久。
白露沾二我裳一。
俯視二清水波一。
仰看二明月光一。

雜詩

漫漫として秋夜長く、烈烈として北風涼し。展轉として寐ぬる能はず、衣を披て(一)起つて彷徨す。(二)彷徨忽ち已に久しうして、白露我が裳を沾す。俯して清水の波を視、仰いで明月の光を看る。天漢囘つて西に流れ、(三)三五正に縱横。草蟲鳴くこと何ぞ悲しき、孤雁獨り南に翔る。(四)鬱鬱として悲思多く、(五)緜緜として故郷を思ふ。飛ばんことを願へども安んか翼を得ん、濟らんと欲すれども河に梁無し。

棄我遐遷。靡瞻靡恃。泣涕漣漣。呦呦遊鹿。銜草鳴麑。翩翩飛鳥。挾子巢棲。我獨孤煢。懷此百離。憂心孔疚。莫我能知。人亦有言。憂令人老。嗟我白髮。生一何早。長吟永歎。懷我聖考。曰仁者壽。胡不是保。

の百離を懷く。憂心孔だ疚めども、我を能く知るもの莫し。人も亦言ふ有り、憂は(六)人をして老いしむと。嗟我が白髮、生ふること一に何ぞ早き。長吟永歎して、我が聖考(七)を懷ふ。曰く仁者は壽しと、(八)胡ぞ是を保たざるぞ。

㈠ 窓かけや幕帳の類は皆昔の儘なれども父は既に亡しとの義　㈡ 先人の神靈我を棄て去る　㈢ 見れども見えず恃み依るべきところ無し　㈣ 鹿の兒をいふ親鹿の兒を呼ぶ義　㈤ 兩翼の下に抱き持つ　㈥ 多くの患害悲傷　㈦ すぐれたりし先考　㈧ 何故に長壽を保命せざりしぞとなり

上山采薇。薄暮苦飢。谿谷多風。霜露沾衣。野雉羣雊。猨猴相追。還望故鄉。鬱何壘壘。高山有

善哉行

山に上つて薇を采る、薄暮に飢に苦しむ。谿谷に風多く、霜露衣を沾す。野雉(一)羣り雊き、(二)猨猴相追ふ。還つて故鄉を望むに、鬱として何ぞ(三)壘壘たる。高山に崖有り、林木に枝有り。憂の來るや方無く、人の之を知るもの莫し。(四)人生は寄るが如し、多く憂ふとも何ぞ爲ん。今我樂しまずば、幾月馳するが如けん。湯湯

奈二何此征夫一。安得レ去二四方一。戎馬不レ解レ鞍。鎧甲不レ離レ傍。冉冉老將レ至。何時返二故郷一。神龍藏二深泉一。猛獸歩二高岡一。狐死歸レ首レ丘。故郷安可レ忘。

(一)出征して歸り得ざる意 (二)冬には暖き南方故郷の地に休養する義なり (三)枯れて顚倒せる蓬 (四)相遠隔せずとなり (五)部下の兵士を傷めども遠征を止むる能はずとなり (六)進み行く貌 (七)龍虎など皆故居に安んずる意 (八)狐の死する時は故窟の方面に首を向くとぞ郷里を忘れざる義なり

文帝

子桓の詩、文士の氣有り。乃父悲壯の習を一變す。要するに其れ便娟婉約(一)にして、能く人情を移す。

(一)柔娟婉曲人情に近き意

短歌行

仰瞻二帷幕一。俯察二几筵一。其物如レ故。其人不レ存。神靈倏忽。

仰いで(一)帷幕を瞻、俯して几筵を察するに、其物は故の如きも、其人は存せず。神(二)靈倏忽、我を棄てて遐く遷る。(三)瞻る靡く恃む靡く、泣涕漣漣たり。呦呦たる遊鹿、草を銜んで(四)麑に鳴く。翩翩たる飛鳥、(五)子を挾んで巣に棲む。我獨り孤煢、此

雪落何霏霏。延レ頸長歎息。遠行多レ所レ懷。我心何怫鬱。思欲二一東歸一。水深橋梁絕。中路正徘徊。迷惑失二故路一。薄暮無二宿棲一。行行日已遠。人馬同時飢。擔レ囊行取レ薪。斧レ氷持作レ糜。悲彼東山詩。悠悠使二我哀一。

つて持つて糜を作る。悲しむ彼の(六)東山の詩、悠悠として我をして哀しましむ。

㈠山西省東南境に在り　㈡太行山の險坂名　㈢猛獸多きを叙す　㈣煩悶し鬱結するなり　㈤路の中央の邊　㈥詩經豳風に見ゆ周公東征役に從ふことを叙せし詩なり

鴻雁出二塞北一。乃在二無人鄉一。擧レ翅萬里餘。行止自成レ行。冬節食二南稻一。春日復北翔。田中有二轉蓬一。隨レ風遠飄揚。長與二故根一絕。萬歲相二不當一。

却東西門行(一)

鴻雁塞北に出で、乃ち無人の鄉に在り。翅を擧ぐる萬里餘、行止自ら行を成す。(二)冬節に南稻を食し、春日に復北に翔る。田中に(三)轉蓬有り、風に隨つて遠く飄揚す。長く故根と絕ち、萬歲まで相當らず。(五)此の征夫を奈何せん、安ぞ四方を去るを得ん。(四)戎馬鞍を解かず、鎧甲傍を離れず。(六)冉冉として老將に至らんとす、何の時か故鄉に返らん。(七)神龍は深泉に藏れ、猛獸は高岡に步す。(八)狐死して歸つて丘に首ふ、故鄉安ぞ忘るべけんや。

嗣還自相戕。淮南弟稱レ號。刻二璽於北方一。鎧甲生二蟣蝨一。萬姓以死亡。白骨露二於野一。千里無二鷄鳴一。生民百遺レ一。念レ之斷二人腸一。

遺す、之を念へば人の腸を斷たしむ。

(一) 袁紹を指す董卓を伐つの盟主たりき (二) 漢帝を擁立するに存しきとなり (三) 賊軍と義軍と用敵せざる意 (四) 紹の弟術は自ら帝と稱せり (五) 軍の久しく掛れるを指す (六) 數百里の間に人家無き光景

北上二太行山一。艱哉何巍巍。羊腸坂詰屈。車輪爲レ之摧。樹木何蕭瑟。北風聲正悲。熊羆對レ我蹲。虎豹夾レ路啼。谿谷少二人民一。

苦寒行

北のかた太行山(一)に上るに、艱い哉何ぞ巍巍たる。(二)羊腸の坂は詰屈、車輪之が爲に摧く。樹木何ぞ蕭瑟たる、北風聲正に悲し。(三)熊羆我に對して蹲り、虎豹路を夾んで啼く。谿谷に人民少し、雪落ちて何ぞ霏霏たる。頸を延いて長く歎息し、遠行に懐ふ所多し。我か心何ぞ(四)怫鬱たる、思うて一たび東に歸らんと欲す。水深うして橋梁絶え、(五)中路に正に徘徊す。迷惑して故路を失ひ、薄暮に宿棲無し、行行として日已に遠く、人馬同時に飢う。嚢を擔うて行いて薪を取り、氷を斧

知小而謀彊。
猶豫不敢斷。
因狩執君王。
白虹爲貫日。
己亦先受殃。
賊臣執國柄。
殺主滅宇京。
蕩覆帝基業。
宗廟以燔喪。
播越西遷移。號泣而且行。瞻彼洛城郭。微子爲哀傷。

を受く。(六)賊臣國柄を執り、主を殺して宇京を滅す。帝の基業を蕩覆し、宗廟以て燔喪す。(七)播越して西に遷移し、號泣して且つ行く。彼の洛の城郭を瞻て、(八)微子爲に哀傷せり。

(一) 大數を指す漢は前後通じて二十三世なりき (二) 猿の如き何進の輩 (三) 宦官を捕へず (四) 少帝劉辨なり (五) 献帝初平元年の事なり聶政が韓傀を刺せし時の如く何進も亦宦官に殺されしを指す (六) 董卓權を專にし少帝と太后とを弑して天下を瓦解せしめたり (七) 都を長安に遷せしをいふ (八) 曹操自ら喩ふるなり

蒿里行

關東有義士。
興兵討羣凶。
初期會盟津。
乃心在咸陽。
軍合力不齊。
躊躇而雁行。
勢利使人爭。

關東に義士有り、兵を興して羣凶を討ず。(一)初め期して盟津に會せしが、乃ち心は(二)咸陽に在り。軍合するも力は齊しからず、躊躇して雁行す。勢利人をして爭はしめ、嗣ぎ還つて自ら相戕ふ。(三)(四)淮南の弟は號を稱し、璽を北方に刻しぬ。鎧甲に(五)蟣蝨を生じ、萬姓以て死亡す。白骨野に露され、(六)千里鷄鳴無し。生民百に一を

戚多レ悲。幸甚至哉。歌以詠レ志。

神龜雖レ壽。猶有二竟時一。騰蛇成レ霧。終爲二土灰一。老驥伏レ櫪。志在二千里一。烈士暮年。壯心不レ已。盈縮之期。不二獨在一レ天。養怡之福。可レ得二永年一。幸甚至哉。歌以詠レ志。

龜雖壽

神龜壽なりと雖も、猶竟る時有り。騰蛇(一)霧を成すも、終に土灰と爲る。老驥櫪(二)に伏して、志は千里に在り。烈士暮年(三)、壯心已まず。盈縮(四)の期は、獨り天のみに在らず。養怡(五)の福は、永年を得べし。幸甚だ至れる哉、歌うて以て志を詠ず。

(一)天に昇ると稱せらるゝ蛇なり　(二)千里の馬の老衰せる者が廐中に居るなり　(三)俊傑の士の晩年　(四)長短なり生命について言ふ　(五)和悅なる心情を養ふ義

惟漢二十世。所レ任誠不レ良。沐猴而冠帶。

薤露

惟漢の二十世、任ずる所誠に良からず。沐猴(一)にして冠帶し、知小にして謀彊し、猶豫(二)して敢て斷ぜず(三)、狩に因りて君王を執ふ(四)。白虹(五)爲に日を貫き、已亦先づ殃

觀二滄海一。水何澹澹。山島竦峙。樹木叢生。百草豐茂。秋風蕭瑟。洪波湧起。日月之行。若レ出二其中一。星漢燦爛。若レ出二其裏一。幸甚至哉。歌以詠レ志。

鄕土不レ同。河朔隆寒。流澌浮漂。舟船行難。錐不レ入レ地。豐籟深奧。水竭不レ流。氷堅可レ蹈。士隱者貧。勇俠輕非。心常歎怨。戚

木叢生し、百草豐茂す。秋風蕭瑟として、洪波湧起す。(三)日月の行、其中に出づるが若く、星漢燦爛、其裏より出るが若し。幸甚だ至れる哉、歌つて以て志を詠ず。

(一) 山名古より有名なれども所在地は詳ならず　(二) 水の搖動する貌　(三) 日月星辰皆この海中より出づるが如しとなり

土同じからず

鄕土同じからず、(一)河朔隆寒なり。(二)流澌浮漂、舟船も行き難む。錐も地に入らず、(三)豐籟深奧なり。水竭きて流れず、氷堅うして蹈むべし。士の隱るゝ者は貧に、(四)勇俠は輕非なり。心常に歎怨し、(五)戚戚として悲多し。幸甚だ至れる哉、歌うて以て志を詠ず。

(一) 黃河の北方は嚴寒の地域なりとなり　(二) 流氷の浮き漂ふなり　(三) 菘に同じ籟は蘋なるべし雜草なり蔬菜と雜草等の深く繁茂せる義　(四) 驍勇任俠は輕薄にしてよろしからず　(五) 憂苦の貌

幽思難レ忘。何以解レ憂。惟有二杜康一。青青子衿。悠悠我心。但爲レ君故。沈吟至レ今。呦呦鹿鳴。食二野之苹一。我有二嘉賓一。鼓レ瑟吹レ笙。明明如レ月。何時可レ掇。憂從レ中來。不レ可二斷絕一。越レ陌度レ阡。枉用相存。契濶談讌。心念二舊恩一。月明星稀。烏鵲南飛。繞レ樹三匝。何枝可レ依。山不レ厭レ高。海不レ厭レ深。周公吐レ哺。天下歸レ心。

(三)呦呦たる鹿鳴、野の苹を食ふ。我に嘉賓有り、瑟を鼓して笙を吹く。(六)明明として月の如し、何の時か掇るべき。憂の中より來るは、斷絕すべからず。(七)陌を越り阡を度り、枉げて用て相存す。(八)契濶談讌、心に舊恩を念ふ。(九)月明に星稀に、烏鵲南に飛ぶ。樹を繞つて三匝、何の枝か依るべき。(一〇)山は高きを厭はず、海は深きを厭はず。周公哺を吐いて、天下心を歸す。

(一)過去の日時 (二)古の酒を作りし人名轉じて酒の異名とす (三)詩經鄭風に見ゆ靑き襟つける靑年諸君との意 (四)憂思の貌 (五)詩經小雅鹿鳴篇の照嘉賓を會燕するなり (六)故舊の漸く疎遠なるに喩ふ (七)東西南北に通行するなり (八)久濶を叙し勤苦して舊調を談笑飮宴す (九)賢士出で小人絕ゆるなり、下句は士の歸依すべき所を求むべき意 (一〇)自己の多々益々人を容るゝに喩ふ周公も亦自ら擬するなり

滄海を觀る

東臨二碣石一。以

東のかた(一)碣石に臨み、以て滄海を觀る。水何ぞ、(二)澹澹たる、山島竦峙せり。樹

對レ酒當レ歌。人生幾何。譬如二朝露一。去日苦多。慨當二以慷一。

卷五

魏詩

武帝

孟德の詩は猶是漢音あり。子桓以下は、純乎たる魏響なり。沈雄俊爽、時に霸氣を露はす。

短歌行

言ふこゝろは、當に時に及んで樂を爲すべしとなり。

酒に對して當に歌ふべし、人生幾何ぞ、譬へば朝露の如し、(一)去日は苦だ多し。慨として當に以て慷くべし、幽思忘れ難し、何を以てか憂を解かん、(二)惟杜康有るのみ。(三)青青たる子衿、(四)悠悠たる我が心。但君が爲の故に、沈吟して今に至る。

移。白骨蔽レ野。青山昔時。翹ニ足高屋一。下見ニ羣兒一。我是蘇仙。彈レ我何爲。翻ニ身雲外一。却反ニ吾居一。

蘇仙なり、(五)我を彈するとも何をか爲ん。(六)身を雲外に翻へして、却つて吾が居に反らん。

(一) 桂陽の人なり (二) 郷曲の地に別れ去る (三) 事と物と皆昔日と異なり (四) 年月日時の意 (五) 彈を射んとすとも無益ならん (六) 我も亦無用の地を去つて仙居に還らんとなり

丁令威が歌

有レ鳥有レ鳥丁令威。去レ家千歲今來歸。城郭如レ故人民非。何不レ學レ仙冢纍纍。

搜神紀に、遼東城門に華表柱(一)有り。忽ちに一白鶴有りて、柱頭に集るに、時に少年有りて之を射んと欲す。鶴乃ち飛んで空中を徘徊して言つて云ふ、

鳥有り鳥有り丁令威(二)、家を去ること千歲にして今來り歸る。城郭は故の如きも人民は非らず、何ぞ仙を學ばざる冢纍纍(三)たり。

(一)鳥居の柱石　(二)鳥と見ゆるも實は丁令威なり　(三)舊時の人皆死し去つて墳墓のみ多し早く仙術を學ぶべしとなり。

蘇耽が歌

鄉原一別。重來事非。甲子不レ記。陵谷遷

神仙傳に、蘇耽仙(一)が去つて後、一鶴ありて郡屋に降る。久しうして去らず郡僚子弟之を彈するに、鶴は乃ち足を擧げて屋に畫くこと、字を書するが若し。其辭に云云、

(二)鄉原に一別し、重ねて來るに(三)事非なり。(四)甲子は記せず、陵谷遷移せり。白骨は野を蔽ひ、青山は舊時のごとし。足を高屋に翹げ、下のかた羣兒を見る。我は是

班。入二河間一。河間姹女工レ數レ錢ッ以レ錢爲レ室。金爲レ堂。石上慊慊春二黃粱一。梁下有二懸鼓一。我欲レ擊レ之丞相怒。

我之を擊たんと欲すれば丞相怒る。

㊀ 本詩中に註せり ㊁ 諫を納るゝ時に報ずる鼓 ㊂ 人民の窮迫せるに喩ふ遁は亡なり ㊃ 父といふ程の義 父子相繼いで聚斂する意 ㊄ 桓帝を指す ㊅ 數條の車あり ㊆ 姹女の義永樂太后を指す ㊇ 民間の粟は白中の粟の如く一定の數あるに猶之を徵聚せんとす ㊈ 諫鼓を擊つて弊政を諫むる能はざるを歎息するなり

靈帝の末の京都の童謠

後漢書五行志に曰く、靈帝の末に京都に童謠あり。

侯非レ侯。王非レ王。千乘萬騎上二北邙一。

(一)獻帝初めて立ち、未だ爵號有らず。中常侍段珪等が執ふる所と爲り、公卿百官、皆其(二)後に隨つて河上に到り、乃ち還ることを得たり。此れを侯に非ず王に非ず、北邙に上る者と爲るなり。

(一)侯も侯に非ず、王も王に非ず、千乘萬騎もて北邙に上る。(二)

㊀ 靈帝の子劉辨なり董卓に廢せられき ㊁ 北邙山に向つて群行すれどもこの人は侯にも王にもあらずとの詩意なり

書。擧二孝廉一父別居。寒素清白濁如レ泥。高第良將怯如レ黽。

ること泥の如く、(五)高第の良將も怯なること黽の如し。

㊀濫りに無能者を任官するをいふ　㊁才學ある人を試みる試驗なり　㊂亦科目の名なり孝行清廉の人を試む　㊃貧困廉潔　㊄良將猛士も實は蠅の如くつまらぬ卑怯者なりとなり

城上の烏の童謠

城上烏。尾畢逋。公爲レ吏。子爲レ徒。一徒死。百乘車。車班

●後漢書の五行志に曰く、桓帝の初、京師童謠あり。按ずるに此れ政を爲すものの貪を刺れるなり。(一)車班々として河間に入るとは、桓帝將に崩ぜんとして、乘輿河間に入りて靈帝を迎ふるを言ふなり。河間の姹女工數錢以下は、靈帝既に立ち、其母永樂太后が、好んで金錢を聚め、靈帝に敎へて官を賣り錢を受けしめ、天下忠義の士が、(二)懸鼓を撃つて以て陳せんと欲するも、而も大吏既に怒る、如何ともする無きなり。

(三)城上の烏、尾畢く逋ふ。(四)公は吏と爲り、子は徒と爲る。(五)一徒死して、百乘車あり。(六)車班班として、河間に入る。河間の(七)姹女は錢を數ふるに工なり。錢を以て室と爲し、金を堂と爲し、(八)石上に慊慊として黃粱を舂く。(九)梁下に懸鼓有り、

我庭。化ニ我鴟梟ー哺ニ所生ー。

小麥青青大麥枯。誰當ㇾ穫者婦與ㇾ姑。丈夫何在西擊ㇾ胡。吏置ㇾ馬。君具ㇾ車。請爲ニ諸君一鼓ニ嚨胡ー。

擧ニ秀才ー不ㇾ知ㇾ

(一)里中の人名 (二)猶亭を一家と見ていふ、(三)梟鳥の如き陳元を感化して父母に反哺の事を成さしむとなり

桓帝の初の小麥童謠

後漢書五行志に、元嘉中(一)に涼州の諸羌、一時倶に反す。將に命じて師を出すに、戰ふ毎に常に負けき。故に云々。

小麥は青青として大麥は枯る、誰か當に穫むべき者ぞ婦と姑となり(二)。丈夫は何くに在りや西のかた胡を擊てり。吏は馬を置き(三)、君は車を具ふ、請ふ諸君の爲に嚨胡を鼓せん(四)。

(一)後漢桓帝の年號 (二)男子皆出征したる意 (三)戎馬兵車を嚴裝して出征す (四)私かに不平を鳴らす意即ち胡人の侵入は惡政の致す所たりとなり

桓靈の時の童謠

後漢書に曰く、桓帝の世、更々相濫擧す(一)。人之が爲に歌ふらく、

秀才(二)に擧げられて書を知らず。孝廉(三)に擧げらるゝに父別居せり。寒素淸白(四)も濁れ

銖當レ復。

直如レ弦。死ニ道邊一。曲如レ鉤。反封侯。

父母何在在ニ

(一)成都に據つて帝を稱し建武十二年光武に滅ぼされし人なり　(二)武帝の鑄たりし錢貨の名、銖を朱に通じて漢室を指せるなり　(三)黄牛は王莽に白腹を公孫述に喩へてその妖なるを指す　(四)終に漢家に歸すべしとなり

順帝の時、京都の童謠

後漢書の五行志に、李固は爭ふらく清河王當に立つべしと。梁冀は蠡吾侯を立て、固は幽せられて獄に斃れき。而も胡廣(一)、趙戒、袁陽等は、一時封侯たりき。京都の童謠に云ふ。

直(二)きこと弦の如きは、道邊に死し、曲(三)ること鉤の如きは、反つて封侯たり。

(一)梁冀の黨たりし人々　(二)李固の如きを指す　(三)梁氏の黨與をいふ

考城の諺

後漢書に、仇覽は考城の人なり。蒲亭の長と爲る。初め亭に到るに、陳元(一)の母有り、元が不孝を告ぐ。覽は親ら元が家に到り、爲に人倫の孝行を陳し、諭すに禍福を以てす元卒に孝子と成りぬ。鄉邑之が諺を爲して曰く、

父母何くに在りや我が庭(二)に在り、我が鴟梟(三)を化して所生に哺せしむ。

城中好二高髻一。
四方高一尺。
城中好二廣眉一。
四方且レ半レ額。
城中好二大袖一。
四方全匹帛。

黃牛白腹。五

城中の謠

後漢書に、前世長安城中謠言す、政を改め風を移すに、必ず其本有り。上(一)の好む所は、下必ず焉より甚し。

城中高髻(二)を好めば、四方は高さ一尺。城中廣眉を好めば、四方は且に額(三)に半ならんとす。城中大袖を好めば、四方は全匹(四)の帛。

(一)論語の字面に據る　(二)もとゞりを高うする也　(三)額の半分を眉にするなり　(四)四丈の全絹にて衣服を製すとなり

蜀中の童謠

後漢書の五行志に、世祖の時、建武六年に、蜀中に童謠あり。是の時公孫述(一)は號を蜀中に僭せり。時人竊に言ふ、王莽は黃を稱す、述之に繼がんと欲すと。故に白と稱す。五銖(二)は漢家の物、明は復に當るなり。述は遂に誅滅せられき。

(三)黃牛白腹なるも、(四)五銖は當に復すべし。

惟寂漠自投レ閣○爰清靜作ニ符命一○

竈下養中郎將○爛ニ羊胃一騎都尉○爛ニ羊頭一關內侯○

投閣

漢書に、王莽が位を簒ふの後、復符命(一)を上つる者は、莽盡く之を誅す。時に揚雄は書を天祿閣に校せり。使者は雄を收めんと欲す。雄恐れ、乃ち閣より自ら投じて幾んど死せんとせり。京師語つて曰く、

惟寂漠(二)として自ら閣より投じ、爰に淸靜にして符命を作る。

(一) 天命を受けて君王となるの瑞文なり　(二) 揚雄嘗て解嘲の文を作り淸靜寂漠の語ありこゝには之を嘲罵するなり

竈下の養

東觀漢紀に、更始(一)の長安に在るや、授くる所の官爵は、皆群小の賈人、或は膳夫庖人のみ。長安語つて曰く、

竈下の養(二)は中郎將、羊胃を爛(三)するは騎都尉、羊頭を爛するは關內侯。

(一) 劉玄なり光武帝の前に假に更始帝と號せり　(二) 賄方の小者をいふ　(三) 煮過して爛らすなり

苦二飢寒一。遂二彈丸一。

邪徑敗二良田一。
讒口亂二善人一。
桂樹華不レ實。
黄爵巣二其顚一。
昔爲二人所一レ羨。
今爲二人所一レ憐。

□ 彈丸を逐ふ

西京雜志に、韓嫣は彈を好む、金を以て丸を爲る。京師の兒童、嫣が出で彈するを聞くや、輙ち之に隨へり。(一)飢寒に苦しんで、(二)彈丸を逐ふ。

㊀ 鳥獸を獵する一種の武器 ㊁ 金丸を拾つて飢寒を凌がんとする也

成帝の時の歌謠

漢書の五行志に見ゆ

(一)邪徑は良田を敗り、讒口は善人を亂る。(二)桂樹華きて實らざるに、(三)黄爵は其顚に巣くふ。昔は人の(四)羨む所と爲りしが、今は人の憐む所と爲りぬ。

㊀ 横しまなる小路なり王莽の如き小人に喩ふ ㊁ 皮赤き樹なり漢の德に喩ふ成帝に子無し故に實らずといふ ㊂ 莽は土德を用ひたり故に黄といふ ㊃ 漢高祖開國の時を指す

失㆓我焉支山㆒。令㆔我婦女無㆓顏色㆒。失㆓我祁連山㆒。使㆔我六畜不㆓蕃息㆒。

る。

我が焉支山を失ふ、我が婦女をして顏色無からしむ。(一)我が祁連山を失ふ、我が六(二)畜をして蕃息せざらしむ。

㊀牧草を失ひしが爲に驚怖するなり　㊁牛馬羊豚雞犬を曰ふ

成帝の時の燕々童謠

燕燕。尾涎涎。張公子。時相見。木門倉琅根。燕飛來。啄㆓皇孫㆒。皇孫死。燕啄㆓矢㆒。

漢書の五行志に、成帝微行を爲して出游し、常に富平侯張放と與にす。倶に富平侯が家人と稱す。河陽を過ぎて主として樂(一)を作し、舞ふ者趙の飛燕を見て之を幸す。後宮皇子は卒に皆誅死せられき。

燕や燕や、尾(二)涎涎たり。張公子、時に相見る。木門倉琅の根(三)あり。燕飛び來りて、(四)皇孫を啄ばむ。皇孫死すれば、(五)燕は矢を啄ばむ。

㊀飮宴音樂をいふ　㊁尾の光澤ある貌飛燕が張放によりて宮門に入るを指す　㊂青銅飾ある木門を潛り入る　㊃飛燕が諸后皇子を譖殺せるに喩ふ　㊄飛燕も亦後に廢せられしを屎を食ふと喩ふるなり

牢耶石耶。五鹿客耶。印何纍纍。綬若若耶。

五鹿嶽嶽。朱雲折㆓其角㆒。

漢書佞幸傳に、元帝の時、宦官石顯は中書令と爲り、僕射牢梁、少府五鹿充宗と、結んで黨友と爲り、附倚する者は皆寵位を得たり。民歌つて云云。

(一)牢か石か、五鹿の客か。(二)印何ぞ纍纍たる、綬若若たり。

(一)牢氏か石氏か五鹿氏の客なるべし (二)印綬多くして財富なる光景なりとなり

五鹿の歌

漢書に、五鹿充宗は貴幸せられて、(一)梁丘の易を爲む。元帝は諸易家と辨論せしむるに諸儒能く抗する莫し。朱雲を薦むる者有り。(二)齊を攝して堂に升り、首を抗げて講ずるに、音左右を動かす。故に諸儒諺つて曰く、

(三)五鹿嶽嶽たり、朱雲其角を折る。

(一)梁丘據の易說 (二)衣のすそなり論語にも見ゆ (三)五鹿の角長かりしも朱雲の爲に折られたりとなり

匈奴の歌

十道志に、焉支、祁連の二山は、皆美なる水草あり。匈奴之を失ふや、乃ち此の歌を作

鮑氏驄。三人司隷再入レ公。馬雖レ痩行歩工。

隴頭流水。流離四下。念二我行役一。飄二然曠野一。登レ高望レ遠。涕零雙墮。

隴頭流水。鳴聲幽咽。遙望二秦川一。肝腸斷絕。

列異傳に云ふ、鮑宣と、宣が子永と、永が子昱と、三世皆司隷と爲りて驄馬に乘る。京師の人之を歌ふらく

鮑氏の驄、(一)三人司隷(二)として再び公に入る。馬は痩せたりと雖も行歩は工なり。

(一) 靑毛の馬なり　(二) 司隷として毎月二回參朝すとなり

隴頭歌二首

(一)隴頭の流水、流離して四もに下る。我が行役を念うて、(二)曠野に飄然たり。高きに登り遠きを望み、涕零雙び墮つ。

(一) 甘肅省にある隴山の頭より流れ出づる水　(二) 廣き各地に飄泊するなり曠一本四に作る

隴頭の流水、鳴る聲(一)幽咽たり。遙に(二)秦川を望んで、肝腸斷絕す。

(一) むせび悲しむ　(二) 關中の地なり

牢石歌

潁水清、灌氏寧。潁水濁、灌氏族。

田ニ于何所ゾ。池陽谷口。鄭國在レ前。白渠起レ後。擧レ鍤如レ雲。決レ渠爲レ雨。涇水一石。其泥數斗。且漑且糞。長ニ我禾黍ヲ。衣ニ食京師億萬之口ヲ。

權利を爲して潁川に橫なり。潁川の兒之を歌ふらく。

(一)潁水清めば、灌氏寧く、潁水濁れば、灌氏族せらる。

(一)漢武帝の時太僕たりし人なり (二)權勢を逞しうし我利をはかる (三)潁水の清む間は灌氏の一族安全なりの義

鄭の白渠の歌

漢書に、漢の(一)大始中に、中大夫白公奏を遣りて、鄭國渠を穿り、涇水を引いて田に漑がしむ。民其饒を得て、歌つて曰く、

何の所にか田つくらん、池陽の谷口。(二)鄭國前に在り、白渠後に起る。(三)鍤を擧ぐれば雲の如く、渠を決すれば雨と爲る。(四)涇水一石、其泥數斗。且つ漑ぎ且つ糞ひ、我が禾黍を長ぜしめ、京師億萬の口を衣食せしむ。

(一)漢武の年號 (二)鄭國渠を謂ふ (三)役に從ふ者の多き義 (四)涇水は濁水なり故にいふ

鮑司隸が歌

高田種二小麥一。終久不レ成レ穗。男兒在二他鄕一。焉得レ不二憔悴一。

一尺布尙可レ縫。一斗粟尙可レ舂。兄弟二人不二相容一。

（一）高田に小麥を種う、終久まで穗を成さず。男兒他鄕に在り、焉ぞ憔悴せざるを得んや。

㊀磽确の土地に禾穀熟せずとなり他鄕の憔悴し易き義を寓せり

淮南の民歌

漢書に、淮南の厲王長は高帝の少子なり。法を廢して不軌なり。文帝之を蜀の嚴道に徙す。死す。（一）民歌を作つて云ふ、下は雜歌謠を錄す。

（二）一尺の布は尙縫ふべし、一斗の粟は尙舂くべし、（三）兄弟二人相容れず。

㊀漢書に食はずして憤死せりと見ゆ　㊁尺布も縫うて共に著るべし　㊂この兄弟は相拒斥せりとの意

潁川歌

漢書に、灌（一）夫は文學を好まず、任俠を喜み然諾を已だしうす。諸所に交通するもの、豪傑大猾に非ざる無く、家は數千萬を累ね、食客は日に數十百人あり。坡池田園宗族賓客、

甘瓜抱二苦蔕一。
美棗生二荊棘一。
利傍有二倚刀一。
貪人還自賊。

藁砧今何在。
山上復有レ山。
何當二大刀頭一。
破鏡飛上レ天。

菟絲從二長風一。
根莖無二斷絕一。
無レ情尚不レ離。
有レ情安可レ別。

(一)甘瓜苦蔕を抱き、美棗荊棘に生ず。利の傍に(二)倚刀有り、貪人は還つて自ら賊ふ。

(一) 甘き瓜に苦きへたあり甘き棗はいばらに生ず (二) 利偏の倚伏する刀の義

古絶句

(一)藁砧今何んか在る、山上復山有り。何か當に大刀の頭なるべき、破鏡飛んで天に上る。

(一) 藁うち臺俗に砆と稱す夫の意を隱せり夫出てゝ歸るに歲月長しとの意大刀の頭には鐶あり還の義にとり結句に半月の意を寓す

(一)菟絲長風に從ひ、根莖斷絕する無し。(二)情無きも尚離れず、情有るは安ぞ別るべけん。

(一) 一種の蔓草根無しかづら (二) 無情の草木も猶別離せずとなり

古歌

所レ思在二遠道一。
馨香易二銷歇一。
繁華會二枯槁一。
悵望何所レ言。
臨レ風送二懷抱一。

歩出二城東門一。
遙望二江南路一。
前日風雪中。
故人從レ此去。
我欲レ渡二河水一。
河水深無レ梁。
願爲二雙黃鵠一。
高飛還二故鄕一。

採レ葵莫レ傷レ根。
傷レ根葵不レ生。
結レ交莫レ羞レ貧。
羞レ貧友不レ成。

(一)美芳ある香草 (二)一種の藥草 (三)一包とするにも足らず (四)美麗なる草花 (五)吹く風に我が中情を托送すとなり

古詩一首

歩して城の東門を出で、遙に江南の路を望む。前日風雪の中、故人(一)此より去りき。我(二)河水を渡らんと欲すれども、河水は深うして梁無し。願はくは雙黃鵠と爲りて、高く飛んで故鄕に還らん。

(一)この江南の路より別れ去りしなり (二)歸心矢の如くなるをいふ

古詩二首

葵(一)を採るに根を傷ふこと莫れ、根を傷へば葵は生ぜず。交を結ぶに貧を羞づること莫れ、貧を羞づれば友は成らず。(二)

(一)一種の菜類 (二)眞友得難き意

人偏欲二我知一。因レ君爲二羽翼一。

十五從レ軍征。八十始得レ歸。道逢二鄉里人一。家中有二阿誰一。遙望是君家。松柏冢纍纍。兎從二狗竇一入。雉從二梁上一飛。中庭生二旅穀一。井上生二旅葵一。烹レ穀持作レ飯。采レ葵持作レ羹。羹飯一時熟。不レ知貽二阿誰一。出レ門東向望。涙落沾二我衣一。

十五にして軍に從つて征し、八十にして始めて歸るを得たり。道に鄉里の人に逢ふ、家中阿誰(一)か有る。遙に望む是君が家、松柏の冢纍纍たり。兎は狗竇(二)より入り、雉は梁上より飛ぶ。中庭に旅穀(三)を生じ、井上に旅葵(四)を生ず。穀を烹て持つて飯を作り、葵を采つて持つて羹を作る。羹飯一時に熟す、知らず阿誰にか貽らん。門を出でて東向して望み、涙落ちて我衣を沾す。

(一) 誰人に同じ阿は親愛の意を表する語　(二) 狗を畜ひし穴より兎飛び込む　(三) 自然生の穀類　(四) 菜の名

新樹二蘭蕙葩一。雜用二杜蘅草一。終朝采二其華一。日暮不レ盈レ抱。采レ之欲レ遺レ誰。

新に蘭蕙(一)の葩を樹う、雜ふるに杜蘅草(二)を用てす。終朝其華を采るに、日暮に抱に盈たず。之を采つて誰にか遺らんと欲する、思ふ所は遠道に在り。馨香は銷歇(三)し易く、繁華(四)は枯槁に會す。悵望して何の言ふ所ぞ、風に臨んで懷抱を送る(五)。

悲下與二親友一別上。
氣結不レ能レ言。
贈レ子以二自愛一。
道遠會見難。
人生無二幾時一。
顚沛在二其間一。
念子棄レ我去。
新心有レ所レ歡。
結二志青雲上一。
何時復來還。

橘柚垂二華實一。
乃在二深山側一。
聞君好二我甘一。
竊獨自彫飾。
委二身玉盤中一。
歷レ年冀レ見レ食。
芳菲不二相投一。
青黃忽改レ色。

親友と別るゝを悲しみ、氣結ぼれて言ふ能はず。子に贈るに自愛すべきを以てす、道遠くして會見は難し。人生幾時も無し、(一)顚沛は其間に在り。(二)念ふ子が我を棄てゝ去り、新心に歡ぶ所有りて、(三)志を青雲の上に結ばば、何の時か復來り還らんかを。

(一)顚頓し傾仆する類なり　(二)以下友人が新交を訂し、舊交を忘れんことを恐るゝなり　(三)立身して顯要の地位に上る義

古詩三首

橘柚華實を垂れ、乃ち深山の側に在り。(一)聞く君我の甘を好むと、竊に獨り自ら(二)彫飾す。身を玉盤の中に委し、年を歷て食はれんことを冀ふ。(三)芳菲相投ぜず、(四)青黃忽ち色を改む。人儻し我を知らんと欲せば、(五)君に因りて羽翼を爲さん。

(一)君に棄てられし臣自ら喩ふ　(二)我が才能を試みんと欲するを聞くとなり　(三)芳香強烈にして君の氣に入らず　(四)從來の青色も幾時到りて忽ち黃變せんとなり　(五)君に願うて輔佐とならんとの意

嗟爾亭盧子。獨行如履冰。短褐中無緒。帶斷續以繩。瀉水置瓶中。焉辨淄與澠。巢父不洗耳。後世有何稱。

(一)青天好晴の日光　(二)星名なり天漢は銀河　(三)雪尖穹廬中に棲息する人々　(四)齊の易牙はよく二水の水味を辨へたりとぞ　(五)堯代の隱者にして許由が耳を洗ひしを聞き、自家の牛をして更に上流を飲ましめし人

古詩

上山採蘼蕪。下山逢故夫。長跪問故夫。新人復何如。新人雖言好。未若故人姝。顏色類相似。手爪不相如。新人從門入。故人從閤去。新人工織縑。故人工織素。織縑日一匹。織素五丈餘。將縑來比素。新人不如故。

山に上つて蘼蕪(一)を採り、山を下つて故夫(二)に逢ふ。長跪して故夫に問ふ、新人(三)復何如と。新人好しと言ふと雖も、未だ故人の姝きには若かず。顏色類ね相似るも、(四)手爪は相如かず。(五)新人は門より入り、故人は閤より去る。新人は縑を織るに工に、故人は素を織るに工なり。縑を織ること日に(六)一匹、素を織るは五丈餘なり。縑を將つて來りて素に比するに、新人は故に如かず。

(一)一種の香草　(二)舊時の良人　(三)新來の後妻なり　(四)手工に同じ　(五)以下新婦の奢に故婦の儉なるを叙す　(六)四丈を匹とす

想見餘光輝一。
玄鳥夜過レ庭。
髣髴能復飛。
褰レ裳路踟躕。
彷徨不レ能レ歸。
浮雲日千里。安知二我心悲一。思レ得二瓊樹枝一。以解二長渴飢一。

安ぞ我が心の悲を知らん。(五)瓊樹の枝を思ひ得て、以て長き飢渇を解かん。

(一)はやぶさの類　(二)光彩ありて鮮明なる貌　(三)とばりを下さずして明け放し置くなり　(四)つばめなり　(五)詩經の瓊瑤より轉じて書信の義に用ひしなり

鳳凰鳴二高岡一。
有レ翼不レ好レ飛。
安知三鳳皇德。
貴二其來見稀一。

鳳凰高岡に鳴く、翼有れども飛ぶことを好まず。安んぞ(一)鳳皇の德は、其來り見ゆるの稀なるを貴ぶなることを知らん。(闕)

(一)鳳凰を貴ぶは其來り見ゆること稀なればなり云々

紅塵蔽二天地一。
白日何冥冥。
微陰盛二殺氣一。
淒風從レ此興。
招搖西北指。
天漢東南傾。

紅塵天地を蔽ひ、白日何ぞ冥冥たる。微陰殺氣を盛にし、淒風此より興る。(一)招搖は西北を指し、(二)天漢は東南に傾く。(三)嗟爾窮廬子、獨行して冰を履むが如し。短褐中に緒無く、帶斷えて續ぐに繩を以てす。水を瀉いで瓶中に置く、焉ぞ(四)淄と澠とを辨へん。(五)巣父も耳を洗はずば、後世何をか稱する有らん。

縁以二結不一レ解。
以レ膠投二漆中一。
誰能別二離此
明月何皎皎。
照二我羅牀幃一
憂愁不レ能レ寐
攬レ衣起徘徊。
客行雖レ云レ樂。
不レ如二早旋歸一。
出レ戸獨彷徨。
愁思當レ告レ誰。
引レ領還入レ房。
淚下沾二裳衣一。

晨風鳴二北林一。
熠熠東南飛。
願レ言レ所二相思一。
日暮不レ垂レ帷。
明月照二高樓一。

良人歸宅後の合歡を豫想したる句なり

明月何ぞ皎皎たる、我が羅の(一)牀幃を照す。憂愁して寐る能はず、衣を攬つて起つて徘徊す。(二)客行は樂しと云ふと雖も、早く旋歸せんには如かじ。戸を出でて獨り彷徨し、愁思當に誰にか告ぐべき。領を引いて還つて房に入り、淚下つて裳衣を沾ほす。

(一)寐床用のうすものの帳を指す　(二)旅行は樂しくとも家に在るの愉快には如かじ

蘇李の詩に擬す

晨風北林に鳴き、(一)熠熠として東南に飛ぶ。相思ふ所を言はんことを願ひ、日暮まで(二)帷を垂れず。明月高樓を照し、(三)餘の光輝を想見す。(四)玄鳥夜庭を過ぎ、翩翩として能く復飛ぶ。裳を褰げて路に躑躅し、彷徨して歸る能はず。浮雲日に千里、

孟冬寒氣至。北風何慘慄。愁多知㆓夜長㆒。仰觀㆓衆星列㆒。三五明月滿。四五蟾兎缺。客從㆓遠方㆒來。遺㆓我一書札㆒。上言㆓長相思㆒。下言㆓久離別㆒。置㆓書懷袖中㆒。三歲字不㆑滅。一心抱㆓區區㆒。懼㆔君不㆓識察㆒。

孟冬寒氣至る、北風何ぞ慘慄なる。(一)愁多くして夜の長きを知り、仰いで衆星の列るを觀る。三五明月滿ち、(二)四五蟾兎缺く。客あり遠方より來り、我に一書札を遺りぬ。(三)上には長く相思ふと言ひ、下には久しく離別すと言ふ。書を懷袖の中に置くに、(四)三歲まで字滅せず。一心區區を抱くも、(五)君が識察せざらんことを懼る。

(一)寒氣の激烈なる意　(二)十五夜に滿月となり二十日には月缺くとなり　(三)一本の手紙　(四)歸來を希つこと三年に及ぶ意　(五)心中に眷々思慕の情を懷くとなり

客從㆓遠方㆒來。遺㆓我一端綺㆒。相去萬餘里。故人心尙爾。文彩雙鴛鴦。裁爲㆓合歡被㆒。著以㆓長相思㆒。

客あり遠方より來り、我に一端の綺を遺れり。(一)相去る萬餘里、故人心尙爾り。(二)文彩に雙鴛鴦あり、裁つて合歡の被を爲る。(三)著るゝに長く相思ふを以てし、縁とするに結んで解けざるを以てす。(四)(五)膠を以て漆中に投ぜんに、誰か能く此を別離せん。

(一)綾衣なり　(二)遠方の良人が我を忘れざるを悅ぶ意　(三)綿を裝ひ入るゝなり　(四)緣邊を縫ひとづる意　(五)

何能待二來玆一。
愚者愛二惜費一。
但爲二後世嗤一。
仙人王子喬。
難レ可二與等一レ期。
凛凛歳云暮。
螻蛄夕鳴悲。
涼風率已厲。
遊子寒無レ衣。
錦衾遺二洛浦一。
同袍與レ我違。
獨宿累二長夜一。
夢想見二容輝一。
良人惟二古歡一。
枉レ駕惠二前綏一。
願レ得二長巧笑一。
攜レ手同レ車歸。
既來不レ須臾一。
又不レ處二重闈一。亮無二晨風翼一。焉能凌レ風飛。眄睞以適レ意。引レ領遙相睎。徙倚懷二感傷一。垂レ涕沾二雙扉一。

難し。

㈠後世子孫の計を指す ㈡夜を以て日につぐなり ㈢來年に同じ ㈣古代の神仙なり王子喬と同齢に達せんことは望むべからずとなり

凛凛として歳云に暮れ、(一)螻蛄夕に鳴き悲しむ。涼風率に已に厲しく、遊子寒うして衣無し。錦衾を(二)洛浦に遺る、同袍我と違ふ。獨宿して長夜を累ね、夢想して(三)容輝を見る。良人は(四)古歡を惟ひ、駕を枉げて(五)前綏を惠む。長き巧笑を願ひ得て、手を攜へて車を同じうして歸らん。(六)既に來るや須臾ならず、又重闈に處らず。亮に晨風の翼無し、焉ぞ能く風を凌いで飛ばん。(七)眄睞して以て意に適し、領を引いて遙に相睎む。(八)徙倚して感傷を懷き、涕を垂れて雙扉を沾ほす。

㈠一種の昆蟲けら ㈡洛神の居る所なり ㈢良人の容姿をいふ ㈣舊時の歡好 ㈤車前の把索なり ㈥初婚の時の樣を夢むるなり ㈦斜に眺わたす ㈧門戸に倚りて立つなり

人生忽如ㇾ寄。
壽無二金石固一。
萬歲更相送。
賢聖莫二能度一。服食求二神仙一。多爲ㇾ藥所ㇾ誤。不ㇾ如下飲二美酒一。被中服紈與上ㇾ素。

（一）長安城の郭北　（二）庶人の墓には墳無く楊柳を樹うるのみ　（三）永久の暗黑界　（四）歲時の無限なるを喩ふ　（五）藥餌を飲食して神仙とならんとするなり　（六）華美なる綿服なり

去者日以疎。
來者日以親。
出二郭門一直視。
但見二丘與一ㇾ墳。
古墓犂爲ㇾ田。
松柏摧爲ㇾ薪。
白楊多二悲風一。
蕭蕭愁二殺人一。
思ㇾ還二故里閭一。
欲ㇾ歸道無ㇾ因。
生年不ㇾ滿ㇾ百。
常懷二千歲憂一。
晝短苦二夜長一。
何不二秉ㇾ燭遊一。
爲ㇾ樂當ㇾ及ㇾ時。

去る者は日に以て疎く、來る者は日に以て親しむ。郭門を出でて直視すれば、但（一）丘と墳とを見る。古墓は犂かれて田と爲り、松柏は摧けて薪と爲る。白楊に悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す。故の里閭（二）に還らんことを思へども、（三）歸らんと欲するに道に因無し。

（一）埋葬せる丘陵と塚と　（二）郷里の門なり　（三）歸るべき道も求め得ざる意

生年百に滿たず、常に千歲（一）の憂を懷く。晝短うして夜の長きに苦しむ、（二）何ぞ燭を秉つて遊ばざる。樂を爲す當に時に及ぶべし、何ぞ能く來茲（三）を待たんや。愚者は費を愛惜して、但後世の嗤と爲る。（四）仙人王子喬、與に期を等しうすべきこと

何爲自結束。
燕趙多佳人。
美者顏如玉。
被服羅裳衣。
當戸理清曲。
音響一何悲。
絃急知柱促。
馳情整巾帶。沈吟聊躑躅。思爲雙飛燕。銜泥巢君屋。

帶を整へ、沈吟して聊か躑躅す。雙飛の燕と爲りて、泥を銜んで君が屋に巢くはんことを思ふ。

㈠旋風に同じ又迴風に作る ㈡蟋蟀と共に詩經の篇名なり一は棄臣の悲傷を叙し一は儉約の度に過ぐるを刺る詩なり ㈢汚穢を洗ひ去る意 ㈣拘泥し拘束せらるゝ義 ㈤絃聲急迫にして琴柱の相近づけるなり ㈥衣帶を整へて情志を縦にするなり

驅車上東門。
遙望郭北墓。
白楊何蕭蕭。
松柏夾廣路。
下有陳死人。
杳杳卽長暮。
潛寐黃泉下。
千載永不寤。
浩浩陰陽移。
年命如朝露。

車を驅りて東門に上り、遙に㈠郭北の墓を望む。㈡白楊何ぞ蕭蕭たる、松柏廣路を夾めり。下に陳き死人有り、杳杳として㈢長暮に卽く。黃泉の下に潛に寐ね、千載まで永く寤めず。㈣浩浩として陰陽移り、年命は朝露の如し。人生は忽として寄るが如し、壽に金石の固無し。萬歲更〻相送り、賢聖も能く度ること莫し。㈤服食して神仙を求むるも、多くは藥の爲に誤らる。美酒を飲んで、㈥紈と素とを被服せんには如かじ。

悠悠渉二長道一。四顧何茫茫。東風搖二百草一。所レ遇無二故物一。焉得レ不二速老一。盛衰各有レ時。立レ身苦レ不レ早。人生非二金石一。豈能長壽考。奄忽隨レ物化。榮名以爲レ寶。

百草を搖かす。遇ふ所故物(二)無し、焉ぞ速に老いざるを得んや。盛衰各〻時有り、身を立つるに早からざるを苦しむ。(三)人生は金石に非ず、豈能く長く壽考ならんや。奄忽として物に隨つて化し、榮名(四)以て寶と爲す。

(一)暗に致仕の意を含む　(二)故舊の相識物　(三)立身の時既に過ぎたり　(四)榮名を立てゝ長く自己の寶とせんとなり

東城高且長。逶迤自相屬。廻風動レ地起。秋草萋以綠。四時更變化。歲暮一何速。晨風懷二苦心一。蟋蟀傷二局促一。蕩滌放二情志一。

東城高うして且長し、逶迤として自ら相屬る。廻風地を動かして起り、秋草萋として以て綠なり。四時更〻變化し、歲暮一に何ぞ速かなる。(二)晨風も苦心を懷き、蟋蟀も局促を傷む。(三)蕩條して情志を放にせん、何爲れぞ自ら結束する。(四)燕趙に佳人多く、美なる者は顏玉の如し。羅の裳衣を被服し、戶に當りて淸曲を理む。音響一に何ぞ悲しき、絃急(五)にして柱の促するを知る。(六)情を馳せて巾

庭中有二奇樹一。
綠葉發レ華滋。
攀レ條折二其榮一。
將二以遺レ所レ思。
馨香盈二懷袖一。
路遠莫レ致レ之。
此物何足レ貴。
但感二別經レ時。
迢迢牽牛星。
皎皎河漢女。
纖纖擢二素手一。
札札弄二機杼一。
終日不レ成レ章。
泣涕零如レ雨。
河漢淸且淺。
相去復幾許。
盈盈一水間。
脈脈不レ得レ語。
廻レ車駕言邁。

庭中に奇樹有り、綠葉華を發くこと滋し。條を攀ぢて其榮を折り、將に以て思ふ所に遺らんとす。馨香は懷袖に盈つ、路遠くして之を致すこと莫し。(二)此の物何ぞ貴ぶに足らん、但別れて時を經たるを感ず。

(一) 想ふ所の親友 (二) 此の花は贈るに足らざるも花によりて時節の推移を悟ずとなり

(一)迢迢たる牽牛星、皎皎たる河漢の女。纖纖として素手を擢き、(二)札札として機杼を弄す。終日章を成さず、泣涕零つること雨の如し。(三)河漢は淸且つ淺、相去る復幾許ぞ。(四)盈盈たる一水の間、脈脈として語ることを得ず。

(一) 遠くはるかなる貌 (二) 機織の聲に曰ふ (三) 天の川は淺く狹し (四) 水の盈てる一小川のために相視るのみにて語を交ふるを得ずとなり

(一)車を廻らして駕して言に邁く、悠悠として長道を涉る。四顧何ぞ茫々たる、東風

高舉振二六翮一。
不レ念二攜レ手好一。
棄レ我如二遺跡一。
南箕北有レ斗。牽牛不レ負レ軛。良無二盤石固一。虛名復何益。

ふ　㊄ 富貴となりて我を棄てしを指す　㊅ 箕、斗、牽牛、皆星名なれども名の如く行へるに非ずとなり朋友の名ありて實なきに喩ふ

冉冉孤生竹。
結二根泰山阿一。
與レ君爲二新婚一。
兎絲附二女羅一。
兎絲生有レ時。
夫婦會有レ宜。
千里遠結レ婚。
悠悠隔二山陂一。
思レ君令二人老一。
軒車來何遲。
傷彼蕙蘭花。
含レ英揚二光輝一。
過レ時而不レ采。將レ隨二秋草萎一。君亮執二高節一。賤妾亦何爲。

冉冉(一)たる孤生竹、根を泰山の阿に結ぶ。君と新婚を爲し、兎絲(二)女蘿に附く。兎絲の生ずるや時有り、夫婦の會にも宜有り。千里遠く婚を結び、悠悠として山陂(三)を隔つ。君を思へば人をして老いしむ、軒車(四)來ること何ぞ遲き。傷む彼の蕙蘭の花、英を含んで光輝を揚ぐ。時を過ぎて采らずんば、將に秋草の萎に隨はんとす。君亮に高節(五)を執らば、賤妾亦何をか爲さん。

㊀ 弱く伸びたる貌　㊁ 菟草の木に附着せるに似たりとなり　㊂ 山坂に同じ　㊃ 新婦を迎ふべき高大の車をいふ　㊄ 貞尚の節操を守る

不レ惜二歌者苦一。但傷二知音稀一。願爲二雙黄鵠一。奮レ翅起高飛。

涉レ江採二芙蓉一。
蘭澤多二芳草一。
采レ之欲レ遺レ誰。
所レ思在二遠道一。
還顧望二舊鄉一。
長路漫浩浩。
同レ心而離居。
憂傷以終レ老。

江を涉つて芙蓉を採る、(一)蘭澤に芳草多し。之を采つて誰にか遺らんと欲する、(二)思ふ所は遠道に在り。(三)還顧して舊鄉を望む、長路漫として浩浩たり。心を同じうして離居し、憂傷して以て老を終へん。(四)

(一)香蘭の生ずる水澤 (二)友人今遠方に在りとなり (三)友人も亦故鄉を想ふならんと察するなり (四)衰老に至る意

明月皎夜光。
促織鳴二東壁一。
玉衡指二孟冬一。
衆星何歷歷。
白露霑二野草一。
時節忽復易。
秋蟬鳴二樹間一。
玄鳥逝安適。
昔我同門友。

明月皎として夜光く。(一)促織東壁に鳴く。(二)玉衡は孟冬を指し、衆星何ぞ歷歷たる。白露は野草を霑し、時節忽に復易る。秋蟬は樹間に鳴き、(三)玄鳥は逝いて安んか適く。昔我が同門の友、高擧して(四)六翮を振へり。(五)手を携ふるの好を念はずして、我を棄つること遺跡の如くす。(六)南に箕あり北に斗有り、牽牛も軛を負はず、良に盤石の固無くば、虚名ありとも復何の益かあらん。

(一)蟋蟀の一名 (二)北斗の第五星なり漢歷によりて孟冬と書けり (三)燕に同じ (四)羽翼に同じ活動するに喩

齊レ心同二所願一。
含レ意俱未レ伸。
人生寄二一世一。
奄忽若二飆塵一。
何不下策二高足一
先據中要路津上。
無レ爲下守二窮賤一
轗軻長苦辛上。
西北有二高樓一。
上與二浮雲一齊。
交疏結二綺牕一。
阿閣三重階。
上有二絃歌聲一。
音響一何悲。
誰能爲二此曲一。
無二乃杞梁妻一。
清商隨レ風發。
中曲正徘徊。
一彈再三歎。
慷慨有二餘哀一。

策つて、先づ要路の津に據らざる。窮賤を守りて、轗軻(七)して長く苦辛するを爲すこと無れ。

(一)絶調に同じ (二)歌詞中に好德を頌する高言あり (三)歌の眞意を知る (四)富貴を翹望す (五)莊子に見ゆ 人生はこの世に寄寓するが如きのみとの意 (六)逸足の馬なり自己の才能に喩ふ才能を振つて顯位に昇れとなり (七)不遇をいふ車の行くに利あらざる貌

(一)西北に高樓有り、上は浮雲と齊し。交疏綺牕(二)に結び、(三)阿閣三重の階あり。上に絃歌の聲有り、音響一に何ぞ悲しき。誰か能く此曲を爲す、乃ち杞梁(四)が妻なる無らんや。清商は風に隨つて發し、(五)中曲正に徘徊す。一彈して再三歎じ、慷慨して餘哀有り、歌者の苦を惜まず、但(六)知音の稀なるを傷む。願はくは雙黃鵠と爲りて翅を奮つて起つて高く飛ばん。

(一)君の住む方角 (二)窗先の鐵網なり綺牕は飾ある窓 (三)四柱の樓閣 (四)哭して城を崩せし人前に出づ (五)曲調のなかばなる時 (六)自己の心情を知悉する人物

青青陵上柏。
磊磊澗中石。
人生二天地間一。
忽如二遠行客一。
斗酒相娛樂。
聊厚不レ爲レ薄。
驅レ車策二駑馬一。
遊二戲宛與一レ洛。
洛中何鬱鬱。
冠帶自相索。
長衢羅二夾巷一。
王侯多二第宅一。
兩宮遙相望。雙闕百餘尺。極レ宴娛二心意一。戚戚何所レ迫。

(一)青青たり陵上の柏、磊磊たり澗中の石。人の天地の間に生るゝ、忽として遠行の客の如し。斗酒相娛樂し、(二)聊厚しとして薄しとせず。車を驅つて駑馬に策ち、(三)宛と洛とに遊戲す。洛中何ぞ鬱鬱たる、(四)冠帶自ら相索む。長衢夾巷に羅り、王侯第宅多し。(五)兩宮遙に相望み、雙闕百餘尺あり、宴を極めて心意を娛さむ、戚戚として何の迫る所あらん。

(一) 人壽は陵柏澗石の如く長久なる能はずとなり (二) 僅少なる衣食をも充分なるものと思ひ直すなり (三) 宛縣と洛場城と (四) 洛中に衣冠の人多く街路繁盛高樓大宅多きに驚けるなり (五) 南北兩宮は間に約七里を隔つ

今日良宴會。
歡樂難二具陳一。
彈レ箏奮二逸響一。
新聲妙入レ神。
令德唱二高言一。
識レ曲聽二其眞一。

今日良宴會、歡樂具に陳し難し。箏を彈じて(一)逸響を奮ひ、新聲の妙は神に入る。(二)令德高言を唱へ、(三)曲を識つて其眞を聽く。心を齊しうして(四)所願を同じうし、意を含んで倶に未だ伸びず。人生は(五)一生に寄る、奄忽として飇塵の若し。何ぞ(六)高足に

各在二天一涯一。道路阻且長。會面安可レ知。胡馬依二北風一。越鳥巣二南枝一。相去日已遠。衣帶日已緩。浮雲蔽二白日一。遊子不二顧返一。思レ君令二人老一。歳月忽已晩。棄捐勿二復道一。努力加二餐飯一。

越鳥は南枝に巣くふ。相去ること日已に遠く、(五)衣帶日に已に緩なり。(六)浮雲白日を蔽ひ、遊子顧返せず。君を思へば人をして老いしむ、歳月忽として已に晩る。(七)棄捐せらるとも復道ふこと勿し。努力して餐飯を加へよ。

㈠玉臺新詠なり　㈡文選の作者梁の昭明太子　㈢夫君の遠行を想ふ　㈣各其故郷を戀ふ例に引けるなり　㈤別後憂苦して身體痩せ細れる義　㈥山河の良人を隔つる意　㈦妾が棄てられしを恨みず君が健康を祈るとなり

青青河畔草。鬱鬱園中柳。盈盈樓上女。皎皎當二牕牖一。娥娥紅粉妝。纖纖出二素手一。昔爲二倡家女一。今爲二蕩子婦一。蕩子行不レ歸。空牀難二獨守一。

(一)青青たり河畔の草、鬱鬱たり園中の柳。(二)盈盈たり樓上の女、皎皎として(三)牕牖に當る。娥娥たる紅粉の妝、纖纖として素手を出す。昔は倡家の女爲り、(四)今は蕩子の婦爲り、蕩子行いて歸らず、(五)空牀獨り守り難し。

㈠青草垂柳孤棲の地を叙す　㈡形ちづくる義　㈢窓のほとりに立つ　㈣遊蕩なる男子　㈤空しく孤牀を守らんよりは艶容をなして男子を誘はんとなり

左右種梧桐。
枝枝相覆蓋。
葉葉相交通。
中有雙飛鳥。
自名爲鴛鴦。
仰頭相向鳴。
夜夜達五更。
行人駐足聽。寡婦起彷徨。多謝後世人。戒之愼勿忘。

を仰いで相向つて鳴き、夜夜五更(四)に達す。行人足を駐めて聽き、寡婦起つて彷徨す。多謝す後世の人、之を戒しめて愼んで忘るゝ勿れ。

(一) 焦氏と劉氏と (二) 五嶽中の華嶽なり陝西華陰縣南に在り (三) 鳴聲について言ふ (四) 毎夜夜明頃まで鳴る
とはすとなり

古詩十九首

十九首、一人一時の作に非ず、玉臺(一)に、中幾章を以て枚乘と爲し、文心雕龍に、孤竹一篇を以て傅毅が詞と爲すも、昭明(二)は、姓氏を知らざるを以てして、統べ名づけて古詩と爲せり。昭明に從ふを允と爲す。

行行重行行。
與君生別離。
相去萬餘里。

(三)行き行きて重ねて行き行く、君と生きながら別離す。相去ること萬餘里、各〻天の一涯に在り。道路阻つて且長し。會面安ぞ知るべけん。(四)胡馬は北風に依り、

阿母得レ聞レ之。零涙應レ聲落。汝是大家子。仕二宦於臺閣一。愼勿三爲レ婦死一。貴賤情何薄。東家有二賢女一。窈窕艷二城郭一。阿母爲レ汝求。便復在二旦夕一。府吏再拜還。長二歎空房中一。作レ計乃爾立。轉レ頭向二戸裏一。漸見二愁煎迫一。其日牛馬嘶。新婦入二靑廬一。奄奄黃昏後。寂寂人定初。我命絕二今日一。魂去尸長留。攬レ裙脫二絲履一。擧レ身赴二淸池一。府吏聞二此事一。心知二長別離一。徘徊顧二樹下一。自掛二東南枝一。

漸く愁の煎迫(八)するを見る。其の日牛馬嘶き、新婦は靑廬(九)に入る。奄奄たる黃昏の後、寂寂として人定るの初。(一〇)我が命は今日に絕ゆ、魂去りて尸のみ長く留る。裙を攬りて絲履を脫ぎ、身を擧げて淸池に赴く。府吏此の事を聞き、心に長別離を知り、徘徊して樹下を顧み、自ら東南の枝に掛る。(一一)

(一) 心懸傷して明白ならずとなり (二) 死に後れて孤獨ならしむる意 (三) 死し去らんとの計劃 (四) 死して身神の動かざるなり (五) 貴賤を以て捨てしのみ情に厚薄あるに非ずとなり (六) 至急に婚を成さんとする意 (七) 死せんとする計劃を立つるなり (八) 侵し迫る義 (九) 新婦の外より嫁ぎ來る時靑布幔の家に入るをいふ (一〇) 劉蘭芝の獨語 (一一) 自家東南方の樹枝に縊る

兩家求二合葬一。合二葬華山傍一。東西植二松柏一。

兩家合葬を求め、(一)華山の傍に合葬す。東西に松栢を植ゑ、左右に梧桐を種う。(二)枝枝相覆蓋し、葉葉相交通す。中に雙飛の鳥有り、(三)自ら名いつて鴛鴦と爲す。頭

磐石方且厚。
可二以卒二千年一。
蒲葦一時靭。
便作二旦夕間一。
卿當二日勝貴一。吾獨向二黃泉一。新婦謂二府吏一。何意出二此言一。同是被二逼迫一。君爾妾亦然。黃泉下相見。勿レ違二今日言一。執レ手分レ道去。各各還二家門一。生人作二死別一。恨恨那可レ論。念與二世間一辭。千萬不二復全一。

(一) 休暇、願ひ出づ (二) 心を傷め悲しむ (三) 以下舊夫舊婦に會するを敍す (四) 人間の事は測知する能はず (五) 父母兄弟に強要せらるゝ意 (六) 高き地位の人に嫁するを言ふ (七) 以上婦の變心を責めて、皮肉の語を弄するなり (八) 恐らく生命を全うし得ざらんとなり

府吏還レ家去。
上レ堂拜二阿母一。
今日大風寒。
寒風摧二樹木一。
嚴霜結二庭蘭一。
兒今日冥冥。
令三母在二後單一。
故作二不良計一。
勿三復怨二鬼神一。
命如二南山石一。
四體康且直。

府吏家に還り去り、堂に上つて阿母を拜す。今日大いに風寒し、寒風樹木を摧き、嚴霜庭蘭に結ぶ。兒は今日冥冥(一)たり、母をして後單(二)に在らしむ。故に不良(三)の計を作す、復鬼神を怨むこと勿れ。命は南山の石の如し、(四)四體康にして且直と。阿母之を聞くを得て、零淚聲に應じて落つ。汝は是大家の子、臺閣に仕宦せり。愼んで婦の爲に死すること勿れ、(五)貴賤情何ぞ薄からん。東家に賢女有り、窕窈として城郭に艷なり。阿母汝が爲に求めん、便ち復旦夕(六)に在りと。府吏再拜して還り、空房の中に長歎し、(七)計を作して乃ち爾く立つ。頭を轉じて戸裏に向ひ、

府吏聞二此變一。
因求レ假暫歸。
未レ至二二三里一。
摧レ藏馬悲哀。
新婦識二馬聲一。
躡レ履相逢迎。
悵然遙相望。
知是故人來。
擧レ手拍二馬鞍一。
嗟歎使二心傷一。
自二君別レ我後。
人事不レ可レ量。
果不レ如二先願一。
又非二君所レ詳。
我有二親父母一。
逼迫兼二弟兄一。
以レ我應二他人一。
君還何所レ望。
府吏謂二新婦一。
賀三卿得二高遷一。

府吏は此の變を聞き、因り假(一)を求めて暫く歸る。未だ二三里に至らざるに、藏(二)を摧いて馬悲哀す。新婦馬聲を識り、履を躡んで相逢迎す。悵然として遙に相望むに、知る是(三)故人の來るなり。手を擧げて馬鞍を拍ち、嗟歎して心を傷ましむ。君が我に別れてより後、人事(四)は量るべからず。果して先の願の如くならず、又君の詳にする所に非ず。我に親父母有り、逼迫(五)弟兄を兼ね、我を以て他人に應ぜしむ。君の還るは何の望む所ぞと。府吏は新婦に謂ふ、卿が高遷(六)を賀す。盤石は方に且つ厚く、以て千年を卒ふべし。蒲葦は一時の靭のみ、便(七)ち旦夕の間を作す。卿は當に日に勝りて貴かるべし、我は獨り黄泉に向はんと。新婦は府吏に謂ふ。何の意か此の言を出せる。同じく是逼迫せらる、君爾り妾亦然り。黄泉下に相見んのみ、今日の言に違ふこと勿れと。手を執つて道を分つて去り、各各家門に還る。生人死別を作す、恨恨那ぞ論ずべけん。念ふ世間と辭せば、千(八)萬復全からざらん。

卿可二去成レ婚。
交語速裝束。
絡繹如二浮雲一。
青雀白鵠舫。
四角龍子幡。
婀娜隨レ風轉。
金車玉作レ輪。
躑躅青驄馬。
流蘇金鏤鞍。
齎レ錢三百萬
皆用二青絲一穿。
雜綵三百疋。
交廣市二鮭珍一。
從人四五百。
鬱鬱登二郡門一。
阿母謂二阿女一。適得二府君書一。明日來迎レ汝。何不レ作二衣裳一。莫レ令二事不一レ擧。阿女默無レ聲。手巾掩レ口啼。涙落便如レ瀉。移二我琉璃榻一。出置二前牎下一。左手持二刀尺一。右手執二綾羅一。朝成二繡裌裙一。晩成二單羅衫一。晻晻日欲レ暝。愁思出レ門啼。

登る。阿母は阿女に謂ふらく、適に府君の書を得たるに、明日來りて汝を迎へんと。何ぞ衣裳を作さざる、事をして擧らざらしむる莫れと。阿女默して聲無く、手巾もて口を掩うて啼き、涙落つること便ち瀉ぐが如し。我が琉璃(一一)の榻を移し、出して前牎の下に置く。左手に刀尺(一二)を操り、右手に綾羅を執る。朝に繡の裌裙を成し、晩に單羅の衫を成す。晻晻(一三)として日暝れんと欲す、愁思して門を出でて啼く。

(一)應答するに言ふ (二)官衙に同じ (三)吉祥を司る星名 (四)人徒車輿の多くしてつゞき立てるなり (五)雀鵠の形を飾れる舟と龍を描いて舟の四隅に建てし旗と (六)しなやかに優美なる貌 (七)あがき動く蒼毛の馬にふさを垂れ金線を飾れる鞍を重く (八)青絲に貫けるなり (九)南方交州廣州地方より珍鮭佳肴を買入る (一〇)盛なる貌 (一一)琉璃を飾れる腰掛 (一二)はさみと尺度 (一三)日光漸く冥き貌

後嫁得郎君。否泰如天地。足以榮汝身。不嫁義郎體。其往欲何云。蘭芝仰頭答。理實如兄言。謝家事夫壻。中道還兄門。處分適兄意。那得自任專。雖與府吏要。渠會永無緣。登即相許和。便可作婚姻。

(一)縣の一屬官名　(二)劉家の誤なるべし　(三)宦學して他人の戸籍を嗣げる人　(四)亦縣の屬官なり　(五)婚約を締結せんと希望す　(六)榮枯の懸隔あること天地の如しとなり　(七)善良なる令郎君　(八)將來を如何せんとするかと責むるなり　(九)契約をいふ　(一〇)和好を許可する意

媒人下牀去。諾諾復爾爾。還部白府君。下官奉使命。言談大有緣。府君得聞之。心中大歡喜。視曆復開書。便利此月內。六合正相應。良吉三十日。今已二十七。

媒人床を下り去り諾諾(一)し復爾爾す。(二)部に還つて府君に白す、下官使命を奉ぜしに、言談大いに緣有りきと。府君之を聞くを得て、心中大いに歡喜す。曆を視て復書を開くに、便ち此の月內に利し。(三)六合正に相應ず、良吉は三十日なり、今は已に二十七。卿は去りて婚を成すべしと。交語げて速に裝束し、(四)絡繹として浮雲の如し。(五)青雀白鵠の舫、四角の龍子幡、(六)婀娜として風に隨つて轉じ、金車玉もて輪を作る。(七)躑躅たる青驄馬、流蘇の金縷鞍。錢を齎らす三百萬、皆青絲(八)もて穿を用ふ。雜綵は三百疋、(九)交廣より鮭珍を市ふ。從人四五百、(一〇)鬱鬱として郡門に

媒人去數日。
尋遣丞請還。
說有蘭家女。
承籍有宦官。
云有第五郎。
嬌逸未有婚。
遣丞爲媒人。
主簿通語言。
直說太守家。
有此令郎君。
既欲結大義。
故遣來貴門。
阿母謝媒人。
女子先有誓。
老姥豈敢言。
阿兄得聞之。
悵然心中煩。
擧言謂阿妹。
作計何不量。
先嫁得府吏。

媒人去つて數日、尋いで丞（一）をして請ひ還らしめ、說く蘭家（二）の女有り、籍を承けて宦官（三）有りと。云ふ第五郎有り、嬌逸にして未だ婚有らずと。丞をして媒人と爲り、主簿（四）をして語言を通ぜしむ。直に說く太守の家、此の令郎君有り。既に大義（五）を結ばんと欲す。故に貴門に來らしむと。阿母は媒人に謝すらく、女子先づ誓有り、老姥豈敢て言はんやと。阿兄之を聞くを得し、悵然として心中煩ふ。言を擧げて阿妹に謂ふらく、計を作すこと何ぞ量らざる。先に嫁して府吏を得、後に嫁して郎君を得るは、否泰（六）天地の如く、以て汝が身を榮にするに足らん。義郎（七）の體に嫁せずんば、其往（八）何云せんとか欲すると。蘭芝頭を仰いで答ふらく、理は實に兄の言の如し。家を謝して夫壻に事へ、中道にして兄の門に還る。處分は兄の意に適せんのみ。那ぞ自ら任じて專にするを得んや。府吏と要せり（九）と雖も、渠會く永く緣無からん。登し卽ち（一〇）和するを相許すべくんば、便ち婚姻を作すべしと。

十六知二禮儀一。
十七遣二汝嫁一。
謂言無二誓違一。
汝今何罪過。
不レ迎而自歸。
蘭芝慚二阿母一。
兒實無二罪過一。
阿母大悲摧。
還レ家十餘日。
縣令遣二媒來一。
云有二第三郎一。
窈窕世無レ雙。
年始十八九。
便言多二令才一。
阿母謂二阿女一。
汝可二去應一レ之。
阿女含レ淚答。
蘭芝初還時。府吏見二丁寧一。結レ誓不二別離一。今日違二情義一。恐二此事非一レ奇。自可レ斷二來信一。徐徐更謂レ之。阿母白二媒人一。貧賤有二此女一。始適還二家門一。不レ堪二吏人婦一。豈合二令郎君一。幸可二廣問訊一。不レ得二便相許一。

阿母大いに悲摧す。家に還つて十餘日なるに、縣令は媒をして來らしむ。云ふ第三郎有り、(一)窈窕として世に雙び無し。年始めて十八九、便言(三)にして令才多しと。阿母は阿女に謂ふらく、汝去りて之に應ずべしと。阿女涙を含んで答ふらく、蘭芝(二)が初め還りし時、府吏(四)丁寧にせられ、誓を結んで別離せず。今日情義に違ふも、此の事奇(五)に非るを恐る。自ら來信を斷つべし。徐徐に更に之を謂はんと。阿母は媒人(六)に白すらく、貧賤此の女有り、始め適きて家門に還れり。吏人の婦にも堪へず、豈令郎君(七)に合せんや。幸に廣く問訊すべし、便ち相許すことを得ずと。

(一)進退擧止に沈靜無力なるをいふ　(二)焦氏の婦の名　(三)怜悧にして善き才能を有す　(四)即ち前夫の焦氏なり　(五)暫時還歸して復迎へ取ることは世間に其例多しとなり　(六)縣令の媒妁人　(七)若旦那といふ程の意

不レ久當二還歸一。誓レ天不二相負一。新婦謂二府吏一。感二君區區懷一。君既若見レ錄。不レ久望二君來一。君當レ作二盤石一。妾當レ作二蒲葦一。蒲葦紉如レ絲。盤石無二轉移一。我有二親父兄一。性行暴如レ雷。恐不レ任二我意一。逆以煎二我懷一。擧レ手長勞勞。二情同依依。

と作るべし。妾は當に蒲葦と作るべし。(四)蒲葦紉びて絲の如く、盤石は轉移すること無し。我に親父兄有り、性行暴なること雷の如し。恐らくは我が意に任せざらん、逆じめ以て我が懷を煎る(五)と。(六)手を擧げて長く勞勞し、二情同じく依依たり。

(一)馬車の聲響を言ふ (二)仲卿が婦と語るなり (三)見棄てざる義 (四)水邊の叢草なり人の逼迫に遭ふも綿々として決絶せじとなり (五)取越苦勞し煩悶すとなり (六)名殘を惜む貌

入レ門上二家堂一。進退無二顏儀一。阿母大拊レ掌。不レ圖子自歸。十三敎二汝織一。十四能裁レ衣。十五彈二箜篌一。

門に入つて家堂に上るに、進退顏儀無し。(一)阿母大いに掌を拊ち、圖らざりき子が自ら歸らんとは。十三汝に織を教へ、十四能く衣を裁つ。十五に箜篌を彈じ、十六に禮儀を知る。十七汝をして嫁せしめ、謂言く誓ひ違ふ無しと。汝今何の罪過ありてか、迎へざるに自ら歸れると。(二)蘭芝は阿母に慚づ、兒實に罪過無しと。

本自無二教訓一。
兼愧二貴家子一。
受レ母錢帛多。
不レ堪二母驅使一。
今日還レ家去。
念三母勞二家裏一。
却與二小姑一別。
涙落連二珠子一。新婦初來時。小姑始扶レ牀。今日被二驅遣一。小姑如レ我長。勤レ心養二公姥一。好自相扶將。初七及下九。嬉戲莫二相忘一。出レ門登レ車去。涕落百餘行。

嬉戯せば相忘るゝ莫れと。門を出で車に登つて去るに、涙落つること百餘行なり。

(一)端麗に粧飾す　(二)何種の袷服も皆四五箱づゝあり　(三)白絲のひだありて水の流るゝが如き意　(四)明月の如き珠玉もて作れる耳飾の玉　(五)貴家をいふ　(六)無教訓なるを愧づるなり　(七)阿母卽ち姑を指す　(八)夫の妹子なり　(九)相扶持して助け養ふ　(一〇)月の七日と廿九日とは當時の休日なりしと見ゆ

府吏馬在レ前。
新婦車在レ後。
隱隱何甸甸。
俱會二大道口一。
下レ馬入二車中一。
低レ頭共耳語。
誓不三相隔二卿一。
且暫還レ家去。
吾今且赴レ府。

府吏の馬は前に在り、新婦の車は後に在り、隱隱(一)として何ぞ甸甸たる、俱に大道の口に會す。馬を下りて車中に入り、頭を低れて共に耳語す。誓(二)つて卿を相隔てず。且暫く家に還り去れ。吾今且に府に赴かんとす、久しからずして當に還歸すべし。天に誓つて相負かざらんと。新婦は府吏に謂ふらく、君が區區の懷に感ず。君既に若し錄(三)せらるれば、久しからずして君の來るを望まん。君當に盤石

何言復來還。妾有繡腰襦、葳蕤自生光。紅羅複斗帳、四角垂香囊。箱簾六七十、綠碧青絲繩。物物各自異、種種在其中。人賤物亦鄙、不足迎後人。留待作遺施、於今無會因。時時爲安慰、久久莫相忘。

鷄鳴外欲曙。新婦起嚴妝。著我繡袷裙。事事四五通。足下躡絲履。頭上玳瑁光。腰若流紈素。耳著明月璫。指如削葱根。口如含珠丹。纖纖作細步。精妙世無雙。上堂拜阿母。阿母怒不止。昔作女兒時。生小出野里。

鷄鳴いて外曙けんと欲す、新婦起つて嚴妝す。(一)我が繡の袷裙を著くるに、事事(二)四五通あり。足下に絲履を躡み、頭上に玳瑁光く。腰は(三)紈素を流すが如く、耳は(四)明月の璫を著く。指は削れる葱根の如く、口は珠丹を含むが如し。纖纖として細步を作し、精妙は世に雙び無し。堂に上つて阿母を拜するに、阿母は怒つて止まず。昔女兒作りし時・生れて小にして(五)野里を出で、本自ら教訓無く、(六)兼ねて貴家の子に愧づ。(七)母に受くる錢帛は多けれども、母の驅使に堪へず、今日家に還り去る。母の家裏に勞せんことを念ふ。(八)却つて小姑と別れ、淚落ちて珠子を連ぬ。新婦初め來りし時、小姑始めて牀を扶けき。今日驅遣せらる。小姑如し我がごとく長ぜば、心を勤めて公姥を養ひ、好んで自ら相扶將せよ。(九)初七及び下九・(一〇)

哽咽不能語。我自不驅卿。逼迫有阿母。卿但暫還家。吾今且報府。不久當歸還。還必相迎取。以此下心意。愼勿違我語。新婦謂府吏。勿復重紛紜。往昔初陽歲。謝家來貴門。奉事循公姥。進止敢自專。晝夜勤作息。伶俜縈苦辛。謂言無罪過。供養卒大恩。仍更被驅遣。

吾今且に府に報ぜんとす(三)。久しからずして當に歸還すべし、還らば必ず相迎へ取らん。此を以て心意を下し(四)、愼しんで我が語に違ふ勿れ。新婦は府吏に謂ふらく復重ねて紛紜する勿れ(五)。往昔初陽の歲(六)、家を謝して貴門に來り、奉事公姥に循ひ進止敢て自ら專にせんや。晝夜作息を勤め(七)、伶俜として苦辛を縈らせり(八)。謂ふ言に罪過無く、供養して大恩を卒へんと。仍吏に驅遣せらる。何ぞ復來り還るを言はんや。妾に繡の腰襦有り、葳蕤として(九)自ら光を生ず。紅羅の複斗帳は(一〇)、四角に香囊を垂る(一一)。箱簾六七十、綠碧靑絲の繩あり。物物各自ら異に、種種其中に在り、人賤しければ物亦鄙しく、後人を迎ふるに足らじ(一二)。留めて遺施と作す(一三)を待つ。今に於て會因無し(一四)。時時安慰を爲して、久久まで相忘るゝ莫れと。

(一) 母の言を傳ふるなり　(二) むせび泣く　(三) 役所に報告すべき所要あり　(四) 心緒を慰さめ保つ　(五) 復迎へ取るなどの語を出す勿れ　(六) 初春を初陽とす　(七) 仕事をいそしむ　(八) 仕事の擧措に母を恐れて苦辛せりとなり　(九) 垂下する貌の見事なるに謂ふ　(一〇) 內外二枚の帛を垂れて屈折せる几帳　(一一) 簾は奩の誤か小箱なり或は箱にかゝる簾ならんとも曰へり　(一二) 後に來るべき後妻の人　(一三) 諸人にか施し贈られたし　(一四) 再會すべき因由

何意致不厚。
阿母謂府吏。
何乃太區區。
此婦無禮節。
擧動自專由。
吾意久懷忿。
汝豈得自由。
東家有賢女。
自名秦羅敷。
可憐體無比。
阿母爲汝求。
便可速遣之。
遣去愼莫留。

秦羅敷と名づく。憐むべし(六)體に比無し、阿母汝が爲に求めん。便ち速に之を遣るべし、遣り去つて愼しんで留る莫れ。府吏長跪して告ぐ、伏して惟阿母に啓す。今若し此の婦を遣らば、終老まで(七)復取らざらん。阿母之を聞くを得て、牀を椎つて便ち大いに怒る。小子畏るゝ所無きか、何ぞ敢て婦の語を助くる。吾已に恩義を失へり、(八)會ず相從計せじと。

(一) 不仕合なる相貌 (二) 成 良樂の義 (三) 女に不都合無きに何故に仲違ひを致すかとなり (四) 瑣小の事情に拘泥す (五) 專恣にして自由なり (六) 可憐絶好の姿貌を有す (七) 一生涯復娶らじとなり (八) 恩愛も義理も顧ずる所無し

府吏長跪告。伏惟啓阿母。今若遣此婦。終老不復取。阿母得聞之。槌牀便大怒。小子無所畏。何敢助婦語。吾已失恩義。會不相從許。

府吏默無聲。
再拜還入戶。
擧言謂新婦。

府吏默して聲無く、再拜して還つて戸に入る。言を擧げて(一)新婦に謂ふに、哽咽(二)して語る能はず。我自らは卿を驅らず、逼迫は阿母に在り。卿但暫く家に還れ。

君既爲ニ府吏一。守ㇾ節情不ㇾ移。賤妾留ニ空房一。相見常日稀。鷄鳴入ㇾ機織。夜夜不ㇾ得ㇾ息。三日斷ニ五疋一。大人故嫁ㇾ遲。非ㇾ爲ニ織作遲一。君家婦難ㇾ爲。妾不ㇾ堪ニ驅使一。徒留無ㇾ所ㇾ施。便可下白ニ公姥一。及ㇾ時相遣歸上。

が家の婦は爲り難し。妾は驅使に堪へず、徒に留るも施す所無し。便ち公姥に白して、時に及んで(八)相遣歸すべし。

㈠獻帝の年號　㈡東と南とに別れ飛ぶ者喩に仲卿夫妻に擬す　㈢白絹をいふ　㈣官司の事に專心にして夫婦の情に移らず　㈤早朝より機に上る　㈥三日間に五疋の絹を織り成す　㈦後に公姥といふに同じ母の稱なり　㈧今のうちに離緣せんとなり

府吏得ㇾ聞ㇾ之。堂上啓ニ阿母一。兒已薄祿相。幸復得ニ此婦一。結髮同ニ枕席一。黄泉共爲ㇾ友。共事三二年。始爾未ㇾ爲ㇾ久。女行無ニ偏斜一。

府吏之を聞くを得て、堂上に阿母に啓す。兒已に薄祿の相あり、(一)幸に復此の婦を得たり。結髮枕席を同じうし、(二)黄泉まで共に友と爲る。共に事ふる三二年、始めて爾く未だ久しと爲さず、(三)女の行に偏斜無し、何ぞ意はん不厚を致さんとは。阿母は府吏に謂ふらく、何ぞ乃ち太だ區區たる。(四)此の婦禮節無く、擧動自ら專ら(五)由る。吾意に久しく忿を懷けり、汝豈自ら由るを得んや。東家に賢女有り、自ら

卷四

漢詩

古詩、焦仲卿が妻の爲の作

漢末の建安中(一)に、廬江府の小吏、焦仲卿が妻の劉氏、仲卿が母の遣る所と爲り、自ら誓つて嫁せず。其家之に逼るや、乃ち水に投じて死しぬ。仲卿之を聞き、亦自ら庭樹に縊る。時人之を傷んで詩を爲ると云ふ爾。

孔雀東南飛。
五里一裴徊。
十三能織レ素。
十四學レ裁レ衣。
十五彈二箜篌一。
十六誦二詩書一。
十七爲二君婦一。
心中常苦悲。

孔雀(二)東南に飛び、五里に一裴徊す。十三にして能く素(三)を織り、十四にして衣を裁つを學び、十五にして箜篌を彈じ、十六にして詩書を誦し、十七にして君が婦と爲り、心中常に苦悲あり。君既に府吏と爲り、(四)節を守つて情移らず。賤妾は空房に留り、相見る常に日稀なり。(五)鷄鳴けば機に入つて織り、夜夜息ふことを得ず。(六)三日に五疋を斷てども、(七)大人は故らに遲きを嫌ふ。織作の遲きが爲に非ず、君

列國持何來。氍毹毾𣰆五木香。迷迭艾蒳及都梁。

及び都梁。

㊀何奴に入貢する義 ㊁毛織、敷物及び五香又の名青木香なり ㊂共に南方産の名香なり都梁も亦香名

吹我章華臺一。
浮雲多二暮色一。
似下從二崦嵫一來上。
枯桑鳴二中林一。
絡緯響二空階一。
翩翩飛蓬征。
愴愴遊子懷。故鄕不レ可レ見。長望始此回。

枯桑は中林に鳴り、(三)絡緯は空階に響く。翩翩として飛蓬征き、愴愴として遊子懷ふ。故鄕は見るべからず、長望して始めて此に回る。

(一)楚王の建てたる臺名 (二)日没處の山名なり楚辭に出づ (三)秋の虫はたおりの類

猛虎行

饑不下從二猛虎一食上。暮不下從二野雀一棲上。野雀安無レ巢。遊子爲レ誰驕。

(一)饑ゑても猛虎に從つて食はず、暮れても野雀に從つて棲まず、野雀は巢無きに安んずとも、(二)遊子は誰が爲にか驕らん。

(一)義に非る祿位を取らざる意 (二)貧賤人に驕らんよりは歸るに如かずとなり

樂府

行レ胡從二何方一。

(一)胡に行くは何方よりせん、列國は何を持して來るぞ。(二)氍毹毾㲪五木香、(三)迷迭艾納

何時悔復及。
作書與魴鱮。
相教愼出入。

教へて出入を愼しましむ。

(一) 乾魚なり　(二) 廣く一般の魚屬を指す　(三) 出處進退の義

古歌

秋風蕭蕭愁
殺人。出亦愁
入亦愁。座中
何人。誰不懷
憂。令我白頭。
胡地多飆風。
樹木何修修。
離家日趨遠。
衣帶日趨緩。
心思不能言，
腸中車輪轉。

秋風蕭蕭として人を愁殺す、出づるも亦愁ひ入るも亦愁ふ。座中何人か、誰か憂へを懷かざらん。(一)我をして白頭ならしむ。胡地は飆風多し。樹木何ぞ修修たる、(二)家を離れて日に遠きに趨く。(三)衣帶は日に緩に趨き、心思は言ふ能はず、腸中に車輪轉ず。

(一) 憂思して白髮を生ぜしむとなり　(二) 脩に作るべし木葉の吹き飛ばさるゝ貌なり　(三) 日毎に身軀の瘠せ去るが爲なり

古八變歌

北風初秋至。

北風初秋至り、我が(一)章華臺を吹く。浮雲に暮色多く、(二)晻靄より來るに似たり。

春鳥翻南飛。翩翩獨翺翔。悲聲命儔匹。哀鳴傷我腸。感物懷所思。泣涕忽沾裳。佇立吐高吟。舒憤訴穹蒼。

(一)良人の遠行を悲傷せる閨婦なり　(二)不安の貌にいふ　(三)幃帳のとばり　(四)襟を突かけばさにする意　(五)悲鳴をあげて朋友を召し集む　(六)高聲に歌詠して蒼天に哀訴すとなり

悲歌

悲歌可以當泣。遠望可以當歸。思念故鄉。鬱鬱纍纍。欲歸家無人。欲渡河無船。心思不能言。腸中車輪轉。

悲歌は以て泣に當つべく、遠望は以て歸に當つべし。故鄉を思念して、(一)鬱鬱纍纍たり。歸らんと欲するも家に人無く、渡らんと欲するも河に船無し。心思言ふこと能はず、(二)腸中に車輪轉ず。

(一)山木繁茂し山峰重疊する貌　(二)心腸中に車輪の轉するが如き苦惱ありとなり

枯魚河を過ぎて泣く

枯魚過河泣。

(一)枯魚河を過ぎて泣く、何の時か悔ゆとも復た及ばん。書を作りて(二)魴鱮に與へ、相

欲レ渡レ河河無レ梁。願化ニ雙黄鵠一還ニ故鄉一。還ニ故鄉一。入ニ故里一。裴ニ徊故鄉一。苦レ身不レ已。繁舞寄レ聲無レ不レ泰。徘ニ徊桑梓一遊ニ天外一。

ばん。

(一)黄の鈞瓶と白絹のつるべ索と　(二)優美なる貌　(三)前に屢出せり　(四)舞曲に就きいふ　(五)故鄉を思ふ

傷歌行

以下は雑曲の歌辭なり。

昭昭素明月。輝光燭ニ我牀一。憂人不レ能レ寐。耿耿夜何長。微風吹ニ閨闥一。羅帷自飄揚。攬レ衣曳ニ長帶一。屣履下ニ高堂一。東西安所レ之。徘徊以彷徨。

昭昭たる素き明月、輝光我が牀を燭す。(一)憂人寝る能はず、(二)耿耿として夜何ぞ長き、微風は閨闥を吹き、(三)羅帷自ら飄り揚る。衣を攬つて長帶を曳き、(四)屣履して高堂より下る。東西安の之く所ぞ、徘徊して以て彷徨す。春鳥は翻つて南に飛び、翩翩として獨り翺翔す。(五)悲聲儔匹を命じ、哀鳴我が腸を傷ましむ。物に感じて思ふ所を懐ひ、泣涕忽ち裳を沾す。佇立して(六)高吟を吐き、憤を舒べて穹蒼に訴ふ。

談笑未レ及レ竟。
左顧敕二中廚一。
促令レ辦二麤飯一。
愼莫レ使二稽留一。廢レ禮送レ客出。盈盈府中趨。送レ客亦不レ遠。足不レ過二門樞一。取レ婦得レ如レ此。齊姜亦不レ
如。健婦持二門戶一。亦勝二一丈夫一。

(九)禮を終りて歸らんとする客を見送る (一〇)寡婦としての禮を失はず終に戶庭の外に出でずとなり (一一)齊王家の貴婦人なり列女傳參照 (一二)堅實なる中年の婦人が一家を計劃する場合

淮南王の篇

淮南王。自言尊。百尺高樓與レ天連。後園鑿レ井銀作レ牀。金瓶素綆汲二寒漿一。飮二少年一。少年窈窕何能賢。揚レ聲悲歌音絕レ天。我

舞曲の歌辭なり。

淮南王、自ら言ふ尊しと。百尺の高樓天と連る。後園に井を鑿つて銀もて牀と作し、(一)金瓶素綆もて寒漿を汲む。少年に飮ます、少年(二)窈窕たり何ぞ能く賢なる聲を揚げて悲歌し音は天を絕つ。我河を渡らんと欲するも河に梁無し、願はくは(三)雙黃鵠に化して故鄕に還らん。故鄕に還つて、故里に入らん、故鄕に裴徊し、身を苦しめて已まず。繁舞聲を寄せて泰からざる無し、(五)桑梓に徘徊して天外に遊

天上何所レ有。
歷歷種二白楡一。
桂樹夾レ道生。
青龍對二道隅一。
鳳皇鳴啾啾。
一母將二九雛一。
顧視二世間人一。
爲レ樂甚獨殊。
好婦出迎レ客。
顏色正敷レ愉。
伸レ腰再拜跪。
問レ客平安不。
請二客北堂上一。
坐二客氈氍毹一。
淸白各異レ樽。
酒上正二華疏一。
酌レ酒持與レ客。
客言二主人持一。
卻略再拜跪。
然後持二一盃一。

天上何の有る所ぞ、歷歷として白楡を種う。桂樹道を夾んで生じ、青龍道隅に對す、鳳皇鳴いて啾啾たり、(一)一母九雛を將ゐる。顧みて世間の人を視るに、樂を爲すこと甚だ獨り殊なり。(二)好婦は出でて客を迎へ、顏色正に(三)愉を敷く。腰を伸して再び拜跪し、客に問ふ平安なりや不やと。客を北堂の上に請じ、客を(四)氈氍毹に坐せしむ。(五)淸白各尊を異にし、酒上に(六)華疏を正す。酒を酌んで持して客に與ふ、客は主人に持せよと言ふ。(七)卻略して再拜跪し、然して後に一盃を持す。談笑未だ竟るに及ばず、左顧して(八)中廚を敕しめ、促に麤飯を辦ぜしむ。愼んで稽留せしむる莫れ。(九)禮を廢めて客を送つて出づ。盈盈として府中に趨き、客を送ること亦遠からず、(一〇)足は門樞を出でず、婦を取ること此の如きを得ば、(一一)齊姜も亦如かざらん。(一二)健婦の門戶を持するは、亦一の丈夫に勝る。

(一) 并列せる星多しとなり白楡は星名　(二) 賢寡婦に喩ふとの說あり　(三) 樂しく愉快なる顏色　(四) 毛氈に同じ　(五) 澄める酒と白き酒　(六) 美しき蔬菜を陳列して客に侑む　(七) 謙退して改めて一杯を酌む　(八) 料理番に同じ

多願還我蕃。獨且急歸。兄與嫂嚴。當與較計。亂曰。里中一何譊譊。願欲寄尺書。將與地下父母兄嫂難與久居。

艶歌行

翩翩堂前燕。
冬藏夏來見。
兄弟兩三人。
流宕在他縣。
故衣誰當補。
新衣誰當綻。
賴得賢主人。
覽取爲我組。
夫壻從門來。
斜倚西北盼。
語卿且勿盼。
水清石自見。
石見何纍纍。
遠行不如歸。

翩翩たる堂前の燕、冬は藏れ夏は來り見はる。兄弟兩三人、流宕(一)して他縣に在り。故衣誰か當に補ふべき、新衣は誰か當に綻(二)びすべき。賴に賢主人を得たり、覽取(三)して我か爲に組せしむ。夫壻は門より來り、斜に倚つて西北に盼る。(四)卿に語ぐ且く盼ること莫れ、水清ければ石自ら見はる。(五)石見はれて何ぞ纍纍たる、遠行は歸るに如かず。

(一)遊蕩漂浪の意 (二)綻びを繕ふべき者ぞとなり (三)主婦か我が衣の破綻を見て補ひくるゝなり (四)主婦の夫が嫌疑の眼を以て視る義 (五)自己の潔白なるに喩ふ

隴西行

一に云ふ、步出夏門行と。

多二蟣蝨一。面目多レ塵。大兄言レ辦レ飯。大嫂言レ視レ馬。上二高堂一。行取レ殿下レ堂。孤兒淚下如レ雨。使二我朝行汲一。暮得レ水來歸。手爲錯。足下無レ菲。愴愴履レ霜。中多二蒺藜一。拔二斷蒺藜一。腸肉中愴欲レ悲。淚下渫渫。清涕纍纍。冬無二複襦一。夏無二單衣一。居レ生不レ樂。不レ如二早去一。下從地下黃泉一。春風動草萌レ芽。三月蠶桑。六月收レ瓜。將二是瓜車一。來到還レ家。瓜車反覆。助レ我者少。啗レ瓜者

霜を履むに、中に蒺藜（九）多し。蒺藜を抜き断つに、腸肉中に愴んで悲しまんと欲す。涙下ちて渫渫（一〇）たり、清き涕纍纍たり。冬も複襦（一一）無く、夏も單衣無し。生に居るも樂しからず、早く去らんには如かじ、下のかた地下の黃泉に從はん。春風動いて草芽を萌し、三月に蠶桑し、六月に瓜を收む。是の瓜車（一二）を將ゐて、來り到つて家に還るに、瓜車反覆すれば、我を助くは者は少く、瓜を啗ふ者は多し。願はくは我が蔕（一三）を還せ、獨り且つ急ぎ歸る。兄と嫂と嚴にして、當に較計（一四）を興すべし。亂に曰く、里中一に何ぞ譊譊（一五）たる、願はくは尺書を寄せて、將に地下の父母に與へんと欲す。兄嫂は與に久しく居り難しと。

（一）天命の遭遇を言ふ（二）堅固なる車（三）行商人となるなり（四）郡名なり揚子江下流の分派せる地方（五）十二月を臘とす（六）食事の準備をなせよ云々（七）殿上を急ぎ走る義（八）藁香の類（九）刺多き一種の蔓草（一〇）涙の多く流るゝ貌（一一）袷の短衣だに無し（一二）瓜を採つて積載せる車を挽く（一三）瓜のへたを得て自己の證にせんとするなり（一四）瓜を失ひし罪を正すべき相談（一五）多言の貌兄嫂の怒聲を謂ふ

故下爲黄口小兒。今時清廉。難犯教言。君復自愛莫爲非。今時清廉。難犯教言。君復自愛莫爲非。行吾去爲遲。平愼行。望君歸。

(一) 決然戸を出でしが復歸つて門に入るとなり (二) 盎中に一升の米の儲も無し (三) 衣桁にかゝれる衣類 (四) 粥をすゝり食ふのみ (五) 天命の意上は天命下は小兒の爲なりとなり (六) 現代は[illegible]の世にして勅命に背き難し (七) 白髮自棄の[illegible]行 (八) 一句は夫言ひ末二句は妻語るなり

孤兒生。孤兒遇。生命當獨苦。父母在時。乘堅車。駕駟馬。父母已去。兄嫂令我行賈。南到九江。東到齊與魯。臘月來歸。不敢自言苦。頭

孤兒行

孤兒生る、孤兒遇ふ。(一) 生命當に獨り苦しむべし。父母在せし時は、堅車(二)に乘り、駟馬に駕せり。父母已に去るや、兄嫂我をして行賈(三)せしむ。南のかた九江(四)に到り東のかた齊と魯とに到り、臘月(五)に來歸せしも、敢て自ら苦を言はず。頭には蟣蝨多く、面目に塵多し。大兄は飯(六)を辦ぜよと言ひ、大嫂は馬を視よと言ふ。高堂に上り、行く殿(七)を取りて堂を下る。孤兒淚下ちて雨の如し。我をして朝に行いて汲ましむ、暮に水を得て來り歸る。手爲に錯けて、足下に菲(八)無し。愴愴として

常懷二千歲憂一。晝短苦二夜長一。何不二秉レ燭遊一。自レ非二仙人王子喬一。二會壽命一難二與期一。白レ非二仙人王子喬計二會壽命一難二與期一。人壽非二金石一。年命安可レ期。貪レ財愛二惜費一。但爲二後世嗤一。

㈠ 靜思憂愁、悶々として來年を待たんや　㈡ 美好の酒　㈢ 心に歡ぶ者を喚び集む　㈣ 以下下出古詩十九首中の數句に同じ　㈤ 晝をつぐに夜を以てするなり　㈥ 人の年壽を總計す

東門行

出二東門一。不レ顧レ歸。來入レ門。悵欲レ悲。盎中無二斗儲一。還二視桁上一。無二懸衣一。拔レ劍出レ門去。兒女牽レ衣啼。他家但願二富貴一。賤妾與レ君共餔レ糜。共餔レ糜。上用二滄浪天一

㈠東門を出でて、歸を顧はず。來つて門に入り、悵として悲しまんと欲す。㈡盎中に斗儲無し、桁上を還り視るに㈢懸衣無し。劍を拔いて門を出でて去るに、兒女は衣を牽いて啼く。他家は但富貴を願ふに、賤妾は君と共に糜を餔ふ。共に糜を餔ふは、㈤上は滄浪の天の故を用てし、下は黄口小兒が爲なり。今時清廉、敎言を犯し難し。君復た自愛して非を爲すこと莫れ。㈥今時清廉、敎言を犯し難し、君復た自愛して非を爲すこと莫れ。㈦㈧行かん吾が去ること爲に遲し。平かに行を愼しめ、君が歸るを望まん。

參橫。北斗闌干。親交在レ門。饑不レ及レ餐。歡日尙少。戚日苦レ多。以レ何忘レ憂。彈箏酒歌。淮南八公。要道不レ煩。參ニ駕六龍一。游ニ戲雲端一。

(一) 飲食に乏しき義　(二) 靈芝仙藥の類　(三) 王子喬は漢代の神仙なり　(四) 桑下に餓死せんとして趙盾に救はれ後年盾に代つて死せし人　(五) 星名前出　(六) 漢の劉安淮南王として仙術を好み八公と共に白日に昇天せり列仙傳に見ゆ

西門行

出ニ西門一。步念レ之。今日不レ作レ樂。當レ待ニ何時一。夫爲レ樂。爲レ樂當レ及レ時。何能坐愁怫鬱。當ニ復待ニ來茲一。飮ニ醇酒一。炙ニ肥牛一。請呼ニ心所レ歡。何用解ニ愁憂一。人生不レ滿レ百。

西門を出で、歩いて之を念ふ。今日樂を作さずば、當に何時をか待つべき。夫れ樂を爲す、樂を爲すは當に時に及ぶべし。何ぞ能く(一)坐愁怫鬱として、當に復た來茲を待つべきぞ。(二)醇酒を飮み、肥牛を炙り、(三)請ふ心に歡ぶ所を呼ばん、何を用てか愁憂を解かん。人生は百に滿たず、常に千歲の憂を懷く。晝短うして夜の長きに苦しむ。(五)何ぞ燭を秉つて(四)遊ばざる。仙人王子喬に非るよりは、(六)壽命を計會して與に期せんこと難し。仙人王子喬に非るよりは、壽命を計會して與に期せんこと難し。人壽は金石に非ず、年命安ぞ期すべけん。財を貪つて費を愛惜すとも、唯後世の嗤と爲らん。

觀者盈二道傍一。入レ門時左顧。但見二雙鴛鴦一。鴛鴦七十二。羅列自成レ行。音聲何噰噰。鶴鳴二東西廂一。大婦織二綺羅一。中婦織二流黃一。小婦無レ所レ爲。挾レ瑟上二高堂一。丈人且安坐。調レ絲方未レ央。

壻に言ふ　（六）長兄の婦は綺絹を織り仲兄の婦は縠絹を織り末弟の婦は何事をもなさず　（七）琴の類なり　（八）舅姑の尊稱なり

來日大難。口燥脣乾。今日相樂。皆當二喜歡一。經二歷名山一。芝草翻翻。仙人王喬。奉二藥一丸一。自惜二袖短一。內レ手知レ寒。慚無二靈輒一。以報二趙宣一。月沒

善哉行

以下六章は瑟調曲なり。

來日は大いに難し、（一）口燥き脣乾かん。今日は相樂し、皆當に喜歡すべし。名山を經歷するに、（二）芝草翻翻たり。（三）仙人王喬、藥一丸を奉ず。自ら袖の短きを惜み、手を內れて寒を知る。慚づらくは（四）靈輒が、以て趙宣に報ぜし無し。月沒して（五）參橫はり、北斗闌干たり。親交門に在れども、饑ゑて餐ふに及ばず。歡ぶ日は尚少く、戚ふる日は多きに苦しむ。何を以てか憂を忘れん、箏を彈じて酒のみ歌ふ。（六）淮南の八公、要道煩はず。六龍に參駕して、雲端に遊戲せん。

相逢狹路間。
道隘不レ容レ車。
不レ知何年少。
夾レ轂問二君家一。
君家誠易レ知。
易レ知復難レ忘。
黃金爲二君門一。
白玉爲二君堂一。
堂上置二尊酒一。
作二使邯鄲倡一。
中庭生二桂樹一。
華燈何煌煌。
兄弟兩三人。
中子爲二侍郞一。
五日一來歸。
道上自生レ光。
黃金絡二馬頭一。

清調の曲なり。

一に云ふ、相逢狹路間行と、亦云ふ長安有狹斜行と。

相逢ふ狹路の間、道隘くして車を容れず。知らず何の年少ぞ、（一）轂を夾んで君が家を問ふ。君が家は誠に知り易し、知り易うして復た忘れ難し。黃金もて君が門を爲り、白玉もて君が堂を爲る。堂上に尊酒を置き、（二）邯鄲の倡を作使せしむ。中庭に（三）桂樹を生ず。華燈何ぞ煌煌たる。兄弟兩三人、（四）中子は侍郞と爲り、五日に一たび來り歸り、道上自ら光を生ず。黃金もて馬頭を絡ひ、觀る者道傍に盈つ。門に入つて時に左顧するに、但雙鴛鴦を見る。鴛鴦は七十二、羅列して自ら行を成せり。音聲何ぞ（五）噰噰たる、鶴は東西の廂に鳴く。（六）大婦は綺羅を織り、中婦は流黃を織り、少婦は爲す所無く、（七）瑟を挾んで高堂に上る。（八）丈人且つ安坐せよ、絲を調べて方に未だ央きず。

（一）車を隔てゝといふに同じ　（二）前に出せり　（三）肉桂の大樹　（四）相逢ひし年少なり次子に同じ　（五）和鳴の

陽春布德澤。萬物生光輝。常恐秋節至。焜黄華葉衰。百川東到海。何時復西歸。少壯不努力。老大徒傷悲。君子防未然。不處嫌疑間。瓜田不納履。李下不整冠。嫂叔不親授。長幼不比肩。勞謙得其柄。和光甚獨難。周公下白屋。吐哺不及餐。一沐三握髮。後聖稱聖賢。

常に恐らくは秋節至りて、焜黄として華葉衰へんことを。百川東して海に到る、何の時か復た西に歸らん。少壯に努力せずば、老大徒に傷悲せん。

(一)文選に出づ　(二)日光に照され露に濕されて發育するを謂ふ　(三)華色の衰褪する貌　(四)百川海に朝し復歸ること無きは人世の光陰過ぎ易きに似たり

君子行

君子は未然を防ぎ、嫌疑の間に處らず。瓜田に履を納れず、李下に冠を整さず。嫂叔は親授せず、長幼は肩を比べず。勞謙にして其柄を得、和光は甚だ獨り難し。周公は白屋に下り、哺を吐いて餐ふに及ばず。一沐に三たび髮を握り、後聖聖賢と稱せり。

(一)未だ事あらざる時に注意し豫防す　(二)兄嫁と弟と直接に物を交付せず　(三)功勞あるも謙遜なれば德を失はず　(四)史記魯世家に見ゆ白屋は卑賤の士を指す　(五)一本後世に作るを是とす

相逢行

自名爲二羅敷一。
羅敷年幾何。
二十尚不レ足。
十五頗有レ餘。
使君謝二羅敷一。
寧可二共載一不。
羅敷前致レ詞。
使君一何レ愚。使君自有レ婦。羅敷自有レ夫。東方千餘騎。夫壻居二上頭一。何用識二夫壻一。白馬從二驪駒一。青絲繫二馬尾一。黃金絡二馬頭一。腰中鹿盧劍。可二値千萬餘一。十五府小史。二十朝大夫。三十侍中郎。四十專レ城居。爲レ人潔白晳。鬑頗有レ鬚。盈盈公府步。冉冉府中趨。坐中數千人。皆言二夫壻殊一。

(一) 青絲もて籠のひもとし桂木もて籠のかぎとす (二) 婐媠に同じ美好の貌 (三) 淺黃色の絹と紫色の絹ともて上下の衣を製す (四) 帩帽を脫ぎてかしらづゝみの巾をつく (五) 家婦は夫の怠惰を怒り男子は家婦の醜きを怒るとなり (六) 牧守を稱す (七) 二句は十七八の義なり (八) 我が車に乘りて我が居所に來るべしとなり (九) 長官たる義 (一〇) 柄頭に玉の轆轤を飾れる刀なり (一一) 役所の書記など (一二) 一都の太守となる意 (一三) 鬚長くして鬢に連なれる貌 (一四) 徐進の貌 (一五) 尋常一樣に傑出する義

長歌行

下章を連ねて、平調の曲なり。古詩に云ふ、長歌は正に激烈と。魏文の燕歌行に云ふ、短歌微吟、長きこと能はずと。聲に長短有るを言ふなり。

青青園中葵。
朝露待レ日晞。

青青たる園中の葵、(一)朝露日を待つて晞く。陽春に德澤を布き、萬物光輝を生ず。

採桑城南隅。
青絲爲籠系。
桂枝爲籠鉤。
頭上倭墮髻。
耳中明月珠。
緗綺爲下裙。
紫綺爲上襦。
行者見羅敷。
下擔捋髭鬚。
少年見羅敷。
脱帽著帩頭。
畊者忘其犂。
鋤者忘其鋤。
來歸相怨怒。
但坐觀羅敷。
使君從南來。
五馬立踟蹰。
使君遣吏往。
問是誰家姝。
秦氏有好女。

襦と爲す。行く者羅敷を見て、擔を下して髭鬚を捋る。少年は羅敷を見て、(四)帽を脱して帩頭を著く。畊す者は其犂を忘れ、鋤く者は其鋤を忘る。(五)來歸して相怨み怒る。但羅敷を觀るに坐す。(六)使君南より來り、五馬立つて踟蹰す。使君吏をして往かしめ、問ふ是誰が家の姝ぞと。秦氏に好女有り、自ら名いつて羅敷と爲す。羅敷は年幾何ぞ、二十尙足らず、十五頗る餘有り。使君羅敷に謝す、寧ろ共に載るべきや不と。(七)羅敷前んで詞を致す、使君一に何ぞ愚なる。使君は(八)自ら婦有り、羅敷は自ら夫有り。東方の千餘騎、夫壻は上頭に居る。(九)何を用てか夫壻を識らん。白馬驪駒を從へ、靑絲もて馬尾に繫け、黄金もて馬頭に絡へ、腰中の(一〇)鹿盧劍は、値千萬餘なるべし。十五にして府の小吏たり、(一一)二十にして朝の大夫たり。三十にして侍中郎たり、四十にして城を(一二)專にして居る。人と爲り潔白皙、(一三)鬑鬑として頗る鬚有り、盈盈として公府に步し、(一四)冉冉として府中に趨る。坐中數千人、皆夫壻の(一五)殊なるを言ふと。

池中雙鴛鴦。鴛鴦七十二。羅列自成行。鳴聲何啾啾。聞我殿東廂。兄弟四五人。皆爲侍中郎。五日一時來。觀者滿路傍。黃金絡馬頭。熲熲何煌煌。桃生露井上。李樹生桃傍。蟲來齧桃根。李樹代桃殭。樹木身相代。兄弟還相忘。

る。

(一) 遊蕩の少年が深宮中より出づるにいふ (二) 刑法嚴正にして寬假せず柔和にして名教を亂る者を矯正す (三) 以下蕩子の家の富をいふ (四) 邯鄲の妓女 (五) 下二句諸說あれども皆從ひ難し未詳 (六) 鳥の鳴く聲にいふ (七) 天子近侍の高官なり五日目毎に一休沐を得るなり (八) 光り耀く貌 (九) 雨蓋なき井戸 (一〇) 樹木すら他の身代りとなるに汝は兄弟の名を汚し法を犯すに非ずやと蕩子を戒しむるなり

日出東南隅。照我秦氏樓。秦氏有好女。自名爲羅敷。羅敷善蠶桑。

陌上桑

一に艶歌羅敷行と曰ふ。

日は東南隅に出でて、我が秦氏の樓を照す。秦氏に好女有り、自ら名いつて羅敷と爲す。羅敷は蠶桑を善くし、桑を城南隅に採る。(一)青絲もて籠系と爲し、桂枝もて籠鉤と爲す。頭上の(二)倭墮の髻、耳中の明月珠、(三)緗綺を下裙と爲し、紫綺を上

何相催促。人命不レ得二少踟蹰一。

鶏鳴二高樹巓一。
狗吠二深宮中一。
蕩子何所レ之。
天下方太平。
刑法非レ有レ貸。
柔協正レ亂レ名。
黄金爲二君門一。
璧玉爲二軒堂一。
上有二雙尊酒一。
作二使邯鄲倡一。
劉王碧青甓。
後出二郭門王一。
舍後有二方池一。

㈠山名なり轉じて墳墓の地にいふ　㈡衆人の魂魄をとりをさむ　㈢死を司る神なり

鷄鳴

此の曲、前後の辭相屬らず。蓋し詩を采るの人が、合を樂しんで章を成せしのみ。錯簡紊誤有るに非るなり。後は多く此に放ふ。

（一）鷄は高樹の巓に鳴き、狗は深宮の中に吠ゆ。蕩子何んか之く所ぞ、天下方に太平。（二）刑法貸す有るに非ず、柔協して名を亂すを正す。（三）黄金もて君が門を爲り、璧玉もて軒堂と爲す。上に雙尊の酒有り、（四）邯鄲の倡を作使す。（五）劉王が碧青の甓、後に郭門王を出す。舍後に方池有り、池中に雙鴛鴦あり。鴛鴦七十二、羅列して自ら行を成す。鳴く聲何ぞ啾啾（六）たる、我が殿の東廂に聞ゆ。兄弟四五人、皆侍中（七）郎と爲る。五日に一時に來り、觀る者路傍に滿つ。黄金もて馬頭を絡ひ、（八）頴頴として何ぞ煌煌たる。桃は露井（九）の上に生じ、李樹は桃の傍に生ず。蟲來りて桃根を齧めば、李樹（一〇）は桃に代りて殭る。樹木も身もて相代るに、兄弟は還つて相忘

魚戲蓮葉東。
魚戲蓮葉西。
魚戲蓮葉南。
魚戲蓮葉北。

薤上露何易晞。
露晞明朝
更復落。人死
一去何時歸。

蒿里誰家地。
聚斂魂魄無賢愚。
鬼伯一

㊀ 蓮葉の水上に搖がれる光景なり

薤露歌

古今註に、薤露蒿里は、田横(一)が門人より出づ。横の自殺するや、門人之を傷み、爲に悲歌二章を作る。孝武の時に、李延年は分つて二曲と爲し、薤露は公貴人を送り、蒿里は士大夫を送る。柩を挽く者をして之を歌はしむ、亦之を挽歌と謂ふ。

薤上(二)の露は何ぞ晞き易き、露晞けば(三)明朝更に復た落つ。人死して一去すれば何の時か歸らん。

㊀ 漢の高祖の聘を肯んぜずして自殺せし人 ㊁ 大にらといふ野菜 ㊂ 露は明朝又置けども人は一去すれば復歸ること無し

蒿里曲

蒿里(一)誰か家する地ぞ、魂魄を聚斂して賢愚と無し。(三)鬼伯一に何ぞ相催促する、人命は少くも踟蹰するを得ず。

公無レ渡レ河。公竟渡レ河。墮レ河而死。當二奈レ公何一。

江南可レ採レ蓮。蓮葉何田田。魚戲二蓮葉間一。

以下六章は相和の曲なり。

古今註に、朝鮮の津の卒(一)霍里子高といふもの、晨に起つて船を刺すに、一白首の狂夫有り、髪を披き壺を提げ、流を亂して渡る。其の妻隨つて之を止むれども及ばず、遂に河に墮ちて死しぬ。妻は箜篌(二)を援つて之を鼓し、公河を渡る無れの曲を作る。聲甚だ悽愴なり。曲終るや、亦河に投じて死せり。子高還つて其妻麗玉に語るに、麗玉之を傷み、乃ち箜篌を作つて其聲を寫し、名づけて箜篌引と曰ふ。

公河を渡る無れ。公竟に河を渡り、河に墮ちて死す。當に公を奈何かすべき。(三)

(一) 渡舟場なり　(二) 二十三絃の一種の樂器　(三) 死せる夫を如何ともすべきよし無しと痛歎するなり

江　南

梁の武帝の江南弄を作るは、此に本づく。

江南は蓮を採るべし、蓮葉何ぞ田田(一)たる。魚は蓮葉の間に戲れ、魚は蓮葉の東に戲れ、魚は蓮葉の西に戲れ、魚は蓮葉の南に戲れ、魚は蓮葉の北に戲る。

有二他心一。拉雜摧燒レ之。摧燒レ之。當レ風揚二其灰一。從レ今已往。勿二復相思一。相思與レ君絕。雞鳴狗吠。兄嫂當レ知レ之。妃呼豨。秋風肅肅晨風颸。東方須臾高知レ之。

相思うて君と絕つとも、(五)鷄鳴き狗吠えて、兄嫂當に之を知るべし。(六)妃呼豨。秋風肅肅として晨風颸し、(七)東方須臾に高うして之を知らん。

(一)相思の人は皆南海に在りとなり　(二)珠玉を飾れる簪　(三)列ね附けたるなり　(四)折り摧いて一塊となす　(五)改めて他人と交通せんには終には兄嫂に發覺すべし妾は決して之をなさすとなり　(六)曲調の和の字なり前詩の收中吾の類　(七)朝風の意なり東方は朝暾をいふ

上邪。我欲三與レ君相知。長命無二絕衰一。山無レ陵。江水爲竭。冬雷震震。夏雨レ雪。天地合。乃敢與レ君絕。

上邪

上邪、(一)我君と相知り、長命まで絕え衰ふると無らんと欲す。(二)山に陵無くして、江水爲に竭き、冬雷震震として、夏も雪を雨らす。(三)天地合して、乃ち敢て君と絕たん。

(一)君上を呼びかくるなり　(二)山平かなれば川源涸歇す　(三)天地崩壞の時ならでは君に背かじとなり

箜篌引

禾黍不穫。君何食。願爲忠臣安可得。思子良臣。良臣誠可思。朝行出攻。暮不夜歸。

きこと恰も禾を苅らずば食無きが如しとなり　(七)主君平時の臣佐たらんことを思ふ

臨高臺

臨高臺以軒。下有清水清且寒。江有香草目以蘭。黃鵠高飛離哉翻。關弓射鵠。令吾主壽萬年。收中吾。

高臺に臨むに軒(一)を以てす、下に清水有り清うして且寒し。江に香草有り目するに蘭を以てす、黃鵠高く飛んで離らんとして翻る。(二)弓を關して鵠を射て、吾が主をして萬年を壽からしめん。(三)收中吾。

(一)長廊に窓あるところ　(二)弓に矢を番ふ　(三)未詳或は云く曲調の餘聲なりと

有所思

有所思。乃在大海南。何用問遺君。雙珠玳瑁簪。用玉紹繚之。聞君

(一)思ふ所有り、乃ち大海の南に在り。何を用てか君に問遺せん、(二)雙珠の玳瑁の簪あり、玉を用て之を紹繚(三)せり。聞く君に他心有りと、(四)拉雜して摧いて之を燒かん。摧いて之を燒き、風に當つて其灰を揚げん。今より已往、復相思ふこと勿らん。

予身逝昆侖。天馬徠。龍之媒。遊閶闔。觀玉臺。

戰城南。死郭北。野死不葬烏可食。爲我謂烏。且爲客豪。野死諒不葬。腐肉安能去子逃。水聲激激。蒲葦冥冥。梟騎戰鬪死。駑馬裴徊鳴。梁築室。何以南。何以北。

(一〇) 天門に至りて上帝の居に入らんとなり

戰城南

以下四章は鐃歌なり。

漢の鼓吹の鐃歌は十八曲あり。字に訛誤多し。茲に其の誦すべき者のみを錄す。

城南に戰つて、郭北に死す。野に死して葬られず烏食ふべし。我が爲に烏に謂へ、且らく客の爲に豪せよ(一)野に死して諒に葬られず、腐肉安ぞ能く(二)子を去つて逃れんやと。(三)水聲激激たり、蒲葦冥冥たり。梟騎戰鬪して死し、駑馬裴徊して鳴く。(四)梁もて室を築くに、何を以てか南し(五)、何を以てか北せる。(六)禾黍穫らずば、君は何をか食はん。忠臣爲らんことを願ふとも安ぞ得べけん。(七)子の良臣たらんことを思ふ。良臣は誠に思ふべし。朝に行いて出で攻め、暮に夜歸らず。

(一) 死者の爲に俠氣を出して食はぬやうにして吳れ (二) 烏に就いて曰ふ (三) 水聲激しく蒲葦暗き處に戰死す (四) 死者は棟梁の材なり廟堂にも用ひらるべき筈なりきと也 (五) 第一句に應ず (六) 此人既に死せり君に良佐無

太一況。天馬下。霑二赤汗一。沫流レ赭。志俶儻。精權奇。籋二浮雲一。晻上馳。體容與。迣二萬里一。今安匹。龍爲レ友。

天馬徠。從二西極一。涉二流沙一。九夷服。天馬徠。出二泉水一。虎脊兩。化若レ鬼。天馬徠。歷二無草一。經二千里一。循二東道一。天馬徠。執徐時。將二搖擧一。誰與期。天馬徠。開二遠門一。竦二

軍李廣利は、大宛王の首を斬りて、汗血の馬を獲たり。西極大馬の歌を作る。

(二)太一況うて、天馬下る。(三)赤汗を霑して、沫は赭を流す。(四)志は俶儻にして、精權奇に、浮雲を躡んで、晻として上り馳せ、體は容與として、萬里を迣く。今安んか匹はん、(五)龍を友と爲す。

(一)漢武帝の年號　(二)天神に同じ　(三)汗も沫も赤色　(四)俶儻不羈の志ありて非常奇倜測るべからず　(五)飛龍の之と友たるあるのみ他に匹敵すべきなし

天馬徠る、(一)西極よりす。(二)流沙を涉りて、九夷服す。天馬徠る、(三)泉水より出づ。(四)虎脊兩あり、化して鬼の若し。天馬徠る、(五)無草を歷たり、千里を經りて、(六)東道に循ふ。天馬徠る、(七)執徐の時なり。將に(八)搖擧せんとす、誰と與にか期せる。天馬徠る、(九)遠門を開かん。予が身を竦かして、崑崙に逝かん。天馬徠る、龍の媒なり。(一〇)閶闔に遊んで、玉臺を觀ん。

(一)大宛を指す　(二)沙漠の泛稱　(三)大宛の水名　(四)體肥えて背骨低く左右に肉阜あり　(五)草無き沙漠の地　(六)東方への道に就く　(七)歲星の辰に在る歲　(八)誰人を乘せて搖動高擧せんと欲するぞ　(九)漢宮の門名

惟泰元尊。媼神蕃釐。經緯天地。作成四時。精建日月。星辰度理。陰陽五行。周而復始。雲風雷電。降甘露雨。百姓蕃滋。咸循厥緒。繼統共勤。順皇之德。鸞路龍鱗。罔不肸飾。嘉籩列陳。庶幾宴享。滅除凶災。烈騰八荒。鐘鼓竽笙。雲舞翔翔。招搖靈旗。九夷賓將。

(一)惟れ泰元尊く、媼神に釐蕃し。(二)天地を經緯し、四時を作成し、日月を精建して、星辰度理あり。(三)陰陽五行、周りて復た始まり、雲風雷電、甘露の雨を降らす。(四)百姓蕃滋にして、咸厥の緒に循ひ、(五)統を繼いで共に勤め、皇の德に循ふ。(六)鸞路龍鱗、肸飾せざる罔く、(七)嘉籩列陳、庶幾くは宴享せん。凶災を滅除して、烈は八荒に騰り、鐘鼓竽笙ありて、(八)雲舞翔翔たり。(九)招搖の靈旗は、九夷も賓將せん。

(一)天神を泰元とし地祇を媼神とす　(二)以下天地日月星辰運行の軌を誤らざる意　(三)二氣と木火土金水の五行となり四時をいふ　(四)庶民皆繁昌して各々其の職に從事す　(五)時の天子が王統を繼承して天地神祇の德に遵ふ義　(六)飾車飾旗を振ひ整ふ　(七)善美なる祭器を多く列べ供す　(八)舞曲の名なるべし　(九)招搖星を描ける旗　れは蠻夷も歸服せんとなり

天馬

漢書に、(一)元鼎四年秋、馬あり渥洼水の中に生る。天馬の歌を作る。太初四年の春、貳師將

西顥沆碭。秋氣肅殺。含秀垂穎。續舊不廢。姦僞不萌。祆孽伏息。隅辟越遠。四貊咸服。既畏茲威。惟慕純德。附而不驕。正心翊翊。

(一)西顥沆碭として、秋氣肅殺なり。(二)秀を含み穎を垂れ、舊を續いで廢せず。(三)姦僞萌さず、祆孽伏息す。(四)隅辟越遠、四貊咸服す。既に茲の威を畏れ、惟に(五)純德を慕ふ。附けて驕らず、(六)正心翊翊たり。

㊀秋神白氣を起して嚴正肅殺の德を振ふ　㊁五穀成熟、夏時に續いて生長す　㊂姦惡は起らず災害もやむ　㊃僻陋遠遠四夷の地も皆その威に服す　㊄秋の正德　㊅この德に隨つて身を修め國家を治めんと欲する意

玄冥

玄冥凌陰。蟄蟲蓋藏。草木零落。抵冬降霜。易亂除邪。革正異俗。兆民反本。抱素懷樸。條理信義。望禮五嶽。籍斂之時。掩收嘉穀。

(一)玄冥陰を凌しうし、蟄蟲蓋藏す。草木零落して、冬に抵り霜を降らす。(二)亂を易へ邪を除き、異俗を革正す。兆民本に反りて、素を抱き樸を懷く。(三)條理信義もて、五嶽を望禮す。籍斂の時、嘉穀を掩收す。

㊀冬神の威烈しく蟲類は皆蟄藏す　㊁亂邪の異俗を革正して人民皆素樸の風に反る　㊂祭文を正しくして北岳に祀り籍田の穀を收め刈るとなり

惟泰元

荄以溢。膏潤并愛。跂行畢逮。霆聲發榮。巖處傾聽。枯槁復產。迺成厥命。衆庶熙熙。施及夭胎。羣生啿啿。惟春之祺。

處傾け聽く。(四)枯槁復產し、迺ち厥の命を成す。衆庶熙熙として、施いて(五)夭胎に及び。(六)羣生啿啿たり、惟春の祺なり。

㊀ 春神發動して植物皆其生を遂ぐ ㊁ 雨露の慈愛によりて蟲類も皆潤に漏れず ㊂ 雷霆聲あり草木花を開き巖居の動物も之を聽く ㊃ 枯れたる植物も發生す ㊄ 年若きもの胎孕の者皆和好の徳を受く ㊅ 衆庶皆豐に樂しみ厚く和合すとなり

朱明盛長。旉與萬物。桐生茂豫。靡有所詘。敷華就實。既阜既昌。登成甫田。百鬼迪嘗。廣大建祀。肅雍不忘。神若宥之。傳世無疆。

朱明

(一)朱明盛長して、萬物に旉與す。(二)桐生茂り豫しみ、詘する所有る靡し。華を敷いて實を就し、既に阜いに既に昌なり。(三)甫田を登成し、(四)百鬼迪み嘗む。廣大に祀を建て、(五)肅雍忘れざらん。神若し之を宥さば、世に傳へて疆無からん。

㊀ 夏の神萬物に敷きほどこす ㊁ 生物すべての義桐は同に通ず ㊂ 大田をして繁茂成熟せしむ ㊃ 衆神皆供饌を享く ㊄ 敬しみ和らぐ

西顥

以レ雨。般裔裔
靈之至。慶陰陰
陰。相ニ放悲一。震ニ
淡心一。靈巳坐。
五音飭。虞至レ
旦。承レ靈億。牲
繭栗。粢盛香。
尊ニ桂酒一。賓ニ八
鄕一。靈安留。吟ニ
青黃一。徧觀レ此。
眺ニ瑤堂一。衆嫮
並。綽奇麗。顏
如レ茶。兆逐レ靡。
被ニ華文一。厠ニ霧縠一。曳ニ阿錫一。佩ニ珠玉一。俠ニ嘉夜一。茝蘭芳。淡容與。獻ニ嘉觴一。

めしむ。衆嫮(一五)並んで、綽として奇麗に、顏は茶の如く、兆(一六)は靡を逐ふ。華文(一七)を被て、霧縠を厠へ、阿錫(一八)を曳いて、珠玉を佩ぶ。嘉夜(一九)と、茝蘭の芳ばしきとを俠みて、淡として容與として、嘉觴を獻ず。

(一) 祭の名　(二) 鬱鬯の脂と香草とを焼いて四方の神を降す義　(三) 天門開けて神靈稍見ゆ　(四) 大靄美しく至る　(五) 黑雲に乘じて下り至る義　(六) 降雨の至る貌にいふ　(七) 流れ布いて飛散する貌　(八) 慶雲の陰薄暗くして彷彿として人心を動かす　(九) 宮商角徵羽の五聲　(一〇) 神靈を承けて神位に安んぜしむ　(一一) 牛羊の角の繭の如く栗の如く美小なる意　(一二) 八方の神々を賓位にす　(一三) 四時の樂を奏するなり　(一四) 祭祀を行ふ堂の名　(一五) 美好なる女樂相並べるを言ふ　(一六) 衆女皆奢靡を競ふとなり　(一七) 花紋の衣、薄絹の衣と相雜る　(一八) 齊の東阿縣より出づる織物の裙を曳く　(一九) 共に芳草の名なり

青陽

青陽開動。根

(一)青陽開動し、根荄以て遂ぐ。(二)膏潤幷び愛し、跂行畢く逮ぶ。(三)霆聲榮を發き、巖

文能絶二地紀一。一朝被二讒言一。二桃殺二三士一。誰能爲二此謀一。國相齊晏子。

練二時日一。侯有レ望。焫二膋蕭一。延二四方一。九重開。靈之斿。垂二惠恩一。鴻祜休。靈之車。結二玄雲一。駕二飛龍一。羽旄紛。靈之下。若二風馬一。左二蒼龍一。右二白虎一。靈之來。神哉沛。先

㊀梁父に同じ地名　㊁河南彰德府陽陰縣　㊂齊の强力能文の三士公孫接、田開彊、古冶子にして晏嬰の術に陷り終に自殺せし人々なり　㊃天地を震動せしむる意　㊄晏子の術策を指す　㊅時の大臣を謂ふ

樂府歌辭

練時日

以下七章は、皆郊祀の歌なり。

時日を練びて、(一)侯れ望する有り。(二)膋蕭を焫にして、四方を延く。(三)九重開いて、靈の斿あり。恵恩を垂れて、(四)鴻祜休し。靈の車、(五)玄雲を結び、飛龍に駕して、羽旄紛たり。靈の下るや、風馬の若く、蒼龍を左にし、白虎を右にす。靈の來るや、(六)神なる哉沛たり。先んずるに雨を以てし、(七)般として裔裔たり。靈の至るや、(八)慶陰陰たり、放悉を相て、心を震淡す。靈已に坐するや、(九)五音飭ひ、虞みて旦に至り、(一〇)靈を承けて億んぜしむ。(一一)牲は繭と栗とのごとく、粢盛香ばしく、桂酒を尊にして、(一二)八鄕を賓とす。靈安留して、(一三)青黄を吟じ、偏く此を觀て、(一四)瑤堂を眺

奄若二壽命盡一。
傍人相寬大。
爲復彊視息。
雖レ生何聊賴。託二命于新人一。竭レ心自勗勵。流離成二鄙賤一。常恐二復捐廢一。人生幾何時。懷レ憂終二年歲一。

(四) 傷み怨しむ貌　(五) 他人の相慰藉し勸告するを指す　(六) 新に董祀に嫁して一身を寄托す　(七) 一旦鄙賤に落ちし我が身なればいつ棄てられんかも圖られずとなり

諸葛亮

梁甫吟 (一)

步出二齊城門一。
遙望二蕩陰里一。
里中有二三墳一。
纍纍正相似。
問是誰家墓。
田彊古冶子。
力能排二南山一。

三國志に曰く、諸葛亮は躬から隴畝に耕し、好んで梁父の吟を爲せり。

步して齊の城門を出づれば、遙に蕩陰里を望む。(二) 里中に三墳有り、纍纍として正に相似たり。問ふ是誰が家の墓ぞ、(三) 田疆古冶子なり。力は能く南山を排し、文は能く(四)地紀を絕つ。(五) 一朝讒言を被り、二桃もて三士を殺す。誰か能く此の謀を爲せる、(六) 國相齊の晏子なり。

恍惚生狂癡。
號呼手撫摩。
當發復回疑。
兼有同時輩。相送告別離。慕我獨得歸。哀叫聲摧裂。馬為立踟躕。車為不轉轍。觀者皆歔欷。行路亦嗚咽。去去割情戀。遄征日遐邁。悠悠三千里。何時復交會。念我出腹子。胸臆為摧敗。

て不安なる意　(一二)同時に捕へられし漢地の婦女　(一三)車馬皆進みかねとなり　(一四)すゝり泣きし咽び泣く
(一五)別離せし人々と再會せんことの絶望なるを歎ずるなり

既至家人盡。
又復無中外。
城郭為山林。
庭宇生荊艾。
白骨不知誰。
從橫莫覆蓋。
出門無人聲。
豺狼嗥且吠。
煢煢對孤景。
怛咤糜肝肺。
登高遠眺望。
魂神忽飛逝。

(一)既に至れば家人盡き、又復中外無し。城郭は山林と爲り、庭宇に(二)荊艾を生ぜり。白骨は誰なるかを知らず、(三)從横して覆蓋無し。門を出づれども人聲無く、豺狼嗥び且つ吠ゆ。煢煢として孤景に對し、(四)怛咤して肝肺を糜す。高に登りて遠く眺望し、魂神忽ち飛び逝く。奄として壽命の盡るが若し、傍人相寬大に、爲に復彊ひて視息すれども、生けりと雖も何にか聊賴せん。(六)命を新人に託し、心を竭して自ら勗め勵ます。(七)流離して鄙賤と成り、常に復捐廢せられんことを恐る。人生幾何時ぞ、憂を懷いて年歳を終へん。

(一)家中に故人無く家には墻壁堂室の區別もなし　(二)いばらよもぎの雑草　(三)散亂して風日に曝露せりとなり

聞之常歔欷。迎問其消息。輒復非鄉里。邂逅徼時願。骨肉來迎已。已得自解免。當復棄兒子。天屬綴人心。念別無會期。存亡永乖隔。不忍與之辭。兒前抱我頸。問母欲何之。人言母當去。豈復有還時。阿母常仁惻。今何更不慈。我尚未成人。奈何不顧思。見此崩五內。

會の期無きを念ふ。存亡(七)永く乖隔す、之と辭するに忍びず。兒は前んで我が頸を抱き、問ふ母何くに之かんと欲する。人は言ふ母當に去るべしと、豈復還る時有らんや。阿母は常に仁惻(八)なりき、今何ぞ更に慈あらざる。我尚未だ人と成らず、奈何ぞ顧思せざると。此を見て五內(九)崩れ、恍惚として狂癡(一〇)を生ず。號呼して手に撫摩し、當に發すべくして復回つて疑ふ(一一)。兼て同時の輩有り、相送つて別離を告ぐ。我が獨り歸るを得るを慕ひ、哀叫して聲摧裂(一二)す。馬(一三)は爲に立つて踟蹰し、車は爲に轍を轉ぜず。觀る者皆歔欷(一四)し、行路も亦嗚咽す。去り去つて情戀を割き、遄に征いて日に遐く邁く。悠悠たり三千里(一五)、何の時か復交會せん。我が腹より出でし子を念へば、胸臆爲に摧敗す。

(一) 匈奴の地は中華の人情風俗と大差あり (二) 時に觸れて故郷の父母などを思念す (三) 故郷も亦荒廢して舊時の光景を存せずとなり (四) 途上偶然に相遭へる人にこの心情を訴ふるに圖らずも己を迎へんとする人なりき (五) 匈奴にて產みし二子 (六) 生憎に母子の心を憂惑せしむとなり (七) その儘永き別離となるべきを思うて別れかぬるなり (八) 慈仁にして惻隱の心厚かりき (九) 五臟に同じ (一〇) 狂痴なる心情を生ず (一一) 小兒の前途を思う

肝脾爲爛腐。
所レ略有二萬計一。
不レ得レ令二屯聚一。
或有二骨肉倶一。
欲レ言不二敢語一。
失二意幾微間一。
輒言斃降虜。
要當二以亭ㇾ刃一。我曹不レ活レ汝。豈敢惜二性命一。不レ堪二其詈罵一。或便加二棰杖一。毒痛參并下。旦則號泣
行。夜則悲吟坐。欲レ死不レ能レ得。欲レ生無二一可一。彼蒼者何辜。乃遭二此戹禍一。

(一) 邕の子にして初め河東の衞仲道に適きしが後ち胡に掠られて二子を生み晩年曹操の力によりて陳留の董祀に嫁せし人 (二) 亂を作して都を長安に遷し獻帝を擁立せり (三) 長安を指す (四) 卓の兵は皆胡羌より借り來れる兇暴の軍隊なるを云ふ (五) 斬りつくして殘す所なく死骸相重なりて下の者は上の屍を支ふる狀態なり (六) 函谷關なり (七) 心情寸斷肺肝摧滅する意 (八) 劫略せし婦女多きも之を一所に屯集せしめず (九) 僅に機嫌に逆らへば直に惡罵せらる (一〇) 刃を加ふる意なり亭は停に通ず (一一) 鞭をあて杖を加へて毒害傷痛せしむ (一二) 天を呼んで妾等に何の罪過ありやと怨歎するなり

邊荒與レ華異。
人俗少二義理一。
處所多二霜雪一。
胡風春夏起。
翩翩吹二我衣一。
肅肅入二我耳一。
感レ時念二父母一。
哀歎無二終已一。
有レ客從レ外來。

(一二)邊荒は華と異なり、人俗義理少し。處る所霜雪多く、胡風春夏に起る。翩翩として我が衣を吹き、肅肅として我が耳に入る。時に感じて父母を念ひ、哀歎して終り已むとき無し。客有り外より來れば、之を聞いて常に歡喜し、迎へて其消息を問ふに、(一三)輒ち復鄕里に非ず。(一四)邂逅して時の願を徼むるに、骨肉來りて己を迎ふ。己は自ら解免を得たるも、當に復兒子を棄つべし。(一五)(一六)天屬人心を綴り、別れて

董卓亂天常。
志欲圖簒弑。
先害諸賢良。
逼迫遷舊邦。
擁王以自强。
海內興義師。
欲共討不祥。
卓衆來東下。
金甲耀日光。
平土人脆弱。
來兵皆胡羌。
獵野圍城邑。
所向悉破亡。
斬截無孑遺。
尸骸相撐拒。
馬邊懸男頭。
馬後載婦女。
長驅西入關。
廻路險且阻。
還顧邈冥冥。

害す。逼迫して舊邦(三)に遷し、王を擁して以て自ら强うす。海內義師を興し、共に不祥を討たんと欲す。卓が衆來つて東より下り、金甲は日光に耀く。平土の人は脆弱なり、來兵(四)は皆胡羌。野に獵りて城邑を圍み、向ふ所悉く破亡す。(五)斬截して孑遺無く、尸骸相撐拒す。馬邊には男の頭を懸け、馬後には婦女を載す。長驅して西のかた關(六)に入るに、廻路險にして且阻なり。還顧するに邈として冥冥、肝脾(七)爲に爛腐す。(八)略する所萬計有り、屯聚せしむるを得ず。或は骨肉俱にする有り、言はんと欲すれども敢て語らず。(九)意を幾微の間に失へば、輒ち言ふ斃降虜、要するに當に以て刃(一〇)を亭むべし、我が曹は汝を活かさずと。豈敢て性命を惜まんや、其の詈罵に堪へず。或は便ち棰杖(一一)を加へ、毒痛參ゝ幷せ下る。旦には則ち號泣して行き、夜には則ち悲吟して坐す。死を欲すれども得る能はず、生を欲すれども一の可なる無し。(一二)彼の蒼たる者は何の辜ぞ、乃ち此の厄禍に遭へり。

煢煢白兎。東走西顧。衣不如新。人不如故。

漢季失權柄。

竇玄が妻

古怨歌

玄は狀貌絕だ異なり。(一) 天子其の妻を出さしめ、妻すに公主を以てせり。妻悲しみ怨み、書及び歌を寄せて玄に與ふ。時人之を憐みぬ。

(二) 煢煢たる白兎、東に走り西に顧みる。衣は新なるに如かず、(三) 人は故きに如かず。

㊀ 勝れて他に傑出すとなり ㊁ 孤立の貌自ら寵を逐はれしに喩ふ ㊂ 人は故くより相知れる者を第一とする意

蔡琰 (一)

悲憤詩

後漢書に、琰が董祀に歸いで後、亂離に感傷し、追懷悲憤して詩を作ると。

漢季に權柄を失ひ、董卓は天常を亂す。(一) 志に簒弑を圖らんと欲し、先づ諸賢良を

心悲。北上レ堂。西入レ階。急機絞。杼聲催。長歎息。當レ語レ誰。君有レ行。妾念レ之。出有レ日。還無レ期。結ニ巾帶一。長相思。君忘レ妾。未レ知レ之。妾忘レ君。罪當レ治。妾有レ行。宜レ知レ之。黃者金。白者玉。高者山。下者谷。姓者蘇。字伯玉。人才多。知謀足。家居ニ長安一。身在レ蜀。何惜馬蹄歸不レ數。羊肉千斤酒百斛。令ニ君馬肥ニ麥與レ粟。今時人知ニ四足一。與ニ其書一。不レ能レ讀。當下從ニ中央一周中四角上。

を結んで、長く相思ふ。君の妾を忘るゝは、未だ之を知らず、妾が君を忘れんは、罪當に治すべし。妾に行有り、(五)宜しく之を知るべし。黃き者は金、白き者は玉、高き者は山、下き者は谷、姓は蘇、字は伯玉、人才多く、知謀足る。家は長安に居り、身は蜀に在り、(六)何ぞ惜まん馬蹄歸ること數々ならざるを。羊肉千斤酒百斛、君が馬を麥と粟とに肥えしめん。今時の人は(七)四足を知る、其書を與へんに讀むこと能はずば、(八)當に中央より四角に周るべし。

(一) 盤中に書して遠行の夫に與へし詩なり盤に回旋の意あるによりこれに假るなり　(二) 門前の人を見て夫婿かと誤認するとなり　(三) 煩悶焦燥の意なり性急に機軸を轉じ絲を緊めて杼を操る云々　(四) 發程の日は確なれども歸期ははかり難し　(五) 節操を守りて夫君の歸を待てるを指す　(六) 陽に自ら謙遜して歸家を望まざるが如くするなり　(七) 盤に四足あり盤に回歸の意あるを指す　(八) この盤中詩を讀む順序方法を説く

高秋八九月。白露變爲霜。終年會飄墮。安得久馨香。秋時自零落。春月復芬芳。何時盛年去。歡愛永相忘。吾欲竟此曲。此曲愁人腸。歸來酌美酒。挾瑟上高堂。

(一)玉臺新詠に宜子侯に作る (二)風に吹かれて高低するなり (三)落花の降りかゝる義 (四)顔よき美人 (五)何故に桑葉を採り傷むるぞ (六)秋老いたる義以下四句美女の答なり (七)以下四句問者の語

蘇伯玉が妻

盤中詩(一)

山樹高。鳥鳴悲。泉水深。鯉魚肥。空倉雀。常苦飢。吏人婦。會夫希。出門望。見白衣。謂當是。而更非。還入門。中

山樹高うして、鳥鳴き悲しみ、泉水深うして、鯉魚肥ゆ。空倉の雀は、常に飢に苦しみ、吏人の婦は、夫に會ふこと希なり。門を出でて望み、白衣(二)を見て、謂ふらく當に是なるべしと、而も更非なり。還つて門に入り、中心に悲しみ、北のかた堂に上り、西のかた階に入る。急に機を絞し、杼聲(三)催し、長く歎息す、當に誰にか語るべき。君に行有り、妾之を念ふ。出づる(四)に日有るも、還るに期無し。巾帶

金盤膾二鯉魚一。貽二我青銅鏡一。結二我紅羅裾一。不レ惜二紅羅裂一。何論二輕賤軀一。男兒愛二後婦一。女子重二前夫一。人生有二新故一。貴賤不二相踰一。多謝金吾子。私愛徒區區。

(二)宋子侯

董嬌嬈

洛陽城東路。
桃李生二路傍一。
花花自相對。
葉葉自相當。
春風東北起。
花葉正低昂。
不レ知誰家子。
提レ籠行採レ桑。
纖手折二其枝一。
花落何飄颻。
請謝二彼姝子一。
何爲見二損傷一。

洛陽城東の路、桃李路傍に生ず。花花自ら相對し、葉葉自ら相當る。春風東北より起り、花葉正に低昂す。知らず誰が家の子ぞ、籠を提げて行いて桑を採る。纖手もて其枝を折るに、(三)花落ちて何ぞ飄颻たる。請ふ彼の(四)姝子に謝せん、(五)何爲れぞ損傷せらると。(六)高秋八九月、白露變じて霜と爲る。終年飄墮に會ふ、安んぞ馨香を久しうするを得んや。(七)秋時に自ら零落するも、春月には復芬芳あらん。何の時か盛年去り、歡愛永く相忘れん。吾此の曲を竟へんと欲するも、此の曲は人の腸を愁へしむ。歸り來つて美酒を酌み、瑟を挾んで高堂に上る。

姓馮名子都。
依倚將軍勢。
調笑酒家胡。
胡姬年十五。
春日獨當壚。
長裾連理帶。
廣袖合歡襦。
頭上藍田玉。
耳後大秦珠。
兩鬟何窈窕。
一世良所無。
一鬟五百萬。
兩鬟千萬餘。
不意金吾子。
娉婷過我廬。
銀鞍何煜爚。
翠蓋空踟蹰。
就我求清酒。
絲繩提玉壺。
就我求珍肴。

り。胡姬年十五、春日獨り壚(四)に當る。長裾連理の帶、廣袖合歡の襦。頭上の藍田玉(五)、耳後の大秦珠(六)。兩鬟(七)何ぞ窈窕たる、一世良に無き所たり。一鬟五百萬、兩鬟千萬餘。意はざりき金吾(八)の子、娉婷(九)として我が廬に過らんとは。銀鞍何ぞ煜爚たる、翠蓋空しく踟蹰す。我に就いて淸酒を求むれば、絲繩もて玉壺を提ぐ。我に就いて珍肴を求むるに、金盤もて鯉魚を膾にす。我に靑銅鏡(一〇)を貽り、我が紅羅の裙を結ぶ。紅羅の裂くるを惜まず、何ぞ輕賤の軀を論ぜん。男兒は後婦(一一)を愛し、女子は前夫を重んず。人生に新故有り、貴賤相踰えず。多謝す金吾の子、私愛徒に區區たり(一二)。

(一) 宿衛の官司なり我が近衛武官に當る (二) 漢の大將霍光が家の監奴 (三) 酒家に使傭せらるゝ胡女を嘲笑す (四) 店前に在りて酒を賣る義 (五) 藍田縣に美玉を產す (六) 西歐羅馬地方の古稱 (七) 髮の兩側を飾れる玉環 (八) 執金吾といふ官名 (九) 容姿淸美の貌、卽ち子都を指す (一〇) 銅鏡を贈りて羅裙を結ばんとするがために之を避けて逃げ行くとなり (一一) 後ぞへの婦妻 (一二) 君の好意を謝すれどもたゞ酒家の婦として君を愛するに止めたしとの義

妻妾向レ人悲。
聞二子不一レ可レ見。
日已潛二光輝一。
孤墳在二西北一。
常念二君來遲一。
褰レ裳上二墟丘一。
但見二蒿與一レ薇。
白骨歸二黄泉一。
肌體乘レ塵飛。
生時不レ識レ父。
死後知二我誰一。
孤魂遊二窮暮一。
飄颻安所レ依。
人生圖二嗣息一。爾死我念追。俛仰内傷レ心。不レ覺涙沾レ衣。人生自有レ命。但恨二生日希一。

西北に在り、常に君の來ること遲きを念ふ。（三）裳を褰げて墟丘に上り、但蒿と薇とを見る。白骨は黄泉に歸し、肌體は塵に乘じて飛ぶ。（四）生時に父を識らず、死後我の誰なるを知らんや。孤魂窮暮に遊び、（五）飄颻として安ぞ依る所あらん。人生は嗣息を圖るに、（六）爾死して我念ひ追ふ。俛仰して内に心を傷め、覺えず涙は衣を沾ほす。人生自ら命有り、（七）但生日の希なるを恨む。

（一）遠行する人を送りに出かけて久しき時日を費しゝりとなり　（二）君に逢ふべからざるを歎きつゝ、愛子既に死し去りたり云々の意　（三）衣をかゝげて墓參するなり　（四）旅行中に生れたる小供なればなり　（五）黄泉に同じ　（六）嗣ぐべき子息といふ程の義　（七）生存の日數甚だ少きを悲しむとなり

辛延年

羽林郎（一）

昔有二霍家奴一。

昔は（二）霍家の奴有り、姓は馮名は子都。將軍の勢に依倚して、（三）酒家の胡を調笑せ

一別懷ニ萬恨ー。起坐爲レ不レ寧。何用敍ニ我心ー。遺思致ニ款誠ー。寶釵好レ耀レ首。明鏡可レ鑑レ形。芳香去ニ垢穢ー。素琴有ニ清聲ー。詩人感ニ木瓜ー。乃欲レ答ニ瑤瓊ー。媿彼贈レ我厚。慙此往物輕。雖レ知レ未レ足レ報。貴ニ用敍ニ我情ー。

清聲有り。詩人は木瓜に感ず、乃ち瑤瓊に答へんと欲す。媿づ彼の我に贈ること厚きを、慙づ此の往く物の輕きを。未だ報ずるに足らざるを知ると雖も、用て我が情を叙ぶるを貴ばん。

(一) 嚴重に車駕を整へて出發すとなり (二) 旅裝を整へ結束を了る (三) 不安無聊の心情を起す (四) 適にこの中情を送る (五) 詩經に我に投ずるに木瓜を以てす之に報ずるに瓊瑤を以てす云々とあるに據る (六) 予が贈遺する物品の輕少なるを恥づとなり

孔融

雜詩

遠送ニ新行客ー。歳暮乃來歸。入レ門望ニ愛子ー。

(一)遠く新行の客を送り、歳暮に乃ち來り歸る。門に入りて愛子を望むに、妻妾は人に向つて悲しむ。(二)子の見るべからざるを聞く、日已に光輝を潛めたり。孤墳は

少小羅㆓煢獨㆒。
既得㆑結㆓大義㆒。
歡樂苦㆑不㆑足。
念當㆓遠別離㆒。
思念敍㆓款曲㆒。
河廣無㆓舟梁㆒。
道近隔㆓丘陸㆒。
臨㆑路懷㆓惆悵㆒。
中㆑駕正躑躅。
浮雲起㆓高山㆒。
悲風激㆓深谷㆒。良馬不㆑廻㆑鞍。輕車不㆑轉㆑轂。鍼藥可㆓屢進㆒。愁思難㆑爲㆑數。貞士篤㆓終始㆒。恩義不㆑可㆑
促。

別離すべし、思念して款曲を叙せん。河廣けれども舟梁無く、道近けれども丘陸を隔つ。路に臨んで惆悵を懷ひ(四)、駕に中つて(五)正に躑躅す。浮雲は高山に起り、悲風は深谷に激す。良馬は鞍を廻さず、輕車は轂を轉ぜず。鍼藥(六)は屢〻進むべし、愁思は數〻爲し難し。貞士は終始を篤うす、恩義促にすべからず。

(一) 上帝に偏頗の事なく善行をなす者は天の祝福を享受す　(二) 孤影寂然として子立するなり　(三) 婚姻を結んで夫婦となる　(四) 心中萬端の感情　(五) 駕に上りながら躊躇逡巡す　(六) 藥石をとりて身の健康に資するなり。

肅肅僕夫征。
鏘鏘揚㆓和鈴㆒。
清晨當㆓引邁㆒。
束帶待㆓雞鳴㆒。
顧看㆓空房中㆒。
彷彿想㆓姿形㆒。

肅肅として僕夫征き、鏘鏘として和鈴を揚ぐ。清晨當に引き邁くべし、束帶(二)して鷄鳴(一)を待つ。顧みて空房の中を看て、彷彿として姿形を想ふ。一別して萬恨を懷き、起坐して寧からざるを爲す。何を用てか我が心を叙べん、遺思款誠(四)を致さん。寶釵は首(三)を耀すに好く、明鏡は形を鑑むべし。芳香は垢穢を去り、素琴に

嘉が上郡の掾たるとき、其妻徐淑は、疾に寢ねて家に返り、面り別るゝを獲ざりき。詩を贈ると爾云ふ。

人生譬二朝露一。
居レ世多二屯蹇一。
憂艱常早至。
歡會常苦晩。
念當二秦時役一。
去レ爾日遙遠。
遣レ車迎レ子還。
空往復空返。
省レ書情悽愴。
臨レ食不レ能レ飯。
獨坐二空房中一。
誰與相勸勉。長夜不レ能レ眠。伏レ枕獨展轉。憂來如二循環一。匪レ席不レ可レ卷。

人生は朝露に譬ふ、世に居るに屯蹇(一)多し。憂艱は常に早く至り、歡會は常に苦だ晩し。念ふ秦時(二)の役に當つて、爾を去ること日に遙遠なりき。車を遣りて子を迎へて還るに、空しく往いて復空(三)しく返る。書を省て情悽愴、食に臨んで飯ふ能はず。獨り空房の中に坐す、誰と與にか相勸勉せん。長夜眠る能はず、枕に伏して獨り展轉す。(四)憂の來るは循環の如し、席に匪ず卷くべからず。

(一) 困難災厄の事頻りに至るとなり (二) 秦始皇の時盛んに夫役を發せしに喩ふるなり (三) 迎への車も亦空しく歸り來れり (四) 一喜一憂環のはしなきが如しとなり下句は詩經によりて著けり

皇靈無二私親一。
爲レ善荷二天祿一。
傷哉與二爾身一。

(一)皇靈に私親無し、善を爲すもの天祿を荷ふ。傷ましい哉爾が身と、少少にして(二)煢獨に罹る。既に(三)大義を結ぶを得しも、歡樂に足らざるを苦しむ。念ふ當に遠く

振レ翼修二容形一。回顧生二碧色一。動搖揚二縹青一。幸脫二虞人機一。得レ親二君子庭一。馴レ心託二君素一。雌雄保二百齡一。

て、君子の庭に親しむを得たり。(五)心を馴らして君が素に託き、雌雄とも百齡を保たん。

(一)かはせみの類、羽の青色なる鳥 (二)庭の片隅 (三)淡青色を謂ふ (四)司獄官の武器を脫するを得となり (五)世網の厄を免れたれば安心して長く君に寄り恃まんとなり

琴歌

練二余心一兮浸二太清一。滌二穢濁一兮存二正靈一。和液暢兮神氣寧。情志泊兮心亭亭。嗜欲息兮無レ由レ生。踔二宇宙一而遺レ俗兮。眇翩翩而獨征。

余が心を練りて(一)太清に浸し、穢濁を滌いで(二)正靈を存す。(三)和液暢びて神氣寧く、情志泊りて心亭亭たり、嗜欲息んで生ずるに由無し。宇宙を踔えて俗を遺れ、(四)眇として翩翩として獨り征かん。

(一)心を清虛にす (二)中心の靈所を明白にす (三)身中に流るゝ血液も和柔なる義 (四)精神の縹緲として忘我の境地に入る義

秦嘉

郡に留りて婦に贈る詩

忽覺在二他鄉一。
他鄉各異レ縣。
展轉不レ可レ見。
枯桑知二天風一。
海水知二天寒一。
入レ門各自媚。
誰肯相爲言。
客從二遠方一來。
遺二我雙鯉魚一。
呼レ童烹二鯉魚一。
中有二尺素書一。
長跪讀二素書一。書中竟何如。上有レ加二餐食一。下有二長相憶一。

門に入つて各自ら媚ぶ、誰か肯て相爲に言はん。(六)客あり遠方より來り、我に(七)雙鯉魚を遺れり。童を呼んで鯉魚を烹るに、中に(八)尺素書有り。長跪して素書を讀む、書中竟に何如。(九)上には餐食を加へよと有り、下には長く相憶ふと有り。

(一) 河邊の草の萌え出でたるによりて遠行せる良人を思ふとなり (二) 昨夜に同じ (三) 煩悶して夜もおちおち眠れざる義 (四) 獨居して淒涼の意を感ずるに喩ふ (五) 來訪の客も同情少なからう感ぜらるゝとなり (六) 良人の使者 (七) 外封を結びて雙鯉の如くせる手紙ともいふ (八) 一尺程の白絹に書きたる手紙 (九) 文初に身體に注意して飲食せよと書けりとなり

(一)翠　鳥

庭阪有二若榴一。
綠葉含二丹榮一。
翠鳥時來集。

(二)庭阪に若榴有り、綠葉に丹榮を含めり。翠鳥時に來り集り、翼を振へて容形を修む。回顧すれば碧色を生じ、動搖すれば(三)縹青を揚ぐ。幸に(四)虞人の機を脫し

饉困悴。莫レ恤莫レ思。乃有二樊君一。作二人父母一。立二我畎畝一。黄潦膏凝。多レ稼茂止。惠乃無レ疆。如何勿レ喜。我壤既營。我疆斯成。泯泯我人。既富且盈。爲レ酒爲レ釀。烝二彼祖靈一。貽レ福惠レ君。壽考且寧。

潦に膏凝り、稼多くして茂止す。惠は乃ち疆無し、如何ぞ喜ぶ勿らん。我が壤既に營み、我が疆斯に成る。(九)泯泯たる我が人、既に富み且盈てり。酒を爲り釀を爲り、彼の祖靈に(一〇)烝す。福を貽りて君に惠む、(一一)壽考にして且つ寧かれ。

(一) 低平にして水に近き義 (二) 蜂尾の人を刺すごとく土氣の辛辣なる意 (三) 後漢熹帝の年號 (四) 瘠せたる干潟の如き土地 (五) 境界畦畔の井然として整頓せる義 (六) 溝などの小流 (七) 土地瘠せて農耕に適せざるなり (八) 混濁なりし濁り水 (九) 芒々たる義 (一〇) 祭祀の名 (一一) 樊氏の萬城を祈る意壽にして且つ健康なれとなり

青青河邊草。緜緜思二遠道一。遠道不レ可レ思。宿昔夢見レ之。夢見在二我傍一。

馬に長城の窟に飮ふ行

亦古辭にも作る。

(一)青青たり河邊の草、緜緜として遠道を思ふ。遠道は思ふべからず、(二)宿昔夢に之を見たり。夢に見しとき我が傍に在りしが、忽ち覺むるに他鄕に在り。他鄕は各縣を異にす、(三)展轉して見るべからず。(四)枯桑に天風を知り、海水に天寒を知る。

卷三

漢詩

蔡邕

樊惠渠の歌並序

陽陵縣の東、其の地は衍隩、(一)土氣辛螫なり。(二)嘉穀殖せずして、涇水長流せり。(三)光和五年、京兆の尹樊君、勸めて民の隱を恤へ、乃ち新渠を立つるに、曩の鹵田(四)は化して甘壤と爲りぬ。農民怡悅し、相與に謳ひ談る。(五)彊畔萋然として章を成し、之を樊惠渠と謂ふと云ふ。其歌に曰く、

我有二長流一。莫レ或レ閼レ之。我有二溝澮一。莫レ或レ遂レ之。田疇斥鹵。莫レ修莫レ釐。飢

我に長流有るも、之を閼ぐ或ること莫く、我に溝澮(六)有るも、之を遂するもの或ること莫し。(七)田疇斥鹵なるも、修むる莫く釐むる莫く、飢饉困悴するも、恤ふる莫く思ふもの莫し。乃ち樊君有りて、人の父母と作り、我が畎畝を立つるに、(八)黃

身西望涕霑レ裳。美人贈二我貂襜褕一。何以報レ之明月珠。路遠莫レ致倚踟蹰。何爲懷レ憂心煩紆。
我所レ思兮在二雁門一。欲二往從一レ之雪雰雰。側レ身北望涕霑レ巾。美人贈二我錦繡段一。何以報レ之青玉案。路遠莫レ致倚增レ歎。何爲懷レ憂心煩惋。

路遠くして致すこと莫く倚つて踟蹰す、何爲れぞ憂を懷いて心に煩紆する。

(一)古の岐周の地なり明君を戀慕する意　(二)天水、中の隴山の峻坂　(三)貂、皮にて作れる膝掛の類　(四)海中より採れる夜光の名珠

我が思ふ所は雁門(一)に在り、往いて之に從はんと欲するに雪雰雰(二)たり。身を側てて北望し涙は巾を霑す。美人我に錦繡段(三)を贈れり、何を以てか之に報いん青玉案(四)。路遠くして致すこと莫く倚つて歎きを增す、何爲れぞ憂を懷いて心に煩惋する。

(一)并州に在る郡名　(二)雪の亂れ降る貌　(三)錦繡もて飾りし織物　(四)青玉もて飾れる机なり

李尤

九曲歌

年歲晚暮時已斜。安得二力士一翻二日車一。

年歲晚暮時已に斜なり、安んぞ力士を得て日車(一)を翻さしめん。

(一)日既に西に在り誰か有力者をして之を中天に引返さしめたしとなり

翰。美人贈二我金錯刀一。何以報レ之英瓊瑤。路遠莫レ致倚逍遙。何爲懐レ憂心煩勞。

我所レ思兮在二桂林一。欲三往從レ之湘水深。側レ身南望涕霑レ襟。美人贈二我金琅玕一。何以報レ之雙玉盤。路遠莫レ致倚惆悵。何爲懐レ憂心煩傷。

我所レ思兮在二漢陽一。欲三往從レ之隴阪長。側レ

て東望し涕は翰を霑す。美人我に金錯刀(三)を贈れり、何を以てか之に報いん英(四)瓊瑤。路遠くして致すこと莫く倚つて(五)逍遙す、何爲れぞ憂を懐いて心に煩勞する。

(一) 五嶽の第一なり王に喩ふ (二) 泰山下の小山小人に喩ふ (三) 金めつきの柄ある刀なり貴位の義 (四) 一種の美玉なり (五) 物に凭れて中心に憂傷す

我が思ふ所は桂林(一)に在り、往いて之に從はんと欲するに湘水(二)深し。身を側てゝ南望し涕は襟を霑す。美人我に金琅玕(三)を贈れり、何を以てか之に報いん雙玉盤(四)。路遠くして致すこと莫く倚つて惆悵す、何爲れぞ憂を懐いて心に煩傷する。

(一) 南越の鬱林郡 (二) 揚子江の支流なり (三) 黄色の美石なり厚祿に喩ふ (四) 廣く衆言を兼ね聽くを玉盤に喩ふるなり

我が思ふ所は漢陽(一)に在り、往いて之に從はんと欲するに隴坂(二)長し。身を側てゝ西望し涕は裳を霑す。美人我に貂襜褕(三)を贈れり、何を以てか之に報いん明月珠(四)。

我所レ思兮在ニ
太山。欲ニ往從ヒ
之梁父艱。側レ
身東望涕霑レ

張衡

四愁詩

張衡久しく機密に處ることを樂しまず。(一)陽嘉中に、(二)出で丶河間の相と爲る。(三)時に國王驕奢にして、法度に遵はず。又豪右并兼の家多し。(四)衡車を下りて治するに威厳あり、能く屬縣の姦猾にして巧劫を行ふ者を内察し、(五)皆密に名を知り、吏に下して收捕し、盡く諸豪俠を服擒す。遊客悉く惶懼し、逃れて境を出で、郡中大いに治まる。爭訟息み、獄に繫囚無し。時に天下漸く弊え、鬱々として志を得ず。四愁詩を爲る。屈原に效ひ、(六)美人を以て君子と爲し、珍寶を以て仁義と爲し、水深雪雰を以て小人と爲し、道術を以て相報じ、時君に(七)貽らんことを思へども、而も讒邪の以て通ずるを得ざるを懼れき。其の辭に曰く、

(一)時に衡は太史令となりて文書を掌れり (二)順帝の年號 (三)河間惠王の相となる (四)權勢ある豪家にして小民の利を奪ふ者 (五)所屬縣内の惡漢を考察す (六)屈原の離騷賦にならふとなり (七)その時の君王なり即ち惠王を指す

我が思ふ所は(一)太山に在り、往いて之に從はんと欲するに(二)梁父艱なり。身を側

滔滔武溪一何深。鳥飛不レ度。獸不二敢臨一。嗟哉武溪。多二毒淫一。

嶽修レ貢兮川效レ珍。吐二金景一兮歆二浮雲一。寶鼎見兮色紛縕。煥其炳兮被二龍文一。登二祖廟一兮享二聖神一。昭二靈德一兮彌二億年一。

崔豹が古今注に、武溪深は、馬援が南征(一)の時の作なり。門生爰寄生は笛を善くす。援は歌を作つて以て之に和しき。

滔滔たる武溪一に何ぞ深き、鳥飛んで度らず、獸敢て臨まず。嗟哉武溪、毒淫(二)多し。(三)

(一) 南方交趾方面を征せし事を指す (二) 盛んに流るゝ溪流 (三) 瘴煙毒霧多しとなり

班固

寶鼎詩(一)

東都詩賦の一なり。

嶽は貢を修め川を珍を效し、(二)金景を吐き浮雲を歆く。寶鼎(三)見れて色紛縕たり、煥として其れ炳いて龍文を被たり。祖廟(四)に登せて聖神に享し、靈德を昭にして億年を彌らん。

(一) 文選第一卷に見えたる東都賦中の一詩なり (二) 大嶽も献呈し江河も珍寶を出す (三) 漢書に武帝后土を祠りて寶鼎を得たる記事あり (四) 東觀漢記に鼎を廟に陳して器用に備へたる旨見ゆ

隕ㇾ霜。懷二君子一兮渺難ㇾ望。感二予心一兮多二慨慷一。

陟二彼北芒一兮。噫。顧二瞻帝京一兮。噫。宮闕崔巍兮。噫。臣之劬勞兮。噫。遼遼未ㇾ央兮。噫。

て慨慷すること多し。

㊀ 秋に及んで懷ふ所多けれども良人は遙なる遠方に在りとなり

梁鴻

五噫の歌

後漢書に、鴻は東して關を出で、京師を過りて五噫の歌を作る。肅宗聞いて之を悲しみ、鴻を求めしも得ざりき。

彼の(二)北芒に陟り、噫、帝京を顧瞻す、噫、(三)宮闕崔巍たり、噫、(四)臣の劬勞せる、噫、遼遼として未だ央きず、噫。

㊀ 肅宗頃の逸民にして妻と共に世を遁れ去りし人　㊁ 山名なり　㊂ 宮城の廣大なる意　㊃ 人民の勞役に服せる者はいつ終るとも覺えずと歎息するなり

馬援

武溪深行

新裂二齊紈素一。
皎潔如二霜雪一。
裁成二合歡扇一。
團團似二明月一。
出二入君懷袖一。
動搖微風發。
常恐三秋節至。
涼飈奪二炎熱一。
棄二捐篋笥中一。
恩情中道絕。

涼風起兮天

婕妤は初め孝成の(一)寵する所と爲りしが、其後に趙氏(二)日に盛なるや、婕妤は久しうして危くせられんことを恐れ、(三)供養を太后の長信宮に求め、紈扇の詩を作りて以て自ら悼みき。

新に齊(四)の紈素を裂くに、皎潔にして霜雪の如し。裁つて合歡(五)の扇と成せば、團團として明月に似たり。君が懷袖に出入し、動搖すれば微風發る。常に秋節の至りて、涼飈(六)の炎熱を奪はんことを恐る。篋笥の中に棄捐せられて、恩情中道に絕えん。(七)

㊀漢の孝成帝　㊁趙の飛燕なり　㊂長信宮にて太后に奉仕する意　㊃齊は良絹の產地なり紈素は白絹　㊄兩面より張り合せたる扇　㊅涼風至れば炎熱去りて扇は箱の中に棄て去らるとなり　㊆寵を失ふことを恐る

趙飛燕

歸風送遠操

西京雜記に、趙后に寶琴有り、鳳凰と名づく。亦善く歸風送遠操を爲すと。

涼風起つて天は霜を隕す、君子を懷ふに(一)渺として望み難し。予が心を感ぜしめ

秋木萋萋。其葉萋黃。有レ鳥處レ山。集二于苞桑一。養二育毛羽一。形容生レ光。既得レ升レ雲。上遊二曲房一。離宮絶曠。身體摧藏。志念抑沈。不レ得二頡頏一。雖レ得二委食一。心有二徊徨一。我獨伊何。來往變レ常。翩翩之燕。遠集二西羌一。高山峩峩。河水泱泱。父兮母兮。道里悠長。嗚呼哀哉。憂心惻傷。

此は將に匈奴に入らんとせし時に作りし所なり。

秋木萋萋として、其の葉(一)萋黃す。鳥有り山に處り、苞桑(二)に集る。毛羽を養育して形容光を生ず。既に雲に升る(三)を得て、上のかた曲房(四)に遊ぶ。離宮絶だ曠くして、身體摧藏し、志念抑沈して、頡頏(五)するを得ず。委食(六)を得と雖も、心に徊徨する有り。我獨り伊れ何ぞ、來往(七)常を變ずる。翩翩たる燕、遠く西羌(八)に集る。高山峩峩たり、河水泱泱たり。父や母や、道里悠長なり。嗚呼哀しい哉、憂心惻み傷む。

(一) 木葉萎みて黃落す　(二) 叢生せる桑樹　(三) 昭君が長成して宮中に入れるを謂ふ　(四) 屈曲し迂迴たる宮殿　(五) 宮殿廣く衆鳥多く之と抗して飛ぶ能はずとなり　(六) 俸祿の義　(七) 獨り胡に嫁するを歎くなり　(八) 匈奴を指し言ふ

班婕妤

怨歌行

兮折ニ芰荷ー。涼風淒淒揚ニ棹歌ー。雲光開レ曙月低レ河。萬歲爲レ樂豈云レ多。

(三)雲光曙を開いて月河に低る。(四)萬歲樂を爲すとも豈多しと云はんや。

(一)秋日に林池の中に泛ぶ　(二)芰や蓮など　(三)雲は將に曙の色を呈せんとす　(四)人生は行樂のみ行樂は一生にても猶不足を覺ゆとなり

楊惲

(一)缶を拊つ歌

田ニ彼南山ー。蕪穢不レ治。種ニ一頃豆ー。落而爲レ箕。人生行樂耳。須ニ富貴ー何時。

詳に漢書の、(二)惲が孫會宗に答へし書に見えたり。

彼の南山に田つくるに、(三)蕪穢にして治らず。一頃の豆を種うるに、落ちて(四)箕と爲る。(五)人生は行樂のみ、富貴を須つとも何の時ぞや。

(一)一種の燒物なり秦人はよく之を擊つて歌へり　(二)文選にも出でたり　(三)南山の田は荒廢して耕作するに困難なり　(四)豆を作りしに却つて豆莖のみとなれり　(五)人生志を失ふこと多し行樂せんには如かじとなり

王昭君

怨詩

兮。固知國中之無人。

華容夫人

歌

髮紛紛兮寘渠。骨籍籍兮亡居。母求死子兮。妻求死夫。裴回兩渠間兮。君子將安居。

髮紛紛として渠に寘み、骨籍籍として居亡し。母は死子を求め、妻は死夫を求め、兩渠の間に裴徊す。君子將安んか居らん。

㊀衞長公主に同じ　㊁王旦の弟に當る　㊂主人なき城　㊃縱橫せる邑中の道路

㊀毛髮亂れて溝渠を埋め骸骨散亂して收むべき處無し　㊁遺髮遺骸の散亂せる溝渠のほとり

昭帝

淋池の歌

秋素景兮泛洪波。揮纖手

拾遺記に、時に淋池の中を穿つて芰荷を植う。帝時に水嬉に命じ、景を畢して歸ることを忘る。宮人をして歌はしめて曰く、

秋の素景に洪波に泛び、纖手を揮うて芰荷を折る。涼風淒淒として棹歌を揚げ、

北方有二佳人一。
絶レ世而獨立。
一顧傾二人城一。
再顧傾二人國一。
寧不レ知二傾城
與一傾國。佳人
難二再得一。

(一)北方に佳人有り、世に絶れて獨立す。一顧すれば人の城を傾け、再顧すれば人の國を傾く。(二)寧ぞ傾城と傾國とを知らざらんや、佳人は再び得難し。

(一) 帝の姉平陽公主 (二) 延年の家は中山に在り故に北方と言ふ (三) 傾城傾國の患あれども、美人は得難きものなれば、時に及んで之を得るに如かずとの意

燕刺王旦

漢書に、旦自ら武帝の子にして、且つ長たるに、立つことを得ざるを以て、乃ち姉の(一)蓋長公主、左將軍上官桀と交通して、廢立を謀る。事覺はる。(二)昭帝使者をして璽書を賜はしむ。王は綬を以て自ら夫人を絞る。旦に隨つて自殺せし者二十餘人ありき。

歌

歸二空城一兮。狗
不レ吠。雞不レ鳴。
横術何廣廣

(三)空城に歸るに、狗吠えず、雞鳴かず。(四)横術何ぞ廣廣たる、固に國中の人無きを知る。

還らしむ。李陵は置酒して武を賀し、因り起舞して歌ひ、泣下ること數行なり。遂に武と決れぬ。

> 徑二萬里一兮度二沙漠一。爲二君將一兮奮二匈奴一。路窮絶兮矢刀摧。士衆滅兮名已隤。老母已死。雖レ欲レ報恩將安歸。

萬里を徑りて沙漠を度り、(一)君が將と爲りて匈奴に奮ふ。路窮り絶えて矢刀摧け、士衆滅びて名已に隤る。(二)老母は已に死せり、恩に報いんと欲すと雖も將安んか歸らん。

(一) 漢主の一將軍として匈奴の域に轉戰せしが刀折れ矢盡きて遂に匈奴に降れりとなす　(二) 陵が匈奴に降るや漢は怒りて陵の母を殺せり

李延年

歌一首

漢書に、李延年は性音律を知り、歌舞を善くす。武帝之を愛す。延年起舞して歌ふこと云云。上歎息して曰く、世豈此の人有らんやと。(一)平陽主は因りて言ふ、延年に女弟有りと。上召して之を見るに、妙麗にして善く舞ふ。是に由りて幸を得たり。

念レ子悵悠悠。
遠望悲風至。
對レ酒不レ能レ酬。
行人懷二往路一。
何以慰二我愁一。
獨有二盈レ觴酒一。
與レ子結二綢繆一。

攜レ手上二河梁一。
遊子暮何之。
徘二徊蹊路側一。
悢悢不レ能レ辭。
行人難二久留一。
各言二長相思一。
安知非二日月一。
弦望自有レ時。
努力崇二明德一。
皓首以爲レ期。

を懷ふ、何を以てか我が愁を慰めん。獨り觴に盈つるの酒有り、子と綢繆を結ばん。(三)

㊀ 一日千秋の意　㊁ 諸說あれども冠の長き紐の淚に汚れたるを洗ふなるべし　㊂ 君と離別に臨んで益々交情を厚うせんとなり

手を攜へて河梁(一)に上る、遊子暮に何んか之く。蹊路(二)の側に徘徊して、悢悢(三)として辭する能はず。行人久しく留り難く、各長く相思ふを言ふ。安ぞ知らん日月に非ざるも、弦望(四)自ら時有ることを。努力して明德を崇くし、皓首(五)以て期と爲さん。

㊀ 黃河の橋上　㊁ 徑路に同じ　㊂ 悲傷する貌　㊃ 日月の弦望に一定時あるが如く人の離合にも亦定まる時あらん　㊄ 白頭に及ぶとも必ず再會を期せんとなり

別歌

漢書に、昭帝の位に卽くや、匈奴と漢と和親す、漢使蘇武等を求むるに、單于は武を許し

良時不再至。
離別在須臾。
屏營衢路側。
執手野踟躕。
仰視浮雲馳。
奄忽互相踰。
風波一失所。
各在天一隅。
長當從此別。
且復立斯須。
欲因晨風發
送子以賤軀。

李陵

蘇武に與ふる詩三首

(一)良時は再び至らず、離別は須臾に在り。(二)衢路の側に屏營して、手を執つて野に踟躕す。仰いで浮雲の馳するを視るに、(三)奄忽として互に相踰ゆ。風波一たび所を失へば、各天の一隅に在り。長く當に此より別るべし、且らく復立つこと斯須す。(四)晨風の發するに因りて、(五)子を送るに賤軀を以てせんと欲す。

(一)好き機會は再びすること能はず　(二)町の片隅に恐懼す　(三)忽然といふに同じ　(四)鸇の一種はやぶさなり　(五)李陵自ら見送りをなすとなり

嘉會難再遇。
三載爲千秋。
臨河濯長纓。

嘉會は再び遇ひ難し、三載も千秋と爲る。河に臨んで長纓を濯ひ、子を念うて悵として悠悠たり。(一)遠望するに悲風至り、酒に對して(二)酬いる能はず。行人往路

慷慨有ニ餘哀一。
長歌正激烈。
中心愴以摧。
欲レ展ニ清商曲一。
念ニ子不レ能レ歸。俛仰內傷レ心。淚下不レ可レ揮。願爲雙黃鵠。送レ子俱遠飛。

㈠胡馬の群を離るゝに假りて是迄何奴に相親しみし李陵と相別るゝの悲を言ふ　㈡樂器を取りて悲歌を發し聊か自から慰むとなり　㈢淸商悲痛の曲を彈ぜんとして君を想ひ同情して彈を止むとなり　㈣李陵の漢に歸るを得んことを熱望するなり

燭燭晨明月。
馥馥秋蘭芳。
芬馨良夜發。
隨レ風聞ニ我堂一。
征夫懷ニ遠路一。
遊子戀ニ故鄉一。
寒冬十二月。
晨起踐ニ嚴霜一。
俯觀ニ江漢流一。
仰視ニ浮雲翔一。
良友遠別離。
各在ニ天一方一。
山海隔ニ中州一。
相去悠且長。嘉會難ニ再遇一。歡樂殊未レ央。願君崇ニ令德一。隨レ時愛ニ景光一。

㈠燭燭たり晨の明月、馥馥として秋蘭芳し。㈡芬馨良夜に發し、風に隨つて我が堂に聞ゆ。征夫は遠路を懷ひ、遊子は故鄉を戀ふ。寒冬十二月、晨に起つて嚴霜を踐む。俯して江漢の㈢流を觀 仰いで浮雲の翔るを視る。㈣良友遠く別離し、各〻天の一方に在り。山海中州を隔て、相去ること悠にして且長し。嘉會は再び遇ひ難く、歡樂は殊に未だ央きず。㈤願くは君令德を崇うし、時に隨つて景光を愛せよ。

㈠光明の貌　㈡芳香に同じ　㈢流水といふ程の意　㈣今はこの良朋友と相別離す　㈤君の功德を高くして光陰を惜んで早く來歸すべしとなり

起視㆓夜何其㆒
參辰皆已沒。
去去從ㇾ此辭。
行役在㆓戰場㆒。
相見未ㇾ有ㇾ期。
握ㇾ手一長歎。
淚爲㆓生別㆒滋。
努力愛㆓春華㆒。莫ㇾ忘㆓歡樂時㆒。生當㆓復來歸㆒。死當㆓長相思㆒。

一たび長歎し、淚は生別の爲に滋し。(五)努力して春華を愛し、歡樂の時を忘ること莫れ。生きては當に復來歸すべし、死しては當に長く相思ふべし。

(一) 男二十女十五にして成人となるを謂ふ (二) 安詳恭順の貌 (三) 行人なり蘇武自ら言ふ (四) 使命を奉じて遠行する意 (五) 勉めて容色を愛惜すべしとなり

黃鵠一遠別。
千里顧徘徊。
胡馬失㆓其羣㆒。
思心常依依。
何況雙飛龍。
羽翼臨ㇾ當ㇾ乖。
幸有㆓絃歌曲㆒。
可㆔以喩㆓中懷㆒。
請爲㆓遊子吟㆒。
泠泠一何悲。
絲竹厲㆓淸聲㆒。

黃鵠一たび遠く別れ、千里にして顧つて徘徊す。(一)胡馬其の羣を失ひ、思心常に依依たり。何ぞ況んや雙飛の龍、羽翼當に乖くべきに臨むをや。幸に(二)絃歌の曲有り、以て中懷に喩ふべし。請ふ遊子の吟を爲さんに、泠泠として一に何ぞ悲しき。絲竹は淸聲を厲くし、慷慨して餘哀有り。長歌正に激烈、中心愴として以て摧く。(三)淸商の曲を展べんと欲し、子が歸る能はざるを念ふ。俛仰して內に心を傷め、淚下ちて揮ふべからず。(四)願はくは雙黃鵠と爲り、子を送つて俱に遠く飛ばん。

骨肉緣二枝葉一。結交亦相因。四海皆兄弟。誰爲二行路人一。況我連枝樹。與レ子同一身。昔爲二鴛與一レ鴦。今爲二參與一レ辰。昔者長相近。邈若二胡與一レ秦。惟念當二乖離一。恩情日以新。鹿鳴思二野草一。可三以喩二嘉賓一。我有二一罇酒一。欲三以贈二遠人一。願子留斟酌。敍二此平生親一。

(二)骨肉枝葉に緣り、結交亦相因る。四海皆兄弟、誰か行路の人と爲ん。況んや我連枝の樹、子と同一身なるをや。昔は(三)鴛と鴦と爲り、今は參と辰と爲る。昔は長く相近づき、邈として(四)胡と秦との若し。惟念ふ乖離に當りて、恩情日に以て新なるを。(五)鹿鳴いて野草を思ふ、以て嘉賓に喩ふべし。我に一罇の酒有り、以て(六)遠人に贈らんと欲す。願はくは子留りて斟酌し、此の平生の親を敍せよ。

(一) 明萬曆頃の人名は惺子は伯敬 (二) 兄弟は同根の枝葉たり朋友すら行路人とせず況んや同根生の兄弟をや (三) 鴛鴦の如く親密なりし者が今日は東西相隔つるが如く相離れたり (四) 相隔つるを形容す (五) 詩經小雅鹿鳴の篇を參照すべし (六) 相別るゝ兄弟を指す

結髮爲二夫妻一。恩愛兩不レ疑。歡娛在二今夕一。燕婉及二良時一。征夫懷二遠路一。

(一)結髮より夫妻と爲り、恩愛兩つながら疑はず。歡娛は今夕に在り、(二)燕婉良時に及ぶ。(三)征夫は往路を懷ひ、起つて夜の何其を視る。參辰皆已に沒しぬ、去り去つて此より辭せん。(四)行役して戰場に在り、相見んこと未だ期有らず。手を握りて

故來相決絕。
今日斗酒會。
明旦溝水頭。
躞二蹀御溝上一。
溝水東西流。
凄凄復凄凄。
嫁娶不レ須レ啼。
願得二一心人一。
白頭不二相離一。
竹竿何嫋嫋。
魚尾何簁簁。
男兒重二意氣一。
何用二錢刀一爲。

ば、溝水は東西に流る。凄凄として復凄凄、(五)嫁娶に啼くを須ひず。願はくは一心の人を得て、白頭まで相離れざらん。(六)竹竿何ぞ嫋嫋たる、魚尾何ぞ簁簁たる。男兒意氣を重んず、何ぞ錢刀を用ひることを爲ん。

(一) 雪の消え易く月の虧り易きが如く君も亦心變りせしに似たり (二) 交際を絕ち去らんとす (三) 今日相歡好せるも明日は溝水の邊に彷徨するならん (四) 行步の貌 (五) 嫁入の時啼泣する要なしたゞ終始一貫の愛を注ぐ人を求めんのみとなり (六) 釣竿の長く弱々しきに魚は芳餌を貪つて動くが如く君の心は利慾の爲に動けりとなり

蘇武

蘇、李の詩は一唱三歎、感寤具に存す。急言竭論する無くして意自ら長く言自ら遠し。

云々

詩四首

首章は兄弟に別れ、次章は妻に別れ、三四章は友に別る。皆李陵に別るゝには非ざるなり。(一)鍾竟陵が俱解に、陵に別るゝに作れるは、未だ必ずしも然らざらん。

于舜。虞氏以
興。濯濯之麟。
游彼靈畤。孟
冬十月。君徂
郊祀。馳我君
輿。帝用享祉。三代之前。蓋未嘗有。宛宛黃龍。興德而升。采色炫燿。熿炳煇煌。正陽顯見。覺
悟黎蒸。於傳載之。云受命所乘。厥之有章。不必諄諄。依類託寓。諭以封巒。

づれより來りしかを知らず多分天の下せる瑞徵ならんとなり〔一一〕虞舜の時にもこの祥瑞ありき〔一二〕樂しみ遊べる貌〔一三〕盛德に感ずる意〔一四〕輝き光ある貌〔一五〕神龍の明瞭に現出する意〔一六〕天命を受けて天子たるべき君子の乘用となる〔一七〕その章徵あることは諄々として說くを用ひずとなり

卓文君

白頭吟

皚如山上雪。
皎若雲間月。
聞君有兩意。

西京雜記に、相如將に茂陵の女を聘して妾と爲さんとす。文君白頭吟を作つて以て自ら絕つ、相如乃ち止むと。

皚たること山上の雪の如く、皎たること雲間の月の如し。〔一〕君に兩意有るを聞いて、故に來りて相決絕す。〔二〕今日斗酒の會、明旦溝水の頭。〔三〕御溝の上に蹀躞すれ〔四〕

遊。滋液滲漉。何生不育。嘉穀六穗。我穡曷蓄。非惟雨之。又潤澤之。非惟徧之我。氾布濩之。萬物熙熙。懷而慕思。名山顯位。望君之來。君乎君乎。侯不邁哉。般般之獸。樂我君囿。白質黑章。其儀可嘉。旼旼穆穆。君子之能。蓋聞其聲。今觀其來。厥塗靡蹤。天瑞之徵。玆亦

を雨すのみに非ず、又之を潤澤す。惟之を我に徧くするのみに非ず、(五)氾く之を布濩す。萬物熙熙として、懷うて慕思し、(六)名山顯位、君の來るを望む。君か君か、侯ぞ邁かざらんや、(七)般般の獸は、我が君の囿を樂しみ、白質黑章、其儀嘉すべし。(八)旼旼穆穆として、君子の(九)能あり。蓋し其聲を聞き、今は其來るを觀る。(一〇)厥の塗は蹤無く、天瑞之れ徵あり。(一一)玆に亦舜に于てし、虞氏以て興れり。(一二)濯濯の麟は、彼の靈畤に游ぶ。孟冬十月、君徂いて郊祀す。我が君の輿を馳せ、帝用て享け祉す。三代の前、蓋し未だ嘗て有らず。宛宛たる黃龍、(一三)德に興つて升り、采色炫燿して、(一四)熿炳輝煌たり。(一五)正陽顯見して、黎蒸を覺悟す。傳に於て之を載せ、(一六)受命の乘る所なりと云ふ。(一七)厥の章有るや、必ずしも諄諄たらず、類に依り託し寓して、諭すに巒を封ぜんことを以てす。

(一) 司馬相如の字なり　(二) 上天の恩澤を垂るゝ義帝德に喩ふ　(三) うるほしひたし滲みこます　(四) めでたき穀物の一莖に六穗あるものを生ず　(五) 普く之を布き施し流散せしむ　(六) 泰山の如く有名なる山嶽　(七) 斑紋ある義般を斑に通ぜしなり　(八) 和平にして緝睦せる貌　(九) 一本能を態に作る從ふべし　(一〇) 天子の囿なる靈獸はい

吾家嫁レ我兮
天一方。遠託二
異國兮烏孫
王一。穹廬爲レ室
兮氈爲レ墻。以レ
肉爲レ食兮酪
爲レ漿。居常土
思兮心内傷。
願爲二黄鵠一兮
歸二故鄕一。

吾が家我を嫁せしむ天の一方、遠く異國の烏孫王に託す。(二)穹廬室を爲し氈を墻と爲し、肉を以て食と爲し酪を漿と爲す。居常に(三)土を思うて心内に傷む、願はくは(四)黄鵠と爲りて故鄕に歸らん。

(一) 漢の武帝の年號 (二) 天幕を張りて家と爲し毛布を以て墻となす (三) 故鄕を思慕す (四) 一擧に千里を飛ぶ白鳥なり嘴根黄赤故に黄鵠と曰ふ

司馬相如

封禪頌

史記に、長卿病むこと甚し、武帝は所忠をして、往いて其書を求めしむ。至るに及んで已に(一)卒せり。其妻曰く、長卿未だ死せざりし時、一巻の書を爲つて曰く、使有りて來つて書を求めば之を奏せよと。其の遺札には封禪の事を言へり。所忠焉を奏しぬ。

自二我天覆一。雲
之油油。甘露
時雨。厥壤可レ

(二)我が天の覆ひしより、雲の油油たる、甘露時に雨り、厥の壤遊ぶべし。(三)滋液滲漉して、何の生か育たざらん。(四)嘉穀に六穗あり、我穡して曷をか蓄はん。惟之

倘ニ于中一。優哉游哉。於レ道相從。首陽爲レ拙。柳下爲レ工。飽食安步。以レ仕代レ農。依レ隱翫レ世。詭レ時不レ逢。才盡身危。好レ名得レ華。有ニ羣累生一。孤貴失レ和。遺餘不レ匱。自盡無レ多。聖人之道。一龍一蛇。形見神藏。與レ物變化。隨ニ時之宜一。無レ有ニ常家一。

陽を拙と爲し、柳下を工と爲す。飽食安步、仕を以て農に代へ、(四)隱に依り世を翫び、時を詭いて逢はず。才盡くれば身危く、名を好めば華を得、羣累の生ずる有り。(五)孤貴なれば和を失ふ。遺餘匱しからず、自ら盡すこと多き無し。聖人の道、(六)一は龍一は蛇。形見はれ神藏し、物と變化し、時の宜に隨つて、(七)常の家有ること無れ。

(一)東方朔が賛誥　(二)兩極端に走らしむることを尙ぶ　(三)首陽山に蕨を折りし伯夷叔齊は世渡に拙にして和して光を包みし柳下惠は巧なりとなり　(四)隱居して世を冷眼視するなり　(五)吾一人のみ富貴なる場合　(六)或時には龍となり或時には蛇となるべし　(七)一定の主義思想などを指す

烏孫公主

悲愁歌

漢書西域傳に、(一)元封中に江都王建の女細君を遣りて公主と爲し、以て烏孫の昆莫に妻はす。昆莫年老いて言語通ぜず。公主悲しんで乃ち自ら歌を作りき。

嗟嗟我王。曷不二斯思一。匪レ思匪レ監。嗣二其罔一レ則。彌二彌其逐一。岌二岌其國一。致レ冰匪レ霜。致レ墜匪レ慢。澹二惟我王一。時靡レ不レ練。興レ國救レ顛。孰違レ悔レ過。追二思黃髮一。秦穆以覇。歲月其徂。年其逮レ耇。於赫君子。庶レ顯二于後一。我王如何。曾不二斯覽一。黃髮不レ近。胡不二時鑒一。

明者處レ世。莫レ

靡らんや。國を興し顚を救ふは、(七)孰か過を悔ゆるに違はん。(八)黃髮を追思して秦穆は以て霸たりき。歲月其れ徂き、年其れ耇に逮ばん。(九)於赫たる君子、後に顯はれんことを庶ふ。我が王如何ぞ、(一〇)曾ち斯を覽ざるぞ。黃髮近づけず、胡ぞ時を鑒みざる。

(一) 朝夕に戒愼勉强して好き聲譽を得べしとなり (二) 儀容の愼しめるなり (三) 朝憲延法を履行す (四) 今の故轍を顧み改めざるなり (五) 稍々に同じ少しく進む義 (六) 霜を履んで堅氷に至る意 (七) 顚倒敗亡の意 (八) 書經秦誓に茲の黃髮に詢はゞ云々とあり (九) 老に同じ (一〇) 諸君子の希望する所と相背叛するを指言するなり

東方朔

子を誡むる詩

漢書に、前一句を取りて、(一)東方が贊と爲せり。

明者の世に處る、(二)中に尙ふるは莫し。優なる哉游なる哉、道に於て相從はん。(三)首

陪臣。斯惟皇士。如何我王。不レ思レ守保一。不レ惟三履レ冰。以繼二祖考一。邦事是廢。逸遊是娛。犬馬悠悠。是放是驅。務二此鳥獸一。忽二此稼苗一。蒸民以匱。我王以媮。所レ弘匪レ德。所レ親匪レ俊。唯囿是恢。唯諛是信。睮睮諂夫。諤諤黃髮。如何我王。曾不二是察一。既藐二下臣一。追レ欲縱レ逸。嫚二彼顯祖一。輕二此削黜一。

此の削黜を輕んず。

(一)上天の主宰者は秦の暴政をよろこばずとなり　(二)漢氏に帝京を與ふ　(三)元王交を指す　(四)韋孟自ら謂ふ　(五)戒愼の貌　(六)盛大なる德澤を後世に殘す　(七)以下王戊が統を承け前代より存せる忠良の士臣を用ふべきを謂ふ　(八)遺法を守り保つこと　(九)戰々兢々として愼戒する意　(一〇)犬を放ち馬を驅る　(一一)農耕の事を忽諸にす　(一二)園囿を廣大にす　(一三)媚びつく貌　(一四)正言する老臣　(一五)大いなる榮譽ある祖先を輕蔑して土地を削られ祿を減ぜらるゝを輕視す

嗟嗟我王。漢之睦親。曾不三夙夜。以休二令聞一。穆穆天子。照二臨下土一。明明羣司。執レ憲靡レ顧。正レ遐由レ近。殆其茲怙。

嗟嗟我が王は、漢の睦親なり。曾ち夙夜に、以て令聞を休くせざらんや。(一)穆穆たる天子、下土を照臨し、明明たる羣司、(二)憲を執つて顧る靡し。遐を正すは近きに由りす、殆いかな其れ茲を怙むこと。嗟嗟我が王、曷ぞ斯を思はざる。思はず鑒みず、其の則無きを嗣がば、其の逸を彌彌にして、(三)其の國を岌岌にせん。(四)冰を致すは霜に匪ずや。墜を致すは嫚に匪ずや。(五)惟我が王を贈るに、時を練はざる

城。在二予小子一。勤二唉厥生一。阨二此嫚秦一。耒耜斯耕。

悠悠嫚秦。上天不寧。乃眷南顧。授二漢于京一。於赫有漢。四方是征。靡二適不一懷。萬國攸平。乃命二厥弟一。建二侯于楚一。俾下我小臣一。惟傳是輔上。矜矜元王。恭儉靜一。惠二此黎民一。納二彼輔弼一。享國漸世。垂二烈于後一。迺及二夷王一。克奉二厥緒一。咨命不永。惟王統祀。左右

悠悠たる嫚秦は、(一)上天寧しとせず。乃ち眷みて南顧し、(二)漢に京に授く。於赫たる有漢、四方是征するに、適くとして懷かざる靡く、萬國攸て平かなり。乃ち(三)厥の弟に命じ、建てて楚に侯とし、(四)我小臣をして、惟傅とし是輔けしむ。(五)矜矜たる元王、恭儉靜一なり。此の黎民を惠み、彼の輔弼を納れ、國を享け世を漸して、(六)烈を後に垂る。迺ち夷王に及んで、克く厥の緒を奉ず。咨命や永からず、(七)惟王統祀し、左右陪臣、斯れ惟皇士なり。如何ぞ我が王、(八)守保を思はざるぞ。(九)冰を履んで、以て祖考に繼がんことを惟はず、邦事を是廢し、逸遊を是娛しみ、犬馬悠悠として、是放ち是驅る。(一〇)此の鳥獸を務めて、此の(一一)稼苗を忽にし、蒸民は以て匱しく、我が王は以て媮しむ。弘むる所は德に匪ず、親しむ所は俊に匪ず。(一二)唯囿を是恢にし、唯諛を是信ず。(一三)睮睮たる諂夫、(一四)諤諤たる黃髮、如何ぞ我が王、曾ち是を察せざる。既に下臣を藐んじ、欲を追ひ逸を縱にし、彼の(一五)顯祖を嫚り、

肅肅我祖。國自二豕韋一。黼衣朱紱。四牡龍旂。彤弓斯征。撫二寧遐荒一。總二齊羣邦一。以翼二大商一。迭二彼大彭一。勳績維光。至二于有周一。歷世會同。王赧聽レ譖。實絕二我邦一。我邦既絕。厥政斯逸。賞罰之行。非レ繇二王室一。庶尹羣后。靡レ扶靡レ衛。五服崩離。宗周以墜。我祖斯微。遷二于彭

はず。詩を作つて諷諫して曰く、

(二)肅肅たる我が祖、國すること豕韋(三)よりす。黼衣(四)朱紱、四牡(五)龍旂、彤弓(六)斯に征き、遐荒を撫寧す。羣邦を總齊して、以て大商(七)を翼く。彼の大彭(八)に迭り、勳績維光る。有周に至りて、歷世會同(九)するに、王赧(一〇)は譖に聽き、實に我が邦を絕ちぬ。我が邦既に絕え、厥の政斯に逸す。賞罰の行はるゝは、王室に繇るに非ず。庶尹羣后、扶る靡く衛る靡し。五服(一一)崩離して、宗周以て墜つ。我が祖斯に微にして、彭城に遷り、予少子に在りては、厥の生を勤喉(一二)す。此の嫚秦(一三)に阸せられ、耒耜もて斯に耕す。

(一) 漢高祖の弟なり名は交　(二) 敬愼の貌　(三) 韋孟が遠祖は豕韋氏なり　(四) 白と黑とにて斧を畫ける衣と赤と黑にて亞字を畫ける衣と　(五) 四頭立の馬車と交龍を描きし旗と　(六) 朱塗の弓を賜りて荒遠の地を征す　(七) 豕韋氏は殷の伯たりしなり　(八) 大彭氏も亦商伯たりき　(九) 代々に會盟に關與す　(一〇) 周王赧は東西周を分ちし人　(一一) 帝京附近より順次畿甸綏要荒の五域を定め之を五服とす　(一二) 歎息しつゝ勤勞す　(一三) 暴慢なる秦氏の禍難に遭ふ

虚房冷而寂寞。落葉依二于重扃一。望二彼美之女一兮。安得レ感二余心之未一レ寧。

なる女を望めども、安んぞ余が心の未だ寧からざるを感ぜしむるを得んや。[五]

(一)前出せり　(二)女の樂人　(三)うす絹の袂ひるがへる　(四)堅く鎖せる門戸に落葉の降りかゝれるなり　(五)感傷して安からざるなり

蒲梢天馬の歌

天馬徠兮従レ西。極二經萬里一。兮歸二有德一。承二靈威一兮降二外國一。渉二流沙一兮四夷服。

史記に、武帝の大宛[一]を伐つや、千里の馬を得て、蒲梢と名づけ、此の歌を作る。

天馬徠[二]ること西よりす、萬里を極め經りて有德[三]に歸す。靈威を承んで外國より降り、流沙[四]を渉りて四夷服す。

(一)西域の一國名なり今は露西亞に屬す　(二)來の古字　(三)有德高祖の君王　(四)沙漠の古名なり

韋孟

諷諫の詩

漢書に、孟[一]は元王の傅と爲り、子の夷王に傳へ、孫王戊に及ぶ。戊は荒淫にして遂に遵

羅袂兮無聲。
玉墀兮塵生。

(一七)妃女の脣を齧むに甘きこと飴の如し（郭舍人）
(一八)迫窘詰屈幾ど窮する哉（東方朔）

(一) 地方郡守の祿は二千石なり故にいふ (二) 副車を準備し四頭立の馬に乘る (三) 禁衞軍を謂ふ (四) 文筆を執る官吏を制馭す (五) 天子の一族緣者 (六) 警護の者の劍戟を着くるは不虞に備へんが爲なり (七) 一同總べ集りて漢帝に服從す (八) 公平淸廉もて罪疑を決斷す (九) 差別をつけ等級をわかつ (一〇) 古くなれる穀物 (一一) 禁衞の地を巡察するを謂ふ (一二) 漢代に京兆左馮翊右扶風を以て三輔と稱せり今の陝西の地なり (一三) 外戚と内親王家 (一四) 皇后の宮殿をいふ (一五) はしらたるきつかばしらの類皆建築用材 (一六) 門外の塀の稱なれどもこゝは罹網の義に用ひたる也 (一七) 美女妖婦の毒舌を謂ふなり (一八) 窮迫し窮困する意

落葉哀蟬の曲

王子年が拾遺記に、漢の武帝は李夫人(一)の復得べからざるを思ふ。時に昆靈の池を穿ち、翔禽の舟を泛ぶ。帝自ら歌曲を造り、女伶(二)をして之を歌はしむ。時に日已に西に頽ち、涼風水に激して、女伶の歌聲は甚だ遒し。因りて落葉哀蟬の曲を賦しぬ。

(三)羅袂聲無く、玉墀に塵生ず。虛房冷にして寂寞、落葉は重扃(四)に依れり。彼の美

萬石揚㠯ㇾ箕。徼道宮下隨討治。三輔盜賊天下危。盜阻二南山一爲二民災一。外家公主不ㇾ可ㇾ治。椒房率更領二其材一。蠻夷朝賀常舍其。柱枅欂櫨相枝持。枇杷橘栗桃李梅。走狗逐ㇾ兎張二罘罳一。齧二妃女脣一甘如ㇾ飴。迫窘詰屈幾窮哉。

郡國の吏功は之を差次し(九)(大鴻臚壺充國)
乘輿御物は主として之を治む(少府王溫舒)
(一〇)陳粟萬石揚ぐるに箕を㠯てす(大司農張成)
(一一)徼道宮下隨つて討治す(執金吾中尉豹)
(一二)三輔の盜賊は天下に危し(左馮翊盛宣)
盜南山に阻つて民の災を爲す(右扶風李成信)
(一三)外家と公主とは治すべからず(京兆尹)
椒房は率ね更に其材を領す(詹事陳掌)
(一四)蠻夷朝賀は常して舍す典(屬國)
(一五)柱枅欂櫨もて相枝持す(大匠)
枇杷橘栗桃李梅(大官令)
走狗は兎を逐ひ罘罳を張る(一六)(上林令)

日月星辰和二
四時一。驂駕駟
馬從レ梁來。郡
國士馬羽林
材。總二領天下一
誠難レ治。和二撫
四夷一不レ易哉。
刀筆之吏臣
執レ之。撞レ鐘伐レ
鼓聲中レ詩。宗
室廣大日益
滋。周衛交戟
禁レ不レ時。總領
從レ宗柏梁臺。
平理清讞決二
嫌疑一。修二飾輿
馬一待二駕來一。郡
國吏功差二次
之一。乘輿御物
主治レ之。陳粟

日月星辰四時を和す（帝）

(一)驂駕駟馬梁より來る（梁王孝王武）

郡國の士馬(三)羽林の材（大司馬）

天下を總領するは誠に治め難し（丞相石慶）

四夷を和撫する易からざる哉（大將軍衛青）

(四)刀筆の吏は臣之を執へん（御史大夫倪寛）

鐘を撞き鼓を伐つて聲は詩に中る（大常周建德）

(五)宗室廣大日に益〻滋し（宗正劉安國）

(六)周衛の交戟は時ならざるを禁ず（衞尉路博德）

總領して宗に從ふ柏梁臺（光祿勳徐自爲）

(七)平理清讞嫌疑を決す（廷尉杜周）

(八)輿馬を修飾して駕の來るを待つ（太僕公孫賀）

樓船兮濟汾河。橫中流兮揚素波。簫鼓鳴兮發棹歌。歡樂極兮哀情多。少壯幾時兮奈老何。

(一) 地祇といふに同じ　(二) 喜悦歡喜の貌　(三) 木葉の黄ばみ落つるをいふ　(四) 蘭菊の秀芳を見て仙人を渇望するとなり　(五) 太原府城の西に在る水名　(六) 音樂を奏し棹を引いて歌唱す

李夫人の歌

漢書外戚傳に、夫人早く卒す。方士(一)齊少翁は、能く其神を致すを言ふ。(二)乃ち夜燈燭を張り帷帳を設け、帝をして帳中に居らしむ。遙に好女を見す、李夫人の貌の如し、就いて視るを得ず。帝愈悲感して、爲に詩を作りぬ。

是耶非耶。立而望之。翩何姍姍其來遲。

(三)是か非か、立つて之を望むに、翩として何ぞ(四)姍姍として其の來ること遲きや。

(一) 神仙方術の士　(二) 死者の魂を返して眼前に髣髴たらしむとなり　(三) 果して李夫人なりや否やを知らず　(四) 行歩の貌

柏梁詩

元封三年、柏梁臺を作り、群臣(一)二千石に詔して、能く七言詩を爲る有るものは、乃ち座に上るを得しめき。

潺湲。北渡回兮迅流難。搴長茭兮湛美玉。河伯許兮薪不屬。薪不屬兮衛人罪。燒蕭條兮噫乎何以禦水。隤林竹兮楗石菑。宣防塞兮萬福來。

りて美玉を湛め、河伯許せども薪は屬かず。薪の屬かざるは衛人の罪なり。燒けて蕭條たり噫何を以てか水を禦(四)がん。(五)林竹を隤して石菑を楗めば、(六)宣防塞がりて萬福來らん。

(一) 水の流るゝ貌 (二) 北に移さんとすれども强き水勢は曲げ難し (三) 長き葦にて作れる索を以て土石を下し或は玉もて河伯を祭る (四) 東郡燒けて薪草少きを指す (五) 淇園の竹を切るをいふ (六) 新堤防の名

秋風辭

秋風起兮白雲飛。草木黃落兮雁南歸。蘭有秀兮菊有芳。懷佳人兮不能忘。汎

漢武帝故事に、帝河東に行幸して后土を祠り、(一)帝京を顧視して忻然たり。(二)中流にして群臣と飲讌して、自ら秋風の詞を作る。

秋風起つて白雲飛び、草木(三)黃落して雁南に歸る。(四)蘭に秀有り菊に芳有り、佳人を懷うて忘るゝ能はず。樓船を汎べて汾河(五)を濟り、中流に横はりて素波を揚ぐ。(六)簫鼓鳴りて棹歌を發し、歡樂極りて哀情多し。少壯歲時ぞ老を奈何せん。

奈何一。浩浩洋洋兮、慮殫爲レ河。殫爲レ河兮地不レ得レ寧。功無二已時一兮吾山平。吾山平兮鉅野溢。魚弗鬱兮柏二冬日一。正道弛兮離二常流一。蛟龍騁兮放遠遊。歸二舊川一兮神哉沛。不レ封二禪一、兮安知レ外。爲レ我謂二河伯一兮。何不仁。泛濫不レ止兮愁二吾人一。齧桑浮兮淮泗滿。久不レ返兮水維緩。

と爲りて地は寧きことを得ず、功に已む時無くして(七)吾山も平かなり。吾山平かにして鉅野溢れ、魚は弗鬱(八)として冬日に柏る。(九)正道弛れて常流を離れ、蛟龍騁せて放に遠遊す。(一〇)舊川に歸す神なる哉沛たり、(一一)封禪せずば安ぞ外を知らん。我が爲に河伯(一二)に謂へ、何ぞ不仁なる。泛濫止まず吾が人を愁へしむと。(一三)齧桑浮んで淮泗滿つ、(一四)久しく返らずば水維緩かならん。

(一)泰山の上下に於て天地を祭る事なり (二)堤防の名なり當時に決潰したりし所 (三)築堤用の柴草を運搬せしむ (四)衞の地名其の地に竹多し (五)水勢を防ぐ竹列なりそのうちに柴を積み土もて埋めて堤防となすをいふ (六)見渡す限り一面に水となるを言ふ (七)治水の工事に寸暇もなく水は吾山と同じ高さを保つとなり吾山は一說山を崩して河を塡む云々と見ゆ (八)憂憤の貌なり魚は冬藏せんと欲すれども能はざるを憂ふるなり (九)水の正道 (一〇)水を舊の水道に以さんとす (一一)封禪に出かけし爲にこの禍を知るを得たりとなり (一二)河の神を曰ふ (一三)地名なり浮んで水底となる意 (一四)久しく本流に返らずば水終に沼澤とならん

河湯湯兮激

河は湯湯(一)として激して潺湲たり、(二)北渡せんとするに回りて迅流難し。(三)長茭を塞

莫莫高山。深谷逶迤。曄曄紫芝。可ニ以療レ飢唐虞世遠。吾將何歸。駟馬高蓋。其憂甚大。富貴之畏レ人兮。不レ若ニ貧賤之肆レ志。

莫莫たる高山、深谷逶迤たり。曄曄たる紫芝、以て飢を療すべし。唐虞の世は遠し、吾將何くにか歸せん。(三)駟馬高蓋は、其の憂甚だ大に、富貴にして人を畏れんは、(四)貧賤の志を肆にするに若かず。

(一) 前に出でし漢の四皓なり　(二) 色盛美なる紫色の靈芝　(三) 四頭立の馬車に高き車蓋ある高位高官者の乘物　(四) 貧賤にして放遊し意の欲する所に從ふなり

武帝

瓠子の歌

瓠子決兮。將ニ

史記に、元封二年、帝既に封禪(一)するや、乃ち卒萬人を發して、瓠子(二)の決河を塞がしむ。祭に臨むより還るや、群臣の官に從ふものをして、皆薪(三)を負はしむ。時に東郡草を燒いて、薪少し。乃ち淇園(四)の竹を下して以て楗(五)と爲す。上既に河決に臨み、其の功の就らざるを悼み、爲に歌二章を作る。是に於て卒に瓠子を塞ぎ、宮を築き、名づけて宣房と曰ふ。

瓠子決しぬ、將に奈何かせん、浩浩洋洋として、慮て(六)殫きて河と爲る。殫きて河

深耕溉種。立レ苗欲レ疏。非二其種一者。鋤而去レ之。

耕田歌

史記に、諸呂權を擅にするや、章は劉氏の職を得ざるを忿る。嘗て入りて宴(二)に侍するに、太后酒吏爲らしむ。章曰く、臣は將種なり、請ふ軍法を以て酒を行らんと。太后曰く可と。酒酣なるとき、章乃ち耕田の歌を作る。頃之ありて、諸呂に一人の醉うて酒を亡ぐるもの有り。章追ひ、劍を拔いて之を斬る。太后大いに驚けども、業已に其の軍法を許せり、以て罪する無りき。

深く耕して溉ぎ(三)種まき、(四)苗を立つるに疏なるを欲す。(五)其の種に非ざる者は、鋤いて之を去らん。

(一)漢の王族なり後年城陽王に封ぜらる　(二)宴に通ず　(三)一本概に作る繁き義なり　(四)苗を存せんには疎闊なるを要す　(五)劉氏に非ざる者を除去せんとの意を寓す

紫芝の歌

古今樂錄に、(一)四皓が商山に隱れしときに作りし歌とあり。

天和伊樂二厥福一。在レ樂不レ荒。惟民之則。浚則師德。下民咸殖。令問在レ舊。孔容翼翼。

孔容之常。承二帝之明一。下民之樂。子孫保レ光。承順溫良。受二帝之光一。嘉薦二令芳一。壽考不レ忘。

承二帝明德一。師象レ山則。雲施稱レ民。永受二厥福一。承二容之常一。承二帝之明一。下民安樂。受レ福無レ疆。

に在るも荒まず、惟民の則なり。浚きは則ち師の德、下民咸殖す。令問舊に在り、孔容翼翼たり。(五)

(一)帝の德によりて天下泰平なる義　(二)天人の和合なり　(三)深く厚き樂人の德　(四)久しきに亘る義　(五)其の形姿の敬しめるをいふ

孔容の常、帝の明を承く、下民の樂、子孫光を保つ。承け順つて溫良に、帝の光を承く。嘉く令芳を薦めて、壽考まで忘れず。(一)

(一)子孫まで恩澤に浴するなり　(二)年老いたる後

帝の明德を承け、師は山に象る、雲施して民に稱ひ、永く厥の福を受く。容の常を承け、帝の明を承く。下民安樂、福を受くること疆り無し。

(一)樂人は法を山の如く重んじ視る　(二)雲の如く施す

朱虛侯章(一)

久遠。燭ニ明四
極一。慈惠所レ愛。
美若ニ休德一。杳
杳冥冥。克綽ニ
永福一。
磑磑卽卽。師、
象レ山則。嗚呼
孝哉。案ニ撫戎
國一。蠻夷竭歡。
象來致レ福。兼
臨是愛。終無ニ
兵革一。
嘉薦芳矣。告レ
靈饗矣。告レ靈
既饗。德音孔
臧。惟德之臧。
建レ侯之常。承ニ
保天休一。令問
不レ忘。
皇皇鴻明。蕩
侯休德。嘉承ニ

美は(三)休德の若し。杳杳冥冥、克く永福を綽うす。

(一) 盛德衆多の貌　(二) 疆埸の易なり　(三) 休も亦美なり

(一)磑磑卽卽、(二)師くして山に象る。嗚呼孝なる哉、戎國を案撫す。蠻夷竭く歡び、(三)象し來つて福を致す。(四)兼臨是愛、終に兵革無し。

(一) 崇積し充實する貌　(二) 象に同じ　(三) 譯を重ぬる意　(四) 上位の者皆廣く下民を愛撫する也

(一)嘉薦芳しく、靈に告げ饗けしむ。靈に告げて既に饗くるや、德音孔だ臧し。惟れ德の臧きや、(二)侯を建つるの之れ常あり。天休を承み保んじ、(三)令問忘れず。

(一) よき祭祀のすゝめ物　(二) 諸侯を建つる意　(三) 令名に同じ

皇皇たる鴻名、(一)蕩たる侯の休德。嘉んで(二)天和を承け、伊に厥の福を樂しむ。樂

施。善何如。誰能回。大莫レ大。成二教徳一長莫レ長。被二無極一。雷震震。電耀耀。明二徳鄉一治二本約一。澤弘大。加二被寵一。咸相保。德施大。世曼壽。

都荔遂レ芳。窅窊桂華。孝奏二天儀一。若二日月光一。乘二玄四龍一。回馳北行。羽旄殷盛。芬哉芒芒。孝道隨レ世。我署二文章一。

馮馮翼翼。承二天之則一。吾易

し、長も長なる莫し、無極(三)に被る。

(一)盛んなる義　(二)亂に同じ　(三)限無き遠方までも化に霑ふとなり

雷震震たり、電耀耀たり、徳鄉(一)を明かにし、本約を治む。澤弘大にして、寵(二)を加被す。咸相保んじて、徳施大に、世は曼壽(三)なり。

(一)徳の方なり　(二)恩寵益し加はる　(三)曼は延なり

都荔(一)は芳を遂げ、窅窊(二)たる桂華あり。孝を天儀に奏し、日月の光の若し。玄四龍(三)に乗り、回馳して北行す。羽旄殷盛、芬たる哉芒芒たり。孝道は世に隨ひ、我は文章を署(四)つ。

(一)芳草の名　(二)滿たざる貌　(三)黑き四頭の駿馬　(四)分と衮との二說あり今姑く分に從ふ

馮馮翼翼(一)、天の則を承く。吾が易(二)は久遠、四遠を燭し明す。慈惠もて愛する所、

海內有レ姦。紛二亂東北一。詔撫二成師一。武臣承レ德。行レ樂交レ逆。簫二勺羣慝一。肅爲レ濟哉。蓋定二燕國一。

大海蕩蕩水所レ歸。高賢愉愉民所レ懷。太山崔。百卉殖。民何貴。貴二有德一。

安二其所一。樂レ終レ產。樂レ終レ產。世繼レ緒。飛龍秋。遊上レ天。高賢愉。樂二民人一。

豐草葽。女羅

海内姦(一)有り、東北を紛亂す。詔して成師(二)を撫し、武臣德を承く。樂を行ひ逆を(三)交へ、羣慝を簫勺(四)す。肅として濟を爲せる哉、蓋し燕國(五)を定めたり。

(一)匈奴を指す (二)各部の校兵なり左傳に見ゆ (三)逆亂を征伐す (四)群慝を音樂もて安撫するなり簫は舜の樂勺は周の樂なり (五)匈奴は燕の北なるによりいふ

大海蕩蕩水の歸する所、高賢(一)愉愉民の懷ふ所。太山は崔(二)たり、百卉は殖す。民は何をか貴ぶ、有德を貴ぶ。

(一)高德ある賢人 (二)崔嵬と高大なる貌

其所に安んじ、產(一)を終ふるを樂しむ。產を終ふるを樂しみ、世〻緒を繼ぐ。飛龍秋(二)として、遊んで天に上(三)る。高賢愉しんで、民人を樂しましむ。

(一)產業を勉勵す (二)飛ぶ貌をいふ (三)漢書に上を遊に作る

豐草葽(一)に、女蘿は施く。善何如、誰か能く回(一)さん。大も大なる莫し、敎德を成

七始華始。肅倡二和聲一。神來晏娭。庶幾是聽。粥粥音送。細齊二人情一。忽乘二靑玄一。熙事備成。清思眑眑。經緯冥冥。

我定二曆數一。人告二其心一。敕レ身齋戒。施レ敎申申。乃立二祖廟一。敬明二尊親一。大矣孝熙。四極爰轃。

王侯秉レ德。其鄰翼翼。顯明昭式。清明鬯矣。皇帝孝德。竟全二大功一。撫二四極一。

(一)七始華始、肅しんで和聲を倡ふ。神來りて晏娭(二)し、庶幾は是聽かん。粥粥(三)として音送り、細(四)に人情を齊ふ。忽ち靑玄(五)に乘じて、熙事(六)備り成る。清思(七)眑眑たり、經緯冥冥たり。

(一)天地人と四時と萬物英華の始とをいふ　(二)敬懼安靜の貌　(三)鼓鐘簫管の樂音　(四)漢書に齊に作る　(五)靑天に神の還り去るなり　(六)福熙の事　(七)清靜幽靜をいふ

(一)我は曆數を定め、人は其心を告ぐ。身は敕めて齋戒し、敎を施して申申(二)たり。乃ち祖廟を立て、敬しんで尊親を明かにす。大なる矣孝熙、四極(三)爰に轃る。

(一)天子は天運により民人は誠心を竭す　(二)謹愼敬懼の貌　(三)四方に同じ

王侯德を秉りて、其鄰(一)は翼翼たり。顯明昭式、清明鬯(二)たり。皇帝の孝德、竟に大功を完うし、四極を撫で安んず。

(一)德必ず鄰ある　(二)通暢和明の意

力抜レ山兮氣蓋レ世。時不レ利兮騅不レ逝。騅不レ逝兮可二奈何一。虞兮虞兮奈二若何一。

大孝備矣。休德昭明。高張二四縣一。樂充二宮庭一。芬樹羽林。雲景杳冥。金支秀華。庶旄翠旌。

(三)力山を抜き氣は世を蓋ふ、時利あらず騅逝かず、騅の逝かざるは奈何ともすべし、虞や虞や若を奈何せん。

㊀安徽省靈壁縣の東南方　㊁歌曲に同じ　㊂抜山蓋世の豪勇も時の不祥に遇うて駿馬も進まずとなり

唐山夫人

高帝の姫なり、韋昭曰く、唐山は姓と。

安世房中の歌

漢書の禮樂志に、又房中祠樂有り、高祖の唐山夫人の作る所たりと。

(一)大孝備り、休德昭明なり。高く(二)四縣を張り、樂は宮庭に充つ。(三)芬樹羽林、雲景杳冥に、(四)金支秀華、(五)庶旄翠旌あり。

㊀祖先の祭祀に諸禮具足せり　㊁天子宮廷の樂をいふ　㊂羽葆の多きを形容す　㊃百二十本の旗の中央に花をつけたる美旗ある意　㊄旄旌共に一種の旗

鴻鵠高飛。一擧千里。羽翼已就。横絶四海。横絶四海。又可奈何。雖有矰繳。將安所施。

史記に、高帝は、戚夫人(一)の子趙王如意を立てんと欲す。後に果さず。戚夫人涕泣す。帝曰く、我が爲に楚舞せよ、我若が爲に楚歌せんと。其旨に言ふ、太子(二)は四皓を得て輔と爲し羽翼成就せり、易ふべからざるなりと。

(三)鴻鵠高く飛び、一擧に千里。羽翼已に就りて、四海を横絶す。四海を横絶す、又奈何かすべき、(四)矰繳有りと雖も、將安ぞ施す所あらん。

(一) 高帝の寵姫　(二) 所謂商山の四皓なり　(三) 太子即ち後の孝惠帝を暗示す　(四) 鳥を捕殺すべき一種の弓。いぐるみ

項羽

垓下の歌

史記に、漢が項羽を垓下(一)に圍むや、夜漢軍の皆楚歌するを聞き、驚いて曰く、漢皆已に楚を得たるかと。起つて帳中に飲む。美人虞といふもの有り、常に從ふ。駿馬の名は騅、常に之に騎る。乃ち悲歌忼慨し、歌數闋(二)、美人之に和す。

大風起兮雲
飛揚。威加二海
内一兮歸二故郷一。
安得二猛士一兮
守二四方一。

巻二

漢詩

高帝

大風歌

史記に、高祖既に天下を定め、還つて沛を過り、沛宮に置酒し、悉く故人父老子弟を召して、酒を佐けしむ。沛中の兒を發して、百二十人を得、之に歌を敎ふ。酒酣なるとき上は筑(一)を撃つて自ら歌つて曰く、

(二)大風起つて雲飛揚す。威海内に加つて故郷に歸る。(三)安んぞ猛士を得て四方を守らしめん。

㊀竹製の一種の樂器　㊁高祖自ら喩へ雲は群雄を指す　㊂何時に良臣を得て四方を平かに治めしめんとなり

鴻鵠歌

無レ鄕之社。易レ爲二黍肉一。無レ國之稷。易レ爲二求福一。

（二）鄕無きの社は、黍肉を爲し易く、國無きの稷は、求福を爲し易し。

一 社を祀る鄕邑なり氏子に同じ、社なきが爲に些少の事にて福を降し易しとなり

史照が通鑑疏に引ける諺

足寒傷心。民怨傷國。

足寒うして心を傷り、民怨んで國を傷る。

(一) 心臓を傷ひ害す

古諺古語

觸露不招葵。日中不剪韭。

露に觸れて葵を招らず、日中には韭を剪らず。

(一) 葵も韮も共に雑菜の名なり

將飛者翼伏。將奮者足跼。將噬者爪縮。將文者且樸。

將に飛ばんとする者は翼伏し、將に奮はんとする者は足跼む。將に噬まんとする者は爪縮まり、將に文らんとする者は且らく樸なり。

(一) 伸びん欲して先づ屈する義　(二) 飾る義樸は質素を謂ふ

上求材。臣殘木。上求魚。臣乾谷。

上材を求むれば、臣は木を殘ひ、上魚を求むれば、臣は谷を乾す。

(一) 上意に迎合するなり天子が材木を求むる時は山に木材無きに至るとなり

葬師食無所。肺腑而能語。醫師色如土。

越阡度陌。互爲主客。

救寒無若重裘。止謗莫若自修。

屋漏在上。知之在下。

土の如くならん。

(一)能く地相を語る義　(二)葬埋の地を相して生活の資を得る者

文選註に引ける古諺

阡を越り陌を度り、互に主客と爲る。

(一)東西を阡とし南北を陌とす

魏志に王昶が引ける諺

寒を救ふは裘を重ぬるに若くは無く、謗を止むるは自ら修むるに若くは莫し。

(一)毛皮製の衣なり

梁史

屋漏上に在り、之を知るは下に在り。

(一)屋の雨漏を知るは下に坐せる人なり爲政者の缺點は人民よく知る義

葉白。

河射角。堪夜作。犂星没。水生骨。

蜻蛉鳴。衣裘成。蟋蟀鳴。懶婦驚。

射的白。斛米百。射的玄。斛米千。

山川而能語。

(一) 二十八宿の一星名

(一)河角を射れば、夜作に堪へ、犂星没すれば、水骨を生ず。

(一) 天河が角星にかゝる時は夜業を爲すべく火星没する頃は水中に氷を結ぶ

月令註に引ける里語

(一)蜻蛉鳴きて、衣裘成り、蟋蟀鳴いて、(二)懶婦驚く。

(一) とんぼの飛ぶ頃には冬仕度を整ふ　(二) 既に秋に入れるに驚く怠け者

水經註に引ける諺

(一)射的白ければ、斛米百。射的玄ければ、斛米千。

(一) 山名なりその山の白き時と黒き時とにて年の豐熟に差ありとぞ

山經に引ける相冢書

山川にして能く(一)語らば、(二)葬師は食ふに所無く、肺腑にして能く語らば、醫師は色

牟子に引ける古諺

少レ所レ見。多レ所レ怪。見二槖駝一言。馬腫レ背。

（一）見る所少ければ、怪しむ所多し。（二）槖駝を見て言ふらく、馬は背を腫らせりと。

(一) 通常に見ること稀なるものは之を怪物となし易し　(二) 駱駝を見て此の馬は背に腫物ありと稱すとなり

易緯に引ける古語

一夫兩心。拔レ刺不レ深。

一夫兩心あれば、刺を拔くも深からず。（一）

(一) 充分に拔きとらずとなり二心の事を成し難きに

蹎馬破レ車。惡婦破レ家。

（一）蹎馬は車を破り、惡婦は家を破る。

(一) 馬蹎けば車を破壞す

四民月令に引ける農語二則

三月昏。參星夕。杏花盛。桑

三日の昏、（一）參星夕す。杏花盛んに、桑葉白し。

婦死腹悲。惟身知レ之。

縣官漫漫。怨死者半。

金不レ可レ作。世不レ可レ度。

人聞二長安樂一。則出レ門而西向笑。知二肉味美一。則對二屠門一而大嚼。

(一)婦死して腹悲しむ、惟身のみ之を知る。

(一)新に妻を失へる悲は自己のみよく之を知るとなり

(一)縣官漫漫、怨み死する者半なり。

(一)地方官の誅求烈しきを恨むなり縣官は一に天子の稱たり

(一)金は作すべからず、世は度るべからず。

(一)石を點じて金とは作し難し世を円て一仙とはなり難き意

桓子新論に引ける諺

人(一)長安の樂を聞けば、則ち門を出でて西向して笑ひ、肉味の美を知れば、則ち(二)屠門に對つて大いに嚼ふ。

(一)都名なり長安を望んで笑ふとなり (二)肉を販賣する市街を望んで飲食すとなり猪焼屋の前にて食事する類なり

于曠野㆒。良工得㆑之。以爲㆓絺紵㆒。良工不㆑得。枯㆓死于野㆒。

に枯死す。

(一)長く蔓延せる葛蔓が廣き野原に繁茂するなり (二)葛布かたびらの類 (三)賢才の時に遇はざるに喩ふ

劉向別錄に引ける古語

脣亡而齒寒。河水崩其壞在㆑山。

脣亡ぶれば齒寒く、(一)河水崩るれば、(二)其壞は山に在り。

(一)相倚頼する所を失へば災害身に迫る意 (二)河水涸るれば山は水分を失うて崩壞すとなり一本崩を竭に作る

新序

蠹喙仆㆓柱梁㆒。蚊芒走㆓牛羊㆒。

(一)蠹喙も柱梁を仆し、蚊芒も牛羊を走らす。

(一)木喰蟲の小さき喙も大柱を倒すに至る

風俗通

狐欲㆑渡㆑河。無㆔奈㆓尾何㆒。

狐河を渡らんと欲するも、(一)尾を奈何ともすること無し。

(一)尾を濡さゞらんと欲するも得ざる義、身の累を歎ずるなり

已成事。
水至清則無徒。人至察則無徒。
千人所指。無病而死。

力田。不如遇豐年。力桑。不如見國卿。刺繡文。不如倚市門。

緜緜之葛。在

(一)水至つて淸ければ則ち魚無く、人至つて察なれば則ち徒無し。

(一)千人の指す所は、病無くとも死す。

列女傳に引ける古語

(一)田を力めんは、豐年に遇はんに如かず。桑を力めんは、(二)國卿に見えんに如かず。(一)繡文を刺さんは、市門に倚るに如かず。

說苑

(一)緜緜の葛、曠野に在れば、良工之を得て、以て(二)絺紵を爲る。(一)良工得ざれば、野

一 賈誼が引ける諺なり官吏の事に習熟せずば先例を標準とすべしとなり

一 東方朔が客難に答へし語也明察の弊を言ふなり

一 衆より注目せらるゝ人は其怨によりて死に至るとなり

一 前出史記貨殖傳の詩意に同じ 二 國家の權勢ある貴臣を言ふ

在ㇾ泥。與ㇾ之皆黑。
當ㇾ斷不ㇾ斷。反受二其亂一。
長袖善舞。多錢善賈。
農不ㇾ如ㇾ工。工不ㇾ如ㇾ商。刺二繡文一。不ㇾ如ㇾ倚二市門一。
狡兎死。走狗烹。飛鳥盡。良工藏。敵國破。謀臣亡。
不ㇾ習ㇾ爲ㇾ吏。視二

(一)以下の諸詩を曰ふ　(二)柔弱なる雜草なれども麻に化せられて直きなり三王世家に見ゆ

(二)當に斷ずべきに斷ぜざれば、反つて其亂を受けん。

(一)黄歇傳の贊に見ゆ

(二)長袖善く舞ひ、多錢善く賈ふ。

(一)蔡澤傳に韓非の語として引用せり

(二)農は工に如かず、工は商に如かず、繡文を刺すは、市門に倚るに如かず。

(一)貨殖傳に見ゆ利を望むは商を第一とする意　(二)自ら刺繡せんより市場にて賣買するを好とす

漢書

(二)狡兎死して、走狗烹られ、飛鳥盡きて、良工藏せられ、敵國破れて、謀臣亡ぶ。

(一)韓信傳に引用せる諺なり走狗は獵犬の義

(二)吏爲るに習はずば、已成の事を視よ。

心誠憐。白髮玄。情不レ怡。艷色媸。

寧爲二雞口一。無レ爲二牛後一。

削レ株掘レ根。無三與レ禍鄰一。禍乃不レ存。

蓬生二麻中一。不レ扶自直。白沙

心誠に憐れむ、白髮玄し。情怡びず、艷色媸し。

（一）白髮の深き老を悲しみ艷容の醜となれるを傷むとなり

戰國策

寧ろ雞口と爲るも、牛後と爲る無れ。

（一）蘇秦が韓王を說くに引きし諺なり

株を削り根を掘り、禍と鄰する無ければ、禍は乃ち存せず。

（一）張儀の秦を說きし諺なり深く災害に遠ざかるべき義

史記

下は俱に漢以後なり。衆人に因りて稱引せらる。之を按ずるに、時代は未だ皆屬する所有ること能はず。故に亦古逸中に入る。

蓬の麻中に生ずるや、扶けざるも自ら直し。白沙も泥に在れば、之と皆黑し。

捐。

人不二婚宦一。情欲失ㇾ半。人不二衣食一。君臣道息。

奔車之上無二仲尼一。覆舟之下無二伯夷一。

不ㇾ聰不ㇾ明。不ㇾ能ㇾ爲ㇾ主。不ㇾ瞽不ㇾ聾。不ㇾ能ㇾ爲ㇾ公。

㊀生時は利の爲に相愛し死後は益なきが故に相顧みず

人婚宦（一）せざれば、情欲半を失ふ。人衣食せざれば、（二）君臣の道息む。

㊀婚姻を通じ仕官するなり　㊁君の御蔭なきを意味す

韓非子

奔車（一）の上には仲尼無く、覆舟の下には伯夷無し。

㊀君子危に近よらざる義なり

慎子

聰（一）ならず明ならざれば、主爲ること能はず。（二）瞽ならず聾ならずんば、公爲ること能はず。

㊀人の主たる者に聰明の德あるべき義　㊁自己の耳目を恃まずして虚心公平なるべき義

魯連子

獸惡ニ其網一。民怨ニ其上一。

衆心成レ城。衆口鑠レ金。

從レ善如レ登。從レ惡如レ崩。

相レ馬以レ輿。相レ士以レ居。

生相憐。死相

（一）獸は其網を惡み、民は其上を怨む。

● 周語に單襄公の引ける諺なり

（一）衆心は城を成し、衆口は金を鑠す。

● 周語に州鳩が周景王に對して引ける語

（一）善に從ふは登るが如く、惡に從ふは崩るゝが如し。

● 善の困難にして惡の退き易き意なり周語に衞の彪傒が引ける語

孔子家語

（一）馬を相するに輿を以てし、士を相するに居を以てす。

● 馬をして輿を引かしむる時に馬の良否を相するが如く士を相するには平居の時を以てすべしとなり

列子二則

（一）生には相憐み、死には相捐つ。

萃。凡百君子。莫レ不レ代レ匱。

山有レ木。工則度レ之。賓有レ禮。主則擇レ之。

心苟無レ瑕。何恤ニ乎無一レ家。

畏レ首畏レ尾。身其餘幾。

雖ニ鞭之長一。不レ及ニ馬腹一。

(一)粗案を製すべき草名　(二)憔悴に同じ　(三)人材缺乏の時には多數在位の士は大抵代用せられたる者なり

左傳

(一)山に木有れば、工則ち之を度り、賓に禮有れば、主則ち之を擇ぶ。

(一)魯の羽父が引ける周の諺なり

(一)心苟も瑕無くば、何ぞ家無きを恤へん。

(一)晉の士蔿が引ける語

(一)首を畏れ尾を畏れば、身は其れ餘り幾ぞ。

(一)文公十七年に鄭子家が引用せる語

(一)鞭は之れ長しと雖も、馬腹には及ばず。

(一)晉の伯宗が引ける古語人力の及ばざる所ある義

國語

墻有レ耳。伏寇在レ側。

翹翹車乘。招レ我以レ弓。豈不レ欲レ往。畏ニ我友朋一。

俟ニ河之清一。人壽幾何。兆云詢多。職競作レ羅。

雖レ有ニ絲麻一。無レ棄ニ菅蒯一。雖レ有ニ姬姜一。無レ棄ニ蕉

(一)墻に耳有り、伏寇側に在り。

㊀ 言は洩れ易く禍は近く起り易き義

左傳に引ける逸詩

(一)翹翹たる車乘、我を招くに弓を以てす。豈往くを欲せざらんや、(二)我が友朋を畏る。

㊀ 高き車駕たより弓もて我を招くは禮を知らざるなり ㊁ 往きたけれども友人の我を譏らんことを恐るとなり

(一)河の清を俟つとも、人壽は幾何ぞ。(二)兆して云に詢ること多くば、職として競うて(三)羅を作さん。

㊀ 黄河は千年に一度清むといへり ㊁ トして謀るときは多くして決し難からんとの意

絲麻有りと雖も、(二)菅蒯を棄つる無れ。姬姜有りと雖も、(三)蕉萃を棄つる無れ。(四)凡百の君子、匱しきに代らざるは莫し。

太公が兵法に引ける黄帝の語

日中不レ彗。是謂レ失レ時。操レ刀不レ割。失二利之期一。執レ柯不レ伐。賊人將レ來。涓涓不レ塞。將レ爲二江河一。熒熒不レ救。炎炎奈何。兩葉不レ去。將レ用二斧柯一。爲レ虺弗レ摧。行將レ爲レ蛇。

日中(一)して彗さざる、是を時を失ふと謂ひ、刀を操つて割かざるは、利の期を失ふ。柯を執つて伐らずば、賊人將に來らんとし、涓涓(二)に塞がざれば、將に江河を爲さんとし、熒熒(三)に救はざれば、炎炎たるを奈何せん。兩葉にして去らずんば、將に(四)斧柯を用ひんとす。(五)虺爲るとき摧かずば、行〻將に蛇と爲らんとす。

(一) 日の中天にある時は物を曝し乾すべき時なり　(二) 細小の流をいふ　(三) 僅かなる火光をいふ　(四) 大木となるが爲に斧を要するに至る　(五) 小蛇なり蛇は大なるを謂ふ

六　韜

天下攘攘。皆爲レ利往。天下熙熙。皆爲レ利來。

天下攘攘(一)として、皆利の爲に往き、天下熙熙(二)として、皆利の爲に來る。

(一) 亂るゝ貌、遽に通ず　(二) 和樂する貌

管　子

楚人の謠

楚雖二三戸一。亡レ秦必楚。

史記に、楚の懷王は、張儀が欺く所と爲りて、秦に客死せり。(一)王負芻に至るや、遂に秦の滅す所と爲りぬ。百姓之を哀しめり。

(二)楚は三戸と雖も、秦を亡すものは必ず楚ならん。

(一)懷王の曾孫にあたり楚の最終の君位にありし人　(二)僅少の人口となるとも必ず恨を報ずるならんとなり

河圖に引ける蜀謠

汶阜之山。江出二其腹一。帝以會レ昌。神以建レ福。

(一)汶阜の山は、江は其腹より出づ。帝以て昌を會し、神以て福を建つ。

(一)四川の岷江に在り長江の一水源なり

湘中の漁歌

帆隨レ湘轉。望二衡九面一。

帆は(一)湘に隨つて轉じ、(二)衡の九面を望む。

(一)湘水の屈折に從つて帆影も亦轉回すとなり　(二)衡山なり

學之臘嘉平。

易水を渡る歌 (一)

史記に燕の太子丹、荊軻をして秦王を刺さしむ。易水の上に至り、既に祖して道を取らんとす。高漸離筑を撃ち、荊軻和して歌ひ、變徵(二)の聲を爲す。士皆涙を垂れて涕泣す。又前んで歌つて曰く、

風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。

風は蕭蕭(三)として易水寒し、壯士(四)一たび去つて復た還らず。

(一) 燕の西境に在る川名　(二) 五聲のうち徵聲の變ぜし音なり　(三) 風聲にいふ　(四) 荊軻自ら謂ふ

三秦記の民謠

武功太白。去天三百。孤雲兩角。去天一握。山水險阻。黃金子午。蛇盤烏欏。勢與天通。

(一)武功太白は、天を去ること三百、孤雲兩角(二)は、天を去ること一握なり。山水險阻にして、黃金(三)・子午あり。蛇盤・烏欏は、勢ひ天と通ず。

(一) 武功縣に太白山あり長安を去ること三百里なり　(二) 山の名共に高くして天に迫るとなり　(三) 二谷の名、下は二山の名

邪滿レ車。五穀蕃熟。穰穰滿レ家。

神仙得者茅初成。駕レ龍上昇入二太淸一。時下二玄洲一戲二赤城一。繼レ世而往在二我盈一。帝若

(一)戰國時代の說客なり (二)冠のくゝりひもが斷絕する迄大口を開く (三)神を祈りて耕作の豐饒を願ふこと (四)持ち行く品物は少くして望むところのみ過大なり (五)高田なり汚邪は低田共に總田なれども願はくは籠に滿ち車に滿つる程豐饒なれとの意 (六)穰多なる貌

巴の謠歌

茅盈が內傳に、秦の始皇三十一年九月庚子、茅盈が高祖濛は、華山の中に於て、雲に乘り鶴に駕し、白日に昇天せり。是より先の時、巴謠の歌辭有り云々。始皇は謠歌を聞いて其故を問ふに、父老具に對へて曰く、此れ仙人の謠歌にして、帝に長生の術を求むるを勸むるなりと。是に于て始皇は欣然として、乃ち仙を尋ぬるの志有り。因り臘月(一)を嘉平と改めき。

神仙得る者は茅初成(二)、龍に駕り上昇して太淸(三)に入る。時に玄州(四)に下つて赤城に戲れ、世を繼いで往いて我が盈(五)に在り。帝若し之を學ばば、臘を嘉平とせん。

(一)十二月をいふ (二)茅氏を以て初となす義 (三)天上の帝宮名 (四)仙鄕なり赤城は浙江に在る仙山名 (五)傳へて茅盈に至れりとたり

斷レ竹續レ竹。飛レ土逐レ宍。

甌窶滿レ篝。汚

孤(一)は子が射を善くするを聞けり、道何んか生ずる所ぞと。對へて曰く、臣聞く弩(二)は弓より生じ、弓は彈より生じ、彈は古の孝子が、父母の禽獸の食ふ所と爲るを見るに忍びず、故に彈を作つて以て之を守るに起ると。歌に曰く、

(三)竹を斷ち竹を續ぎ、(四)土を飛ばして宍を逐ふ。

(一)諸侯自ら稱する詞　(二)石弓なり弩は石はじきの類　(三)彈を製するを謂ふ　(四)土製の彈丸を飛ばして禽獸を逐ふとなり宍は古の肉字

田を禳ふ者の祝

史記に、齊の威王、淳于髡(一)をして趙に使し、兵を請うて楚を禦がんとし、金百斤と、車馬十駟とを齎らさしむ。髡天を仰いで大笑し、冠纓(二)索絶つ。王曰く、先生之を少しとするかと。髡曰く、臣東方より來り、道旁(三)に田を禳ふ者を見しに、豚蹄と酒一盂とを操つて祝つて云々。臣は持つ所の者狹うして、(四)欲する所の者奢れるを見て、故に之を笑へり。

(五)甌窶も篝に滿ち、汚邪も車に滿て。五穀蕃熟して、(六)穰穰として家に滿て。

皇天祐助。我王受レ福。良臣集謀。我王之德。宗廟輔レ政。鬼神承翼。君不レ忘レ臣。臣盡二其力一。上天蒼蒼。不レ可二掩塞一。觴酒二升。萬福無レ極。
我王仁賢。懷レ道抱レ德。滅レ讎破レ吳。不レ忘レ返國。賞無レ所レ悋。羣邪杜塞。君臣同和。福祐千億。觴酒二升。萬歲難レ極。

皇天祐助して、我が王福を受け、良臣(一)集ひ謀るは、我が王の德なり。宗廟政を輔け、鬼神承み翼く。君は臣を忘れずば、臣は其力を盡さん。上天は蒼蒼(三)たり、掩ひ塞ぐべからず。(四)觴酒二升、萬福極り無けん。

(一)越の宮殿名　(二)忠良の臣は好策を上り王は天の冥助を受く　(三)天の色を形容するなり　(四)今は酒二升を以て觴め酌むとなり

我が王仁賢なり、道を懷ひ德を抱く。(一)讎を滅し吳を破り、國に返るを忘れず。賞(二)に悋む所無くば、羣邪杜塞せん。君臣同和して、福祐千億ならん。觴酒二升、萬(三)歲極め難けん。

(一)吳王夫差を敗りしを指す　(二)論賞に惜むところなし　(三)萬歲までもこの愉樂を究極せざらしめん

彈歌

吳越春秋に、越王謀つて吳を伐たんと欲す。范蠡は善く射る者陳音を進む。王問うて曰く

無レ殃。君臣生離。感二動上皇一。衆夫悲哀。莫レ不二感傷一。臣請薦レ脯。酒行二二觴一。大王德壽。無レ疆無レ極。乾坤受レ靈。神祇輔翼。我王厚レ之。祉祐在レ側。德銷二百殃一。利受二其福一。去二彼吳庭一。來歸二越國一。

めて、酒行ること二觴にせん。

(一)二人共に越の賢臣 (二)送別の宴を開く (三)前に苦しめて後に樂します (四)憂患の後に幸福來る (五)入りて臣となるの禍に遭へるを指す (六)上天の支配者なり (七)衆百姓を指す (八)乾肉を肴としすゝめんとなり

(一)大王の德壽、疆無く極無し。乾坤靈を受け、神祇輔翼す。(二)我が王之を厚うせよ、祉祐側に在り。德は百殃を銷し、(三)利は其福を受けん。(四)彼の吳庭を去りて、來りて越國に歸らん。

(一)大王は天地神祇の加護を受けて福德年壽限り無しとなり (二)王戒愼してこの恩寵を厚うせんと心掛けなば福祉は常に王の側にあらん (三)天の福を受くるの利益あらん (四)吳を脫して越に歸らんこと遠からじとなり

越王を祝する辭

吳越春秋に、越王既に吳を滅して、諸侯に伯たり。(一)文臺に置酒す、群臣樂を成す。大夫種は祝酒辭を進めて曰く、

何。烏鵲雙飛。不レ樂二鳳凰一。妾是庶人。不レ樂二宋王一。

其雨淫淫。河大水深。日出當レ心。

皇天祐助。前沈後揚。禍爲二德根一。憂爲二福堂一。威レ人者滅。服從者昌。王離二牽致一。其後

(一) 何氏を置かんが爲なり (二) 烏は自ら喩へ羅を王に喩ふ烏は羅あるを知つて高飛するなり (三) 韓氏と相樂ぬり王を望まずとの意

夫に答ふる歌

其雨淫淫たり、(一)河大にして水深し。日出でて(二)心に當る。

(一) 君の囚へられてより妾の悲涙雨の如く行き見んと欲するも大河の隔るが如し (二) 宋王の注目することと烈日の胸を燬くに似たり到底免れ難しとなり

越の羣臣の祝

呉越春秋に、越王句踐の五年、大夫(一)種 范蠡と與に、入りて呉に臣たり。群臣之を浙江の上に送り、水に臨んで祖道す。軍は固陵に陳せり。大夫種は祝詞を爲して曰く、

皇天祐助して、前に沈めて(二)後に揚ぐ。(三)禍は德の根爲り、憂は福の堂爲り。(四)人を威す者は滅び、服從する者は昌ゆ。(五)王は牽致に離る、其後に殃無からん。君臣生きながら離れて、上皇を感動し、(六)衆夫悲哀して、(七)感傷せざる莫し。臣請ふ(八)脯を薦

六翮。若強出
喪取二國盧一。

梧宮秋。呉王
愁。

南山有ㇾ烏。北
山張ㇾ羅。烏自
高飛。羅當ニ奈

きに似たり

呉の夫差が時の童謠

述異記に、呉王に別館有り、句容に在り。(一)楸梧林を成せり、故に梧宮と名づく。或は云ふ即ち館娃宮なり、宮に梧桐園有りと。

(二)梧宮秋にして、呉王愁ふ。

㊀靑桐の類なり　㊁梧宮に居て梧葉凋落の時に遭ひ呉王の盛時を追懷するなり

烏鵲の歌

彤管集に、韓憑が宋の康王の舍人と爲るや、妻の何氏美なり。王之を欲し、舍人を捕へて(一)靑陵の臺を築く。何氏は烏鵲の歌を作つて、以て志を見し、遂に自ら縊れき。

(二)南山に烏有り、北山に羅を張る。烏は自ら高く飛ぶ、羅は當に奈何かすべき。

(三)烏鵲雙び飛び、鳳凰を樂しまず、妾は是れ庶人なり、宋王を樂しまず。

樂莫レ樂ニ兮新相知一。悲莫レ悲ニ兮生別離一。

吳王出遊觀ニ震湖一。龍威丈人山隱居。北上ニ包山一入ニ靈墟一。乃入ニ洞庭一竊ニ禹書一。天地大文不レ可レ舒。此文長傳百

故に琴操に云ふ、殖死するや、其妻は琴を援つて歌を作つて曰く、

樂は新相知(一)より樂しきは莫く、悲は生別離(三)より悲しきは莫し。

(一)至誠の天地を感動せしめしなり　(二)新に相識となること　(三)生きながら相別離する時

靈寶の謠

靈寶要略に、吳王闔閭出で丶包山(一)に遊び、一人を見る。自ら言ふらく、姓は山名は隱居と。闔閭之を扣く。乃ち洞庭に入りて、素書一卷を取りて闔閭に呈するに、其文は識るべからず。人をして之を齎らして孔子に問はしむるに、孔子曰く、丘童謠を聞けり云々と、

吳王出遊して震湖(二)を觀る。龍威丈人山隱居。北のかた包山に上つて靈墟に入り乃ち洞庭(三)に入つて禹の書を竊む。天地の大文は(四)舒ぶべからず、此の文長く傳ふ(五)百六の初。若し强ひて出喪せば(六)國廬を取らん。

(一)吳に在り一に苞山と名づく洞庭の西山卽ち是なり　(二)洞庭湖なり又震澤とも曰ふ　(三)上述の素書を指す　(四)詳細に知るべからず　(五)災厄を百六といふ　(六)暗に闔閭を指すこの末句一本若强取出喪國廬に作る從ふべ

蒙レ羞被レ好兮。不レ訾ニ詬恥一。心幾煩而不レ絶兮。得レ知ニ王子一。山有レ木兮。木有レ枝。心說レ君兮君不レ知。

を得たり、山に木有り、木に枝有り、心に君を說べども君は知らず。(六)

(一)青雀の飾り舟　(二)長袖を引きめぐらす　(三)錦もて作れる衣被　(四)越女にして君に從ふは恥辱の如くなれども君の歡好を被るために羞を羞と思はず　(五)心中煩ひ亂れて已むこと能はず　(六)予は君を知ること深けれども君は果して予の心を知れりやとなり

越の謠歌

君乘レ車。我戴レ笠。他日相逢下レ車揖。君擔レ簦。我跨レ馬。他日相逢爲レ君下。

風土記に、越の俗は性率朴(一)、初め人と交るに禮有り、土壇(二)を封じ、祭るに犬雞を以てし、祝して曰く、

君が車に乘るとき、(三)我は笠を戴かんに、他日相逢はば車を下つて揖せよ。(四)君が簦を擔ふとき、我は馬に跨らば、他日相逢はんとき君が爲に下らん。

(一)正直朴實なる意　(二)友人關係をつくる時に土を盛りて壇とし犬雞を以て神を祭つて相契るとなり　(三)假定するなり若し然らば君は車を下りて禮せよ　(四)君が有柄の傘をかつげる時

琴操

列女傳に、齊人杞梁殖、莒を襲うて戰死す。其妻城下に哭すること七日にして城崩る。(一)

延陵季子兮不レ忘レ故。脱二千金之劍一兮帶二丘墓一

今夕何夕兮。搴二洲中流一。今日何日兮。得下與二王子一同上レ舟。

劉向が新序に、延陵の季子(一)、將に晉に聘せんとし、寶劍を帶びたり。徐君言はずして色に之を欲す。季子(二)未だ獻ぜざるも、然も其心に已に之を許せり。使して反るとき、徐君已に死せり。季子は是に於て劍を以て徐君の墓樹に帶けて去りぬ。徐人之が歌を爲る。

延陵の季子は故(三)を忘れず、千金の劍を脫して丘墓(四)に帶く。

(一) 呉の賢人季札　(二) 君命を以て諸侯に使す故に劍を解かざるなり　(三) 故舊の人物　(四) 小高く築き成せる墳墓

越人の歌

劉向が說苑に、鄂君子晳は舟を新波の中に泛べ、青翰(一)の舟に乘り、翠蓋を張り、鐘鼓の音を會す。越人楫を擁して歌ふ。是に於て鄂君は、乃ち脩袂(二)を揄いて行いて之を擁し、繡被(三)を擧げて之を覆ふ。

今夕は何の夕ぞ、州の中流に搴る。今日は何の日ぞ、王子と舟を同じうするを得たり。(四)羞を蒙り好を被る、詬恥を訾はず。(五)心幾んど煩れて絕えず。王子を知る

日已夕兮。予心憂悲。月已馳兮。何不渡爲。事寢急兮將奈何。

蘆中人蘆中人。豈非窮士乎。

天下有道。我黻子佩。天下無道。我負子戴。

する頃君と蘆の茂れる渚に會せん

日已に夕なり、予が心憂悲す。(一)月已に馳す、何ぞ渡ることを爲さざる。(二)事寢く急なり、將に奈何せんとかする。

㊀來り渡らざるが爲に憂悲す　㊁迫ふ者甚だ急なりとの義

(一)蘆中の人、蘆中の人、(二)豈窮士に非ずや。

㊀蘆中にちらつく人影　㊁先刻の困窮飢渇の人に非ずや

偕に隱るゝ歌

琴淸英に云ふ、(一)祝牧が其妻と偕に隱るゝや、乃ち歌を作つて曰く、

天下道有れば、(二)我は黻し子は佩せん。天下道無ければ、(三)我は負ひ子は戴かん。

㊀太祝の官人名は牧　㊁出仕して文黻大帶をつけん　㊂荷物をかついで隱居せん

徐人の歌

日月照照乎
寢已馳、與レ子
期二乎蘆之漪一。

漁父の歌

呉越春秋に、伍員(一)の呉に奔るや、追ふ者後に在り。江に至るに、江中に漁父有り。子胥之を呼ぶ。漁父渡さんと欲し、因り歌ふ云々。子胥は蘆の漪(二)に止るに、漁父又歌ふこと云々。既に渡るや、漁父之を視るに飢色有り。曰く子が爲に餉を取らんと。漁父去る。子胥(三)之を疑ひ、乃ち深葦の中に潜る。父來りて、麥飯(四)、鮑魚羹、盎漿を持して、之を求むれども見えず。因り歌つて之を呼ぶ云々。子胥出でゝ飲食し畢るや、百金の劍を解いて以て贈るに、漁父は受けず。其姓名を問ふも、答へず。子胥は漁父を誡めて曰く、子の盎(五)漿を掩うて、其をして露はれしむる無れと。漁父諾す。胥行くこと數歩にして、漁者は船を覆して、自ら江に沈みたり。

(六)日月照照として寢く已に馳す。子と蘆の漪に期せん。

(一) 楚の伍子胥楚の難を避けて呉に奔る (二) 次の詩參照以下皆之に倣ふ (三) 潛に追ふ者に密告するに非ずやと疑ふ (四) 麥飯と干物の煮つけと皿に盛れる汁 (五) 追ふ者を避けんがための用心なり (六) 日没して月上らんと

生焉。方ニ今之時。僅免レ刑焉。福輕ニ乎羽一。莫ニ之知レ載。禍重ニ乎地一。莫ニ之知レ避。已乎已乎。臨レ人以レ德。殆乎殆乎。畫レ地而趨。迷陽迷陽。無レ傷ニ吾行一。吾行卻曲。無レ傷ニ吾足一。

蠶則績而蟹有レ匡。范則冠而蟬有レ緌。兄則死而子皐爲ニ之衰一。

と。(七)殆いかな殆いかな、地に畫して趨るべし。(八)迷陽迷陽、吾が行を傷ること無れ。吾が行は(九)卻き曲る、吾が足を傷ること無れ。

(一)論語に見ゆ姓は陸名は通楚の隱者なり　(二)暗に孔子を指す　(三)聖人聖功を成就す　(四)聖人は隱居して生命を全うす　(五)今日の世には生命を全うして刑罰に觸れざれば夫にて可なり　(六)德を以て人に臨むの危險なるを意味す　(七)地に畫するが如く足を引いて趨るべし　(八)芒ありて人を傷づくる薇草　(九)退却して曲折す

成人の歌(一)

檀弓に、成人の、其兄死んで(二)衰を爲さゞる者有り。高子皐が成の宰と爲るを聞いて、遂に衰を爲す。成の人歌つて曰く、

(三)蠶は則ち績いで蟹に匡あり。(四)范は則ち冠して蟬に緌あり。(五)兄は則ち死して子皐之が衰を爲せり。

(一)成の地名なり禮記檀弓下篇に見ゆ　(二)服喪をいふ　(三)蠶は績けども絲筐は却て蟹にあり　(四)蜂は冠すれども冠の飾なる緌は蟬にあり　(五)兄の喪に服せざりし者が子皐の爲に衰服せり

緊洞潏兮流澌濩。舟楫逝兮仙不還。移形素兮蓬萊山。歍欽傷宮仙不還。

乃ち琴を援つて歌を作りぬ。

(六)緊洞たる潏の流澌は濩たり。舟楫逝いて仙は還らず。(七)形素を蓬萊山に移し、(八)歍欽宮を傷めども仙は還らず。

(一)春秋時代の善樂者 (二)感情を一處に完住せしむる方法 (三)東海中にありといふ三仙山の一 (四)棹さすこと (五)波濤の聲にいふ (六)瀾洞と疾く流るゝ潏水の流水は日夜に流れ去りて反ることなし (七)身心を仙山中に持來す (八)悲傷して蓬萊宮を望むとなり

接輿の歌(一)

鳳兮鳳兮。何如德之衰也。來世不可待。往世不可追也。天下有道。聖人成焉。天下無道。聖人

事は莊子に見ゆ。論語に載する所と、大同小異なり。

(二)鳳や鳳や、何如ぞ德の衰へたる。來世は待つべからず、往世は追ふべからず。天下道有れば(三)聖人成す。天下道無ければ、(四)聖人生す。(五)今の時に方りて、僅に刑を免れんのみ。福は羽より輕けれども、之を載することを知る莫く、禍は地より重けれども、之を避くるを知る莫し。已みなん已みなん、(六)人に臨むに德を以てするこ

乾レ澤而漁。蛟龍不レ遊。覆レ巢毀レ卵。鳳不ニ翔留一。慘予心悲。還レ原息レ陬。

盤操

澤を乾して漁すれば、蛟龍遊ばず。巢を覆して卵を毀れば、鳳は翔り留らず(一)慘として予が心悲しむ。(二)原に還りて陬に息はん。

(一)以下二句危亂の國は賢臣の入るべからざる所なるに喩ふ　(二)原は鄒原なり一說魯の陬といふ陬は孔子の生れし鄕邑の名

水仙操

琴苑要錄に、水仙操は、伯牙が作る所なり。(一)伯牙は琴を成連に學び、三年にして成る。精神寂漠、(二)情の專一なるに至りては、未だ得ること能はざるなり。成連曰く、吾の學は、人の情を移すこと能はず。吾が師方子春有り、東海中に在りと。乃ち糧を齎して之に從ふ。蓬萊山(三)に至り、伯牙を留めて曰く、吾將に吾が師を迎へんとすと。船を刺(四)して去り、旬時まで返らず。伯牙心に悲しみ、頸を延べて四望すれども、但海水の汨沒(五)、山林の窅冥、群鳥の悲號するを聞くのみ。天を仰いで歎じて曰く、先生將に我が情を移さんとするかと。

唐虞世兮麟鳳遊。今非二其時一來何求。麟兮麟兮我心憂。

孔叢子に、叔孫氏の車子（一）鉏商、野に樵して麟を獲たり。衆之を識るもの莫く、以て不祥と爲す。夫子往き觀て、泣いて曰く麟なり。麟出でて死す、吾が道窮すと。歌つて云々、

唐虞（二）の世には麟鳳（三）遊べり。今其の時に非ずして來るとも何をか求めん。麟や麟や我が心憂ふ。

（一）御者の古稱　（二）帝堯陶唐氏と帝舜有虞氏との世の中　（三）麟鳳は聖代に出づべき筈の靈物なるに今の亂世に出でたるを歎ずるなり

龜山操（一）

予欲レ望レ魯兮。龜山蔽レ之。手無二斧柯一。奈二龜山一何。

琴操に、季桓子は齊の女樂を受く。孔子諫めんと欲すれども得ず、退いて魯の龜山を望んで歌を作る。季（二）の魯を蔽ふに喩ふるなり。

予は魯を望まんと欲すれども、龜山之（三）を蔽ふ、手に斧柯（四）無し。龜山を奈何せん。

（一）操は琴曲を謂ふ龜山は魯地に在り　（二）季桓子を指す　（三）龜山を以て季氏に喩ふるなり　（四）斧なり山を斷つを得るに喩ふ生殺與奪の權利なきを怨しむなり

大道隱兮禮爲レ基。賢人竄兮將レ待レ時。天下如レ一兮欲二何之一。

楚聘の歌

孔叢子に、楚王は使をして(一)金幣を奉じて夫子を聘せしむ。宰予、冉有曰く、(二)夫子の道、是に至りて行はれんと。遂に見えんことを請ひ、問うて曰く、太公は身を勤め志を苦しめ、八十にして文王に遇へり。(三)許由の賢と孰與やと。曰く、許由は獨り其身を善くせし者なり。太公は天下を兼ね利せし者なり。然も今世に(四)文王無し。太公有りと雖も、孰か能く之を識らんと。歌つて曰く、

(五)大道隱れて禮は基と爲る。賢人竄れて將に時を待たんとす。(六)天下一の如し何くに之くことを欲せん。

(一) 金玉寶玉の聘物 (二) 孔子の理想が楚に往いて行はるべしとなり (三) 帝堯の讓を受けざりし古代の隱者 (四) 認めて拔擢任用すべき人物なし (五) 仁義道德の道頽廢して虛禮のみ流行すとなり (六) 愚に居るも楚に往くも天下は大同小異のみ

獲麟の歌

哉。維以卒歳。

違山十里。蟪蛄之聲。猶尚在耳。

狄水衍兮風揚波。舟楫顚倒更相加。歸來歸來胡爲斯。

㈣ 諸侯は士人を敗死せしむるに至る ㈤ 優遊自適して餘生を送らんとなり

(一)蟪蛄の歌

說苑に、孔子歌ふらく云々と。政は靜を尙んで(二)譁を惡むなり。

(三)山を違ること十里、蟪蛄の聲、猶尙耳に在り。

㈠ 一種の蟬なり蛬とも曰ふ ㈡ 喧びすしく騒ぐ義 ㈢ その喧噪を惡んで山を去ること遠けれども山蟬の聲耳にあるに喩ふ

河に臨みし歌

水經注に、(一)孔子趙に適かんとし、河に臨んで濟らず。歎じて歌を作る。

(二)狄水衍として風は波を揚げ、舟楫顚倒して更に相加はる。歸來せん歸來せん胡ぞ(三)斯を爲さん。

㈠ 論語參照 ㈡ 狄水(水名)が充ち溢れて旁ねく流れ通ずる貌 ㈢ 河を涉つて趙に赴くことを爲さじ

麛裘而鞸。投之無戾。鞸之麛裘。投之無郵。

袞衣章甫。實獲我所。章甫袞衣。惠我無私。

彼婦之口。可以出走。彼婦之謁。可以死敗。蓋優哉游

家語に、孔子始めて魯に用ひらる。魯人鷖之を誦す云々。三月に及んで政成り、化移に行はるゝや、又之を誦して云々。

(一)麛裘にして鞸す(二)之を投ずるも戾無し。鞸の麛裘、之を投ずるも郵無し。(三)

(一)聚に通ず語助の辭なり　(二)子羊の衣をつけて膝掛せるなり　(三)無禮を働きたりとて罪科に行はれずとなり

(一)袞衣章甫、實に我が所を獲たり。章甫袞衣、(二)我に無私を惠む。

(一)禮服禮冠の意　(二)公平無私を以て我々を統治すとなり

魯を去る歌

史記に、孔子魯に相として、魯大いに治る。齊人女樂(一)を歸る。季桓子之を受け、三日まで政を聽かず。郊(二)するに又膰を大夫に致さず。孔子遂に行く。歌つて曰く、

(三)彼の婦の口、以て出で走らしむべし。(四)彼の婦の謁、以て死敗すべし。(五)蓋し優なる哉游なる哉、維以て歲を卒へん。

(一)歌舞する女子の團隊なり　(二)天神を祭る祭祀の名　(三)女人の巧言令色は賢人をも出亡せしむ　(四)婦人の

而不レ可レ爲者。子孫困窮。被レ褐而負レ薪。貪吏常苦レ富。廉吏常苦レ貧。獨不レ見二楚相孫叔敖一。廉潔不レ受レ錢。

(一) 楚の優人名は孟といふ者 (二) 王覇の覇に同じ (三) 楚の地名史記に寢邱の四百戸を以て祀を奉ぜしむとあり
(四) 汚穢なる不名譽 (五) 幸福を享有するを得る意 (六) ぬのこを衣て自身に薪を採り擔ふ程の貧窮

子産の誦三章

左傳に、子産の政に從ふや、一年にして輿人(一)之を誦す云々。三年に及んで又之を誦すること云々

取二我衣冠一而褚レ之。取二我田疇一而伍レ之。孰殺二子產一。吾其與レ之。

我が衣冠を取つて之を褚にし、我が田疇を取つて之を伍(三)にす。孰か子産を殺すものぞ、吾は其れ之に與せん。

(一) 衆人の義なり與工にはあらず (二) 貯蓄する意なり (三) 五家にて互に相保持する義

我有二子弟一。子產誨レ之。我有二田疇一。子產殖レ之。子產而死。誰其嗣レ之。

我に子弟有り、子産之を誨ふ。我に田疇有り、子産之を殖(一)す。子産にして死せば、誰か其れ之に嗣がん。

(一) 繁殖し豐榮にす (二) 好き後繼者なきを悲しむとなり

孔子の誦二章

貪吏而不レ可レ爲而可レ爲。廉吏而可レ爲而不レ可レ爲。貪吏而不レ可レ爲者。當時有二汙名一。而可レ爲者。子孫以家成。廉吏而可レ爲者。當時有二淸名一。

掌を抵つて談語するに、歲餘にして孫叔敖に像たり。楚王の置酒するとき、優孟前んで壽を爲すに、王大いに驚いて以爲らく、孫叔敖復生ずるかと。以て相と爲さんと欲す。優孟曰く、楚相は爲るに足らざるなり。孫叔敖の相爲るや、忠を盡して廉なりき。王以て(二)伯たるを得たり。今死せしに、其子は貧にして薪を負へり。必ず孫叔敖の如くならんより、自殺せんに如かじと。因りて歌ふ云々。王乃ち孫叔敖の子を召して、之を(三)寢丘に封じたり。

貪吏は而ち爲るべからずして爲るべし、廉吏は而ち爲るべくして爲るべからず。貪吏は而ち爲るべからずとは、當時に(四)汙名有ればなり。而ち爲るべしとは、子孫以て(五)家を成せばなり。廉吏は而ち爲るべしとは、當時に淸名有ればなり。而ち爲るべからずとは、子孫困窮、(六)褐を被て薪を負へばなり。貪吏は常に富に苦しみ、廉吏は常に貧に苦しむ。獨り楚の相孫叔敖を見ずや、廉潔にして錢を受けざりき。

鸜鵒跦跦。公在乾侯。徵褰與襦。鸜鵒之巢。遠哉遙遙。稠父喪勞。宋父以驕。鸜鵒鸜鵒。往歌來哭。

澤門之皙。實興我役。邑中之黔。實慰我心。

り。稠父は喪勞し、宋父は以だ驕る。鸜鵒鸜鵒、往くに歌ひ來るに哭す。

(一)黒色にして両翼に白點ある一種の鳥名　(二)昭公を指す　(三)飛び跳ねて行く貌　(四)袴に同じ襦は短衣なり　昭公の飢寒を謂ふ　(五)昭公の名によりて謂ふ　(六)公子宋即ち定公を指す

澤門の皙の謳

左傳に、宋の皇國父太宰と爲り、平公の爲に、臺を門に築き、農收を妨ぐ。子罕は農功の畢るを俟たんことを請ふに、公許さず。築く者謳うて曰く、

澤門の皙、實に我が役を興す。邑中の黔、實に我が心を慰む。

(一)皇國父を指す色白くして澤門に近く住居せり澤門は宋の東城の南門名　(二)子罕を指す色黒くして居は邑中にありき

忼慷歌

歌は孫叔敖が傳に見ゆ。史記滑稽傳に載する所と相類す。史記を此に附錄せん。楚の相孫叔敖死す、其子窮困して薪を負へり。優孟之を憐み、即ち孫叔敖が衣冠を爲り、

牛則有レ皮。犀兕尚多。棄レ甲則那。
從其有レ皮。丹漆若何。

鸜之鵒之。公出辱之。鸜鵒之羽。公在二外野一。往饋二之馬一。

役人の又歌へる

(一)牛には則ち皮有り、(二)犀兕は尙多し。甲を棄つとも則ち那かあらん。

(一) 牛皮は多しいくらにても甲冑を製すべしとなり (二) 犀は巨獸兕は野牛共に牛より大にして皮多しとなり

(一)從ひ其れ皮有りとも、(二)丹漆を若何せん。

(一) 縱令に同じ (二) 甲を飾る赤漆の塗料なり戰敗の恥を雪ぐ能はずとの意

(一)鸜鵒の歌

左傳に、魯の文公の世の童謠なり。昭公の時に至り、鸜鵒の來り巢ふもの有り。公の季氏を攻むるや、敗れて齊の外野に出奔し、乾侯に屯ること八年、外に死す。昭公を歸葬す、名は稠。公子宋立つ、是を定公と爲す。

鸜や鵒や、(二)公出でし辱しめらる。鸜鵒の羽、公外野に在り。往いて之に馬を饋らん。鸜鵒(三)跦跦たり。公乾侯に在り、(四)褰と襦とを徵す。鸜鵒の巢、遠い哉遙遙た

暇豫之吾吾。不レ如二鳥烏一。人皆集二于苑一。己獨集二于枯一。

睅其目。皤其腹。棄レ甲而復。于思于思。棄レ甲復來。

(二)暇豫の吾吾は、烏烏に如かず。人皆苑に集る(三)に、己獨り枯(四)に集る。

㊀宴飲の半なる時　㊁間暇にして心樂しむ時他に親しまざるは烏鳥の群集して相樂しむに如かず　㊂庭中草木の繁茂せるところ即ち奚齊の黨を指す　㊃枯木なり里克獨り申生に與せるを笑ふなり

宋の城く者の謳

左傳に、鄭の公子、命を楚に受けて宋を伐つ、宋の師敗績、華元を囚ふ。宋人兵車百乘、(一)文馬四騆を以て、華元を鄭に贖ふ。(二)半入りしころ、華元逃れ歸りぬ。後に宋の城くや、華元は(三)植と爲りて功を巡るに、城く者謳うて以て之を譏る。華元は(四)驂乘者をして之に答へしむるに、役人は又復之を歌ひき。

(五)睅たる其の目、(六)皤たる其の腹。(七)甲を棄てて復る。(八)于思よ于思よ、甲を棄てて復來る。

驂乘の答へし歌

㊀飾れる四頭立の馬四組　㊁半分程鄭國に納めし頃　㊂築城監督の役名　㊃副乘者　㊄目の大なる貌　㊅腹の大なる貌　㊆宋軍を失ひしを指す　㊇思は鬚の略ひげ多きを謂ふ

臣在二爾側一。吾當三與レ汝適二楚國一。

百里奚。五羊皮。憶二別時一。烹二伏雌一。炊二扊扅一。今日富貴忘レ我爲。

琴歌

風俗通に、百里奚が秦の相爲るとき、堂上に樂作る。賃する所の(一)澣婦あり、自ら言ふらく音を知ると。因りて弦を撫して歌ふ。之を問ふに、乃ち故の妻なりき。

百里奚、(二)五羊の皮。別れし時を憶ふに、(三)伏雌を烹て、扊扅を炊けり。今日富貴なるに我を忘るゝことを爲る。

(一)洗濯女　(二)百里奚楚に執へらるゝや秦の穆公は五羊の皮を以て贖うて臣としたり　(三)卵をぬくむる雞を殺して共に食し扉の扃を焚いて薪としたる貧窮をいふなり

暇豫の歌

國語に、晉の優施は驪姫に通ず。姫は申生を害せんと欲するも、而も里克を難かる。乃ち里克に酒を飲ましめ、(一)中飲のとき、優施は起ち舞つて曰く、

單衣適至レ骭。從レ昏飯レ牛薄二夜半一。長夜漫漫何時旦。

滄浪之水白石粲。中有二鯉魚長尺半一。弊布單衣裁至レ骭。清朝飯レ牛至二夜半一。黃犢上レ坂且二休息一。吾將レ捨レ汝相二齊國一。

出二東門一兮厲石班。上有二松柏一靑且闌。麤布衣兮縕縷。時不レ遇二兮堯舜主一。牛兮努力食二細草一。大

㊀ 元衛人にして後に齊桓公の上卿となりし人なり戚は又[illegible]に作る ㊁ 世道の衰頽に喩ふ矸は山に石ある貌 ㊂ 堯舜禪讓の聖代に逢はず ㊃ 自己の窮困を稱するなり

滄浪の水白石粲たり、中に鯉魚の長さ尺半なる有り。弊布の單衣は裁に骭に至り、清朝より牛を飯うて夜半に至る。黃犢は坂を上りて且に休息すべし、吾將に汝を捨てて齊國を相けんとす。

㊀ 一本に滄浪に作る山東の水名なりとぞ詩意は淸深の川には鯉魚あり聖代には賢臣ありとなり ㊁ 先刻坂を上りし小牛は休息せるならん我は汝と別れて齊の大臣とならん

東門を出づれば厲石班たり。上に松柏有り靑うして且闌ふ。麤布の衣は縕縷れ、時は堯舜の主に遇はず。牛よ努力して細草を食へ、大臣爾が側に在り。吾當に汝と楚國に適くべし。

㊀ 砥石の類なり齊公に喩へて有望ならざるを歎ずるなり ㊁ 綿の破れ去る義 ㊂ 天下の大臣なり自ら負ふなり ㊃ 齊に望無し去りて楚に入らん

用不ㇾ擾。在二帝夷羿一。冒二于原獸一。忘二其國恤一。而思二其麀牡一。武不ㇾ可ㇾ重。用不ㇾ恢二于夏家一。獸臣司ㇾ原。敢告二僕夫一。

南山矸。白石爛。生不ㇾ逢二堯與ㇾ舜禪一。短布

にせず。(九)獸臣原を司どる、敢て僕夫に告ぐ。

(一)周武王の太史官なり (二)狩獵を掌る官名 (三)芒々たる往古帝禹の事業を考査す (四)九州の道を開く (五)居るべき住居なり一說居室と寢廟とに分つ (六)羿は射を善くし夏王を逐うて自立せし人 (七)獸の牝牡を獵する事のみ考ふ (八)武事に長けたりとも國家を恢弘する能はずとなす (九)虞人自ら謂ふなり僕夫は君王の執事を斥す

牛を飯ふ歌

淮南子に、甯戚(一)は齊の桓公に干めんと欲するも、困窮にして以て自ら達する無し。是に于て商旅と爲り、車に任して以て齊に商ひせんとし、暮に郭門の外に宿る。桓公客を迎郊し、夜門を開いて任車を辟く。爝火甚だ衆し。越は牛に車下に飯せしめ、牛角を擊つて疾く商歌す。桓公之を聞いて曰く、異なる哉、非常の人なりと。後車に命じて之を載せ、因り授くるに政を以てせり。

(二)南山矸たり、白石爛たり。生れて堯(三)と舜との禪に逢はず。短布(四)の單衣は適に骭に至り、昏從り牛を飯うて夜半に薄る。長夜漫漫何の時か旦けん。

一命而僂。再命而傴。三命而俯。循ㇾ墻而走。亦莫ニ余敢侮一。饘ニ于是一。粥ニ于是一。以餬ニ予口一。

芒芒禹跡。畫爲ニ九州一。經ニ啓九道一。民有ニ寢廟一。獸有ニ茂草一。各有ㇾ攸ㇾ處。德

鼎銘

左傳に、宋の正考父は、戴、武、宣を佐け、(一)三命せられて、滋益恭し。其の鼎銘に云ふ、

一命にして(二)僂し、再命にして傴し、三命にして俯す。(三)墻に循つて走る、亦余を敢て侮ること莫れ。(四)是に饘し、是に粥し、以て予が口を餬す。

(一)一命には士再命には大夫三命には卿となるなり (二)腰を曲ぐるなり背を曲ぐるを傴とし頭を垂るゝを俯とす (三)道路の中央を行かず遠慮して兩側を通行す (四)是の鼎によりて粥を作り飲食すとなり

虞の箴

左傳に、魏莊子は晉侯に謂つて曰く、昔は(一)辛甲の太史爲るや、百官に命じて、王の闕を箴せしむ。(二)虞人の箴に於ては曰く、

(三)芒芒たる禹跡、畫して九州と爲し、(四)九道を經り啓く。民に(五)寢廟有り、獸に茂草有り。各〻處る攸有りて、德用て擾れざりき。(六)帝夷羿に在りては、原獸を冒り、其の國の恤を忘れて、其の(七)麀牡を思ふ。武は重くすべからず、用て(八)夏家を恢い

祈招之愔愔。式昭二德音一。思二我王度一。式如レ玉。式如レ金。形二民之力一。而無二醉飽之心一。

鳳凰于飛。和鳴鏘鏘。有嬀之後。將レ育二于姜一。五世其昌。並二于正卿一。八世之後。莫二之與京一。

(一)左傳に、楚の子革云ふ、周の穆王、其心を肆にして、周く天下を行らんと欲す。將に皆車轍馬跡有らんとす。祭公謀父、祈招の詩を作つて、以て王の心を止むと。

(二)祈招の愔愔たる、式て德音を昭かにす。(三)我が王の度を思ふに、式て玉の如く、式て金の如し。(四)民の力を形して、醉飽の心無し。

㊀昭公十二年の條に見ゆ　㊁樂音の名なるべし安和にして自ら德音を明々にすとなり　㊂王法を考へて金玉の如く美ならしむとなり　㊃民の力を量り型式の外に醉飽せしむる勿れとなり

懿氏の繇

(一)左傳に、陳の大夫懿氏、敬仲に妻はするを卜す。其妻之を占す、曰く吉なり。詞に曰く、

(二)鳳凰于き飛び、和鳴して鏘鏘たり。(三)有嬀の後、將に(四)姜に育はれんとす。五世にして其れ昌え、正卿に並び、八世の後は、之と與に(五)京なるもの莫らん。

㊀莊公二十二年の條に見ゆ　㊁鳳凰の雌雄相和鳴するを謂ふ　㊂陳の嬀氏なり陳の子孫齊に育はれんとなり　㊃齊の姜氏　㊄大なり並び立ち得る人無からんとなり

輔人無苟。扶人無咎。

原泉滑滑。連旱則絶。取事有常。賦斂有節。

白雲在天。丘陵自出。道里悠遠。山川閒之。將子無死。尙復能來。

(一)人を輔くるに苟もする無れ、人を扶くれば咎無し。

(一)杖によりて他人を扶助する心得を説くなり

井に書す

(一)原泉滑滑たるも、連旱には則ち絶ゆ。(二)事を取るに常有れ、(三)賦斂に節有れ。

(一)泉源潤澤なれども旱天連旬の時は欲盡すべし　(二)事業をなすに休養をなさゞれば終には生命をも失ふべしとなり　(三)人民に租税を賦課するに一定の節あるべしとなり

白雲の謠

穆天子傳に、乙丑、天子は西王母を瑤池の上に觴す。西王母天子の爲に謠つて曰く、白雲天に在り、丘陵自り出づ。(一)道里悠遠、山川之を間つ。(二)子を將て死無しとするも、尙復能く來らんや。

(一)仙宮は極めて遠しとなり　(二)君王を不死の人とするも來ること能はざらんとなり

祈招

之。
行必履レ正。無
懐二僥倖一。
石墨相著而
黑。邪心讒言。
無レ得レ汙レ白。
忍レ之須臾。乃
全二汝軀一。

㊀ 戸を出づる時にも戒愼し戸を入る時にも恐懼す

履に書す

(一)行に必ず正を履み、(二)僥倖を懐ふこと無れ。

㊀ 行歩の行なり轉じて德行の義 ㊁ 正當の手段によらずして得る幸福

硯に書す

(一)石墨相著きて黑し。(二)邪心讒言、白を汙すを得しむる無れ。

㊀ 硯・墨と相近づきて墨汁を作る ㊁ 讒邪の徒を近づくること勿れとなり

鋒に書す

(一)之を忍ぶこと須臾なれば、乃ち汝の軀を全うせん。

㊀ 我人を殺せば人我を殺すの義なり忍耐の要を戒愼するなり

杖に書す

造レ矛造レ矛。少間弗レ忍。終レ身之羞。余一人所レ聞。以戒二後世子孫一。

矛を造り矛を造る。(一)少間忍びずば、身を終ふるまで之を羞ぢん。(二)余一人の聞く所もて、以て後世子孫を戒しむ。

㊀ 濫用すべからざるを說く ㊁ 余が意見を以て後世を警戒すとなり

車に書す

太平御覽に、(一)太公が金匱を引く。武王曰く、吾師尚父の言に隨つて、因つて書銘を爲ると。

自致者急。載レ人者緩。取レ欲無レ度。自致而反。

(二)自ら致す者は急に、人を載する者は緩し。欲を取ること度無ければ、(三)自ら致すに反らん。

㊀ 太公望呂尚なり師尚父も同じ ㊁ 自ら其事を使用する時 ㊂ 自ら其車に乘りながら餘りに急を欲する爲に顚覆すとなり

戶に書す

出畏レ之。入懼レ

(一)出づるに之を畏れ、入るに之を懼る。

惡乎危。於二忿懥一。惡乎失レ道。於二嗜欲一。惡乎相忘。於二富貴一。

(一)惡んか危き、忿懥に於てす。(二)惡んか道を失ふ、嗜欲に於てす。惡んか相忘る、富貴に於てす。

㊀ 憤怒の時は危險此上もなしとなり ㊁ 嗜欲を逞しうせんと欲して道を忘れ富貴にして舊時を忘るゝは小人の情なり

衣の銘

桑蠶苦。女工難。得レ新捐レ故。後必寒。

(一)桑蠶は苦、女工は難。新を得て故を捐つれば、後必ず寒し。

㊀ 養蠶裁縫の困難を想うて猥に新奇の衣をのみ求むる勿れ、奢侈の後は必ず貧窮せんとなり

筆の銘

豪毛茂茂。陷レ水可レ脫。陷レ文不レ活。

(一)豪毛茂茂たり。(二)水に陷るは脫すべきも、文に陷るは活きず。

㊀ 筆の毛の豐盛なる貌 ㊁ 水に溺るゝは救ふべし筆に任せて濫用せる者は駟馬も追ひ難しとの義

矛の銘

農虞夏。忽焉沒兮。吾適安歸矣。吁嗟徂兮。命之衰矣。

與三其溺二於人一也。寧溺二于淵一。溺二于淵一。猶可レ游也。溺二于人一。不レ可レ救也。

火滅修レ容。愼戒必恭。恭則壽。

㊀本家とし尊崇す ㊁首陽山を謂ふ ㊂武王の暴力もて紂王の暴虐に代る ㊃神農氏有虞氏夏禹氏皆既に亡し ㊄死し去らんのみ吾人の運命も盡き果てたり

盥盤の銘（一）

以下の銘辭は、大戴禮に見ゆ

（二）其の人に溺れんよりは、寧ろ淵に溺れよ。淵に溺るゝは、猶游ぐべきも、人に溺るゝは、救ふべからず。

㊀周の武王が自戒の語なり ㊁祭祀の時手を洗はんとしてその水によりて自ら戒愼するなり

帶の銘

（一）火滅ゆるも容を修めて、愼戒して必ず恭しくせよ、（二）恭しければ則ち壽し。

㊀夜深く帶を解いて寢ぬるにも容儀を整ふるなり ㊁恭敬なれば長命なり

杖の銘

麥秀漸漸兮。禾黍油油。彼狡童兮。不レ與二我好一兮。

登二彼西山一兮。采二其薇一矣。以レ暴易レ暴兮。不レ知二其非一矣。神

麥秀の歌

史記に、箕子(一)の周に朝するや、故の殷の墟(二)を過ぐ。宮室の毀壞して、禾黍を生ずるに感じ、箕子之を傷む。哭せんと欲すれば則ち不可、泣かんと欲するに爲其れ婦人に近し。乃ち麥秀の詩を作つて、以て之を歌ふ。

麥秀でて漸漸(三)たり、禾黍油油(四)たり。彼の狡童(五)、我と好からざりき。

(一)尚書大傳に微子に作る　(二)荒廢せる城趾　(三)秀て出づる貌　(四)盛んなる貌　(五)紂王に喩ふ我が諫を受けざりしをいふ一本好仇とせずに作る

采薇の歌

史記に、武王已に殷の亂を平らげ、天下(一)周を宗とす。伯夷叔齊は之を恥ぢ、義をとりて周の粟を食はず、薇を首陽山に采る。餓ゑて且に死せんとし、歌を作る。

彼の西山に登つて、其薇を采る。(三)暴を以て暴に易ふ、其非を知らず。(四)神農虞夏、忽焉(二)として沒しぬ。吾適に安くんか歸せん。(五)吁嗟徂かん、命の衰へたること。

其英。沐日浴月百寶生。

逢逢白雲。一南一北。一西一東。九鼎既成。遷于三國。

嗛嗛之德。不足就也。不可以矜。而祗取憂也。嗛嗛之食。不足狃也。不能爲膏。而祇離咎也。

㊀ 封禪の時に用ひる玉牒なるべし ㊁ 夏王の守護神たる南方陽盛を司る火德の神なり即ち帝顓頊の子なり ㊂ 日月の德澤に沐浴して國家に百寶を生ず

夏后が鑄鼎の繇(一)

困學紀聞に云ふ。太卜(二)三兆、其頌は皆千有二百。夏后鑄鼎の繇に云々

(三)逢逢たる白雲、一は南し一は北し、一は西し一は東す。九鼎既に成り、三國に遷る。

㊀ 卦兆の占辭を曰ふ ㊁ 卜筮の官人 ㊂ 煙雲の起り出づる貌にいふ

商銘(一)(國語)

(二)嗛嗛の德は、就くに足らざるなり。以て矜るべからず、祗憂を取らん。(三)嗛嗛の食は、狃るゝに足らざるなり。膏を爲す能はずして、祗咎に離らん。

㊀ 鼎に銘せる戒文なり ㊁ 小なる貌小德は誇るに足らず却つて憂患にかゝらんとなり ㊂ 小なる利祿は却つて不利益を來すとなり膏は肥膏利德の義

辰有レ行。四時順レ經。萬姓允誠。於予論レ樂。配二天之靈一。遷二于賢善一。莫レ不二咸聽一。鼚乎鼓レ之。軒乎舞レ之。菁華已竭。褰レ裳去レ之。

の靈に配せん。(五)賢善に遷るに、咸く聽かれざる莫らん。(六)鼚乎として之を鼓うち、(七)軒乎として之を舞はす。(八)菁華已に竭きぬ。裳を褰げて之を去らん。

㊀八伯の歌に對し帝の再び歌へる意　㊁常道の意　㊂一本誠を成に作る　㊃樂は歷代の氣象を表はして上帝の靈意にかなふとなり　㊄一本善に讓るに遷るに作る　㊅鼓聲を謂ふ　㊆舞ふ貌　㊇英華に同じ帝自ら予の英華盡きたればいざ裳をかゝげて此の位を去らんと言ふなり

南風歌

南風之薰兮。可三以解二吾民之慍一兮。南風之時兮。可三以阜二吾民之財一兮。

家語に、舜は五絃の琴を彈じ、南風の詩を歌ふ。其詩に曰く

(一)南風の薰ずる、以て吾が民の慍(二)を解くべし。南風の時(三)なる、以て吾が民の財を阜にすべし。

㊀快よく吹ける南風　㊁人民の煩悶を解く　㊂時節を誤らず吹くために萬物を長養し民財を豐にするなり

禹の玉牒の辭(一)

祝融司レ方發二

(二)祝融方を司つて其英を發し、(三)日に沐し月に浴して百寶生ず。

卿雲爛兮。糺縵縵兮。日月光華。旦復旦兮。

明明上天。爛然星陳。日月光華。弘二予一人一。

日月有レ常。星

卿雲歌

尚書大傳に、舜は禹に禪る。是に於て俊乂百工、相和して歌卿雲(一)を爲る。帝之を倡ふ。八伯咸稽首して和す。帝乃ち載歌す。

卿雲爛たり。(二)糺縵縵たり。日月光華あり、(三)旦復旦。

(一) めでたき雲なり慶雲に同じ　(二) 紛乱して舒緩なる貌　(三) 毎朝の光華を指し暗に舜を以て禹に喩へ禪位のことを寓するなり

八伯歌

明明たる上天、(一)爛然として星陳る。日月の光華ある、(二)一人より弘まる。

(一) 燦爛たる衆星の光あれども日月の光華に及ばずとなり　(二) 帝の恢弘に因るとの意

(一)帝載歌

日月常有り、星辰行有り。四時(二)經に順ひ、萬姓(三)允誠なり。於予樂(四)を論ずるに、天

立ニ我蒸民ー。莫レ匪ニ爾極ー。不レ識不レ知。順ニ帝之則ー。

我が蒸民を立つる、(二)爾の極に匪ざる莫し。識らず知らず、帝の則に順ふ。(三)

(一)五辻を康とし四辻を衢とす四通五達の地を指す　(二)衆民に同じ　(三)聖帝の至極せる徳に由るとなり爾とは堯を指して言ふ

伊耆氏の蜡の辭

土反ニ其宅ー。水歸ニ其壑ー。昆蟲毋レ作。草木歸ニ其澤ー。

禮記の郊特牲に云ふ、伊(一)耆氏始めて蜡を爲す。蜡は索なり。歲の十二月、萬物を合聚して之を索饗するなり。祝辭に曰く、

(二)土は其宅に反れ、水は其壑に歸れ。(三)昆蟲作ること毋れ、草木其澤に歸れ。

(一)伊祁氏に同じ蜡は年末に萬神を饗する禮祭の名　(二)耕地安全にして水は地を犯さず　(三)害蟲起り來らず雜草は耕地に生ぜざれとなり

堯(一)戒　（淮南子人間訓）

戰戰慄慄。日謹ニ一日ー。人莫レ躓ニ于山ー。而躓ニ于垤ー。

(二)戰戰慄慄、日に一日より謹しめ。人は山に躓くこと莫くして、(三)垤に躓く。

(一)帝堯自ら戒しむる辭なり　(二)恐れ戰く義　(三)小高き土地なり蟻づかなどを謂ふ小事に喩ふ

日出而作。日入而息。鑿井耕田而食。帝而飲。力于我何有哉。

古詩源巻一

古逸

撃壌の歌

帝王世紀に、帝堯の世天下太和、百姓無事なり。老人有り、(一)壌を撃つて歌ふらく、

(二)日出でて作し、日入つて息ふ。井を鑿つて飲み、田を耕して食ふ。(三)帝力我に于て何か有らんや。

(一)木製の玩具なりとぞ　(二)日出と共に自ら耕作す　(三)帝王の御蔭を被ること無き義

康衢の謠

列子に、帝は天下を治ること五十年、天下の治るか治らざるか、億兆の己を戴くを願ふかいなかを知らず。乃ち微服して(一)康衢に遊び、兒童の謠を聞くに、云ふ

を開きて燦然詩の源流を得しむるものは、獨り本書に於て近しとなす。是れ本書の誇りとすべき所なり。夫の張玉穀の古詩賞析は、全く本書を本としたるものなり。試に兩書採摭の詩數を較算するに、本書は全詩數九百七十六首、古詩賞析は七百五十一首なり。本書に在りて賞析に無き詩は三百三十九首なり、賞析に在りて本書に無き詩は百十四首なり。差引すれば六百三十七首は同一の詩を集めたるものなり。賞析は字句の解釋を施せるを以て、容易に其の義を領會せしむる功あるも、詩數の多くして、觸類に資する點に於ては、賞析は本書に讓らざるを得ざるなり。

大正十一年八月

文學博士　岡田正之識

得ずとは、德潛の意見なり。故に庾信の詩に取るものは二十四首。由來北方の音節は鏗鏘たる所あり、故に企喩歌・折楊柳歌詞特に木蘭詩等は漢魏の遺響ありと稱せられ、北齊の勑勒歌も亦同じ。是れ武弁の風氣の然らしむる所なるべし。

(三)隋詩　隋詩は煬帝等十六人の詩を載す。煬帝の戀愛的の詩は陳の後主と同じきものあるも、邊塞の諸作に至りては矯然たる所ありしは、六朝の風氣の轉換して唐に入らんとする過渡期の作たるを表するものなり。楊素の詩も亦淸思健筆唐代詩風の基を開きたるものなり。

第五章　本書の特長

古來古詩の編纂せられたる書は極めて多し、然れども卷帙の浩瀚にあらざれは古詩樂府の專集なり。然らざれば分類區別して詩の本末を得るに苦むものなり。廣義なる古詩の意味を以て、著名なる作品を採り、時代の順序を逐ひ、讀者をして卷

なるを以て、取る所多く、謝靈運は二十五首、鮑照は四十二首あり、詩數に於ては鮑照は淵明の下曹植の上に在るものなり。

(六)齊詩　齊詩の作家は寥々たるものにして、僅に七人に過ぎず、之が代表をなせるものは謝朓なり、三十四首の登錄を得たり。

(七)梁詩　作家は二十人、外に樂府十餘首を載す。　武帝・簡文帝・元帝の詩あり、十二三首を有するものは沈約・江淹・何遜の三人なり。

(八)陳詩　陳も收むる所の詩人は九人なり。　梁に比すれば詩格愈〻降れりとは公論なり。　其の中陰鏗・徐陵は一代の作者たるを失はざるものなり。

(九)北魏詩　附けたりとして五人の詩を收む。

(一〇)北齊詩　是も附けたりとして五人の詩を載す。

(一一)北周詩　是も附けたりなるが、作家は僅に庾信王褒の二人なり、庾信は才華にして風骨の長ずる所あり、徐・庾は名を竝ぶるも、徐陵は庾信の後に瞠若たらだるを

り、就中曹植の詩を錄すること尤も多く、三十八首に及ぶ、詩數の多きは宋の鮑照に亞ぐ、德潛は「蘇李以後陳思(曹植は陳思王なり)繼ぎて起り、父兄多才、彼は尤も獨歩す、故に一大宗となすべし」と稱揚せり。是れ其の詩を取るの多き所以なり。次に建安七子の詩一二首づつを收め、阮籍の詠懷二十首は悉く收錄し、最後に吳の詩二首を取れり。

(四)晉詩。 晉の作者として收めたるは三十二人なるが、張華・陸機・左思は十首以上を取り、傅玄・東晳・郭璞等は六首餘に過ぎず、本書中最も多く收錄したるは陶淵明の詩なり、六十九首の多きに上れり。淵明の詩の超絕卓出せることは、古人の定評にして、德潛も「過江の末季、(東晉の季世)陶公を挺生し、無意詩を作り、斯に至詣に臻る、第に典午(司馬氏=晉)中に於て一指を屈するのみならず」と、是れ大に其の詩を採りし所以なり。後に歌謠十三首を載せたり

(五)宋詩。 宋詩としては十八家を收む、謝靈運と鮑照とは二妙と稱せられしもの

事詩なり。其の次に古詩十五首を載す、是亦李陵・蘇武の詩と共に漢代に於ける代表的の詩なり、此の外兩漢時代の歌謠を取るもの少なからず。

古詩と樂府　古詩と云ひ、樂府と云ふも、其の詩たるは一なるも、古詩は情思を抒ぶるを主とし、樂府は聲調を顧慮せざるべからず、故に想の上に於ては同じきも、辭の上に於ては異ならざるを得ず。德潛は其の區別の例を示して曰く、「風騷(詩經楚辭)既に息みて、漢人代〻興り、五言は標準となれり。五言の中に就て言へば、較然として兩體あり、蘇李の贈答・無名氏の十九首は古詩の體なり。廬江小吏妻・羽林郎・陌上桑の類は樂府の體なり。昭明(文選の選者)獨り雅音(詩)を尙びて、樂府に略す、然れども措詞叙事は樂府を長ぜりとなす」と。又漢代の樂府に風雅頌の三體を具へたることを述べて曰く、「安世房中歌は詩中の雅なり、漢武の郊祀等は詩中の頌なり、廬江小吏妻・羽林郎・陌上桑等は詩中の國風なり」と。

(三)魏詩　魏の作者としては十五人を取り、武帝・文帝・明帝及び曹植は其の首に居

(一)古逸　古逸には唐堯時代の詩と稱せらるる撃壤歌・康衢謠を首とし、秦代に至るまでの詩として禮記・左氏傳・國語・史記・淮南子・新序等の經史諸子に見ゆる歌謠銘箴の類を取り、終りには諧語・古語・古諺等をも收めたり。是れ選者が例言に於て「古逸を雜錄して、漢京に冠し、詩の源を窮む」と言ひし所以なり。但し舜と皐陶との倡和の句として有名なる元首股肱の歌を載せざりしは、慊焉の情なきを得ざるなり。

(二)漢詩　歷代詩中最も多きを占めしは漢詩なるべし。高祖の大風、項羽の拔山を始めとし、唐山夫人の安世房中歌・武帝の瓠子歌・秋風辭あり、柏梁臺の詩、韋孟の諷諫詩、又は東方朔・司馬相如・卓文君等の作も采錄せられ、蘇武と李陵との贈答は、五言古詩の標準として載せられ、後漢には張衡の四愁詩、蔡邕の飮馬長城窟行、秦嘉の贈婦詩あり、女流の詩として蘇伯玉の妻及び蔡琰の詩あり、諸葛亮の梁父吟を以て終りとし、又更に樂府歌辭三十餘種を收めて、樂府の辭調を味はしめ、次に、廬江小吏妻作を擧ぐ、其の作は一千七百三十五字、古來長篇の詩としては第一と稱せらるる敍

武の古詩十九首、又は近體の律絶に對せる五言七言の古詩の如きは、狹義の古詩に屬す。淸の王漁洋の古詩選は是なり。廣く古詩・古樂府・歌・謠・俚諺等すべての韻語を兼ね稱する如きは、廣義の古詩に屬す。明の馮惟訥の古詩紀は是なり。

體裁　本書は廣義に從ひ、極めて簡約に、上代より六朝の終に至る詩樂府謠諺を採り、時代の順序を逐ひて之を編次し、時には來歷を註し、批評を下したり。本來は十四卷なるも、或は合して四卷となしたるものもあり。

第四章　內容の一班

本書は時代の上よりして古逸、漢詩、魏詩、晉詩、宋詩、齊詩、梁詩、陳詩、隋詩に分ち、陳詩の次に附として、北魏詩、北齊詩、北周詩を收めたり。卷首に例言あり、各時代に於ける作者の概評を下し、併せて採錄の方針をも暗示せり。讀者は一瞥せざるべからざるなり。今古逸以下に就き內容の一斑を述べんとす。

て風に從ひ、前後の七子(明代文學の士の李夢陽、何景明、徐禎卿、邊貢、康海、王九思、王廷相を前七子と稱し、李攀龍、李先芳、謝榛、吳維、王世貞、徐中行、吳國倫を後の七子と號す)互に相羽翼となり、彬彬として盛んなりと稱す。然れども其の敝や株守甚だ過ぎて、冠裳せる土偶の如し。學者之を咎めて、唐を守りて上その源を窮むること能はざる由れりとせり。唐詩は宋元の上流にして、古詩は又唐人の發源なり。予前に樹滋陳子と唐詩を輯めて帙を成し、其の盛を窺ひぬ。茲に復隋陳より溯りて上は黃軒を極む、凡そ三百篇。楚騷より外、郊廟樂章より童謠里諺に至るまで備采せざるなし。書成りて一十四卷を得たり。敢て已に古詩を盡くしたりとは謂はず、而して古詩の雅なるものは略此に盡くせり。凡そ詩を學ぶものの爲に之を源に導かんとするなり。

是れ以て選次の動機・目的及び書名の出づる所以を知らるべし。

古詩　古詩と稱せらるるものに二種あり、一を狹義とし、一を廣義とす。夫の蘇

も遂く、當時江南の詩社甚だ盛んに、士人は皆蘇東坡・陸放翁の學を宗として、硬語盤詩を事とせしが、德潛特り巍然として古體は漢魏を宗とし、近體は必ず盛唐を宗とし、元和以下の詩は視て別派となしたり。其の宗旨既に此の如し、故に其の選する所の詩集も、亦精醇ならざるなし。是れ本書及び別裁集の世に重んぜらるる所以なり。

第三章　選次の趣旨體裁

趣旨　本書は康熙五十八年(二三七九)に成れるものなれば、德潛が四十七歲の時の選次に係かれり。其の自序に選次の趣旨を述ぶ、今其の大要を擧ぐれば左の如し。

詩は唐に至りて極盛となり。然れども詩の盛は詩の源にあらざるなり。明の初に、宋元の遺習を承けしが、李獻吉の唐詩を以て振ひしより、天下靡然とし

及ぶものあらずといふ。徳潛は天與の幸福にも厚く、九十七歳の長壽を保ち、乾隆三十四年(二一四二九)家に薨ず。朝廷より文愍の謚を賜ひ、太子太師を贈らる。其の著に詩集三十卷、古文集三十卷、詩餘一卷あり。選錄には本書を始め、唐詩別裁集・明詩別裁集・國朝詩別裁集あり、又唐宋八大家文の選評あり。詩話として說詩晬語あり。倶に世に行はる。

性格詩風 徳潛は資性淡白にして傲らず、務めて溫顏を以て人を待ち、階級を其の間に設けず、更に干進の志なく、嘗て詩を賦して、

遙指雲嵐有故廬。野人只合伴猿狙。
自嘲一事輸韓愈。光範門前不上書。

といふ。其の八大家文を輯むるに及び、韓愈が干求の諸篇を取らず、是れ以て性格の一斑を窺ふべし。

徳潛學に深く文に工に、文章は專ら王堯峰の家法を守れり。詩學に於いては尤

卽延寶元年皇紀二三三三年)に浙江の長洲に生る。字を士確といひ、晩年に韓退之の「歸愚識夷塗」の句に取りて其の書齋を歸愚と名け、又自ら歸愚老人とも署せり。少き時より聰穎にして讀書を好む。弱冠にして博士の弟子員となり、屢〻省試に應ぜしも、及第せず、乾隆元年(二三九六)に博學鴻詞の科に薦められしも亦第せず、四(二三年九九)に始めて進士に登第せり、時に年六十七なりき。尋で翰林に入り、編修の官を授けられ、十年ならずして內閣學士禮部侍郎にまで進む。十四年(二四〇九)に至り年の老いたるを以て致仕したり。其の官に在る、最も乾隆帝の知遇を受け、退老する時、帝は詩を賜ひ、且つ曰く、「朕は德潛と詩を以て始め詩を以て終はる」と。歸鄕後も眷遇益〻隆んにして、前後賜ふ所の詩は四十餘首、酬和するものに至りては多くして數ふべからざるなり。帝嘗て五言八韻の詩を賜ふ、其の起句に「我愛德潛德。淳風挹古初」とあり、司寇の錢香樹は「帝愛德潛德。我羨歸愚歸。」と贈りしことは、當時の藝林の一佳話なりき。古來詩人の寵遇を得たるの厚きものは德潛に

古詩源解題

第一章　總　略

古詩源は支那の古代より六朝の終に至るまでの著名なる詩を集めたるものなり。選者は唐詩別裁集の編者、特に唐宋八大家文の評選者として名を我が近時の士人にまでも知られたる沈德潛なり。八大家文と唐詩別裁集とは、漢文を讀み漢詩を誦するものの標準とする所なるが、古詩源も亦古詩を學び、古詩の沿源を窮めんとするものの閲讀せざるべからざる書なり。

第二章　選者の小傳

閲歴　淸の康熙乾隆の際には、大家碩學が盛んに輩出したりしが、詩名を以て其の間に著れたるものは、選者の沈德潛なり。康熙十二年(石川丈山の歿したる翌年、

響……六九六
入レ關……六九七
孫萬壽
和三周記室遊ニ舊京一……六九七
早發ニ揚州一還望ニ鄕邑一……六九八
東歸在レ路率爾成レ咏……六九九
王冑
別ニ周記室一……六九九
尹式
別ニ宋常侍一……七〇〇
孔德昭
送ニ蔡君知入ヒ蜀……七〇一
夜宿ニ荒村一……七〇一
孔紹安
落葉……七〇二
別ニ徐永元秀才一……七〇二
陳子良
送レ別……七〇三
七夕看ニ新婦隔レ巷停ヒ車……七〇三
王中禮
賦三得巖穴無ニ結搆一……七〇四
呂讓
和レ入レ京……七〇五
明餘慶
從軍行……七〇五
大義公主
書ニ屛風一詩……七〇六
送別詩
送別詩……七〇七
鷄鳴歌……七〇八

―(目次終)―

感二琵琶絃一 …… 六六一

斛律金

敕勒歌 …… 六六二

童謠 …… 六六二

北周詩

庾信

商調曲 …… 六六四

烏夜啼 …… 六六七

對レ酒歌 …… 六六七

奉二和泛レ江 …… 六六八

同二盧記室一從レ軍 …… 六六九

至二老子廟一應レ詔 …… 六六九

擬二詠懷一 …… 六七一

喜レ晴應レ詔敕自疏レ韻 …… 六七五

和三王少保遙傷二周處士一 …… 六七七

奉二和永豐殿下言レ志 …… 六七八

詠二畫屛風一 …… 六七八

梅花 …… 六七九

寄二徐陵一 …… 六八〇

和二侃法師一 …… 六八〇

重別二周尚書一 …… 六八〇

王褒

關山篇 …… 六八一

渡二河北一 …… 六八一

隋詩

煬帝

飲馬長城窟行示二從征羣臣一 …… 六八二

白馬篇 …… 六八四

楊素

山齋獨坐贈二薛內史一二首 …… 六八六

贈二薛播州一 …… 六八七

盧思道

遊二梁城一 …… 六九二

薛道衡

昔昔鹽 …… 六九三

敬酬二楊僕射山齋獨坐一 …… 六九五

人日思レ歸 …… 六九五

虞世基

何胥
被使出關……六四三
韋鼎
長安聽百舌……六四四
陳昭
昭君詞……六四四
北魏詩 附
劉昶
斷句……六四五
常景
司馬相如……六四六
王褒……六四六
嚴君平……六四七
揚雄……六四八
溫子昇
從駕幸金墉城……六四九
擣衣……六五〇
胡叟
示陳伯達……六五一
胡太后
楊白花……六五二
咸陽王歌……六五三
李波小妹歌……六五三
北齊詩
邢邵
思公子……六五四
祖珽
挽歌……六五五
鄭公超
送庾羽騎抱……六五五
蕭慤
上之回……六五六
和崔侍中從駕經山寺……六五七
秋思……六五八
顏之推
古意……六五九
從周入齊夜度砥柱……六六〇
馮淑妃

虞羲
詠₂霍將軍北伐₁ ……六一六
衛敬瑜妻王氏
孤燕詩 ……六一八
企喩詩 ……六一九
幽州馬客吟歌辭 ……六二〇
瑯琊王歌辭 ……六二〇
鉅鹿公主歌辭 ……六二三
隴頭歌辭 ……六二三
折楊柳歌辭 ……六二三
木蘭詩 ……六二四
捉搦歌 ……六二七

卷十四　陳詩

陰鏗
渡₂青草湖₁ ……六二九
廣陵岸送₂北使₁ ……六三〇
江津送₂劉光祿₁不ㇾ及 ……六三〇
和₂傅郎歲暮還₂湘州₁ ……六三一
開善寺 ……六三二

徐陵
出ㇾ自₂薊北門₁行 ……六三三
別₂毛永嘉₁ ……六三三
關山月 ……六三四
周弘讓
留贈₂山中隱士₁ ……六三五
周弘正
還₂草堂₁尋₂處士弟₁ ……六三五
江總
遇₂長安使₁寄₂裴尚書₁ ……六三六
入₂攝山棲霞寺₁ ……六三七
南還尋₂草市宅₁ ……六三八
幷州羊腸坂 ……六三九
於₂長安₁歸₂還揚州₁九月九日行₂薇山亭₁賦韻 ……六四〇
哭₂魯廣達₁ ……六四〇
閨怨篇 ……六四一
張正見
秋日別₂庾正員₁ ……六三二
關山月 ……六四二

奉二和春夜一應レ令……五九二
亂後行經二吳御亭一……五九三
咏二長信宮中草一……五九四
經二陳思王墓一……五九四

吳　均

答二柳惲一……五九六
酬レ別二江主簿屯騎一……五九七
主人池前鶴……五九八
酬二周參軍一……五九八
春詠……五九九
山中雜思……六〇〇

何　遜

日夕望二江山一贈二魚司馬一……六〇〇
道中贈二桓司馬季珪一……六〇一
入二西塞一示二南府同僚一……六〇二
贈二諸游舊一……六〇三
送二章司馬別一……六〇四
別二沈助教一……六〇六
與二蘇九德一別……六〇六
宿二南洲浦一……六〇七
和二蕭諮議岑離閨怨一……六〇八
臨レ行與二故遊一夜別……六〇八
與二胡興安一夜別……六〇九
慈姥磯……六〇九
相送……六一〇

王　籍

入二若耶溪一……六一〇

劉　峻

自二江州一還入二石頭一詩……六一一

劉孝綽

古意……六一二

陶弘景

詔二問山中何所レ有賦レ詩以答……六一三
寒夜怨……六一四

曹景宗

光華殿侍レ宴賦競病韻……六一四

徐　悱

古意酬三到長史溉登二琅邪城一……六一五

宿二東園一 …… 五六四
別二范安成一 …… 五六五
傷二謝朓一 …… 五六五
石塘瀨聽レ猿 …… 五六六
遊二沈道士館一 …… 五六六
早發二定山一 …… 五六八
冬節後至二丞相第一詣二世子車中作 …… 五六九
奉三和竟陵王經二劉瓛墓一 …… 五六九

卷十三 梁詩

江淹

從二冠軍建平王一登二廬山香爐峰一 …… 五七一
望二荊山一 …… 五七二
古離別 …… 五七三
班婕妤詠レ扇 …… 五七四
劉太尉琨傷レ亂 …… 五七四
陶徵君潛田居 …… 五七六
休上人怨レ別 …… 五七七
效二阮公詩一 …… 五七七

范雲

有二所思一 …… 五八〇
贈二張徐州謖一 …… 五八一
送二沈記室一夜別 …… 五八二
之二零陵郡一次二新亭一 …… 五八三
別詩 …… 五八三

任昉

贈二郭桐廬一出二溪口一見レ候余既未レ至郭仍進レ村維レ舟久レ之郭生乃至 …… 五八四
贈二徐徵君一 …… 五八五
別二蕭諮議一 …… 五八五
出レ郡傳舍哭二范僕射一 …… 五八六

邱遲

侍二宴樂遊苑一送二張徐州一應レ詔 …… 五八七
日發二漁浦潭一 …… 五八八

柳惲

江南曲 …… 五八九
贈二吳均一 …… 五八九
擣衣詩 …… 五九〇

庾肩吾

王孫遊……五四二
臨レ溪送レ別……五四三

王　融
淥水曲……五四三
巫山高……五四四
蕭諮議西上夜集……五四五
和二王友德元古意一二首……五四五

張　融
別詩……五四六

劉　繪
有二所思一……五四七

孔稚圭
遊二太平山一……五四七

陸　厥
臨江王節士歌……五四八

江孝嗣
北戍二瑯琊城一詩……五四九
東昏時百姓歌……五四九

梁　詩

武　帝
逸民……五五〇
西洲曲……五五〇
擬二青青河畔草一……五五二
河中之水歌……五五三
東飛伯勞歌……五五四
天安寺疏圃堂……五五五
籍田……五五五

簡文帝
折楊柳……五五七
臨高臺……五五八
納涼……五五八

元　帝
詠二陽雲樓檐柳一……五五九
折楊柳……五六〇

沈　約
臨高臺……五六一
夜夜曲……五六一
新安江至清淺深見レ底貽二京邑遊好一……五六二
直二學省一愁臥……五六二

漁父
答二孫緬一歌……五一三
宋人歌……五一三
石城謠……五一三
靑溪小姑歌……五一三

卷十二　齊詩

謝朓

江上曲……五一四
同二謝諮議一詠二銅雀臺一……五一五
玉階怨……五一六
金谷聚……五一六
入朝曲……五一七
同三王主簿有二所思一……五一八
京路夜發……五一八
和三徐都曹出二新亭渚一……五一九
遊二敬亭山一……五二〇
遊二東田一……五二二
暫使二下都一夜發二新林一至二京邑一贈二西府同僚一……五二三
酬二王晉安一……五二三
郡內高齋閑望答二呂法曹一……五二四
新亭渚別二范零陵雲一……五二五
之二宣城郡一出二新林浦一向二板橋一……五二六
在レ郡臥レ病呈二沈尚書一……五二七
晚登二三山一還望二京邑一……五二八
直二中書省一……五二九
宣城郡內登望……五三〇
高齋視レ事……五三一
落日悵望……五三二
移レ病還レ園示二親屬一……五三三
送三江兵曹檀主簿朱孝廉還二上國一……五三四
秋夜……五三四
和二何議曹郊遊一……五三五
和二王著作融八公山一……五三五
和三伏武昌登二孫權故城一……五三七
新治二北窗一和二何從事一……五四〇
和三江丞北戍二瑯琊城一……五四一
和二王中丞聞レ琴……五四一
離夜……五四二

代鳴雁行 …… 四七八
代淮南王 …… 四七八
代春日行 …… 四七九
代白紵舞歌辭四首 …… 四八〇
擬行路難 …… 四八二
梅花落 …… 四八七
登黃鶴磯 …… 四八七
日落望江贈荀丞 …… 四八八
吳興黃浦亭庾中郎別 …… 四八九
贈傅都曹別 …… 四八九
行京口至竹里 …… 四九〇
上潯陽還都道中作 …… 四九一
發後渚 …… 四九一
詠史 …… 四九二
擬古 …… 四九三
紹古辭 …… 四九七
學劉公幹體 …… 四九九
過銅山掘黃精 …… 四九九
秋夜 …… 五〇〇
翫月城西門解中 …… 五〇一

鮑令暉

代葛沙門妻郭小玉作 …… 五〇二
題書後寄行人 …… 五〇三

吳邁遠

胡笳曲 …… 五〇四
古意贈今人 …… 五〇四
長相思 …… 五〇五

王微

雜詩 …… 五〇六

王僧達

答顏延年 …… 五〇七
和琅琊王依古 …… 五〇八

沈慶之

侍宴詩 …… 五〇九

陸凱

贈范曄詩 …… 五一〇

湯惠休

怨詩行 …… 五一〇

梁俁

詩一首 …… 五一一

述ニ祖德一詩 二首……四四〇
九日從ニ宋公戲馬臺集一送孔令一……四四二
鄰里相送至ニ方山一……四四三
過ニ子寧墅一……四四四
七里瀨……四四三
登ニ池上樓一……四四六
遊ニ南亭一……四四七
遊ニ赤石一進レ泛レ海……四四八
登ニ江中孤嶼一……四四九
登ニ永嘉綠嶂山一詩……四五〇
齋中讀レ書……四五一
田南樹レ園 激レ流 植レ援……四三二
石壁精舍還ニ湖中一作……四五三
登ニ石門最高頂一……四五三
石門新營レ所レ住四面高山廻溪石瀨茂林修竹……四五四
於ニ南山一往ニ北山一經ニ湖中一瞻眺……四五六
從ニ斤竹澗一越レ嶺溪行……四五七
過ニ白岸亭一詩……四五八
初去レ郡……四五九
夜宿ニ石門一詩……四六〇
入ニ彭蠡湖口一……四六一
入ニ華子岡一是麻源第三谷……四六二
歲暮……四六三

卷十一 宋詩

謝 瞻
答ニ靈運一……四六四
九日從ニ宋公戲馬臺集一送ニ孔令一詩……四六五
謝惠連
擣レ衣……四六六
西陵遇レ風獻ニ康樂一……四六七
愁懷……四六九
泛レ湖歸出ニ樓中一望レ月……四七〇
謝 莊
北宅秘園……四七一
鮑 照
代ニ東門行一……四七三
代ニ放歌行一……四七三
代ニ白頭吟一……四七四
代ニ東武吟一……四七五
代下出レ自ニ薊北門一行上……四七七

短兵篇……四一〇
獨漉篇……四一〇
晉白紵舞歌詩……四一一
淫豫……四一二
女兒子……四一三
三峽謠……四一四
隴上歌……四一四
來羅……四一五
作ニ蠶絲一……四一六
休レ洗レ紅二章……四一六
安東平……四一七
惠帝元康中京洛童謠……四一七
惠帝時洛陽童謠……四一八
惠帝大安中童謠……四一八
綿州巴歌……四一八

卷十 宋詩

孝武帝
自ニ君之出一矣……四一九
南平王鑠
白紵曲……四二〇
擬ニ行行重行行一……四二〇
何承天
雉子遊ニ原澤一篇……四二一
顏延之
應レ詔讌ニ曲水一作詩八章……四二三
郊祀歌……四二六
贈ニ王太常一……四二七
夏夜呈ニ從兄散騎車長沙一……四二八
北レ使洛……四二九
五君詠五首
阮步兵……四三一
嵇中散……四三一
劉參軍……四三二
阮始平……四三三
向常侍……四三三
秋胡詩九首……四三三
謝靈運
從ニ遊京口北固一應レ詔……四三九

贈二羊長史一 …… 三六四
癸卯十二月中作與二從弟敬遠一 …… 三六五
始爲二鎭軍參軍一經二曲阿一作 …… 三六六
辛丑歳七月赴レ假還二江陵一夜行塗中作 …… 三六七
桃花源詩幷記 …… 三六八
歸二田園居一五首 …… 三七一
與二殷晉安一別 …… 三七四

卷九　晉詩

陶潛　下

乞レ食 …… 三七六
諸人共遊二周家墓柏下一 …… 三七七
移レ居二首 …… 三七八
癸卯歳始春懷二古田舍一二首 …… 三七八
庚戌歳九月中於二西田一穫二早稻一 …… 三八〇
丙辰歳八月中於二下潠田舍一穫 …… 三八一
飲レ酒 …… 三八一
有レ會而作 …… 三八七
擬古 …… 三八九
雜詩 …… 三九三
詠二貧士一 …… 三九六
詠二荊軻一 …… 三九九
讀二山海經一 …… 四〇〇
擬二輓歌詞一 …… 四〇一

謝混

遊二西池一 …… 四〇三

吳隱之

酌二貪泉一詩 …… 四〇三

廬山諸道人

遊二石門一詩 …… 四〇四

惠遠

廬山東林雜詩 …… 四〇七

帛道猷

陵レ峰采レ藥觸レ興爲レ詩 …… 四〇八

謝道韞

登レ山 …… 四〇九

趙整

諫歌 …… 四〇九

無名氏

孫　楚
征西官屬送於陟陽侯作詩……三三五
曹　攄
感舊詩……三三六
主　讚
雜詩……三三六
郭泰機
答傅咸……三三七

卷八　晉詩

劉　琨
答盧諶……三二九
重贈盧諶……三三五
扶風歌……三三六
盧　諶
答魏子悌……三三八
時興詩……三三九
謝　尙
大道曲……三四〇
郭　璞
贈溫嶠……三四〇
遊仙詩……三四一
曹　毘
夜聽擣衣……三四五
王羲之
蘭亭集詩……三四六
陶　潛
停雲四章……三四七
時運四章……三四九
勸農六章……三五一
命子……三五三
酬丁柴桑二章……三五四
歸鳥四章……三五五
遊斜川……三五六
答龐參軍……三五八
五月旦作和戴主簿……三五九
九日閑居……三五九
和劉柴桑……三六一
酬劉柴桑……三六二
和郭主簿二首……三六二

束晳
補亡詩六章……二六〇
南陔……二九〇
白華……二九一
華黍……二九二
由庚……二九三
崇丘……二九三
由儀……二九四
司馬彪
雜詩……二九五
陸機
短歌行……二九七
隴西行……二九七
猛虎行……二九八
塘上行……二九九
擬明月何皎皎……三〇〇
擬明月皎夜光……三〇〇
招隱詩……三〇一
贈馮文羆……三〇二
為顧彥先贈婦……三〇三
赴洛道中作……三〇四
陸雲
谷風……三〇六
為顧彥先贈婦……三〇六
潘岳
悼亡詩……三〇七
張翰
雜詩……三一〇
左思
雜詩……三一一
詠史八首……三一三
招隱二首……三一七
左貴嬪
啄木詩……三一九
張載
七哀詩……三一九
張協
雜詩……三二一

雜詩……二四八
應瑒
侍㆓五官中郎將建章臺集㆒詩一首……二四九
別詩……二五〇
應璩
百一詩……二五一
雜詩……二五二
繆襲
克官渡……二五三
定武功……二五四
屠柳城……二五五
戰滎陽……二五五
挽歌……二五六
左延年
從軍行……二五七
阮籍
詠懷……二五七
大人先生歌……二七〇
嵇康
雜詩……二七〇
贈㆓秀才入㆒軍……二七一
幽憤詩……二七四
吳謠……二七七
孫皓天紀中童謠……二七七

卷七　晉詩

司馬懿
讌飲詩……二七九
張華
勵志詩……二八〇
答㆓何劭㆒……二八三
情詩……二八四
雜詩……二八五
傅玄
短歌行……二八六
明月篇……二八七
雜詩……二八七
雜言……二八八
吳楚歌……二八九
車遙遙篇……二八九

塘上行……二〇八
明　帝
種瓜篇……二〇九
曹　植
朔風詩……二一〇
鰕䱇篇……二一一
泰山梁父行……二一二
箜篌引……二一三
怨歌行……二一四
名都篇……二一五
美女篇……二一六
白馬篇……二一八
聖皐篇……二一九
吁嗟篇……二二一
棄婦篇……二二二
當二來日大難一……二二三
野田黃雀行……二二四
當牆欲高行……二二五
贈二徐幹一……二二五
贈二丁儀一……二二六
又贈二丁儀王粲一一首……二二七
贈二白馬王彪一……二二八
贈二王粲一……二三三
送二應氏一詩二首……二三四
雜詩……二三五
七哀詩……二三八
情詩……二三九
七步詩……二四〇
卷六　魏詩
王　粲
贈二蔡子篤一詩……二四一
七哀詩……二四二
陳　琳
飲二馬長城窟一行……二四五
劉　楨
贈二從弟一三首……二四六
徐　幹
室思……二四八

鄭白渠歌……一八一
鮑司隸歌……一八一
隴頭歌二首……一八二
牢石歌……一八二
五鹿歌……一八三
匈奴歌……一八三
成帝時燕燕童謠……一八四
逐二彈丸一……一八五
成帝時歌謠……一八五
投閣……一八六
竈下養……一八六
城中謠……一八七
蜀中童謠……一八七
順帝時京都童謠……一八八
考城諺……一八八
桓帝初小麥童謠……一八九
桓靈時童謠……一八九
城上烏童謠……一九〇
靈帝末京都童謠……一九一
丁令威歌……一九二
蘇耽歌……一九

卷五　魏詩

武帝

短歌行……一九四
觀二滄海一……一九五
土不レ同……一九六
龜雖壽……一九七
薤露……一九七
蒿里行……一九八
苦寒行……一九九
却東西門行……二〇〇

文帝

短歌行……二〇一
善哉行……二〇二
雜詩……二〇三
至二廣陵一於二馬上一作……二〇四
寡婦……二〇五
燕歌行……二〇六

甄后

天馬……一二二
戰城南……一二三
臨高臺……一二四
有所思……一二四
上邪……一二五
箜篌引……一二五
江南……一二六
薤露歌……一二七
蒿里曲……一二七
雞鳴……一二八
陌上桑……一二九
長歌行……一三一
君子行……一三二
相逢行……一三三
善哉行……一三四
西門行……一三五
東門行……一三六
孤兒行……一三七
豔歌行……一三九
隴西行……一三九
淮南王篇……一四一
傷歌行……一四二
悲歌……一四三
枯魚過河泣……一四三
古歌……一四四
古八變歌……一四四
猛虎行……一四五
樂府……一四五

卷四　漢詩

古詩爲焦仲卿妻作……一四七
古詩十九首……一六一
擬蘇李詩……一七三
古詩……一七五
古詩三首……一七六
古詩一首……一七八
古詩二首……一七八
古絕句……一七九
古歌……一七九
淮南民歌……一八〇
潁川歌……一八〇

五噫歌……九四
馬 援
武溪深行……九四
班 固
寶鼎詩……九五
張 衡
四愁詩……九六
李 尤
九曲歌……九八

卷三 漢詩

蔡 邕
樊惠渠歌并序……九九
飲二馬長城窟一行……一〇〇
翠鳥……一〇一
琴歌……一〇二
秦 嘉
留レ郡贈レ婦詩……一〇二
孔 融
雜詩……一〇五
辛延年
羽林郎……一〇八
宋子侯
董嬌嬈……一〇八
蘇伯玉妻
盤中詩……一〇九
竇玄妻
古怨歌……一一一
蔡 琰
悲憤詩……一一一
諸葛亮
梁甫吟……一一六
樂府歌辭
練時日……一一七
青陽……一一八
朱明……一一九
西顥……一一九
玄冥……一二〇
惟泰元……一二〇

瓠子歌二首……六六
秋風辭……六八
李夫人歌……六九
柏梁詩……六九
落葉哀蟬曲……七二
蒲梢天馬歌……七三
韋孟
諷諫詩……七三
東方朔
誡子詩……七七
烏孫公主
悲愁歌……七八
司馬相如
封禪頌……七九
卓文君
白頭吟……八一
蘇武
詩四首……八二
李陵
與蘇武詩三首……八六
別歌……八七
李延年
歌一首……八八
燕刺王旦
歌……八九
華容夫人
歌……九〇
昭帝
淋池歌……九〇
楊惲
拊缶歌……九一
王昭君
怨詩……九一
班婕妤
怨歌行……九二
趙飛燕
歸風送遠操……九三
梁鴻

左傳……四四
國語……四四
孔子家語……四五
列子二則……四五
韓非子……四六
愼子……四六
魯連子……四六
戰國策……四七
史記……四七
漢書……四八
列女傳引古語……四九
說苑……四九
劉向別錄引古語……五〇
新序……五〇
風俗通……五〇
桓子新論引諺……五一
牟子引古諺……五二
易緯引古語……五二
四民月令引農語二則……五二
月令註引里語……五三
水經註引諺……五三
山經引相冢書……五三
文選註引古諺……五四
魏志王昶引諺……五四
梁史……五四
史照通鑑疏引諺……五五
古諺古語……五五

卷二 漢詩

高帝
大風歌……五七
鴻鵠歌……五七
項羽
垓下歌……五八
唐山夫人
安世房中歌……五九
朱虛侯章
耕田歌……六五
紫芝歌……六五
武帝

驂乘答歌……一七
役人又歌……一八
鸜鵒歌……一八
澤門之晳謳……一九
忼慷歌……一九
子產誦二章……二一
孔子誦二章……二一
去レ魯歌……二三
蟪蛄歌……二三
臨レ河歌……二三
楚聘歌……二四
獲麟歌……二五
龜山操……二五
盤操……二六
水仙操……二六
接輿歌……二七
成人歌……二八
漁父歌……二九
偕隱歌……三〇
徐人歌……三〇
越人歌……三一
越謠歌……三三
琴操……三三
靈寶謠……三三
吳夫差時童謠……三四
烏鵲歌……三四
答レ夫歌……三五
越群臣祝……三五
祝二越王一辭……三六
彈歌……三七
禳レ田者祝……三八
巴謠歌……三九
渡二易水一歌……四〇
三秦記民謠……四〇
楚人謠……四一
河圖引蜀謠……四一
湘中漁歌……四一
太公兵法引黃帝語……四二
六韜……四二
管子……四二
左傳引逸詩……四三

古詩源 目次

卷一

古逸

擊壤歌……一
康衢謠……一
伊耆氏蜡辭……二
堯戒……二
卿雲歌……三
八伯歌……三
帝載歌……三
南風歌……四
禹玉牒辭……四
夏后鑄鼎繇……五
商銘……五
麥秀歌……五
采薇歌……六
盥盤銘……七
帶銘……七
杖銘……七
衣銘……八
筆銘……八
矛銘……八
書車……九
書戶……九
書履……一〇
書硯……一〇
書鋒……一〇
書杖……一〇
書井……一一
白雲謠……一一
祈招……一一
懿氏繇……一二
鼎銘……一三
虞箴……一三
飯牛歌……一四
琴歌……一六
暇豫歌……一六
宋城者謳……一七

尤　怡在京　吳縣	周　遠少逸　吳縣	毛樹杞遇汲　吳縣
周　準欽萊　長洲	鄭思用元穉　吳縣	王之醇鶴書　崑山
翁玉行靜子　江陰	汪　銓上衡　新安	彭啓豐翰文　長洲
朱玉蛟雲友　長洲	顧詒祿祿百　長洲	江向燇青蘆　長洲
陸世懋向直　太倉	沈　振超亭　長洲	朱受新念祖　吳縣

門人

洪　鈞鳴佩　寧國	尤秉元昭嗣　長洲	滑士麟苑祥　太倉
蔣　敦仁安　長洲	陳　魁經邦　長洲	盧駿聲景程　吳縣
俞元珏章成　長洲		

方外

霞濟湘林	岑霽樾亭	德亮雪牀

參訂姓氏

尤　珍謹庸　長洲
楊　賓可師　山陰
顧嗣立俠君　長洲
魏荔彤念庭　柏鄉
侯　銓秉衡　嘉定
沈起元子大　太倉
顧紹敏嗣宗　長洲
朱奕恂恭李　長洲
張　畹遜九　吳縣
周永銓昇逸　長洲

施何牧贊虞　崇明
計　默希深　吳江
杜　詔紫綸　無錫
王汝驤雲衢　金壇
陳祖范亦韓　常熟
張錫祚永夫　吳縣
許廷鑅子遜　長洲
劉　震東郊　吳縣
張　鉽少弋　吳縣
李　果客山　長洲

王材任子重　黃岡
沈用濟方舟　錢唐
李　嵩靜山　無錫
方　還蓂朔　番禺
陳培脉樹滋　長洲
徐　夔龍友　長洲
孫　謨丕文　江寧
謝方連皆人　宜興
方　朝東華　番禺
汪　琇西京　常熟

氏訖南北朝。止探其源。不暇沿其流也。

詩之爲用甚廣。范宣討貳。爰賦摽梅。宗國無鳩。乃歌圻父。斷章取義。原無達詁也。箋釋評點。俱可無庸。爲學人啓畬徑。未能免俗耳。

書中徵引。宜錄全文。緣疏通大義。匪同箋註。凡經史子集時從删節。近於因陋就簡。識者諒諸。

德潛學識淺尠。於詶詩緝頌。略無所得。此書援据典實。通達奧義。得三益之功居多。參訂姓氏詳列於簡。

歸愚沈德潛識

氣蒼然。後此射洪曲江起衰中立。此爲之勝廣矣。

漢武立樂府。采歌謠。郭茂倩編樂府詩集。雜謠歌詞。亦俱收錄。謂觀此可以知治忽驗盛衰也。愚於各代詩人後。嗣以歌謠。猶前人志云。

漢以前歌詞。後人僞作甚夥。如夏禹玉牒詞。漢武帝落葉哀蟬曲類是也。詞旨可取。不妨竝登。眞僞自可存而不論。然如皇娥白帝歌。事近於誣。虞姬答歌。蘇武妻答詩。詞近於時。類此者。不敢從俗采入。

詩非談理。亦烏可悖理也。仲長統述志云。叛散五經。滅棄風雅。放恣不可問矣。類此者概所屛卻。

晉人子夜歌。齊梁人讀曲等歌。俚語俱趣。拙語俱巧。自是詩中別調。然雅音既遠。鄭衞雜興。君子弗尚也。愚於唐詩選本中。不收西昆香奩諸體。亦是此意。

新城王尚書向有古詩選本。抒文載實。極工裁擇。因五言七言分立界限。故三四言及長短雜句。均在屛卻。玆特采錄各體。補所未備。又王選五言。兼取唐人七言。下及元代。玆從陶唐

壯武之世。茂先休奕。莫能軒輊。二陸藩張。亦稱魯衞。太沖拔出於衆流之中。丰骨峻上。盡掩諸家。鍾記室季孟於潘陸之間。非篤論也。後此越石景純。聯鑣接軫。過江末季。挺生陶公。無意爲詩。斯臻至詣。不第於典午中屈一指云。

詩至於宋。體製漸變。聲色大開。康樂神工默運。明遠廉儁無前。允稱二妙。延年聲價雖高。雕鏤太甚。未宜鼎足矣。齊人寥寥。玄暉獨有一代。元長以下。無能爲役。

蕭梁之代。風格日卑。隱侯短章。猶存古體。文通仲言。辭藻斐然。雖非出群之雄。亦稱一時作者。陳之視梁。抑又降焉。子堅孝穆。並以總持。略其體裁。專求名句。所云差強人意者耶。

梁時橫吹曲。武人之詞居多。北音鏗鏘。鉦鐃競奏。企喩歌。折楊柳歌詞。木蘭詩等篇。猶漢魏人遺響也。北齊敕勒歌。亦復相似。

北朝詞人。時流清響。庾子山才華富有。悲感之篇。常見風骨所長。不專在造句也。徐庾竝名。恐孝穆華詞。瞠乎其後。

隋煬帝豔情篇什。同符后主。而邊塞諸作。矯然獨異。風氣將轉之候也。楊處道清思健筆。詞

例言

康衢擊壤。肇開聲詩。上自陶唐。下暨秦代。韻語可采者。或取正史。或裁諸子。雜錄古逸。冠於漢京。窮詩之源也。詩紀備詳。茲擇其尤雅者。

風騷既息。漢人代興。五言爲標準矣。就五言中。較然兩體。蘇李贈答。無名氏十九首。古詩體也。廬江小吏妻羽林郎陌上桑之類。樂府體也。昭明獨尚雅音。略於樂府。然措詞叙事樂府爲長。茲特補昭明選未及。後之作者。知所區別焉。

安世房中歌。詩中之雅也。漢武郊祀等歌。詩中之頌也。廬江小吏妻羽林郎陌上桑等篇。詩中之國風也。樂府中亦具三體。當分別觀之。

曹子建云。漢曲訛不可辨。魏人且然。況今日耶。凡不能句讀。及無韻不成誦者。均不錄。

蘇李以後。陳思繼起。父兄多才。渠尤獨步。故應爲一大宗。鄴下諸子各自成家。未能方埒也。嗣宗觸諸興懷。無端哀樂。當塗之世。又成別調矣。

逸存其概。于漢京得其詳。於魏晉獵其華。而亦不廢夫宋齊後之作者。既以編詩亦以論世。使覽者窮本知變。以漸窺風雅之遺意。猶觀海者。由逆河上。之以溯崑崙之源。於詩教未必無少助也夫。康熙己亥夏五長洲沈德潛書於南徐之見山樓。

詩至有唐爲極盛。然詩之盛。非詩之源也。今夫觀水者。至觀海止矣。然由海而溯之。近于海爲九河。其上爲滎水。爲孟津。又其上由積石以至崑崙之源。記曰。祭川者先河後海。重其源也。唐以前之詩。崑崙以降之水也。漢京魏氏。去風雅未遠。無異辭矣。即齊梁之綺縟。陳隋之輕豔。風標品格。未必不遜於唐。然緣此遂謂非唐詩所由出。將四海之水非孟津以下所由注。有是理哉。有明之初。承宋元遺習。自李獻吉以唐詩振天下靡然從風。前後七子。互相羽翼。彬彬稱盛。然其敝也。株守太過。冠裳土偶。學者咎之。由守乎唐而不能上窮其源。故分門立戶者。得從而爲之辭。則唐詩者宋元之上流。而古詩又唐人之發源也。予前與樹滋陳子輯唐詩成帙。窺其盛矣。玆復溯隋陳。而上極乎黃軒。凡三百篇。楚騷而外。自郊廟樂章訖童謠里諺。無不備采。書成得一十四卷。不敢謂已盡古詩。而古詩之雅者。略盡於此。凡爲學詩者導之源也。昔河汾王氏刪漢魏以下詩。繼孔子三百篇。後謂之續經。天下後世。羣起攻之曰。僭。夫王氏之僭。以其儗聖人之經。非謂其錄刪後漢詩也。使誤用其說。謂漢魏以下學者不當蒐輯。是懲熱羹而吹虀。見人噎而廢食。其亦翦翦拘拘之見爾矣。予之成是編也。於古

例言

一古詩源評選本文全部を改め訓註して本書一巻を成す

二本書には和訓本の世に行はるゝものなきを以て唐本に基き新に訓註を加へたり

三原本の評註等は便宜小活字を以て其譯文のみを掲ぐる事とせり

LIBRARY
AUG 1 8 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

古詩源　全



PL
2517
S4
1924

~~Shen, Te-ch'ien~~
Koshigen

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

PL
2517
K786J3
1924

EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5